

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18

平成13年度発掘調査報告
(第1分冊)

平成14年3月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18

平成13年度発掘調査報告
(第1分冊)

平成14年3月

鎌倉市教育委員会



大倉幕府周辺遺跡群



名越ヶ谷遺跡

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成12年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・自己用店舗併用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として16ヶ所の調査成果を掲載しています。特に大倉幕府周辺遺跡群（地点①）では源頼朝が鎌倉幕府を開いた時期に相当する年代の溝、掘立柱建物、井戸などで構成される屋敷跡が発見され当時の町並みの様子がまた一つ明らかになりました。また水道山遺跡（地点⑩）では弥生時代から古墳時代にかけての土器類が数多く出土し、中世以前に暮らしていた人々の生活の様子を窺い知る手がかりが得られるなど大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成14年3月31日

鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成13年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
 - 2 本書所収の調査地点とその収録分冊は別表、調査地点位置図及び目次のとおりである。
 - 3 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
 - 4 出土遺物及び写真・図面等の資料は鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
 - 5 各調査内容の詳細は、それぞれの報文を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例 言	II
平成13年度調査の概観	(調査と解説)
1 大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49) 二階堂字荏柄58番4外	(調査と解説)
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	9
第3章 検出遺構と出土遺物	14
第4章 まとめ	108
2 大倉幕府跡 (NO.253) 雪ノ下三丁目618番4	(調査と解説)
第1章 環境と立地	131
第2章 調査の概要	132
第3章 遺構と遺物	133
第4章 調査成果	137
3 下馬周辺遺跡 (NO.200) 由比ガ浜二丁目106番6外	(調査と解説)
第1章 環境と立地	146
第2章 調査の概要	153
第3章 遺構と遺物	154
第4章 調査成果	173
4 今小路西遺跡 (NO.201) 由比ガ浜一丁目148番1	(調査と解説)
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第2章 調査の経過	189
第3章 発見された遺構と遺物	190
第4章 まとめ	194
5 佐助ヶ谷遺跡 (NO.245) 佐助一丁目476番1	(調査と解説)
第1章 調査地点の位置と歴史的環境	202
第2章 調査の経過と堆積土層	204
第3章 検出された遺構と遺物	206
第4章 まとめ	214
6 東勝寺跡 (NO.246) 小町三丁目468番10	(調査と解説)
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	224
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	227
第3章 検出遺構と出土遺物	229
第4章 まとめ	242

7 武藏大路周辺遺跡 (NO. 194) 爾ガ谷二丁目298番1イ	
第1章 遺跡概観	258
第2章 検出した遺構と遺物	263
第3章 まとめ	351

(第2分冊)

8 名越ヶ谷遺跡 (NO. 231) 大町三丁目1826番9	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の経緯	10
第3章 発見された遺構と遺物	11
第4章 まとめ	25
9 今小路西遺跡 (NO. 201) 由比ガ浜一丁目183番1	
第1章 環境と立地	55
第2章 調査の概要	56
第3章 遺構と遺物	59
第4章 調査成果	67
10 水道山遺跡 (NO. 20) 台四丁目1169番1	
第1章 遺跡の位置と諸環境	79
第2章 調査の概要	81
第3章 検出された遺物	85
第4章 自然科学分析	128
第5章 まとめ	130
11 長谷小路周辺遺跡 (NO. 236) 長谷一丁目205番12	
第1章 環境と立地	148
第2章 調査の概要	152
第3章 遺構と遺物	154
第4章 調査成果	162
12 北条小町邸跡 (NO. 282) 雪ノ下一丁目400番1	
第1章 調査地点概観	175
第2章 調査の概略	181
第3章 遺構と遺物	183
第4章 まとめと考察	200
13 淨妙寺旧境内遺跡 (NO. 408) 淨明寺三丁目16番1	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	218
第2章 調査の経緯	220
第3章 発見された遺構	221
第4章 調査のまとめ	224

14 材木座町屋遺跡 (NO. 261) 材木座四丁目256番1の一部	229
第1章 環境と立地	229
第2章 調査の概要	232
第3章 造構と遺物	234
第4章 調査成果	247
15 笹目遺跡 (NO. 207) 笹目町302番11	261
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	261
第2章 調査の経緯	263
第3章 発見された造構と遺物	264
第4章 調査成果のまとめと課題	278
16 龍谷山王堂跡 (NO. 185) 駒ガ谷四丁目327番5	292
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	292
第2章 調査の概要	294
第3章 造構と遺物	296
第4章 まとめ	307

平成13年度調査の概観

平成13年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査2件を含む15件であり、調査対象面積は1,097.30m²であった。これを前年度の25件、1,588.62m²と比較すると件数が前年度より10件減少し、面積も前年度に対して30.9%の減少となっている。このことは、景気の低迷により、住宅建設の着工件数が減少することと軸を一にして発掘調査の件数が減少するという傾向を顕著に現しているものと理解される。

調査原因の内訳は、個人専用住宅の建設に関するものが13件、自己用店舗併用住宅の建設に関するものが2件となっている。これら15件のうち、いわゆる杭構造に該当するものが8件、地下室の築造を内容とするものが2件となっている。これについては、ほぼ例年と同様の傾向を示している。

本年度は佐助ヶ谷遺跡（地点7）において、13世紀中頃から14世紀前半の武家屋敷跡とその後の14世紀中頃以降には工人層が生活を営んだと推定される遺構群が発見されていることを特記事項としてあげることができる。以下、各地点の調査に至る経緯と調査成果の概要を紹介する。

1 若宮大路周辺遺跡群（NO. 242）

市内中心部の商店街として賑わう小町通りの西側にあたる雪ノ下一丁目に位置している。調査に至る経緯については、昨年度の本書「平成12年度調査の概観」に記しており、同書を参照されたい。現地での発掘調査は昨年度からの継続事業として平成13年2月19日から4月27日まで実施した。

調査の結果、破碎した泥岩を用いて造作の行われた道路（通路）状の遺構が発見され、若宮大路の西側地域における土地利用の一端を明らかにすることができた。

2 横小路周辺遺跡（NO. 259）

市内東部の横浜市に通じる県道金沢鎌倉線の北側に所在し、荏柄天神社の参道が県道と交わる地点の東側に位置している。調査に至る経緯については、上記の若宮大路周辺遺跡群と同様、昨年度の本書「平成12年度調査の概観」に記しており、同書を参照されたい。現地での発掘調査は昨年度からの継続事業として平成13年2月22日から4月27日まで実施した。

調査の結果、調査区西半部において当該調査地点北方の二階堂大路と平行関係の軸線を有する断面が栗研堀状の溝跡が発見された。この溝跡は確認された層位や出土遺物の年代観から12世紀末頃に開削されたものと推定され、調査地点一体の土地利用が二階堂大路のつくられた時期とほぼ同時期の鎌倉時代初期にまで遡ることを明かになった。

3 名越ヶ谷遺跡（NO. 231）

市内中心部から逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の名越四ツ角から北に入った名越ヶ谷の谷戸の入口部分、大町三丁目に位置する。当該地は平成12年に実施された宅地造成工事によって形成された宅地の1区画である。平成12年11月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、計画が地下室の築造を含むものであったため、前述の宅地造成工事にともなって実施された埋蔵文化財の発掘調査の成果から勘案して、当該土木工事についても埋蔵文化財への影響は避けられないものと予想された。事業者との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、

施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年4月26日から6月2日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、当該地は中世から近世にかけての時期に河川の流路となっていた状況が明らかになった。調査地の東隣には現在でも逆川が流れしており、発掘調査によって発見された河川は逆川の旧流路であると推定される。

(COS-04) 植木谷や遺跡

4 玉縄城跡 (NO. 63)

市内北西部の丘陵部、植木字植谷戸に位置している。当該地は北条早雲が築城した玉縄城跡の南東部分にあたり、玉縄城跡の城域のうちで陣屋坂と呼ばれている坂の頂上部から東の方向に下る道筋で、現在でも旧状を比較的良好に残している七曲坂の東側にある。

平成13年4月に既存の個人専用住宅の擁壁建設工事について事前相談がなされた。当該地は平成11年に開発事業として共同住宅が建設された敷地の南東に隣接しており、住宅の東側に存する崖地は共同住宅建設の際に施工が及ばず、取り残された崖地であった。

このため崖の下に位置する住宅の安全対策として必要な防災工事の施工が計画されたものであり、隣接する共同住宅の建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査によって明らかにされた岩盤上の遺構群と一緒にとなる埋蔵文化財への影響が避けられないとの判断から発掘調査の実施が決定された。現地での発掘調査は丘陵の細長い尾根部分と西側の斜面部分が対象となったため、極めて狭小な範囲で実施することとなったが、平成13年5月25日から6月14日まで実施し、調査の結果、斜面の中腹部分に小規模ではあるが岩盤を削平して造成された平場が発見され、この平場上で柱穴状に穿たれた遺構が確認されるとともに15世紀後半ないし16世紀頃のものと考えられるかわらけの完形品1点が出土した。

5 今小路西遺跡 (NO. 201)

市内中心部のやや西側にあたる市立中央図書館の南西側、由比ガ浜一丁目に位置している。平成13年4月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事による掘削が現地表下1m20cmにまで及ぶ計画であったため、確認調査を実施したところ同30cm以下に中世遺構面が確認された。このため当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、建設工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することで建築主と合意に達した。この後、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年6月5日から8月3日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、おおむね14世紀代の属する南北方向の道路状以降や建物を構成する柱穴等の遺構群が発見された。

6 米町遺跡 (NO. 245)

市内中心部から逗子方面に通じる県道鎌倉葉山線の大町四ツ角から東に130m程の大町二丁目に位置する。平成13年7月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、住宅の基礎工事に際し深度2m50cmに達する鋼管杭の打設を含む計画であったため、当該土木工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと予想された。当該地の西隣で平成13年7月まで共同住宅の建設に係る埋蔵文化財発掘調査が実施されていたため、その発掘調査成果から当該地における遺構面の埋没深度はおおむね推定可能であり、確認調査の実施は不要との結論に達した。この後、事業者との協議において工事計画の変更是

困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年8月6日から9月30日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀代にかけて形成された町屋的な態様を示す掘立柱建物跡等の遺構群が発見された。

7 佐助ヶ谷遺跡 (NO. 203)

市内中心部のやや西寄りにあたり、市立御成中学校から鎌倉税務署に向う道筋が通る、南北に細長い谷戸の西側山裾となる佐助一丁目に位置する。当該地は平成13年に実施された宅地造成工事によって形成された宅地の1区画である。平成13年7月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際し現地表下2mに達する掘削工事が計画されたため、前述の宅地造成工事とともに実施された埋蔵文化財発掘調査の成果から勘案し、当該土木工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年9月6日から12月15日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、当該地では13世紀前半から14世紀後半にかけての遺構群が短時間の内に繰り返し構築されている状況が明らかになった。このうち13世紀前半から14世紀前半の時期には、武家屋敷と考えられる整然とした柱穴配置をもつ掘立柱建物跡が確認された。また14世紀中頃以降には大型哺乳類（クジラ）等動物骨の加工を行っていた状況が見られることから工人等の工房跡的な性格を有する遺構群であることが明かになった。

8 名越ヶ谷遺跡 (NO. 231)

平成13年8月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際し現地表下2m50cmにまで達する钢管杭打設の計画が含まれており、埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため確認調査を実施したところ、現地表下50cm以下に中世遺構の存在が確認された。これにより事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年9月17日から10月20日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、当該地ではおおむね13世紀後半から東側山裾の岩盤面に破碎した泥岩を盛り上げながら地形面を形成するかたちで土地利用が開始され、14世紀後半頃には常滑焼の大甕を据える遺構が造られている状況が明らかになった。

9 玉縄城跡 (NO. 63)

前述の地点4と同様、市内北西部の丘陵部、植木字植谷戸に位置している。当該地は北条早雲が築城した玉縄城跡の南東部分にあたり、玉縄城跡丘陵部の東側山裾に位置する小規模な谷戸の入口部分にあたる。平成13年6月に既存の個人専用住宅の付帯する位置指定道路の築造に係る事前相談があり、当該工事計画に污水管の敷設が含まれていたため、当該土木工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年9月25日から10月31日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、中世後半から近世初頭の時期に形成されたと推定される道状の遺構や多数の柱穴群が発見された。

10 大倉幕府周辺遺跡群 (NO. 49)

市内中心部から横浜市金沢区方面に通じる県道金沢鎌倉線の北側に面する雪ノ下三丁目に位置している。平成13年9月に自己用店舗併用住宅の建設に係る事前相談があり、当該工事計画には現地表下16mに達する杭構造の基礎工事が含まれるものであった。これにより当該土木工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと予想されたため、確認調査を実施したところ、現地表下40cm以下に中世遺構面の存在が確認された。このため埋蔵文化財の保護措置に関する協議を建築主と数回にわたって実施したところ、当該工事計画の変更は不可能との意向が示されたため、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年11月8日から12月22日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区の上層部分は近・現代の建築物の基礎が築造された際に大きく搅乱を受けていたものの、おおむね13世紀前半から14世紀後半頃にかけての溝跡、柱穴群等の遺構群が発見された。なお、調査に着手した当初、近隣の調査地点で從前、実施された発掘調査の成果から勘案して、中世以前の弥生時代中期の遺構が発見される可能性も予想されたが、本調査地点の発掘調査では当該期の遺物が少量、出土するにとどまり具体的な遺構の発見は皆無であった。

11 横小路周辺遺跡 (NO. 259)

市内中心部から横浜市金沢区方面に通じる県道金沢鎌倉線を岐れ道交差点から北東に入った二階堂字会下に位置し、鎌倉宮から覚園寺方向となる北西側100m程の場所にあたる。平成13年10月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、この時点で建設予定地に対して地盤の改良工事が施工されている状況が当委員会に知らされることとなった。近隣における従前の発掘調査成果から勘案して、当該地盤改良工事がかなりの確率で埋蔵文化財に影響を及ぼしているものと予想された。このため埋蔵文化財への影響の状況を把握するため、確認調査を実施したところ、現地表下60cm以下に中世遺物包含層の存在が確認された。このため数回にわたる事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きをを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成13年12月17日から12月27日まで急遽、現地での発掘調査を実施した。

発掘調査は発生土の敷地内処理を勘案した結果、極めて狭小な面積に限定して実施することとなった。このため、遺構の面的な展開状況を把握することは出来ず、当該地における中世遺構の層位的な堆積状況を確認するにとどまった。

12 妙本寺遺跡 (NO. 232)

市内中心部に広がる平野部の東側山裾に展開する比企ヶ谷の谷戸の入口部分にあたる大町一丁目に位置している。平成13年2月に個人による宅地造成工事実施に係る事前相談があり、造成予定地西側において車庫及び擁壁の築造と道路の拡幅にともなう切土工事が計画に含まれていたため、当該土木工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないことが予想された。このため事前に確認調査を実施したところ、現地表下60cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認された。これを受けて本市の開発事業指導要綱に基づく埋蔵文化財の保護措置に関する協議を事業者と実施し、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行った。なお本件発掘調査は宅地造成の事業者を含め4名の建築主による個人専用住宅の建設を同時に施工するものであるため、発掘調査については市教育委員会が実施するものとし、現地

での発掘調査は平成14年1月7日から2月2日まで実施した。

調査の結果、現在の妙本寺参道にはほぼ平行する方向の溝跡が発見された。この溝跡は木組の護岸施設を有するものであり、その構築はおおむね13世紀前半代から開始され、時期が下るにつれて徐々に溝の幅を狭めながら14世紀後半頃まで数回にわたって作り替えが行われている様子が明らかになった。

13 新善光寺跡 (NO. 279)

市内中心部から逗子市よりとなる材木座四丁目の弁ヶ谷の最奥部にあたり、從前から新善光寺跡として知られる南北に伸びる谷戸のほぼ中央に位置している。平成13年11月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎の構造に長さ4mに及ぶ鋼管杭の打設をともなう計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下40cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存することが明らかとなった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者との協議を経て文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年1月8日から2月2日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、破碎泥岩による地形層の上層に火災の痕跡を示す炭層が堆積し、また火熱を受けた痕跡のある瓦類が出土する状況が明らかになり、これらの遺構・遺物がおおむね13世紀中頃から後半頃のものと推定されるに至った。これまで近隣の崖面においては急傾斜地の崩壊対策事業ともなう発掘調査で多数のやぐらをはじめとする墓跡は発見されていたものの、具体的な寺院跡等の遺構の発見は今回の調査が初めてであり、貴重な成果をあげることができた。

14 浄妙寺旧境内遺跡 (NO. 408)

市内中心部から横浜市金沢区方面に通じる県道金沢鎌倉線を東に向い、鎌倉五山の寺院として著名な淨妙寺の現境内地から北東方向に谷戸の奥に入った淨明寺三丁目に位置している。平成13年9月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、当該工事計画に地下室の築造を含むものであったため、確認調査を実施したところ現地表下80cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認された。これにより当該土木工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、事業者と協議を実施したところ工事計画の変更是困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の2の届出手手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年1月15日から3月6日まで現地での発掘調査を実施した。

調査の結果、当該地では13世紀中頃から土地利用が開始されおおむね15世紀初頭頃までの時期の遺構が発見された。特に調査区の西側で発見された南北方向の溝跡は、本調査地点周辺における土地の区画を示す具体的な遺構であり、将来にわたってこの周辺域の様相解明にあたって重要な要素となることが考えられる。

15 北条時房・顯時邸跡 (NO. 278)

市内中心部の若宮大路の西側に位置し、鶴岡八幡宮の社頃いわゆる三の鳥居からはわずか30m程の場所に所在している。平成13年11月に自己用店舗併用住宅の建替え工事についての事前相談があり、基礎工事の掘削計画が現地表下10m50cmまで及ぶ計画であったため、確認調査を実施したところ、現地表下1m20cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在することが明かになった。これにより当該建設工事による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断され、事業者との協議を経て文化財保護法第57条の

2の届出手続きを行い、施工者との工程調整及び発掘調査の準備が整った平成14年2月4日から次年度となる4月30日までを調査期間として現地での発掘調査を開始した。

本誌所収の平成12年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
①	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	二階堂字住柄58番4外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	281.13m ²	平成12年4月1日 ～平成12年9月2日
②	大倉幕府跡 (NO.253)	雪ノ下三丁目618番4	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	官衙	24.00m ²	平成12年4月19日 ～平成13年5月23日
③	下馬周辺遺跡 (NO.200)	由比ガ浜二丁目106番6外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	58.75m ²	平成12年6月14日 ～平成13年8月17日
④	今小路西遺跡 (NO.201)	由比ガ浜一丁目148番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	51.06m ²	平成12年6月27日 ～平成13年7月27日
⑤	佐助ヶ谷遺跡 (NO.245)	佐助一丁目476番1	個人専用住宅	都市	26.00m ²	平成12年7月19日 ～平成12年7月31日
⑥	東勝寺跡 (NO.246)	小町三丁目468番10	個人専用住宅 (地下室)	社寺	27.00m ²	平成12年7月27日 ～平成12年8月19日
⑦	武藏大路周辺遺跡 (NO.194)	扇ガ谷二丁目298番イ	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	122.20m ²	平成12年8月3日 ～平成12年11月30日
⑧	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町三丁目1826番9	個人専用住宅 (地下室)	都市	52.25m ²	平成12年8月1日 ～平成12年9月21日
⑨	今小路西遺跡 (NO.201)	由比ガ浜一丁目183番1	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	40.00m ²	平成12年8月11日 ～平成12年8月31日
⑩	水道山遺跡 (NO.20)	台四丁目1169番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	集落	163.90m ²	平成12年8月11日 ～平成12年10月19日
⑪	長谷小路周辺遺跡 (NO.236)	長谷一丁目205番12	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	31.50m ²	平成12年10月10日 ～平成12年11月10日
⑫	北条小町邸跡 (NO.282)	雪ノ下一丁目400番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	56.00m ²	平成12年10月23日 ～平成12年11月10日
⑬	淨妙寺旧境内遺跡 (NO.408)	淨明寺三丁目16番1	個人専用住宅 (地盤改良)	社寺	26.00m ²	平成12年10月31日 ～平成12年11月9日
⑭	材木座町屋遺跡 (NO.261)	材木座四丁目256番1の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	103.10m ²	平成12年11月9日 ～平成12年12月8日
⑮	笹目遺跡 (NO.207)	笹目町302番11	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	58.19m ²	平成12年11月9日 ～平成12年12月15日
⑯	龜谷山王堂跡 (NO.185)	扇ガ谷四丁目327番5	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	12.00m ²	平成12年12月11日 ～平成12年12月25日

平成13年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	雪ノ下一丁目200番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	80.00m ²	平成13年2月19日 ~平成13年4月27日
2 ★	横小路周辺遺跡 (NO.259)	二階堂字荏柄10番1の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	40.00m ²	平成13年2月22日 ~平成13年4月27日
3	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町三丁目2356番10	個人専用住宅 (地下室)	都市	65.23m ²	平成13年4月26日 ~平成13年6月2日
4	玉縄城跡 (NO.63)	植木字植谷戸70番1外	個人専用住宅 (防災工事)	城館	30.00m ²	平成13年5月25日 ~平成13年6月14日
5	今小路西遺跡 (NO.201)	由比ガ浜一丁目148番5	個人専用住宅	都市	115.02m ²	平成13年6月5日 ~平成13年8月3日
6	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目2324番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	67.21m ²	平成13年8月6日 ~平成13年9月30日
7	佐助ヶ谷遺跡 (NO.203)	佐助一丁目476番1の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	120.00m ²	平成13年9月6日 ~平成13年12月15日
8	名越ヶ谷遺跡 (NO.231)	大町七丁目1615番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	20.00m ²	平成13年9月17日 ~平成13年10月20日
9	玉縄城跡 (NO.63)	植木字植谷戸198番の一部	個人専用住宅 (位置指定道路)	城館	73.13m ²	平成13年9月25日 ~平成13年10月31日
10	大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49)	雪ノ下三丁目607番1	自己用店舗併用住宅 (杭基礎構造)	都市	43.66m ²	平成13年11月8日 ~平成13年12月22日
11	横小路周辺遺跡 (NO.259)	二階堂字会下323番外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	15.00m ²	平成13年12月17日 ~平成13年12月27日
12	妙本寺遺跡 (NO.232)	大町一丁目1140番1外	個人専用住宅	社寺	110.00m ²	平成14年1月7日 ~平成14年2月2日
13	新善光寺跡 (NO.279)	材木座四三丁目573番1外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	45.00m ²	平成14年1月8日 ~平成14年2月2日
14	淨妙寺旧境内遺跡 (NO.408)	淨明寺三丁目126番	個人専用住宅 (地下室)	社寺	85.05m ²	平成14年1月15日 ~平成14年3月6日
15 ※	北条時房・顯時邸跡 (NO.278)	雪ノ下一丁目264番4	自己用店舗併用住宅	城館	188.00m ²	平成14年2月4日 ~平成14年4月30日

★印は平成12年度からの継続調査を示す。
※印は平成14年度への継続調査を示す。

調査面積の合計 1,097.30m²

平成13年度〇認定登録施設

市 全 倉 鎌

1:50,000



平成13年度〇認定登録施設

本標記板の平成12年度登録施設(○)～(◎)

※地図名は一覧表を参照

おおくらばくふしほうへん 大倉幕府周辺遺跡群(No.48)

大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49)

二階堂荏柄58番4外地点

例　　言

1. 本報は、大倉幕府周辺遺跡群（No. 49）の所在する遺跡内の鎌倉二階堂字住柄58番4外地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成12年4月1日～9月2日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原廣志

調査員：福田誠、木村美代治、菊川泉、須佐直子、神山晶子、太田美知子、本城裕、佐伯玲魚、須佐仁和、早坂伸市、小西さつき、秋山哲雄（東京大学院生）、向井互（金沢大学院生）

調査補助員：梅岡溪音、古田土俊一、兼田功一、鈴木弘太、中島理恵、渡辺賢史・阿部潤、大輪芳照、荻野貴博、佐藤文子、鈴木絵美、長友純子（以上鶴見大学生）、久保田裕美（明治大学生）、鈴木一功（立正大学生）、

協力機関名：鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所、㈱高橋組
調査協力者：河原龍雄・北島清一・多田徳藏・山崎一男（鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター）

下田美希、原考史

4. 本報の執筆は、第1章を秋山、第2章を須佐（直）、第3章を原がそれぞれ分担執筆し、第4章については調査員協議のもと原が執筆し、併せて編集も行なった。
5. 本報掲載の写真は、全景写真のうちI区1～3面はリモコン式高所撮影装置により木村美代治が、その他の全景・個別遺構を原、須佐（直）が、遺物は須佐（仁）、早坂が撮影した。
6. 出土遺物のうち、鶴見大学文学部文化財学科において銅鏡の清浄・分析を永田勝久先生と助手の福田誠氏御指導のもと学生の古田土俊一君、また漆器蓄物の鑑定・保存を中里壽克先生御教示のもと学生の長友純子君にそれぞれお願いした。多大なご好意にたいして記して感謝の意を表する。
7. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 本報の凡例は以下の通りである。

・図版縮尺　全測図 1/100

遺構 1/30, 1/80

遺物 1/3

・遺構図版　遺構のレベルは海拔標高の数値を示す。

・遺物図版　ーーは軸薬の範囲を示し、黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤、また漆器椀・皿類のうち、文様を朱漆で表現した部分もそうである。

9. 現地調査及び資料整理にあたっては、多くの方々からご助言・ご援助を賜った。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。

石井進、江崎武、大河内勉、大三輪龍彦、小野正敏、河野眞知郎、河野一也、北原實徳、小林康幸、五味文彦、斎藤慎一、佐藤仁彦、沙見一夫、宗臺秀明、宗臺富貴子、関幸彦、玉林美男、塙本和弘、手塚直樹、中里壽克、中田英、水田勝久、浪川幹夫、服部実喜、藤沢良祐、藤原良章、松尾宣方、馬淵和雄、宮田真、桃崎祐輔

目 次

本文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置	5
2. 歴史的環境	5
第2章 調査の概要	9
1. 調査の経過	9
2. 測量軸の設定	10
3. 先行トレンチ調査	11
4. 堆積土層	12
第3章 検出遺構と出土遺物	14
1. 第1面の遺構・遺物	14
2. 第2面の遺構・遺物	27
3. 第3面の遺構・遺物	38
4. 第4面の遺構・遺物	55
5. 第5面の遺構・遺物	75
6. 第6面の遺構・遺物	88
第4章 まとめ	108

挿 図 目 次

図1. 調査地点周辺図	6	図19. かわらけ溜り1	28
図2. グリット設定図	10	図20. かわらけ溜り2	29
図3. 先行調査トレンチ	11	図21. 土壌	29
図4. 先行調査トレンチ出土遺物	12	図22. 土壌・かわらけ溜り2出土遺物	31
図5. 土層堆積模式図	13	図23. 土壌・溝出土遺物	32
図6. 第1面全測図	15	図24. かわらけ溜り1	33
図7. 1面建物1	16	図25. 第1面下～2面出土遺物(1)	35
図8. 1面建物2	16	図26. 第1面下～2面出土遺物(2)	36
図9. 建物3	17	図27. 第1面下～2面出土遺物(3)	37
図10. かわらけ溜り4	18	図28. 第3面全測図	38
図11. 建物・土壤出土遺物	19	図29. 建物1	39
図12. かわらけ溜り1～3出土遺物	20	図30. 3面建物2	40
図13. かわらけ溜り4出土遺物(1)	21	図31. 土壌	41
図14. かわらけ溜り4出土遺物(2)	22	図32. 土壌・溝・柱穴	42
図15. 第1面上出土遺物(1)	24	図33. 建物・溝・土壤出土遺物	44
図16. 第1面上出土遺物(2)	25	図34. かわらけ溜り1出土遺物(1)	45
図17. 第2面全測図	26	図35. かわらけ溜り1出土遺物(2)	46
図18. 2面礎石列1・2	27	図36. かわらけ溜り2・3出土遺物	47

図37. かわらけ溜り4・5出土遺物	48	図61. 溝・井戸	78
図38. かわらけ溜り6出土遺物(1)	49	図62. 土壌・井戸・柱穴出土遺物	80
図39. かわらけ溜り6出土遺物(2)	50	図63. 第4面下～5面出土遺物(1)	81
図40. 柱穴、玉砂利面出土遺物	51	図64. 第4面下～5面出土遺物(2)	82
図41. 第2面下～3面出土遺物(1)	52	図65. 第4面下～5面出土遺物(3)	84
図42. 第2面下～3面出土遺物(2)	53	図66. 第4面下～5面出土遺物(4)	85
図43. 第2面下～3面出土遺物(3)	54	図67. 第4面下～5面出土遺物(5)	87
図44. 第4面全測図	56	図68. 第6面全測図	89
図45. 建物1・2	57	図69. 建物1・2	90
図46. 建物3・4	58	図70. 建物3・4	91
図47. 4面建物5	59	図71. 土壌	92
図48. 4面建物6	60	図72. 建物・土壌・柱穴出土遺物	94
図49. 土壌	61	図73. 柱穴出土遺物	95
図50. 建物1・2出土遺物	62	図74. 柱穴・井戸・その他出土遺物	96
図51. 建物3・6、出土遺物	63	図75. 溝1出土遺物	98
図52. 建物6内出土遺物	65	図76. 第5面下～6面出土遺物(1)	99
図53. 土壌出土遺物	66	図77. 第5面下～6面出土遺物(2)	100
図54. 第3面下～4面出土遺物(1)	68	図78. 第5面下～6面出土遺物(3)	102
図55. 第3面下～4面出土遺物(2)	70	図79. 第5面下～6面出土遺物(4)	103
図56. 第3面下～4面出土遺物(3)	71	図80. 第5面下～6面出土遺物(5)	105
図57. 第3面下～4面出土遺物(4)	72	図81. 第5面下～6面出土遺物(6)	106
図58. 第3面下～4面出土遺物(5)	73	図82. 第5面下～6面出土遺物(7)	107
図59. 第5面全測図	76	図83. 遺構変遷図	109
図60. 土壌・柱穴	77		

写真図版目次

図版1. 第1面のI・II区全景	111	図版10. 第6面のI・II区全景・遺構検出状況	120
図版2. 第1面の各遺構・遺物検出状況	112	図版11. 第6面の各遺構・遺物検出状況	121
図版3. 第2面のI・II区全景	113	図版12. 第1面の遺構・面上の出土遺物	122
図版4. 第2面の各遺構・遺物検出状況	114	図版13. 第2面の遺構・面上の出土遺物	123
図版5. 第3面のI・II区全景	115	図版14. 第3面の遺構・面上の出土遺物	124
図版6. 第3面の各遺構・遺物検出状況	116	図版15. 第4面の遺構・面上の出土遺物	125
図版7. 第4面のI・II区全景	117	図版16. 第5面の遺構・面上の出土遺物	126
図版8. 第4面の各遺構・遺物検出状況	118	図版17. 第6面の遺構・面上の出土遺物	127
図版9. 第5面のI・II区全景・遺構検出状況	119	図版18. 各面の主要出土遺物	128

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本調査地点は、JR鎌倉駅から北東に約1.3kmほどのところに位置している(図1)。一帯は、東御門川、二階堂川などが鎌倉最大の河川である滑川に合流する地域で、それらの河川開析によって平坦な土地が形成されており、北側を山地、南側を滑川で囲まれた地帯である。その平地の南側を県道金沢鎌倉線(以下では中世の呼称に従い「六浦道」と表記する)が通っている。六浦道は、鶴岡八幡宮東側の筋替橋交差点(現在の横浜国第付属小学校の校門付近)からほぼ真東に延びているが、その北側に、源頼朝・頼家・実朝の三代にわたる將軍御所が所在した地にあたり、そこは大倉御所、あるいは大倉幕府と呼ばれた。大倉御所の西限は、現在の付属小学校の校庭を南北に横切る形であったと推定される(注1)。一方で東限は関取橋(六浦道と旧二階堂大路との交差点)から北に延びている道で、現在は東御門川がこの道路に沿って脇を流れている。東御門という地名は、御所の東側に門があったことに由来している。本調査地点は、このような位置にあった大倉御所の北東に隣接しており、まさに東御門と呼ばれる地域に所在している。また、本調査地点の東側には、頼朝の入府以前の創建とされる荏柄天神社が鎮座し、今回の発掘調査においても中世以前に遡る遺物(奈良・平安時代の土器類)の出土があり、鎌倉の中でも早くから人の生活が営まれていた地域であったことが分かる。

2. 歴史的環境

荏柄天神社は、長治(1104)に菅原道真を祭神として開かれているが、かつては綱文時代の遺物も採集されたことがあり(注2)、かなり早くから人の生活する地域だったようである。荏柄天神社だけでなく、六浦道沿いには、行基の創建したと言う伝説をもち鎌倉最古の寺院といわれている杉本寺があり、六浦道が、古くから鎌倉の主要な幹線道路(武藏國久良木郡六浦=現在の横浜市金沢区六浦への往来道)であったことが分かる。嘉祐元年(1225)に將軍御所が大倉の地から若宮大路周辺に移転すると、都市としての鎌倉は若宮大路を基軸とするようになるが、鎌倉幕府滅亡後は、再び六浦道が鎌倉の中心軸となつたようである(注3)。以下では、①嘉祐元年(1225)の將軍御所の移転以前、②將軍御所移転後、③鎌倉幕府滅亡後の三段階に分けて、本調査地点の歴史的な環境について概観したい。

①の時期には、源頼朝が鎌倉に入る以前から鎌倉の中心軸であった六浦道沿いの地域は三浦(和田)一族が掌握していたという指摘がある(注4)。本調査地点に近接すると考えられる、「荏柄前」「御所東隣」にあった和田義盛の甥にあたる和田胤長の屋敷(注5)は、そうした指摘を傍証する材料であろう。頼朝が鎌倉に邸宅を構えると、御家人たちは周辺に「宿館」を構えている(注6)。御所の西側の「西御門」には三浦義村(注7)の邸宅があり、貞応三年(1224)の火事で焼けている。六浦道を挟んだ南側の「南御門」には、頼朝が正月の「御成始」のために訪れた八田知家の邸宅があった(注8)。この邸宅は、御所周辺の火事によって延焼している(注9)。また、畠山重忠の邸宅も南御門にあり、京都からやって来た飯師時長の藩在先に指定されている(注10)。本調査地点の含まれる東御門には、先ほどの和田胤長の屋敷の他、比企能員の邸宅もあり、京都からやって来た勤使がここに滞在している(注11)。この他、周辺には北条義時の大倉の邸宅もあり、後に將軍となる頼経が鎌倉に到着すると、この義時の邸宅に入っている(注12)。

②の時期、つまり將軍の御所が大倉から若宮大路周辺に移転した嘉祐元年(1225)以降になると、鎌倉の中心軸は若宮大路の周辺へ移り、大倉の御家人の邸宅に関する史料も減ってしまうが、当時の鎌倉は

卷之三



図1 調査地点周辺図

人口が増加していたであろうから、大倉御所とその周辺も引き続き宅地として利用されていたはずである。実際に、北条時房の公文所が本調査地点周辺にあった。寛喜三年(1231)に起きた、源頼朝・北条義時の法華堂の本尊が焼けた大倉の火事では、勝長寿院から永福寺まで被害にあっており、このときに北条時房の公文所も一緒に消失しているのである(注13)。本調査地点周辺もこのときに焼けている可能性は高い。また、建長三年(1251)十二月三日と文永二年(1265)三月五日に出された鎌倉幕府の法令では、鎌倉内の七つの商業地域の一つに「大倉辻」が指定されている。「大倉辻」は大倉御所東南の角、開取橋周辺に推定されており、本調査地点とも近接している。当時は一帯が、御家人の邸宅と町屋とが密集する地域だったと推測できよう。時期は下るが、永人六年(1298)に安芸国の大島神社の神主職を安堵されている「掃部大夫親範」なる人物も、東御門に屋地を所有しており(注14)、京都や六波羅の屋地とともに亡父からの相続を幕府から認められている。

鎌倉幕府滅亡以後のの時期には、基本的な史料に乏しく、詳しいことは分かっていない。しかし、この時期には再び六浦道が鎌倉の中心軸となっており、現在の淨妙寺周辺には鎌倉公方の屋敷が置かれていたと推測されている(注15)。おそらくそこに仕える武士達の宿館も周辺に建設されたであろう。鎌倉公方が鎌倉を追われるまで、その脳わいは続いていると考えられる。時期は下って戦国時代の天正十五年(1587)には、建長寺が鎌倉内の寺領をまとめて列挙しており(注16)、その中に「二階堂」や「杉本下」「西御門」などとともに、「東御門」の土地六坪が挙げられており、十八文の「年貢」に対して「十文」を「甚右衛門」なる人物が支払っていることが分かる。天正十八年(1590)四月に豊臣秀吉が北条氏の権籠もある小田原城を包囲すると、鎌倉に禁制を大量に発給している。禁制とは、軍勢の狼籍や放火を禁止するために発給された文書であり、戦闘に巻き込まれることを避けたい寺社などの要求によって発給されることが多かった。鎌倉の諸寺社にも秀吉の禁制が多く残っており、建長寺や円覚寺、東慶寺、宝戒寺などの大きな寺院に対して発給されているが、の中には荏柄天神も含まれている(注17)。建長寺などの大寺院と並べられる荏柄天神社もそれなりの規模を保っていたのである。隣接する本調査地点も、荏柄天神社に何らかの関わりをもつ地域であったかもしれない(例えば坊舎城)。

以上の三つの時期について、本調査地点の歴史的環境についてまとめると、①の時期は、三浦(和田)氏の勢力圏であり、頼朝の鎌倉入部後は、大倉御所に隣接して御家人の宿館が建てられた地域であった。②の時期は、商業地域に近接しながらも、引き続き御家人の宅地として利用されていた。③の時期には、建長寺の狭小な寺領も周辺にあったが、荏柄天神社との関わりが強いと推測される地域であった。江戸時代以降は、耕作地となっていたようで、八幡義生氏の古写真(注18)には、頼朝の法華堂につながる道以外は、山際の民家と耕作地しか確認できない。

【注】

1. 八幡義生「鎌倉時代に於ける武家屋敷の研究の内鎌倉幕府の東西南北の四御門と畠山重忠の考察」(『金沢文庫研究』213-1974)、山村亜希「中世鎌倉の都市空間構造」(『史林』80-2-1997)など。尚、手塚直樹「中世都市鎌倉の成立」(鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 1994)によれば、西限の道の延長線上に位置する現在の宝成寺の前を南北に通る道は、現在よりも若干北側が西に傾いていたことが分かっている。この推定通りに西限の道があったとすれば、本調査地点の前を通る東側の境界の道と、東西の傾きが著しく異なることになる。両者が平行である必要はないが、現在ある道が幕府の外郭をそのまま反映していると判断するには慎重になるべきであろう。
2. 赤星直忠『鎌倉市史考古編』(吉川弘文館 1959)

3. 石井 進「文献からみた中世都市鎌倉」(鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 1994)など参照。
4. 石井 進「中世六浦の歴史」(『三浦古文化』40 1986)、石丸 照『都市鎌倉の武士たち』(新人物往来社 1993)、馬渕和雄「大倉幕府周辺遺跡(No. 49)雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』1998 鎌倉市教育委員会など。
5. 『吾妻鏡』健保元年(1213)三月廿五日条
6. 『吾妻鏡』治承四年(1180)十二月十二日条
7. 『吾妻鏡』貞応三年(1224)九月五日条
8. 『吾妻鏡』文治三年(1187)一月十二日条
9. 『吾妻鏡』健保元年(1213)十二月一日条
10. 『吾妻鏡』正治元年(1199)五月七日条
11. 『吾妻鏡』文治元年(1185)九月一日条
12. 『吾妻鏡』承久元年(1219)正月十九日条
13. 『吾妻鏡』寛喜三年(1231)十月廿五日条
14. 永仁六年(1298)十二月廿日関東下知状(「集古文書」二十七巻島藏『神奈川県史』資料編2古代・中世(2)9328号文書)
15. 山田邦明『室町時代の鎌倉』五味文彦編『都市の中世』(吉川弘文館 1992)など参照。
16. 天正十五年(1587)十二月十三日建長寺寺領坪付帳案(建長寺文書『神奈川県史』資料編2古代・中世(2)9328号文書)
17. 天正十八年(1590)四月豊臣秀吉禁制(『神奈川県史』資料編2古代・中世(2)9705~9729号文書)
18. 前掲註1の八幡義生論文4頁に写真が載せられている。ただし目印がほとんど無いために、実際に大倉周辺を写した写真かどうかは筆者には連断できない。

【参考文献】

1. 鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史 総説編』及び『鎌倉市史 社寺編』(吉川弘文館 1959)
2. 石井 進・網野善彦編『中世の風景を読む―2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』(新人物往来社 1994)
3. 石井 進『中世史を考える―社会論・史料論・都市論』(校倉書房 1991)
4. 石井 進編『[もののふの都] 鎌倉と北条氏』(新人物往来社 1999)
5. 石井 進・大三輪龍彦編『上みがえる中世【3】 武士の都鎌倉』(平凡社 1989)
6. 河野眞知郎『中世都市鎌倉―遺跡が語る武士の都―』(講談社選書メチエ49 1995)
7. 五味文彦『大系日本の歴史5 鎌倉と京』(小学館 1988)
8. 松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』(吉川弘文館 1993)

第2章 調査の概要

宝塚の歴史地図

1. 調査の経過

本遺跡は、鎌倉市内北東部の鶴岡八幡宮東方にあたる二階堂に位置する。本調査地点は大倉幕府周辺遺跡群（県遺跡台帳No.49）の一角、鎌倉市二階堂字佐柄58番4外に所在しており、この一帯は地元で東御門と呼ばれている。調査地の南西城には鎌倉時代初期に源頼朝が御所をおいた大倉幕府跡にあたっているが、その比定地の大半が学校及び宅地となっていて発掘調査事例は極めて少ない。

平成11年11月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画に基礎構造を鋼管杭打ち工法とする案件であった為、鎌倉市教育委員会により確認調査を行ったところ、現地表下80cm以下に中世の遺物包含層と生活面が検出され、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。これにより発掘調査の実施について建築主と数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続き、調査の実施方法の協議を経て、平成12年4月から調査面積260m²を対象として発掘調査することになった。

現地調査は、調査排土の置場の問題から調査区を南北に2分割し、南側をI区、北側をII区としてそれぞれ調査範囲を設定し、平成12年4月1日よりまずI区の表土を重機によって掘削することから始められた。調査期間中は多量の湧水に悩まされながらの作業ではあったが、I・II区共に鎌倉時代初期から室町時代中期にかけて、6時期以上の生活面とそれに伴う遺構・遺物が発見された。同年9月2日までの間に必要な記録保存を行ない、無事に発掘調査を終了した。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

日誌抄

- 4月1日 I区調査開始。機材搬入。調査区を設定し、重機による表土掘削。
- 3日 第1面検出及び遺構確認の調査開始。調査区グリッドを設定、原点レベル移動。
- 25日 第1面調査終了。全景写真、礎石建物・かわらけ溜りなど個別遺構の写真撮影。全測図・個別遺構図の作成。
- 5月11日 第2面調査終了。全景写真、礎石建物・土壤など個別遺構の写真撮影。
- 30日 第3面調査終了。全景写真、掘立柱建物・かわらけ溜り・土壤など個別遺構の写真撮影。
- 6月8日 第4面調査終了。全景写真、掘立柱建物・土壤など個別遺構の写真撮影。
- 21日 第5面調査終了。全景写真、遺物出土状況と個別遺構の写真撮影、全測図作成。
- 7月1日 第6面調査終了。全景写真、掘立柱建物・溝・調査区壁などの個別遺構の写真撮影。
- 5日 II区調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。第1面検出及び遺構確認の調査開始。
- 12日 第1面調査終了。全景写真、礎石建物・かわらけ溜りなど個別遺構写真の撮影、全測図終了。
- 19日 第2面調査終了。全景写真、礎石建物・かわらけ溜り・土壤など個別遺構の写真撮影。
- 8月3日 第3面調査終了。全景写真、掘立柱建物・かわらけ溜りなど個別遺構の写真撮影。
- 12日 第4面調査終了。全景写真、掘立柱建物・土壤など個別遺構の写真撮影、全測図終了。
- 21日 第5面調査終了。全景写真、掘立柱建物・井戸など個別遺構の写真撮影、全測図作成。
- 29日 第6面調査終了。全景写真、掘立柱建物・溝・井戸・調査区壁など個別遺構の写真撮影。全測図及び調査区西壁土層堆積図の作成。
- 9月2日 現地調査終了。関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡、機材撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたっては、調査地の西隣で大倉幕府跡の東辺と推定される東御門川と、それに平行する道路の主軸方向を意識して測量用の方眼を設定した。図2のように道路沿いには、市道路管理課が設置した4級基準点のE-091 [X=-75.114.153・Y=-24.274.428] と、E-092 [X=-75.112.493・Y=-24.277.807] を用いて調査原点にあたるG-2杭を設置した。G-2杭の国土座標値は、X座標値：-75.146.494・Y座標値：-24.253.633の数値を得ている。図中の方位はすべて真北を採用し、方眼の南北軸線はN-10°57'19"Eである。また海拔高については、県道金沢鎌倉線から大塔宮（鎌倉宮）へ至る岐れ路の交差点付近に設けられた鎌倉市3級水準点（No.53209：L=12.107m）からG-2杭上に仮水準点を移動した。

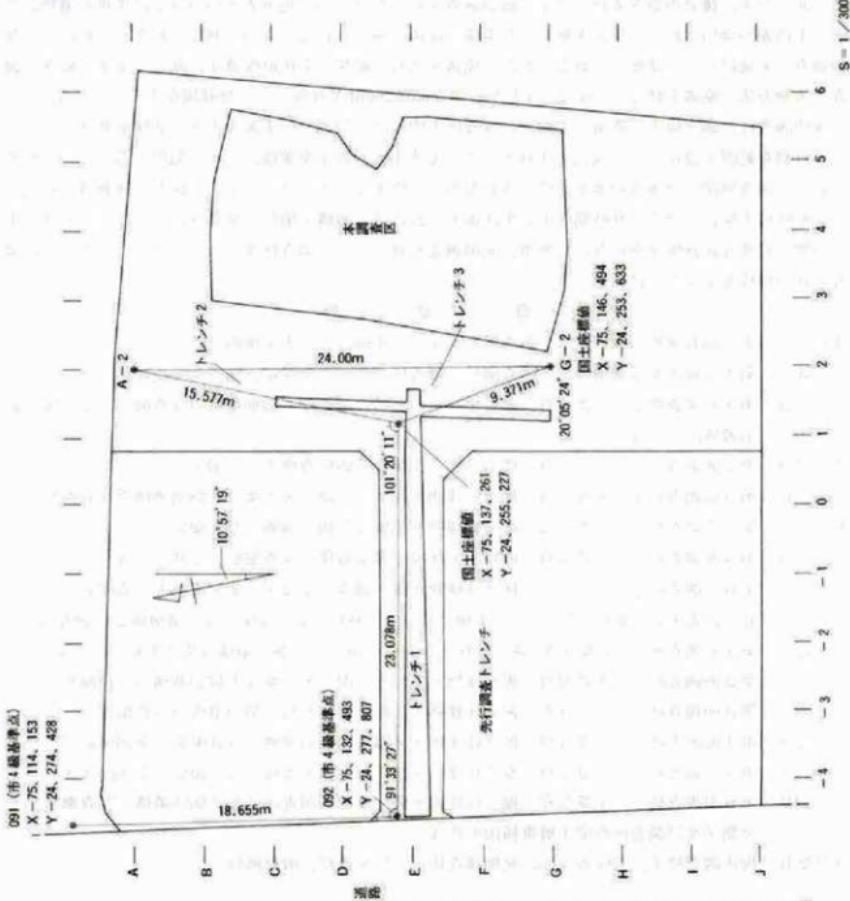


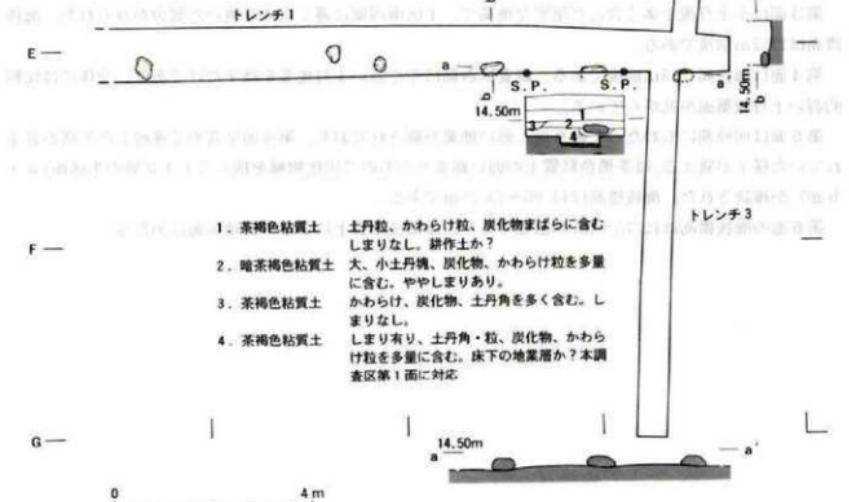
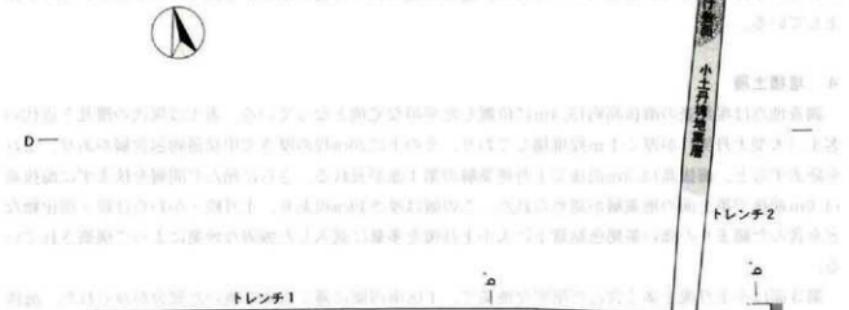
図2 グリッド設定図

G-2杭上の海拔標高は、15.356mであり、文章中及び挿図に記載されたレベル数値はすべてこれを基準とした海拔高を示している。調査地点の経緯は、東経139°33'59"・北緯35°19'21"である。

3. 先行調査トレント

先行調査としたものは、平成8年10月24日から同月28日の5日間をかけて、図2・3の調査区配置に見られるように東側市道から敷地内へ進入する通路地下の部分に上・下水道管を埋設する工事に先立ち、立合調査として実施した。今回報告する調査区と同一敷地内に位置しており、本調査地点と関連した生活面や構造・遺物が発見されている。さらに立合調査の折、原・廣志・須佐直子の両名も作図段階で調査に参加していた経緯から、本報に調査概要を報告するものである。

c —  d —  e —  f —  g — 



各トレンチ（図3）は、敷地中央部の東西位に長さ12.5m、幅0.8~1.3m前後、深さ1.2mのトレンチ1があり、東端付近からT字型に南北にそれぞれ延びるトレンチ2（長さ7.5m×幅60cm）とトレンチ3（長さ7.5m×幅70cm）が設定された。各トレンチの層位は、表土を除去する茶褐色土の耕作土があり（1層）、次にかわらけ・土丹粒を混入した中世の遺物包含層（2・3層）、その下

に小土丹塊を突き固めた地業層（4層）の生活面が認められた。これは本調査区の第1面に相当する生活面である。この面からはトレンチ1東側の南壁際に長径40~50cm程の伊豆石（伊豆地方や大磯付近などで産する河原石で、花崗岩質の石材）が195cmの間隔で3個（2間分）認められ、また西側にも不規則な配置で伊豆石3個が検出されており、礎石建物の存在が想定される。トレンチ2北端の面上には、かわらけ小片を敷きつめたものがみられた。遺物は礎石列の付近の面上から図4に示したかわらけが出土している。

4. 堆積土層

調査地点は現地表の海拔高約15.4mに位置した平坦な宅地となっている。表土は現代の擾乱と近代の客土（大型土丹塊）が厚く1m程堆積しており、その下に20cm程の厚さで中世遺物包含層があり、これを除去すると、海拔高14.3m前後で土丹地業層の第1面が表れる。さらに殆んど層を挟まずに海拔高14.0m前後で第2面の地業層が認められた。この層は厚さ40cm程あり、土丹粒・かわらけ粒・炭化物などを含んだ締まりの強い茶褐色粘質土に大小土丹塊を多量に混入した強固な地業によって構成されている。

第3面は小土丹塊を多く含んだ堅牢な地業で、I区南西側に薄く貝砂を敷いた部分がみられた。海拔標高は13.7m前後である。

第4面は海拔高13.5m前後である。調査区西側にやや強い土丹地業を残すだけであり、全体には比較的弱い土丹版築面が広がっている。

第5面は何時期にもわたって繰り返し弱い地業が施されており、第4面を含めて連続した生活が営まれていた様子が窺える。暗茶褐色粘質土の弱い締まりのもので炭化物層を挟んで上下2層の生活面（a・b面）が確認された。海拔標高は13.05~13.25mである。

第6面の海拔標高は12.75~12.95m程であり、黒褐色粘質土による中世地表面にあたる。

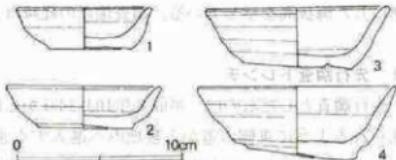


図4 先行調査トレンチ出土遺物

韓國土壤剖面圖集

第8章

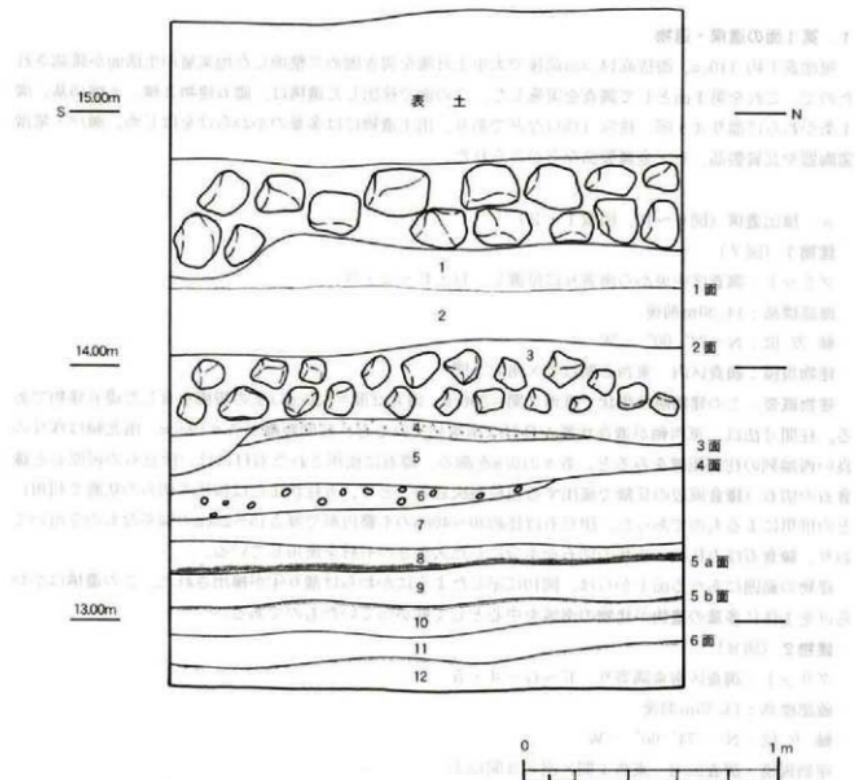


圖 5 土層堆積模式圖

本剖面圖展示了土壤堆積模式。從地表到 15.00m 深度，土壤剖面由 12 層組成。層 1：地表至約 1.5m，為大石塊與土壤的混合層；層 2：約 1.5m 至 3.0m，土壤層；層 3：約 3.0m 至 4.5m，含中等大小石塊的土壤層；層 4：約 4.5m 至 6.0m，含小石塊的土壤層；層 5：約 6.0m 至 6.5m，含圓形物體（如卵石或種子）的土壤層；層 6：約 6.5m 至 7.0m，黑色土壤層；層 7：約 7.0m 至 7.5m，淺色土壤層；層 8：約 7.5m 至 9.0m，厚黑色土壤層；層 9：約 9.0m 至 9.5m，淺色土壤層；層 10：約 9.5m 至 10.0m，黑色土壤層；層 11：約 10.0m 至 10.5m，淺色土壤層；層 12：約 10.5m 至 11.0m，黑色土壤層。土壤剖面在 13.00m 深度處結束。

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

現地表下約110cm、海拔高14.3m前後で大小土丹塊を突き固めて整地した地盤層の生活面が確認されたので、これを第1面として調査を実施した。この面で検出した遺構は、礎石建物3棟、土壌15基、溝1条かわらけ溜り4ヶ所、柱穴115口などであり、出土遺物には多量のかわらけをはじめ、瀬戸・常滑窯陶器や瓦質製品、石・金属製品などがみられた。

a. 検出遺構（図6～10、図版1・2）

建物1（図7）

グリット：調査区中央から南寄りに位置し、D・E-2・3

確認標高：14.30m前後

軸方位：N-74° 00' -W

建物規模：調査区内 東西2間以上×南北2間

建物概要：この建物跡は現状で東西2間=396cm、南北2間=420cm以上の規模を有した礎石建物である。柱間寸法は、東西軸が遺存状態の良好な南端列でみると、柱間距離が各々198cm、南北軸は残りの良い西端列の柱間距離をみると、各々210cmを測る。礎石に使用された石材には、伊豆石の河原石と鎌倉石の切石（鎌倉周辺の丘陵で産出する粗粒凝灰岩のこと、方柱状または板状の切石の状態で利用）との併用によるものであった。伊豆石は径約30～40cmの不整円形で厚さ15～25cmの偏平なものを用いており、鎌倉石は方柱状・板状の切石を半分にした大きさの石材を使用している。

建物の範囲にあたる面上からは、図10に示したようにかわらけ溜り④が検出された。この遺構はかわらけを主体に多量の遺物が建物の南端を中心として拡がっていたものである。

建物2（図8）

グリット：調査区南東隅寄り、E～G-4・5

確認標高：14.35m前後

軸方位：N-74° 00' -W

建物規模：調査区内 東西1間×南北3間以上

建物概要：この建物跡は調査区内で東西1間=192cm、南北3間=576cm以上の規模をもつ礎石建物である。柱間寸法は、東西列の柱間距離が192cm、南北軸は西端列でみると北から198cm・180cm・198cmをそれぞれ測る。礎石に使用された石材はすべて鎌倉石で、方柱状または板状を呈した切石を二・三分割したような大きさのもので長さ約30～50cm、幅約25～30cm、厚さ18～28cm程の石材を使っている。掘り方は、径約40～60cmの円形または楕円形で、深さ30～40cmで平坦な底面のものである。

建物3（図9）

グリット：調査区中央南寄り、D・E-2・3

確認標高：14.30m

軸方位：N-74° 00' -E

建物規模：調査区内東西4間以上×南北2間半

建物概要：この建物跡は東西4間=760cm、南北2間半=470cm以上の規模を有し、東西に主軸をもつ礎石建物である。北側には底または溝縁に相当すると考えられる取付きの半間分が認め

B —



かわらけ溝り3

かわらけ溝り2

埋立

西側車道側斜面

削除箇所の位置を示す

C —

D —

E —

F —

G —

埋立

埋立

かわらけ溝り1

埋立

土壤19

土壤20

かわらけ溝り4

4 m

0



図6 第1面全測図

八幡東一丁目1番地

られた。

柱間寸法は、東西列が調査区内の建物範囲からみると、両側の一間が各々185cm、中央の二間分が各々195cmを測る。南北軸は礎石の残存する東端列でみると、柱間距離が各々190cmであり、半間分が90cmを測る。

礎石に使用された石材には、伊豆石の川原石と鎌倉石の切石とを併用している。伊豆石は径30cm程の不整円形で偏平なものを用いている。鎌倉石は板状の切石を打ち欠いた石材を使用している。掘り方は約40~50cmの円形もしくは楕円形を呈した浅いものである。

建物に伴う遺物としては、やや疑問を残す資料も認められたが、掘り方-5・9・12からは、かわらけ・天目茶碗などが出土している。

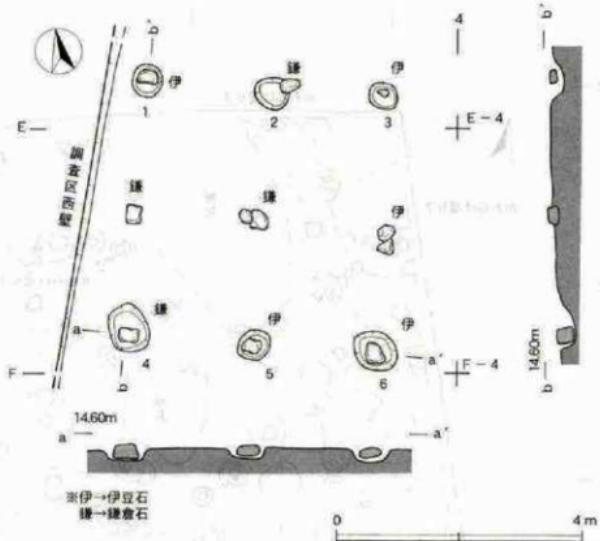


図7 1面 建物1

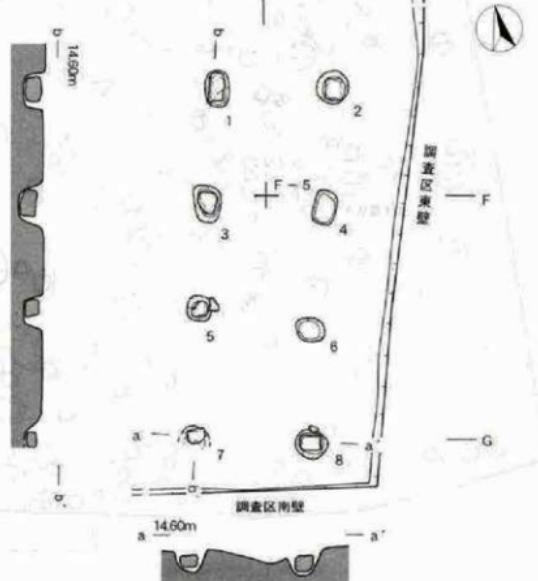


図8 1面 建物2

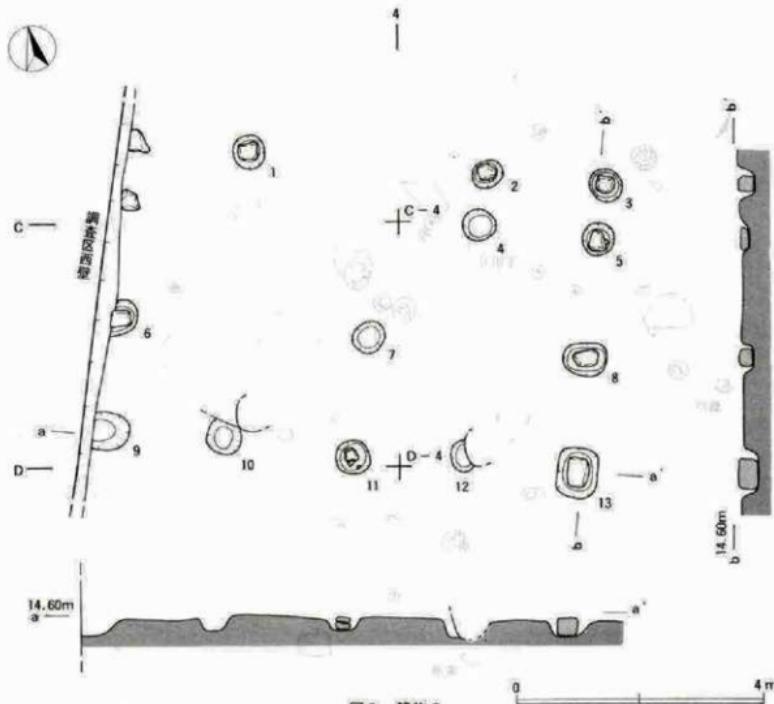


図9 建物3

土壤18(図6)

F-6に位置する。形状は梢円形で、大きさは長径115cm、短径45cm、深さ25cm、断面が逆台形の掘り方をもつ。覆土は炭化物、土丹粒、かわらけ粒を多く混入した縮まりのない茶褐色土である。

土壤19(図6)

F-5杭付近に位置する。形状は梢円形で、大きさは長径93cm、短径65cm、深さ18cmと浅い摺鉢状の土壤である。覆土は炭化物、土丹小塊、かわらけ粒を多めに含んだ縮まりのない明茶褐色土である。

土壤20(図6)

E-5グリットの調査区東壁に接した位置にあたる。形状は南北位の軸方向をもつ長円形を呈し、大きさは長径136cm、短径68cm、深さ20cm前後の浅い土壤である。覆土は炭化物、土丹粒、かわらけ粒を多めに含んだ縮まりのない明茶褐色土である。

かわらけ溜り1(図版2)

B-4グリットの南西壁に位置し、建物3の掘り方2・3間の東側に確認された。土壤のような掘り込みではなく、面上の狭い範囲に完形8点の大小かわらけで構成されていた。

かわらけ溜り2(図版2)

調査区西壁際でC-3杭より北側に位置するが、調査区外に拡がっているので全貌は明らかではない。近代の丸太杭と建物3の礎石掘り方により一部が壊されている。平面形は不整円形を呈した大型の浅い土壤である。大きさは東西径153cm以上、南北径240cm、深さ10~15cmである。かわらけは殆んどが底面直上からの小片であったが、完形もしくは完形に近いものは上向きの状態で出土している。覆土は褐

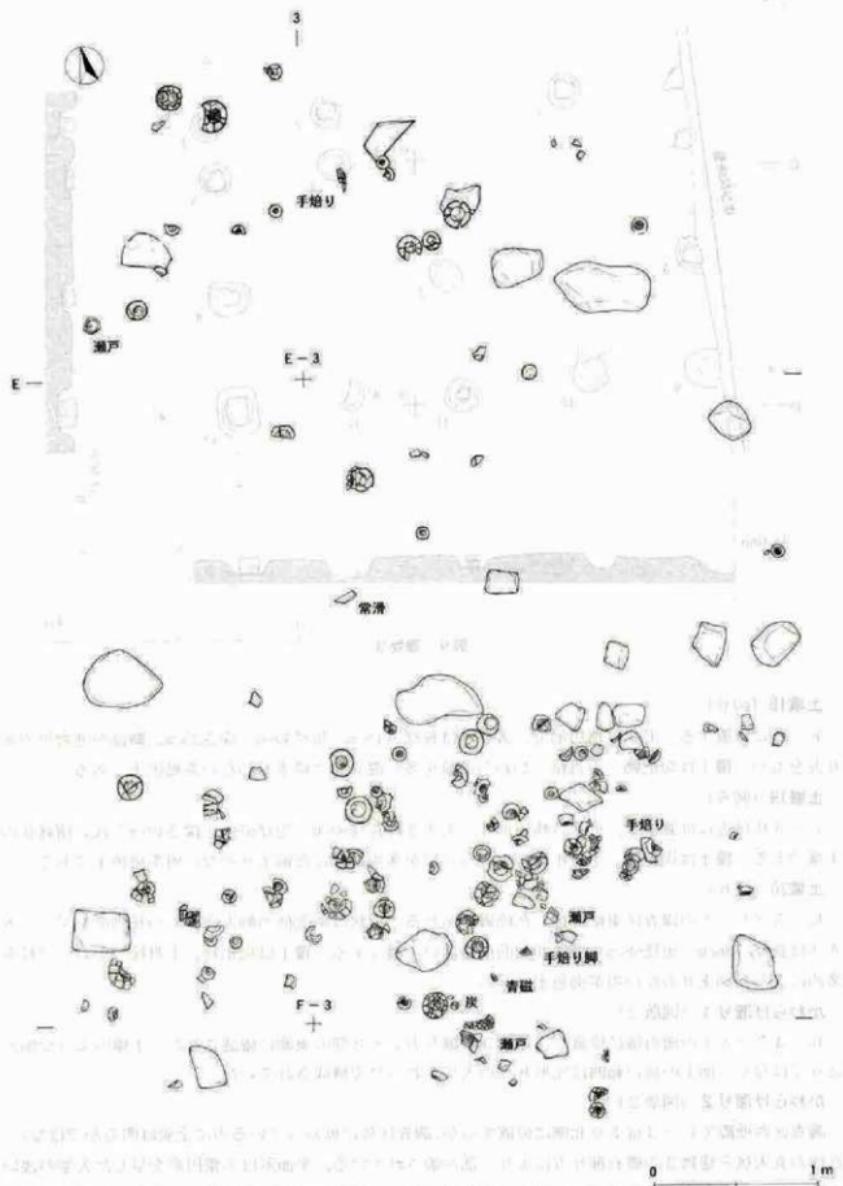


図10 かわらけ遺跡4 (かわらけ遺跡4の出土品分布図)

色砂質土に炭化物・土丹粒を少量含んだ縮まりのないもの。

かわらけ溜り3 (図版2)

B-3グリットの調査区北壁際に位置する。本址は東部が擾乱を受けて削平されており、さらに北側の調査区外に拡がっているので全貌は明らかではないが、梢円形と推定される浅い土壌である。大きさは長径165cm以上、短径95cm以上、深さ20cmである。遺物は底面近くから大型のかわらけを中心に散乱した状況で出土している。覆土は茶褐色砂質土に炭化物・土丹粒を少量含んだ縮まりのないもの。

かわらけ溜り4 (図10)

E・F-2・3グリットに位置し、建物1にあたる面上の広範囲にわたって、大小のかわらけなどを中心に確認された遺物群である。上記のような土壌に伴う廃棄とは異なったもので、かわらけ溜りは本建物床下の底面に限られた拡がりをみせている事実は非常に興味深い。

市内遺跡の調査において、方形竪穴建物や板壁建物（掘立柱建物）などの建物が機能を失った後にゴミ捨て穴（場）として廃棄された遺物が建物内からまとまった形で出土する例を認めることができ、その際は遺物が覆土中の全体から散乱した状況で発見されるのが一般的である。これに対して、本址は建物内の底面という一定範囲の面上から完形品や大形破片のかわらけを主体に何らかの意味を持って廃棄されたものと思われる。若宮大路周辺遺跡群（小町1丁目-325地点・秋月医院跡地、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10：第3分冊』1994所収）で検出した方形竪穴には、覆土の最上層に建物廃棄と関連して形成された例、底面直上に他遺物と共に「鉢」が置かれたもの（2例有り）や土台材の直上にかわらけが2個据えられたものがみられた。また、公方屋敷跡（淨明寺3丁目-143-2地点、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10：第1分冊』1994所収）の板壁を残す掘立柱建物内底面から多量のかわらけを含む遺物がみられたことなど、これまで市内で検出した建物の中には遺物の特異な出土状況を示す事例がある。このことから、本例も棟上式や落成式などの建築に際しての祭祀、もしくは建物の廃棄に関わる呪術的

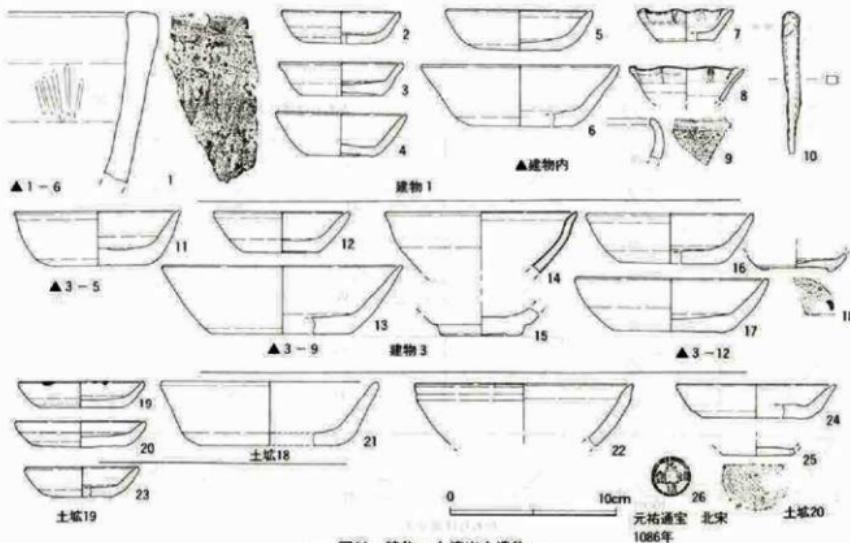


図11 建物・土壤出土遺物

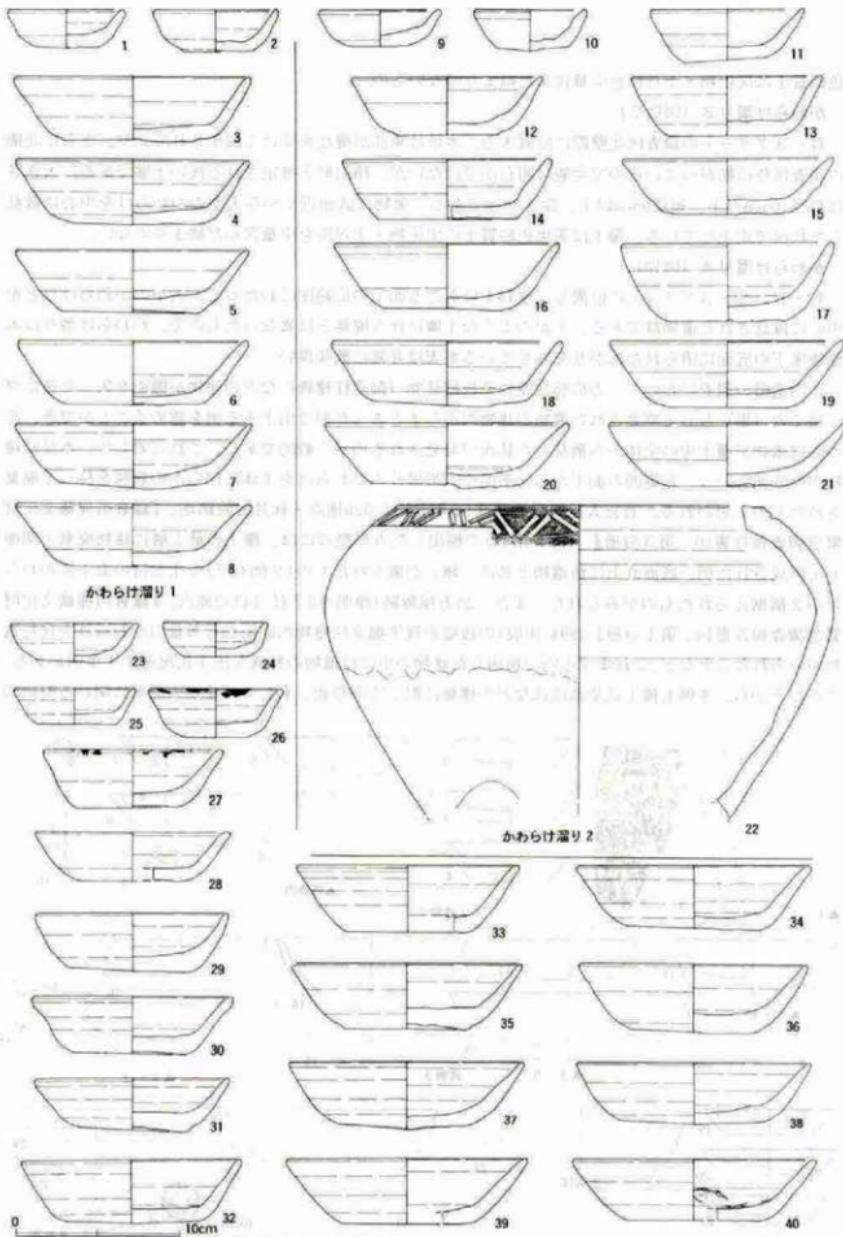


図12 かわらけ瀬り1～3出土遺物

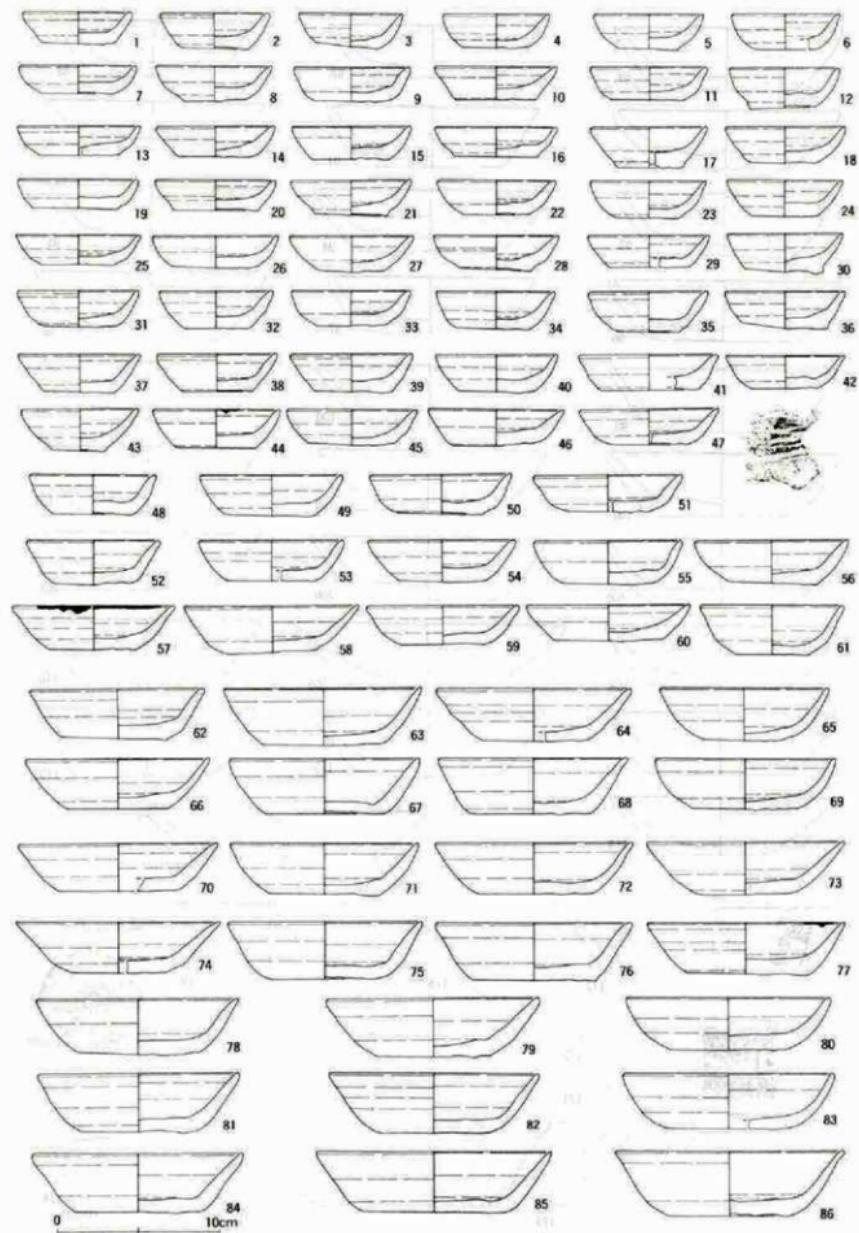


図13 かわらけ溜り4出土遺物(1)

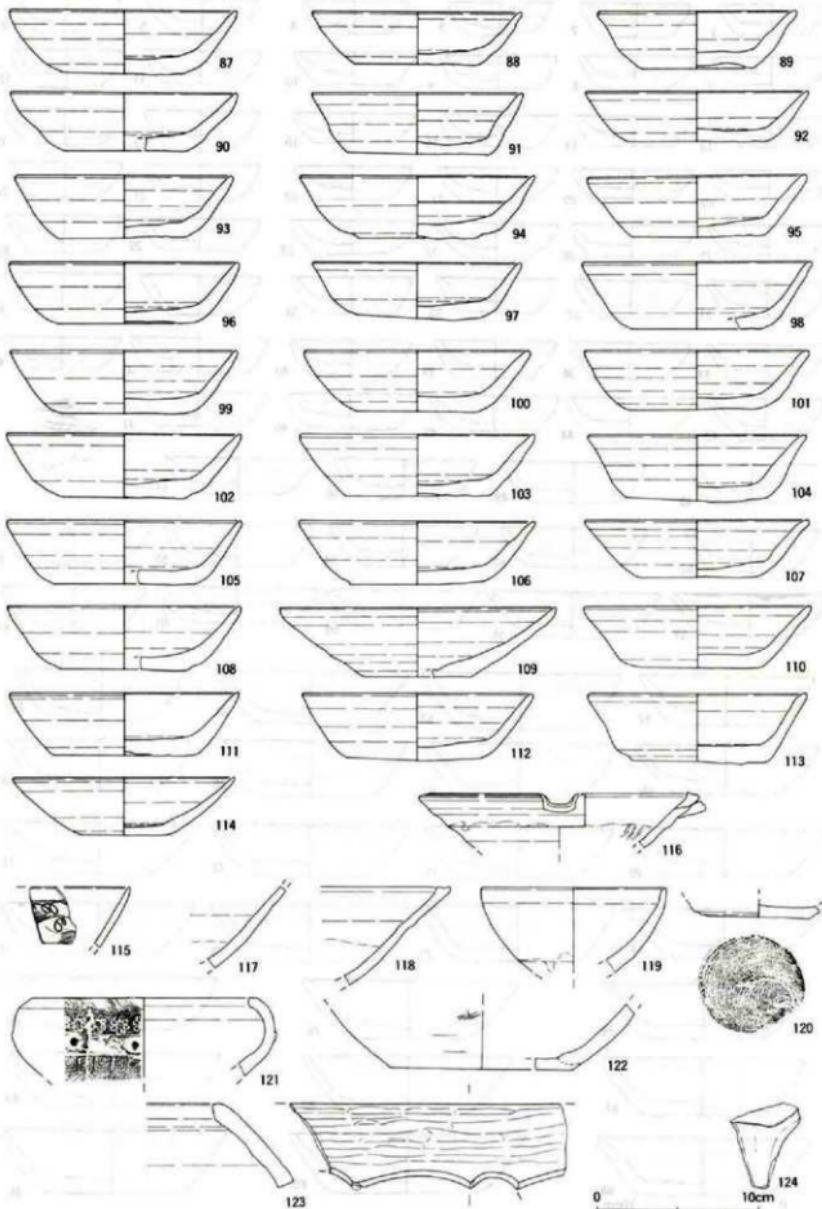


図14 かわらけ溜り4出土遺物（2）

ものではないかと考えたい。

この他の遺構としては建物2に壊される溝と、その南側の位置で東西方向に45cm間隔で小ピット7口の柱穴列（目隠し堀か）が検出された。

b. 出土遺物（図11～16・図版12）

建物1（図11）：1は瓦質手焙り、外面の器表に磨きを施した後、口縁下に菊花文スタンプを押印する。2～4は小型クロ成形かわらけ、体部が直線的なもので口縁部が外反するものもみられる（掘り方6）。

建物3：かわらけはいずれもロクロ成形、14が鉄釉天目茶碗・15が灰釉平碗・18は糸切底の入子で瀬戸窯の製品である。11は掘り方5、12～15が掘り方9、16～18が掘り方12からそれぞれ出土した。

土壤18・19・20：かわらけはすべてロクロ成形である。22・25は天目茶碗と入子で瀬戸窯製品、26は糸の「元祐通宝」である。

かわらけ溜り1：すべてロクロ成形のかわらけで、器形は口縁部にかけて外反傾向をもつ、やや腰高なものである。1・2は口径7.3cm程のやや厚手で深めの小皿、3～8が口径14cm前後の大皿である。

かわらけ溜り2：かわらけはいずれもロクロ成形で側面が口縁にかけて外反傾向をもつ。9・10は口径7cm程の小皿、11～13が口径9.3～11.4cmで中型品、14～21が口径13～14.5cmで大皿の器形である。22は瓦器質に近い土風炉である。器表は磨かれ滑らかになり、口縁部の凹線間に押印文を有する。

かわらけ溜り3：すべてロクロ成形のかわらけ、口縁部にかけて外反傾向の器形である。口径は23～26が6.5～7.9cmの小皿、27～31が10.7～11.9cmの中皿、32～40が13.4～14.6cmの大皿と、大小のとり合わせが認められた。26・27は口縁部に煤が付着しており燈明皿に使用したものであり、40の内底面には刷毛目を残す黒漆が付着している。

かわらけ溜り4：図13・14-1～114は糸切底のロクロ成形のかわらけである。1～61の小型品は口径6.5～8.8cm程で体部が内湾気味のものと、外反傾向の立ち上がりを呈す一群がみられた。62～77が中型の一群で口径10.5～11.8cm前後の製品で口縁部が外反気味になる。78～114は大型品でこのうち、109以外は口径13.4～14.5cmで、器形は口縁部が直線的かまたは外反傾向の立ち上がりをみせる。109・114は口径に比べ底径が小さく（両者はそれぞれ口径が16.7cm・13.6cmと底径が6.5cm・5.2cm）、体部外面に強いロクロ目痕を残した開いた器形が特徴的なものであり、胎土に長石・砂粒を多く含み鎌倉特有のかわらけとは異質なものであった。115が白磁碗で内面に劃花文、116～118が常滑窯の捏鉢、119・120が瀬戸窯系の天目茶碗と入子、121～124が瓦質製品の小型香炉・火鉢・土風炉などである。

1面上・包含層：図15・16-1～38はロクロ成形のかわらけで殆んどが口縁部が外反傾向、1～20が口径5.7～8.5cmの小皿、21・22・35が口径10.8～11.8cmの中皿、23～37が口径12.8～14.4cmの大皿に大別される。38は口径16.7cmと特大のタイプであり、1～3・6は口径が6cmにも満たない小型品である。36～38は口径に比べ底径が小さく、体部外面に強いロクロ目痕を残した開いた器形が特徴的なものであり、胎土に長石・砂粒を多く含んだ特殊なかわらけである。9・19・25は口縁部に煤が付着した燈明皿である。

39～43は舶載陶磁器で青磁の折縁盤と外面口縁部に雷文帶をもつ香炉、白磁の水注と白色の陶器質の胎土に黄色味乳白色の釉をもつ端反りした小碗、さらに口元皿がみられた。44～50が瀬戸窯系の天目茶碗・灰釉平碗・折縁盤・輪花入子があり、51が常滑窯の蓋口縁部である。52～57は瓦質・瓦器質製品の香炉・土風炉・燈明具・火鉢などである。60・61は女瓦で61の凸面に叩きによる「大」の裏文字がみられる。63～67は石製品の硯・碁石・火打石、68～74は金属製品の錢・釘であり、錢は北宋錢の「皇宋通宝」・「熙寧元宝」・「紹聖元宝」である。

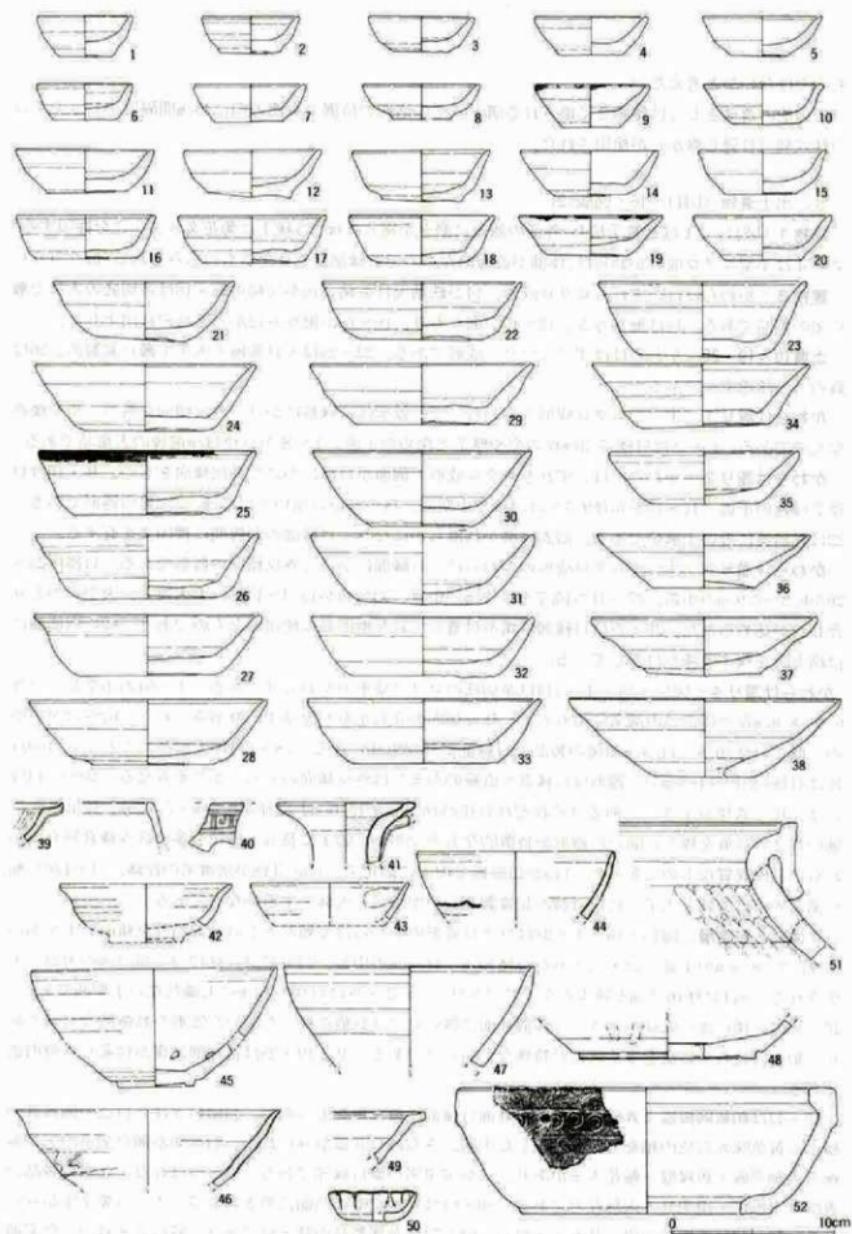


图15 1面上出土遗物(1)

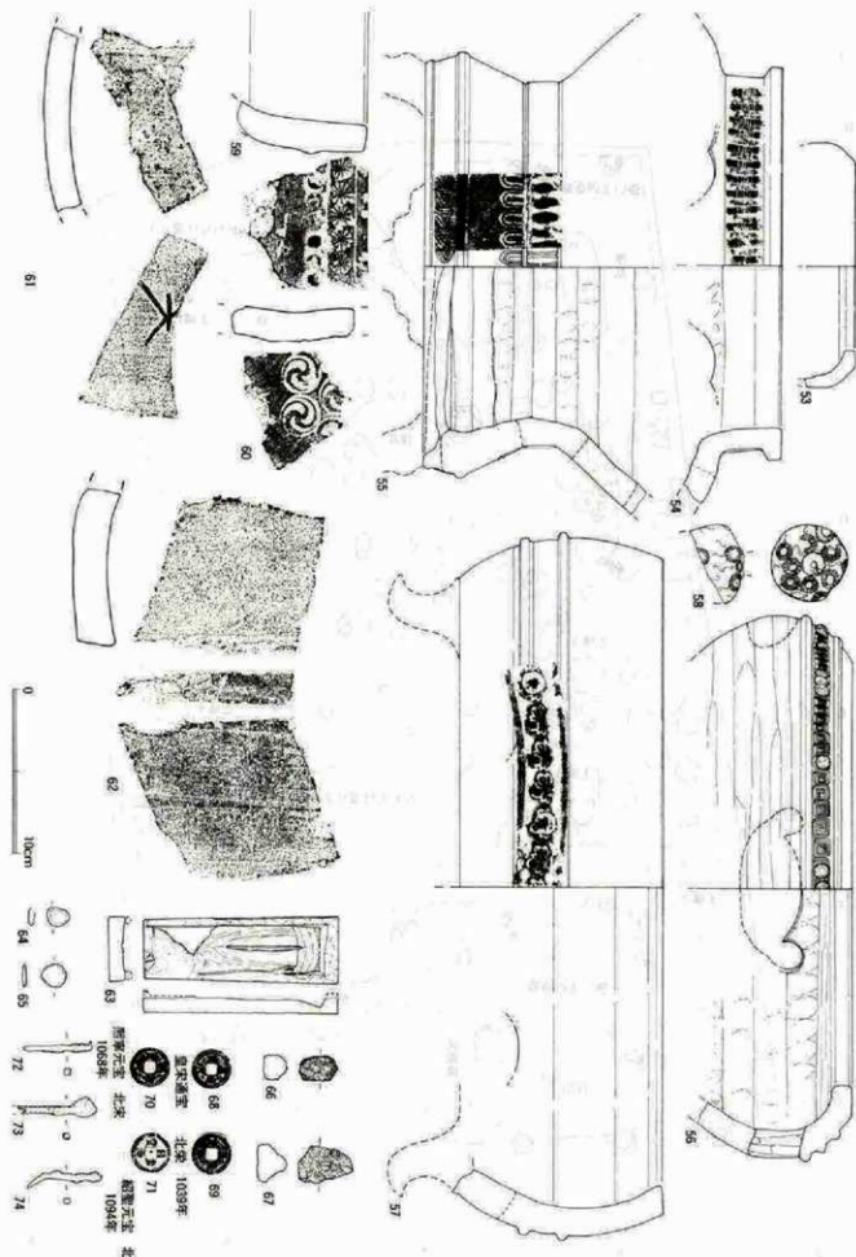


图16-1面上出土遗物(2)

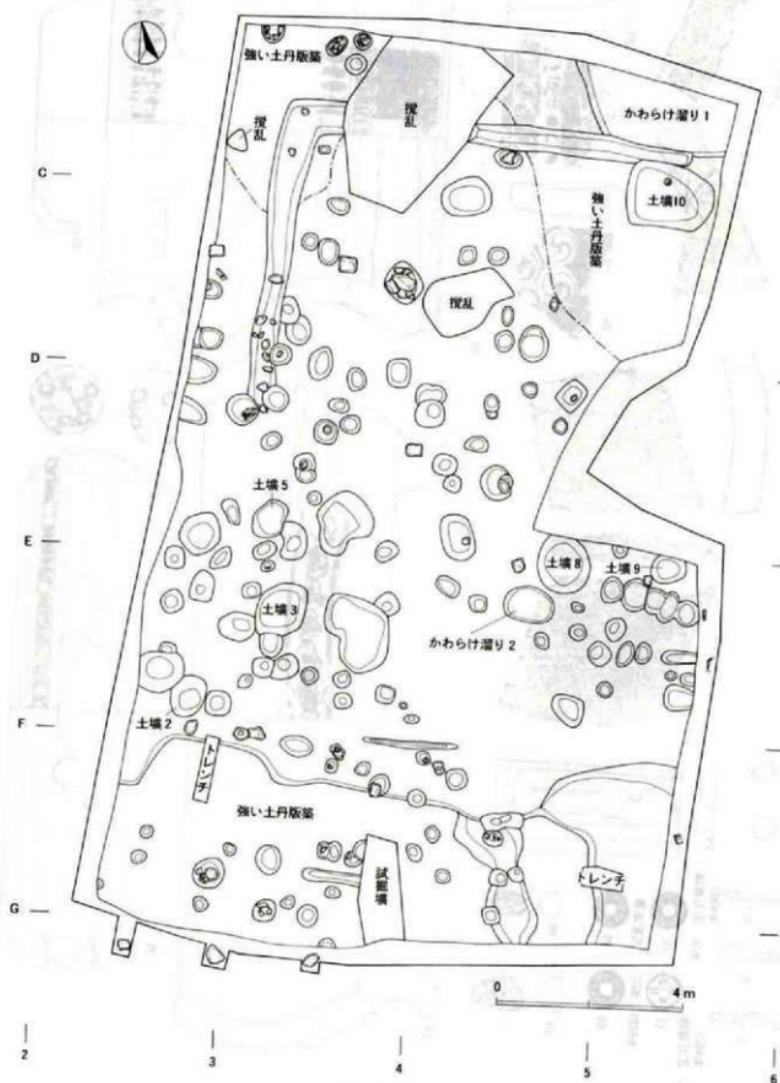


図17 第2面全測図

2. 第2面の遺構・遺物

現地表下約130cm、海拔高13.9~14.0m前後で大小土丹塊による地業層の生活面を検出したのが第2面である。この生活面で検出した遺構は、礎石建物の可能性の高い石列2基、土壙16基、溝1条、かわらけ窓り2ヶ所、柱穴約100口などである。出土遺物は多量のかわらけの他、青磁碗皿や白磁皿・四耳壺、青白磁皿・梅瓶・水注・合子、綠釉鉄絵壺（磁州窯系）や綠釉・二彩盤（泉州窯系）などの舶載陶磁器、瀬戸窯製品の天目茶碗・灰釉平碗・折縁盤・水注・入子など、常滑窯の甕・捏鉢・瓦や瓦質火鉢・土風炉・鏡や錢、水晶原石や砥石などである。

a. 検出遺構（図17~21、図版1・2）

礎石列1（図18）

グリット：調査区南西に位置し、F-2~4でFラインに隣接する。確認標高：13.9~14.0m前後

主軸方位：W-20° 00' - E

柱間規模：東西2間半=540cm

石列概要：この礎石列は現状で東西2間半が確認されたものである。柱間寸法は、西端に位置する礎石1からみると、礎石1~2の柱間が105cm・礎石2~3の柱間が225cm・礎石3~4の柱間が210cmとそれぞれの柱間距離を測ることができる。礎石に使用された石材はすべて伊豆石、径30~40cmの不整円形で、厚さ12cm前後の偏平な河原石を用いており、礎石2~4の上面には角柱を示す柱当たりの痕跡を残していたが、角柱は柱当たりの痕跡から幅9cm程のものと推定される。

礎石列を境にした南側の面は、北側に比べて破碎した大小土丹塊によって厚い強固な地業が施されており、当初はこの堅牢な地業範囲が基壇状の施設の可能性も考えられ、礎石列は危腹基壇の外縁を巡る縁東の礎石の可能性も予想されたので上面を精査して掘り方の確認に努めたが、上面は後世に削平を受けているのか礎石や掘り方などの遺構を検出すことはできなかった。

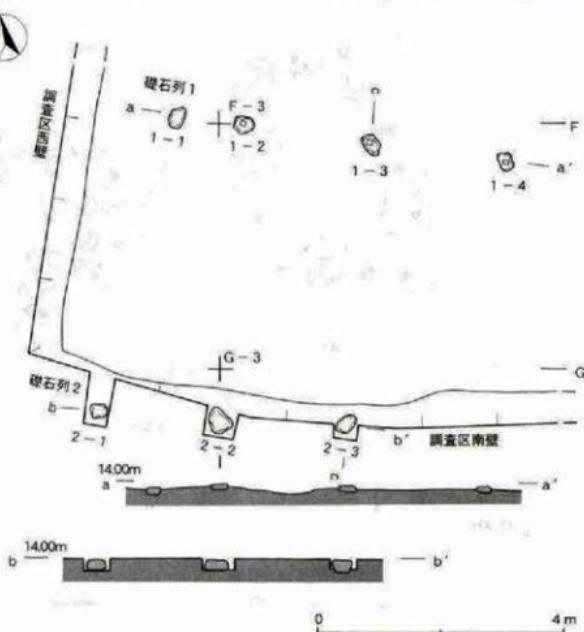


図18 2面 級石列1・2

礎石列2 (図18)

対象・周辺の面と裏

グリット：調査区南端西寄りに位置し、G-2・3で全長約10m、幅約2mの南北向の構造物。確認標高：14.0m前後。主軸方位：W-15° 00' - E。柱間寸法：東西2間=396cm。柱間規模：東西2間=396cm。

石列概要：この礎石列は、現状で東西方向の2間分が検出されたものであるが、当初は礎石3が調査区南壁から半分ほど顔を出していたに過ぎなかった。礎石列1に連関する建物を構成した礎石と予想されたので調査区壁をボーリング棒で探査したところニカ所に石の当たりが確認された。そこで礎石3も含めて全容を把握する目的で拡張トレーンチを設定して検出を行なった。柱間寸法は、礎石1～3が各々198cmの柱間距離を測ることができる。礎石に使用された石材はすべて伊豆石で径40～50cmの不整形、厚さ20cm程度で上面が平らなものである。主軸方位は第1面で検出した礎石建物の東西軸の方向と一致している。

かわらけ溜り1 (図19)

調査区北東隅に位置しており、溝1により南壁の一部が壊され、北側と東側が調査区外に拡がっているため全貌は明らかではない。かわらけ溜りは大型の土壌状の形態を呈した浅い掘り込みをもち、大きさは現状で東西365cm・南北153cm以上、深さ約10cmである。かわらけの出土状態は、底面近くで完形もしくは大型破片を中心に約100個体が確認されている。

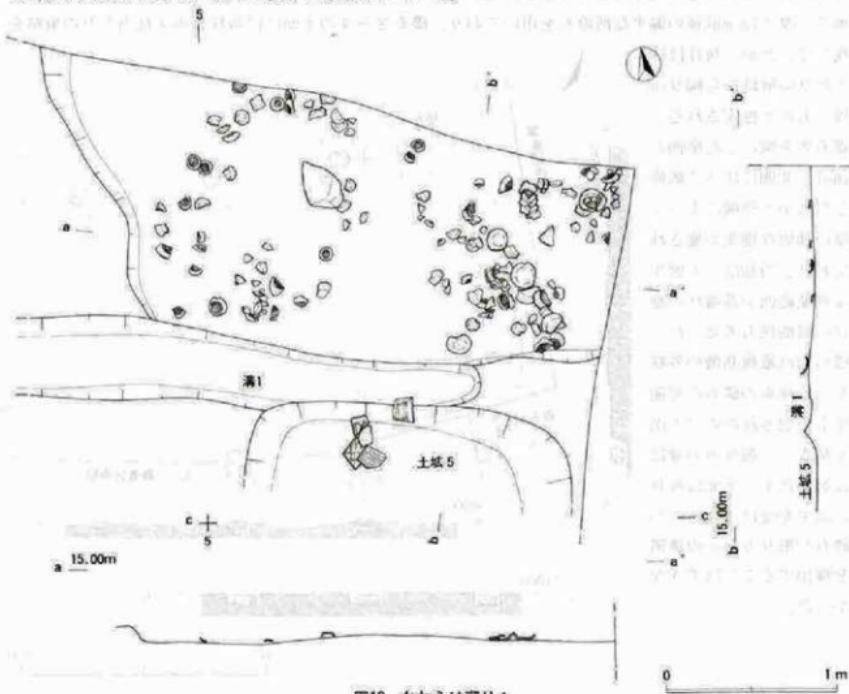


図19 かわらけ溜り1

かわらけ窪り 2 (図20) 調査区中央東寄り、E-5杭の南西位に近接した位置にある。本址は平面形が梢円形の形状を呈し、大きさは長径115cm（東西径）、短径85cm（南北径）、深さ12cm程と浅い摺鉢状の掘り込みをもつ土壤である。土壤内には、2個の大型土丹塊が据えられており、その周りには殆んどのかわらけが上向きで2・3段に重なった状態で70個体程の小形のかわらけが出土した。覆土は褐色砂質土に炭化物を多めに含む締まりのないものである。かわらけ以外の遺物は出土していない。

土壤 2 (図21)

F-3杭の北側に近接した位置にある。形状は梢円形を呈し、大きさは長径90cm、短径75cm、深さ30cmを測り、掘り方が摺鉢状の断面をもつ土壤である。覆土は炭化物・土丹粒・かわらけ粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。

土壤 3 (図21)

E-3グリットに位置する。形状は梢円形を呈し、大きさは長径115cm、短径98cm、深さ30cmを測り、

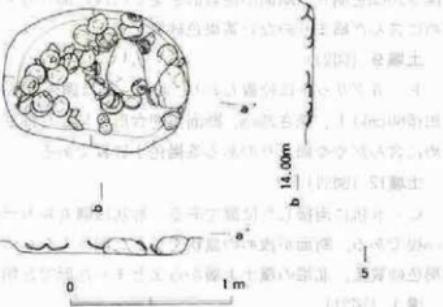


図20 かわらけ窪り 2 (土壤11) 平面形と直観

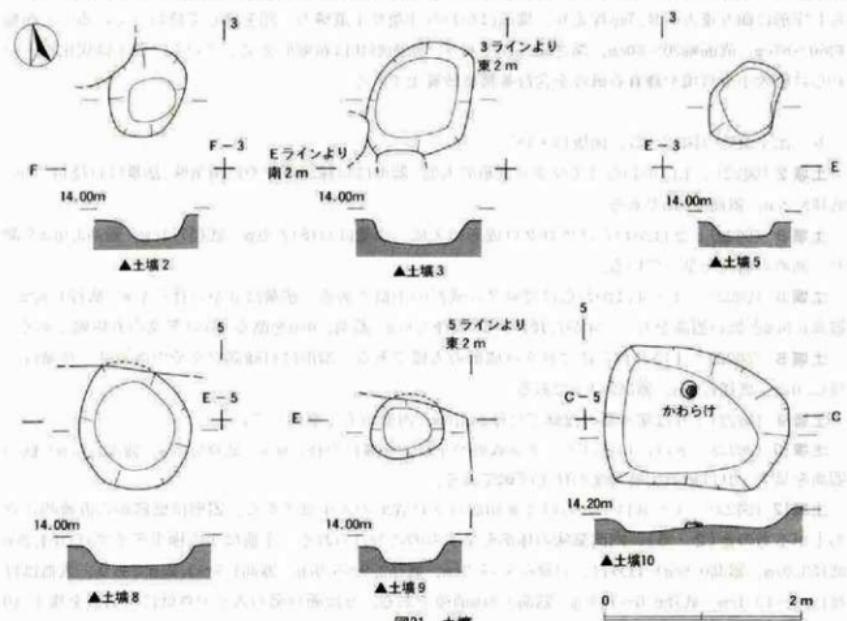


図21 土壌
— 29 —

浅めで断面が逆台形を呈した掘り方を有している。覆土は炭化物・土丹粒・かわらけ粒を少なめに含んだ締まりのない明茶褐色砂質土である。

土壤5 (図21)

E-3杭に近接した位置にある。形状は不整円形を呈し、大きさは長径93cm、短径75cm、深さ18cmと浅い土壌で断面が逆台形を呈する。覆土は炭化物を少量含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。

土壤8 (図21)

E-5杭の西側に近接した位置にあたる。形状は楕円形を呈し、大きさは長径133cm、短径113cm、深さ20cmを測り、断面が逆台形を呈した浅い掘り方をもつ。覆土は炭化物・土丹粒・かわらけ粒を少なめに含んだ締まりのない茶褐色砂質土である。

土壤9 (図21)

E-5グリットに位置しており、北側一部は調査区外である。形状は楕円形を呈し、大きさは長径75cm、短径60cm以上、深さ25cm、断面が逆台形を呈した掘り方をもつ土壌である。覆土は炭化物・土丹粒を多めに含んだやや締まりのある茶褐色土砂質である。

土壤12 (図21)

C-5杭に南接した位置である。形状は開丸長方形を呈し、大きさは長軸187cm、短軸135cm、深さ20cm程度である。断面が浅めの皿状を呈した掘り方をもつ土壌である。覆土は炭化物・かわらけ粒を含む茶褐色砂質土、北端の覆土上層からまとまった形で瓦類が出土した。

溝1 (図21)

調査区北側のB-D-3~5グリットに位置したL字形を呈する溝である。溝はD-3杭の南1m程の位置から始まって3ラインの東側を沿うように南方に向かって約7m延び、C-D間の中央あたりからL字形に曲り東方へ8.7m程走り、端部はかわらけ溜り1遺構の一部を表して終わっている。上面幅約60~87cm、底面幅30~60cm、深さ50cm程度であり、断面形状は箱堀形を呈している。覆土は炭化物・かわらけ粒大小土丹塊や鎌倉石破片を含む茶褐色砂質土である。

b. 出土遺物 (図22~27、図版13・18)

土壤2 (図22): 1はかわらけでロクロ成形の大皿、器形は口縁部がやや内湾気味、法量は口径14.4cm、底径8.2cm、器高3.0cmである。

土壤3 (図22): 2はかわらけでロクロ成形の大皿、法量は口径12.2cm、底径7.1cm、器高3.9cmを測り、高めの器高を呈している。

土壤5 (図22): 3・4はかわらけでロクロ成形の小皿である。法量は3が口径7.3cm、底径4.8cm、器高1.5cmと低い器高をもつ、4が口径7.3cm、底径3.8cm、器高2.0cmを測る。5は無文の青磁碗である。

土壤8 (図22): 1はかわらけでロクロ成形の大皿である。器形は口縁部がやや内湾気味、法量は口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.3cmである。

土壤9 (図22): 9は常滑窯の捏鉢で口径33.1cm、内面がよく摩耗している。

土壤10 (図22): 8はかわらけでロクロ成形の小皿、法量は口径7.9cm、底径5.2cm、器高1.5cmと低い器高を呈す。9は砥石で鳴滝産の仕上げ砥である。

土壤12 (図23): 1~8はかわらけで糸切底ロクロ成形の大小皿である。器形は底部から直線的に立ち上がるるものと(2・6)、内湾気味の体部を呈すものに分けられる。小皿は1の極小タイプ(口径4.2cm、底径3.0cm、器高0.8cm)以外は、口径6.5~7.3cm、底径3.9~5.0cm、器高1.5~1.8cmであり、大皿は口径12.1~13.1cm、底径6.6~7.8cm、器高3.4cm前後である。9は瀬戸窯の入子で外底に糸切痕を残す。10

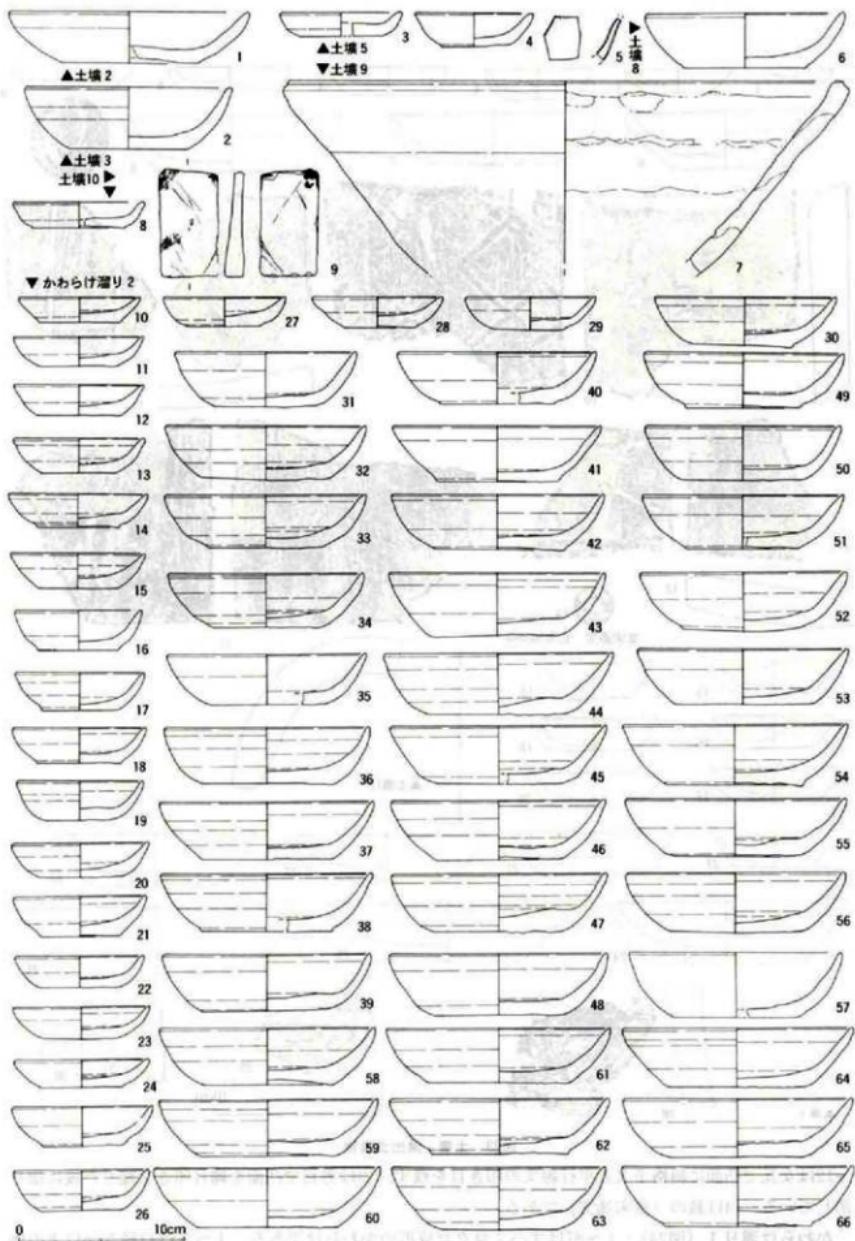


図22 土壙・かわらけ灌り2出土遺物

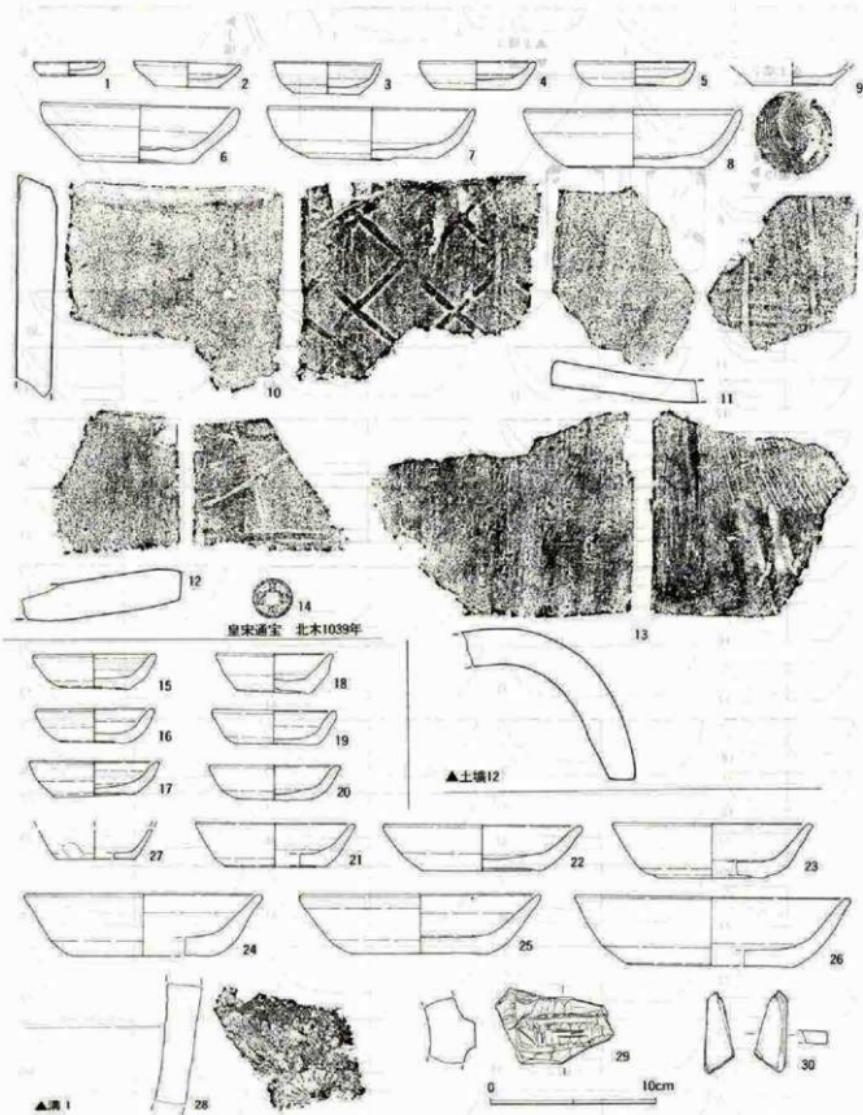


図23 土壌・溝出土遺物

～12は女瓦で凸面に斜格子文と平行線文の叩き目を残す。13は男瓦で凸面を縄目叩きを施した後に擦り消している。14は銭の「皇宋通宝」である。

かわらけ溜り1 (図24)：1～87はすべてロクロ成形のかわらけである。1～3は口径5cm以下の極小なタイプであり、4～54は口径7.3～7.9cmの小皿、55～70は口径10.3～11.8cmの中皿、71～87は大皿

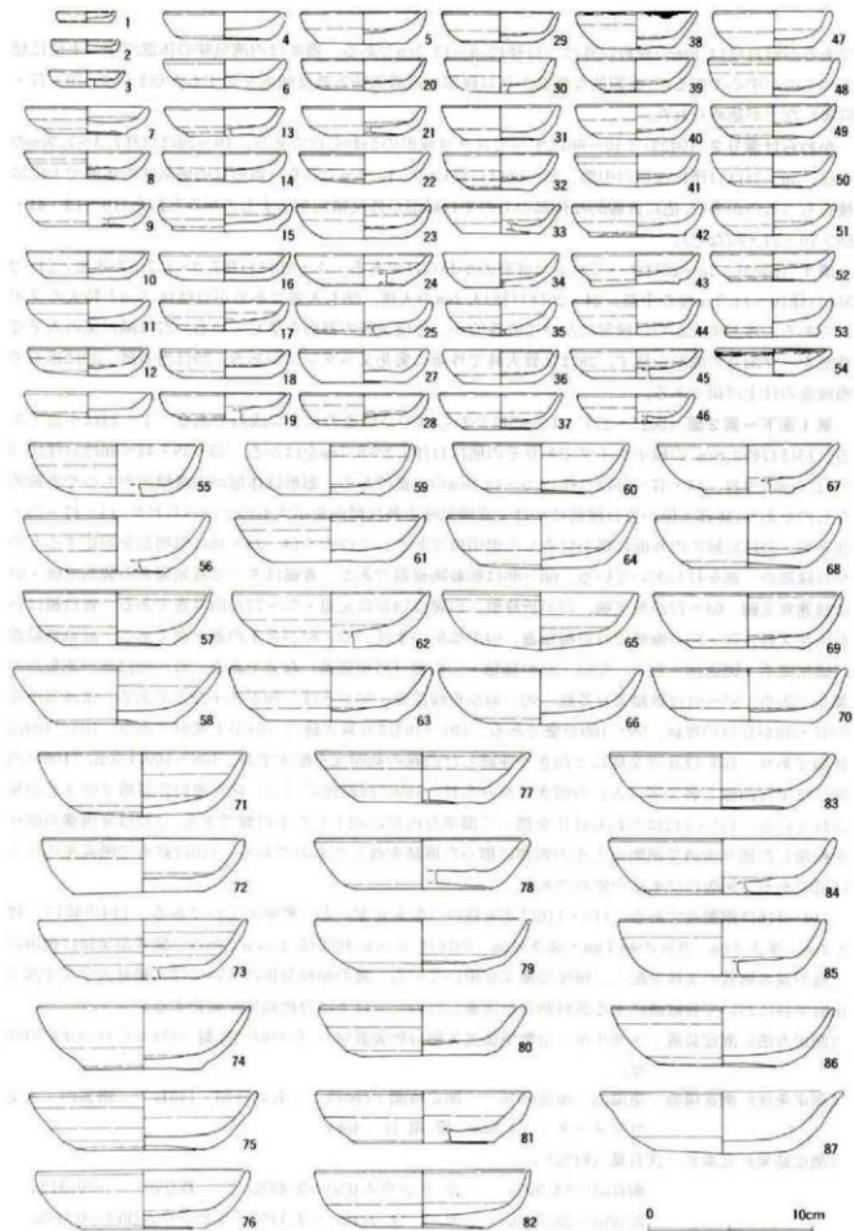


図24 かわらけ籠り 1

であるが87口径14.5cmの資料以外は、口径12.5~13.3cmである。器形は内湾気味の体部で中~上位に稜もつものが中心であるが、直線的な体部から口縁部が直線気味と外反傾向を示すもの(54・58・70・77・87等)などが認められた。

かわらけ溜り2 (図22) : 10~66はすべてロクロ成形のかわらけである。10~29は口径7.3~7.9cmの小皿、30・31は口径11cm程の中皿、32~66は口径12.0~13.8cmである。器形は内湾気味の体部で上位に稜をもつものが多い。他に直線的な体部のものや口縁部が外反傾向を示すものがみられた(10~13・41・58・70・77・87など)。

溝1 (図23) : 15~26はすべてロクロ成形のかわらけである。1~20は口径7.3~7.7cmの小皿、21~23は口径10~11.7cm程の中皿、24・25は口径14.2cmの大皿、26も大皿であるが口径16.5cmと特大のタイプである。体部中位から口縁部にかけて直線的か、外反気味の器形を呈している。27は瀬戸窯の入子で外底をヘラ削りの成形を施す。28は瓦質火鉢で外面に菊花文スタンプがある。29は滑石鍋、30は砥石で鳴滝産の仕上げ砥である。

第1面下~第2面 (図25~27) : 1~65はかわらけで糸切底のロクロ成形である。1~34は小皿である。13は口径3.8cmの極小タイプでありその他は口径6.2~8.7cmをはかる。35~39・41~46は口径10.7~11.8cmの中皿、40・47~65は口径12.5~13.9cmの大皿である。器形は体部が内湾傾向のものや直線的なものがあり、体部上位から口縁部にかけて直線気味と外反傾向を示すものとがみられた。14・17・23・26・32・38は口縁の内外面に煤が付着した墨明皿であり、この中で14・23・38は燈明芯を固定するものか口縁部の一部を打ち欠いている。66~86は船載陶磁器である。青磁はすべて龍泉窯系の製品で66・67は鐵蓮弁文碗、68~72が無文碗、73が折縁盤、白磁は74が口元皿・75~77が四耳壺である。青白磁は78が印花文皿、79・80が梅瓶で81が梅瓶蓋、84が瓜形の水注、82・83が合子の蓋と身である。綠釉鉄絵壺 (磁州窯系、図版18~右下) や85・86が綠釉・二彩盤 (泉州窯系) などである。87~96は瀬戸窯製品の製品である。87~91は鉄釉天目茶碗、92~94が折縁深皿、95が水注、96が入子などである。常滑窯所産の97・98が片口の捏鉢、99・100が壺である。101~103は瓦質火鉢で104が土風炉である。105~109は瓦類であり、105は瓦当文様に下向きで連続した凸線の劍頭文を配す宇瓦、106~109は女瓦で106の凸面には平行凸線と裏文字「大」の叩き目がみられ、109には縱位に「×」状を連ねた斜格子叩き目が施されている。111・112はかわらけ片を摺って偏平な円形に加工した小円盤である。113は常滑壺の破片を転用した摺り常滑で破断面とその周囲に摺った痕跡を残したものである。110は砥石で鳴滝産の仕上げ砥である。図版12は水晶の原石である。

114~116は銅製品である。115・116は北宋錢の「聖宋元宝」と「熙寧元宝」である。114の鏡は、径9.2cm、厚さ3mm、外区の幅7mm・高さ8mm、内区径6.3cm、紐座径1.8cmである。鏡背面文様は洲浜に千鳥が飛ぶ風景の文様を配し、紐座は亀文を用いている。鏡の原料分析については、鶴見大学文学部文化財学科において非破壊による試料測定を実施したので、以下に分析結果を報告する。

《測定方法》測定装置: エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーアイシクル社製 マイクロレントモニSEA-5120型)

《測定条件》測定環境: 室温23° 濡度60% 測定時間: 200秒 有効時間: 146秒 機器内: 大気
コリメータ: φ1.8mm 管電圧: 45kV

《測定結果》元素名=含有量(wt%) :

銅(Cu)=54.90%	カルシウム(Ca)=3.43%	鉄(Fe)=0.31%
鉛(Pb)=25.59%	カリウム(k)=3.11%	ルビジウム(Rb)=0.05%
錫(Sn)=10.42%	チタリウム(Tl)=2.19%	計=100%

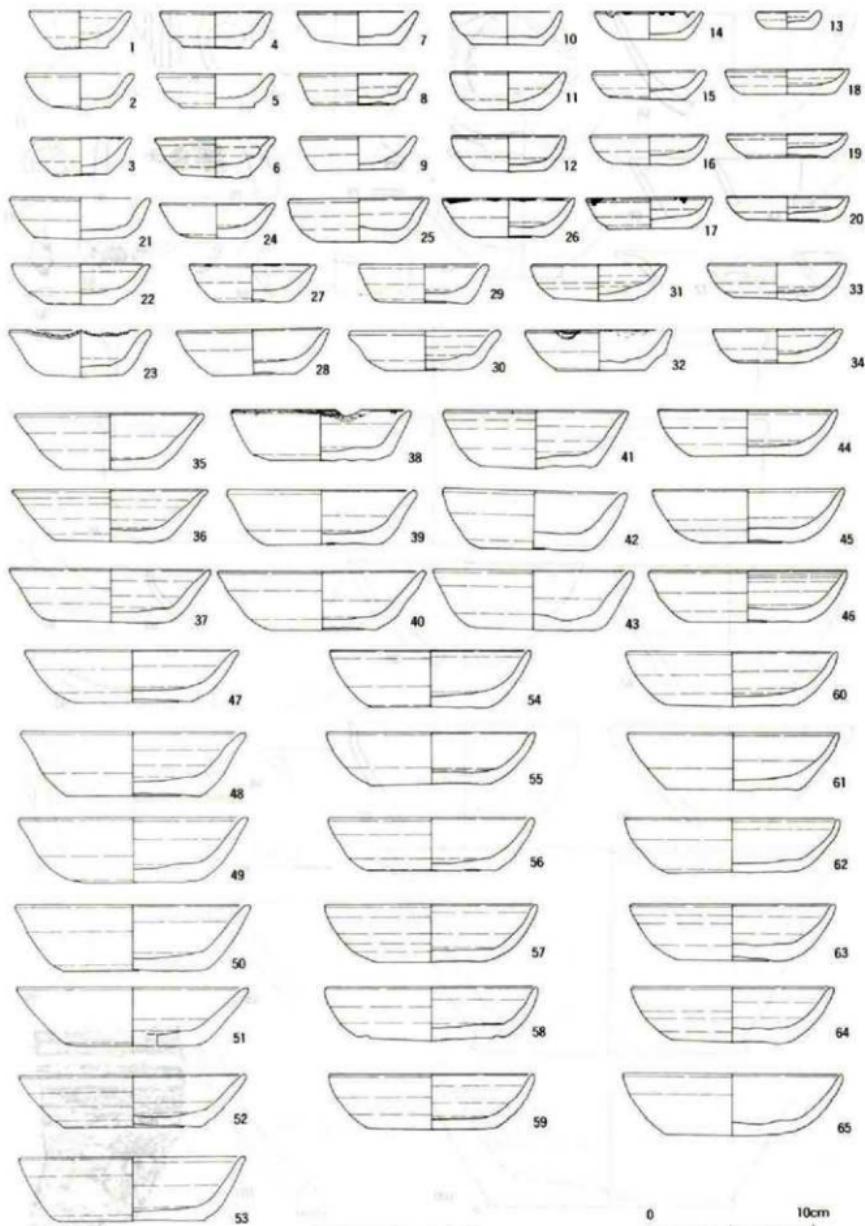


図25 1面下～2面出土遺物（1）

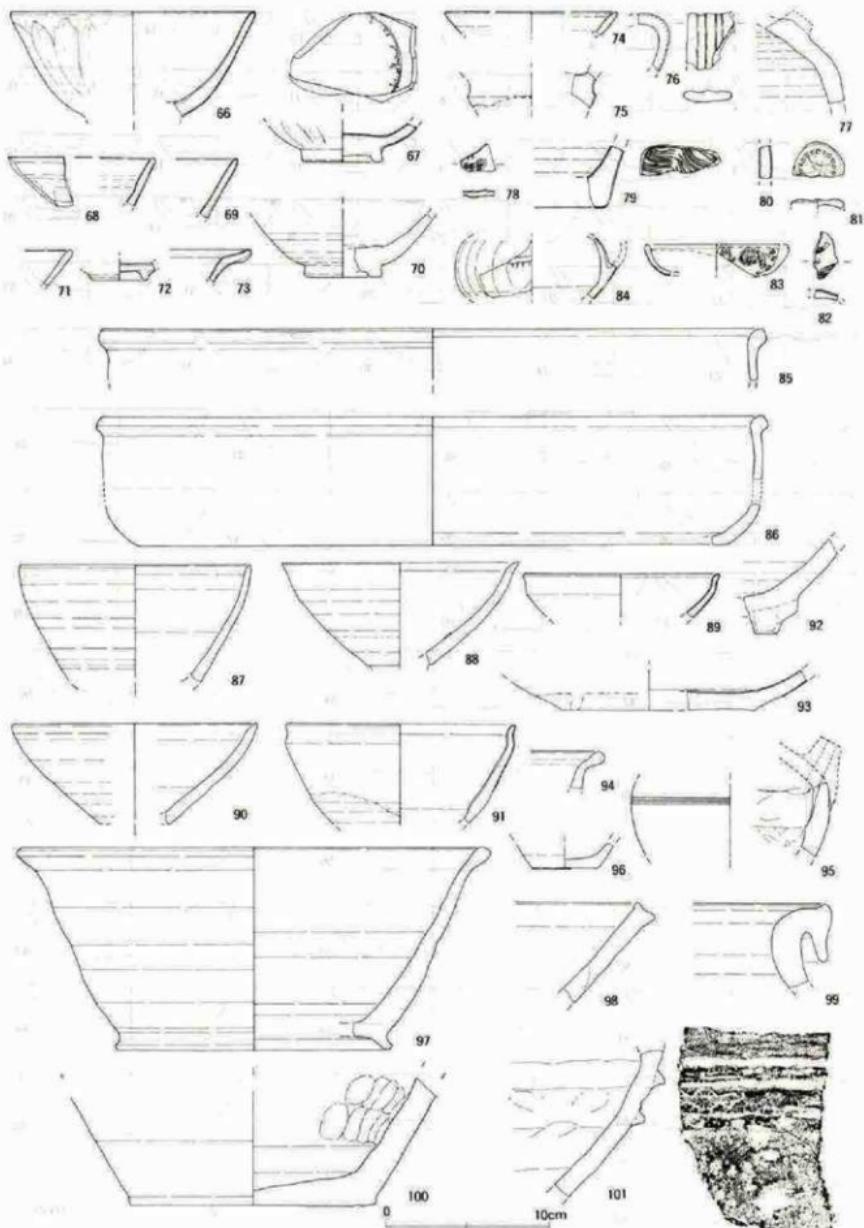


図26 第1面下～2面出土遺物（2）

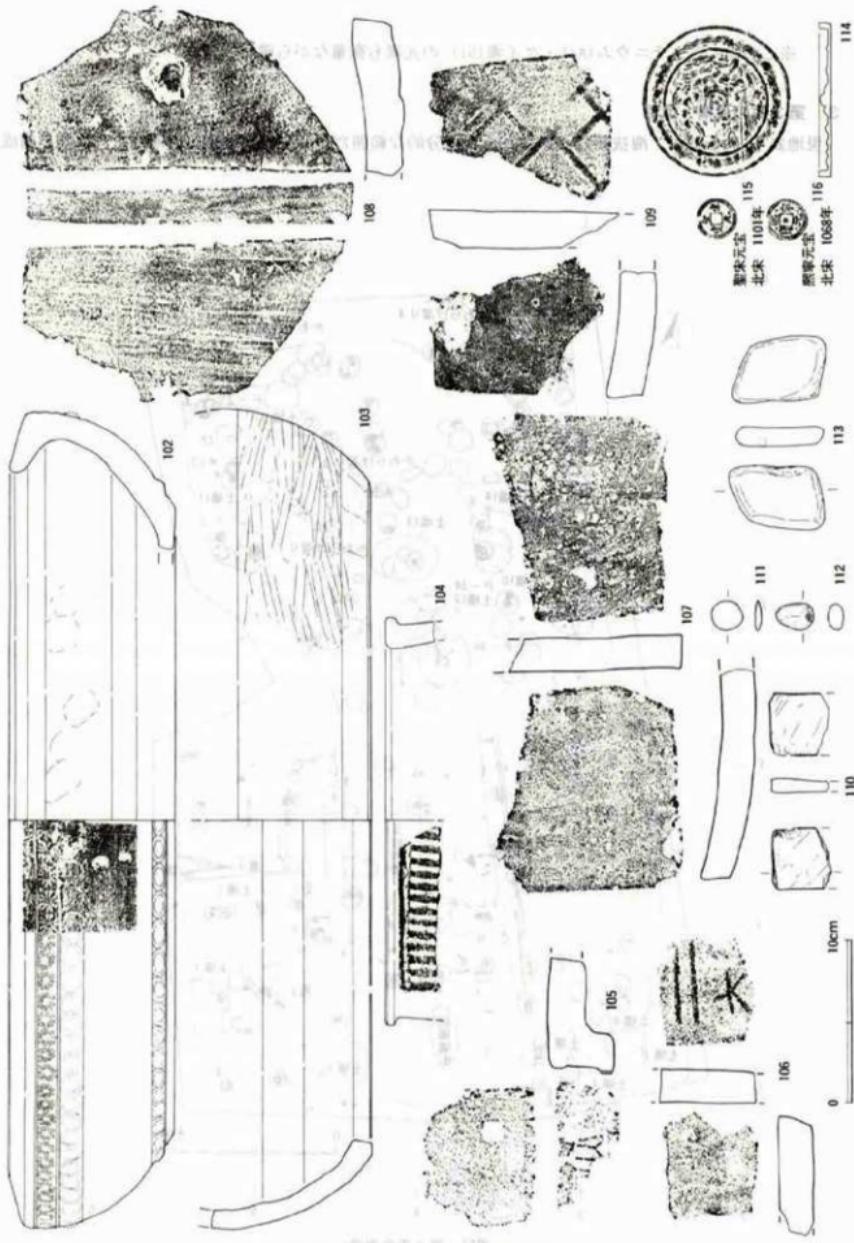


圖27 第1面下~2面出土遺物（3）

※この他、アクチニウム(Ac)・ケイ素(Si)の元素も微量ながら確認された。

3. 第3面の造構・遺物

現地表下170cm前後、海拔高13.5~13.8mで部分的な範囲だが砂利・貝砂層と、薄い土丹版塀で構成

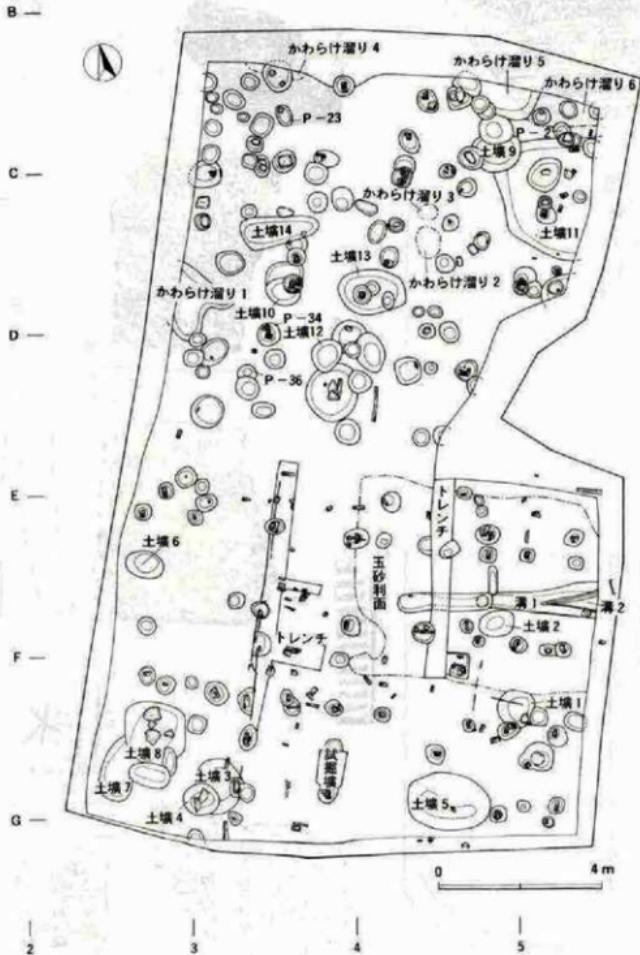


図28 第3面全測図

される生活面である。この面で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土壙20基、かわらけ溜り5ヶ所、溝1条、柱穴約100口などである。主な遺物には、多量のかわらけをはじめ、舶載陶磁器が青磁碗皿・白磁皿・泉州窯系盤、国産品が瀬戸窯四耳壺・折縁深皿・入子等、常滑窯壺・片口鉢・壺、楠葉型瓦器、火鉢、瓦類、滑石鍋・砥石、金属製品などが出土している。

a. 検出遺構（図28～32、図版5・6）

建物1（図29）

グリット：調査区南側の東寄りに位置し、E～G-3～5

確認標高：13.70m前後

軸方位：N-18° 00' - E

柱間規模：東西3間半×南北3間

建物概要：建物の形態は板壁をもつ掘立柱建物であるが、現状で東西3間半と南北3間が確認されており、南・東側は調査区外へ延びる可能性もあり、建物の構造的に全体像が判然としない部分もある。確認規模は、東西7.52m・南北6.30m以上である。柱間寸法は東西位をみると、a列が柱穴6口（柱穴

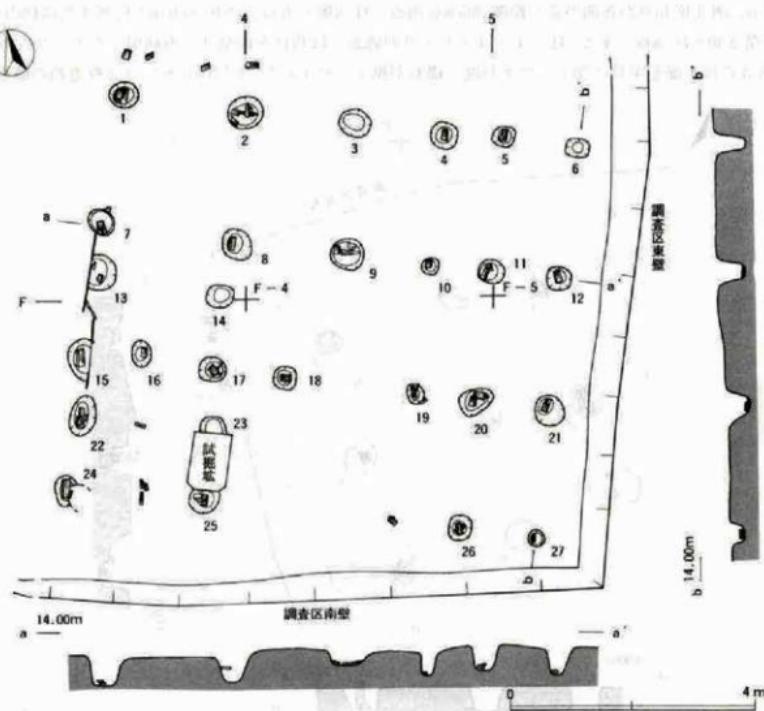


図29 建物1

(7~12) で西から210cm・175cm・145cm・98cm・120cm、柱穴15~21列の7口が90cm・120cm・115cm・205cm・98cm・120cmでa列と比べると2間目の位置に柱穴がなく、柱穴17両側の短い距離に柱穴が認められた。また柱穴22・23間と柱穴24・25間の礎板は床束を受けたものと考えられる。南北位をみると、b列が柱穴4口(柱穴7~12)で各間の芯々距離210cmを測り、西側2列の北から2・3間目の間だけに柱穴が認められ、距離は柱穴15両側でそれぞれ115cmの距離に位置しており、その間に板壁の一部にあたる横板材が残っていた。柱穴掘り方は円形または楕円形を呈した径35~65cmで、深さ30~50cm程である。殆んどの柱穴底面には1~3枚の礎板が敷かれており、柱穴25には2枚重ねの礎板上に幅15×9cmの角柱が残っていた。

建物2 (図30)

グリット：調査区北側の東寄りに位置し、B-C-4・5

確認標高：13.70m前後

軸方位：N-27°00' - E

柱間規模：調査区内東西2間×南北2間以上

建物概要：建物1より東に振れた掘立柱建物である。調査区内で東西2間=360cm、南北2間=376cmが確認され、北・東側は調査区外に拡がる可能性がある。柱間寸法は東西位a列が各間の芯々距離180cm、南北位b列が各間の芯々距離186cmを測る。柱穴掘り方は、径40~60cmの円形または楕円形を呈し、深さ30~50cm程である。柱穴1・4・6・9の底面には角柱を縱割りし再利用した1~3枚の礎板、柱穴3には上面を平らに加工した土丹塊の礎石が据えられていた。また柱穴6には2枚重ねの礎板上(下

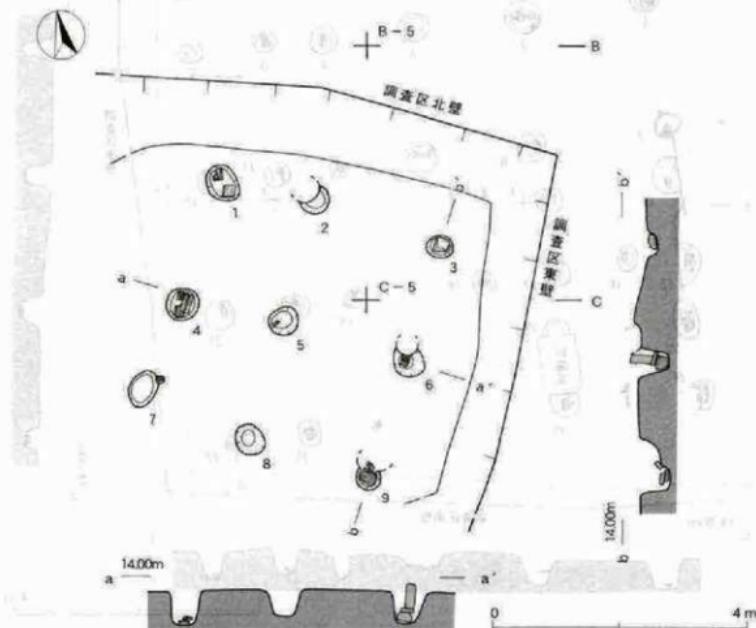


図30 3面 建物2

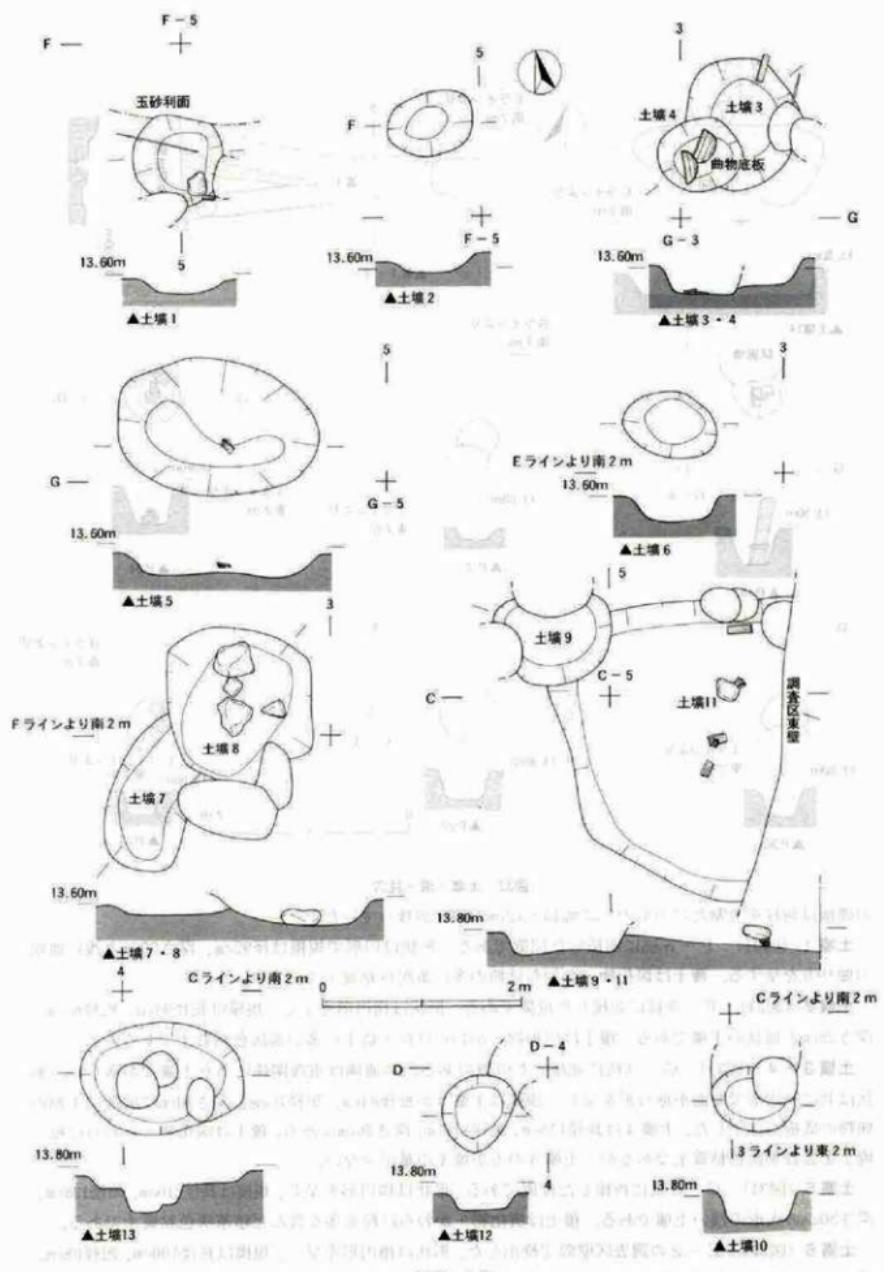


図31 土壌

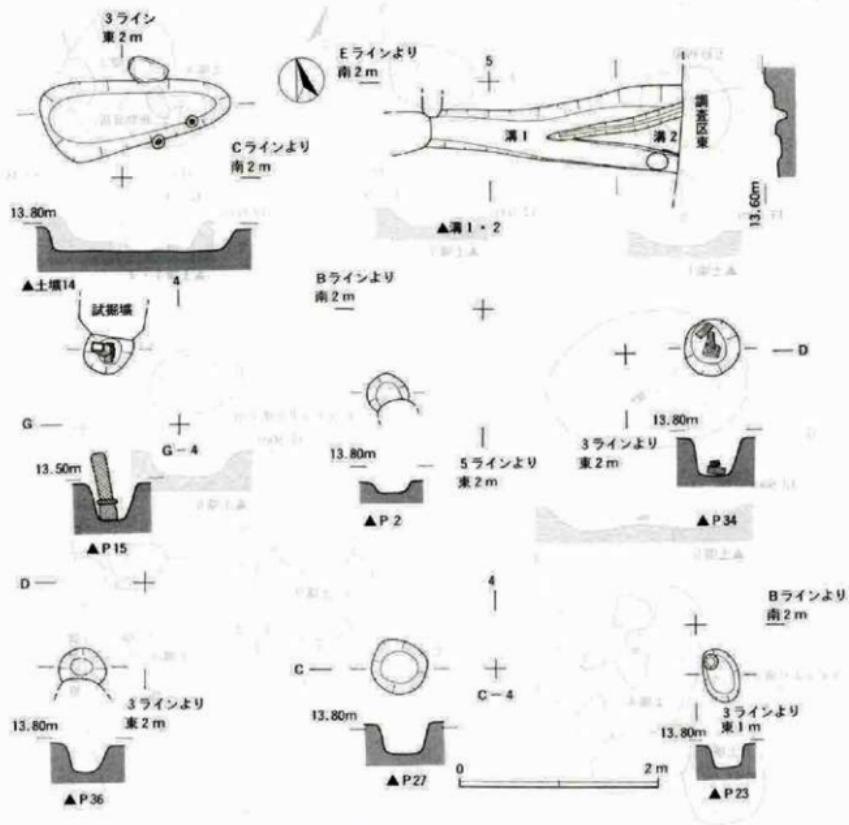


図32 土壌・溝・柱穴

の礎板は角柱を分割だけのもの)に幅15×12cmの角柱が残っていた。

土壤1 (図31) : F-5杭に南接した位置である。形状は円形で規模は径92cm、深さ20cmと浅い皿状の掘り方を呈する。覆土は炭化物・かわらけ粒の多い茶灰色粘質土である。

土壤2 (図31) : F-5杭に北接した位置である。形状は梢円形を呈し、規模は長径94cm、短径65cm、深さ25cmと皿状の土壤である。覆土は炭化物・かわらけ粒・焼土の多い茶灰色粘質土である。

土壤3・4 (図31) : G-3杭に北接した位置である。両遺構は重複関係にあり土壤3が新しい。形状は共に梢円形で断面が逆台形を呈し、規模は土壤3が長径84cm、短径75cm、深さ40cmで底面に半割の曲物の底板が出土した。土壤4は長径135cm、短径116cm、深さ30cmである。覆土は炭化物・かわらけ粒・焼土を含む茶灰色粘質土であるが、土壤3の方が焼土の量が少ない。

土壤5 (図31) : G-5杭に西接した位置である。形状は梢円形を呈し、規模は長径210cm、短径128cm、深さ30cmの大形の浅い土壤である。覆土は炭化物・かわらけ粒が多く含んだ暗茶灰色粘質土である。

土壤6 (図31) : E-2の調査区壁際で検出した。形状は梢円形を呈し、規模は長径100cm、短径68cm、深さ30cmで断面逆台形の掘り方をもつ。覆土は炭化物・かわらけ粒の少ない茶灰色粘質土である。

土壤7・8 (図31) : 調査区南西隅に位置し、土壤8が土壤7を壊して掘られていた。形状・規模は土壤7が隅丸長方形で長さ163cm以上、幅85cm、深さ15cm、土壤8は楕円形を呈し底面に大小土丹塊が据えた長径100cm、短径68cm、深さ15cm程の浅い土壤である。覆土は共に炭化物・かわらけ粒を少量含む茶灰色粘質土で、土壤8だけに拳大の土丹塊がまばらに認められた。

土壤9・11 (図31) : C-5杭に位置し、土壤11は土壤9・建物2により一部を壊されている。形状・規模は土壤9が楕円形で長径120cm、短径98cm、深さ25cmを測り、土壤11は不整円形を呈し、長径320cm、短径240cm以上、深さ20cm程で東側が調査区外に拡がる大形の浅い土壤である。覆土は共に炭化物・かわらけ粒・焼土を多めに含む暗茶灰色粘質土で、土壤11の底面近くに薄い炭化物層が認められた。

土壤10 (図31) : C-3グリットで検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長径88cm、短径68cm、深さ45cmで断面逆台形の掘り方をもつ。覆土は炭化物・かわらけ粒の少ない茶灰色粘質土である。

土壤12 (図31) : D-4杭に近接した位置である。形状は楕円形を呈し、規模は長径84cm、短径70cm、深さ20cmの浅い掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ粒を含んだ暗茶灰色粘質土である。

土壤13 (図31) : C-4グリットで土壤10東側に位置する。形状は楕円形を呈しており、長径165cm、短径118cm、深さ15cm程の浅い掘り方をもつ。覆土は炭化物・かわらけ粒を少量含む茶灰色粘質土である。

土壤14 (図32) : C-3グリットで検出した。形状は長楕円形を呈し、規模は長径188cm、短径86cm、深さ25cm、逆台形の断面をもつ土壤である。覆土は炭化物・かわらけ粒の少ない茶灰色粘質土である。

溝1・2 (図32) : E-4・5グリット中央南寄りで玉砂利敷面に位置する東西方向に走る溝で、調査区東方へ延びている。溝1の中央付近に上部を壊される形で溝2を検出した。溝1は長さ2.6m以上、幅50cm、深さ30cm前後で東に向かって広くなった掘り方である。溝2は長さ1.4m、推定上幅30cm、深さ30cmで断面V字形の溝である。

かわらけ溜り1 (図版6) : D-3杭に北接した位置で調査区外西方に拡がっている。不整形の浅い土壤状の上層からかわらけが多量に出土した。規模は南北長210cm、東西長140cm以上、深さ15cmである。

かわらけ溜り2 (図版6) : C-4グリット中央部で建物2内の面上で検出された。かわらけ溜りは南北140cm、東西100cm程の範囲で小破片を主体にして重なった状況でかわらけだけが出土した。

かわらけ溜り3 (図版6) : C-4グリット、建物2内でかわらけ溜り2北側の面上で検出されたかわらけ溜りである。60cm程の大きさの範囲で完形品を中心に出土している。

かわらけ溜り4 (図版6) : B-3グリットに位置し、北側の調査区外に拡がっている。土壤状の掘り方はなく面上に完形品を主体として重なった状況で出土した。

かわらけ溜り5 (図版6) : B-4・5グリット、土壤9の北側に位置し調査区外に拡がっている。楕円形を呈した土壤と考えられるものである。大きさは東西径145cm、南北径80cm以上、深さ15cmである。かわらけは底面上に散乱した状況で出土した。

かわらけ溜り6 (図版6) : B-5グリットの調査区北西隅に位置し、かわらけ溜り5に西側を壊されている。かわらけ溜りは東西150cm、南北100cm程の範囲で確認されたもので、建物2の廃絶後に形成された遺構である。

b. 出土遺物 (図33~43・図版14)

建物1 (図33) : 1~12は各柱穴から出土した。1・2はロクロかわらけ小皿で口径8.1~8.5cm、底径5.8cm、器高1.5~1.8cmである。3は印花文白磁小皿、4は青磁皿である(柱穴9)。5・6はロクロかわらけ小皿と大皿で口径8.0~12.1cm、底径5.2~7.6cm、器高1.5~2.9cm、7が長さ9.1cmの釘である(柱穴12)。8~10はロクロかわらけ小皿で口径8.0cm前後、底径5.8cm、器高1.5~1.8cmである(柱穴15)。

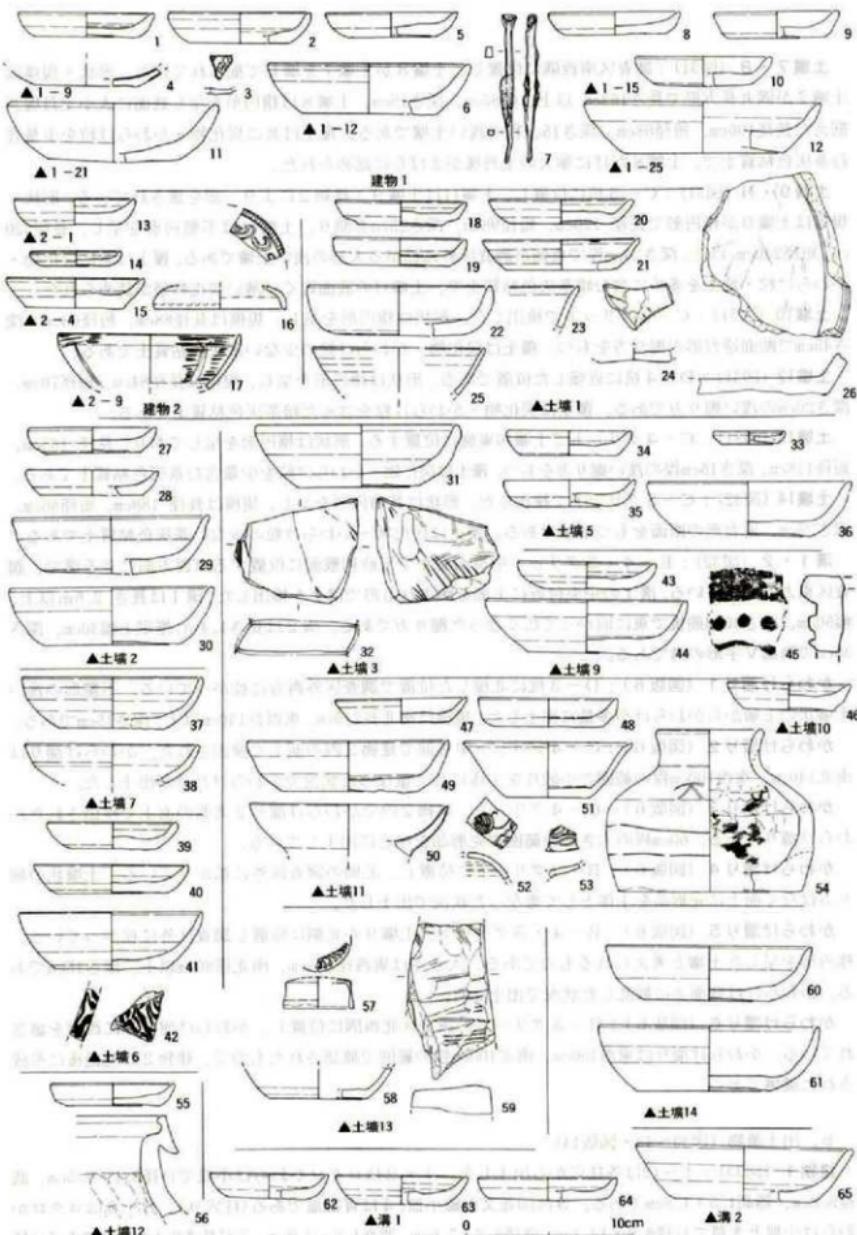


圖33 建物・溝・土壤出土遺物

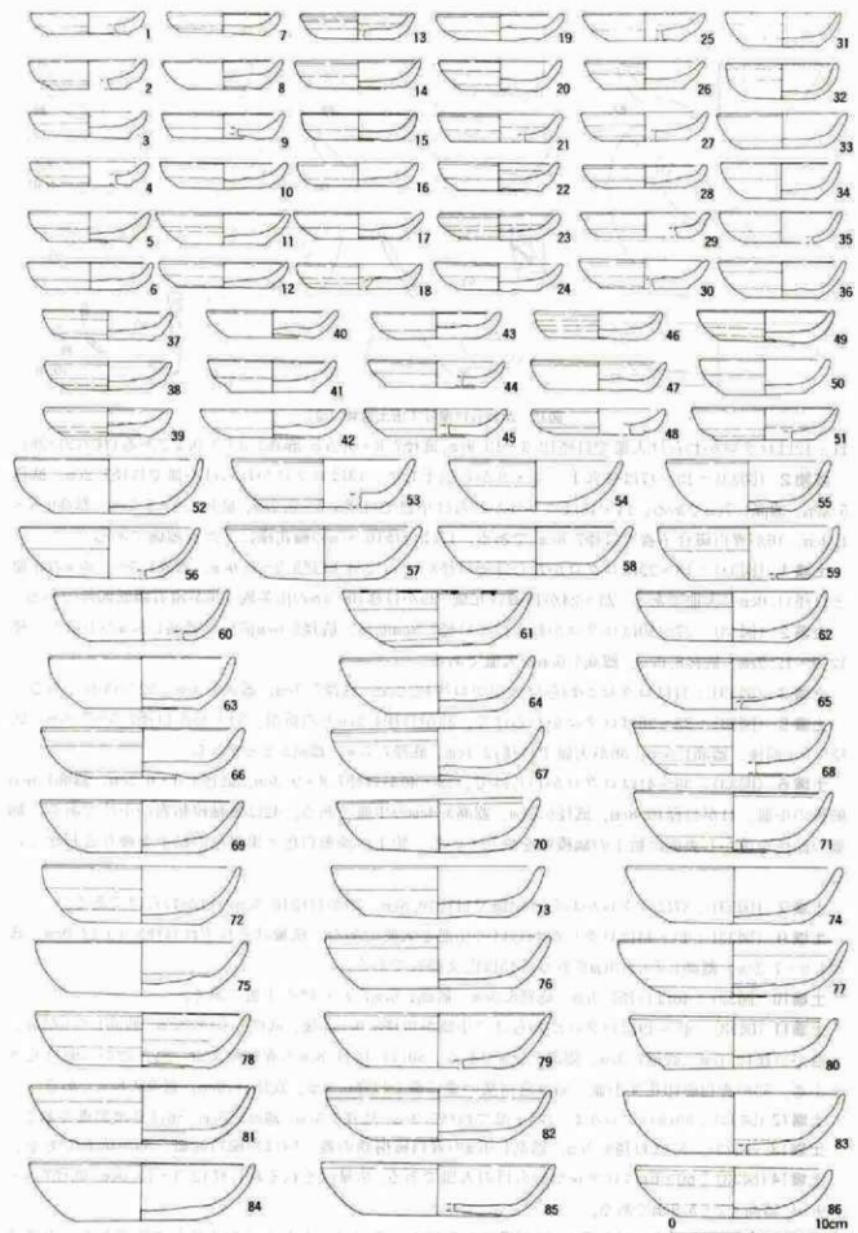


図34 かわらけ窯1出土遺物(1)

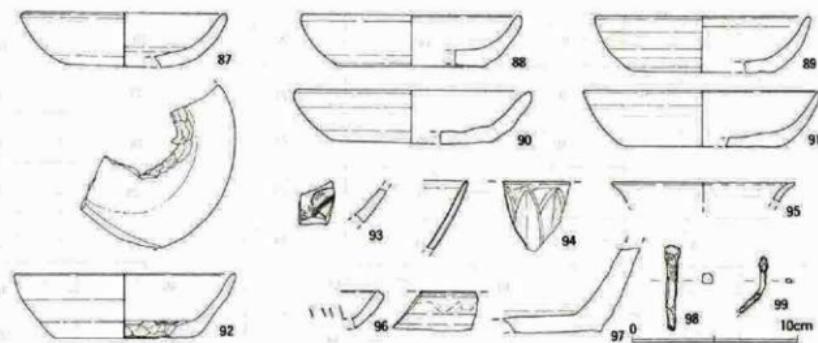


図35 かわらけ灌り1出土遺物(2)

11・12はロクロかわらけ大皿で口径12.3・13.9cm、底径7.8・9.2cm、器高3.3・3.0cmである(柱穴21・25)。

建物2(図33)：13～17は柱穴1・4・9から出土した。13はロクロかわらけ小皿で口径7.2cm、底径5.2cm、器高1.7cmである。14・15はロクロかわらけ小皿で口径5.3・8.2cm、底径3.9・5.7cm、器高0.8・1.9cm、16が青白磁合子蓋で口径7.8cmである。17は口径10.8cmの輪花様にした瓦器碗である。

土壤1(図33)：18～22はロクロかわらけで口径8.0～9.2cm、底径5.3～6.0cm、器高1.5～1.8cmの小皿と口径11.0cmの大皿である。23・24が白磁口元皿、25が口径10.5cmの山茶碗、26が滑石鍋底部片である。

土壤2(図33)：27～30はロクロかわらけで口径7.8cm前後、底径5.6cm前後、器高1.5cmの小皿と口径12.0・12.2cm、底径8.0cm、器高3.5cmの大皿である。

土壤3(図33)：31はロクロかわらけ大皿で口径12.2cm、底径7.3cm、器高3.9cm、32が砥石である。

土壤5(図33)：33～36はロクロかわらけで、33が口径4.2cmの内折皿、34・35が口径7.5～7.8cm、底径5.5cm前後、器高1.5cm、36が大皿で口径12.1cm、底径7.7cm、器高3.2cmである。

土壤6(図33)：39～41はロクロかわらけで、39・40が口径7.8・9.3cm、底径4.9・6.3cm、器高1.6cm前後の小皿、41が口径10.8cm、底径6.6cm、器高3.4cmの中皿である。42は黄釉絞胎壺の小片である。釉薬の飴色を透かし表面に胎土の綾模様を映している。胎土に淡黄白色と黒褐色の粘土を練り合わせている。

土壤7(図33)：37はロクロかわらけ中皿で口径10.8cm、38が口径10.3cmの白かわらけである。

土壤9(図33)：43・44はロクロかわらけの小皿と大皿である。法量はそれぞれ口径8.1・12.0cm、底径4.9・7.2cm、器高1.7・3.3cmを計る。45は巴文鏡瓦である。

土壤10(図33)：46は口径7.3cm、底径5.3cm、器高1.6cmかわらけの小皿である。

土壤11(図33)：47～49はロクロかわらけで小皿が口径8.0cm前後、底径5.8・6.5cm、器高1.5cm前後、大皿が口径12.1cm、底径7.3cm、器高3.2cmである。50は口径11.8cmの青磁無文皿、51・52が白磁口元皿と小壺、53が青白磁印花文小皿、54は常滑窯の鷺口壺で口径6.3cm、底径11.0cm、器高9.8cmである。

土壤12(図33)：55はロクロかわらけ小皿で口径7.3cm、底径5.5cm、器高1.5cm、56は常滑窯甕である。

土壤13(図33)：57は口径4.3cm、器高1.9cmの青白磁梅瓶の蓋、58は白磁口元皿、59が砥石である。

土壤14(図33)：60・61はロクロかわらけの大皿である。法量はそれぞれ口径12.3・13.0cm、底径7.3・7.9cm、器高3.2・3.9cmである。

溝1・2(図33)：62～64が溝1、65が溝2から出土したロクロかわらけの小皿と大皿である。小皿は口径7.0～8.1cm、底径4.8～6.7cm、器高1.4～1.7cm、大皿が口径12.8cm、底径7.9cm、器高3.2cmである。

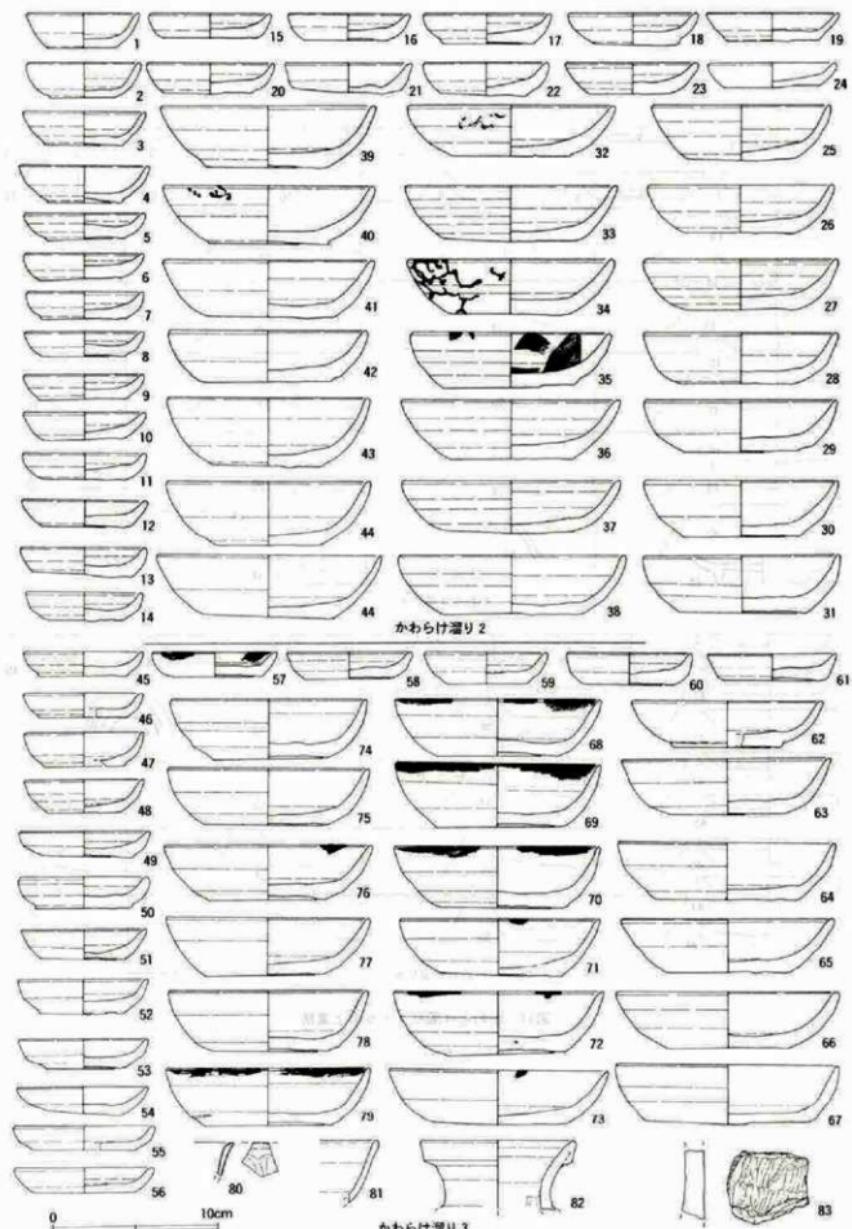


図36 かわらけ溝り2・3出土遺物

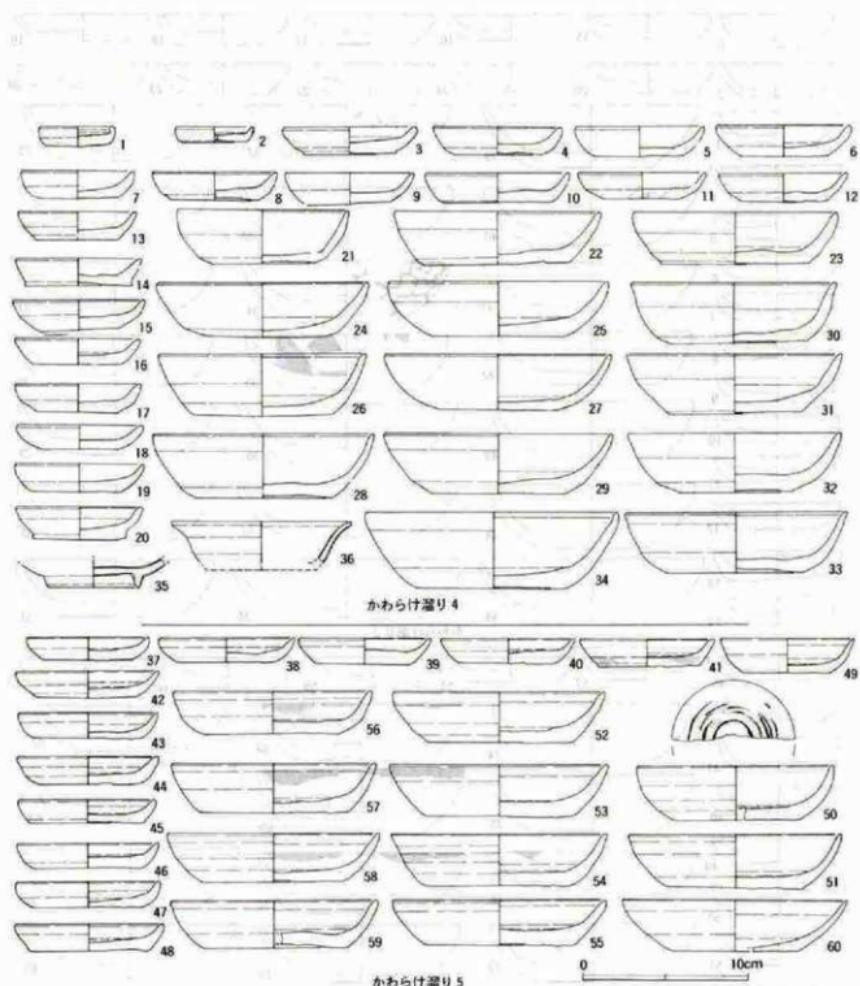


図37 かわらけ瀬り4・5出土遺物

新潟県立歴史博物館蔵

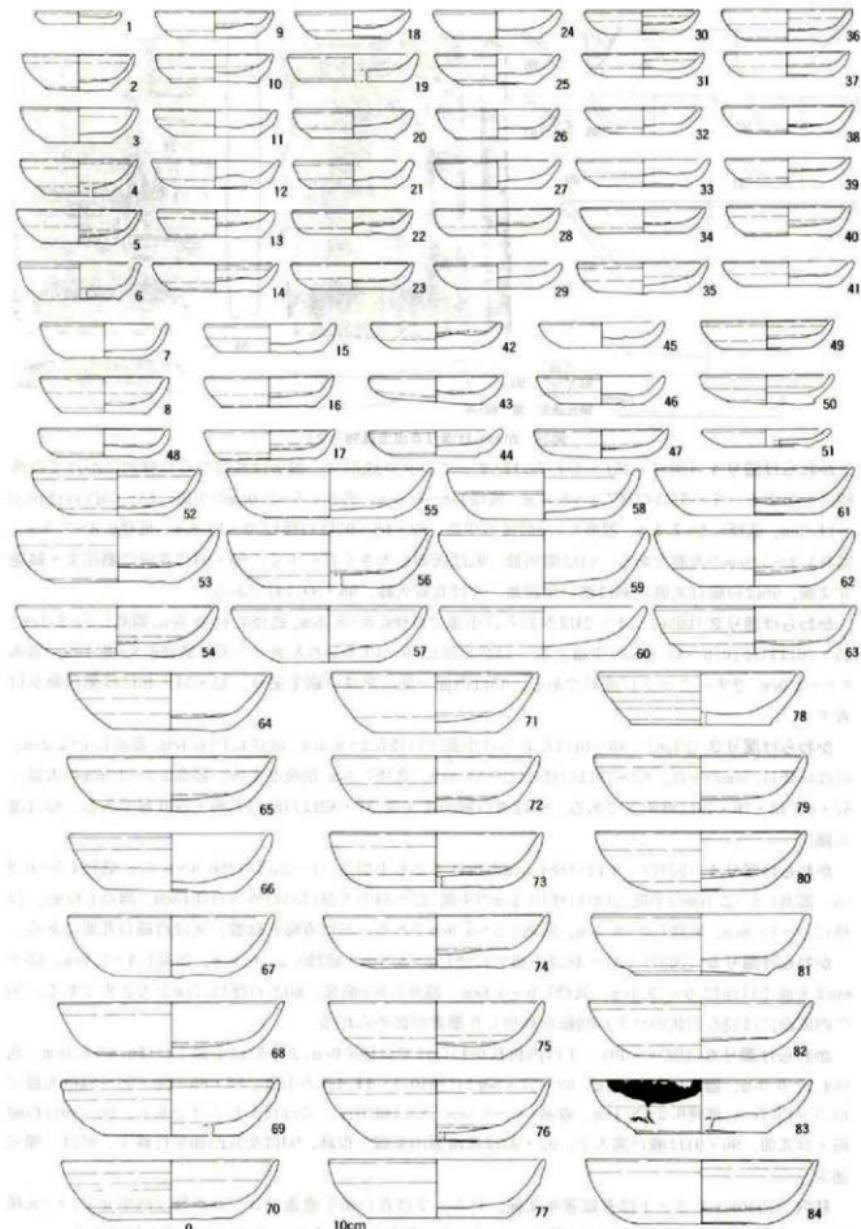


図38 かわらけ窯跡出土遺物（1）

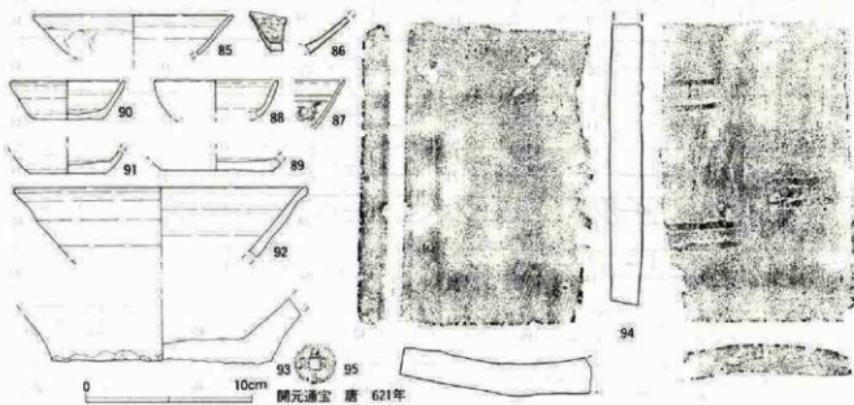


図39 かわらけ溜り6出土遺物(2)

かわらけ溜り1 (図34・35)：かわらけはすべてロクロ成形で、器形は底部から口縁部にかけて内湾傾向を呈する。1~51は口径7.2~8.8cm、底径4.8~6.0cm、器高1.5~2.0cmの小皿、53~65は口径10.0~11.3cm、底径5.4~7.3cm、器高3.2cm前後の中皿、52・66~92は口径12.0~13.8cm、底径6.8~7.9cm、器高3.3~3.8cmの大皿である。61は燈明皿、92は底部を大きく打ち欠く。93・94は青磁の劃花文・鑄蓮弁文碗、95は白磁口元皿、96は瀬戸窯御皿、97は瓦質火鉢、98・99は釘である。

かわらけ溜り2 (図36)：1~24はかわらけ小皿で口径6.8~8.3cm、底径4.4~6.0cm、器高1.5~2.1cm、25・26は口径10.6~11.6cmの中皿と27~44が口径12.0~13.6cmの大皿でともに底径6.8~8.1cm、器高3.0~4.0cm すべてロクロ成形である。35は内面一部に黒漆を刷毛塗り、32・34・40には黒色物が付着する。

かわらけ溜り3 (図36)：45~61はかわらけ小皿で口径7.2~8.4cm、底径4.4~6.1cm、器高1.5~2.2cm、61は口径11.5cmの中皿、62~79は口径12.2~13.5cm、底径7.2cm前後が主体、器高3.3~3.8cmの大皿、57・68~73・76・79は燈明皿である。80は青白磁印花文皿、81・82は白磁口元碗・四耳壺である。83は滑石鍋。

かわらけ溜り4 (図37)：1は口径4.5cm内折れで2も小型品、3~20は口径6.8~8.5cm、底径4.5~6.2cm、器高1.5~2.1cmの小皿、21が口径10.4cmの中皿、22~34の大皿は34以外 (口径15cm、器高4.6cm)、口径12.3~13.6cm、底径7.0~8.4cm、器高3.3~3.9cmである。35は青磁折縫盤、36は白磁口元皿である。

かわらけ溜り5 (図37)：37~48は小皿で口径7.2~8.9cm、底径5.2~6.9cm、器高1.4~2.0cm、50~60は大皿で口径12.0~13.1cm、底径7.0~8.6cm、器高3.0cm前後、60が口径13.7cmと大きめである。50の内底面には同心円状のロクロ回転を利用した墨書が認められる。

かわらけ溜り6 (図38・39)：1は内折れかわらけで口径5.0cm、2~51は小皿で口径6.8~8.0cm、底径4.2~6.0cm、器高1.3~2.0cm、52・57・58は口径10.1~11.4cmの中皿、53・55・56・59~84は大皿で12.3~13.7cm、底径6.2~8.1cm、器高3.2~3.6cm、83は燈明皿、85は白かわらけである。86~89は白磁碗・口元皿、90・91は瀬戸窯入子、92・93は常滑窑山茶碗・捏鉢、94は女瓦凸面平行線文、95は「開元通宝」。

柱穴 (図40)：P2-1は青磁蓮弁文碗、P5-2は青白磁小壺蓋で3~5が銭「治平元宝」・「元祐通宝」・「元豐通宝」、P27-6は二彩盤、P34-7は銅製の飾り金具、P37-8は滑石鍋である。

玉砂利面 (図40)：9~29はロクロ成形のかわらけである。30は青磁無文折縫盤、31~34は白磁口元

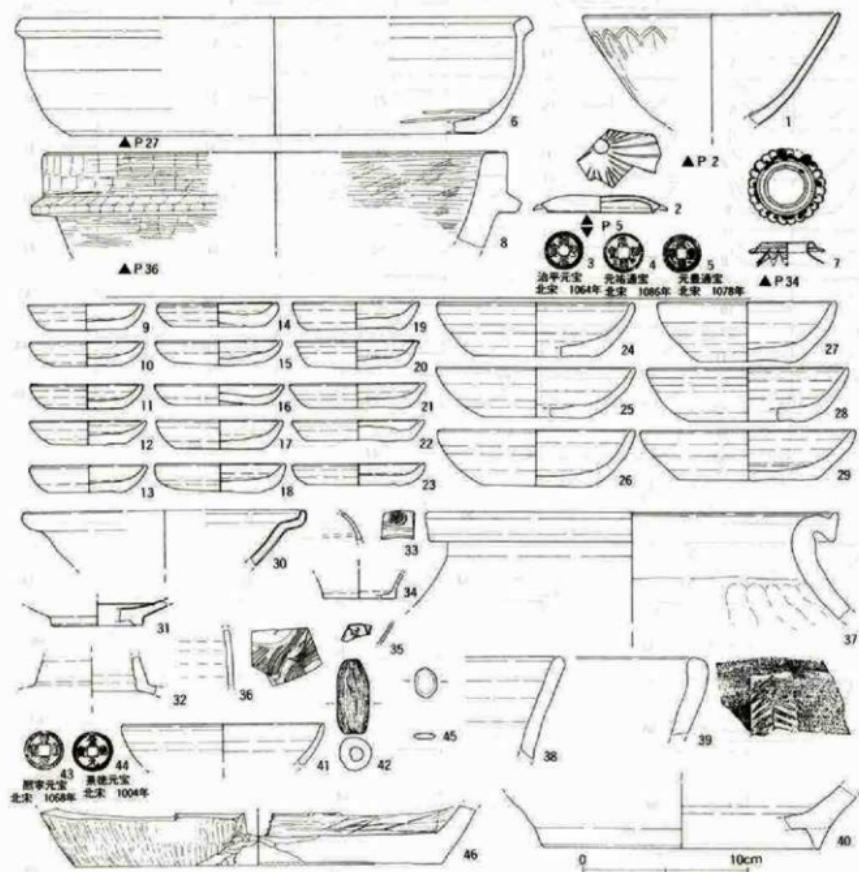


図40 柱穴・玉砂利面出土遺物

碗・四耳壺・小壺、35・36は青白磁皿・梅瓶である。37~40は常滑窯窓・捏鉢等、41は白かわらけ、42は土錘、43・44は銭「熙寧元宝」・「景德元宝」、45・46は石製品の墓石・滑石鍋である。

第2面下~第3面 (図41~43): 1~58はロクロ成形のかわらけである。1~4は小型品・内折れかわらけ、5~48は口径6.8~8.8cmの小皿、49~56は口径10.5~11.6cmの中皿、57~78は口径12.3~13.5cmの大皿、58は底部尖孔がある。39~40は白かわらけで39が内折れタイプである。61~88は舶載陶器である。61~72は青磁の鏽蓮弁文碗・折縁盤と鉢・蓮弁文皿・蓮弁文小壺である。73~85は白磁で印花文碗・草花文平底皿・口兀碗・皿(80~82が型捺し作り)・四耳壺である。86・87は青白磁の小壺・梅瓶である。88は泉州窯系の黄釉鉄絵盤である。89・90は瀬戸窯の四耳壺・輪花の入子、91~99は常滑窯の短頸壺・捏鉢・甕である。100は瓦器質土器、101はかわらけ質の角形火鉢、102は瓦質火鉢、105は字瓦の女瓦部で103・104・106・107が女瓦である。108は鋳造関係の輪の羽口、109~111は滑石製品で鍋・硯、112~114は砥石、115は火打石である。116~117は銭「淳熙元宝」と「□□元宝」の年号不明である。

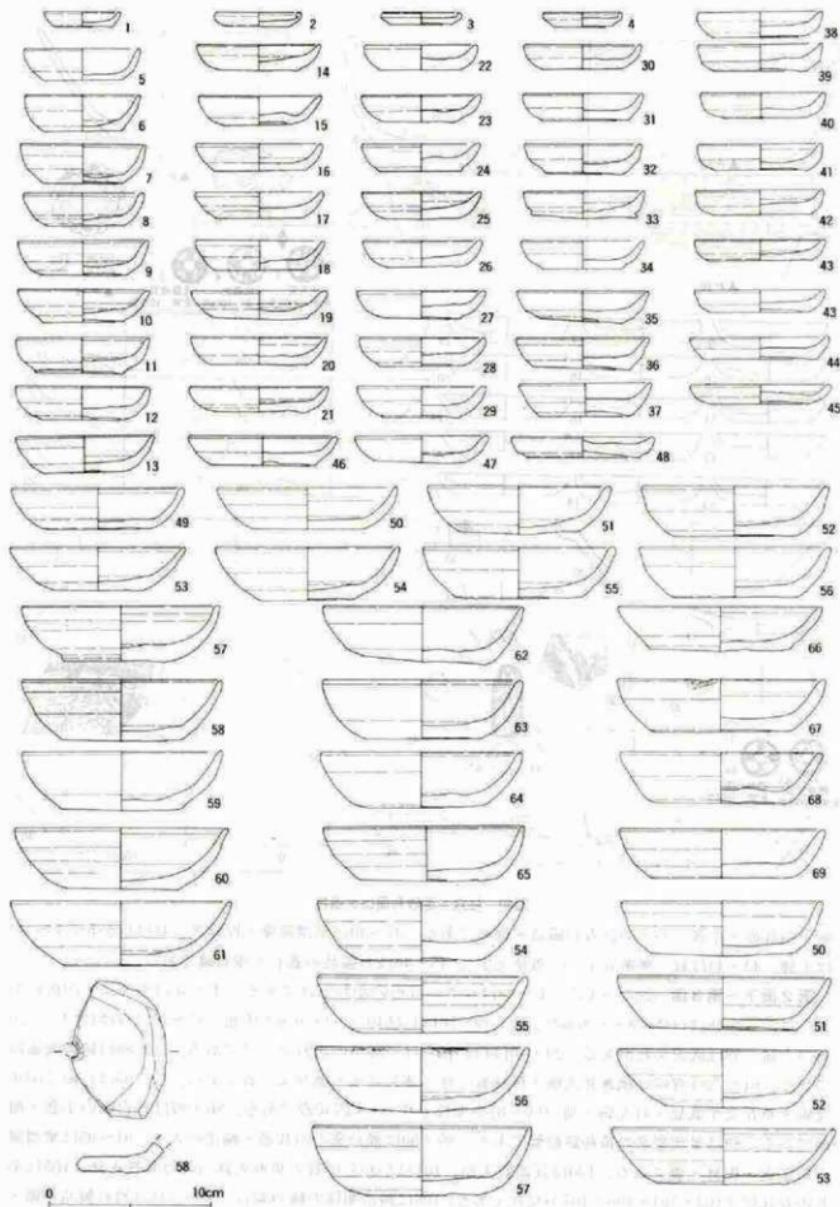


图41 第2面下～3面出土遺物(1)

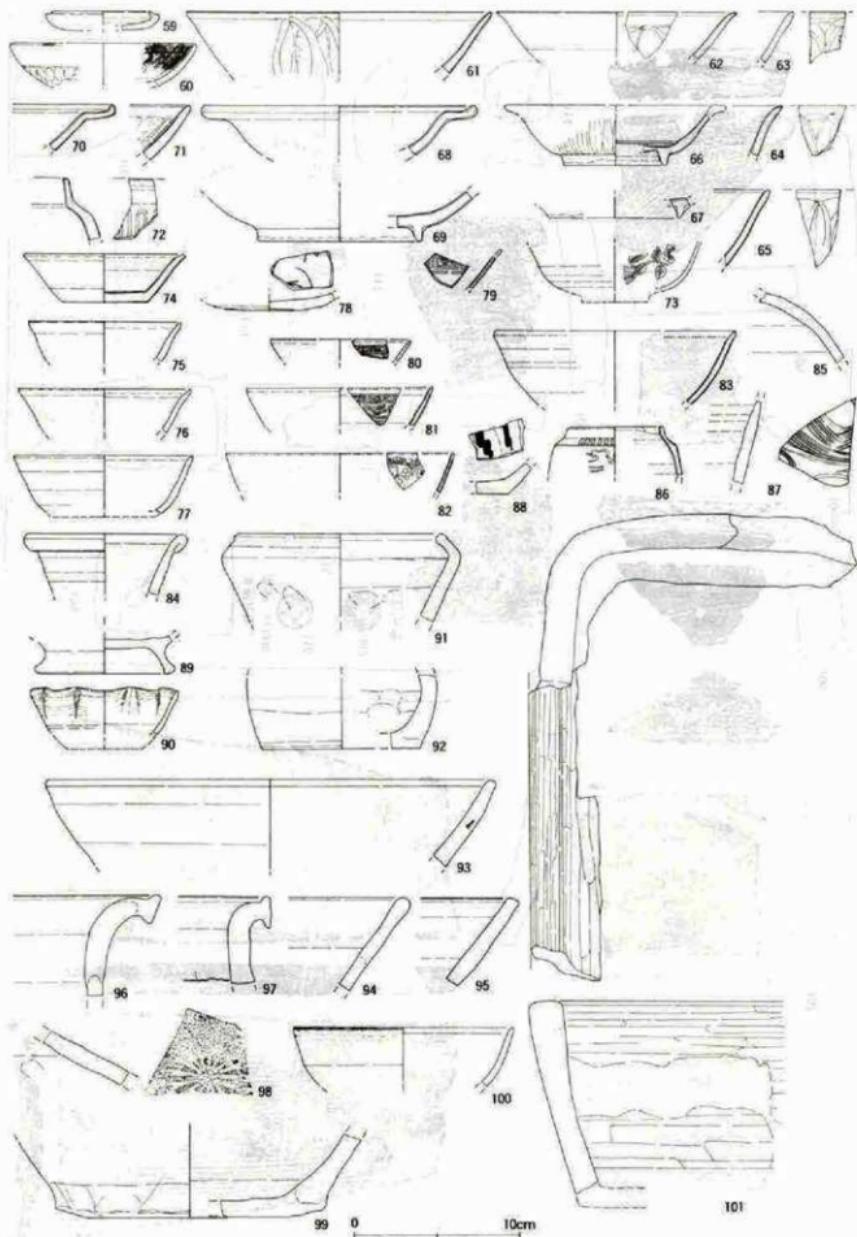


图42 第2面下～3面出土遺物(2)

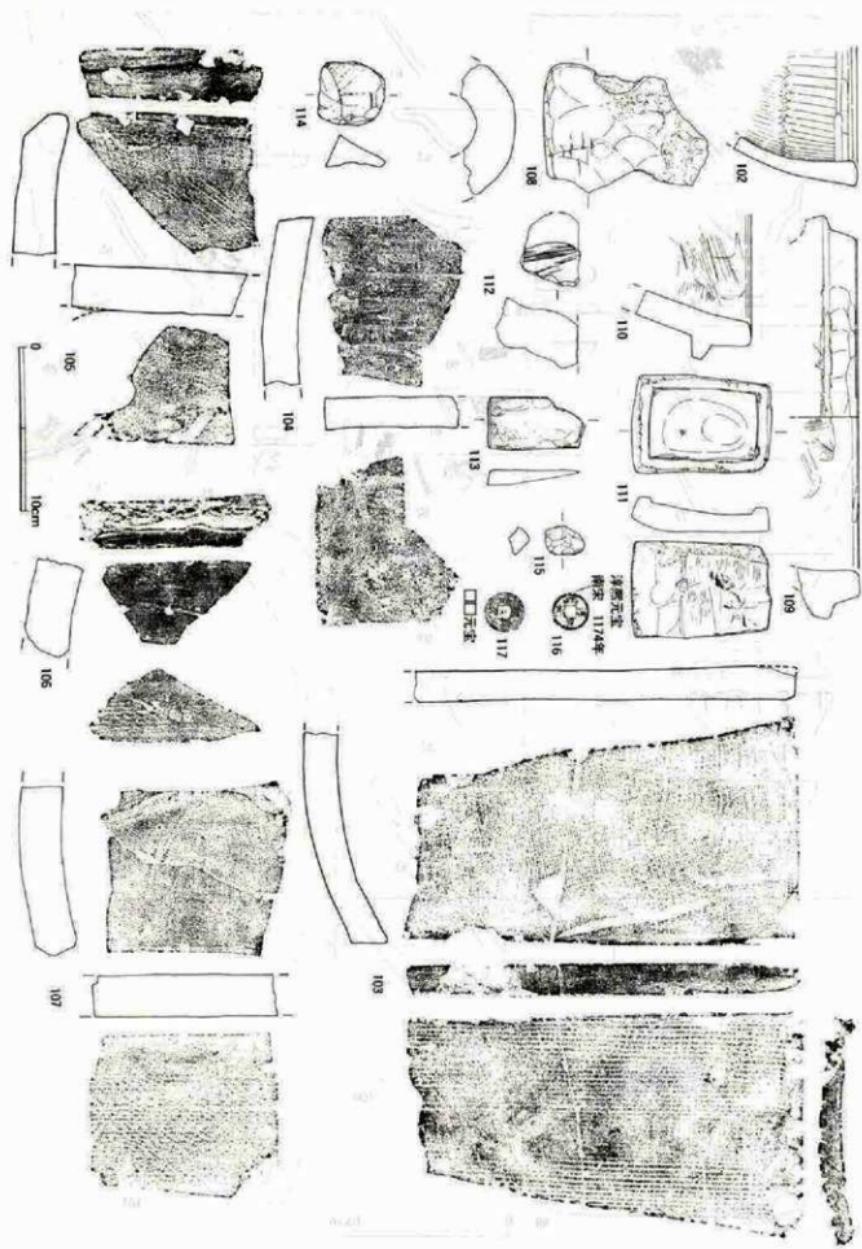


圖43 第2面下～3面出土遺物（3）

4. 第4面の遺構・遺物

現地表下185～200cm、海拔高13.45m前後、調査区西側は部分的な範囲でやや強い土丹版築面を残しているが、全体的には弱い生活面である。この面で検出した遺構は、掘立柱建物6棟、土壙12基、柱穴約160口である。主な遺物は、多量のかわらけ、舶載陶磁器が青磁碗皿、白磁碗皿・四耳壺・合子、青白磁梅瓶・小壺、国産陶器が瀬戸窯四耳壺・卸皿・入子、常滑窯甕・捏鉢・壺、山茶碗・皿、石製品、漆・木製品などが出土した。

a. 検出遺構（図44～58、図版7・8）

建物1（図45）

グリット：調査区南側の東寄りに位置し、E～G-3～5

確認標高：13.45m前後

軸方位：N-18°30' - E

建物規模：調査区内東西3間半×南北4間

建物概要：建物の形態は、板壁をもつ掘立柱建物である。現状で東西3間半と南北4間が確認されており、東・南方は調査区外へ延びる可能性がある。確認規模は、東西6.81m・南北8.32m以上である。柱間寸法は東西位をみると、a列が柱穴5口（柱穴10～14）であり、西端の柱穴1から2が近接した柱間で45cm・残り3間は各間の芯々距離が212cm、南北位は各間の芯々距離が208cmを測る。柱穴掘り方は円形又は梢円形を呈し、径43～65cm、深さ40～60cm程度である。柱穴の底面には1～3枚の礎板が敷かれており、柱穴10に幅12×9cmの角柱が残っていた。

建物2（図45）

グリット：調査区南側の東寄りに位置し、E～G-3～5

確認標高：13.45m

軸方位：N-19°00' - E

建物規模：調査区内東西4間×南北3間

建物概要：建物1を壊して建て替られたと推定される。建物の形態は、板壁をもつ掘立柱建物であるが、現状で東西4間と南北3間が確認されており、建物構造の全体像が判然としない部分もある。東・南方は調査区外へ延びる可能性がある。確認規模は、東西8.18m・南北6.40m以上である。柱間寸法は東西位をみると、b列が柱穴7口で西端の柱穴6から210cm・218cm・90cm・120cm・105cm・75cmと各芯々距離であり、南北位は各間の芯々距離が北端の柱穴1から210cm・75cm・210cm・145cmを測る。掘り方の浅い柱穴8・10や柱穴13・14間の2枚の礎板など柱通りに伴うものは束柱と考えられる。南端のc列沿いに20cm程の深さまで網代壁と小杭で止めた羽目板の一部が残存していた。

柱穴掘り方は円形又は梢円形を呈し、径35～60cm、深さ20～50cm程度である。柱穴の底面には1～3枚の礎板と、柱穴9に土丹塊が据えられていた。柱穴1・8・9・12～14・17・19・21の各礎板は、幅18～21cm程度の面取り柱を分割したものが認められた。

この板壁を境に西側域は、遺構の密度が低く一部に貝砂や土丹版築が確認されており、さらにサブトレンチを入れたところ、羽目板西側の部分は客土を積みました土層であったことが観察され、通路状の空間としての可能性が考えられる。

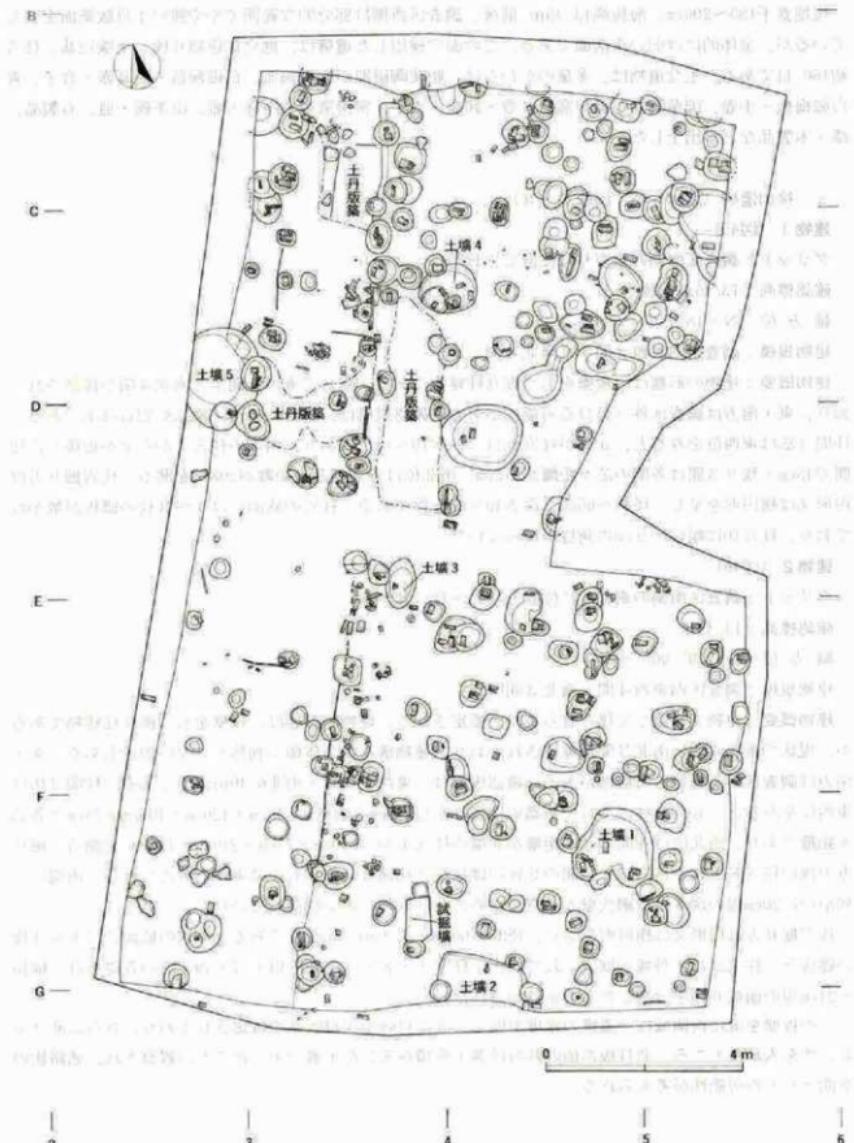


图44 第4面全測図

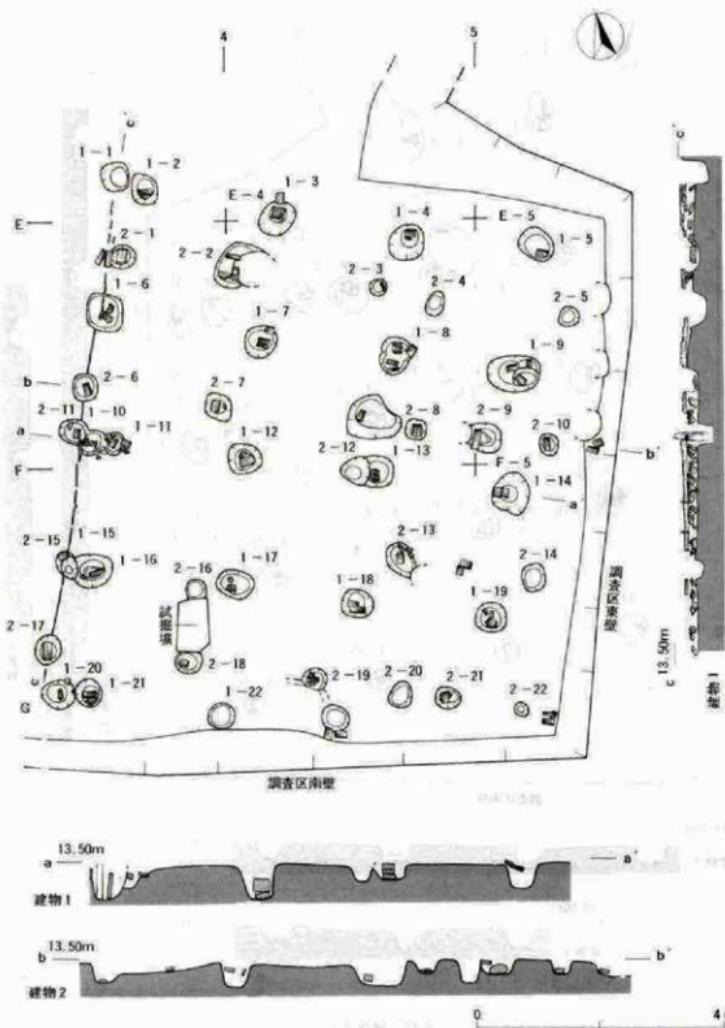


図45 建物1・2

建物3(図46)

グリット：調査区南側の東寄りに位置し、E～G～3～5

確認標高：13.45m

軸方位：N=20° 00' - E

建物規模：調査区内東西3間×南北4間

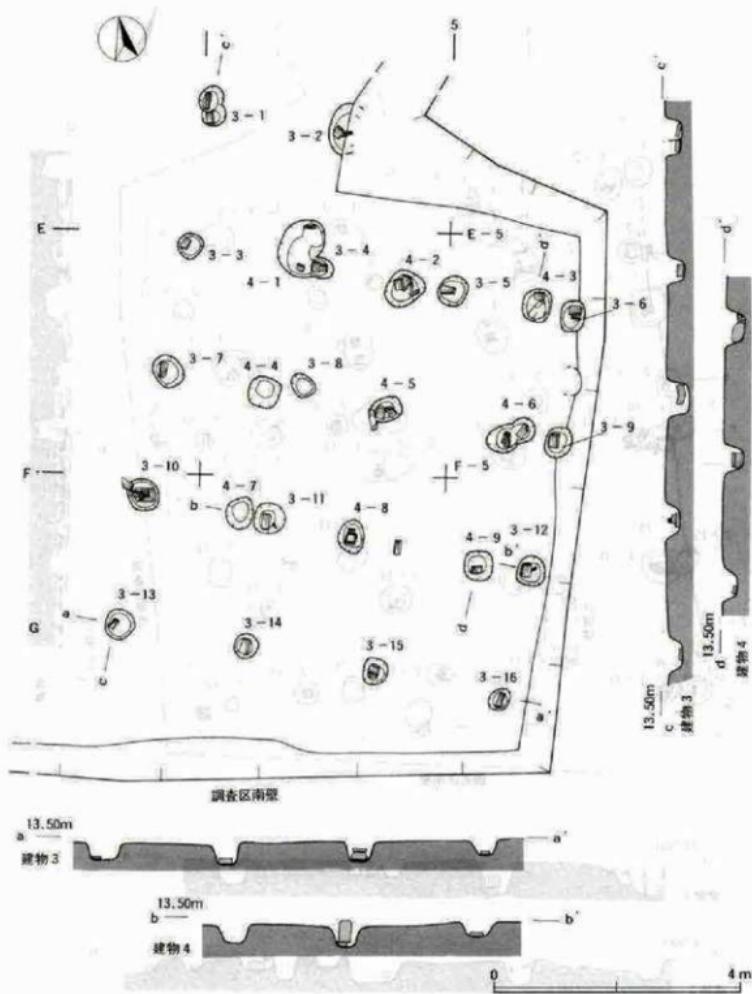


図46 建物3・4

建物概要：建物4より新しい独立柱建物である。現状で東西3間=6.30m、南北4間=8.40mが確認され、東側は調査区外に延びる可能性がある。柱間寸法は、東西列が各間の芯々距離が210cm程、南北列が各間の芯々距離は両側の1間づつが215cm、中の2間が205cmを測る。柱穴掘り方は円形又は椭円形を呈し、径40~75cm、深さ20~35cmである。柱穴底面には1・2枚の礎板が据えられている。柱穴10・12・15出土の礎板は幅21cmの面取りを施した柱を分割したものを使用していた。

建物4 (図46)

グリット：調査区南側の
東寄りに位置し、F・G－
4・5

確認標高：13.45m

軸方位：N-20° 00' -E

建物規模：調査区内東西
2間×南北2間

建物概要：建物3とほぼ
同一の軸方位を示す掘立柱
建物であるが、2間四方が
確認され、東西が4.30m、
南北が4.0mである。柱間寸
法は、東西列が185cm・215
cm、南北列が各間215cmの距
離を測る。殆んどの柱穴底
面に礎板が据えられており、
柱穴8には21cm幅の角柱が
遺存していた。

建物5 (図47)

グリット：調査区北東に
位置し、C・D-4・5

確認標高：13.50m

軸方位：N-20° 00' -E

建物規模：調査区内東西2間×南北2間

建物概要：建物3・4と同一軸方位を呈した掘立柱建物で北・東方の調査区外に延びる可能性もある。確認規模は東西2間=4.30m、南北2間=3.75m以上である。柱間寸法は、東西列の各間の距離が215cm、南北列が北から165cm・210cmの柱間距離を測る。柱穴掘り方は形状が楕円形を呈し、大きさは径約50~70cm、深さ20cm程度であるが柱穴5だけが50cmと深い掘り方である。柱穴内には2~4枚の重なった礎板が認められた。

建物6 (図48)

グリット：調査区西北に位置し、C・D-3・4

確認標高：13.50m

軸方位：N-19° 00' -E

建物規模：調査区内東西1間×南北3間

建物概要：建物1と同一軸方位を呈した掘立柱建物で北・西方の調査区外に延びる可能性が高い。確認規模は東西1間=1.95m・南北3間=6.31m以上である。柱間寸法は、南北列の各間距離が北から20
3cm、225cm・203cmの柱間距離を測る。柱穴掘り方は形状が楕円形を呈し、大きさは径約40~70cm、深さ35cm~50cmである。柱穴内には2~3枚の礎板が据えられていた。柱穴2・4・6・8には幅12cmの角

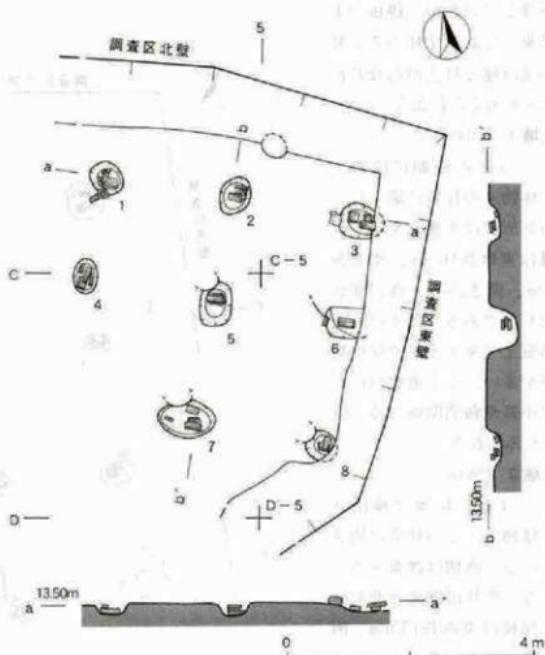


図47 4面建物5

柱を残していたが、礎板の上には乗っておらず柱の差し替えか又は建て替えが行なわれたこととも考えられよう。

土壤1 (図49)

F-5杭の南側に位置する。建物4の柱穴に壊されているが形状は不整形を呈し、規模は東西長165cm、南北長170cm、深さ25cmと浅い皿状の掘り方である。覆土は茶褐色粘質土で拳大土丹や炭化物がやや多い。出土遺物はかわらけ小皿や鋳造関係のるつぼなどがみられた。

土壤2 (図49)

G-4杭の位置で検出され、建物1・2の柱穴に壊されている。南側は調査区外に抜がる。形状は隅丸方形を呈し、規模は東西長175cm、南北長95cm以上、深さ20cmと浅い皿状の掘り方である。覆土は小土丹角や炭化物をやや多く含む茶褐色弱粘質土である。

遺物はかわらけ・捏鉢・船載陶器などが出土した。

土壤3 (図49)

E-4杭の西側の位置で検出された。建物1の柱穴2に壊されている。形状は梢円形を呈し、規模は長径105cm、短径65cm、深さ15cmと浅い皿状の掘り方である。覆土は小土丹角や炭化物を多く含んだ茶褐色粘質土で締まりのないもので、出土遺物は少ない。

土壤4 (図49)

C-D間-4ライン上の位置で検出された。礎板もつ柱穴に壊されており、形状は梢円形を呈している。規模は長径115cm、短径105cm、深さ20cmと浅い皿状の掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を多く含んだ茶褐色粘質土で締まりのないものである。遺物は手握ねかわらけを主体にして多く出土した。

土壤5 (図49)

D-3杭の位置で検出された大土壤であり、調査区西側に抜がっているので全容は不明。建物6の柱穴に壊されている。形状は梢円形と推定され、規模は長径200cm、短径110cm以上、深さ60cmで擂鉢状の掘り方である。覆土は小土丹角や炭化物を多く含んだ茶褐色粘質土で締まりのないものである。遺物は主に大皿のかわらけが多く出土している。

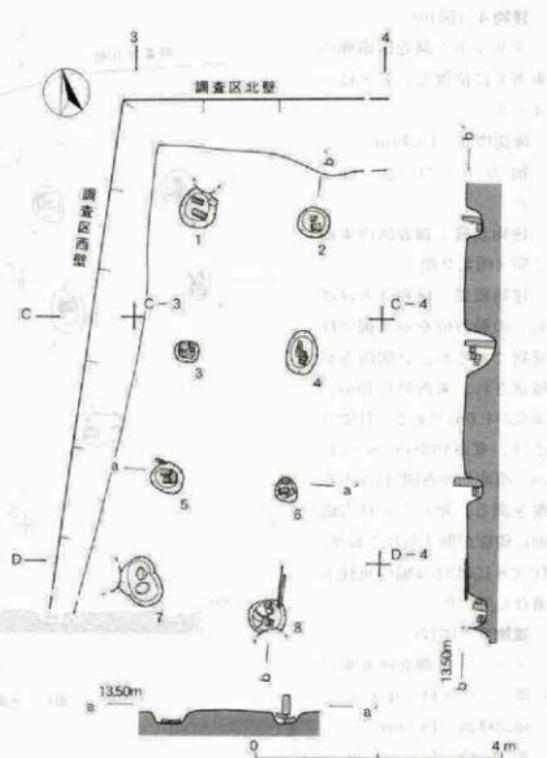


図48 4面建物6

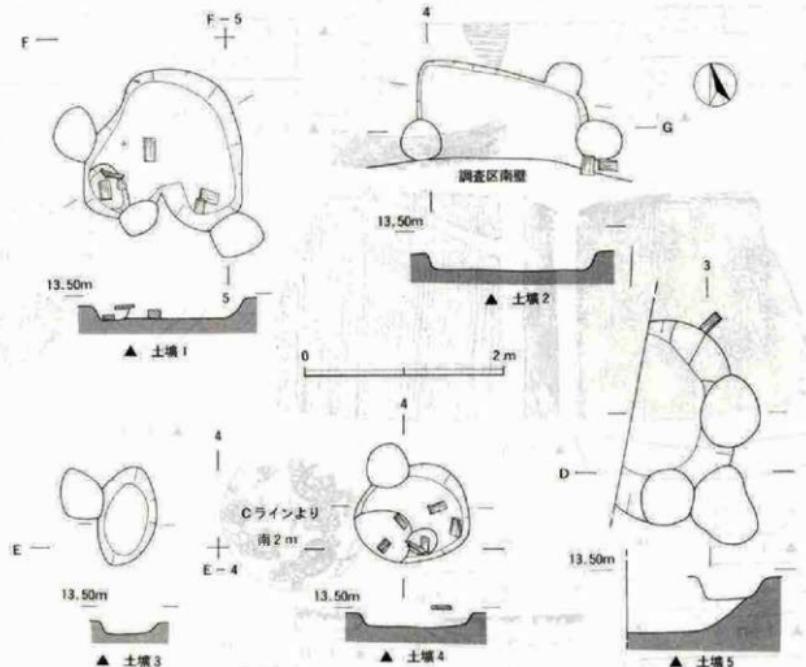


図49 土壠

b. 出土遺物 (図50～58、図版15)

建物 1 (図50) : 1～3は口径8.7～9.8cm、底径6.8～7.6cm、器高1.5～1.8cmでロクロ成形のかわらけ小皿、4が口径8.8cm、器高2.0cmで丸底の手捏ね成形、5が口径12.3cmの瓦器碗で内面側壁に横位の暗文を施す (柱穴1)。6は口径13.0cm、器高3.3cmで丸底の手捏ね成形のかわらけ大皿である (柱穴3)。7・8はかわらけで7が口径8.7cm、底径7.1cm 器高1.6cmでロクロ成形の小皿・8が口径10.1cm、器高2.3cmで手捏ね成形の中皿である (柱穴5)。9～11は手捏ね成形のかわらけで9が口径8.2cm、器高1.6cmの小皿、10・11が口径13.2cm、器高3.0cmの大皿・12が白磁四耳壺で高台径8.2cm・13が常滑窯窓で肩部に蜘蛛巣状の叩き目をもつ (柱穴7)。14が凸面縄目叩きの女瓦である (柱穴6)。15は口径9.2cm、底径6.7cm、器高1.6cmのロクロ成形小皿である (柱穴11)。16～18が手捏ね成形のかわらけで小皿が口径9.4～9.8cm、器高1.7cmで底部尖孔と燈明皿、18が大皿で口径13.6cm、器高2.9cmである (柱穴12)。19は手捏ねの白かわらけで口径12.0cm、器高3.3cmである (柱穴13)。20は口径9.0cm、高台径6.3cm、器高2.0cm の漆器皿で黒漆地の内外面に朱漆で瓜形文を手描する (柱穴14)。21は常滑窯、22が手捏ねかわらけの大皿である (柱穴15)。23は手捏ねかわらけで口径9.5cm、器高1.6cmである (柱穴16)。24はロクロ成形のかわらけ小皿 (柱穴21) がそれぞれ出土している。

建物 2 (図50) : 24は青磁無文碗・25が宇瓦女瓦部で凸面縄目叩きを施し、焼成前に開けられた釘穴がある (柱穴6)。26はロクロ、27・28が手捏ねのかわらけである (柱穴3)。29・30はロクロ成形の小

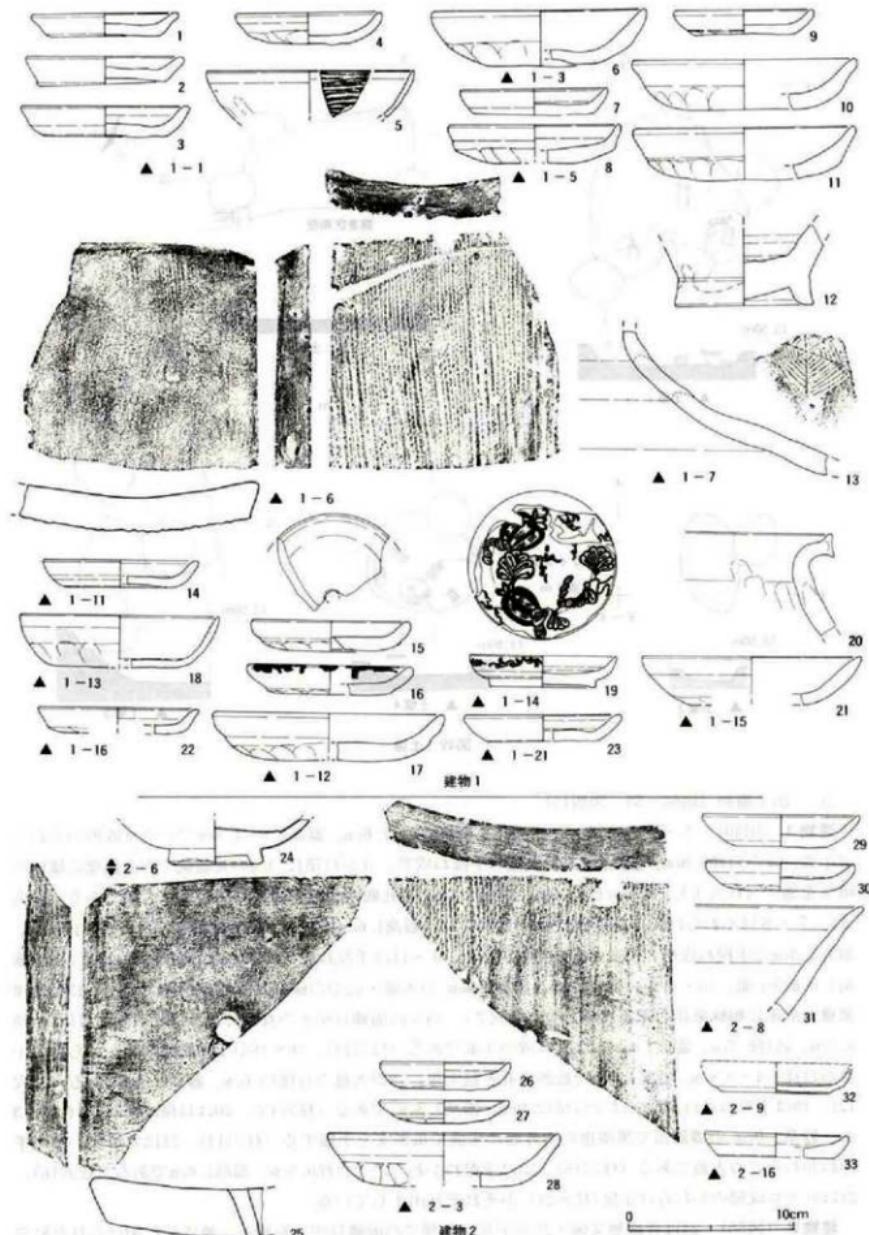


図50 建物1・2出土遺物

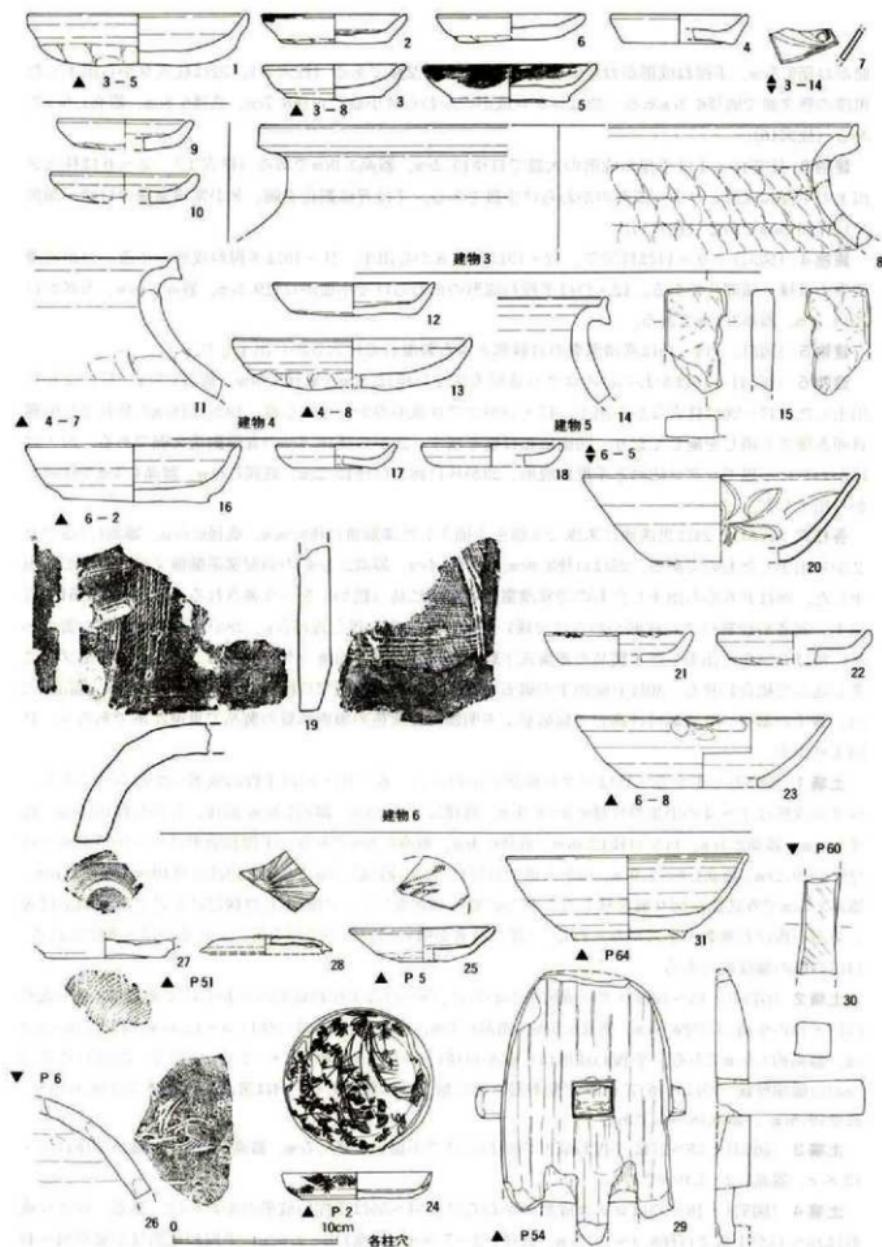


圖51 建物3・6出土遺物

皿が口径9.5cm、手捏ね成形が口径9.0cm、31が常滑窯捏鉢である（柱穴8）。32は柱穴9から出土した黒漆の無文皿で底径6.3cmある。33はロクロ成形のかわらけ小皿で口径8.7cm、底径6.8cm、器高1.6cmである（柱穴16）。

建物3（図51）：1は手捏ね成形の大皿で口径13.2cm、器高3.0cmである（柱穴1）。2～6は柱穴8出土の手捏ね成形とロクロ成形のかわらけ小皿である。7は青磁割花文碗、8が常滑窯の口縁～頸部で口径35.5cmである（柱穴14）。

建物4（図51）：9～11は柱穴7、12・13は柱穴8から出土。9・10は手捏ね成形の小皿、11が常滑窯の口縁～頸部片である。12・13は手捏ね成形のかわらけで小皿が口径9.5cm、器高2.0cm、大皿が口径14.2cm、器高3.1cmである。

建物5（図51）：14・15は常滑窯の口縁部と滑石製温石で柱穴5から出土した。

建物6（図51）：16はかわらけのロクロ成形大皿で口径12.8cm、底径8.8cm、器高3.5cm、柱穴2から出土した。17～20は柱穴5から出土、17・18がロクロ成形のかわらけ小皿、19が径18cmの男瓦で凸面継目叩き後スリ消しを施しており、凹面に布目痕を残す。20が口径16.5cmの青磁割花文碗である。21・22はかわらけ小皿でロクロ成形と手捏ね成形、23が片口鉢で口径15.2cm、底径7.8cm、器高4.3cmで柱穴8から出土した。

各柱穴（図51）：24は黒漆地に朱漆で文様を手描きした漆器皿口径8.9cm、底径6.5cm、器高1.7cmでP2から出土したものである。25は口径8.8cm、底径4.1cm、器高2.1cmの同安窯系櫛描文皿でP5から出土した。26はP6から出土したもので常滑窯の肩部に鳥（鶴か）をヘラ書される。27・28はP51から出土、前者が砂質ロクロ成形かわらけで緩い回転の糸切痕を残し底径7cm、28が青白磁小壺類の蓋である。29はP54から出土した木製品の差歛式下駄、差歛は台部に前歛一ヶ所、後歛二ヶ所の方形ホゾ穴に差し込んで組合せる。30はP60出土の砥石である。31は山茶碗で口径14.3cm、高台径6.6cm、器高5.2cm、薄手の器壁、外底貼付け高台で粉穀痕が不明瞭、青灰色の須恵器質の製品で東達江系であろう。P64より出土。

土壤1（図53）：1～5・11はロクロ成形のかわらけ、6～10・12は手捏ね成形のかわらけである。ロクロ成形は1～4の小皿が口径8.0～8.9cm、底径5.3～6.2cm、器高1.6cm前後、5が口径10.3cm、底径7.3cm、器高2.1cm、11が口径12.0cm、底径6.4cm、器高3.4cmである。手捏ね成形は6～10が小皿で口径8.5～9.2cm、器高1.6～2.0cm、12が大皿で口径12.1cm、器高3.1cmである。13は口径10cm、底径4.4cm、器高3.5cmで外底に糸切り痕を残したかわらけ質の皿状を呈し、内面から口縁部にかけて溶融物が付着し気泡が抜けた無数の小穴がみられる。一部に緑青が噴いているので銅を溶かしたるつぼと考えられる。14は白磁の端反碗である。

土壤2（図53）：15～18はロクロ成形のかわらけ、19～21は手捏ね成形のかわらけである。ロクロ成形は15・16の小皿が口径8.7cm、底径6.5cm、器高1.7cm、17・18が大皿口径11.8・12.6cm、底径7.6・8.8cm、器高約3.0cmである。手捏ね成形は小皿が口径7.7～9.3cm、器高1.6～2.0cmである。22は口径15.2cmの白磁端反碗、23は口径17.5cmで涅美窯に近い胎土の鉢類である。24は常滑窯の捏鉢で口径26.7cm、底径19.5cm、器高18.8cmである。

土壤3（図53）：25～27は手捏ね成形のかわらけで小皿が口径8.7cm、器高2.2cm、大皿が口径11.7・12.8cm、器高3.2・3.0cmである。

土壤4（図53）：28～33はロクロ成形のかわらけ、34～50は手捏ね成形のかわらけである。ロクロ成形は28～33が小皿で口径8.3～10.2cm、底径7.2～7.5cm、器高1.6～2.0cm、手捏ね成形は小皿が34～42で口径7.8～9.2cm、器高1.6～2.1cm、43～53の大皿は口径11.8～13.5cm、器高2.9～3.5cmである。48は

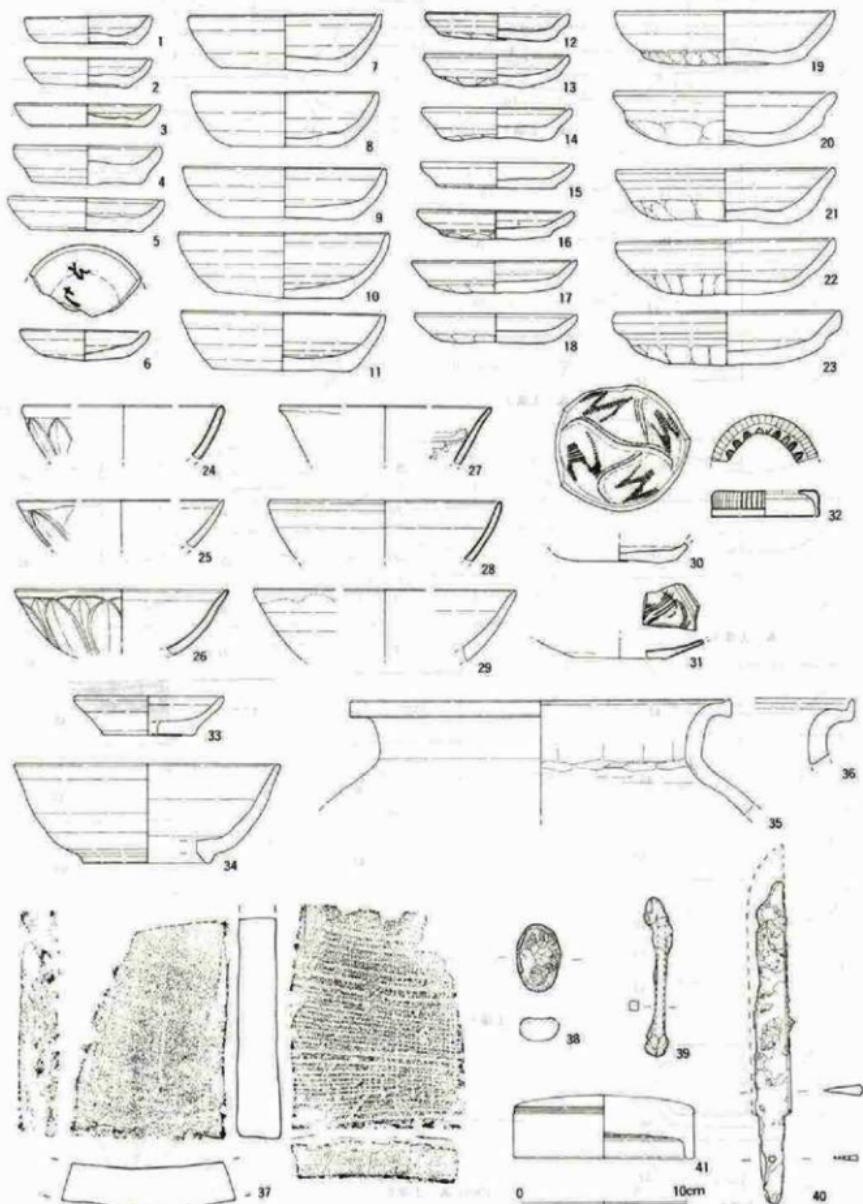


图52 建物6内出土遗物

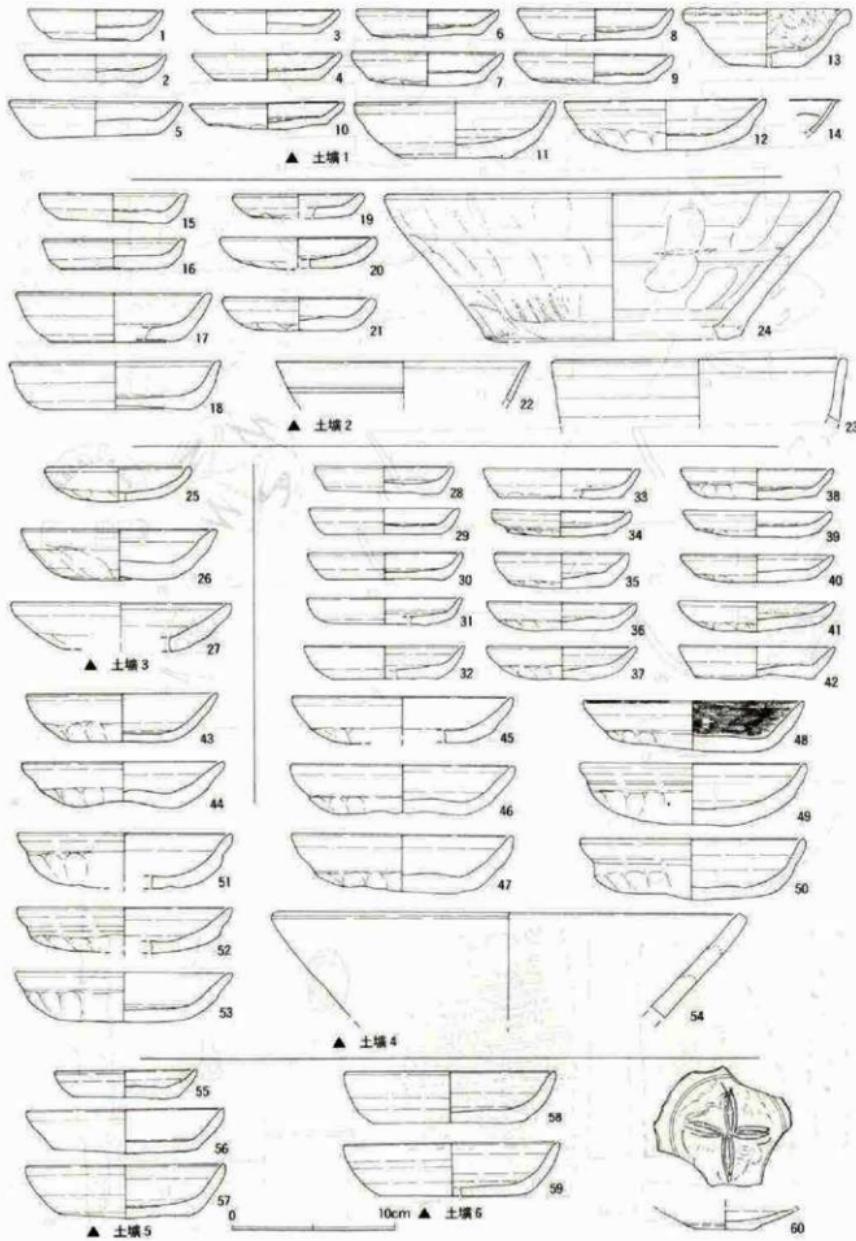


図53 土壤出土遺物

透明皿で外面口縁部から内面にかけて煤が付着している。54は常滑窯捏鉢で口径27.8cmである。

土壤5 (図53) : 55~57はロクロ成形のかわらけ、55が小皿で口径8.5cm、底径6.2cm、器高1.6cm、56・57は口径12cm、底径8.1cm前後、器高2.8~3.3cmである。

土壤6 (図53) : 58・59はロクロ成形の大皿で口径12.6~13cm、底径8.7cm前後、器高3.2cmである。60は底径4.5cmの白磁皿で見込に花文スタンプ、外底の釉薬を削り取る。

建物6範囲内の面上 (図52) : 1~11はロクロ成形のかわらけ、12~23は手捏ね成形のかわらけである。ロクロ成形は、1~6の小皿が口径7.8~9.2cm、底径5.8~7.0cm、器高1.5~2.1cm、7~11の大皿が口径11.4~12.8cm、底径6.5~8.2cm、器高3.0~3.8cmである。手捏ね成形は、12~18の小皿が口径8.4~9.8cm、器高1.5~2.1cm、19~23の大皿が口径13.2~13.6cm、器高3.0~3.3cmである。6の墨書きかわらけはロクロ成形の小皿で口径7.8cm、底径5.2cm、器高1.9cmを計り、内底面に平仮名の「そさ」と思われる文字が墨書きされている。

24~32は舶載磁器である。24~26は青磁蓮弁文碗であり、24が口径12cmで厚手の器壁に青緑色の釉薬を厚く施している。25が口径12.5cmで薄手の器壁に淡緑色の釉薬を施す。26が口径12.8cmで器壁が薄く口縁部で外反気味になり、淡青緑色の釉薬を薄くかける。27は青磁劃花文碗で口径12.8cmを計り、内面に蓮華文を片切彫りしており、薄い器壁は口縁部が若干外反し、淡青色の釉薬を薄く施す。28~29は青磁無文碗で口径が13.8cmと15.8cmで灰緑色の釉薬で貫入が多い。30~31は共に同安窯系の高台の無い皿である。内底面に猫描き手の櫛描文が配され、外底面は浅い皿状に削り込まれて露胎になる。32は青白磁合子蓋で口径6.5cm、器高1.6cmで頂部と側面に細弁蓮華文を施し、釉薬は青灰色透明である。

33~34は山茶碗・山皿である。33の山皿は口径8.8cm、底径5.5cm、器高2.2cmで常滑窯系であり、34の山茶碗は東遠江系で口径15.8cm、高台径7.6cm、器高6.0cmを計り、張り付け高台である。35~36は常滑窯で口縁部断面がL・N字状を呈し、口径22.8cmである。37は女瓦で凸面に糸切痕と縄目叩きを施す、水福寺創建期の女瓦(A類)と類似する。

38は火打石であり、白色不透明な石英塊の上面に打撃痕が認められる。39~40は鉄製品の釘と刀子であり、刀子は先端部を欠いており全長は不明だが、残存長19.7cm、刃身幅2.3cm、茎の長さ5.4cm・幅1.4cmで目釘の孔が穿たれている。

41は漆製品で円形を呈した黒漆塗りの蓋である。径10.8cm、中央部器高3.9cm・両端器高3.0cmを計り、天井部が肩部までなだらかな曲線を保つように成形されている。天井部の器壁は厚さ2.3cmと厚手になり、肩部から外周部にかけて薄手に作られている。外面の肩部直下に二条の沈線が巡っており、黒漆は内外面共に丁寧に厚く塗られている。内面にはロクロ痕が残り、さらに使用時の擦痕傷が認められるこから壺類などの蓋に使われて可能性がある。

第3面下~第4面 (図54~58) : 1~64はロクロ成形で糸切底のかわらけで、1~49が小皿のタイプ、50~64が大皿のタイプである。1は口径4.5cm、底径3.6cm、器高1.0cmと小形品である。2は内折れかわらけで口径6.8cm、底径5.6cm、器高1.9cm、器形は底部から内湾気味に立上がり、口縁部が内側に折れ曲がるものである。3~30は口径8.0~9.5cm、底径5.5~8.0cm、器高1.6~2.0cmを計り、口径に比して器高が低く、底径が大きなもので器壁が開き気味に立上がり、浅い皿状の側面観を呈する。31~44も口径に比して器高が低く、底径がやや大きめなものである。底部から開き気味に立上がった器壁が中程で棱をもち、口縁部にかけて内湾気味のものと外反傾向を示すものがある。口径8.2~9.5cm、底径5.3~7.2cm、器高1.6~2.2cmである。45は口径8.6cm、底径5.6cm、器高2.7cm、器形は器高が高めで開き気味に立上がり、中程の棱から丸味のある口縁部になる。46~47・49は口径に比して底径が大きく器高の低いもので、内湾した器形、口径7.6~8.6cm、底径6.1~6.8cm、器高1.6cm前後である。48は器高

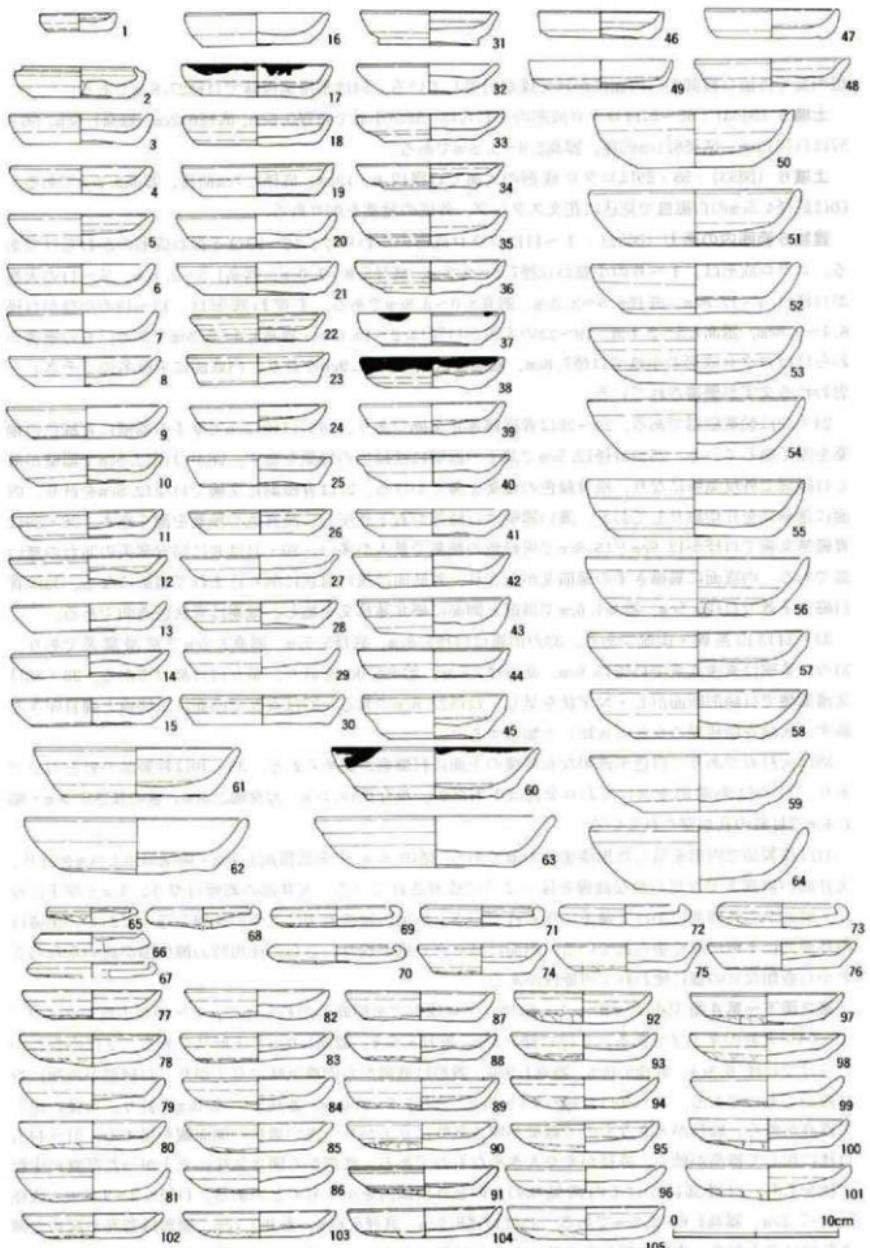


図54 3面下～4面出土遺物（1）

の低いもので外反した器形、口径9.2cm、底径7.3cm、器高1.6cmである。大皿のタイプは、50・64がそれぞれ口径12.2・13.0cm、底径7.0・7.6cm、器高3.5・4.0cmで、口径に比して底径がやや小さく器高の比較的高めのものである。51～57は口径12.8～13.4cm、底径8.0～9.8cm、器高2.7～3.5cmを計り、口径に比して底径が比較的大きなもので、器形は内済氣味に立上がる。58～60は口径12.7～13.2cm、底径6.8～7.7cm、器高3.0～3.5cmで口径に比して底径がやや小さめで、ロクロ痕を残した薄手の器壁をもち、開き氣味の器形である。61～63は口径12.5～14.0cm、底径8.7～9.5cm、器高3.0～3.3cmで開き氣味の器形であるが、器高が低く口径に比して底径がやや大きめに作られている。17・37・38・60のかわらけには口縁部の内外面に煤が付着しており、燈明皿として使用されたものであろう。

65～165は手捏ね成形で丸底タイプのかわらけである。65～73は口縁端部が内折れしたコースター型のかわらけであり、65が小形で口径5.1cm、器高1.0cmを計り、66～73は口径6.1～7.3cm、器高0.9～1.5cmである。74～124は小皿のタイプ、125～164が大皿のタイプに大別される。小皿タイプは、74～105にみられるように体部上半の横位ナデと下半から外底の指頭痕を残す部分との境界に、稜を殆んどもないものである。74～76は側面観がロクロ成形の小皿のように「逆ハ字状」を呈し、口縁端部を丸くおさめたもので、口径7.6～8.8cm、器高1.7cm前後である。77～105の器形は全体に薄手の作りでなだらかな丸味もつ体部で、口縁端部もやや丸味を持たせたものである。口径8.2～9.2cm、器高1.7～2.1cmを計る。106～124は体部上半の横位ナデが強いために下半から外底の指頭痕を残す部分との境に強目の稜を残すものである。106～108は全体に薄手、器壁が開き氣味で口縁端部がやや尖るもので口径8.7～9.3cm、器高1.7cm前後である。109～117は器壁が底部に比べ口縁部が厚くなり、端部が縁帯状氣味に尖るもので、口径9.1～9.7cm、器高1.8～2.0cmである。

大皿タイプは、125が全体に器壁が薄く器高の低いもので、口径10.6cm、器高2.5cmである。126～132は全体に器壁が厚く、体部上半のナデと下半の指頭痕との境の稜が比較的弱いもの、口径11.3～13.2cm、器高2.9～3.4cmである。133～137は丸味のある外底面をもち、やや厚手のもので口径12.1～13.1cm、器高3.1～3.4cmである。140～144は体部上半と下半との境の稜が弱く、外底面が平らなもので口径13.3～14.0cmを計る。145～163は体部上半のナデが強いために下半から外底の指頭痕部分との境の稜が明瞭なもので、口縁端部が尖るものと尖り氣味のものである。口径12.6～13.9cm、器高2.7～3.5cmである。162・163は口径14.3cmと大きいが、器高は前者が2.8cmと低いのに対し、後者が4.0cmと高く、164は口縁部が外反する。125・132・154は内外面に煤が付着しており、燈明皿と考えられる。165は手捏ねかわらけの大皿片で、内面に朱漆が付着していた。

172は径2.4cmのかわらけを擦って加工した円盤である。

166～168は手捏ね成形の白かわらけである。166が口径12.3cm、器高3.4cm程で黄白色の胎土、焼成良好だが粉質である。167・168は内折れの製品で前者は口径7.1cm、最大径8.6cm、器高1.4cmを計り、胎土が灰白色で焼成が硬質なもの、後者は口径7.7cm、最大径8.5cm、器高1.5cm以上あり、黄白～肌色の胎土、焼成はやや軟質である。

170～204は船載陶磁器である。170～173は青磁蓮弁文碗であり、170は口径14.7cmで内彎した薄手の器壁をもち、外面に複弁で幅広の鋪蓮弁文を有する。釉薬は淡緑色の透明である。171は口径15.4cmで内彎氣味の器形をもち、釉薬は二次焼成を受けて白濁した淡い灰緑色を呈し、不明瞭ながらも外面の蓮弁文は幅広いものである。172は口径15.7cmで内彎氣味のやや厚手の器壁をもつ、外面に複弁の鋪蓮弁文を配し、釉薬は淡青緑色透明で厚い。173は口径16cmで内彎する薄い器壁、外面に鋪蓮弁文、釉薬は淡青色半透明。174～177は青磁劃花文碗、174は口径13.9cmで内彎する器形、内面の口縁直下に横位と、内壁に区画を示す縱位の片切り彫り2本がある。175～177は内面に草花文を片切り、177の高台径6.7cm、

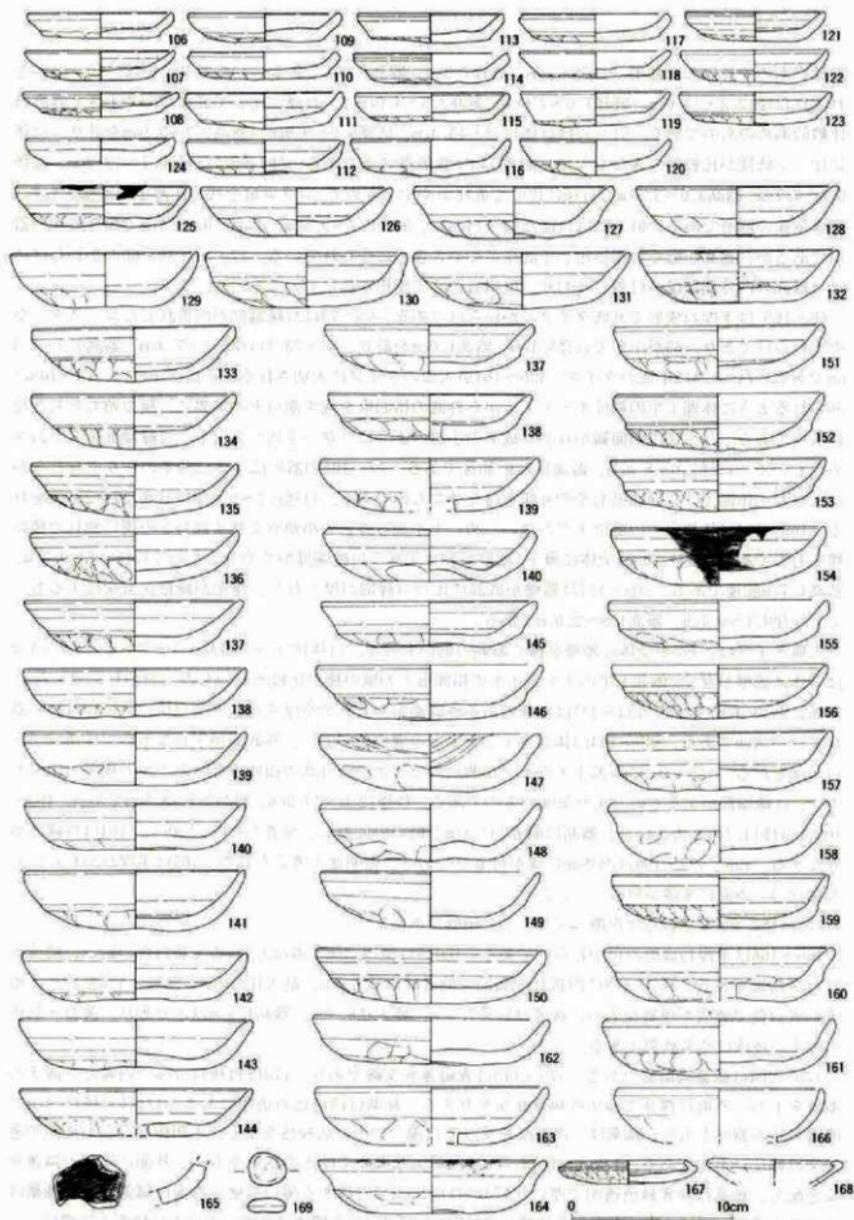


图55 3面下~4面出土遺物(2)

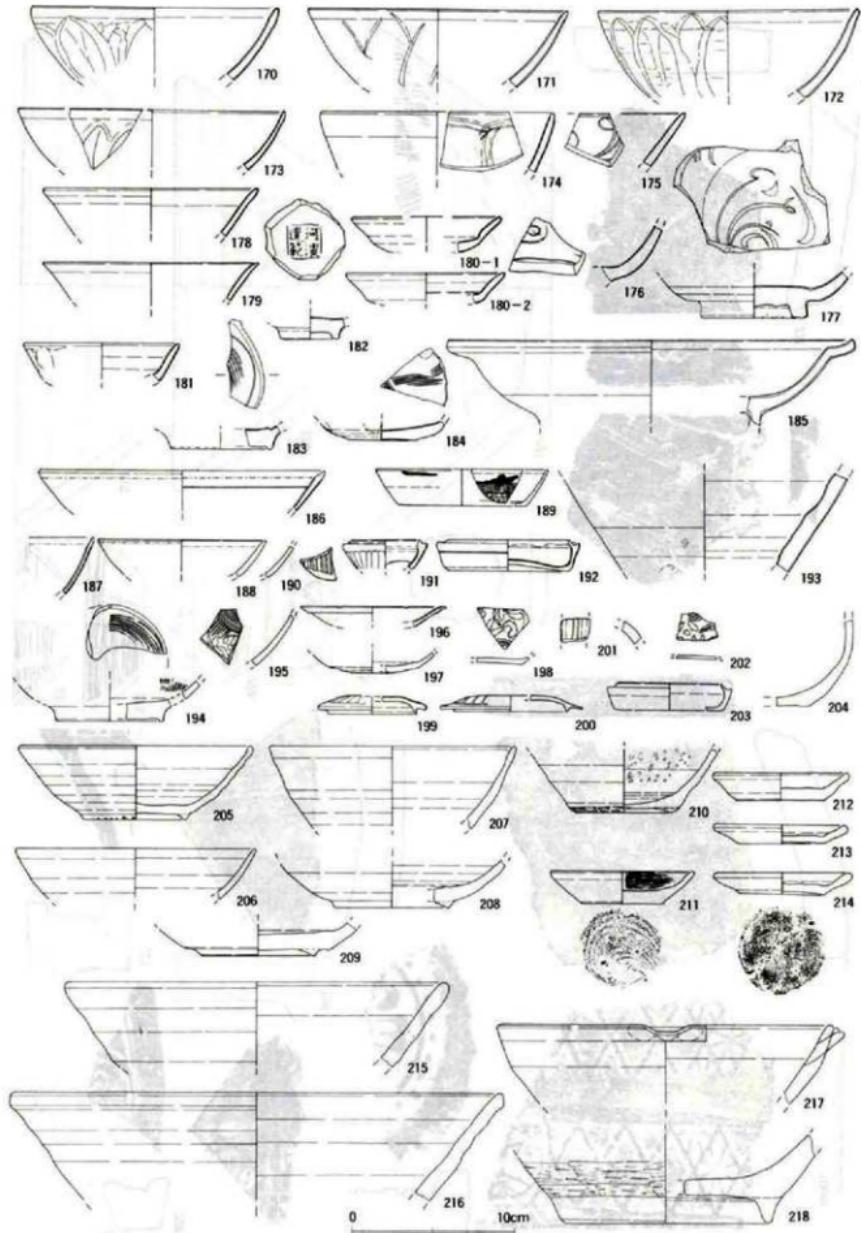


図56 3面下～4面出土遺物（3）

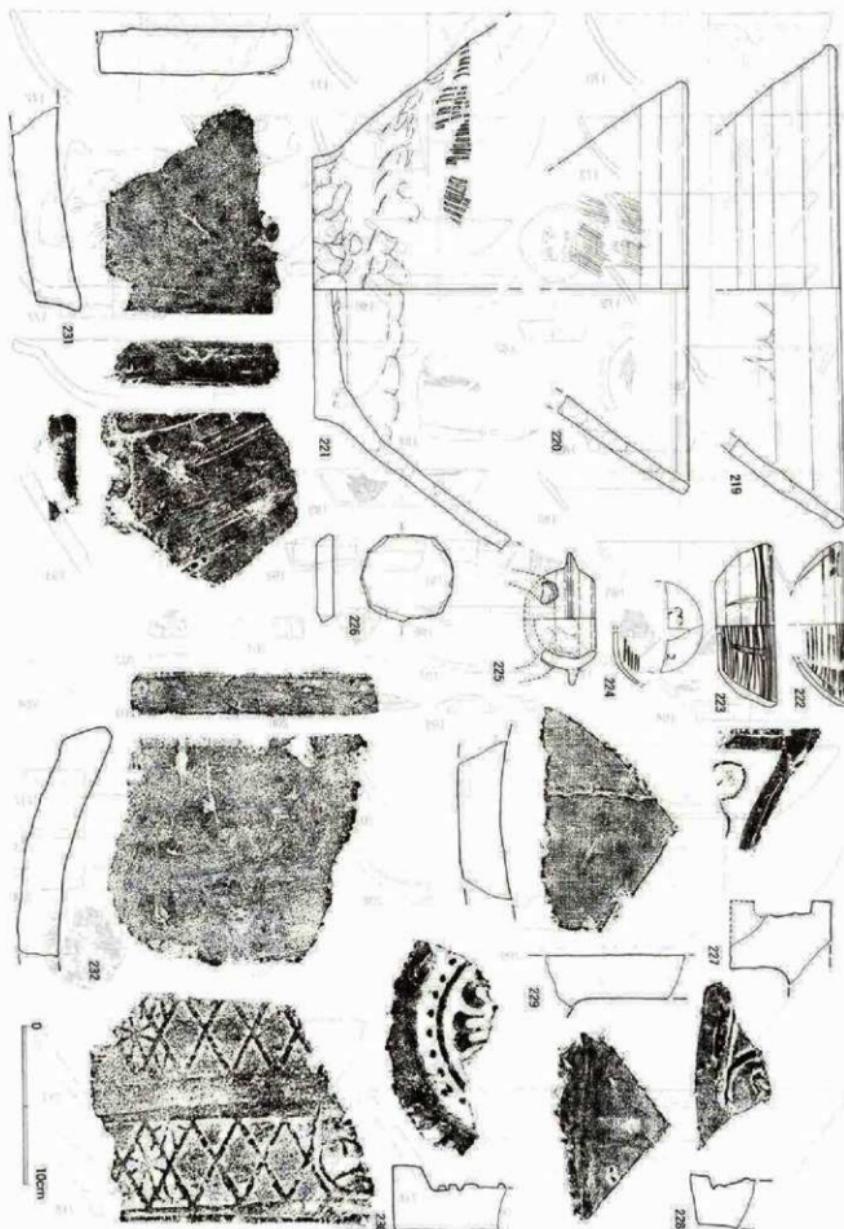


図57 3面下～4面出土遺物（4）

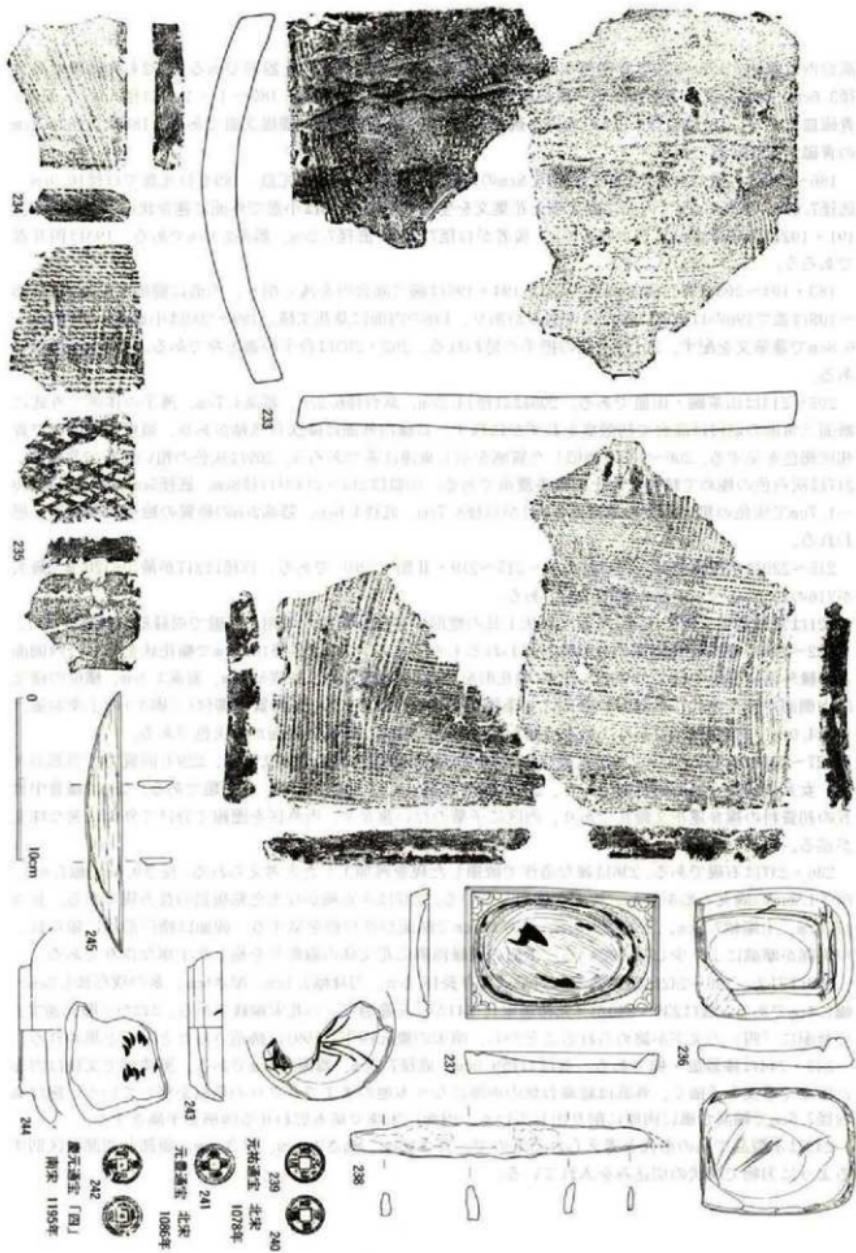


图58 3面下~4面出土遗物 (5)

高台内は露胎。178・179は青磁無文碗、口径13.0cmで口縁部外反した器形である。182も青磁碗で高台径3.6cm、見込みには方形区画中「遺範河溝」の文字スタンプがある。180-1・2は口径9.0・9.4cmの青磁皿である。181は口径9.2cmの青磁小碗である。184は同安窯系の描描文皿である。185は口径24.2cmの青磁無文折縁盤である。

186~193は白磁である。186は口径16.8cmの口元碗、187・188は口元皿、189も口元皿で口径10.3cm、底径7.6cm、器高2.4cmで内面に雷文帯と花葉文を型捺しする。190は小壺で外面に蓮弁状の文様を配す。191・192は合子身で前者が口径4.3cm、後者が口径7.2cm、底径7.2cm、器高2.0cmである。193は四耳壺であろう。

183・194~203は青白磁である。183・194・195は碗で高台内を浅く削り、内面に描描文を施す。196~198は皿で196の口縁部に輪花風の刻みがあり、198の内面に草花文様。199・200は小壺蓋、口径5.2・6.8cmで蓮華文を配す。201は水注の把手と思われる。202・203は合子の蓋と身である。204は綠釉盤である。

205~214は山茶碗・山皿である。205は口径14.2cm、高台径6.2cm、器高4.7cm、薄手の体部で外底に断面三角形の貼付け高台で粉殻痕をわずかに残す。口縁内外面に降灰自然釉があり、須恵質の焼きで青味灰褐色を呈する。206~208も類似した質感を示し東達江系であろう。209は灰色の粗い胎土で常滑系、217は灰白色の極めて精良な胎土の東美濃系である。山皿は212~214が口径8cm、底径5cm前後、器高1.3~1.7cmで灰色の粗い胎土の常滑系、211が口径8.7cm、底径4.6cm、器高2cmの砂質の胎土で湖西系と思われる。

215~220は常滑窯捏鉢（片口鉢I類-215~219・II類-220）である。口径は217が最小の20cm、最大が216の29.5cm、218の高台径12.5cmである。

221は常滑窯號で底径16cm、外面木口状工具の整形する。226が壺片転用の円盤で周縁部に打撃痕あり。

222~224は畿内産楠葉型の瓦器碗と思われるものである。222は口径10.3cmで輪花状を呈し、内側面と口縁外面に横位の暗文がつく。223も輪花形を呈し、口径9.7cm、底径5.4cm、器高3.3cm、横位の暗文は内側面がやや密に、外面が口縁部に4条程が認められた。225は瓦器質で脚付（三脚か）の小型羽釜、口径4.0cm、鉢径8.4cmである。胎土は細かな灰白色、焼成は軟質、表面が黒灰色である。

227~235は瓦類、227・228が永福寺創建期の宇瓦と同類の均正唐草文字瓦、229も同質で瓦当部が消失、女瓦の233~235も同時期であり、232は同寺II期（寛元・宝治年間）と同類である。230は鎌倉中世瓦の初資料の複弁蓮花文鏡瓦であり、内区に子葉のない蓮弁文、内外区を圓線で分けて外側に密な珠文が巡る。

236・237は石硯である。236は雑な造作で破損した硯を再加工したと考えられる。長さ9.4cm、幅7.8cm、厚さ1.8cmの隅丸方形を呈し、両面を使用している。237はきめ細かな黒色粘板岩の長方硯である。長さ11.8cm、上端幅7.2cm、下端幅8.0cm、厚さ1.4cmで断面が逆台形を呈する。硯面は梢円形状に象られ、中央部が摩滅により少し凹んでいる。上面の周縁四隅に花文様の線彫りを施した丁寧な作りである。

238は刀子、239~242は錢である。刀子は残存長18.2cm、刀身幅2.1cm、厚さ6mm、茎の残存長4.2cm・幅1.4cmである。錢は239・240が「元祐通宝」、241が「元豐通宝」の北宋銅錢である。242が「慶元通宝」で背面に「四」の文字が認められることから、南宋の慶元四年（1199）に鑄造されたものと思われる。

243・244は漆器皿・椀である。皿は口径9.0cm、底径7.2cm、器高2.3cmである。黒漆地で文様は内面に朱漆で草文を手描く、外底は總高台状の肉厚になり木地のままでロクロの爪痕を残している。椀は高台径7.5cmで輪高台風に肉厚に削り出している。内面に朱漆で草木思わせる因柄を手描きする。

245は木製品で鳥の形代と考えられるもので、長さ16cm、高さ2.4cm、厚さ5mm、頭部と羽部を区別するように刃物で溝状の切込みを入れている。

5. 第5面の遺構・遺物

現地表下210cm前後、海拔高13.0~13.3mで良好な土丹版築が確認されておらず、全体に有機物腐蝕土と炭化物を含んだ縮まりのない茶褐色粘質土に破碎した土丹を混ぜた弱い地業層で構成される生活面である。遺構の軸方位や密度、遺物の年代観からみて第5面~第4面へと連続する生活面の様子が窺える。この面で検出した遺構は、土壙12基、井戸2基、溝1条、柱穴約80口などである。主な遺物は、多量のかわらけをはじめ、舶載陶磁器が青磁碗皿・白磁碗皿・四耳壺・合子・小壺など、国産陶器が常滑窯壺・甕・捏鉢、山茶碗・山皿があり、この他に瓦類、石製品、金属製品、木・漆製品が出土した。

a. 検出遺構(図59~67、図版9)

土壙1 (図60)

調査区南側中央、E-4グリットで検出された。形状は楕円形を呈し、規模は長径122cm、短径85cm、深さ45cmを測り、断面が逆台形の掘り方を有している。覆土は有機物腐蝕土と炭化物を多く含んだ縮まりのない茶褐色粘質土である。藁状の繊維質がみられるだけで、遺物は殆ど含まれていない。

土壙2 (図60)

調査区北東隅、C-5杭に東隣した位置で検出された。形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸125cm、短軸95cm、深さ25cmを測り、断面が浅い皿状の掘り方である。覆土は炭化物粒・かわらけ粒が少なく縮まりのない暗茶褐色粘質土である。

土壙3 (図60)

土壙2西側でC-5杭に北接した位置で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長径163cm、短径135cm、深さ25cmを測り、断面が浅い皿状の掘り方である。覆土は炭化物粒・かわらけ粒を含んだ暗茶灰色粘質土でやや縮まりがある。

土壙4 (図60)

調査区北端中央、B-4グリットの位置で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長径123cm、短径115cm、深さ20cmを測り、断面が浅い皿状の掘り方である。覆土は炭化物粒・かわらけ粒・有機物腐蝕土を含んだ茶灰色粘質土である。

土壙5 (図60)

調査区北側中央、D-4杭に近接した位置で検出した。形状は円形を呈し、規模は径95cm、深さ50cmを測り、断面が逆台形の掘り方である。覆土は炭化物粒・かわらけ粒・有機物腐蝕土を多く含んだ茶灰色粘質土である。

土壙6 (図60)

調査区北西隅、B-3グリットに位置で検出され、西側は調査区外に拡がる。形状は楕円形を呈し、規模は長径145cm、短径95cm、深さ40cmを測り、断面が逆台形の掘り方である。覆土は炭化物粒・かわらけ粒を多く含んだやや縮まりをもつ茶褐色粘質土である。

土壙8 (図60)

調査区北側の西壁、D-3杭に位置して検出され、主体は調査区西側外に拡がる大きな土壙である。規模は現状で南北長198cm以上、東西長78cm以上、深さ30cmの浅い掘り方を有している。覆土は有機物腐蝕土で中位に遺物を含んだ炭化物層が認められた。

2

3

4

5

B——測量點。C——測量點。D——測量點。E——測量點。F——測量點。G——測量點。
 圖面右側之數字為測量點之編號，左側之數字為測量點之編號。

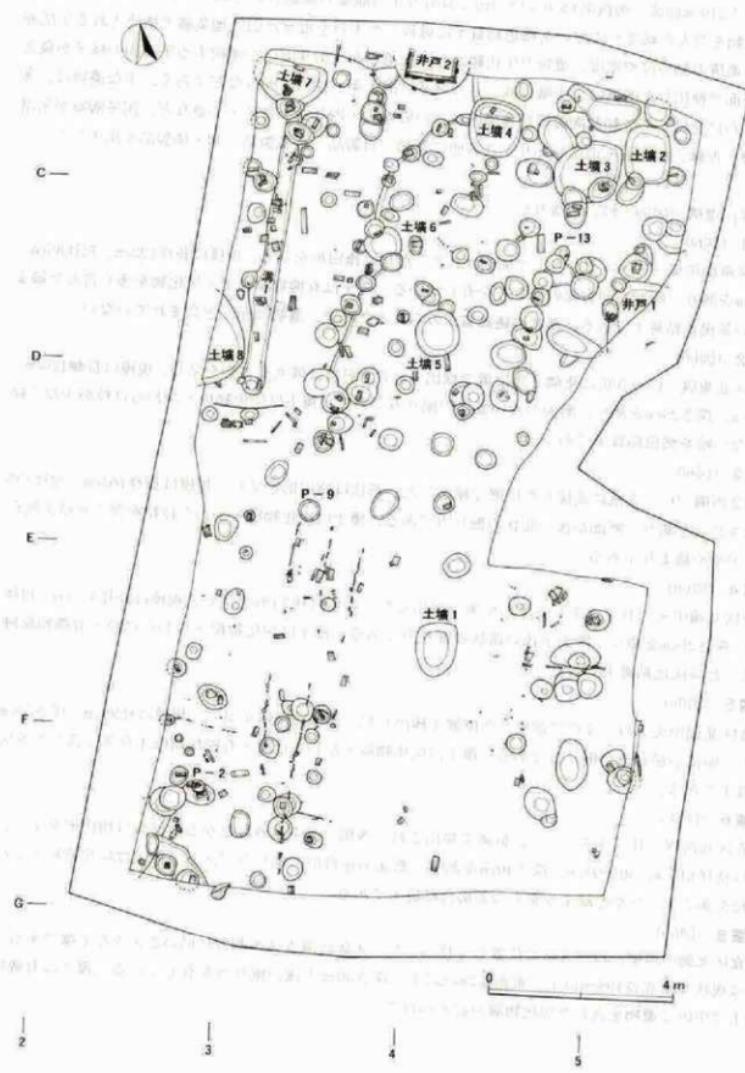


図59 第5面全測図

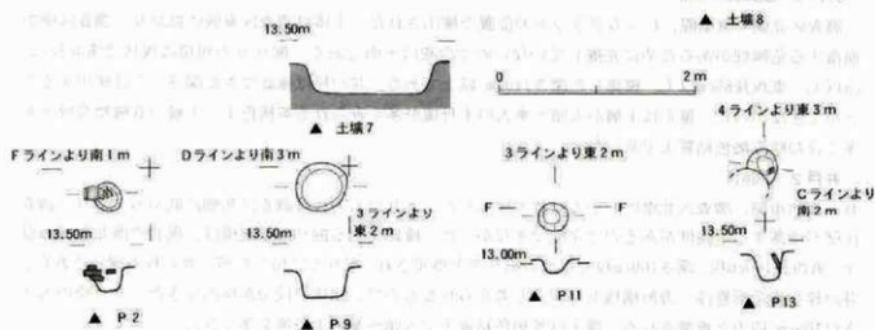
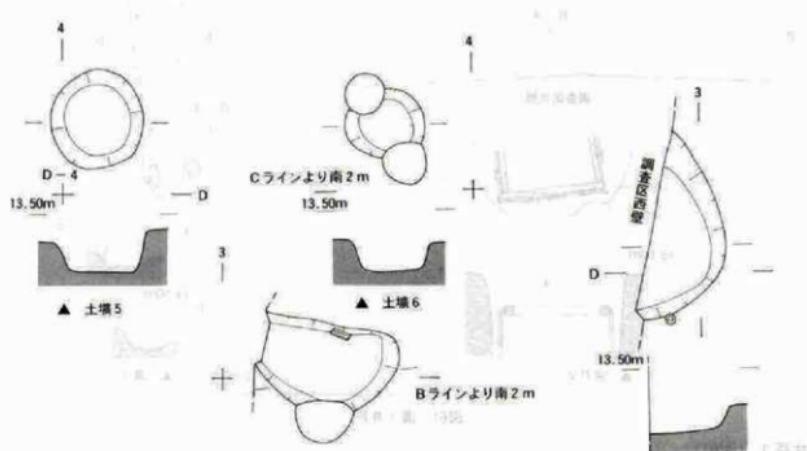
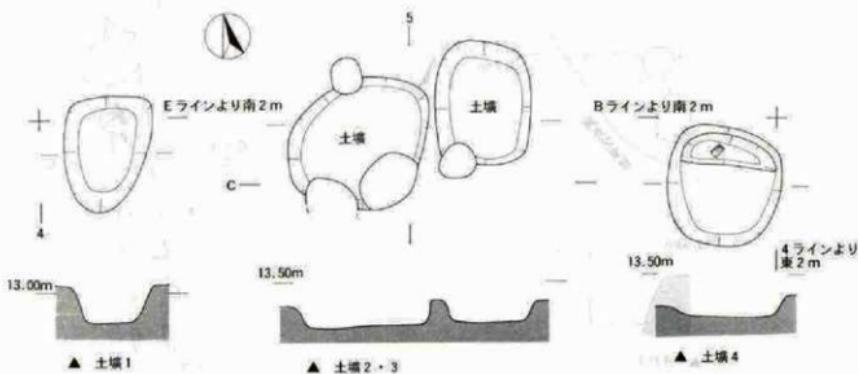


図60 土壌・柱穴

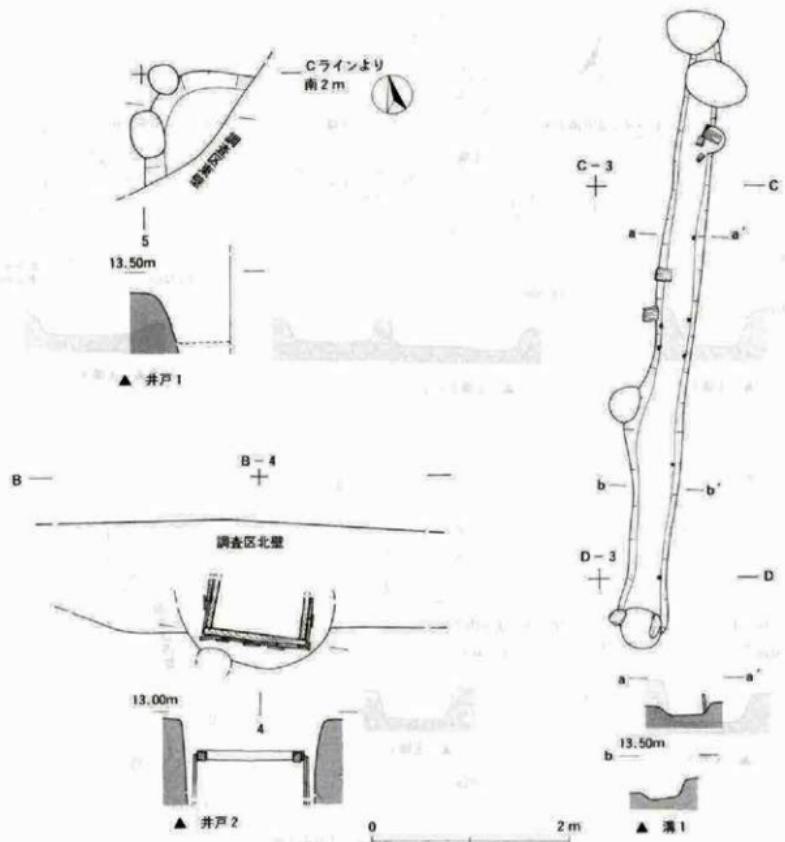


図61 溝・井戸

井戸1 (図61)

調査区北側の東壁際。C-5グリットの位置で検出された。主体は調査区東側に拡がり、調査区壁が崩落する危険性があるために完掘していないので全貌は不明である。掘り方の規模は現状で南北長125cm以上、東西長85cm以上、確認した深さ110cm以上である。井戸枠は確認できた深さからは検出することができなかった。覆土は上層が人頭～拳大の土丹塊が多くみられる茶褐色土、下層が有機物腐蝕土を多く含む暗茶褐色粘質土であった。

井戸2 (図61)

B-4杭南側、調査区北壁にかかる位置で検出した。本井戸も主体は調査区北側に拡がっており、調査区壁が崩落する危険性があるので完掘できなかった。確認できる掘り方の規模は、現状で南北長85cm以上、東西長160cm程、深さ100cm程で円形の掘り方と推定され、掘り方に接した形で井戸枠が確認された。井戸枠の構造形態は「方形横線支柱型」と考えられるもので、横桿一段分が検出できた。井戸枠の大きさは105cm四方と推測される。覆土は茶褐色粘質土で人頭～拳大土丹塊を多く含む。

溝1（図61）

調査区北側西端に近い位置で検出した。調査区西壁に沿って南北方向に走る溝である。規模は南北長6.3m、幅40~60cm、深さ20cm程の断面逆台形の掘り方である。底面の海抜高は北端が13.20m、南端が13.0mを測り、北から南に向かって緩やかな傾斜を持っている。掘り方の基底部に角杭と抜き方が点々と認められた。覆土は溝底に有機物腐蝕土の茶灰色土がみられた。

この他、第4面建物1・2西端の柱通り下層と、その西側にあたる位置で南北方向の同じ軸方位を示す薄い縦板による板壁状の遺構が3列確認された。中央列は位置や軸方位から考えて上面の掘立柱建物に伴うものかもしれない。

b. 出土遺物（図62~67、図版16）

土壤2（図62）：1・2は外底～体部下位に指頭痕を残す手捏ね成形の小皿である。1は口径8.3cm、器高1.6cmで体部の横位ナデが強く外反した器形、2は口径10.3cm、器高1.8cmで横位ナデが弱く稜部から斜め上方に立上がる器形である。3は用途不明の木製品である。板材で長さ21cm、幅2.4cm、厚さ7mmで片側が二ヶ所の山形様に刃物で削り出している。本例は下端が鳥の嘴状に尖り、上の山形が翼をデフォルメした側面観の鳥形代の可能性もある。

土壤3（図62）：4・5は手捏ねかわらけである。4は口径10.3cm、器高1.8cmの小皿で、体部上半の強いナデ指頭底部との境に稜をもち、口縁端部が回帯状に廻る。5は口径14.3cmで境の稜はやや弱く、口縁端が縁帶気味になる。6は器壁の薄い作りの白磁端反碗である。

土壤4（図62）：7は手捏ねかわらけで口径13.5cm大皿、厚手の器壁をもち口縁端が尖り気味である。8は口径14.7cmの青磁劃花文碗、口縁直下に一条沈線と、片切り彫りの蓮華文の上半部がのぞいている。9も青磁劃花文碗である。10は薄手の器壁をもつ白磁端反碗である。11は赤褐色のメノウ質の火打石で、上部に多数の敲打痕を残している。12は女瓦で凹面にタタラ（粘土塊）から粘土板を切った際の痕跡の系切痕、凸面には無数の指頭圧痕を残している。鶴岡八幡宮出土の陰刻劍頭文字瓦（瓦当部の折曲げ技法）の女瓦部と類似した技法で瓦質感を有する。

土壤5（図62）：13はロクロ成形のかわらけ小皿、口径9.3cm、底径7.0cm、器高2.0cmで厚手で内側した器壁をもつ。14は青磁劃花文碗、口縁直下に片切り彫りの二条沈線が認められる。15は鉄釘である。長さ9.5cm、幅7mm程の断面四角形のものである。

土壤6（図62）：16は手捏ね成形のかわらけ小皿、口径10cm、器高2.0cmで厚手の器壁をもち、外底が凹む器形である。17は青磁劃花文碗、口縁直下に片切り彫りの二条沈線が認められる。

土壤7（図62）：18・19は手捏ね成形のかわらけである。18は小皿で口径9.1cm、器高1.7cmで厚手の器壁、外底が平らな器形である。17は大皿で口径14.1cm、器高約3.3cm 全体に厚い器壁で境の稜が弱い。

土壤8（図62）：20はロクロ成形のかわらけ小皿、口径10.2cm、底径7.5cm、器高2.0cmで厚手でやや内側した器壁をもつ。21は青磁描文碗、内壁面に描文と片切り彫りの施文がみられる。

土壤9（図62）：22は常滑窯窯の口縁部である。口縁部は断面N字状を呈し、胎土に白色砂粒が多く黒灰色である。内面に粘土紐の輪積成形時の段と指頭痕を残している。

井戸1（図62）：23~25は黒漆塗りの漆器椀・皿である。23は口径15.0cm、高台径7.5cm、器高6.0cmの椀である。外底はV字溝を彫り、その内側を軽く削り込んだ高台になる。内厚の底部から開いた器壁が体部下位で強く屈曲し、口縁部にかけて直立気味な器形になる。黒漆はやや厚手に塗られており、光沢を有している。24も椀で高台径7.8cm、体部下端に一条沈線を巡らす。23と同じ作りの高台で中央に「十」字彫り込みがある。25は口径9.9cm、高台径7.0cm、器高1.8cmの薄手の皿である。26は銅製品で

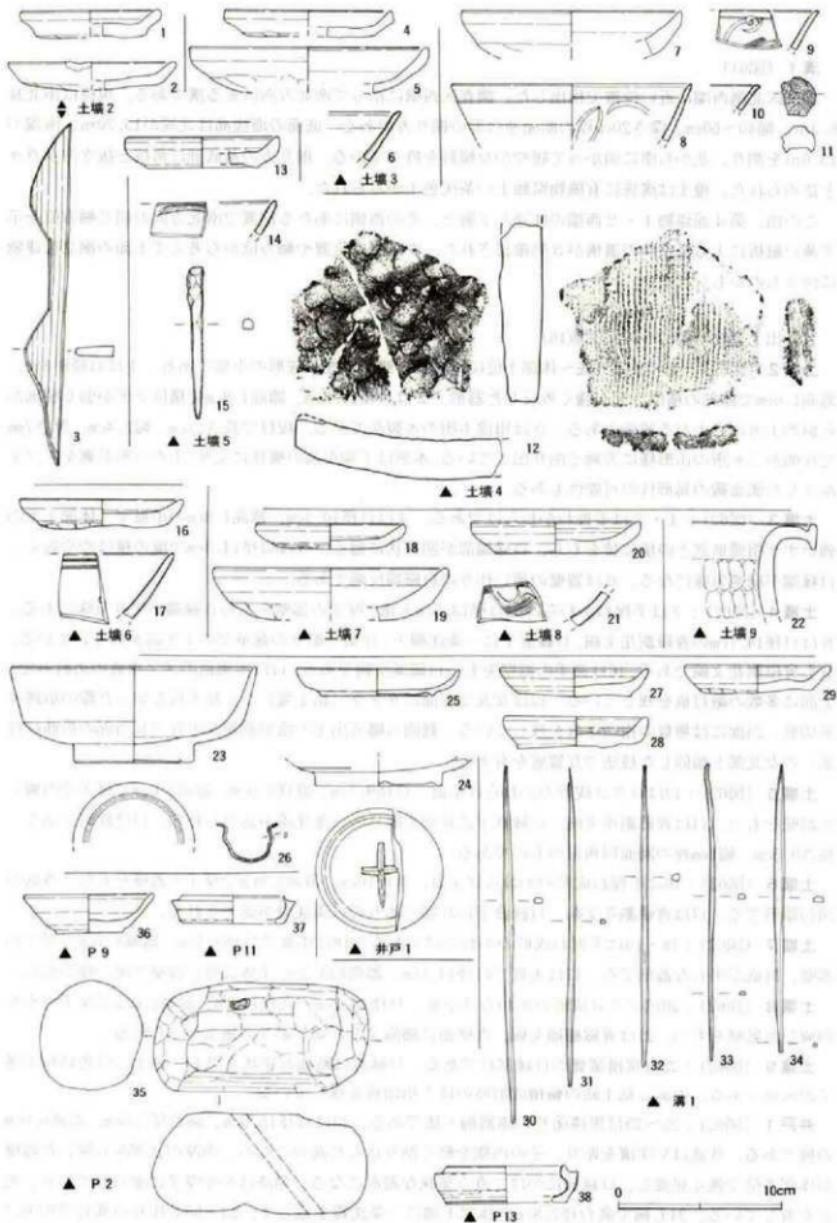


图62 土壤・井戸・柱穴出土遺物

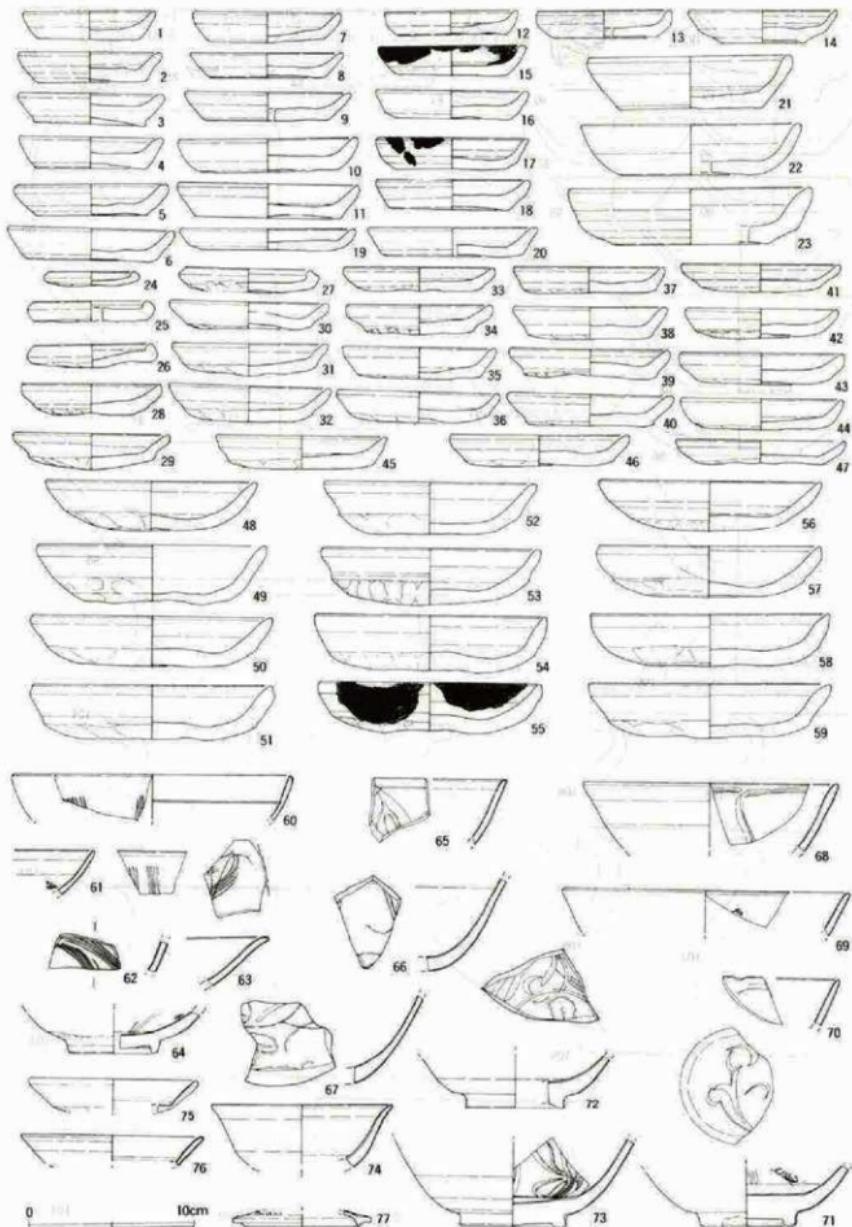


圖63 第4面下～5面出土遺物（1）

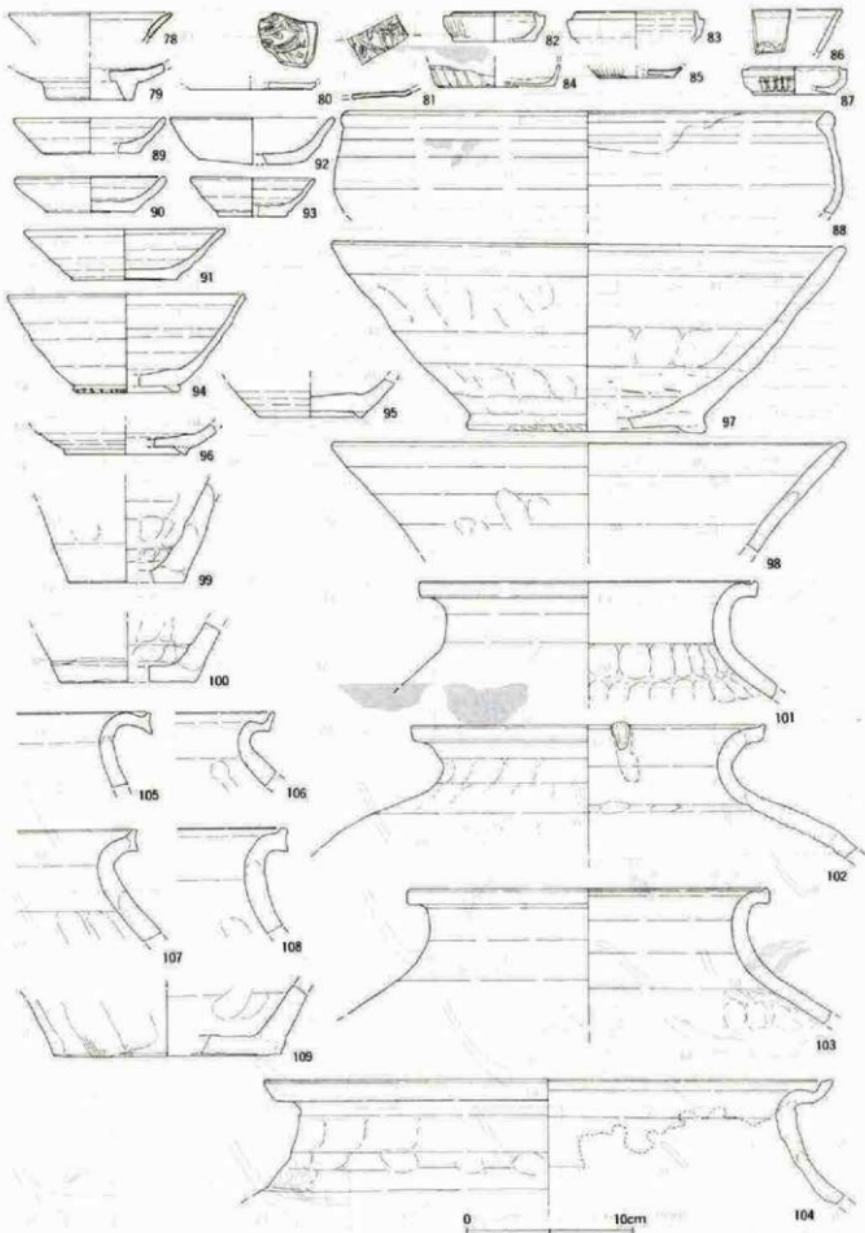


図64 第4面下～5面出土遺物(2)

全長2.5cm、断面の直径3mmの針金状のものを左右対称になるように彎曲した成形を施している。

溝1 (図62) : 26・27はクロ成形のかわらけ小皿で口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.8cm程である。29は手捏ね成形のかわらけ小皿で口径8.8cm、器高1.8cmである。30~34は木製品の箸である。全面を削り出して断面が多角形になり、両端を尖らせたものである。大きさは長いものが22.3cm、短いもので18.4cm程、径6mm前後である。32の片端は黒く焦げており、火点け木に使用されたと思われる。

柱穴 (図62) : 35-P2出土の用途不明の木製品、長さ13.2cm、径6.8cmで両端を丸く削り加工しており、径約8mmの孔が斜め方向に貫通している。36-P9出土の山皿、口径8.0cm、底径4.1cm、器高2.6cmで湖西系の製品と考えられる。37-P11出土の白磁合子身、口径6.4cm、底径6.3cm、器高1.8cmの薄手の器壁である。38-P13も白磁合子身、口径7.2cm、底径7.3cm、器高2.3cmのやや厚手の器壁である。

第4面下～第5面 (図63~67) : 1~20が小皿、21~23が大皿になるロクロ成形のかわらけである。1~9・11・15・20は体部が「逆ハの字形」に立ち上がる器形、口径と底径の比が少なく、器高のやや低いタイプで口径8.3~10.7cm、底径6.2cm、器高1.6~2.0cmを計る。12・13は強く内彎した体部で器高の低いタイプで口径8.0cm、底径6.4~6.2cm、器高1.4~1.7cmを計る。16~18は体部下～中位に稜をもつタイプで口径9.0cm程、底径6.5cm前後、器高1.7~1.9cm、14も体部中位に稜をもち、口径と底径の比が大きいタイプで口径8.9cm、底径5.0cm、器高2.0cmである。19は口径と底径の比が小さく、器高の低いタイプで口径10.5cm、底径7.8cm、器高1.3cmである。21は開いた器壁をもつ口径12.2cm、底径8.5cm、器高3.2cm、22は体部がやや内彎した器形で口径13.2cm、底径8.4cm、器高3.0cm、23は厚手の器壁で体部中位に強い稜をもつ口径14.4cm、底径9.2cm、器高3.4cmである。

24~27が内折れ、28~47が小皿、48~59が大皿の手捏ね成形のかわらけである。24は薄手の小型タイプの内折れで口径5.0cm、器高8mm、25~27も内折れでやや厚手の器壁をもつ口径6.9~7.5cm、器高1.4cm前後である。小皿は28~34・36が体部上半の横位ナデと指頭痕との境に強い稜をもつ口径8.3~9.6cm、器高1.7~2.3cmを計り、37~40・43・46も強い稜をもつ全体に厚手の器壁で口径9.0~10.5cm、器高1.7~2.3cm、42~45は稜が弱いもので口径9.2~10.2cm、器高1.6~2.2cm、47は薄手の器高の低いタイプ口径10.3cm、器高1.4cmである。51~55・57・59は強い稜をもち全体に厚手の器壁で口径12.8~14.5cm、器高3.0~3.4cm、48~50・56・58は稜が弱いタイプ口径12.8~14.4cm、器高3.0~3.4cmである。15・17・55は煤が付着した燈明皿である。

60~88は船載陶磁器である。66~64・75・76は同安窯系の青磁櫛描文碗・皿、60が口径16.8cmで外面に縦位の櫛描文、内面には口縁下にヘラ描き沈線が巡り、やや内彎した口縁を呈する。61は内外面に櫛描文を施し、62・63は内面に櫛描文が認められ、63が口縁外反する。64は高台径5.3cmを計り高台脇から高台内が露胎である。75・76は遺存部に櫛描文は認められないが、胎土・釉薬の特徴から無高台の皿であろう。65~73は龍泉窯系の青磁劃花文碗であり、内面の文様が片切り彫りで蓮華文を描くもの(65~67・72・73)と、数条の沈線により区画して飛雲文を配すもの(68~70)に分けられる。72・73は高台径5.9~6.2cmで内壁と見込に蓮華文を施し、高台脇から高台内は露胎である。68・69はそれぞれ口径15.3~17.0cmを計り、71は高台径5.5cmで内壁に区画線と飛雲文、見込に蓮華文を描く。64は口縁部に輪花様の刻みを入れる。74は無文碗で口径11.0cmで外反した口縁である。

77~85は白磁である。77は口径8.4cmで頂部に蓮弁文を配した短頸蓋の蓋であろう。78は皿で口径10cmの外反気味の口縁をもつ、鎌倉では珍しい平底皿である。79は端反腕の底部で高台径5.3cm、高台を断面逆台形に高く削り出す。80・81は内型捺し作り小皿で口元になるものであろう。内底面の文様は80が草花文、81に魚と水草らしき文様があり、共に薄手の作りである。82~85は合子身で外側面に蓮弁様を型捺しする。86・87は青白磁皿・合子身である。86は口元で内面に型捺し文、87が外側面に蓮弁様を型

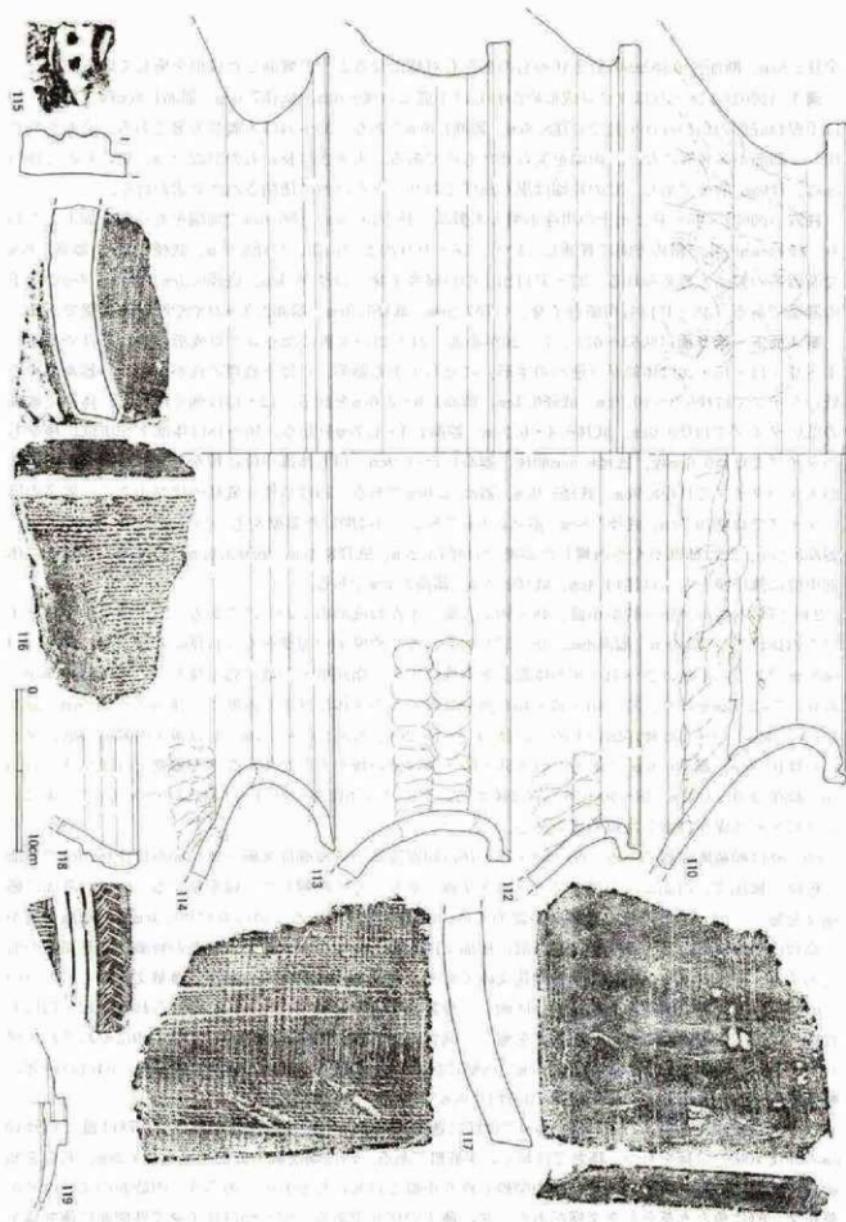


图65 第4面下~5面出土遗物(3) ——西周时期青白釉陶器

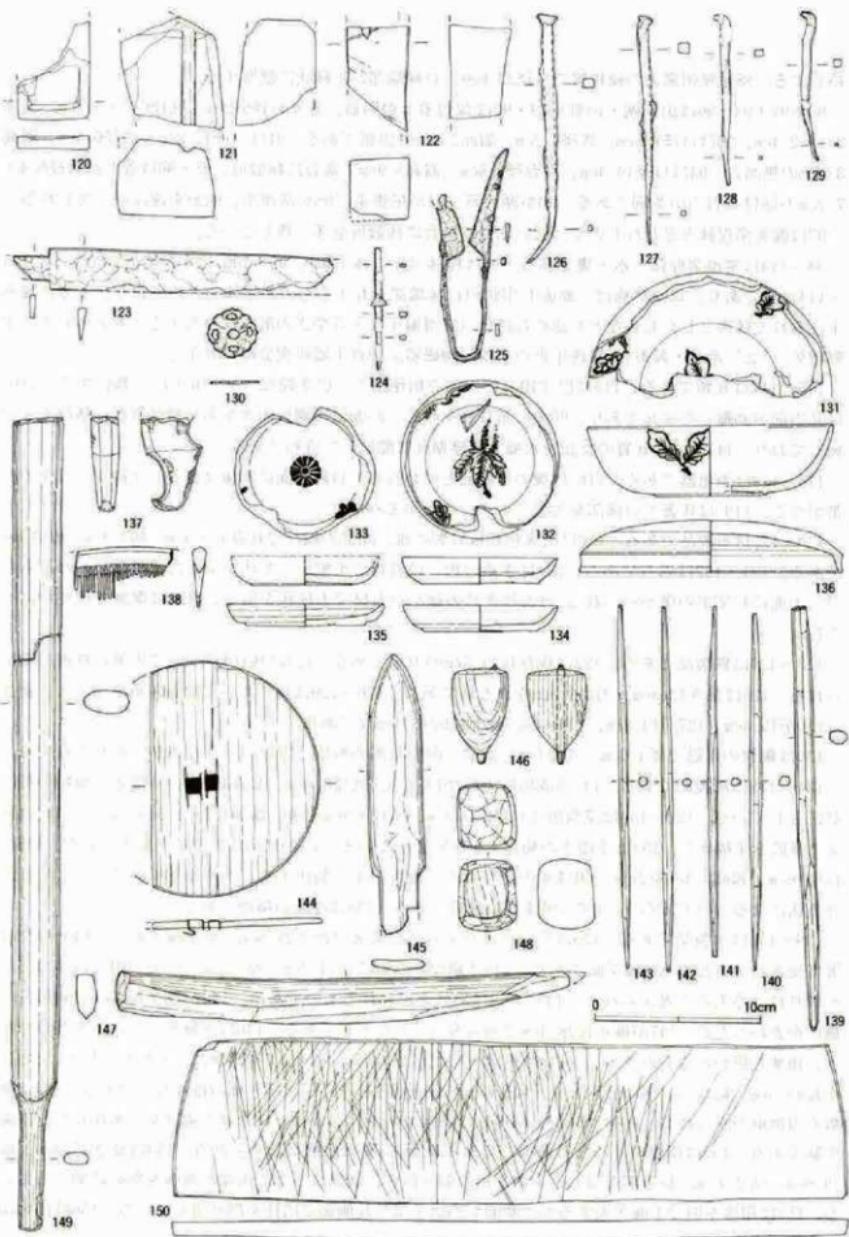


圖66 第4面下～5面出土遺物 (4)

捺する。88は泉州窯系の綠釉盤で口径23.6cm、口縁端部が玉縁状に肥厚する。

89～91・93～96は山茶碗・山皿、89・90は煤付着し澄明皿、各々口径9.2cm、底径6.0・5.7cm、器高2.1・2.4cm、93は口径7.6cm、底径4.2cm、器高2.4cmの山皿である。91は口径12.2cm、底径6.4cm、器高3.1cmの無高台、94は口径14.4cm、高台径6.5cm、器高5.9cmで高台に初穀痕、95・96は各々高台径6.4・7.2cmの貼付高台の山茶碗である。90が湖西系、94が尾張系、95が常滑系、他が東遠江系と思われる。

97は渥美窯捏鉢と思われるもので、低い貼付け高台に初穀痕を多く残している。

98～114は常滑窯捏鉢・壺・甕である。98は捏鉢（片口鉢I類）、99・100は小型壺底部である。101～114は甕であり、口縁形態は、断面L字状の口縁端部を有するものが主体を占めており、上方に摘み上げられて縁帶としたものなども認められた（常滑編年4・5型式の形態に相当すると考えられる：中野晴久「〔2〕常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年）。

115～117は瓦類である。115は巴文鏡瓦で永福寺創建期の三巴文鏡瓦（Y A II 02b）と類似する。116は瓦当部が剥離した字瓦であり、凹面に布目痕を残し、凸面には繩目叩きがあり頭部付近に横位ナデを施しており、117も同じ瓦質の女瓦で永福寺創建期瓦に酷似した資料である。

118・119は須恵器である。118は甕の口縁部と思われる。口縁外面に鋸齒文風のヘラ描きと二条の凸帯が巡る。119は坏蓋で口縁部を欠失、ボタン状のつまみが付く。

120～122は石製品である。120は灰黒色粘板岩製の硯、陥部の破片で残存長5.9cm、幅4.4cm、厚さ9mmである。121・122は砥石である。121はきめの粗い砂岩質で不整形の形状を呈した荒砥と思われるもので、上面にU字形の溝がみられる。122はきめの細かい石材で方柱状を呈し、砥面は摩滅で緩やかにへこむ。

123～129は鉄製品である。123は残存長14.5cmの刀子である。124は残存長7.5cmで火箸か鐵鏃と考えられる。125は長さ12.8cm、刃部6.6cmを計る歎である。126～129は釘すべて断面四角形を呈し、長さは126が15.4cm、127が13.8cm、128が10.3cm、129が9.4cm程度である。

130は銅製の釘鍔で径3.0cm、孔径7mmを計り、四弁花風の形状で雲型の小さな透かし彫りを有する。

131～138は漆製品である。131は漆器椀で口径14.7cm、底径6.6cm、器高4.3cm、手描きで植物の葉を意匠としている。132～134は漆器皿で口径約9.3cm、底径6.9cm前後、器高1.3～1.6cmである。132は桐文の意匠を手描きし、133は手描きの菊花文を意匠としている。134・135は黒漆塗り無文である。136は口径16cm、器高3.3cmを計り、黒漆塗の蓋でロクロ挽きにより製作する。内外面を甲高に加工した合せ蓋状になるものであろう。137は黒漆塗の脚である。138は漆塗の横檻である。

139～156は木製品である。139は片側だけを尖らせた菜箸で長さ25.8cm、幅1cmである。140～143は箸で長さ21.2～22.2cm、幅7mmである。144は鍋などの蓋で径14.3cm、厚さ4mm、中央の樹皮紐はつまみを取り付けるものと考えられる。145・147は形代と思われるものである。145が残存長17cmで劍形又は鎌形を表わしもの、147が推定長28.4cmで両切刃つくりの刀形である。146は円錐形で芯に釘を差しておらず、独楽と思われるものである。148は用途不明だが正方形に近い加工を刃物による削りで施す。149は全長49.5cm、幅3cm、柄の長さ8cm・幅1.6cmで断面梢円形を呈した叩き棒の様なものである。150は無数の刃物痕がみられる。曲物の底板を転用した俎板である。151・152は台部と脚部を一本作りした連座下駄である。153は草履の芯になる薄板であり、表面に薺の圧痕が認められる。154は長さ35.3cm、幅13.6cm、高さ7cm、長方形を呈し、上部を粗く削り抜き、底部は平らで両端の側面を斜めに加工している。155は用途不明で下面欠失するが、断面が凸状を呈し片側面に円柱を削り出している。156は径40cmの曲物の底板である。

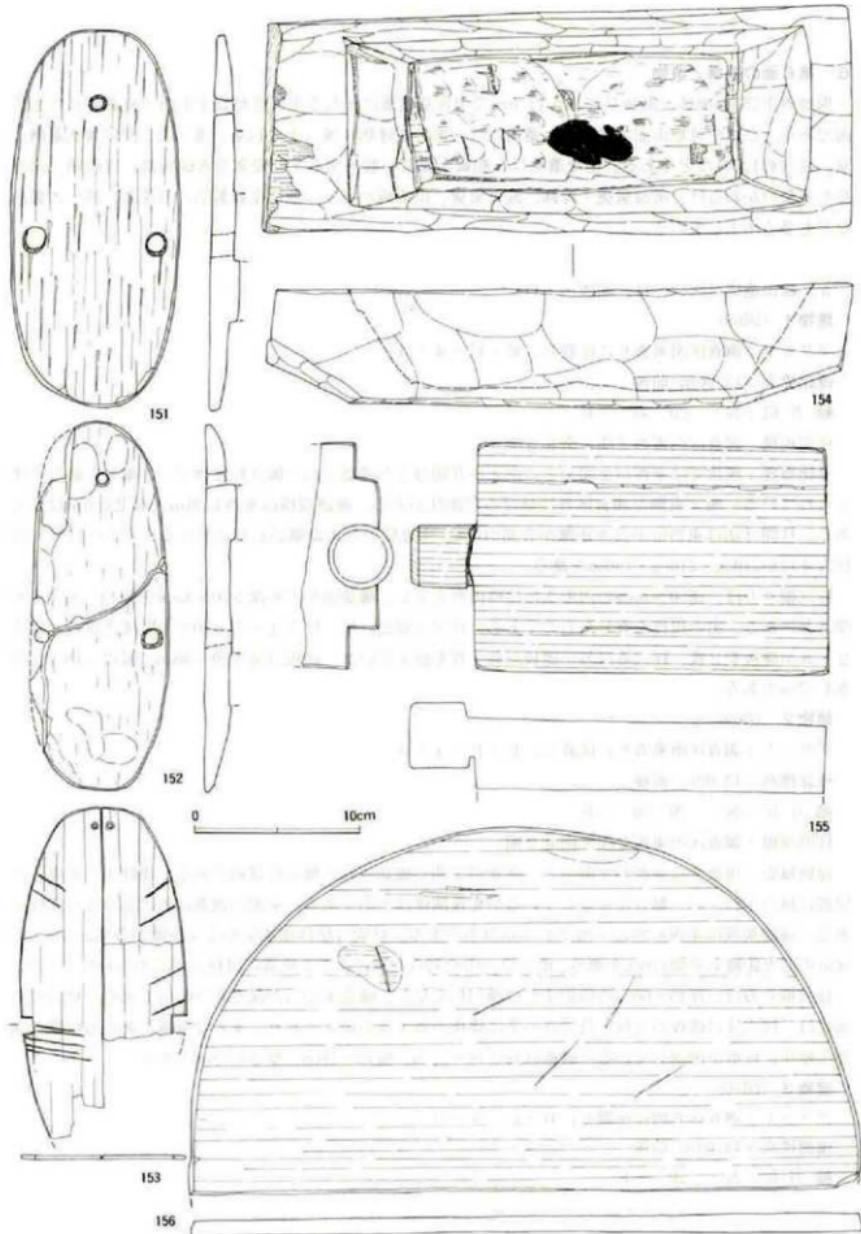


圖67 第4面下～5面出土遺物（5）

6. 第6面の遺構・遺物

現地表下250cm前後、海拔高12.9~13.0mで中世基盤層にあたる黒褐色粘質土上面で確認された生活面である。この中世地山面で検出した遺構には、掘立柱建物4棟、土壙14基、溝1条、閉炉裏状遺構1基、柱穴約120口などである。主な遺物は、船載陶磁器が龍泉窯系・同安窯系青磁碗皿、白磁碗、国産品が多量のかわらけ、常滑窯甕・捏鉢、渥美窯甕、山茶碗があり。他に金属製品、石製品、漆・木製品なども多く出土している。

a. 検出遺構 (図68~71、図版10・11)

建物1 (図69)

グリット：調査区南東寄りに位置し、E・F-4・5

確認標高：13.00m 前後

軸方位：N - 20° 30' - E

柱間規模：調査区内東西2間×南北3間

建物概要：現状では東西が2間分と、南北が3間分とが確認された掘立柱建物で、土壙2を壊して建てられている。南・東側が調査区外に延びる可能性がある。確認規模は東西4.20m・南北6.0m以上である。柱間寸法は東西位が芯々距離が各間210cm、南北位の芯々距離がC列にあたる柱穴3~柱穴11の柱穴4口が210cm・210cm・180cmを測る。

柱穴掘り方は、径50~70cmの円形または梢円形を呈し、確認面からの深さ50~85cmを測り、大きさや深さ共にある一定の規模を有したものである。柱穴の底面には、柱穴4・7・10で土丹塊と礎板、柱穴2・8が礎板を2枚、柱穴6以外に礎板が各1枚を据えていた。礎板は長さ20~30cm、幅12~18cm、厚さ4~7cmである。

建物2 (図69)

グリット：調査区南東寄りに位置し、E・F-4・5

確認標高：13.00m 前後

軸方位：N - 20° 30' - E

柱間規模：調査区内東西2間×南北2間

建物概要：現状では東西が2間分と、南北が2間が確認された掘立柱建物である。建物1と近接した位置に検出され、同一軸方位を呈しているが先後関係は不明である。東側が調査区外に延びる可能性がある。確認規模は東西4.20m・南北4.20m以上である。柱間寸法は東西位が芯々距離が各間210cm、南北位の芯々距離も各間210cmを測る。南北位の中央列の北端にあたる位置には柱穴が認められなかった。

柱穴掘り方は、径40~60cmの円形または梢円形を呈し、確認面からの深さ40~65cmである。柱穴の底面には、柱穴4に礎板が2枚、柱穴3~7に礎板が各1枚が据えており、また北東隅にあたる位置の調査区壁中に柱痕を確認している。礎板は長さ18~25cm、幅10~18cm、厚さ3~8cmである。

建物3 (図70)

グリット：調査区北側に位置し、B・C-3~5

確認標高：13.00m 前後

軸方位：N - 20° - E

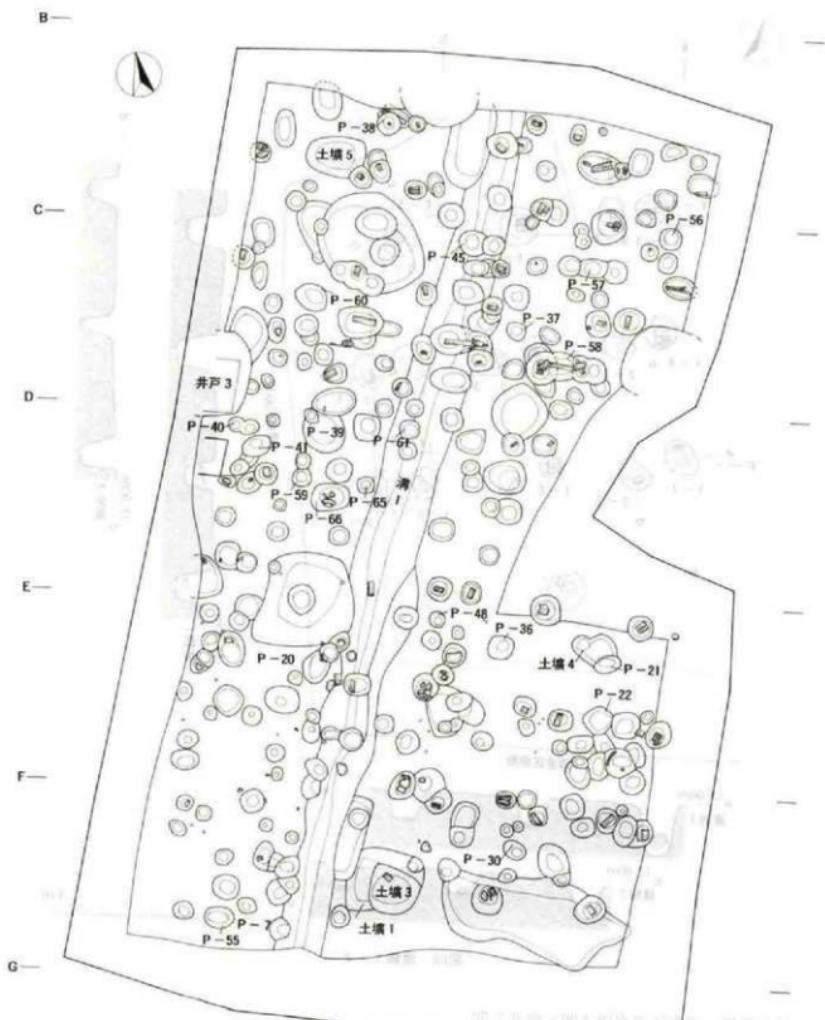


図68 第6面全測図

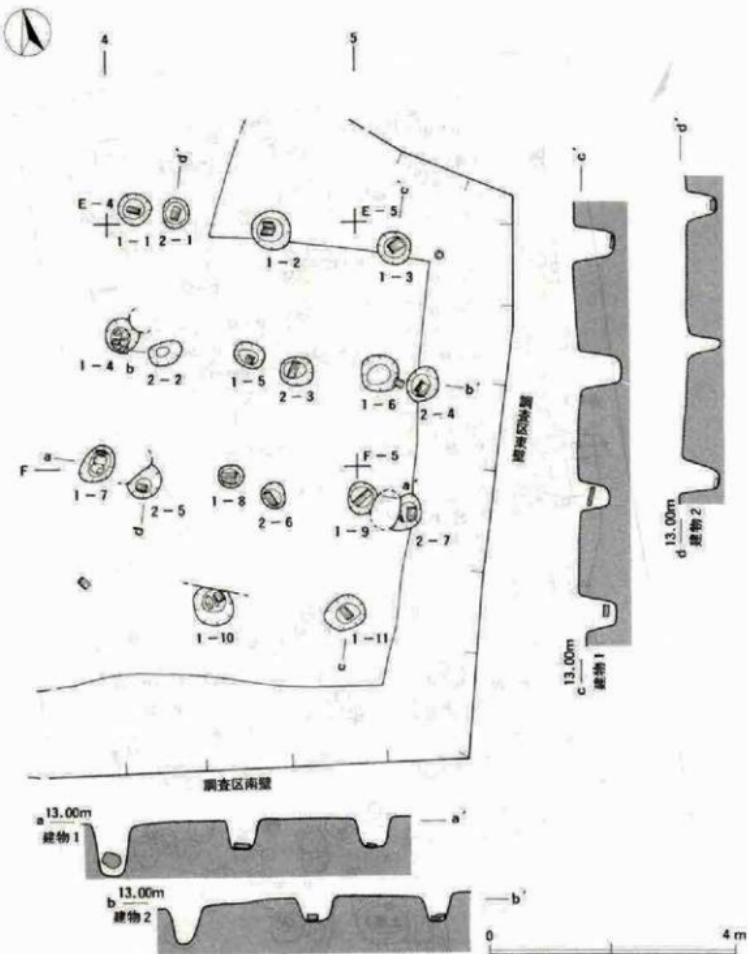


図69 建物1・2

柱間規模：調査区内東西4間×南北2間

建物概要：現状では東西が4間分、南北が2間が確認された掘立柱建物である。建物1・2と近い軸方位を呈しており、建物4と重複した位置にあたるが、先後関係は不明である。北側と東・西側の調査区外に延びる可能性もある。確認規模は東西7.66m・南北4.20m以上である。柱間寸法は東西位の芯々距離が西から190cm・180cm・198cm・198cmを測り、南北位の芯々距離が各間210cmである。調査区内で確認された南東隅にあたる位置の柱穴は第5面の井戸により壊されていた。

柱穴掘り方は、径40~80cmの円形または橢円形を呈し、確認面からの深さ30~65cmである。柱穴の底面には、柱穴4・14に礎板が3枚、柱穴2・3・5・10・12~14に礎板が各1枚が据えられていた。礎板は長さ12~45cm、幅10~18cm、厚さ6~10cm程度、角柱を一定の長さに据え切断した軸用材を使用しており、その後に縦割りしたものである。さらに柱穴14には幅18×12cmの角柱痕が残っていた。

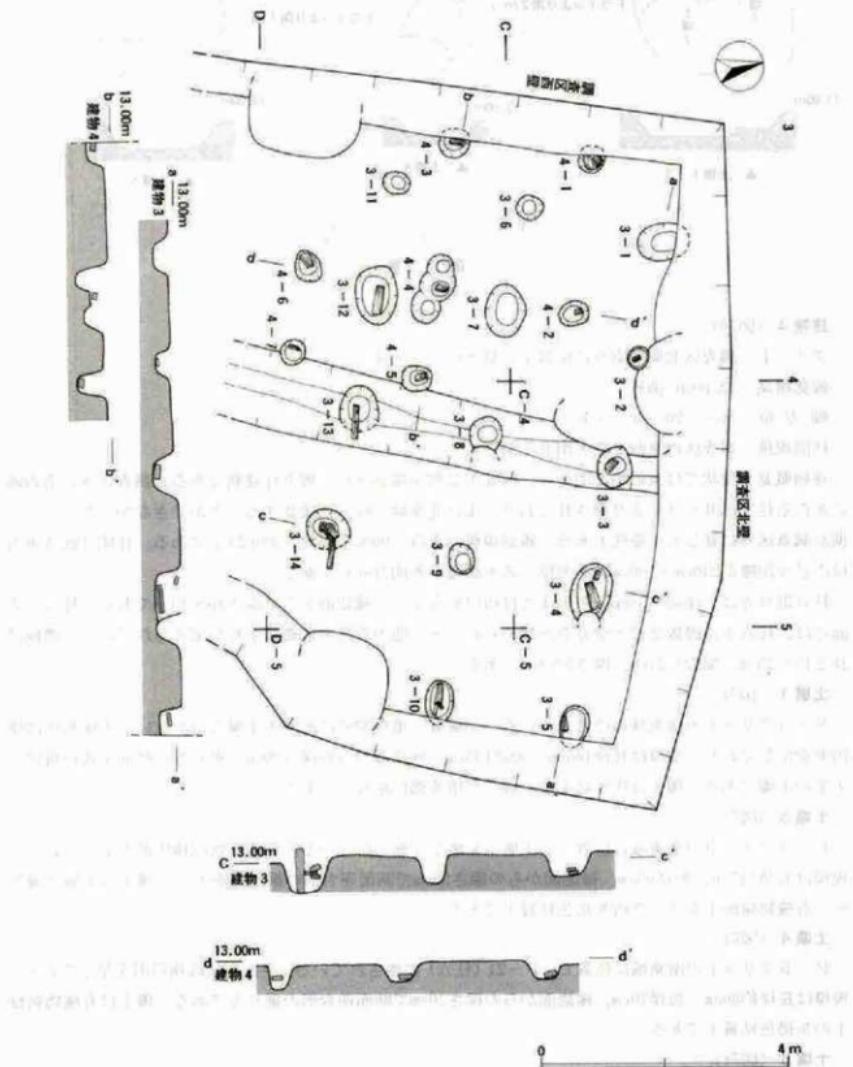


図70 建物3・4

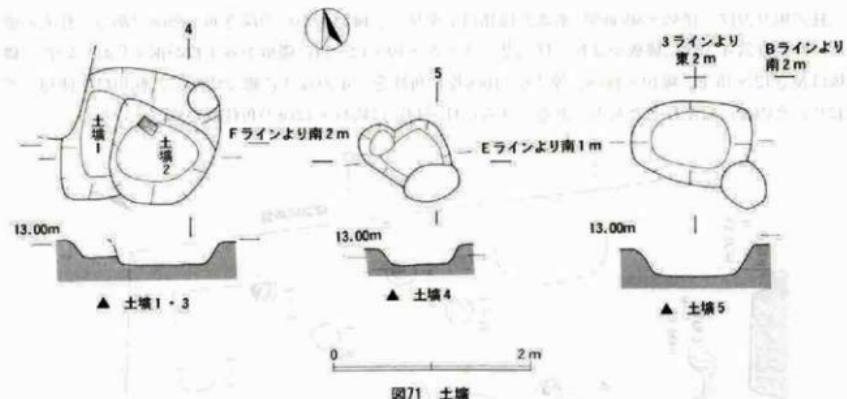


図71 土壌

建物4 (図70)

グリット：調査区北側西寄りに位置し、B・C-3・4

確認標高：13.00m 前後

軸方位：N- $20^{\circ}30'$ -E

柱間規模：調査区内東西2間×南北2間

建物概要：現状では東西が2間分と、南北が2間が確認された掘立柱建物である。調査区内の南北隅にある柱穴は井戸3により壊されており、また北東隅の柱穴は確認することができなかった。西・北側が調査区外に延びる可能性もある。確認規模は東西3.90m・南北4.30m以上である。柱間寸法は東西位の芯々距離が240cm・150cm、南北位の芯々距離が各間210cmを測る。

柱穴掘り方は、径40~65cmの円形または楕円形を呈し、確認面からの深さ30~45cmである。柱穴の底面には、柱穴1に礎板2枚と伊豆石が認められ、その他の各柱穴に礎板1枚が据えられていた。礎板は長さ15~25cm、幅12~21cm、厚さ5~8cmである。

土壤1 (図71)

F-3グリットの南東域に位置している。土壤2と重複関係にあり本土壤の方が古い。平面形状は楕円形を呈しており、規模は長径165cm、短径135cm、確認面からの深さ20cmで断面が浅い皿状の大型の土壤である。覆土は炭化物を多く含んだ暗茶褐色粘質土である。

土壤3 (図71)

F-3グリットの南東域に位置し、土壤1を壊して掘られている。平面形状は楕円形を呈しており、規模は長径117cm、短径95cm、確認面からの深さ25cmで断面逆台形の掘り方をもつ。覆土は下層に薄茶色の有機物腐触土を含んだ暗茶褐色粘質土である。

土壤4 (図71)

E-5グリットの南東域に位置し、P-21(柱穴)に壊されている。平面形状は楕円形を呈しており、規模は長径約80cm、短径70cm、確認面からの深さ20cmで断面逆台形の掘り方である。覆土は有機物腐触土の茶褐色粘質土である。

土壤5 (図71)

調査区北西隅のB-3グリットの中央に位置している。平面形状は長円形を呈し、規模は長径123cm、

短径85cm、確認面からの深さ35cmで断面逆台形の掘り方である。覆土は炭化物・かわらけ粒を少量含んだ黒褐色粘質土である。

溝1 (図68)

調査区中央を南北に走る薬研堀形の古手の溝であり、南北は調査区外に延びている。主軸方位はN-21°-Eを計り、掘立柱建物の建物1~4の南北位に近い軸方向を示している。建物3・4は本溝が埋め立てられた後に造られた建物である。

規模は、調査区内での長さが18.35m以上あり、上幅が110~150cm、下幅が30~40cmを測り、断面は整った「V字形」をていており、確認面からの深さ60~80cm程である。溝底面の海拔高は、調査区北壁際が12.4m程であり、南壁際が12.2mを計り北から南に向かって緩やかな傾斜を有している。掘り込み面は最下層の中世基盤層上面であるが、調査区北壁及び3軸上の土層断面の観察から、当初の開削後に一度の修復または凌涙が加えられていたことが確認されている。覆土は上層にU字形に堆積した厚さ50cm程の木製品や木片を多く含んだ締まりのない茶灰色粘質土がみられ(修理・凌涙後に堆積)、その下は中世地山に近く締まりのややある黒褐色粘質土が薄い砂層を挟んで2層が認められた。

井戸3 (図71)

調査区西壁北寄り、D-3杭付近に位置している。この井戸は西壁際にあり東側半分だけが確認されたもので、調査中に1m程掘り下げたところで壁が崩落してしまい危険を伴うと判断されたので、完掘はしていない。掘り方は現況で隅丸方形と推定され、規模は上幅が南北1.8m、東西1m以上、深さは1.2mまで確認しており、切り立った壁面を呈していた。掘り下げた深さからは井戸枠の横桟や支柱を確認することができなかった。しかし残っていた側板の範囲からみて規模は、一辺約1.2mの方形横桟支柱型の井戸と推測される。

囲炉裏状遺構 (図71)

井戸3に南隣した調査区西壁際に位置している。一边の長さは南北90cm、東西は50cmまで確認され西壁外に延びるが、方形を呈する囲炉裏と考えられるものである。幅6cm、厚さ1cm程の横板が東辺と南・北辺に遺存しており、木枠上部は焼け焦げている。木枠内には浅い掘り込みが認められ、覆土は炭化物と焼土を多量に含んでいた。この遺構に伴う建物は検出することができなかった。

b. 出土遺物 (図72~82・図版17・18)

建物1 (図72) : 1~7は各柱穴から出土した。1は手捏ねかわらけの大皿で口径13.8cm、器高3.3cm、厚手の器壁をもつ。2は龍泉窯系の青磁劃花文碗で高台径6.1cm、内底面に蓮華文を片切り彫りする(柱穴4)。3は手捏ねかわらけの大皿で口径14.0cm、器高3.6cm、厚手の器壁をもち口縁端部尖り気味である(柱穴7)。4は柱穴3出土の白磁合子蓋で口径7.6cmである。頂部の縁に輪花文を置き、中に菊花文の一部が認められ、薄い器壁で白色緻密な素地である。5はロクロ成形の小皿で口径9.2cm、底径6.9cm、器高1.8cm、薄手の器壁で外反した体部である。6は土師器でS字状口縁台付甕と思われるもので、外面にハケ目痕、内面が指頭痕とナデ調整を施している(柱穴6)。7は同安窯系の青磁櫛描文碗で内外面に櫛描文を施している。

建物2 (図72) : オリーブ柱穴3から出土した遺物である。8は手捏ね成形のかわらけ小皿で口径8.5cm、器高1.4cm、底部に比して体部が薄い器壁である。10は涅美窯甕で口縁部を「く」の字に外反させており、頸部への貼付け状態がよくわかる。9は鹿角を加工したもので長さ9.5cm、幅1.6~2.6cm、厚さ約5mmである。両端は粗く切断し、裏面を刃物で丁寧な削りを施すが、未製品なのか、余材なのか不明である。

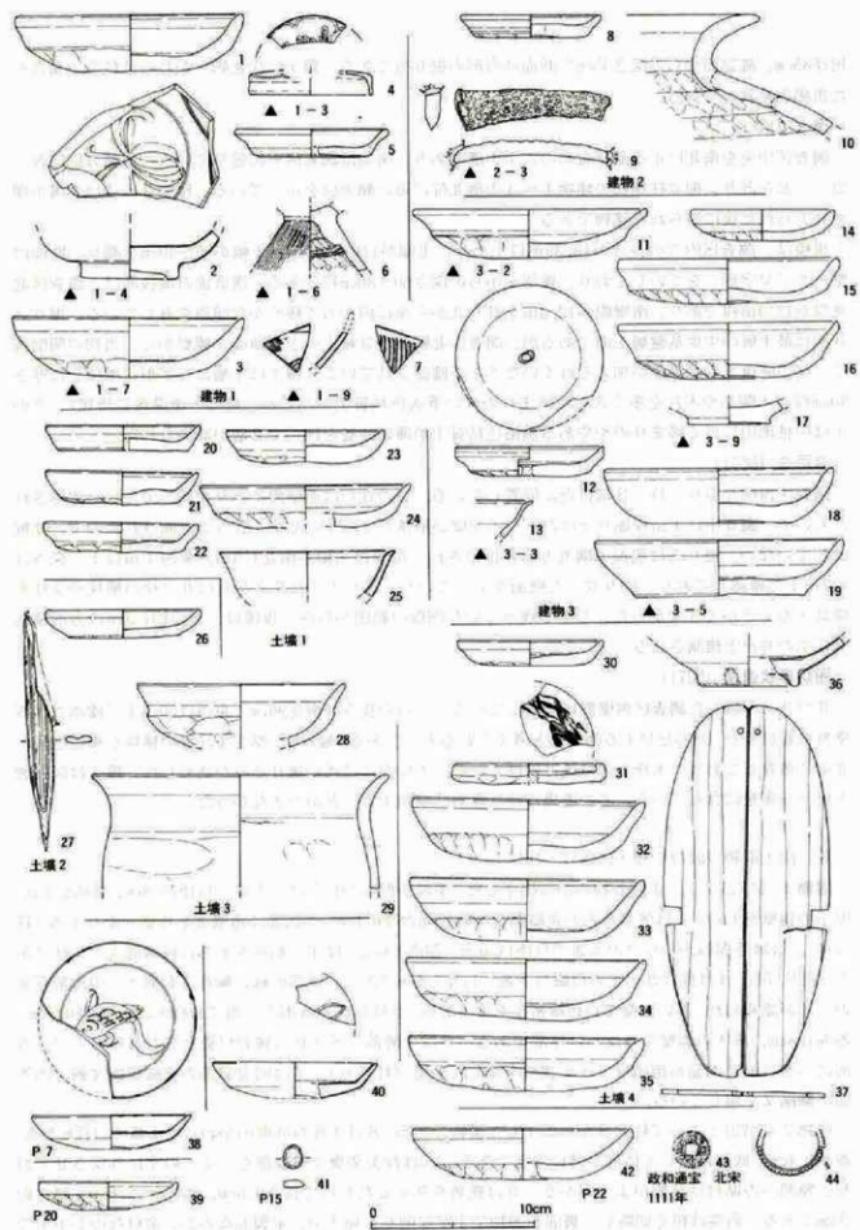


图72 建物・土壤・柱穴出土遺物

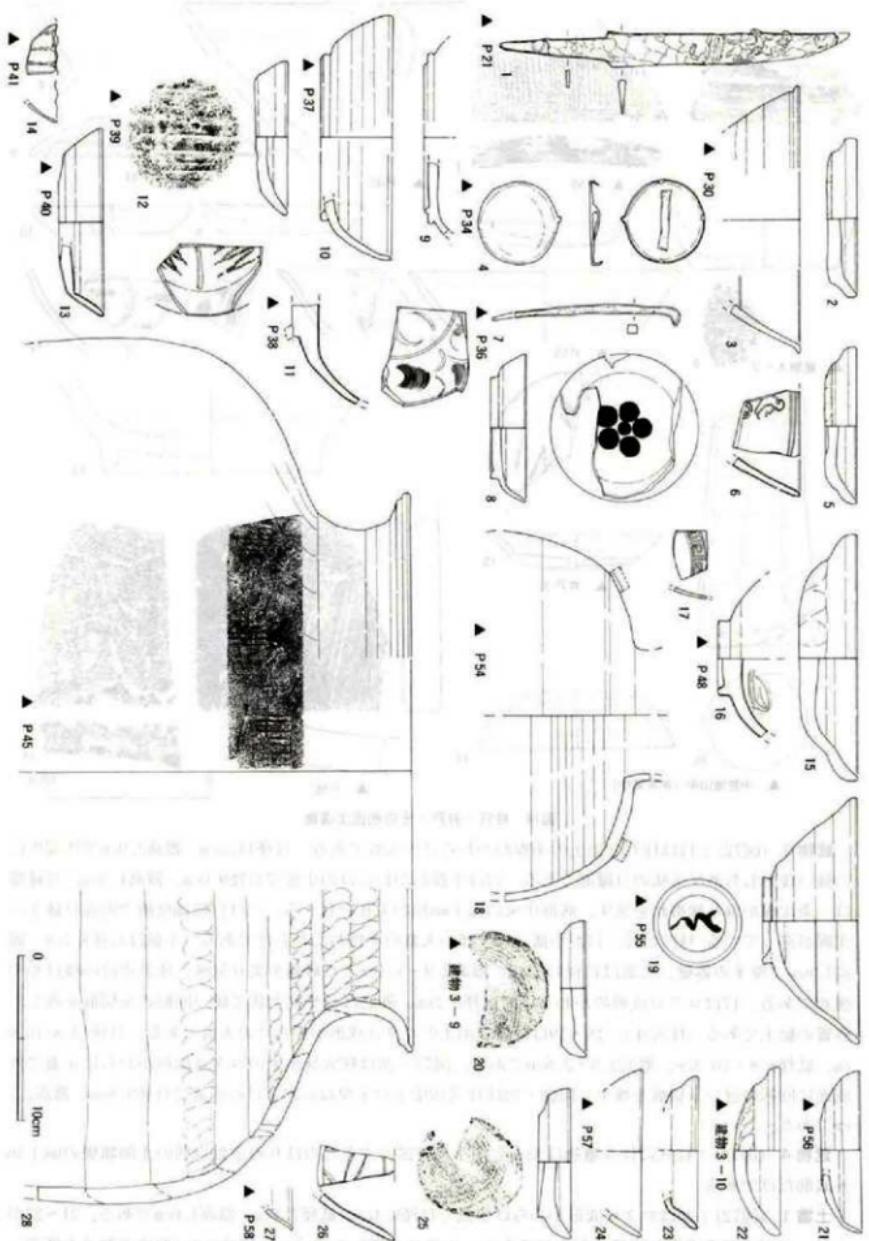


图73 柱穴出土遗物

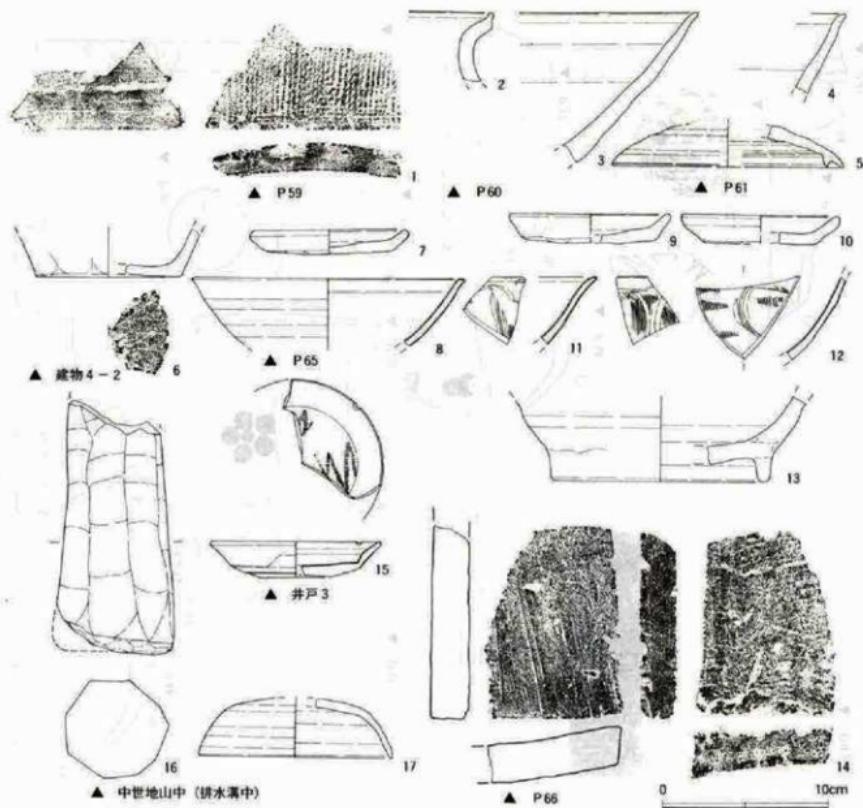


図74 柱穴・井戸・その他出土遺物

建物3 (図72) : 11は柱穴2出土の手捏ねかわらけの大皿である。口径14.2cm、器高2.9cmで体部中位に強い稜をもち外反氣味の口縁部である。12は手捏ねかわらけの小皿で口径9.0cm、器高1.9cm、口縁端は一条沈線が巡り縁帶状を呈す、底部中央に径7mm程の尖孔を有する。13は白磁端反碗で内面口縁下に沈線が巡っている (柱穴3)。14が小皿、15・16が大皿の手捏ねかわらけである。小皿は口径8.7cm、器高1.9cmで厚手の器壁、大皿は口径13.3cm、器高2.9・3.4cmで口縁端が尖り氣味、体部中位の稜はやや強めである。17はロクロ成形のかわらけで底径5.2cm、外底はやや高台状で緩い回転の糸切痕を残し、砂質の胎土である (柱穴4)。18・19は柱穴5出土のロクロ成形かわらけの大皿である。口径13.8・15.0cm、底径8.8・10.3cm、器高3.3・3.5cmである。図73-20は柱穴9出土のロクロ成形かわらけ小皿で外底面に回転の遅い糸切痕を残す。同図-22は柱穴10出土の手捏ねかわらけの小皿で口径9.8cm、器高2.7cmである。

建物4 (図74) : 柱穴に伴う遺物は殆んどが小片で図示できたのは6の中世以前の土師器甕の胴下部～底部だけである。

土壤1 (図72) : 20はロクロ成形かわらけ小皿で口径9.4cm、底径7.8cm、器高1.6cmである。21～23が小皿、24が大皿の手捏ね成形かわらけである。小皿は口径9.2～9.5cm、器高2.0cm前後で厚手の底部、大皿は口径12.7cm、器高2.8cmで体部中位から外反氣味の口縁になる。25は白磁端反碗で口径10.8cmで

ある。

土壤2 (図72) : 26は手捏ね成形のかわらけ小皿である。口径9.2cm、器高1.8cmで薄手の器壁である。27は骨製斧で上部が欠失している。現存長14.6cm、幅1.6cm、厚さ4mmで破損面を刃物で削り加工する。

土壤3 (図72) : 本土壤からは図示できる中世遺物は出土していないが、28・29の土師器壺・甕がみられた。壺は口径12.6cmで口縁部がS字状の屈曲をもち、やや外反する。甕は長胴型のもので口径18.0cm、くの字状に外反する口縁部である。

土壤4 (図72) : 30~35は手捏ね成形のかわらけである。31は内底面に墨書痕のある内折れ皿で口径8.6cm、体部径9.4cm、器高1.4cm、30は小皿で口径9.0cm、器高1.7cmで体部は底部に比べて薄手の器壁である。32~35は厚手の器壁をもつ大皿である。口径14.1cm前後、器高3.3~3.5cmである。36は青白磁無文碗で高台径5.8cmである。37は草履の芯で2枚の薄板からなる。長さ22.8cm、幅10.2cm、厚さ4mmで鼻緒が先端2ヶ所の小孔、横緒の位置の両側縁に方形切込みをもつ。

各柱穴出土遺物 (図72~74) : P 7~38は龍泉窯系の青磁皿、口径10.0cm、底径3.0cm、器高2.1cmである。平底の厚い底部から斜め方向に立上がり、中位で強く屈曲して口縁に至る。内底面にはヘラ描きで躍動感のある魚文を片切りする。P 15~40も龍泉窯系の青磁皿、口径10.0cm、底径3.0cm、器高2.1cm程で内底面にヘラ描きした蓮華文の一部が認められる。41は碁石で径1.3cm、厚さ5mmの黒褐色偏平なものである。P 20~39は手捏ねかわらけ小皿、口径8.4cm、器高1.8cmで縁帯状の口縁を呈す。P 22~42は手捏ねかわらけ大皿で口径13.2cm、器高3.2cm、やや厚手の器壁である。43は北宋錢の「政和通宝」、44は径3.9cmで蓮華文風の台座に加工した金銅製の飾り金具である。図73: P 21-1は刀子である。推定長21cm、茎部長6.5cm、刃幅1.9cmを計り、鋸びているが茎部中央に目釘穴がある。P 30-2は手捏ねかわらけの小皿、3は白磁端反碗で口径16cm、内壁面の中位に一条沈線が巡る。P 34-4は金銅製で径5cmの円形銅板である。裏側には高さ3mm程の周縁に4ヶ所の爪が出ており、中央部に幅6mmの細長い銅板の取手を貼り付けている。取手の解釈がつかないが、爪が出ており丸棒状の調金具であろうか。P 36-5は体部に強い稜をもつ手捏ねかわらけの小皿、6は龍泉窯系劃花文碗で内面に二条沈線と飛雲文を片切り彫りする。7は釘で残存長9.9cmである。8は漆器皿で口径9cm、底径6cm、器高2.1cmの厚い底部、内底面に梅鉢文を朱漆での手描きする。P 37-9・10は高台付の須恵器碗である。P 38-11は同安窯系櫛描文碗である。P 39-12はロクロ成形かわらけ小皿で口径9cm、底径6.5cm、器高2cmである。P 40-13は同安窯系櫛描文皿で口径11.3cm、底径4.8cm、器高2.6cmである。P 41-14は青白磁輪花碗である。P 45-28は常滑窯甕で口径33.6cm、頭部へ口縁に大きく丸味をもって外反し、口端が凸出する。P 48-15は手捏ねかわらけ大皿で口径14.9cm、器高3.5cm、やや厚手の器壁で稜部がくの字形になる。16は龍泉窯系の青磁劃花文碗、高台径4.6cmである。P 54-17は青白磁碗で口縁に雷文帶を巡らす。18は白磁四耳壺で薄手の器壁をもつ。P 55-19は美濃系の山茶碗である。口径14.8cm、高台径5.5cm、器高5.7cmを計り、高台に重ね焼きの初殻痕を残し、高台内に墨書をみられるが文字は不明である。P 56-21は口径9.8cm、底径4.2cm、器高2.5cmで平底の白磁皿である。P 57-23は同安窯系青磁櫛描文皿、24は龍泉窯系の青磁無文碗である。P 58-25はロクロ成形かわらけ小皿で外底面に回転の違い糸切痕を残す。26は龍泉窯系の青磁劃花文碗の口縁部片、27は青白磁皿である。図74: P 59-1は女瓦で凸面に綿目叩き、凹面に布目痕を残す。P 60-2は常滑窯甕である。P 61-3・4は渥美窯系の捏鉢、5が須恵器の壺蓋である。P 65-7は手捏ねかわらけ小皿で口径9.1cm、器高1.5cm、8は口径16.3cmの白磁端反碗で口縁下に一条沈線が巡る。P 66-9・10は手捏ねかわらけ小皿、11は龍泉窯系青磁碗で外面に蓮弁文と櫛描文、内面に劃花文を施す。12は同安窯系の青磁櫛描文碗、13は渥美窯の捏鉢で高めの貼付け高台をもつ、14は女瓦である。

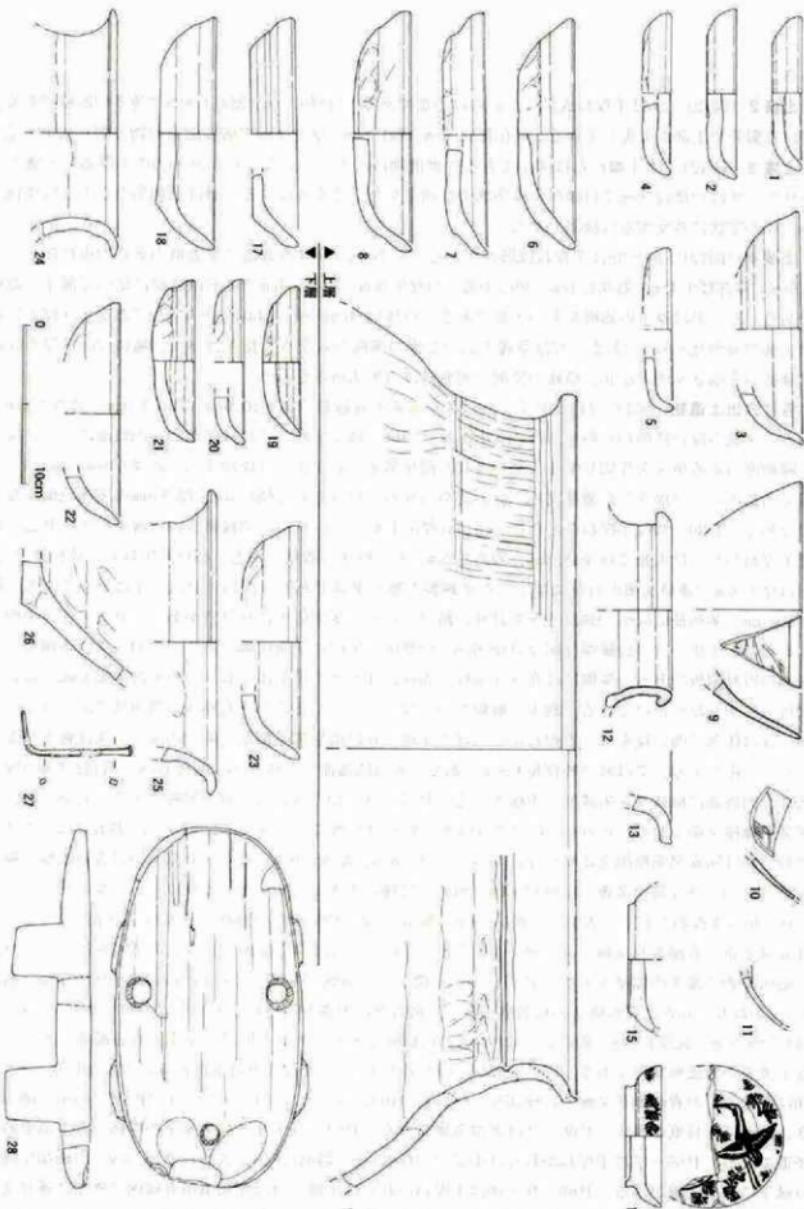


图75 漢1出土遗物

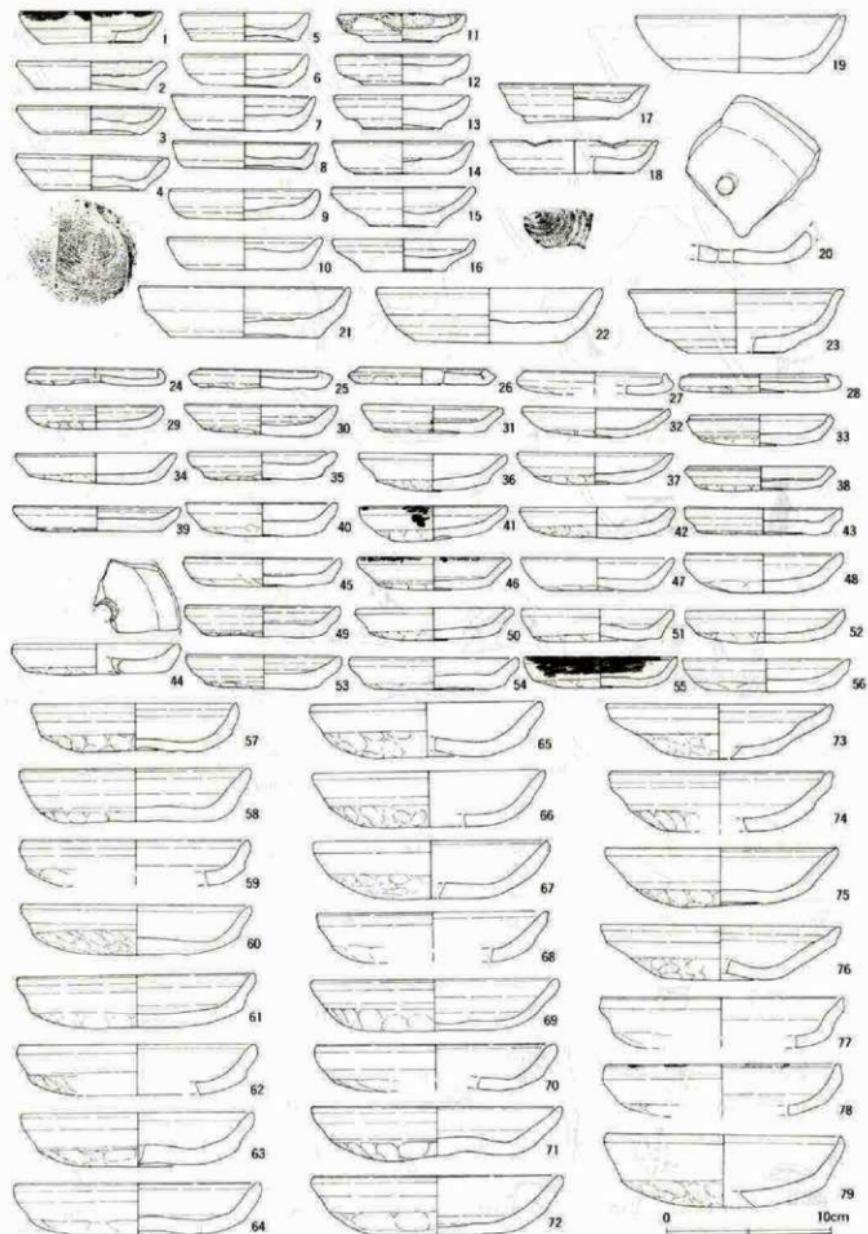


図76 第5面下～6面出土遺物（1）

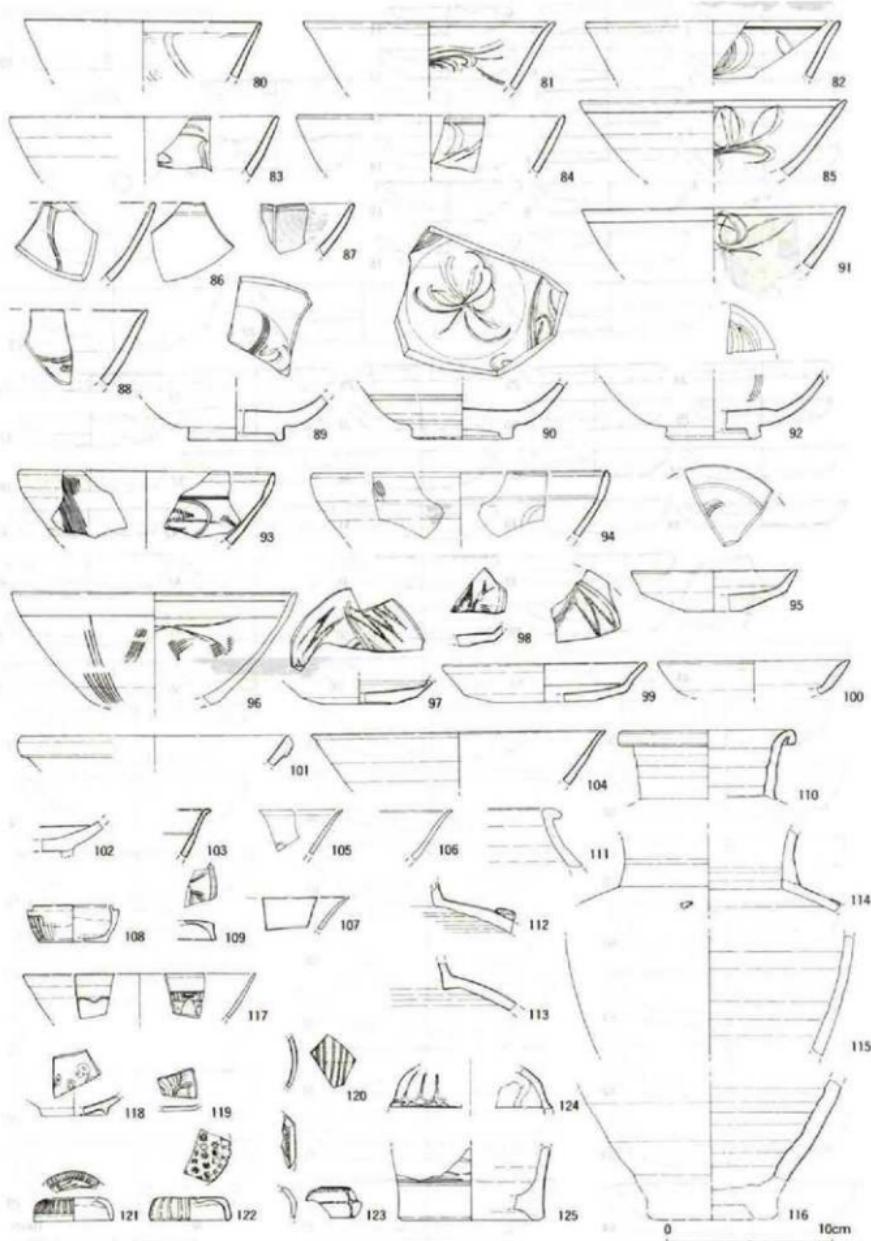


図77 第5面下～6面出土遺物（2）

井戸3 (図74) : 15は口径10.3cm、底径4.3cm、器高2.2cmの同安窯系青磁櫛描文皿である。

16・17は調査区壁際の排水溝中から出土した中世以前の遺物で、16は土丹塊を多角形の円柱状にしたもので二次焼成を受けており、竈の支脚かもしれない。17は須恵器の环蓋で口径11.5cmである。

溝1 (図75) : 1~16は櫻土の上層・17~28が下層から出土した遺物である。1・2はロクロ成形のかわらけ小皿、3が口径14.2cmの大皿で内外面に顕著なロクロ痕、口縁部が外反した深い器高を有する。4・5は手捏ねかわらけの小皿、6~8が大皿である。小皿は口径9.8cm、器高1.7cm、大皿が口径14.0~14.8cm、器高2.7~3.5cmである。9は口径15.7cmの龍泉窯系青磁劃花文碗、10・11は白磁碗で内面に前者が櫛描文、後者に一条沈線を施す、12は白磁四耳壺である。13・14は常滑窯で口径43.5cm、口縁端を上方につまみ上げられ縁帶風になる。15は木器皿の底部片、16は口径8.8cm、高台径6.4cm、器高2.3cmの厚い底部をもつ漆器皿で内面に松唄鶴、外面に松枝を手描きしている。

17・18はロクロかわらけの大皿で口径13.9cm前後、底径10.5~8.8cm、器高2.8~3.4cmである。19~21は手捏ねかわらけの小皿で口径9.4~10.2cm、器高2.3~2.6cm、23は大皿で口径14.3cm、器高3.6cmである。24・25は口径15.3~18.6cmの渥美窯壺、26が常滑窯甕である。27は長さ9cm程の鉄釘である。28は連歛下駄で台部の長さ22.4cm・幅11.8cmのやや卵型を呈し、総高5.2cmである。

第5面下~第6面 (図76~82) : 1~23はロクロ成形、24~79が手捏ね成形のかわらけである。ロクロ成形の小皿は、1~4が口径8.6~9.3cm、底径6.2~6.8cm、器高1.7~2.2cmの薄手の器壁、体部が逆台形状になる器形をもつ口径と底径比がややあるタイプ、5~9・14は口径8.0~9.0cm、底径6.6~7.4cm、器高1.7~2.1cmで体部中位に稜をもち内彎傾向のタイプ、10は口径9.3cm、底径7.1cm、器高2.0cmの厚手の器壁で体部断面が楔形、11~13・15・16は口径7.7~8.7cm、底径4.3~5.1cm、器高1.8~2.3cmの厚手と薄手の器壁があり口径に比べて小さな底径のタイプ、17・18はロクロ痕が強く口縁部が外反しており、外底面に回転の緩やかな糸切痕を残すタイプである。17は口縁部を打ち欠いて輪花状を呈している。19は口径13.0cm、底径8.4cm、器高3.3cmを計る。21・22は口径12.9~13.7cm、底径9.1cm前後、器高3.1~3.4cmで体部中位に稜をもち内彎気味の口縁部になるタイプ、23は口径13.1cm、底径5.7cm、器高4.0cmの大皿で内外面に顕著なロクロ痕、口縁部が外反した深い器高を有する。20は底部に径9mmの尖孔が認められる。1・11は口縁部内外面に煤が付着しており、燈明皿であろう。

手捏ね成形のかわらけ小皿のうち、24~28は口縁部が内折する「ユースター型」のもので口径7.4~8.2cm、最大径8.5~9.8cm、器高1.2cm前後である。29は口径8.0cm、器高1.4cmと小型のもの、31・34・39・45・47・51のタイプは薄手の器壁で平底状の底部を有し口縁端が丸味をもつ、30・35・40・49・53・54も平底状だが体部の稜が強めで厚手の器壁である。36・41・42・46・50は薄手の器壁で体部の強い稜から開き気味の器形をもちやや丸底状の底部になるタイプ、32・37は薄手の器壁で丸底状だが体部の稜が弱く、48も体部の稜が弱く丸底だが厚手のタイプである。33・38・43は薄手の器壁で体部の稜が強く口縁端部に沈線が巡り縁帶状になり端部が尖るタイプ、52・55・56も薄手の器壁で体部の稜が強めで尖り気味の口縁端をもつタイプである。これらの小皿は口径8.4~10.0cm、器高1.5~2.5cmである。手捏ねの大皿は、57が口径12.4cm、器高2.8cmと小口径で体部の稜が強く口縁が直立するタイプ、59~63・68・70は口径13.5~14.5cm、器高2.8~3.1cmと低めの器高で体部の稜が強く、やや直立した器形で口縁端部が尖り気味のタイプ、64・69・71は口径14.7~15.1cm、器高3.1cm前後と大口径の低い器高で体部の稜が弱くやや丸底状のタイプ、73~76は口径13.7~14.5cm、器高3.6cm前後と高めの器高で開いた器形をもち、口縁端部に沈線が巡り縁帶状を呈し端部が尖り気味のタイプ、77~79は高めの器高をもち、体部の稜が強くやや直立した器形、口縁端部に沈線が巡り縁帶状になり端部が尖るタイプである。44は

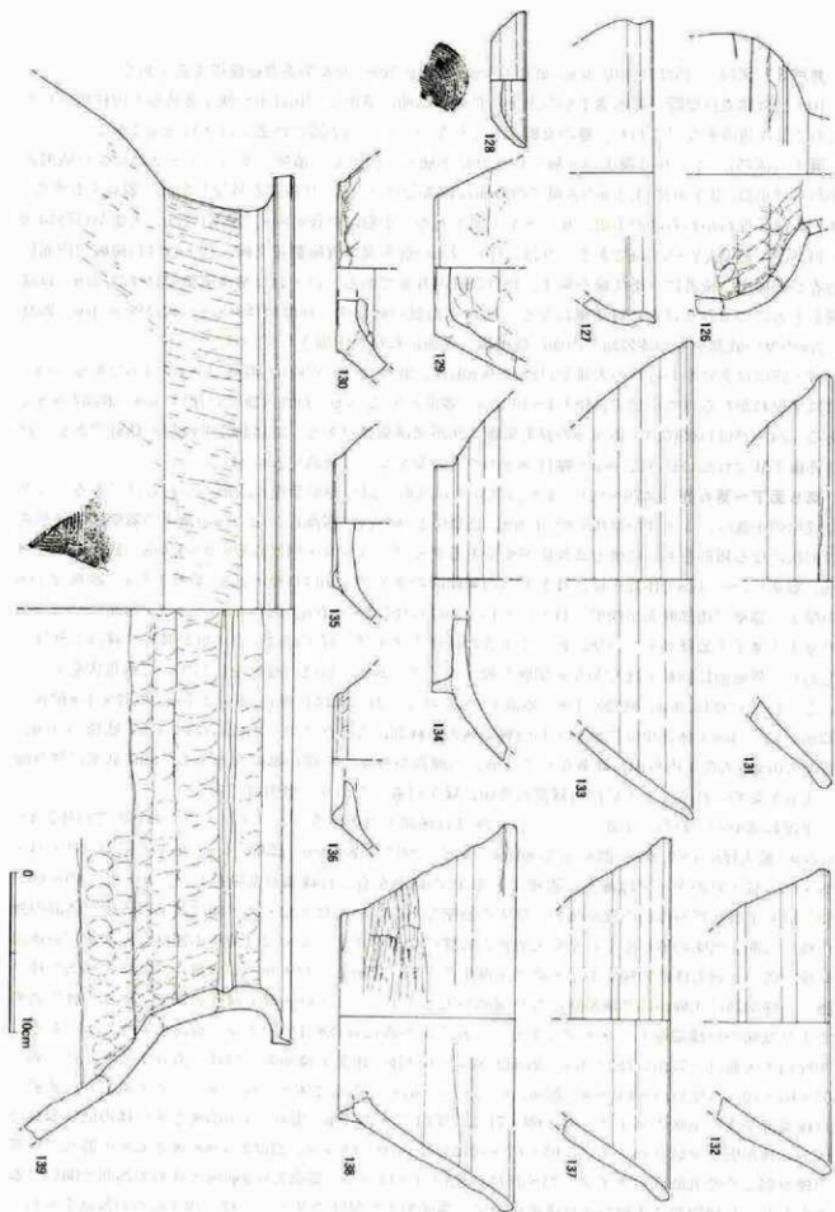


图78 第5面下~6面出土遗物 (3)

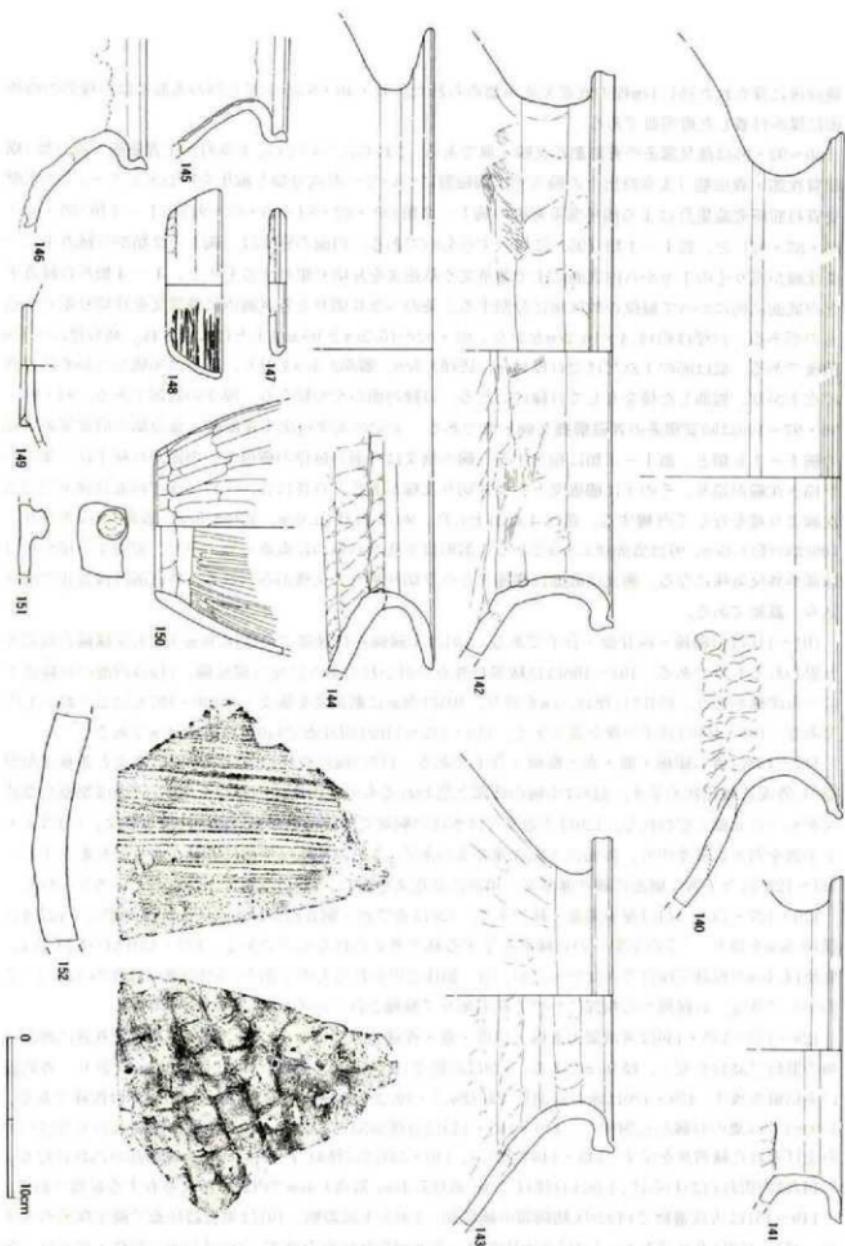


图79 第5面下~6面出土遺物 (4)

焼成後に穿たれた径1.1cm程の底部尖孔が認められた。41・46・55の小皿と78の大皿には口縁部の内外面に煤が付着した燈明皿である。

80～92・95は龍泉窯系の青磁劃花文碗・皿である。これらについては、太宰府出土青磁碗・皿分類（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』による龍泉窯系青磁の碗I-2類(81・82・84・85・88～91)・I-4類(80・83・86・87・92)と、皿I-1類(95)に相当するものである。内面の施文は、碗I-2類が口縁直下に一条沈線が巡りその下方から内底面にまで蓮華文や草花文を片切り彫りするものと、I-4類が口縁直下と内底面に向かって縱位の数区画に分割する二条のヘラ片切りと各区画内に飛雲文を片切り彫りするものがある。口径は約14.4～16.2cmを計り、81・82の15.2cmと16cm以上とに大別され、高台径は5.9cm前後である。皿は95の1点だけで口径10cm、底径3.5cm、器高2.4cmを計り、器形は平底から斜めに真直ぐ立上がり、屈曲した稜を有して口縁にいたる。口縁内面がやや膨らみ、厚手の底部である。93・94・96・97～100は同安窯系の青磁櫛描文碗・皿である。上記の太宰府出土青磁碗・皿分類の同安窯系青磁の碗I-1b類と、皿I-1類に相当する。碗の施文は外側が縱位の櫛描文、内側が口縁下に一条のヘラ描き沈線が巡り、その下に櫛描文とヘラ片切り文様がある。口径は15.5～17.5cmで内面口縁下に巡る沈線より稜をなして内彎する。皿は4点出土した。99は口径12.0cm、底径5.5cm、器高2.4cmを計り、100は口径11.6cm、97は底面径4.5cmである。器形は平底から斜めに真直ぐ立上がり、屈曲する稜から口縁部が外反気味になる。施文は底面に櫛描きとヘラ切り彫りの文様がみられる。外底面は浅皿状に削り込み、露胎である。

101～116は白磁碗・四耳壺・合子である。101は玉縁碗の口縁部で口径16.0cm 102も玉縁碗の底部片と思われるものである。103～106は口縁部が外方へ引かれるように反る端反碗、113は内面の口縁直下に一条沈線が巡り、104は口径17.5cmを計り、105は内面に劃花文を施し、106・107も同じ一群のものである。108・109は合子の身と蓋である。110・112～116は四耳壺で110が口径10.4cmである。

117～125は青白磁碗・皿・壺・梅瓶・合子である。117の碗は口径14.1cmで内面に雷文と蓮華文を型捺し外側に輪花状の呈す。118は小碗の底部と思われるもので内底に印花文を施す。119は型捺し草花文をもつロ元皿と思われる。120は小壺または水注の胴部で外側に瓜形風の縱位沈線を施文、124は上・下半部を別々に外型作り、外側に下向き運弁文がある。125の梅瓶は外側に唐草文を片切り彫りする。121～123は合子蓋で側面に細弁蓮華文、頂部に草花文を施し、123は八角形になるものと考えられる。

126・127・133・144は涅美窯壺・鉢である。126は壺で肩～胴部にかけて三条の沈線が巡る。127は口径18.5cmを計り、「くの字型」の口縁部を呈する鉢と考えられるものである。133・134は口径29.7cm、底径14.1cmの捏鉢で接合できなかったが、同一個体と思われるものである。144の壺は口径39.0cmで「くの字」に外反、口縁部から頸部にかけて刷毛彫りで施釉されている。

128～143・145・146は常滑窯山茶碗・山皿・壺・鉢・甕である。135・136は山茶碗で外底に断面三角の貼付け高台を有し、径8cmである。128は山皿で口径8.5cm、底径4.7cm、器高2.4cmを計り、外底面に糸切痕を残す。129・130は壺の底部片で底径8.3・10.2cmである。131・132・137・138は捏鉢である。139～143は甕の口縁から胴部片、139・142・143は口径が53.6・33.7・19.5cmで口縁端部が上方につまみ上げられた縁帶状を呈す(145・146も同じ)、140・141は口径41.7・21.3cmで口縁端部が凸状になる。

147は内折れ白かわらけ、148は口径11.2cm、底径7.4cm、器高3.4cmで内面に暗文を有する瓦器である。

149～151は古代遺物で149が灰釉陶器の碗底部、150が土師器瓶、151は須恵器坏蓋で擬宝珠形のつまみ。151・152は女瓦である。151は凸面指頭痕、凹面細板状压痕を残す。152は凸面に斜格子叩き目、凹面に細板压痕を残す陶器質瓦、名古屋市東山窯に位置した八事裏山窯跡群の所産と思われるものである。

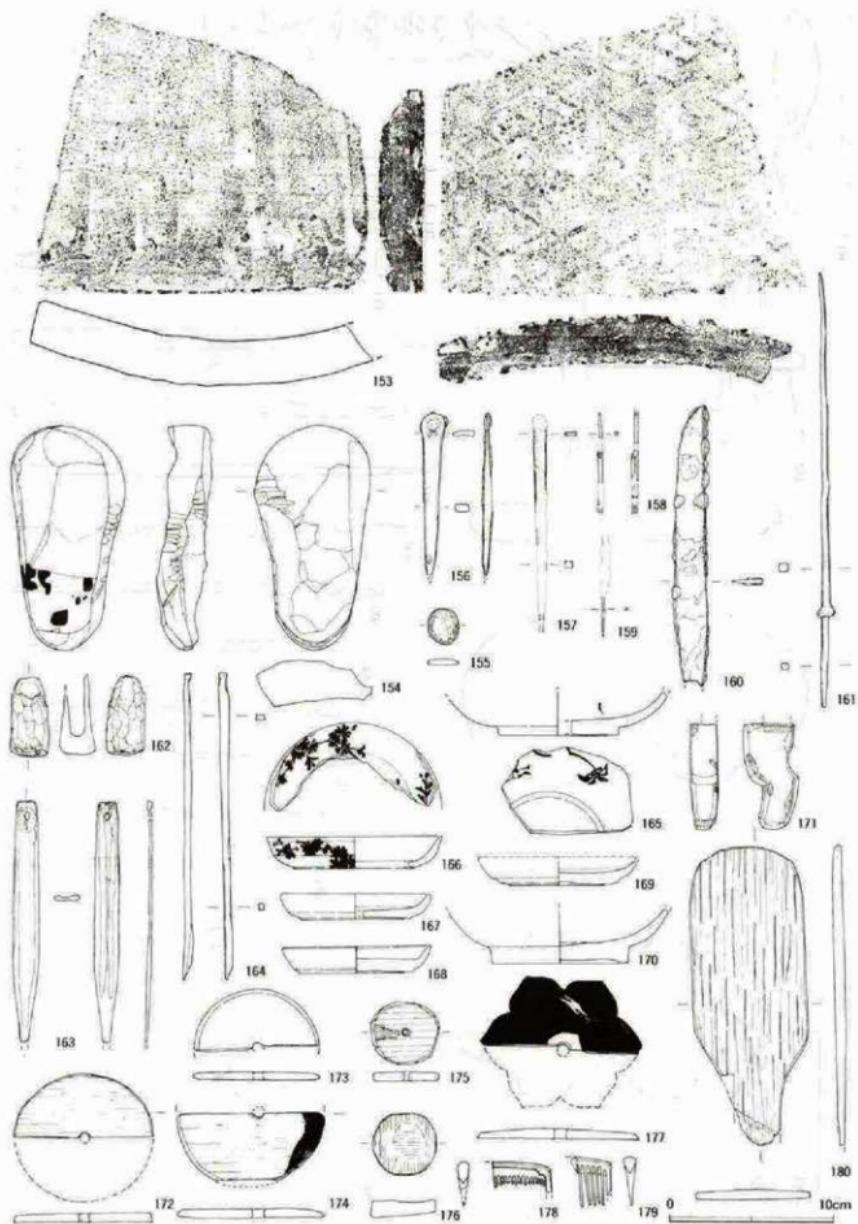


図80 第5面下～6面出土遺物(5)

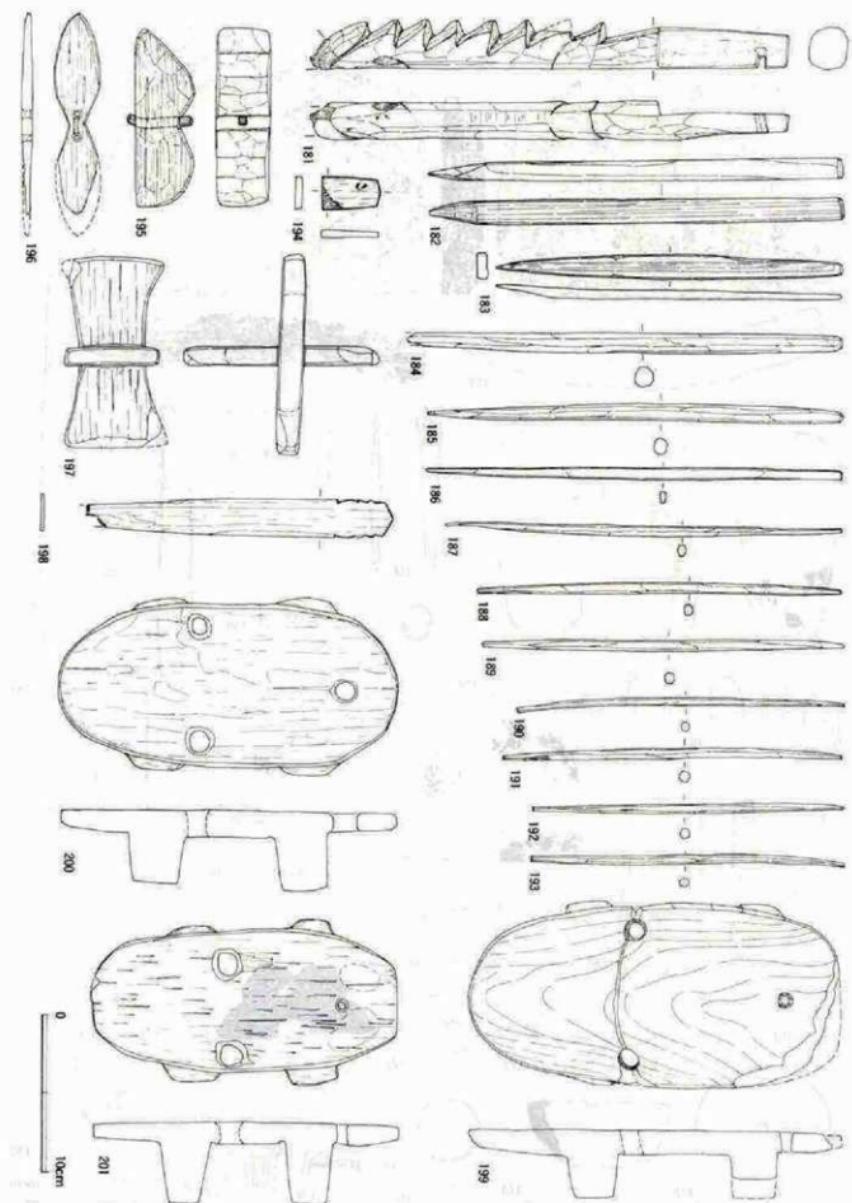


図81 第5面下～6面出土物（6）

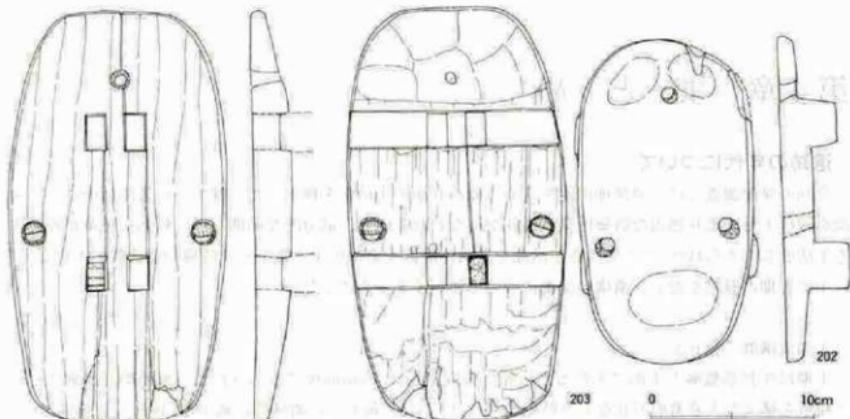


図82 第5面下～6面出土遺物（7）

154・155の石製品は砥石と基石である。156～161は鉄製品である。156は長さ約10cmの頂部が偏平な断面の細長い楔形を呈す、157も上部が偏平、158・159は丸棒状で上端に小孔があり縫針であろう。160は刀子、161は銅製の火箸と思われるもので長さ26.6cmを計る。

162～164は骨角製品、162は長さ5cm、下端径2.7cmで内側を深さ3.5cm、径9mmの凹状に抉り込んでいる。163は残存長14.8cmで頂部に小孔、下端を尖らせた笄、164は長さ18.8cmの角棒状のもので未製品か。

165～168・171・176～178は漆製品である。165は椀で外面に草花文、166は口径10.6cm、底径7.2cm、器高2cmの皿で内外面に植物文を手描き、167・168は黒漆塗の無文皿、171は黒漆塗の茎脚状を呈するもの、177は中心に小孔をもつ六葉花文形と推定され、上面の孔の周囲以外を黒漆塗、調度品の飾りの一部か。178・179は黒漆塗の横櫛で歯に粗、密が認められる。

169・170・172～176・180～203は木製品である。169・170は木皿・椀である。172～176は径4.4～9cm円盤、176以外には中央に小孔があり、紡織具の紡輪の可能性もある。180は板杓子で柄下部を欠失する。181は残存長29.2cm、幅3cm、厚さ2.4cmの自在鉤である。182は長さ25.3cm、厚さ1.2cmで片端を尖らせし削り加工を施す、183は笄のような形で片端を丁寧な削りで尖らせており、ともにヘラ状の工具である。

184・185は丸棒状で先端を尖らせた削りを施すもので菜箸と考えられる。186～193は基本的に両側を細くなるように削り加工した箸である。長さは25cm・22cm・20cm前後の3種類がみられた。

194は将棋の駒で高さ3.6cm、下幅2.1cm・上幅1.6cm、厚さ3～5mm、頂部を主頭形を呈し、上面に墨書きを残すが文字は不明である。196は中央に径5mm程小孔が二ヶ所あり、柄のようなものが取付くと思われ、トンボの羽根とも考えられる。197は燈明皿を乗せる燈明台、上下面を緩いカーブを描く凹状に削り窪めた2本の台木を中央部で組み合わせたものである。195は用途不明で中央に鉄釘を残す。198は板碑伝で残存長19cm、幅2.6cm、厚さ2mm程の絆本で頂部主頭状、その下の両脇に2ヶ所の切込みが施され、片側を先細り状に削り加工、表面に墨書きは認められない。199～203は下駄、199～202は一本から長楕円形の台と台形の歯を作り出した連歛下駄、200・201は台長が21.2・18.8cm、幅が10.4・8.8cm、総高5cm前後、鼻緒と横緒を焼いて尖孔している。203は台に歯をはめ込む差歛下駄、前・後歛は台裏面に溝を彫り、2ヶ所づつの方形ホゾ穴に歯を差し込んでいる。差歛下駄の古い例は、京都市鳥羽離宮跡から平安時代末の連歛下駄とともに露卯差歛下駄が知られている（島田市博物館『第5回企画展一下駄展』図録1993年）。

第4章 まとめ

遺跡の年代について

今回の発掘調査では、中世地山面を含めて概ね6面の生活面を検出した。検出した各生活面には、全面を破碎土丹により強固な版築地盤の造成が行なわれた面と、部分的な範囲だけに軟弱な地盤が連続する生活面も認められた。ここでは各生活面を遺構の配置や遺物の年代観から4時期の遺構群に大別して、以下に各期の概略を記し、遺構の変遷について述べてまとめにしたい。

《I期遺構群：第6面》

I期は中世基盤層の上面にあたる生活面で海拔標高12.85m前後で検出された。源頼朝が鎌倉入りして屋敷を構えた大倉幕府が存在した時期にあたり、当地で最も古い遺構群に属する。検出した遺構には、調査区中央を南北に走る堀留塙や掘立柱建物などが発見され屋敷の一部であったことが推測される。これに伴って出土した遺物には、舶載陶磁器類が白磁の玉縁碗・端反碗・四耳壺、同安窯系・龍泉窯系の青磁碗・皿であり、国産品は渥美・常滑窯の甕・片口捏鉢や東遠江系を含んだ山茶碗・皿など鎌倉では比較的に早い時期に搬入された遺物群である。この生活面は出土遺物の年代観からみて概ね12世紀末葉～13世紀前葉と考えられる。

《II期遺構群：第4・5面》

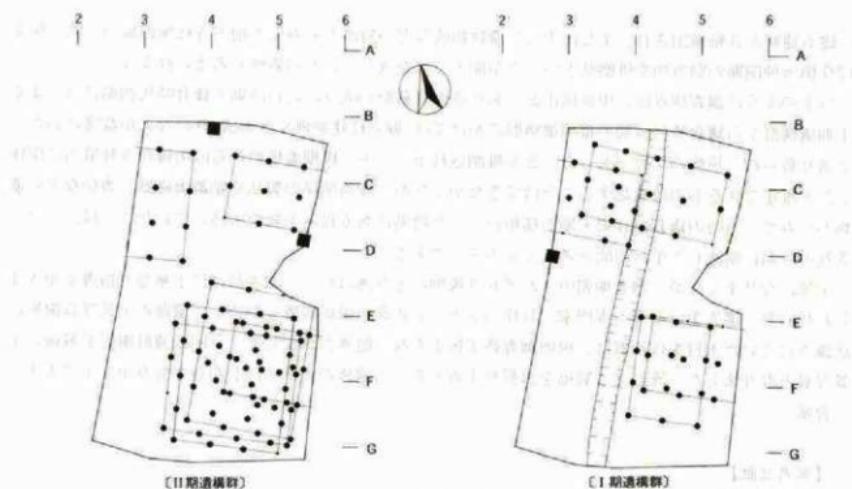
II期は海拔標高13.0～13.4m程で検出された連続した生活面である。検出した遺構は、調査区内に一定の配置と規模を有した掘立柱建物が数回にわたって建て替られており、木枠をもつ井戸などが確認された。前代と同じく屋敷地の一部を踏襲していたことが窺える。出土した遺物は、陶磁器類が白磁四耳壺・皿・青白磁梅瓶・皿・合子など、龍泉窯系青磁の碗・皿であり、国産品は常滑窯の甕・壺・片口捏鉢や瀬戸四耳壺・卸皿・入子、東海地方の山茶碗・皿・漆・木製品などである。この時期の年代観は概ね13世紀中～後葉と推測される。

《III期遺構群：第3面》

III期は海拔標高13.7m前後で検出された生活面である。この面は部分的な範囲だが砂利・貝砂層と薄い土丹版築で構成される。検出された遺構は、調査区南側に掘立柱建物、北側にかわらけ溜りが集中して確認されているが、屋敷地の一部を構成していたことが窺える。出土した遺物は、陶磁器類が龍泉窯系青磁碗や白磁口元皿、国産品は常滑窯甕・壺・片口捏鉢や瀬戸四耳壺・盤と多量のかわらけが認められた。年代観は概ね13世紀後葉～14世紀前葉と推測される。

《IV期遺構群：第1・2面》

IV期は海拔標高14.0～14.3m程で検出した。第1・2面から構成され、堅牢な厚い土丹版築で整地された生活面であった。検出された遺構は、一定の規模と配置を持った礎石建物やかわらけ溜りなどが確認された。建物の礎石は、伊豆石の偏平な自然石や鎌倉石の切石を使用し、礎石上面に角柱当りの痕跡を残したものがある。出土した遺物は、陶磁器類が鎌倉では珍しい陶質の白磁小皿や磁州窯の緑釉鉄絵甕、国産品は瀬戸灰釉平碗・緑釉小皿・天目茶碗・瓦質土風炉・香炉、銅鏡などが出土しており、主たる時期は14世紀末葉～15世紀代と推測される。当期は破碎土丹塊による堅牢な整地が施された生活面上



[I期遺構群]

[II期遺構群]

[III期遺構群]

[IV期遺構群]

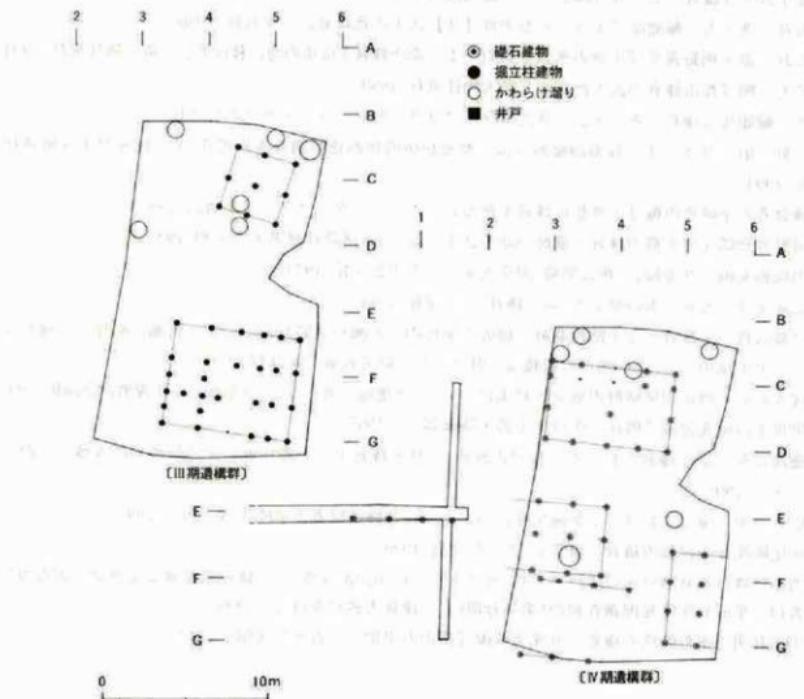


図83 遺構変遷図

に礎石建物が3軒検出され、また出土した遺物組成などの特徴からみて当地が寺社境内城の一画、例えは荏柄天神関連の別当坊や供僧坊といった空間の一部を成していた可能性も考えられよう。

以上のように調査地点は、中世地山面にあたる大倉幕府の成立に近い時期の鎌倉時代初期にはじまるI期遺構群から鎌倉時代後期のIII期遺構群にかけては、掘立柱建物跡や区画溝、井戸などが数度にわたりて造り替られ、屋敷の一部であったことが推測される。一方、IV期遺構群からは明確な寺社境内に関係したと推定できるものは確認することはできなかったが、喫茶関係の製品や舶載陶磁器、香炉などの遺物からみて、当時の鎌倉が衰退末期の様相を呈した時期にある程度の物を所持していたことは、やはり寺社の一部に関連した生活空間と考えてよさそうである。

末筆になりましたが、調査期間中にわざわざ現地に足を運ばれて、調査員達に丁寧なご指導を頂きました故石井 進先生、写真の専門家で自作のリモコン式高所撮影装置を駆使し、遺跡の全景写真撮影に活躍されていた木村美代治君は、現地調査終了後まもなく他界されました。今回の遺跡撮影が最後の全景写真となりました。謹んでご冥福をお祈りすると共に、遺族の方々には心からお悔み申し上げます。

合掌

【参考文献】

1. 赤星直忠『鎌倉市史 考古編』吉川公文館 1959
2. 石井 進・大三輪龍彦『よみがえる中世【3】武士の都鎌倉』平凡社 1989
3. 石井 進・綱野善彦『中世の風景を読むー2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社 1994
4. 石丸 熊『都市鎌倉の武士たち』新人物往来社 1993
5. 大三輪龍彦『鎌倉の考古学』考古学ライブライー32 ニュー・サイエンス社
6. 小野正敏『日本出土の貿易陶磁器(国立歴史民俗博物館資料調査報告書5)』国立歴史民俗博物館 1994
7. 鎌倉考古学研究所編『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 1995
8. 河野眞知郎『中世都市鎌倉ー遺跡が語る武士の都ー』講談社選書メチエ49 1995
9. 黒板勝美編『吾妻鏡』『新訂増補 国史大系』吉川公文館 1974
10. 五味文彦『大系日本の歴史5 京と鎌倉』小学館 1988
11. 宗臺富貴子『鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校内)の瀬戸窯製品についてー古瀬戸前期から後期までの出土様相ー』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第4輯 1996
12. 塚本和弘『皿山古窯跡群の成立と終末について』『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集 1994
13. 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995
14. 藤澤良祐『京・鎌倉における古瀬戸の流通』『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1995
15. 松井一明「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究 No. 25』1993
16. 松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』吉川公文館 1993
17. 馬瀬和雄『大倉幕府周辺遺跡(No. 49)雪ノ下四丁目 620番5地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』鎌倉市教育委員会 1998
18. 山田邦明「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』吉川公文館 1992



◀ I区全景
(西から)

（いはぬ）久世野 ▲



II区全景
(南から) ►



この写真は生前に石井先生からこの遺跡の現地指導をいただいた時のものです。改めて心から学恩を謝すると共に先生の御冥福をお祈り申し上げます。

図版2



▲ 建物 2 (南から)



▲ 建物 1 (南から)



▲ 建物 2 断割状況 (南西から)



▲ かわらけ溜り 3



▲ かわらけ溜り 4



▲ かわらけ溜り 2

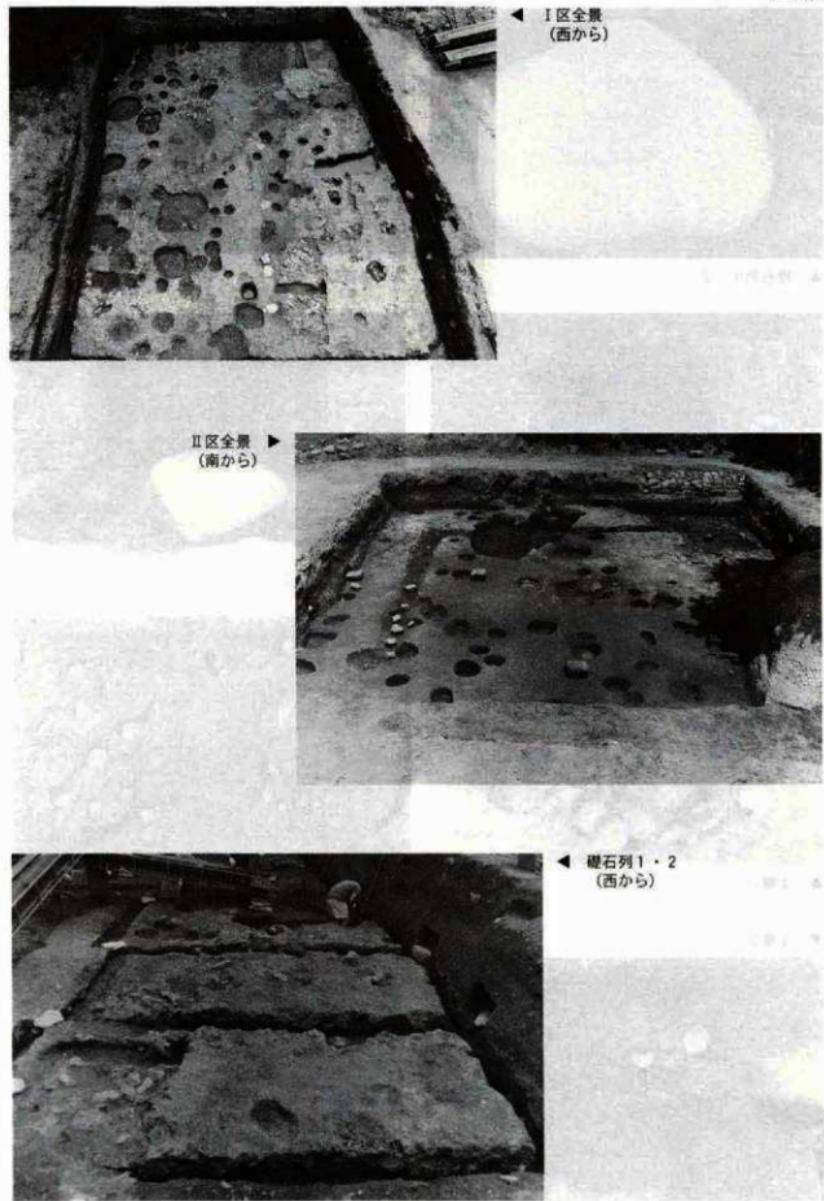


◀ 手培り
出土状況



▶ P-44

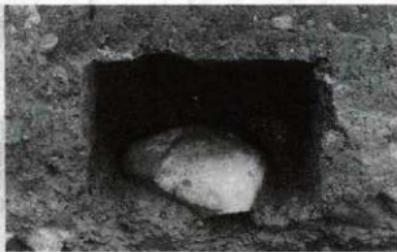
図版3



図版4



▲ 磚石列 1-2



▲ 磚石列 2-2



▲ 磚石列 2-1



▲ 磚石列 2-3



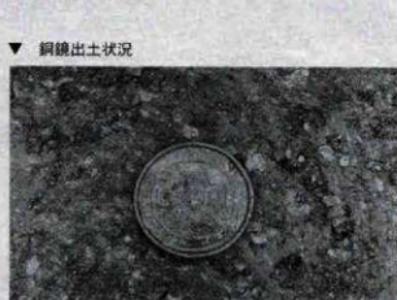
▲ 土壙11



▲ かわらけ溜り1



▼ 土壙 3



▼ 銅鏡出土状況

図版 5



◀ I区全景
(西から)

この全景写真は故木村美代治氏が戦後に撮影した櫓倉の遺跡写真となりました。

彼の写真に対する情熱に改めて心から感謝すると共に御冥福をお祈り申し上げます。合掌

II区全景
(南から)



◀ 建物1 断面状況
(西から)



図版 6



▲ 建物 1 柱穴 25



▲ かわらけ埴り 1



▲ かわらけ埴り 2



▲ かわらけ埴り 3



▲ かわらけ埴り 4

▼ かわらけ埴り 6



図版 7

I区全景
(東から)



II区全景
(南から)



建物 1・2 ▶



図版 8



▲ 建物 1 内 板壁



▲ 建物 1 内 囲炉裏



▲ 建物 6 内 常滑出土状況



▲ 建物 6 内 山茶碗出土状況



▲ P-18 下駄出土状況



▲ 炭化米出土状況



▼ 砥出土状況



▼ 漆器・かわらけ出土状況

図版 9



I区全景
(南から)



II区全景
(南から)



井戸 2

図版10



I区全景
(南から)

II区全景 ▶
(南から)



◀ 溝1
(南から)



▲ 溝1 建物1・2
(西から)



▲ 建物3



▲ 建物3-14



▲ P-54 銅製品出土状況



▲ 下駄出土状況

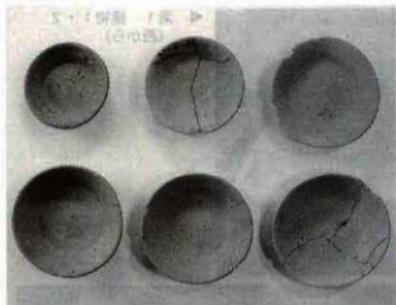


▲ I区調査区西壁

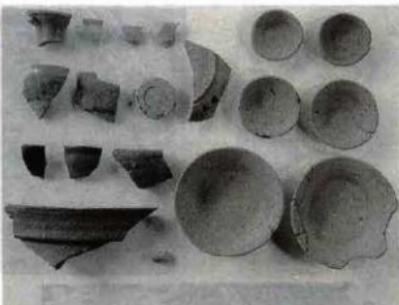


▲ I区調査区東壁

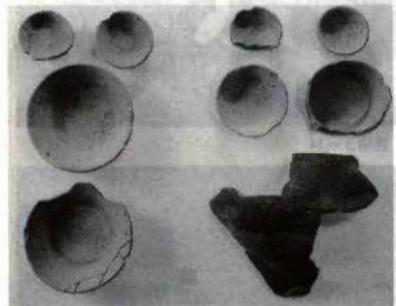
図版12



▲ 1面 かわらけ窯り1



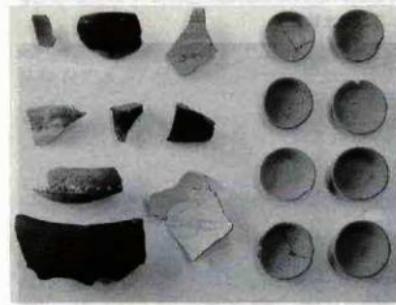
▲ 1面上



▲ 1面 かわらけ窯り2・3



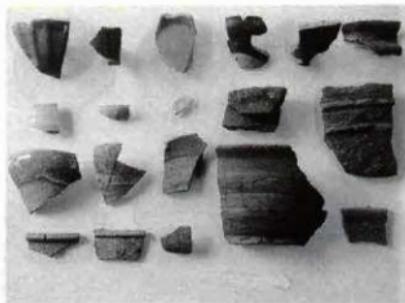
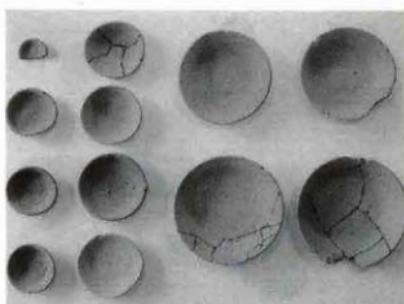
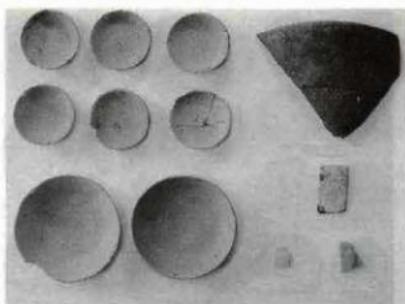
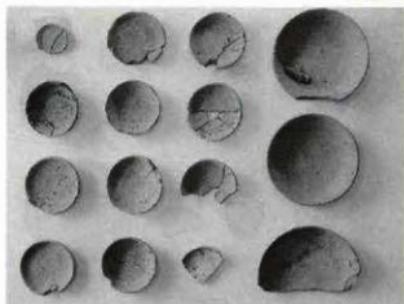
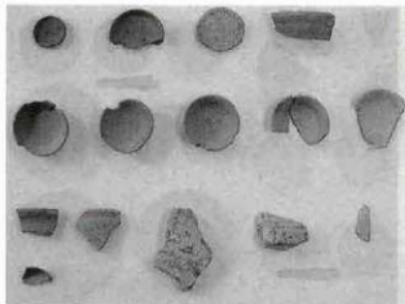
▲ 1面上



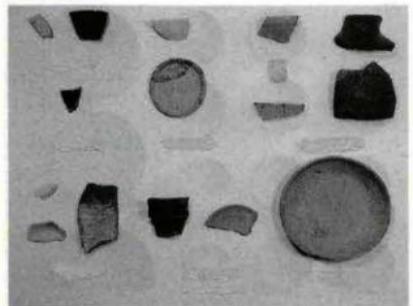
▲ 1面 かわらけ窯り4



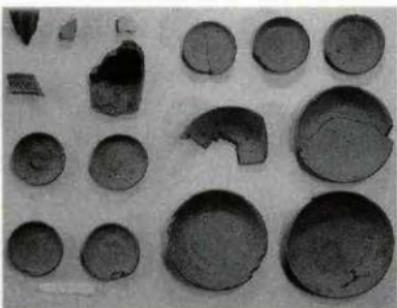
▲ 水晶原石



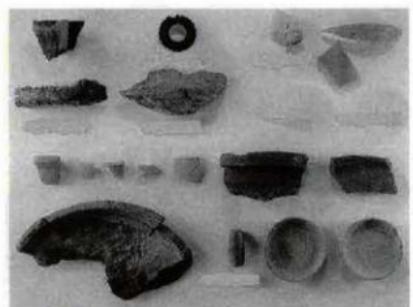
図版14



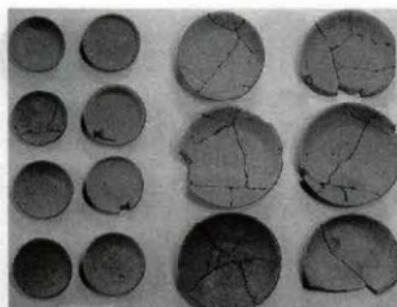
▲ 3面 建物2、土壤1、6、11~14



▲ 3面 かわらけ溜り1



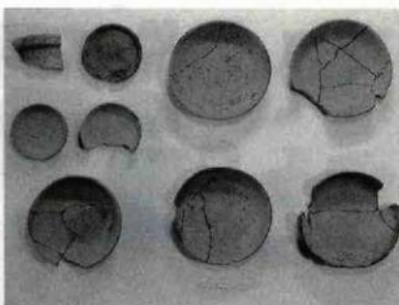
▲ 3面 玉砂利面P2、P5、P27、P34、P36柱穴



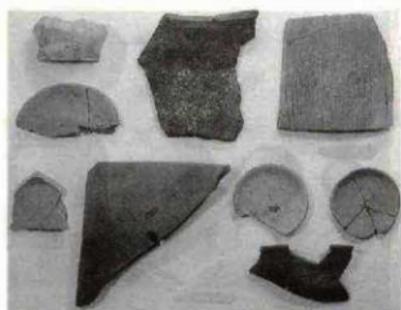
▲ 3面 かわらけ溜り2



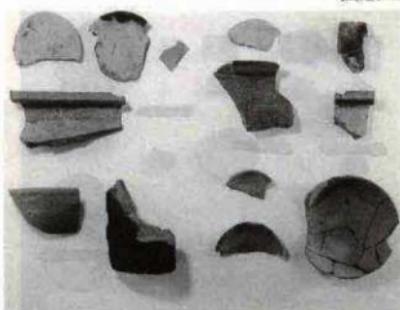
▲ 2面下~3面 出土遺物



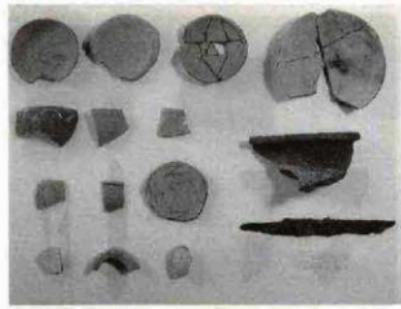
▲ 3面 かわらけ溜り3



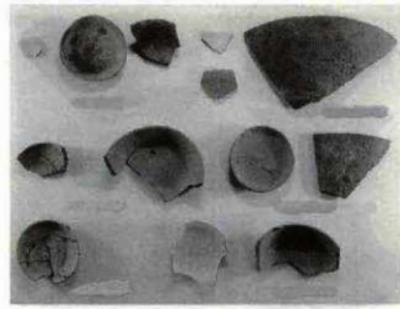
▲ 4面 建物1、2



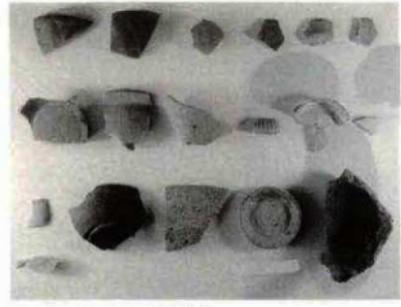
▲ 4面 建物3、4、5、6



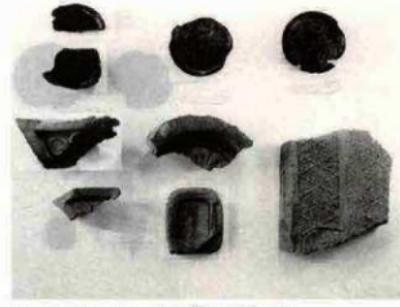
▲ 4面 建物6



▲ 4面 土墳1～6



▲ 3面下～4面 出土遺物

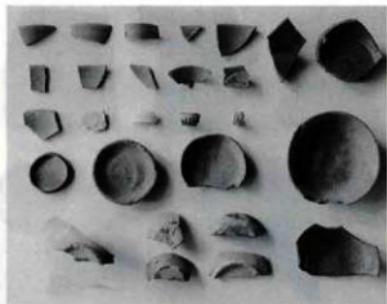


▲ 3面下～4面 出土遺物、建物坑2

図版16



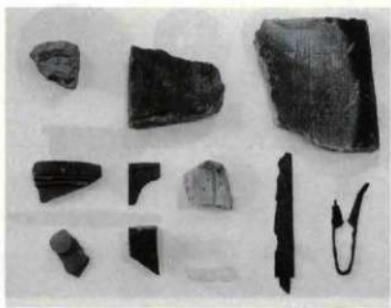
▲ 5面 土壙 井戸 柱穴出土



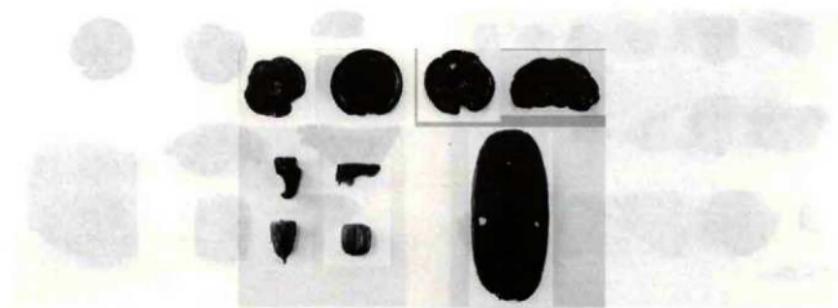
▲ 4面下～5面 出土



▲ 4面下～5面 出土



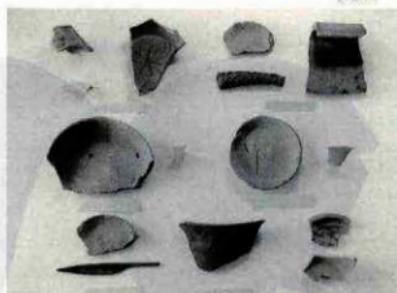
▲ 4面下～5面 出土



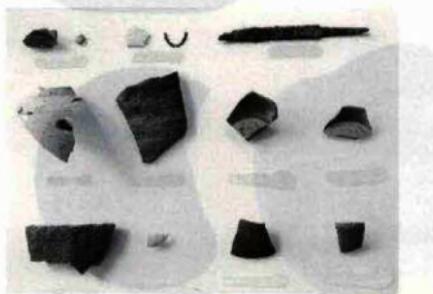
▲ 5面 木製品



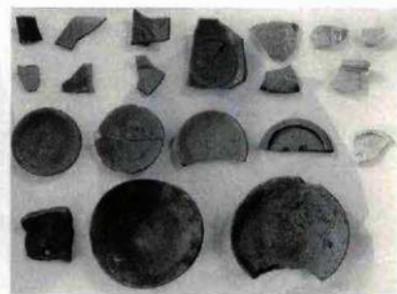
▲ 中世地山(排水溝内) 6面 溝1 上層、下層



▲ 6面 建物1、3土壤1~4



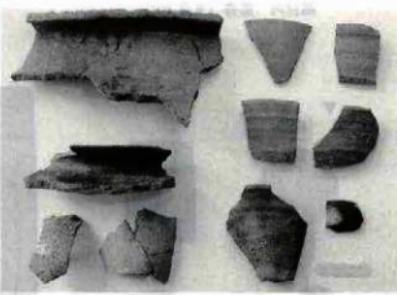
▲ 6面 P15, 21, 22, 34, 38, 40, 54, 59, 61



▲ 5面下6面

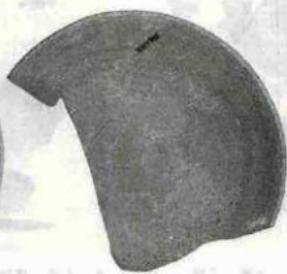


▲ 6面 P36 6面 溝1



▲ 5面下 6面





▲ 6面 PH55山茶碗
高台内 墨書（文字不明）

▲ 4面 PH64山茶碗
東遠系

▲ 6面 PH7
青磁皿

▼ 1面下
銅鏡



▲ 4面 觀



▲ 2面 磁州窯
綠釉鐵繪

大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目618番4地点

大倉幕府跡 (No.253)

雪ノ下三丁目618番4地点

大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目618番4地点

第 一 回

雪ノ下三丁目618番4地点

第一回
雪ノ下三丁目618番4地点

第 二 回

第二回
雪ノ下三丁目618番4地点

大倉幕府跡 (No.253)

大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目618番4地点

例 言

- 本報は、大倉幕府跡(神奈川県遺跡台帳No.253)内、鎌倉市雪ノ下三丁目618番4地点における自己用店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年4月20日から同年5月19日まで実施した。調査面積は約30m²。
- 調査及び整理作業の体制は以下の通り。
調査員 沙見一夫 山上玉恵 渡邊美佐子
調査補助員 田畠衣理
作業員 大戸追猛 町田義一 吉本脩三
- 本報文に關わる整理作業は、調査員・調査補助員が分担して行った。執筆は第3章の遺物を山上が、他を沙見が行い、第4章は両名討議の上沙見が執筆・文責を負い全体を編集した。又、使用した写真は遺構を沙見が、遺物は山上が撮影した。
- 出土遺物の内、舶載陶器類は手塚直樹氏(青山学院大学)、瀬戸窯製品は宗基富貴子氏(鎌倉考古学研究所)に御教示を賜った。
- 現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。
鈴木茂(株式会社パレオ・ラボ) (社)鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所 清興建設
- 本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次 本文目次

第1章 環境と立地	131
第2章 調査の概要	132
第3章 遺構と遺物	133
第4章 調査成果	137

挿図・表目次

図1 大倉幕府跡周辺図	131
図2 調査区と堆積土層	132
図3 上層の遺構(1)と出土遺物	133
図4 上層の遺構(2)と出土遺物	134
図5 下層の遺構(1)	135
図6 下層の遺構(2)	136
図7 下層の出土遺物	136
表1 出土遺物計測表	137
表2 出土遺物破片数表	137

写真図版目次

図版1 上層の遺構	139		
1. 残土山下の1面遺構(南から)	(4面)(西から)		
2. 1面全景(南西から)	4. 堆積土層(図2・c)		
3. 1面版築範囲と柱穴(南から)	5. 堆積土層(図2・b)		
4. 同 左 (西から)	図版3 下層の遺構	141
5. 1面全景(南西から)	1. 5面全景(南から)		
6. 2面道路事業と溝(西から)	2. 同 左 (西から)		
図版2 上層の遺構・堆積土層	3. 5面溝e・d・c 土層断面		
1. 3面道路事業(西から)	4. 5面溝c・b・a 土層断面		
2. 4面道路事業(西から)	5. 6面溝(覆土範囲確認)		
3. 現況道路と道路事業	6. 6面溝土層断面		
図版4 出土遺物	142		

第1章 環境と立地

大倉幕府跡(神奈川県遺跡台帳No.253)は鶴岡八幡宮の東方約300m、六浦道(現県道金沢鎌倉線)に南接する南北約220m×東西約270mの方形の範囲が呼称されている。大倉の丘陵から南下する西御門川と東御門川がそれぞれ滑川に合流する一帯に開拓された段丘状の平野地で、現況の海拔は12~14m、遺跡範囲の南縁約60m付近からは現河川に向ってやや急に低くなる。

「大倉(大蔵)」の名は『吾妻鏡』等の諸資料(史)料からは、地域統称として南北は瑞泉寺辺りから滑川まで、東西は鶴岡八幡宮から朝比奈切通しまでを含めたようだ。治承4(1180)年鎌倉に入った源頼朝が居館を新築した「大倉郷」の地や、畠山重忠ら御家人衆が「南御門」の地に邸宅・居館を構えたのは、六浦道南側の旧字名が嘗て大倉南御門と呼ばれていたのを観れば本調査地点周辺であろう。六浦道はこの時期既に道路として整備され、大倉の丘陵裾野と滑川の間に広がる小平野を東西に貫き朝比奈切通しを経て武藏六浦に至る政治的な意味をも含めた多目的な幹線道路であった。嘉祐2(1206)年に幕府が若宮大路東側に移転後も、定められた商業地として『吾妻鏡』建長3(1251)年12月3日条に大倉辻、同文永2(1265)年3月5日条に改めて大倉辻と須地賀江橋が指定されており、本調査地点付近の六浦道界隈は趣を変えて商業的に鎌倉を支えていた。幕府滅亡後、関東管領として政治の中心城は大倉より東の浄明寺周辺に移るもの、鎌倉外への陸路を想えれば六浦道とその周囲が急速に廃れるとは考え難く、都市的な機能は失いつつもその地の要道として機能していたと考えられる。

図1に本調査地点の位置と、地形・遺跡範囲・周辺の調査地点を表した。大倉幕府跡内では未だ調査例が少ないので、これを取巻く大倉幕府周辺遺跡群(神奈川県遺跡台帳No.49)や政所跡(神奈川県遺跡台帳No.247)では多くの調査が行われており、発見された側溝等の遺構群から空間的な土地利用の変遷が明らかになりつつある。尚、各調査地点及び引用・参考文献は本報文末に纏めて記した。

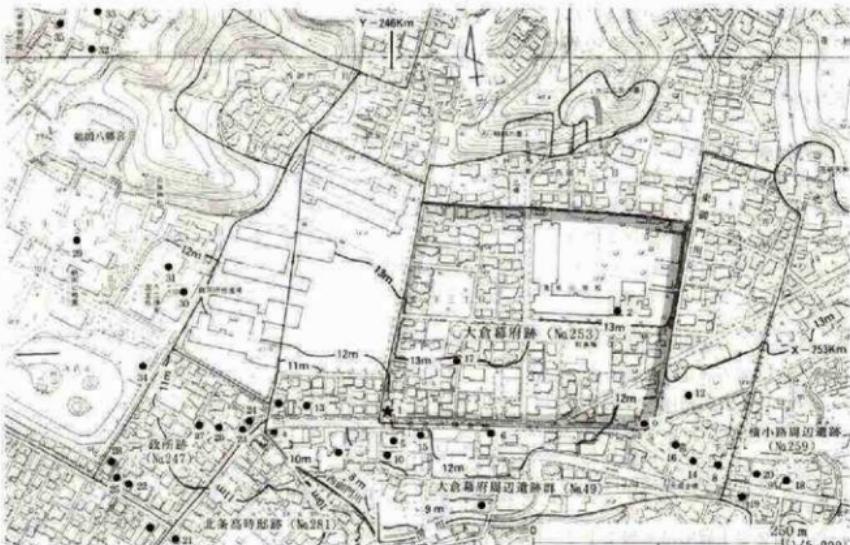


図1 大倉幕府跡周辺図

第2章 調査の概要

第2章 調査の概要

調査経緯から結果に至る概要

本調査は、自己用店舗併用住宅建設の事前相談を受け、諸協議を経て基礎構造に因り影響を受ける範囲と深度を対象として発掘調査を行うこととなった。調査面積は敷地内十文字に約30m²。

上層の堆積土を重機に因って除去し、現地表下約50cm付近を第1面として調査を開始した。調査では、調査区南半の硬化面を基に順次遺構面を規定深度まで、調査区西側の深基礎が予定された一角は安全面を考慮しながら深く掘り下げた。記録保存終了後に関係各方面に調査終了の旨連絡し、出土遺物と器材等を撤収し調査終了とした。調査の結果、15世紀代まで時期に依り個溝を伴う道路状の硬化面を発見し、六浦道と大倉幕府の範囲を考える上での一助となる成果を得られた。

調査区の設定と国土座標上の位置(図2)

調査に際して、調査地点の敷地境界を囲む方眼を調査範囲の形状に合わせて任意に設定した。グリッドは2m方眼とし、北東隅をA-0として東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付した。グリッド方眼は磁北に対してN-15°20' - Eである。国土座標値は付近に残る4級基準点E113(X-75 339.922 Y-24 522.304)とE114(X-75 366.30 Y-24 523.350)から、鎌倉市教育委員会福田誠氏の協力に依り調査区ほぼ中央のグリッド杭D-3の値(X-75 360.15 Y-24 390.15)を光波測定器で求めた。

堆積土層(図2)

本調査地点の堆積土は、周辺の地点で調査されている戦国期の遺構面は削平されており、図2の3層中世面を調査開始面としている。調査区の南半は硬化面と薄い砂泥が互層を成し、北半は溝の覆土が下層とした遺構上面まで達している。下層の硬化面を調査区ほぼ全域で検出し、西端の深堀りが可能な一角では全体が下層遺構の覆土であり、付近地点15他で発見されている弥生期の遺構群は確認できなかつた。

尚、図2の土層Noは本報文中で共通して使用する。

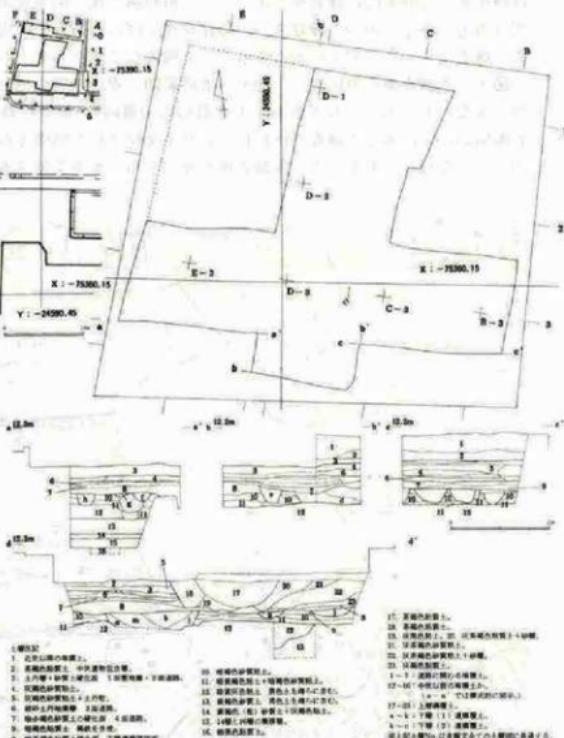


図2 調査区と堆積土層

第3章 遺構と遺物

上層の遺構と遺物

調査では調査区南半に検出された硬化面を基に、上層から第1面とし調査最終面を第6面としたが、本報文では発見される遺構と出土遺物の様相が変る図2の8層までを上層、それ以下を下層の遺構として報告する。これは、調査第2面で発見された遺構の底面が8層まで達しており、硬化面を1枚ずつ調査したものの中出土遺物が少なく、平面的な遺構の変遷が大きな変化がなく見え難いことにも因る。

図示した遺物の計測値と他の出土遺物については、報文末に出土遺物破片数表と遺物計測表を示した。図3は調査第1面とした遺構全測図と出土遺物。

現地表下約60cm、海拔11.6m前後で遺構精査を行ない、ピット11口と硬化面を発見した。調査区北西の一角は本来調査区外であったが、調査に伴う残土置場を確保するべく規定深度まで掘削したところほぼ第1面が露出した為、記録保存を行い出土遺物を探り上げた。ピット1は径60cm内外、深さ36cmを測るが、他のピットは径20~40cm内外、深さ25cm前後と小さく浅い。ピット2・3・4・8は硬化面に沿って並ぶ様にも見える。硬化面は土丹と砂粒を緻密に混交して固く叩き締められ、上面には部分的に貝粒子が撒かれていた。調査区内で最大幅2.3m、概ねN-22°→Eで東西方向に延びる。

1は1面上出土の船載品天目茶碗。内底部の黒褐色の釉は火を受けて肌荒れする。高台は露胎。2はピット1出土の糸切り底のかわらけ。器表は橙色を呈し、体部は底部より開いて立ち上がり口縁部は外反する。小片からの復元。出土遺物は少なく、他に常滑窯は堀・片口鉢II類の胴部小片が数点、瓦の剥

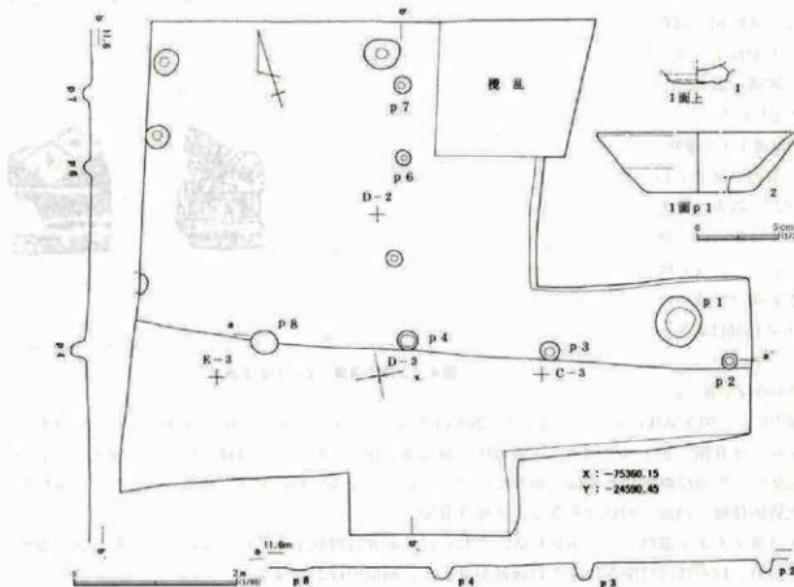


図3 上層の遺構(1)と出土遺物

離破片が2点、瀬戸窯後II期と思われる碗か皿の胴部小片1点がある。かわらけ片は、小片の観察ではあるが図示したものとほぼ同様の胎土・器形であり、15世紀前半の年代が考えられよう。

図3の硬化面上に微かに堆積する貝粒子を混交した砂質土除去後に、大小土丹を叩き結めた地業面が顯れた。調査区北半では粗砂混じりの粘質土が北に向って落ち込み、調査ではこれを東西方向の道路面と側溝と判断し遺構部分を掘りあげ、図4に調査では2面とした全測図を示した。

構は新旧2時期で、北側の溝2が古く溝肩は調査区外、南側の溝1が深く新しい。溝底は下層の遺構とした硬化面まで達し、溝2と同時期の道路面や下位の道路面に伴うであろう側溝を壊しているものと思われる。

3~13は溝1出土遺物。3~10は系切り底のかわらけ。何れも器表は橙色系で、胎土は粉っぽく焼成も良くない。3~4の体部は開き気味で厚っぽたぐ、5~6の体部は底部から開いて立ち上がる。5は口縁部の外反が著しい。

7は体部中位から開き気味に立ち上がる。10の器形は体部下位に丸みを留め口縁部は外反する。11は瀬戸窯灰釉平碗。後II期。胎土は灰褐色、灰黃緑色の釉は漬け掛け。12は三足付鉢。胎土は淡橙色、内面の釉は刷毛塗り、外面は露胎。外底面に脚が貼り付けられる。後期。13は平瓦。胎土は灰色で、不純物を含むが比較的精緻。凸面の叩目は花菱文。水福寺II期。

14~16は溝2の出土遺物。全て系切り底のかわらけ。器表は橙色系で、粉っぽい胎土。15~16の器形は丸みを留め、17の体部は開き気味で口縁部が直行し、胴部中程が肥厚する。

溝内の出土遺物は、図化したもの以外は殆どが指先大の小片であった。土砂の移動に伴って混入したのであろう13の平瓦を除けば図3の年代と大差はない。溝2出土のかわらけに先行する年代を考えたい

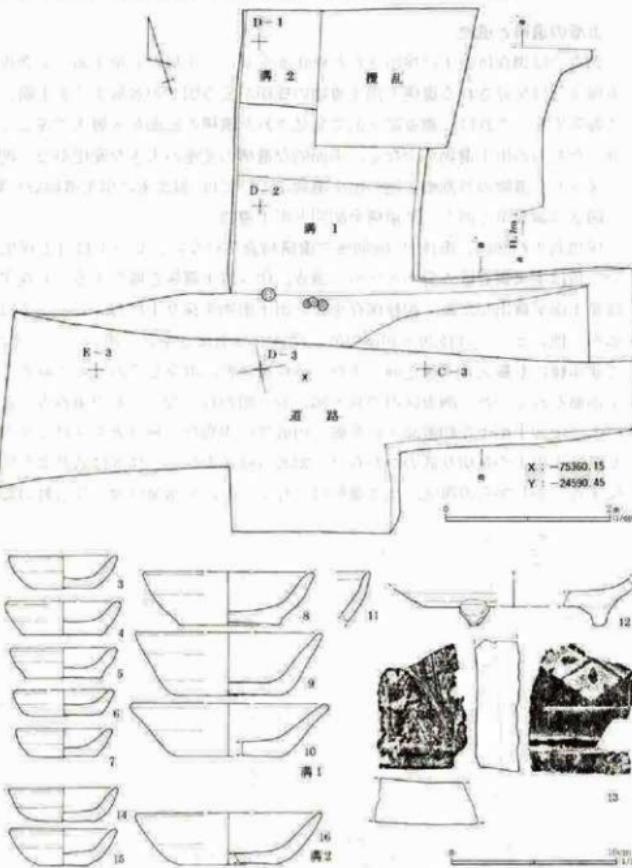


図4 上層の遺構(2)と出土遺物

が、本調査では供伴遺物に恵まれなかった。

下層の遺構と遺物

上層の遺構では、2面の道路の下位にさらに二次期の道路事業を発見した(図2の6層・7層)。調査で3面とした道路は破碎土丹による地業、4面は土丹粒と砂質土を混交した硬化面である。各地業面の間には、数cmの覆土があったが年代を推定し得る遺物は出土していない。南北の範囲(道路幅)は北側は溝1により失われ、南側は調査区外現歩道下へと続いていた。各面の道路軸方向は、概ねN 20° ~ 24° - W。

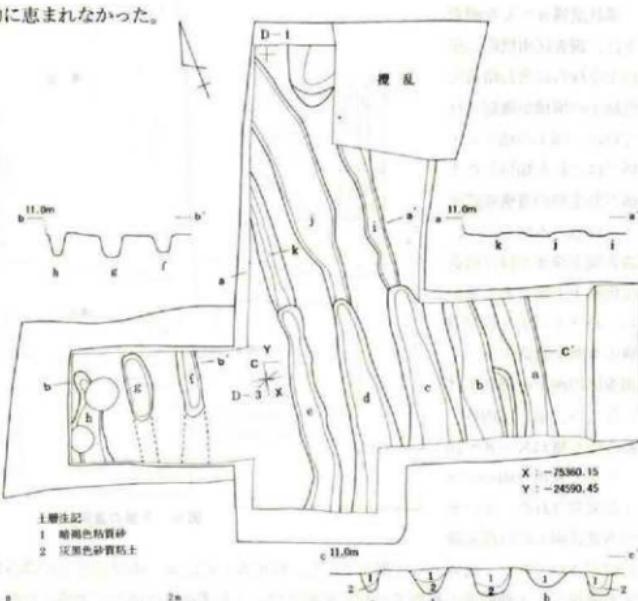


図5 下層の遺構(1)

現地表下約1m、海拔11m前後から調査区全体に亘る褐鉄を含浸した砂質土硬化面(図2-8層)を、調査では5面とし本報文では下層の遺構とする。図2の8~10層は、共通してみられる褐鉄分や粘質土の混入から数センチ単位で細分は可能であったが、後に述べる溝状の平面プランに目を奪われ10層上面まで下げてしまった。面上に不規則・疎らに観える褐鉄分に関して、㈱パレオ・ラボの鈴木茂氏に調査中に実見して頂いたところ、「植物が自生した後に腐食し、遺存した地下茎に水分中の鉄分が浸み込んだ」ものと観察され、「その土層の上面がある期間乾燥した状態で空気中に晒されていた」環境を推定されている。

10層上面では、微かに弧を描くように南北方向の溝状遺構が11条(図5-a~k)発見された。上幅25~60cmで一定せず、断面は概ねU字型だが掘り込み壁は凸凹、杭等の構造材が組まれていた様な痕跡は看取できなかった。深さは北側で上層溝1・2の影響もあって浅く、南に向って深くなり、底面は平坦ではなく同じ遺構内でも深浅があつたり凸凹している。a~eの覆土は2層に分れ、上層①層はi・j・kの覆土と類似する。図5ではc・d・eがi・j・kより新しい様に表現されているが、遺構同士の切り合いというほど明確なものではなかった。調査区内のaより東とグリッド杭D-3の西側には検出されず、fとgの南側は上面が褐鉄に覆われていたのを掘り損い、後稿溝3を掘り下げた際に調査区南壁土層断面にその延長を確認した。

出土遺物は、8層上面精査中に磨滅したかわらけ小片、kから常滑窯と思われる灰緑色の釉垂れのある胴部片、aの①層から产地不明の炻器片各1点の他は、全て弥生期の甕他の破片であった。常滑窯片は遺構の底面からは浮いた状態で出土しており、kとaからは弥生期の甕片もそれぞれ出土している。

本調査地点周辺では多くの調査が行われているが本事例の様な遺構の発見例はなく、遺物の出土状況を併せ鑑みると、本遺構の性格と年代について現段階では不明といわざるを得ない。

溝状遺構 a ~ k を調査中に、調査区南壁際に黒色土を疊らに含む暗黄灰色粘土の堆積が確認されていた。図 1 の地点 5・15ではこれと類似した土層が弥生期の遺構確認面とされる。本地点では、調査規定深度がほぼ暗黄灰色粘土上面である事から、D ラインより西で遺構の有無を確認するべく調査区の南半を掘り下げたところ、幅 1.2m 内外、軸方位が概ね N-8~10°—E で東西方向のプランが発見された。幸いその西延長線上には深基礎

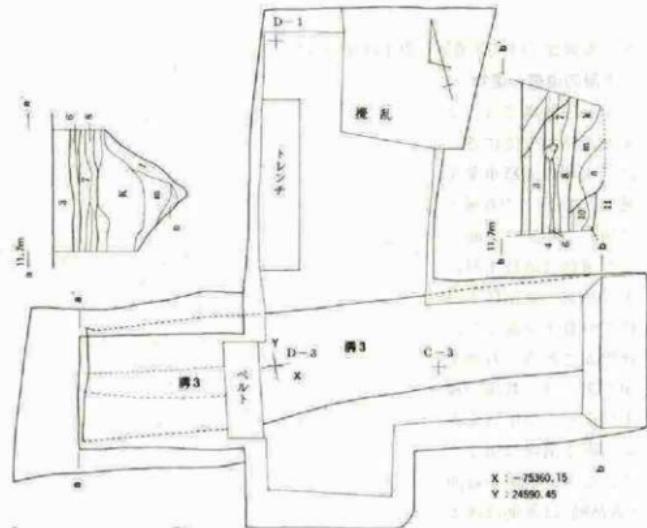


図 6 下層の遺構 (2)

が設定されており、遺構として掘り下げた。現地表下約 2.5m、確認面からの深さ 1.15m、海拔 9.75m で遺構底面を確認し、土層断面の観察等と前記平面プランを考え併せ溝状の遺構と判断し溝 3 とした(図 6)。杭等溝の構造に関わるものは、痕跡すら発見されず素堀と考えられる。覆土は上層は掘り込み層である暗黄灰色粘土(K 層)で一気に埋められ、下層は褐鉄分が織維状に混入する暗褐色粘土(M 層)、灰黑色粘質土(L 層)、粗砂を含む灰黑色弱粘質土(N 層)。出土遺物は弥生期の甕が 2 点出土し、図 7 に図示している。掘り込み壁面の堆積土は、L 層・M 層より下位に極めてしまりの良い砂質土が観察され、暗黄灰色粘土層(12 層)以下の自然堆積土であろうか。遺構底面は暗黒色粘質土で、観察した範囲内では夾雜物はなく固くしまっており地山の可能性がある。

図 10 は下層の出土遺物。中世期の遺物は先に述べた通り 3 点のみであり、何れも小片の為図化し得ず、かわらけを除く 2 点を図版 4 に載せている。

17 は d 層出土の弥生台付き甕の脚部。胎土は灰褐色で粗く焼成も良くない。鮮明ではないが外面は刷毛ナデ。18 は 10 层出土の弥生甕の底部。胎土は灰褐色でやや粗く砂粒を含む。外面はナデ調整。19 は 18 層出土の弥生甕の口縁部。胎土は黒褐色で粗い。外面は刷毛ナデ。口唇部は工具によりキザミ状に面取りされる。内面はナデ調整。20 は溝 3 上層出土の弥生甕の底部。胎土は灰褐色で粗く砂粒を含む。外面はナデ調整。21 は溝 3 下層出土の弥生甕の口縁部。胎土は粗く黒褐色を呈する。外面は継方向に刷毛ナデ、その下位には 4 本 1 単位の工具による波状の文様が、内面は口唇部下に 5 本 1 単位の櫛描線。

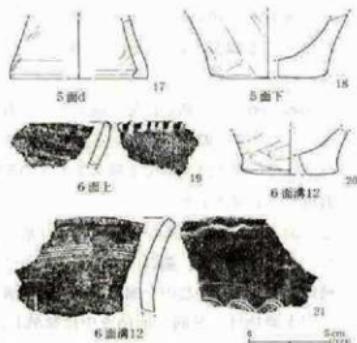


図 7 下層の出土遺物

第4章 調査成果

本調査では下層で東西方向に断面V字型に近い溝と、それが埋められた後に方向をほぼ同じくして南北方向の溝状遺構が東西に並ぶ硬面面を発見した。溝3は地点15の溝9とほぼ並行し、遺構断面や覆土、遺物の出土状況や層位的に観た年代等共通点が多い。地点15の報文では、六浦道沿いをはじめとして市内遺跡の類例を挙げながら、平安時代後～末期に属する可能性を指摘している。溝状遺構A～Kは、調査時には地点15他でも発見されている弥生期住居址周溝も想定したが、炉や柱穴が全く発見されず、出土遺物も殆ど無い。六浦道沿いという立地条件や、上層の道路面への連続性を考えたいが故に調査区周囲の状況が把み得ず今後の調査事例を待ちたい。

上層の遺構は、海拔11.4～11.1mの間に4時期以上に亘る道路遺構と考えられ、幅は少なくとも3mはある。ただ、1面の硬面面は側溝が埋め戻された後を整地しており道路としては機能していたかは疑問である。本調査では溝内の出土遺物を除き、道路面の年代を考え得る遺物は無いに等しい。周辺の調査では、地点3の13世紀後葉～14世紀前葉の道路状遺構は、本調査の道路とほぼ直交し、現況の道路が中世期の道筋を踏襲していることを示唆している。本調査地点が面する西側の現道路が気になるところである。地点15の15～16世紀代の六浦道側溝は、本調査の1・2面道路とは厳密な平行関係とは言い難く現車道とほぼ平行し、13世紀前半代の建物址が六浦道と平行関係にあるとしている。地点11・13の14世紀後半以降の六浦道側溝の可能性がある溝は、現車道より北に振れ本調査地点の溝1か2がその延長線上に中りそうである。年代に振り道路幅や方向は多少異なるが、中世前期の六浦道は現車道のほぼ真下やや北寄りに平行し、中世後期になると東に行く程北にずれているのではないだろうか。

表1 出土遺物計測表

区分	遺物名	計測値	単位	測定者		上層	日	横戸	高さ	底面	上層	日	横戸	高さ	底面	上層	日	横戸	高さ	底面
				測定者	測定者															
上層	1 中天井	底径 3.6	cm	上層	上層	上層	日	横戸	高さ	底面	上層	日	横戸	高さ	底面	上層	日	横戸	高さ	底面
	2 土器	底径 (12.2)	cm																	
	3 土器	底径 6.4	cm																	
	4 土器	底径 4.8	cm																	
	5 土器	底径 6.1	cm																	
	6 土器	底径 (5.7)	cm																	
	7 土器	底径 (5.5)	cm																	
	8 土器	底径 (10.0)	cm																	
	9 土器	底径 (11.1)	cm																	
	10 土器	底径 (12.1)	cm																	

表2 出土遺物枚数表

遺物	分類	手		鉢		碗		瓶		壺		内		外		漆		火		鉢		
		手	切り	手	鉢	白	青	白	青	手	鉢	内	外	漆	内	外	漆	内	外	漆	内	外
上層		160	10	5		2	4	134	3	1	3	1	3	6								
下層		1										1										
その他		15		1				3	11			1										
計		176	10	6		2	7	146	3	2	3	2	3	6								
%		35.6%	2.0%	1.2%	—	—	—	1.4%	22.0%	0.6%	0.6%	0.6%	0.6%	1.2%								

遺物	分類	土器類				石器類				金属製品				木製品				骨製品				自然遺物				中央以前				計	% %	備考
		土	器	石	器	金	屬	石	器	金	屬	木	器	金	屬	木	器	金	屬	骨	器	金	屬	骨	器	金	屬	骨	器	金	屬	
上層		1	1	3	2							21	14	270	74.3%	1	2	1	1	3	6											
下層																					81	83	16.8%	9個以下								
その他																					7	41	8.3%	複数								
計		1	1	4	4							21	102	494	100%																	
%		0.2%	0.2%	0.8%	0.8%	—	—	—	—	—	—	4.3%	20.6%	100%																		

【調査地点・文献】

大倉幕府跡

- 本調査地点(雪ノ下三丁目618番4地点)
- 雪ノ下4-707-1地点 1990年調査(未報告)
- 雪ノ下3-651-8地点 1997年調査。「大倉幕府跡(No.253) 雪ノ下三丁目651番8外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』 1999年3月 鎌倉市教育委員会

大倉幕府周辺遺跡

- 南御門遺跡 1980年調査(未報告)。「鎌倉考古4」 1980年11月 鎌倉考古学研究所
- 南御門遺跡 1980年調査(未報告)。「鎌倉考古4」 1980年11月 鎌倉考古学研究所
- 雪ノ下4-2-23地点 1981~82年調査(未報告)。
- 雪ノ下4-610-2地点 1983~84年調査(未報告)。
- 雪ノ下565-4地点 1989年調査。「大倉幕府周辺遺跡(No.49) (雪ノ下大倉耕地565番4地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』 1991年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下569-1地点 1989年調査。「大倉幕府周辺遺跡 雪ノ下字大倉耕地569番1地点発掘調査報告書』 1990年3月 大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
- 雪ノ下4-620-4地点(未報告)。
- 雪ノ下3-606-13地点 1991年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) (雪ノ下三丁目606番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』 1993年3月 鎌倉市教育委員会
- 二階堂38-13地点 1991~92年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(二階堂字住柄38番13 No.49)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』 1993年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下3-607-1地点 1992年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) (雪ノ下三丁目607番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第1分冊)』 1994年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下562-29地点 1994年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) (雪ノ下字天神前562番29地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告(第1分冊)』 1996年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下4-620-5地点 1996年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) (雪ノ下四丁目620番5地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』 1998年3月 鎌倉市教育委員会
- 『大倉幕府周辺遺跡群(雪ノ下四丁目620番5地)発掘調査報告』 1999年3月 大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
- 雪ノ下562-16地点 2000年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下字大倉耕地562番16」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』 2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下4-580-10地点 2000年調査。「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下字四丁目580番10外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』 2001年3月 鎌倉市教育委員会

横小路周辺遺跡

- 二階堂9-1地点 1987~88年調査。「横小路周辺遺跡(No.250) (二階堂字住柄9番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』 1990年3月 鎌倉市教育委員会
- 『横小路周辺遺跡周辺調査報告(二階堂字住柄9番1地点)』 1991年3月 横小路周辺遺跡発掘調査団
- 雪ノ下5-557-1地点 1996年調査(未報告)。
- 二階堂字住柄10-6地点 1998~99年調査。「横小路周辺遺跡(No.259) 鎌倉市二階堂字住柄10番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告(第2分冊)』 2000年3月 鎌倉市教育委員会

北条高時跡

- 小町3-426-3地点 1994年調査。「北条高時跡(No.281) 小町三丁目426番3地点1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告(第1分冊)』 1996年3月 鎌倉市教育委員会

政所跡

- 雪ノ下3-987-1・2地点 1990年調査。「政所跡」 1991年3月 政所跡発掘調査団
- 雪ノ下3-966-1地点1990調査。「政所跡(No.247) (雪ノ下三丁目966番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』 1992年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下3-965地点 1990調査。「政所跡(No.247) (雪ノ下三丁目965番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』 1992年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下3-988地点 1991調査。「政所跡(No.247) (雪ノ下三丁目988番)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第3分冊)』 1993年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下3-970-2地点 1997調査(未報告)。
- 雪ノ下3-971-6地点 1997調査。「政所跡(No.247) (雪ノ下三丁目970番2外地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊)』 1999年3月 鎌倉市教育委員会
- 雪ノ下3-989-4地点 1999調査。「政所跡(No.247) (雪ノ下三丁目989番4地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)』 2001年3月 鎌倉市教育委員会

・調査地点及び刊行報告書は2001年9月末現在。未報告の地点は各調査担当者のご教示による。

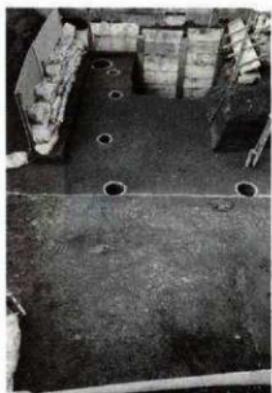
・地点Noは大倉幕府跡・大倉幕府周辺遺跡・政所跡は全調査地点、他の遺跡図の範囲内に付している。何れも波邊美佐子能力の基準者廣く有る。



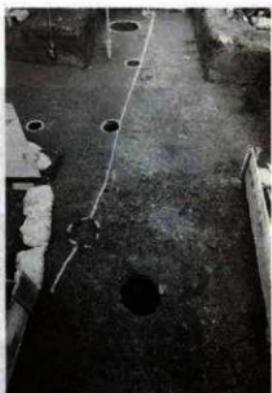
▲ 1. 残土山下の1面遺構（南から）



▲ 2. 1面全景（南西から）



▲ 3. 1面版築範囲と柱穴（南から）



▲ 4. 同左（西から）

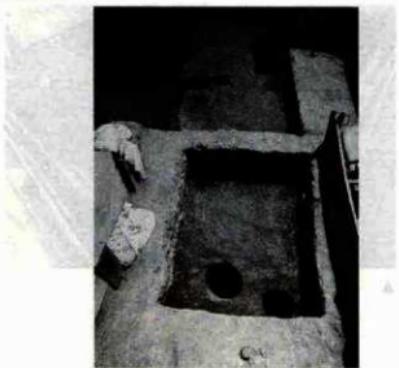


▲ 5. 1面全景（南西から）



▲ 6. 2面道路事業と溝（西から）

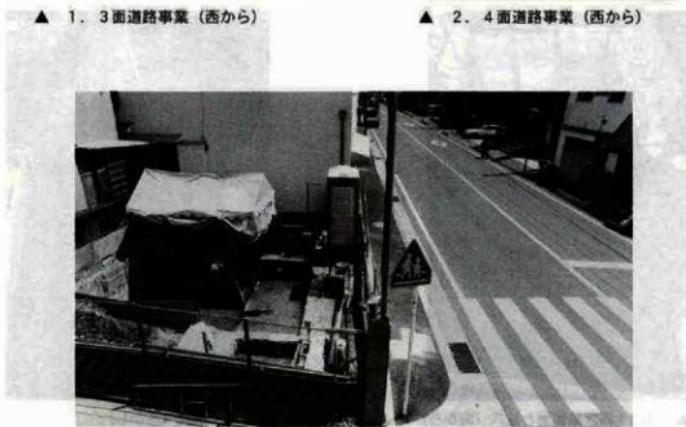
図版2



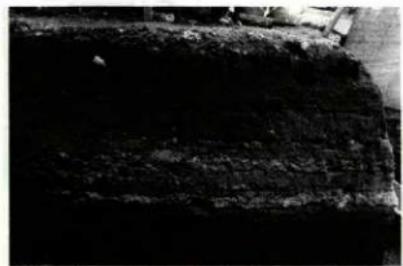
▲ 1. 3面道路事業（西から）



▲ 2. 4面道路事業（西から）



▲ 3. 現況道路と道路事業（4面）（西から）



▲ 4. 堆積土層（図2・c）



▲ 5. 堆積土層（図2・b）



▲ 1. 5面全景（南から）



▲ 2. 同左（西から）



▲ 3. 5面溝e・d・c土層断面



▲ 4. 5面溝c・b・a土層断面

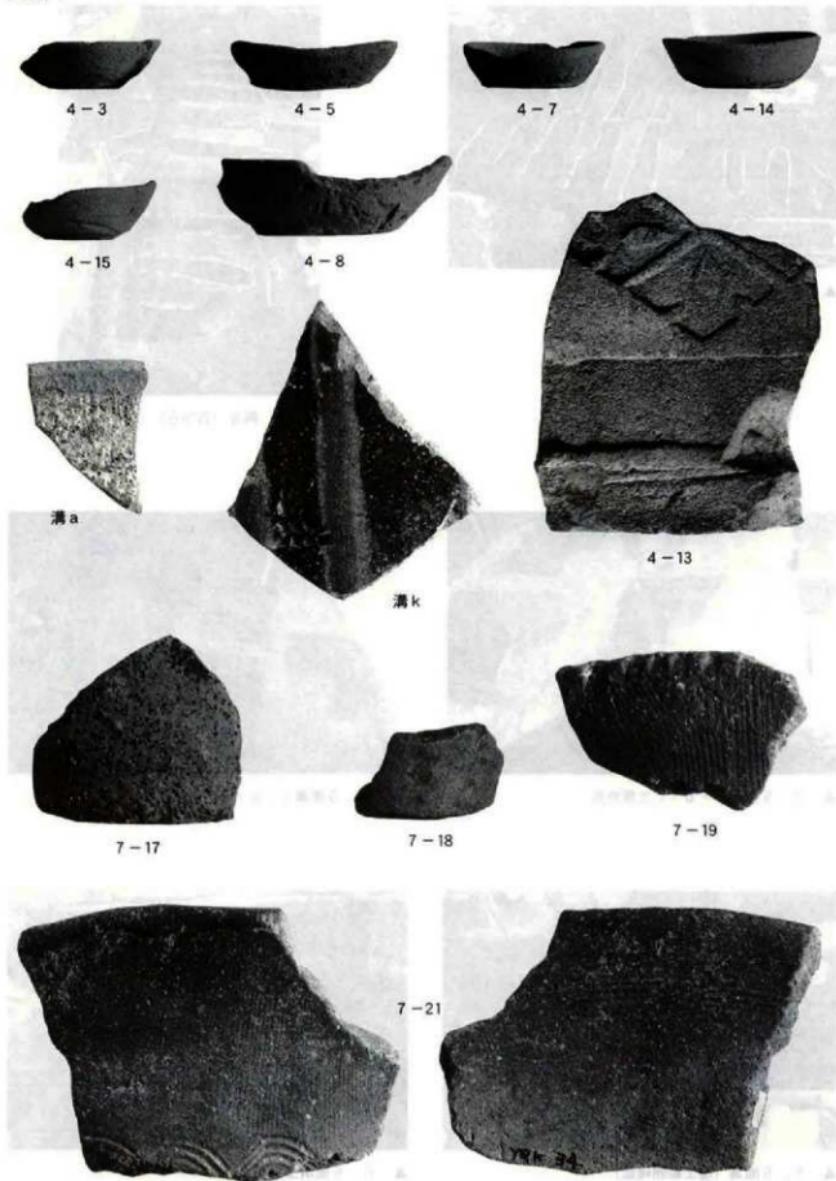


▲ 5. 6面溝（覆土範囲確認）



▲ 6. 6面溝土層断面

図版4



近づくと、さすがに歴史的遺跡であることがわかった。その中で、今最も興味があるのは、石碑である。この石碑は、元は大正時代に建立されたもので、現在は、その上部が落として、その下部が現れた状態である。

この石碑の上部には、その建立年月である「大正12年」と書かれている。また、その下部には、「由比ガ浜二丁目106番6、7地點」などと記されている。

下馬周辺遺跡(No. 200)

由比ガ浜二丁目106番6、7地點

由比ガ浜二丁目106番6、7地點は、現在では、その周囲には、多くの古墳や遺跡が見つかっています。特に、その北側には、古墳時代の古墳が多く、そのうち、最も大きなものは、直径約50メートルの大型古墳です。

この古墳の南側には、古墳時代の古墳が複数あります。また、その東側には、古墳時代の古墳が複数あります。また、その東側には、古墳時代の古墳が複数あります。

この古墳の北側には、古墳時代の古墳が複数あります。また、その東側には、古墳時代の古墳が複数あります。

この古墳の北側には、古墳時代の古墳が複数あります。また、その東側には、古墳時代の古墳が複数あります。

第三章 第三回 文本

第三章 文本

第三章 文本

第三章 文本

第三章 文本

第三章 文本

例　　言

- 本報は、下馬周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.200)内、鎌倉市由比ガ浜二丁目106番6、7地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年6月12日から同年8月15日まで実施した。調査対象面積は約48m²。
- 調査及び整理作業の体制は以下の通り。

調査員 沙見一夫 渡邊美佐子 山上玉恵
調査補助員 畠島 審 田畠衣理
作業員 杉浦水章 照井三喜 中須洋二 萩野卓也 渡辺輝彦
- 本報文に關わる整理作業と原稿執筆は調査員及び調査補助員が分担して行った。執筆は沙見(第1章の2・3、第2章、第3章、第4章)、渡邊(第3章の4)、田畠(第1章の1・第3章)が行ない稿末にその名を明記した。又、本報に使用した写真は沙見・田畠が撮影した。
- 出土遺物の内、舶載陶磁器は手塚直樹氏(青山学院大学)に、瀬戸窯製品は宗基富貴子氏(鎌倉考古学研究所)に御教示を賜った。
- 現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。

鈴木茂((株)パレオ・ラボ) 上本進二(神奈川県立七里ガ浜高等学校教諭) (社)鎌倉市シルバー人材センター 東国歴史考古学研究所 鎌倉考古学研究所 エヌケーホーム株式会社 宮崎興業(有)アミュレット
- 本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次 本文目次

第1章 環境と立地	146
1. 立地と歴史的環境	146
2. 周辺の地形と調査地点	148
3. 堆積土層	149
第2章 調査の概要	153
1. 調査経緯と経過	153
2. 調査の方法	153
第3章 遺構と遺物	154
1. I期の遺構と出土遺物	154
2. II期の遺構と出土遺物	157
3. III期の遺構と出土遺物	169
4. IV期その他の出土遺物	170
第4章 調査成果	173
1. 調査地の性格と年代観	173
2. 周辺の調査成果から	173

挿図・表目次

図1 下馬周辺遺跡の範囲と周辺の調査地点	146
図2 調査地点周辺図	147
図3 調査地点と周辺の堆積土層模式図	149
図4 國土座標上の位置とグリッド配置	153
図5 I期全測図・出土遺物	154
図6 I期遺構外出土遺物	156
図7 II期全測図・調査区堆積土層	157
図8 建物3・5・6・4	158
図9 II期遺構内出土遺物(1)	159
図10 建物1・土壤3、建物2・土壤8	160
図11 II期遺構内出土遺物(2)	161
図12 土壤2・出土遺物	162
図13 建物9・8・7	163
図14 II期遺構内出土遺物(3)	164
図15 土壤9・10・11	165
図16 II期遺構内出土遺物(4)	167
図17 II期遺構外出土遺物	168
図18 III期全測図・出土遺物	169
図19 III期遺構外出土遺物	170
図20 その他の出土遺物	171
図21 常滑窯窯鉢・甕押印文拓影	172
表1 常滑窯押印文拓影	172
表2 出土遺物計測表(1)	174
表3 出土遺物計測表(2)	175
表4 出土遺物破片数表	176

写真図版目次

図版1 I期全景(I区・南から)	177
I期溝1土層断面(東から)	
II期上層全景(II区・南から)	
II期上層建物3(II区・東から)	
II期下層全景(II区・南から)	
II期下層建物9(II区・南から)	
建物9柱(西から)	
II期下層土坑8(I区・北から)	
II期下層建物6壁板(II区・北から)	
図版2 II期上層土坑2(I区・南から)	178
土壤2完掘(南から)	
III期全景(I区・南から)	
土壤9~11(I区・南から)	
土壤9上層出土漆器(南から)	
土壤9内出土銀(南から)	
鏡の下部出土銅錢(南から)	
図版3 I期建物1出土獸骨(犬・南から)	179
降雨後水没した調査区(I区・南西から)	
最終状況(I区・南から)	
堆積土層(中央壁・南から・部分)	
図版4 出土遺物(1)	180
図版5 出土遺物(2)	181
図版6 出土遺物(3)	182

第1章 環境と立地

1. 立地と歴史的環境(図1)

本調査地点は、JR鎌倉駅の南南西約550mの鎌倉市由比ガ浜二丁目106番6、7外地点に所在する。北側に下馬四つ角から長谷観音・大仏方面に至る国道134号線が東西に走り、扇ガ谷から南下する道路と交叉する通称六地蔵交差点南に位置する。六地蔵は、扇ガ谷へと向う辺りがかつての刑場の跡とされる飢渴島とよばれ多い間荒地となっていたのを、供養し弔うために祀られたという。六地蔵交差点では神奈川県遺跡台帳に掲げば4遺跡が接し、北東一帯が若宮大路を中心に南北に広い若宮大路周辺遺跡群(№242)、北西一帯が古代相模國の鎌倉郡衙跡や高級武家屋敷他が発見された調査地を含む今小路西遺跡(№201)、南西一帯が長谷小路周辺遺跡(№236)、南東一帯は本調査地点が北西端に位置する下馬周辺遺跡(№200)とされている。下馬周辺遺跡は、現下馬四つ角より南の東西500m×南北最大450mの広い範囲が呼称され、西に滑川が南下しほぼ中央を若宮大路が南北に貫く。



図1 下馬周辺遺跡の範囲と周辺の調査地点

国道134号線は古代においては宝亀2年(771)以前の古東海道、また中世期では大町大路と考えられている。東は名越の切通しから西は極楽寺坂・大仏坂へと至り、鎌倉とその城外とを東西に結ぶ中世鎌倉の幹線道路であった。調査地点より東での大町大路は、八幡宮から南の海浜に向けて南北に貫く若宮大路と下の下馬(現下馬四つ角)で、宝戒寺前から若宮大路の東を南北に並行して走る小町大路と現大町四つ角付近で交叉する。現下馬四つ角付近は市街域を流れる小河川が滑川に合流し、下の下馬橋が架けられていたとされ、『吾妻鏡』に挿れば仁治2年(1241)11月には、三浦氏と小山氏が下の下馬の西類の妓楼において祝宴の末に喧嘩に至り騒動になったとある。現大町四つ角付近の名越に至る道筋に沿っては、『吾妻鏡』建長3(1251)年及び文永2(1265)年に幕府から裁許を受けた商業地として定められた「大町」「米町(穀町)」「魚町」などの商業地が在った。幕府諸機関や武家屋敷が建ち並ぶ地域とは異なり、遊興的な施設をも備えた鎌倉における繁華の中心であったことが推察できる。

調査地点より西では、寿福寺前から若宮大路の西を南北に並行して走る今小路と六地蔵周辺で交叉し、現道筋を長谷小路と名を変えている。遺跡名にも付される長谷小路は、一般的には鎌倉中期以降に創建されたという長谷寺と六地蔵までの道筋をいうが、中世期に他の大路(小路)の様に幹線道路として通されていたかは定かではない。この道筋には倉庫や工房等の機能が想定される方形堅穴が建ち並び、出土遺物から観ると職能人が多く居住した地域である。さらに六地蔵より市道を海岸に向い南に行くと、小坪から由比ヶ浜にかけて造営された下向原古墳群の一つである采女塚(近世においては無情堂塚とも呼ばれていた)が在ったというが、現在ではその様相は見る影もない。

(田畠)

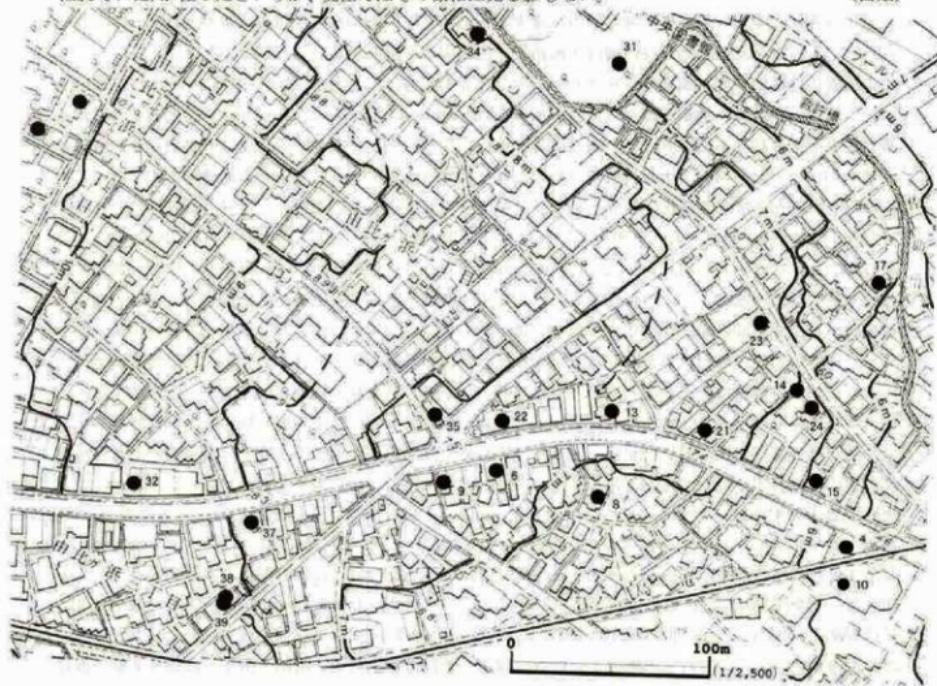


図2 調査地点周辺図

2. 周辺の地形と調査地点(図1・2)

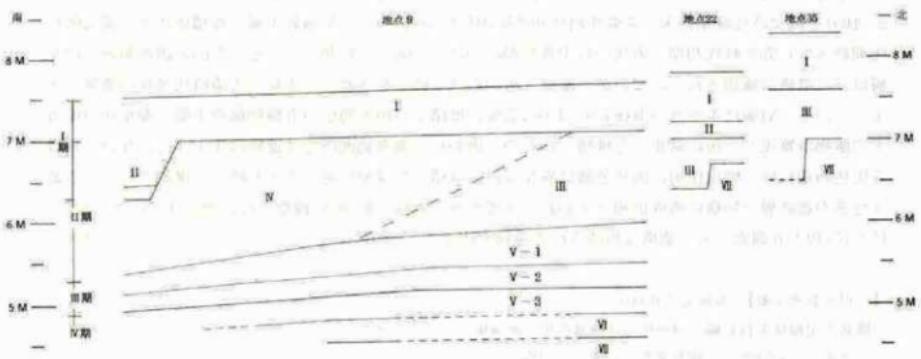
下馬周辺遺跡と周辺の地形は遺跡地の南縁と、今小路西遺跡内北西一帯の通称御成山裾までの間は微高地状の砂丘が横たわり、佐助ヶ谷に発し御成山山裾から東に流下する佐助川と、北から流下する(仮称)御成川・扇ガ谷川の小河川が現下馬四ッ角周辺で遺跡地の西を南下する滑川に合流する。本調査地点は南縁と北西の砂丘間低地上で、現況の海拔は約7.6m。現況の等高線で観ると、遺跡地内では中世期の砂丘上に近世飛砂が堆積した南西の地点A辺りが現況海拔11m強、現一ノ鳥居付近が海拔約10m、砂丘の斜面を下る様に北及び滑川氾濫原の影響か西へ向って低くなり、地点20・地点42-1・地点25で発見された旧河川址と佐助川が滑川に合流する下馬四ッ角付近は海拔3.5m前後である。この比高差は、史跡若宮大路に係わる調査の地点42-3他で確認された中世基盤層を含む堆積土層から観ると、中世期でもそう大差ないと考えられる。寧ろ、木組の方形堅穴が発見された地点3、天文年間の鳥居の根方が発見された地点42-2や一連の若宮大路に係わる調査成果から、地点25-2の北側由比ヶ浜歩道橋辺りから横須賀線ガード付近までの少なくとも現車道は近世以降の削平が著しい。北西一帯は、御成山の南で現況海拔10m前後、佐助川に沿って西及び北に向って低くなり、裁許橋より東の両岸では海拔5m前後である。この一帯の調査例は今小路より東に多く、地点B・17で河川の影響と考えられる堆積土が観察され、地点13~15・21~24・35は風成砂状の砂丘上に立地する。各調査成果から中世地山を含む堆積土層を観ると、中世基盤層が地点4・15辺りで急激に落込むことを除けば、現況と中世期の比高差はそう変わらない。一方で、佐助川より北側の今小路より東側一帯は現況でも7m以下であり、地点C・D・Eは近世以降に大型土丹で一気に埋立てられ確実に中世基盤層と思われる堆積土は観察されていない。地点11・12・27で発見された(仮称)御成川流路や、佐助川の氾濫原が考えられる。

下馬周辺遺跡内では本調査地点を含め10ヶ所で調査が実施されている(2001年9月末現在)。内、8ヶ所が下馬四ッ角から六地蔵交差点に至る現車道(通称由比ヶ浜通り)南沿いに在り、隣接する他3遺跡の調査地点を併せば本地点周辺での調査は20ヶ所程になる。由比ヶ浜通りの北側、若宮大路周辺遺跡群内地点13~15・21~24と下馬周辺遺跡内の地点4・10は砂丘上に立地し、主たる遺構は方堅穴で井戸や地割・区画を示唆する溝状土壤等、整地層は明確ではないが密なる遺構群が発見されている。地点4・13~15・23・24で発見された方形堅穴には、倉の機能が想定される床下に土台石材を用いるものが含まれる。地点10で南北、地点13・22では東西方向に発見された道路状遺構は、町割りの中での路地や通路であり、都市の基軸としての幹線道路とは異なるであろう。浜地周辺で多く発見される人骨の埋葬・遺棄は、地点37で仰臥伸展葬1体と方形堅穴覆土最上層に集積された頭蓋骨、地点22の近世土壤墓群以外は、遺構覆土中の遊離人骨を除けば報告されてはいない。地点6・8は本地点と同様に砂丘間低地上にあり、地盤の影響であろう弱いながらも整地層が窺える。地点6では地割溝と通路、それに平行して床下から木材を組上げた建物や礎板を伴う方形土壤が発見されているが、掘立柱建物は確認されていない。地点8では小規模な掘立柱建物、土壤、溝が発見されている。地点1・5・7は、佐助川が琵琶橋を経て滑川に合流する付近に在って調査区の大半が旧河川流路である。地点7で発見された河川址は、黒褐色粘質土の中世地山を肩に北東から南西方向に流下し、出土遺物は古代土師器片から大窓期瀬戸・美濃窓片と幅が広い。地点20・25・42-1でも河川が発見され、地点20ではほぼ同様の位置で造り替えられ出土遺物の年代からは中世期まで通り、地点25では歩道寄りに近代以降の河川が若宮大路に平行して南下し、やや西に離れた位置に方向が東に振れて古代の河川址が下馬四ッ角に向う。一方、『鎌倉市史』では佐助川は地点1・5・7前の現車道北沿いを流れて若宮大路を横切り、琵琶橋も現在よりも北にあった事を推定している。これら下馬四ッ角付近で滑川に合流する小河川の流路と由比ヶ浜通り北側の堆積土層や地形については、本誌第2分冊所収地点35の報文末で若干述べている。

3. 堆積土層(図3)

本地点と地点6・8付近は、先に触れた地点23・24より北辺からさらに西へと延びる南側の砂丘と、由比ヶ浜通りの北側から佐助川の南の範囲で東西方向に横たわる砂丘とに挟まれた砂丘間低地にある。為にこれまでに触れた各地点とは、土地利用の方法・堆積土・発見される遺構ともかなり様相が異なる。図3は本調査地点と地点6・8・15・19の模式土層図。以下、地点6の自然科学分析の成果を併せながら各土層について説明を加える。尚、以下のI～IV層は基本土層Noとして本報文に共通して使用し、本調査地点の堆積土層との対比は図7の調査区壁面の堆積土層図に示した。

I層は近代以降の堆積土で、大正12(1923)年の関東大震災の後処理で片づけられた焼土や瓦礫を含む。II層は宝永4(1707)年富士山噴火時の降灰及びこれを除去・集積した層。本地点では調査区南端の近世溝底部に、地点15では調査区全域ではないが最大層厚約20cm堆積し、近世土壤群はこの層より新しい。地点8では近世耕作土上部の層位に混入する。III層は中世遺構面構成土及び遺構覆土の砂層乃至砂質土。本地点では調査区北側の上層にのみ堆積し、確認した最高位海拔約7.1m。地点15・19では



土層注記

西	地点9	地点6	地点8	東	地質	説明
8M				8M	I層 近世以降の堆積土	大正12(1923)年の関東大震災の後処理で片づけられた焼土や瓦礫を含む。 図7の1・2層。
7M	I	I		7M	II層 宝永の火山灰層	宝永4(1707)年富士山噴火時の降灰及びこれを除去・集積した層。 図7の3・4層。
6M	II層			6M	III層 細粒黃灰色砂質土乃至砂層	中世遺構面構成土及び遺構覆土。 図7の5・6層。
5M	III層			5M	IV層 (灰)褐色乃至暗茶褐色砂質土	中世遺構面構成土及び遺構覆土。かなり土厚になった砂質土。移松はやや粗い。 図7の7・8層。
4M	V-1	V	I	6M	V層 喀那同色砂質土乃至弱粘弱砂層	調査区の堆積土上で、移松は上位はやや粗く下位は細かい。水辺の障生植物の根立根は殆ど見られない。 図7の9・10層。
3M	V-2	A		5M	VI層 喀(赤)褐色腐食土層	有機物腐食土層。木基を多量に含む。 図7の11層。
2M	V-3	B	N		VII層 青灰色細粒砂層	未成砂層か。 図7の12層。
1M	VI	C	V			
0M	VII	D	VII			

図3 調査地点と周辺の堆積土層模式図

遺構確認層位及び遺構覆土となり、最高位は海拔7.0m前後。IV層も中世遺構面構成土及び遺構覆土で、堆積環境に因りかなり土壤化した砂質土乃至粘質土。本地点と地点6・8に顕著で、土丹等に依る地盤は行われていないが土層の違いに因り遺構面を構成する。本地点では海拔約7.1mから下位の土層が緩傾斜する調査区南東端で5.3m前後まで、地点6では同7.0~5.8m前後まで、地点8では同5.2~4.6mにかけて堆積する。V層は土壤化した砂質土乃至弱粘質砂層で湿地性の堆積土と思われるが、地点20・23・24に顕著な、水辺の陸生生物の棲息痕が観られる暗褐色弱粘質砂層とは異なる。出土遺物から本地点ではV-2層、地点6ではV-C層までが中世期の堆積土と考えられる。本地点で海拔6.0~4.9m前後まで、地点6で同5.8m以下、地点8で同5.2~4.6m前後にかけて堆積し、それぞれ砂粒や土質に依り3~4層に細分される。地点6の自然科学分析の成果に拠れば、V層上位では下位と同様に沼沢地の環境乍ら腐水要素が強く、下位では流水を伴う沼沢地と推定し、この湿地帯は一部水田化されたであろうことを指摘している。地点6~8のV層は同様の層序と堆積レベルで確認され、土質や微かながらもスコリアを内包する等共通点も多い。同一土層との確証はないが、大きさは異なる地理的条件と環境下で堆積したと思われる。地点6ではV層上面での遺構確認は行い得ず遺物も出土していないが、自然科学分析の結果では「下部において放射性炭素年代測定を行った。その結果、2,320±100yrs. BP. (PLD-109)と繩文時代晚期終末から弥生時代初期の年代が得られ」、V層最下層の堆積年代を「繩文時代晚期終末から弥生時代初期~古代から中世初期にかけての頃」と推測している。今回の調査範囲ではV層以下に遺構は確認されていないが、V-3層からは小破片を含めて弥生期~古墳時代後期の遺物が出土している。VI層は本地点の海拔4.9~4.6m前後にかけて堆積する暗赤褐色の有機物腐食土層。湿地状の環境下で植物が繁茂した後に腐食して堆積したものと思われる。調査範囲内では遺物は出土していない。VIIは青灰色の細粒砂、酸化作用に因り色調は異なるが、堆積した環境は地点22・35他でも確認されている黄灰色系の細砂層と同様に廐成砂層と思われ、本地点及び同様の砂層が観察された地点4・6・8・10・11・15~17・19の各調査でも、遺構は確認されず遺物も出土していない。

(次見)

【引用・参考文献】(本報文に共通する)

- 鎌倉市史編纂委員会編 1959年『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
白井永二 1976年『鎌倉事典』東京堂出版
上木進二 2000年3月「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『東国歴史考古学研究所調査研究報告 第26集 神奈川県逗子市桟敷戸遺跡発掘調査報告書』 227~246頁
鈴木茂他 1997年3月「下馬周辺遺跡の花粉化石」「下馬周辺遺跡(Ne200)」由比ガ浜二丁目107番1地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』180~196頁
天河内勉 1997年3月「V. 中世鎌倉の河川について」『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 一小町一丁目1028番1地点』『若宮大路周辺遺跡群発掘調査』10~22頁
藤沢良祐 1994年「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 第3輯 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター
1997年「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』 第5輯 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター
中野晴久 1992年「中世知多古窯址群の押印文 一ミクロ流通史のための予備的研究ー」『知多半島の歴史と現在・4』 日本福祉大学知多半島総合研究所
1994年「赤羽・中野 一生涯における編年についてー』『中世常滑焼をおって』 シンポジウム資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所
河野真知郎 1993年「中世鎌倉火鉢考 一東国との関連においてー」『考古論叢 神奈川』 第2集、神奈川県考古学会
永井久美男 1996年「日本出土錢銭観」 兵庫県埋蔵銭調査会

【調査地点・報告書】(本報文に共通する)

下馬周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.200)

- 地点1. 山比ガ浜二丁目2番2地点 1988年調査。未報告。
- 地点2. 山比ガ浜二丁目1011番1地点 1989年調査。『下馬周辺遺跡発掘調査報告書一鎌倉女学院地点一』1998年3月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点3. 山比ガ浜二丁目27番9地点 1989年調査。未報告。
- 地点4. 山比ガ浜二丁目18番12地点 1990年調査。『下馬周辺遺跡 東京電力鎌倉営業所改築に係る発掘調査報告書』1992年3月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点5. 山比ガ浜二丁目2番10地点 1990年調査。未報告。
- 地点6. 山比ガ浜二丁目107番1地点 1995年調査。『下馬周辺遺跡(No.200)(山比ガ浜二丁目107番1地点)』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』1997年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点7. 山比ガ浜二丁目2番12地点 1998年調査。『下馬周辺遺跡発掘調査報告書4 一山比ガ浜二丁目2番12地点』1998年9月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点8. 山比ガ浜二丁目110番5地点 1999年調査。『下馬周辺遺跡(No.200)山比ガ浜二丁目110番5地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点9. 山比ガ浜二丁目106番6、7外地点 本報文調査地。
- 地点10. 山比ガ浜二丁目2番6、33地点 2001年調査。未報告。
- 地点A. 確認調査。筆者実見。

若宮大路周辺遺跡群(神奈川県遺跡台帳No.242)

- 地点11. 御成町12番18地点 1984年調査。『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10 千葉地東遺跡 鎌倉県税事務所建設工事にともなう鎌倉市御成町遺跡の調査』1986年2月 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 地点12. 御成町228番2・130番1地点 1985年調査。『御成町228番2他地点遺跡 片岡ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年12月 千葉地東遺跡発掘調査団
- 地点13. 山比ガ浜一丁目128番7地点 1986年調査。『若宮大路周辺遺跡群(山比ガ浜一丁目128番7地点)』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4 昭和62年度発掘調査報告』1988年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点14. 山比ガ浜一丁目118番8地点 1987年調査。『若宮大路周辺遺跡群(山比ガ浜一丁目123番5外地点)』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点15. 山比ガ浜一丁目117番1地点 1988年調査。『山比ガ浜1-117-1地点遺跡 一若宮大路周辺遺跡群・堀口ビル建設に伴う緊急発掘調査報告書一』1991年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点16. 御成町778番1地点 1988年調査。未報告。
- 地点17. 御成町727番地 1990年調査。未報告。
- 地点18. 御成町868番地点 1990年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 鎌倉駅西口自転車駐車場及び(仮称)鎌倉市在宅福祉サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書 一鎌倉市御成町868番地点一』1993年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団／鎌倉市教育委員会
- 地点19. 小町一丁目1028番1地点 1990年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 一小町一丁目1028番1地点一』1997年3月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点20. 御成町872番14地点 1991年調査。『若宮大路周辺遺跡群(No.242)(御成町872番14)』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度緊急調査報告』1992年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点21. 山比ガ浜一丁目120番6地点 1991年調査(未報告)。
- 地点22. 山比ガ浜一丁目129番5地点 1993-94調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(山比ガ浜一丁目129番5地点)』1995年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点23. 山比ガ浜一丁目123番5地点 1994年調査。『若宮大路周辺遺跡群 由比ヶ浜一丁目123番5外地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点24. 山比ガ浜一丁目118番7地点 1995年調査。『若宮大路周辺遺跡群 山比ガ浜一丁目118番7地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』1997年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点25. 御成町884番6地点 1997年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』1999年6月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点26. 御成町788番3地点 1995年調査。『若宮大路周辺遺跡群(No.242)(御成町788番3外地点)』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告』1997年3月 鎌倉市教育委員会

- 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 御成町788番3J地点』 1997年3月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
御成町786番1地点 1999年調査。『若宮大路周辺遺跡群の調査』『第10回・鎌倉市遺跡調査・研究発表会
発表要旨』 2000年8月 鎌倉考古学研究所
- 地点B. 2000年確認調査。筆者実見。
- 地点C. 1996年確認調査。筆者実見。
- 地点D. 1996年確認調査。筆者実見。
- 今小路西遺跡(神奈川県遺跡台帳No.201)**
- 地点28. 御成町15番5地点 1980年調査。『千葉地遺跡 鎌倉市御成町15-5番所在 中世市街地遺跡の発掘調
査』 1983年3月 千葉地遺跡発掘調査団
- 地点29. 御成町625番3地点 1984-85年調査。『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』 1990年1月今
小路西遺跡発掘調査団 / 鎌倉市教育委員会
- 地点30. 扇ガ谷一丁目131番1地点 1987年調査。『今小路西遺跡(扇ガ谷一丁目131番1地点)』『鎌倉市埋蔵文
化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』 1989年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点31. 御成町625番2地点 1988-89年調査。『今小路西遺跡発掘調査報告書・社会福祉センター用地・御成町
625番2地点』 1993年7月 今小路西遺跡発掘調査団 / 鎌倉市教育委員会
- 地点32. 由比ガ浜一丁目213番3地点 1991年調査。『今小路西遺跡・由比ガ浜一丁目213番3地点』 1993年7
月 今小路西遺跡発掘調査団
- 地点33. 御成町625番3地点 1991-92年調査。『今小路西遺跡(御成小学校内) 第5次発掘調査概報』
1993年8月 今小路西遺跡発掘調査団 / 鎌倉市教育委員会
- 地点34. 由比ガ浜一丁目148番1地点 2000年7月調査。本誌第1分冊所収。
- 地点35. 由比ガ浜一丁目183番1地点 2000年8月調査。本誌第2分冊所収。
- 地点36. 由比ガ浜一丁目148番5地点 2001年調査。2002年度報告。

長谷小路周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.236)

- 地点37. 由比ガ浜三丁目223番11地点 1989年調査。未報告。
- 地点38. 由比ガ浜三丁目228-229番地点 1991年調査。『長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目229番外)』『鎌倉市埋
蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第2分冊)』 1993年3月 鎌倉市教育委員会『長
谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目258番1地点(No.236) 一中世都市外縁部市街地における町割りの調査』『
1995年 長谷小路周辺遺跡発掘調査団』
- 地点39. 由比ガ浜三丁目228番2地点 1996年調査。『長谷小路周辺遺跡(No.236) 由比ガ浜三丁目228番2の一部
外地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』 1998年3月 鎌倉
市教育委員会
- 地点40. 由比ガ浜三丁目1262番2外地点 1998年調査。未報告。
- 地点41. 由比ガ浜三丁目1262番6外地点 1999年調査。『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一鎌倉市由比ガ浜
三丁目1262番6外地点(No.236)』 2000年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団

国指定史跡 若宮大路遺跡

- 地点42. 『国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書・V 一主要地方道横浜鎌倉線史跡若宮大路修景計画に伴う遺
跡発掘調査』 1991年3月 史跡 若宮大路遺跡発掘調査団
42-1 第2次調査トレンチA 42-2 第2次調査トレンチB 42-3 第2次調査トレンチD

材木座町屋遺跡(神奈川県遺跡台帳No.261)

- 地点43. 材木座一丁目910番地点 2000年調査。『材木座町屋遺跡発掘調査報告書 鎌倉市材木座1丁目910番地
点』 2001年9月 材木座町屋遺跡発掘調査団
- 地点F. 2000年確認調査。筆者実見。
- 地点G. 2000年確認調査。

- 註**
- ・調査地点及び刊行報告書は2001年9月末日現在。未報告の地点は各調査担当者のご教示による。
 - ・地点No.は下馬周辺遺跡は全調査地点、他の4遺跡と確認調査地点は報告文中で触れたものを各遺跡ごとに
調査年順に付している。何れも渡邊美佐子協力の基筆者調べによる。
 - ・地点No.と報告書名は本報文及び本誌第2分冊所収「今小路西遺跡・由比ガ浜一丁目183番1地点」報文に
共通する。

第2章 調査の概要

1. 調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用住宅建設の事前相談を受け、諸協議と確認調査の結果を経て実施された。調査に伴う残土を敷地内で処理する必要から調査区は南北に二分し、南半をI区、北半をII区とした。又、周囲の隣接する敷地から安全な後退距離を確保した為、調査対象面積はI・II区併せて約48m²である。

確認調査の結果から調査前現況表土から約20~40cmまでの堆積土を重機に依って除去後、海拔7.0m前後から手掘りでの調査開始とした。確認調査の結果から本地点の堆積土は砂質土乃至砂層であり湧水も予想される為、安全を考慮して調査区壁は法面を意識して掘り下げたが、湧水は予想以上に激しく降雨後は何度か調査区全域が水没した。調査区幅の狭いII区の下層はトレーンチ状になり、平面的な精査は途中で断念し土層確認の深堀よりも部分的に留めざるを得なかった。

調査の結果、中世期の遺構は建物址9軒の他、土壙、溝、ピット等、遺物はかわらけ他鎌倉市内遺跡で見られる一通りのものが出土した。中世以前の頗著な遺構は把えられなかつたが、数点の遺物が出土している。記録保存等調査に係わる作業終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と器材等を撤収し調査終了とした。

2. 調査の方法(図4)

調査に際し、地点6のグリッド設定時にも用いた4級基準点064(X:-76572.884 Y:-25321.460)、4級基準点065(X:-76697.768 Y:-25299.068)から調査区を南北に通る基本軸を設定し、敷地を内包して2m方眼を設定した。グリッド杭には北西隅をA-1として東西方向にアルファベットを、南北方向に算用数字を付した。先述した通り敷地境界から安全な後退距離を確保した為、実際に調査した範囲は概ねC~F-3~11の範囲である。グリッド方眼は磁北に対してN-39°40'~Wであり、グリッド杭E-1の国土座標値(X:-76297.8 Y:-25787.7)は机上で求めたものである。

4級基準点064・065は、地点35のグリッド設定の際にも用いており、本調査地点・地点6・35と4級基準点との距離及び位置関係は図4に示した。

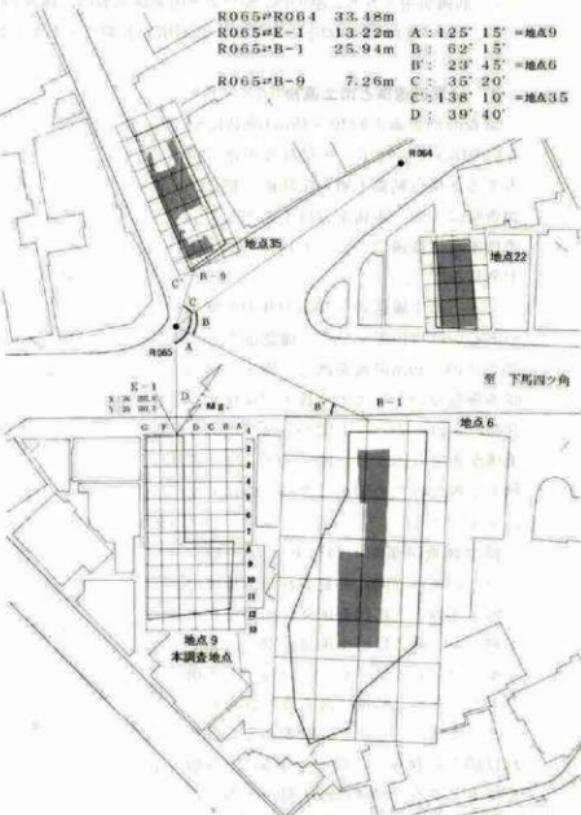


図4 國土座標上の位置とグリッド配置

第3章 遺構と遺物

要 球の指標 第3章

本章では発見された遺構と出土した遺物について述べる。I区の調査時には細かい土層の違いから上層から1面とし順次掘下げ最終面を6面としたが、調査の進行に伴い下層で発見したものが上層で掘り足りなかった遺構の底面であることが少なからず看取された。又、II区の調査に入ると調査区幅が狭いこともあり、全体が遺構覆土の様相を呈していた。整理作業の際に、各遺構内と遺構外として採り上げた遺物を検討した結果、各調査面は大きく4期に纏められると判断し、本報文では、上層から各遺構群をI期～IV期とし、遺構外出土遺物は出土した層位の土層番号で表している。土層番号は、図7にI・II区西壁、II区東壁、I・II区間中央壁の堆積土層を図示し、第2章の3、堆積土層で述べた基本土層I～VIIを対照させた。出土遺物は銅錢の拓影を原寸で掲載した他は、基本的に縮尺1/3(一部1/6)で図示し、前掲引用・参考文献の内、瀬戸窯・山茶窯窓製品は藤沢1994・藤沢1997、常滑窯製品は中野1992・1994、火鉢類は河野1993を参考にし、計測値と各期ごとの出土数は報文末の表2～4に示した。

1. I期の遺構と出土遺物(図5・6)

調査前地表面下約30～45cm(海拔6.55～6.70m)に貝粒子・土丹粒等が密に混入する茶褐色粘質土層を生活面と把え、調査時に1面、本報文ではI期とした。遺構密度は稀薄で、ビット19口・溝1条が発見された。

ビットは上場径30～80cm内外の不整形あるいは楕円形を呈し、確認面からの深さは10～40cm前後を測る。覆土は概ね暗茶褐色ないし茶褐色粘質土で炭化物を含む。これらのビット間からは規則的な遺構配置を見出すことはできず、出土遺物も小破片のため図示できるものは非常に少なかった。

溝は調査区南端のD～F-10～11グリッドの東西方に発見された。規模は上幅・下幅ともに調査区外に拡がるため不明だが、深さは55cm前後を測り、西から東へならかに下がっている。この溝は少なくとも2時期に渡り作り直されている。まず、ビットと同時期あるいはそれ以前から存在し、溝の土層No.2・5層を覆土とする。5層の暗灰褐色土内では確認面からの深さ40cm下(海拔6.35m)で合わせ口のかわらけが出土している。こ

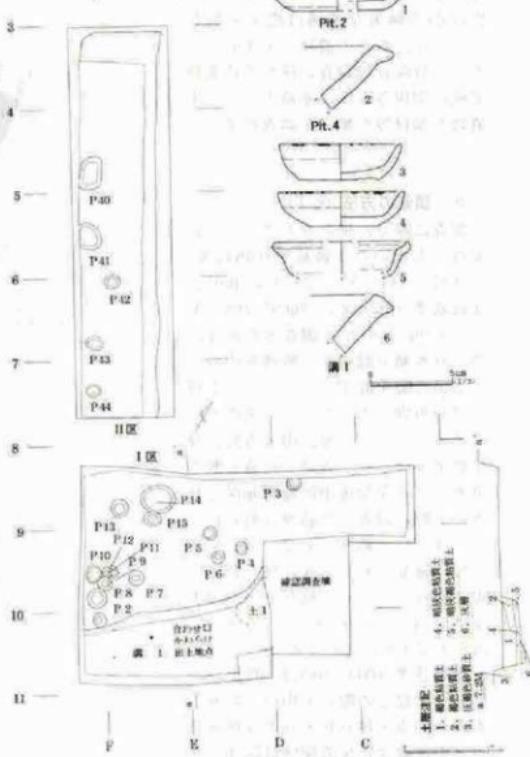


図5 I期全測図・出土遺物

のかわらけは下層に帰属する可能性も考えられたが、周辺に遺構は発見できなかったため溝内に廃棄されたものと思われる。もう1時期は溝土層No.1・3・4・6層を覆土とし、溝底となる6層では灰層が10cm程堆積している。これは周辺の調査地点(図2-1地点6・22)でも確認されている宝永4年(1707)富士山大噴火時の降灰層(黒色スコリア)と考えられ、調査区南壁の土層断面に確認した。また1層内からは小破片ではあったが近世遺物の若干の混入がみられることから、宝永の火山灰堆積以降まで踏襲されていたと考えられる。

出土遺物(図5)

図5の1~6は1期遺構内出土遺物。1はピット2出土の小型糸切り底のかわらけ。器壁が薄く、開きながら立ち上がる。胎土は淡茶色を呈し、焼成は良好。2はピット4出土の常滑窯片口鉢II類の口縁部片。胎土は乳白色粒が多く含む黄土色、器表は淡茶褐色を呈する。

3~6は溝出土遺物。3・4は小型糸切り底のかわらけ。両方とも器高が高く、3は薄手で側面觀碗型、4は体部外面中位に稜を持ち内湾気味に立ち上がる。両方とも口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用。胎土は3が橙色、4が肌色を呈し、焼成は共に良好。この2つは溝内で合わせ口(3が上、4が下)の状態で発見された。5は瀬戸窯折縁小皿。胎土は黄色味がかった灰白色、釉調は灰緑色を呈し、内面口縁部と底部に降灰がかかる。中Ⅲ期の製品。6は常滑窯片口鉢II類の口縁部片。胎土は火雜物を多く含む黒灰色土、器表は赤褐色を呈する。体部外面に工具による縱方向の調整が施されている。

図6は1期遺構外出土遺物。概ね図7の1・2層からの出土遺物をここに含めた。

7~10は小型、11は大型の糸切り底のかわらけ。器高が高く器壁の薄い、側面觀碗型ないし薄手丸深の形成をし始めた傾向のものが多い。7は二次焼成のため全体的に火をうけ、黒く変色している。その他の胎土は4・10が淡橙色を呈する以外は、概ね肌色の粉質土。

12~19は瀬戸窯諸製品。いずれも胎土はやや粘性の欠ける淡黄味灰白色ないし淡黄味白色を呈する。12~16は灰釉折縁深皿。12は淡灰緑色の釉が口縁から内面にかけて薄く刷毛塗りされる。全体に二次焼成をうけ、口縁部の釉は剥落する。中Ⅱ期の製品。13は透明な暗灰緑色の釉が体部外面中位から内面にかけて漬け掛けされる。中期後半の製品。14~15は淡灰緑色の釉を施し、二次焼成を受けている。内外面とも部分的に剥落する。両方とも中期後半の製品。16は折縁深皿の折り返し部分に指頭でひだをつけ、稜花風に形づくる。淡灰緑色の釉が、体部外面中位から内面にかけて刷毛塗りされ、二次焼成を受ける。中期後半~後期にかけての製品で、大窯期にはみられるがこの時期では珍しい。17は灰釉鉢皿。淡灰緑色の釉を薄く刷毛塗りする。二次焼成を受けて外面にかかる釉が部分的に剥落する。中期前半の製品。18は灰釉筒型香炉。灰釉が二次焼成により鉄釉に近い鉛色の釉に変色する。釉は内面の折縁部分下から外面にかけて漬け掛けで、外面体部には文様を施す。中期前半の製品。19は灰釉脚付き洗。淡灰緑色の釉を薄く刷毛塗りし、二次焼成を受けて内外面とも部分的に剥落している。前期の製品。

20は涅美窯底部片。混じりのないきめ細かい胎土で、暗灰色を呈する。外部表面は剥離する。21~27は常滑窯諸製品。21~23は甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態。21は火雜物を多く含む茶褐色土の胎土、暗赤褐色の器表を呈する。外部肩部辺に降灰による自然釉がかかる。22は火雜物を多く含む茶褐色の胎土、暗赤褐色の器表を呈する。格子文と斜格子文の組み合せた押印が外面肩部に捺される。23は火雜物を多く含む黒灰色土の胎土、暗赤褐色の器表を呈する。口縁部・肩部周辺に降灰による自然釉がかかる。24は片口鉢I類。胎土は白色粒子を多く含み、器表共に灰白色を呈する。口縁部は丸く收まる。25~27は片口鉢II類口縁部片。25は火雜物を多く含み、胎土・器表共に茶褐色を呈する。内外面ど

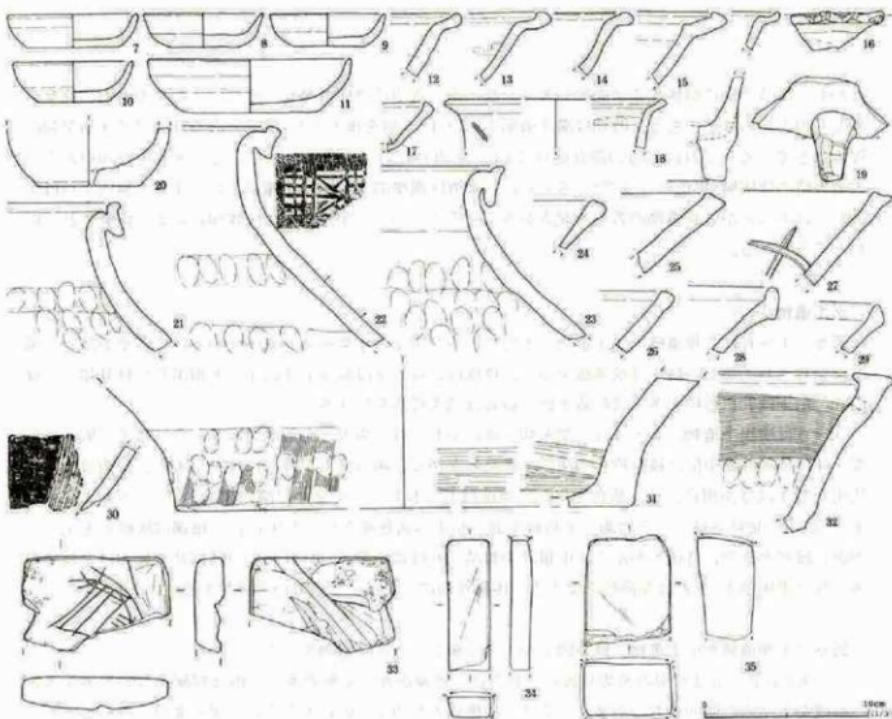


図6 I期造構外出土遺物

も口縁部下は強い横ナデ。26の胎土は夾雜物を含み黒灰色、器表は赤褐色を呈する。27は夾雜物を多く含み、胎土・器表共に赤褐色を呈する。内面上位に窯印を施す。28~29は魚住窯捏鉢の口縁部片。夾雜物を含む粘性に欠ける胎土で、器表は28は黒灰色、29は淡灰色を呈する。両方とも口縁部内面直下は強い横ナデのためにくぼむ。

30は瓦器質摺鉢。胎土は灰白色、器表は内外面黒色処理され、内面は摩滅し条線は5本、産地不明。31・32は土器質浅鉢型。31の体部外面は指頭の後に縦位のナデ、体部内面は横ナデ調整され、外底面は砂底。1C類か。32は口縁部が外面に張り出し、断面形は釘頭状で外面口縁下は横ナデ、体部縦位のナデ。体部内面は横ナデ、胴下部辺りは指頭痕。1C類の製品。33~35は石製品。33は滑石錠をスタンプに転用する加工途中の製品か。34は鳴滝産の仕上砥。砥面は表1面、小口と図上右側面は生産地加工痕が残る。右側面加工痕は鉛筆で引いた後に折り採る。図上左側面は節理面(カワ)からの破損剥離。35は天草産の中砥。小口は生産地平盤状工具痕が残り、小口以外の4面総使用。

I期とした造構群は、出土遺物や堆積土層の観察から南端の構が近世まで下るが、他の造構は中世期である。図化した以外の出土遺物は、かわらけは粉質胎土で器形が厚手、体部が外反傾向ものは含まれない。瀬戸窯に後期以降の製品、常滑窯窯は口縁部で判断する限り8型式のものは出土していない。30の瓦器質摺鉢が気になるが、I期中世期の年代は概ね14世紀前半と考えられる。

(田畑)

2. II期の遺構と出土遺物(図7~17)

調査前地表面下約50~80cm位の海拔6.9m以下で発見された遺構群をここに含めた。調査時に1面とした前項I期遺構群以下は、整地層の微妙な違いから2面・3面として平面的に掘り下げ調査を進めたが、堆積土層と出土遺物の様相から及び4面で確認した遺構も一部II期遺構群として纏めた。発見された遺構は建物址、土壤、ピットである。

II期とした遺構群は図3の層位では概ねIII・IV層レベルである。調査区北側では、地点9・35と同様の砂層が観察され、本調査地点北側に横たわる砂丘の南側裾野とも考えられる。発見された建物は平面形や検出状況から判断すると方形竪穴の可能性が高い。遺構の興廃や出土遺物の様相は本調査地点北側一帯の調査成果とよく似ており、前章で触れた佐助川以南の状況が現車道を越えてさらに南へと拡がると言えられよう。以下、重複関係の新しい順に調査区北側から各遺構について述べていく。

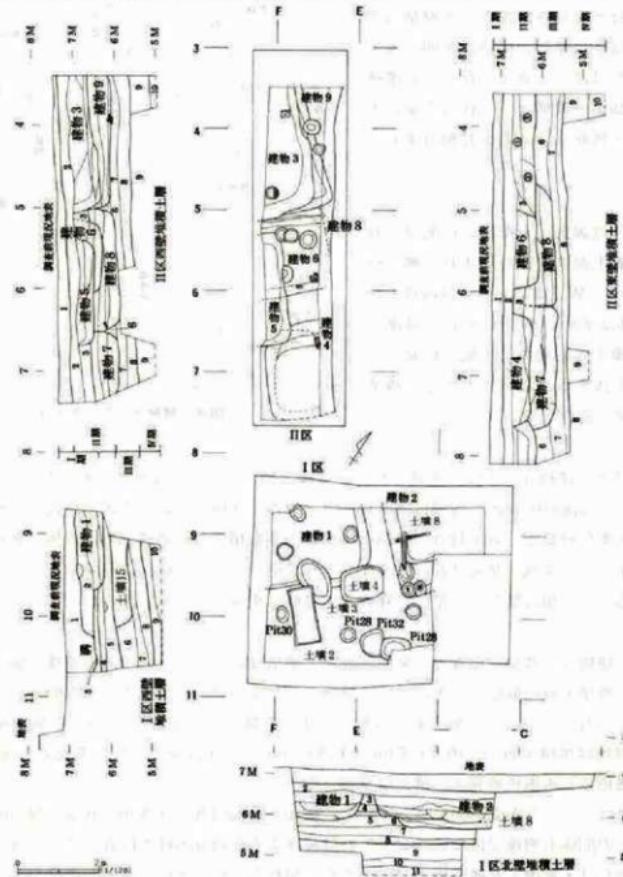


図7 II期全測図・調査区堆積土層

建物3(図8)

II区の北端調査区東壁沿いに発見された。図7の①層上面より掘り込まれ、軸方位はN—39°20'—W。確認レベルは海拔6.45m、規模は南北3.25m×東西1.25m、底面は海拔6.15m前後。覆土は茶褐色乃至暗褐色砂質土で、底面付近には褐色の粘質土が微かな傾斜を修復する様に上面がほぼ水平に堆積する。調査区壁の土層からは裏込めと床下らしき堆積土が覗え、底面には据えられた礎板と礎板を伴うピット51が発見されたが、木材構造であろうという以外は建物の構造は不明。後に述べる建物9がほぼこの真下に在り、同遺構の覆土上層を個別の遺構として扱った疑いもあるが建替えと判断している。長軸は南北方向になろうか。

建物5(図8)

II区の中央付近調査区東壁沿いに発見された。図7の3層上面より掘り込まれ、軸方位はN—38°40'—W。確認レベルは海拔6.45m、規模は南北2.80m×東西0.85m、底面は海拔6.35m。覆土は茶褐色乃至褐色砂質土。廃棄時に部材を抜き取り去ったものか、構造を示すものは何ら遺存していない。

建物6(図8)

II区の中央付近、建物5の下位に発見された。3層上面より掘り込まれ、軸方位はN—37°20'—W。確認レベルは海拔6.45m、規模は南北1.85m×東西1.60m、底面は平坦で海拔5.95m前後。覆土は暗褐色乃至灰黒色砂質土。底面付近には締った粘質土が堆積する。遺構北壁に内側に倒れ込んだ状態で横板が、南壁下には礎板が発見され、杭や簡易な柱で壁板を支える構造の建物であろう。鎌倉市内の発見例から観るとこの類は概して小型で、建物6の長軸は東西方向と思われる。

建物4(図8)

II区の南端、建物5と微かに重複して発見された。遺構確認の甘さから下位の遺構上層と一緒に掘り上げてしまい、堆積土層の観察から後に述べる建物7とは別の建物であることが判断された。為に平面的には殆ど見えられていない。3層上面より掘り込まれ、軸方位はN—38°20'—W。確認レベルは海拔6.45m、規模は堆積土層から南北1.70m×東西1.60m、底面は発見された礎板から海拔6.2m前後か。覆土は暗褐色乃至灰黒色砂質土。構造は不明。

建物の周囲には、ピットが5口発見されている。径30~40cm内外、深さ20~40cmで規則的な配置は観られず、建物との関係も明確ではない。ピット45は後述する建物9の柱の位置とほぼ一致する。各ピットからは、かわらけ・常滑・瓦他が出土しているが、何れも小片で固化できるものはなかった。



図8 建物3・5・6・4

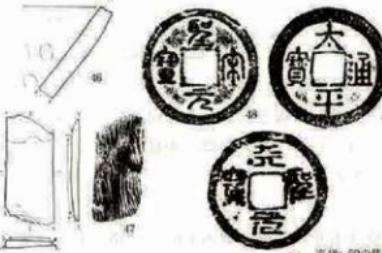
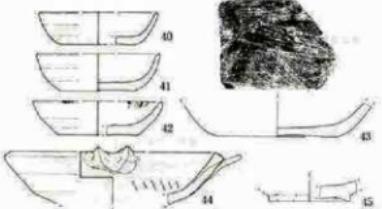
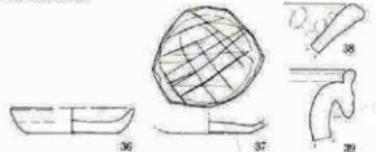


図9 II期遺構内出土遺物(1)

出土遺物(図9)

図9の36~39は建物3出土遺物。

36は糸切り底のかわらけ。全体に再火を受け器表が荒れる。37は瀬戸窯灰釉平底未広碗。暗灰緑色の釉は、外底面近くまで漬け掛けされる。内底面には施釉前の線刻、外底面は糸切り後ヘラ削りされる。中Ⅰ期か。38は常滑窯片口鉢Ⅱ類。39は常滑窯の壺。6B型式か。建物3からは他に、龍泉窯系青磁碗、火鉢Ⅲ類、瓦他が出土している。

図9の40~50は建物6出土遺物。

40~43は糸切り底のかわらけ。何れも器表は肌色系で、胎土は概ね精良、焼成は良好。43は焼成後の内外面に引掛けキズがある。44は瀬戸窯灰釉卸皿。灰黄色の釉は刷毛塗り、内面の卸目に使用痕は観られず、片口は貼付け。中ⅡかⅢ期。45は瀬戸窯灰釉碗。胎土は暗灰白色で、漬け掛けされた濃緑色味の釉は、内底面に厚く溜り高台付近まで垂れている。46は常滑窯片口鉢Ⅱ類。夾雜物の多い胎土で、口唇部は沈線状に窪む。

47は鳴滝産仕上砥。両側面に生産地鋸痕が遺り、幅1寸。裏面は櫛齒整状の工具で消費地の再加工痕が観られる。底面方向で厚みを2分割した割り採り痕、或は底面の再成形であろうか。48~50は北宋の銅錢。拓影を原寸で示した。48は聖宋元寶で、初鑄年1101年、篆書。49は太平通寶で、初鑄年976年、楷書。50は天聖元寶で、初鑄年1023年、篆書。

建物6からは多量の遺物が出土しており、図化した以外に龍泉窯系青磁、褐釉、瓦、鉄釘等があるが、建物の用途や機能を類推し得るものはない。遺物の年代は、瀬戸窯製品は中期、常滑窯の口縁部で観ると6~7型式で8型式のものは含まれず。かわらけは精良胎土で法量中型も出土しているが、体部から外反傾向の器形は含まれない。

図9の51~53は建物4出土遺物。調査時に建物7と確実に分類し得たもののみを図示し、他はII期遺構外出土遺物に含めた。51・52は糸切り底のかわらけ。51は器表肌色。52は淡橙色、何れも胎土精良で焼成は良好。53は常滑窯片口鉢Ⅱ類。

建物1(図10)

I区の北東端に発見された。図7の3層上面より掘り込まれ、軸方位はN—41°20'—W。確認レベルは海拔6.30m、規模は南北1.98m×東西2.58m、底面は海拔6.05m。覆土は上層が灰黒色砂質土、中層が暗黄灰色砂質土。海拔6.20m以下には暗褐色砂質粘土が堆積し、その上面に部分的に床板と思われる木材が遺存していた。底面からはピット3口が発見され、深さはピット37が35cm、ピット38Aが15cm、ピット38Bが20cmを測る。発見位置や深さからピット38A・Bは床東と考えられ、ピット37からは柱が建つかもしれない。II区東壁の堆積土層に建物1と考えられる遺構断面があり、想定される規模は

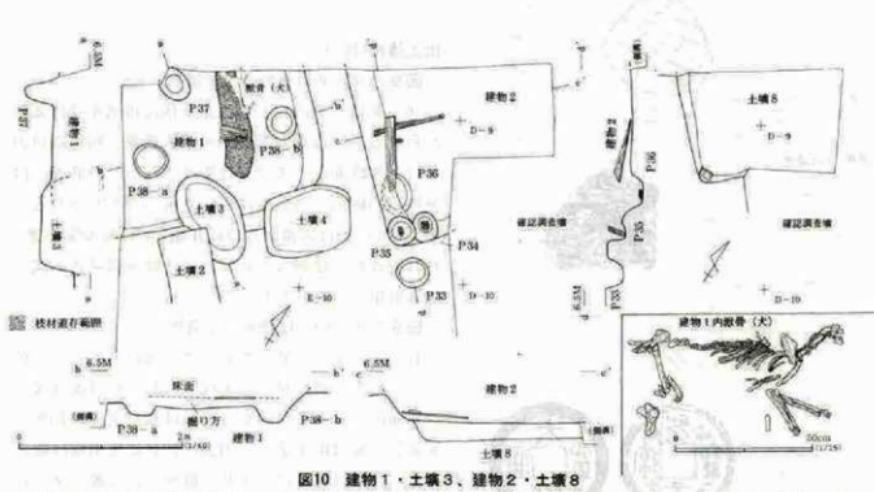


図10 建物1・土壤3・建物2・土壤8

正方形か長軸が南北方向で4m程、木材構造と考えられよう。又、床板と思われる板材上にはイスの骨が発見された。頭骨は失われ四肢骨も描わない。本遺構の上層から、イスの頭骨が単独で出土しているが同一個体かは不明。建物廃棄時に遺骸が投げ込まれたのであろう。

土壤3(図10)

建物1の南壁に重複する。確認レベルは海拔6.30m、規模は南北1.15m×東西0.65mの楕円形、底面の海拔5.95m。覆土は暗褐色砂質土。調査時に建物1底面に伴うピットかと思い掘り進めたが、途中で単独の別遺構と分った為、土壤2よりは古いが建物1との新旧は不明。東側の土壤4は後述する土壤9の覆土最上層であり、建物1より新しい。

建物2(図10)

1区の北東端に発見された。図7の3層上面より掘り込まれ、軸方位はN-42°40'W。確認レベルは海拔6.22m、規模は南北2.30m×東西2.80m、底面は海拔5.85m。覆土は暗茶褐色砂質土。構造に係わる遺構を伴っており、南東隅に柱が遺存するピット34・35、東壁下南側に礎板の置かれたピット36が。東壁際に壁を支える横板とそれを留める杭状の板材が内側に倒れ込んで発見された。ピット34は径30cm内外で柱は3寸弱を測り、ピット35は径35cm内外で柱は1.5~2寸を測る。共に柱の下位に礎板はない。ピット36は底面からの深さ15cm程で、礎板は厚さ約1寸。このピット35・36と建物との同軸方向南延長線上には、径35cm内外、深さ20cmのピット33があり、建物構造に係わるものかもしれない。横板は折られているが幅は5寸程、杭状の板材は根元が壁下に刺さったまま倒れた様に発見され長さは約3尺がそれぞれ遺存する。堆積土層から床板が敷かれていたであろうことは看取できるが、板材は発見されなかつた。建物2は規模は不明ながら、杭と要所に建てた柱で壁板と上屋の支えとする木材構造の建物であろう。機能や用途については、遺構の検出状況と出土遺物からは推定し難い。

土壤8(図10)

建物2の下位に発見され、建物2の建替前かも知れない。堆積土層の違いを壁と見誤った結果別遺構となりⅢ期の遺構含めてしまった土壤5は、本遺構南半の可能性がある。軸方位はN-42°40'W。確認レベルは海拔5.90m、規模は南北1.35m×東西1.88m、底面は海拔5.65m。南東壁下にピットを伴わずに礎板が発見されたのみで、全体規模や構造については不明。

出土遺物(図11)

図11の54~70は建物1出土遺物。

54~65は糸切り底のかわらけ。器表は56・59・62が淡橙色、他は肌色系。60~63のタイプが数量的に多いのは図示したもので反映されるが、法量中型も一定量占め、大型品は器壁が薄く体部から開き気味の器形まで含まれる。遺構覆土が上下層で大きく異なることと関係しているのであろうか。66は瀬戸窯灰釉折縁深皿。くすんだ灰緑色の釉は刷毛塗り。67~69は常滑窯の製品。67は片口鉢I類、胎土・器表は茶褐色。夾雜物の多い粗い胎土で口唇は肥厚。68は片口鉢II類。69は甕、6型式か。70は瓦器質火鉢皿類。器表黒色処理され、外外面は口唇頂部を除き縱方向の磨き、外表面部上位には磨かれた後に菊花が陰刻される。建物1からは他に、龍泉窯系青磁、白磁口元皿、土鍋等が数点出土している。

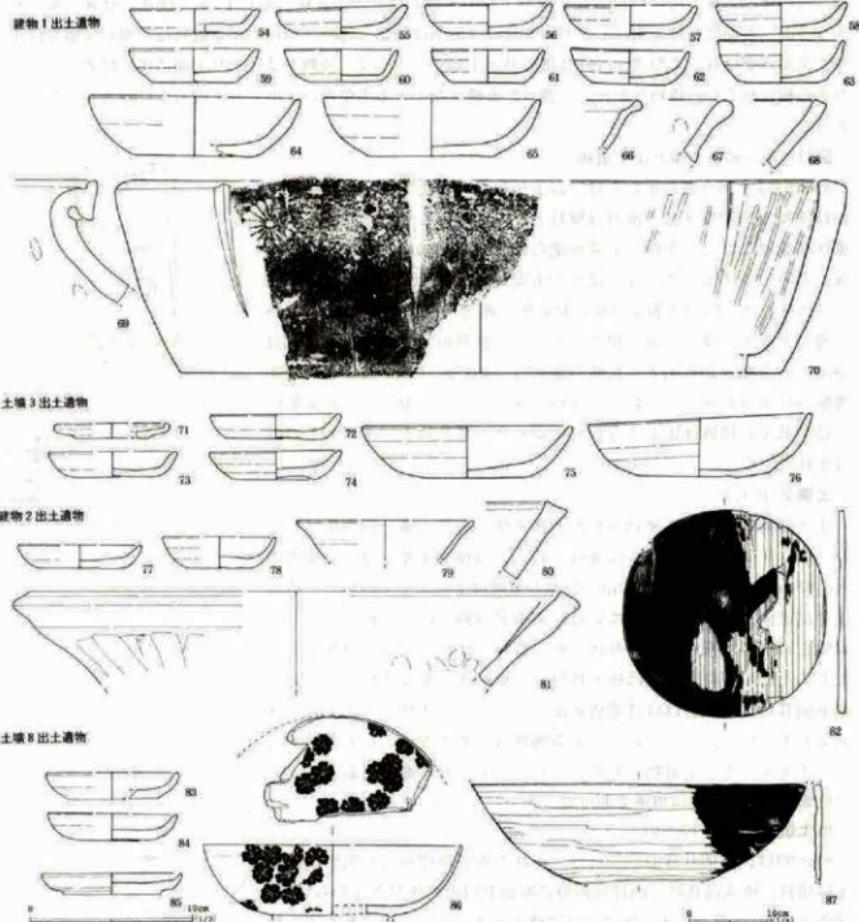


図11 II期遺構内出土遺物(2)

図11の71～76は土壙3出土遺物で、糸切り底のかわらけ。建物1と混在無く採り上げられたものを図示し、他の出土遺物はII期遺構外出土遺物に含めた。71は内折れ型。胎土・器表は暗灰色で焼成は良好。72～76は器表淡橙色乃至肌色で、焼成は良好。建物1と混在したものには常滑窯胴部片と鉄釘が出土しているに過ぎない。

図11の77～82は建物2出土遺物。

77・78は糸切り底のかわらけ。何れも器表は灰黒色に焼けている。図化していないものは、概ね器表淡橙色で、焼成は良好。法量中型で精良胎土のものや、大型品は体部が開き気味になりかけているものが含まれる。79は東濃系山茶碗。胎土は灰白色、体部外面には煤が付着する。80・81は常滑窯口鉢II類。81の体部内面上位には縱方向の線刻。82の木製品は曲物の底板、縮尺1/6で図示。径8寸強、厚さ5分弱。表面は被熱で焦げている。穿孔は2箇所は確認。建物2の他の出土遺物は、瀬戸窯製品は中期、常滑窯甕は6～7型式、火鉢はIII類が出土している。又、被熱を受けたり表面に煤が付着したものが多く見られるが、建物2が火災に遭った痕跡はなく火事場整理の土砂と共に埋め土に混入したものであろう。

図11の83～87は土壙8出土遺物。

83・84は糸切り底のかわらけ。器表灰褐色で、胎土・焼成は良好。85は漆器平高台無文皿。高台は摩耗したのか遺存していない。本地の遺存状態は良好で、全体に黒漆が塗られている。86は漆器輪高台施文椀。歪みの為図示した口徑にはやや不安がある。黒漆地に赤漆で桜花文のスタンプ。87の木製品は曲げ物底板、縮尺1/6で図示。残存径から復元すると、径1尺5寸程になろうか。被熱のため焦げている部分がある。土壙8から出土した他の遺物は、かわらけ片が数点と常滑窯窯胴部片1点のみで、かわらけは84のタイプと、大型品は器表灰褐色で器高低く口徑底径比が小さいものがあり、精良胎土で薄手のものは含まれない。

土壙2(図12)

I区建物1の南側に発見された木組を作り方形土壙。軸方位はN-43° 00' -W。確認レベルは海拔6.15m、規模は南北1.42m×東西最大0.65m、底面は海拔約6.0m。長軸の東壁は土圧でやや内傾し、遺構北半は底面をやや掘り過ぎている。東西北端隅に杭がそれぞれ1本、東壁と西壁には横板材が掘り込み壁に張付く様に辛うじて遺存していたが、北壁の板材、南壁は杭・板材共に痕跡すら発見されていない。断面図B付近の板材はほぼ遺構底面上だが、他の木材は炭化したり底面よりも浮いて出土しており、本遺構埋没の際に混入したものである。平面図内の出土遺物は93のかわらけとアリビが遺構底面より浮いた状態だが、他はほぼ遺構底面付近で出土している。

出土遺物(図12-88～94)

88～93は、糸切り底のかわらけ。何れも器表淡橙色乃至肌色で、胎土は精良、焼成は良好。88は完掘時に断面B付近の板材下位から(写真図版2)、91は覆土上層、他はほぼ遺構底面上の出土。94は瀬戸窯灰釉折縁深皿。覆土中の出土。胎土は淡灰白色で微かに黒色砂粒を含む。

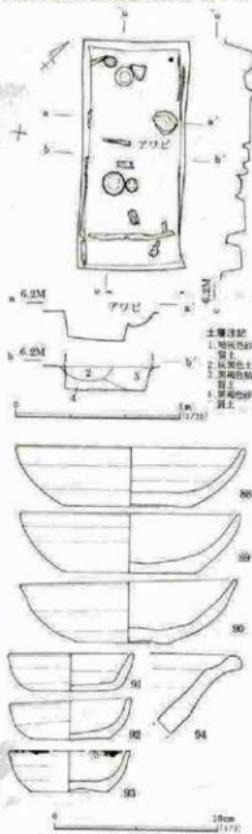


図12 土壙2・出土遺物

淡灰緑色の軸は極薄く潰け掛けされ、内面体部には部分的に煤が付着し、外面は二次焼成を受け器表が荒れる。中II期。図化していないが平面図内の火鉢は、瓦質輪花型火鉢III類の胴部片。器表黒色処理され、内面下位は横ナデ、中位から上位は縦方向の磨き、外面は縦方向の磨き後に菊花を陰刻。他に常滑窯胴部片が出土している。本遺構は規模や形状、遺存状態の良い出土遺物の位置からある特定の機能を有した土壤とも考えられたが、検出状況や出土遺物からは言及できる要素は看取できなかつた。

建物9(図13)

II区の北西端、建物3のほぼ真下に発見された。軸方位はN—43° 40' —W。確認レベルは海拔6.3m前後、規模は南北3.3m×東西1.45m、底面は海拔5.8m。覆土は暗茶褐色乃至褐色砂層。遺構底面は概ね図7—7層上面まで掘られ、7層の傾斜を直す様に上面ほぼ水平に粘質土が堆積し、断面dの基礎は4~5枚を2段に重ねてこの粘質土上にピットを伴わずに置かれていた。上面は海拔約5.9mで、遺存してはいないが本来基礎上面には床板が敷かれていたものであろう。遺構東壁際掘り方内には3寸角の柱が3本発見された。遺存する長さは50cm弱、柱間は芯々で北から4.5尺・4.8尺、遺構東南壁際の柱下位には基礎2枚があるが他の2本ではない。さらに底面には、床東であろうかピット56・58が発見されている。建物9は床板を敷き柱で上屋と壁板を組上げる木材構造の建物と思われ、想定される全体規模は南北5m弱×東西2m強程度で、長軸が南北方向の長方形となろうか。建物8より新しく、柱の頂部が建物3底面とほぼ同レベルで折られている事等から、建物3とは別の遺構と判断している。

建物8(図13)

II区の中央付近、建物5・6の真下に発見された。遺構の東限界は、堆積土層の観察から法面をつけた調査区東壁際と判断した。軸方位はN—42° 20' —W。確認レベルは海拔6.3m前後、規模は南北3.1m×東西1.45m、底面は海拔5.85m前後。覆土は暗茶褐色砂層。遺構底面は南に傾斜する図7—7層上面まで掘られ、建物9と同様に傾斜を直す様に大小土丹を盛り、上面海拔6.0mに土丹の凸凹を整地して粘土層が堆積する。この粘土層上面には基礎状の木材が散見され、床板が敷かれていたものと思われる。断面eの東側の基礎は本遺構東壁下にならう。壁や上屋の構造は北側が建物9に、東側は調査に伴う側溝に因り壊され、南側は建物7と重複し不明であるが、長軸が南北方向の長方形と想われる。

建物7(図13)

II区の南端に発見された。建物4の底面を観察し、後に堆積土層の観察から掘り分けた遺構である。軸方位はN—40° 40' —W。確認レベルは海拔6.0m前後、規模は南北1.6m×東西1.4m、底面は海拔5.7m。覆土は概ね上層が暗茶褐色砂質土で、下層が暗黃褐色砂層。建物8と同様に図7—7層上面まで傾斜のままに掘り下げ、海拔6.0mまでを大小土丹で一気に埋め戻して床下を造

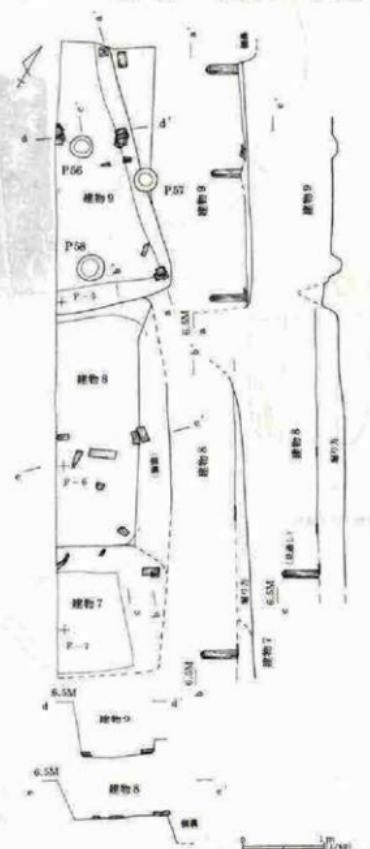


図13 建物9・8・7

作し、その上面から構造材を組み始めている。北東壁下に中る位置には土丹上面に礎板を据え遺存長45cmで3寸角の柱が建てられていた。調査区東壁の土層断面には土丹層直上に木材圧痕が微妙に観られ、本来は床板が敷かれていたのであろう。建物1よりは古く、建物8よりも恐らくは新しい。

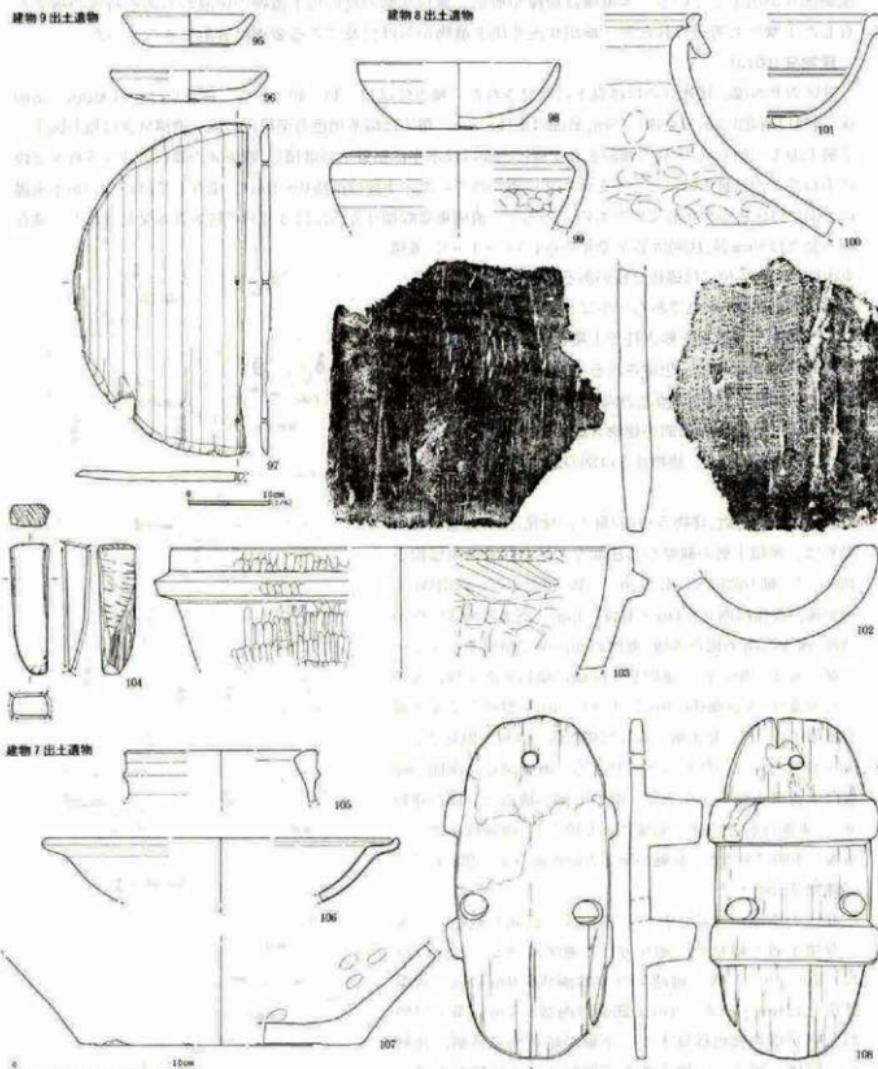


図14 II期遺構内出土遺物(3)

出土遺物(図14)中古の遺物として、建物9出土の器表灰褐色で、手捏ね成形のかわらけ。器表灰褐色で焼成はあまり良くない。建物9出土のかわらけは、糸切り：手捏ねがほぼ2:1の割合で出土しているが、糸切り底の大型品に厚手だが体部外面に丸味があり内湾するタイプも混じる。精良胎土薄手のものは含まれない。手捏ねは厚手で口唇が丸く外面の稜が曖昧なものが主体である。97の木製品は鍋の蓋か。縮尺1/6で図示。穿孔の位置から抓みの取付けるのである。復元径約13寸。建物9の出土遺物は他に褐釉片が2片と常滑窯胴部片が30余片あるのみで遺物の種類・量共に少なかった。

図14の98~104は建物8出土遺物。

98は糸切り底のかわらけ。器表橙色で、胎土やや粗く、焼成はあまり良くない。掘り方と判断した土丹層中から出土したかわらけは、小破片ばかりだが精良胎土で薄手のものは含まれない。99は常滑窯の鉢。胎土は灰赤橙色で粗く、外面肩部下まで降灰。100は常滑窯の壺。5型式か。101は舶載品、泉州窯系陶器で二彩の盤。胎土は黒色砂粒を含みやや粗い。釉は二箇所の沈線間に暗黄褐色、体部上位と内底面、外面は体部下半まで施釉され、濃緑色でやや銀化する。102は男瓦。凸面の叩き目はナデ消し、凹面には布目痕。103は西彼杵産の滑石鉢。内外面生地工具痕が遺り、全体に煤け、再成形痕は観られない。104は鳴滝産の仕上砥。底面は表裏2面。側面は平盤状工具に施る消費地での再成形、小口は生地鋸截断痕と観られるが、鋸目が粗く雑で消費地の仕業かもしれない。図化していない他の出土遺物には、101と同一個体と思われる破片、常滑窯胴部片が約50片、男瓦片数点がある。

図14の105~108は建物7出土遺物。

105・106は舶載品で、105は褐釉の壺。胎土灰褐色で、黒色・白色の砂粒を含むが緻密、器表外面は濃褐色。106は龍泉窯系青磁折筋鉢。胎土灰色でやや気泡があり、釉はくすんだ灰緑色。107は常滑窯壺。108は木製品で連鎖下駄。他の出土遺物は、建物4と混在したもの除外した為少ない中での観察では、かわらけは厚手だが体部外面が丸味があるタイプが含まれ、手捏ねは出土していない。

土壤9・10・11(図15・16)

土壤9・10・11は9~11-Eグリッドを南北方向に重複して位置する。遺構確認の際に南壁側溝から多量の箸状木製品他の遺物が出土した。腐食した木器層を覆土とし、建築部材が残る建物かと思われたが、掘り進める内に確認面から10cm下位(海拔5.8m)には鎌倉石切石が据えられ、木鍬・漆器・かわらけ・常滑等の遺物の出土状況等から、帰属する時期の異なる土壤3基が重複していると判断した。土壤9は上層で完掘されなかった土壤4と同一遺構であり、おそらく鎌倉石切石を据えたレベルが遺構底面と思われる。その下位に確認面からの深さ25cm前後の浅い土

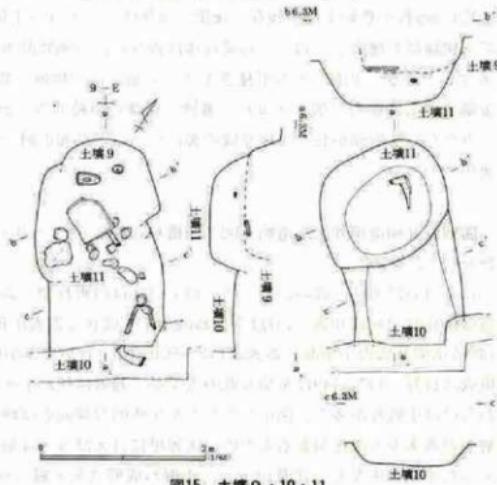


図15 土壌9・10・11

壙10を切って深さ40cm以上の土壙11が重複し、土壙10・11は確認面であるⅢ期の遺構と考えられる。鎌倉石切石他が出土した海拔5.8m前後にこれら3つの土壙の出土遺物が集中していた。木鉤の下には裏を上にした「皇宋通寶」の銭(写真図版2参照)、土壙10内では鯨の骨、また海拔5.6m前後の土壙11内からは牛の頸骨が、他にもⅢ期遺構外からはU字形骨材が数点出土している。南に130m程の長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜3丁目228・229番外地点)や由比ヶ浜中世集団墓地遺跡(由比ヶ浜4-6-9地点)では解体および骨材処理にかかる工房が想定されている。本調査地点で発見された建物址にも同様の性格が考えられるかもしれない。尚、本来土壙9がⅠ期、土壙10・11はⅢ期の遺構であるが検出の際に一緒に掘り上げ出土遺物も混在してしまったため、本稿で遺構と出土遺物を共に図示している。

出土遺物(図16)

112~114はかわらけ。112は小型糸切り底かわらけ。器高が低く、体部外面に棱をもたずゆっくりと開く。胎土は肌色を呈する弱粉質土。口縁部の煤痕から灯明皿として使用。113は大型手捏ねかわらけ。平底気味で体部外面中位に強い稜をもち、器壁は外反している。胎土は暗肌色を呈する粉質土で焼成はやや不良。114は大型糸切り底かわらけ。内底面が広く体部外面に棱をもたず、器壁は内湾する。胎土は淡茶色を呈する粉質土で焼成良好。

115は銅銭。北宋時代の皇宋通寶で初鋤年1038年の楷書。116~117は鉄製品。116は鉄釘。117は掛金具で取り付け金具が鋒で彫りし共に遺存している。118は常滑窯變の口縁部片。胎土は灰雜物を多く含むがしまりのよい灰褐色土、器表は暗赤褐色を呈する。内面口縁部と外面肩部に降灰がかかる。

119~134は木製品。119は漆器の皿。内底面中央に手書きで酢漬草が描かれる。120は曲物の底板。無孔であることから、側板を締めつけることによって結合していたと思われる。上面全体に漆喰が付着。柾目材使用。121は木鉤。先端に鋸先をもつて使用したと思われるが、痕跡は明瞭ではない。板目材使用。122は手押木(テシロ)。曲面の削りは丁寧である。板目材使用。123~131は箸状木製品。箸状木製品は特に土壙10内の南壁側溝周辺より多量に出土し、遺存状態のよかつた一部を図示している。132は連歛下駄。齒部は痕跡のみで残存していない。補修のための釘穴が前面に3箇所、そのうち2箇所に約1.3cm程の鉄釘上端が残存、後歛も4箇所、そのうち1箇所に約1.5cm程の鉄釘上端が残存する。台部左側縁部も補修しており、台部自体は板目材だが補修箇所は柾目材を使用し、側面から4箇所鉄釘で接合している。上面に×の引掛けキズ、下面には刃物痕が数ヶ所ある。133~134は草履芯。133は前・後端部ともに山形に削り込まれ、鼻緒と織維の痕跡もみられる。板目材使用。134は草履芯の右側部分のみだが、切取部が長く、板草履の裏につける下草履を縫い付けたときの織維圧痕がみられる。板目材使用。

(田畠)

図17はⅡ期遺構外出土遺物。図7の概ね3~5(図2-IV層)、①~③(図2-III層)層中から出土した遺物をここに含めた。

135~149は糸切り底のかわらけ。135・136は内折れ型。器表135は橙色、136は灰褐色で、共に胎土・焼成は良好で糸切り底。137は手捏ね成形。丸底状で器表灰褐色。胎土はやや粗いが焼成は良好。138~146は糸切り底の小型品。器表は143が灰褐色、141が全体が煤けている他は橙色乃至灰褐色で、何れも焼成は良好。147~149は糸切り底の大型品。器表は何れも灰褐色で焼成は良好。本層位から出土したかわらけは小破片が多く、図示したものが全体的な傾向を反映しているとは言えない。整地に伴う堆積土層中の為多少の混在があるものの、大雑把に言えば3・4層では142~146のタイプが多く、図化し得なかつたが法量中型も一定量出土し、手捏ね成形は殆ど観られない。5層になると大型品で149の様な胎土・器形が多く、小型品で底径口径比の小さいものが出土し手捏ねの割合が増える。

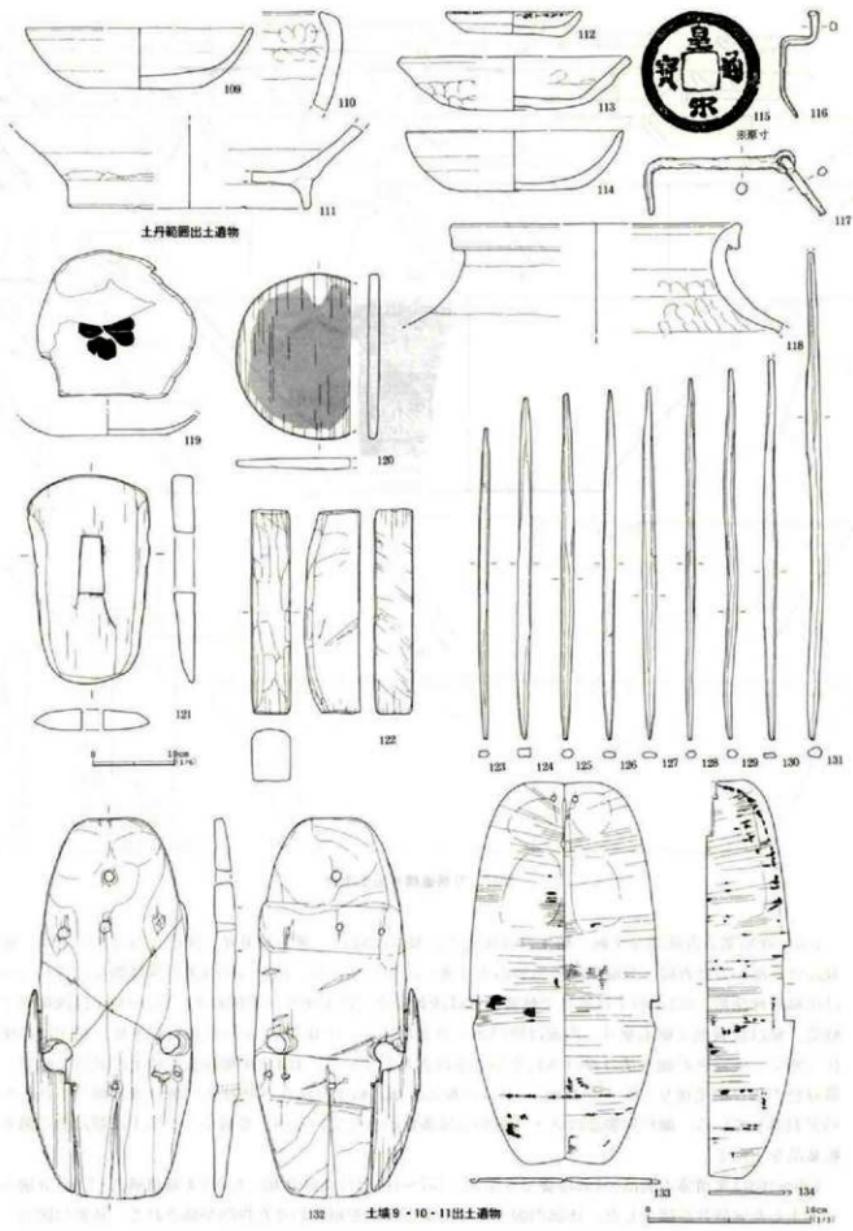


图16 II期遗构内出土遗物(4)

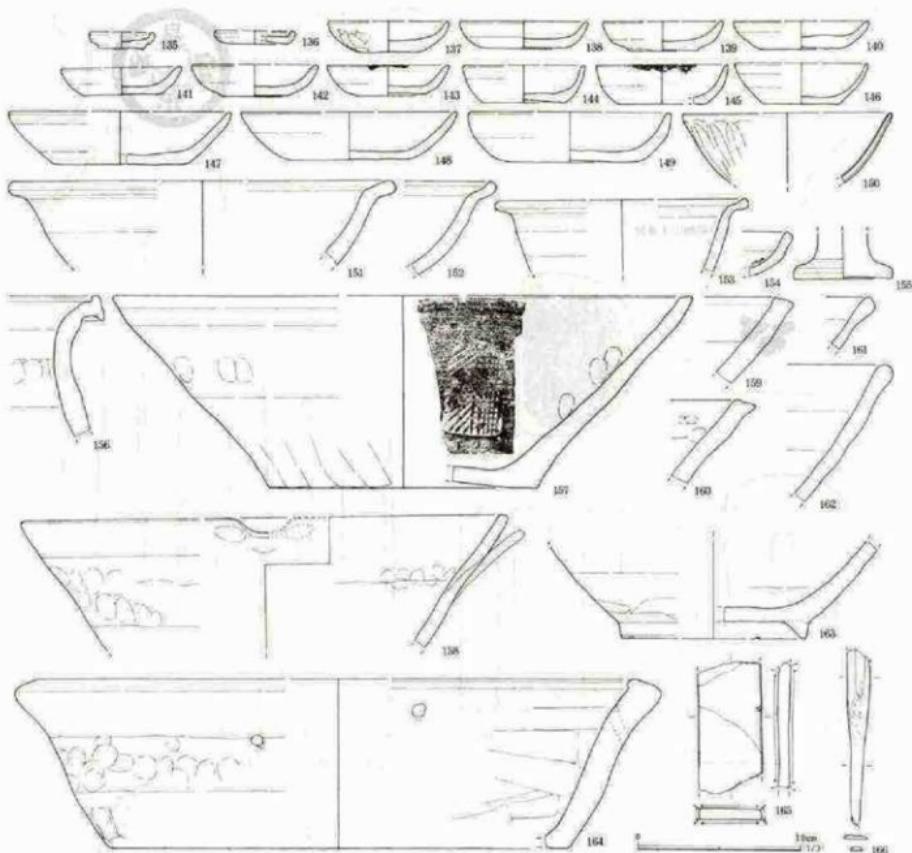


図17 Ⅱ期遺構外出土遺物

150は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。胎土は淡灰色で、釉は灰緑色。蓮弁は単弁。図化し得なかったが、舶載品は5層からは青磁・白磁が瀬戸窯製品より多く出土している。151～155は瀬戸窯諸製品。151・152は灰釉折縁深皿。151は胎土は肌色で軟質、釉は淡黄緑色で刷毛塗り。中期前半。152の胎土は淡橙色で軟質、釉は淡黄色で刷毛塗り、内面は斑があり外面は疎ら。中Ⅱ期。153は灰釉折縁中皿。胎土は淡灰色で粗く、灰緑色の釉は漬け掛けされるが外面は剥落している。154は灰釉卸皿。胎土は肌色で軟質、黄緑色の釉は刷毛塗り。中ⅠかⅡ期。155は灰釉仏花瓶。胎土は灰色、暗緑色の釉は漬け掛けされるが殆ど剥落している。瀬戸窯製品は3・4層からは多数出土しているが、5層からの出土点数は急に減り舶載品を下回る。

156～163は常滑窯の製品。156は壺で5型式。157～160は片口鉢Ⅱ類。157はⅠ期遺構内・2層・3層から出土した8破片が接合した。体部内面中程に格子と斜線を組合せた押印が捺される。拓影は図21-2にも縮尺1/2で再提示している。158の遺存する片口は1箇所。160は3層上面出土。161～163は片

口鉢 I 類。何れも 4 層以下の出土。164は土器質火鉢 I C 類。体部内面は横位のナデ、口縁下の穿孔は焼成前で貫通し、外面体部には指痕、底部脇はヘラ削り。3～5 層から出土した火鉢は、I B・C 類が多いものの表面を黒色処理したⅢ類も出土している。165の石製品は鳴滝産仕上砥。表裏 2 面使用で、両側面には明瞭ではないが生産地跡痕。幅 1 寸 2～3 分。166は骨角製品で、笄。

II 期の遺構群で重複関係や層位、出土遺物から見て最も先行するのは土壙 8・建物 8 であり、新しい遺構が土壙 2・建物 3 である。既に述べた各遺構内及び遺構外 III・IV 層の出土遺物を概観すると、瀬戸窯製品は II 期の下層では少なく上層は殆どが中期の製品であり、常滑窯口縁部を観ると 6～7 型式で占められ 8 型式は出土していない。かわらけは II 期下層で手捏ねが一定量を占めるが、概ね精良胎土で法量は大・中・小が揃い、厚手で体部中位から外反傾向の器形は含まれない。以上のことから II 期はやや幅を持たせ 13 世紀後半～14 世紀前半に架けてと考えたい。

3. III 期の遺構と出土遺物(図 18・19)

調査前地表面下約 1.2m、海拔 6.0m 前後の 6 層上面を調査では 4 面とし、本文では III 期の遺構群とした。北側調査区の II 区では、前述した II 期の建物が下層 7 層上面まで達しており、当該期の遺構は発見されなかった。I 区で発見された遺構は土壙 7 基と部分的な土丹地業である。

図 18 は I 区のみ III 期の遺構と出土遺物。既に触れた通り土壙 9 (土壙 4) は II 期、土壙 10 は本来 III 期の遺構であるが、出土遺物が混在した為図 15・16 に既に示した。又、土壙 14 は II 期土壙 11 下部の可能性がある。その他の土壙は確認レベル 5.8m 前後で覆土は暗茶褐色弱粘質土乃至砂質土。土壙 5 は、確認調査時の堆積土層図と整合すると、覆土の違いを遺構壁と観認り、II 期土壙 8 と同一遺構で建物の南半であった可能性が高い。

土壙 15 は平面形や遺構の軸方向から建物の可能性も考えられたが、遺構底面は西に緩傾斜し平坦ではなく、構造材の痕跡等も堆積土層には確認されなかった。167は土壙 15 出土の龍泉窯系青磁劃花文碗。胎土は暗灰色で緻密、釉は透明感のある灰緑色。固化していらない他の遺物は、かわらけと常滑窯胴部数点であり、糸切り底のかわらけは器高低く厚手、手捏ね成形のものは内外面体部の稜が強く、底部は平底状。III 期の他の土壙からの出土遺物は、小破片ばかりで年代の推定も困難であった。

土丹範囲は、6 層上面に破碎した土丹を幅 1 m 程南北方向に敷いて通路状にしている。出土遺物は調査時に II 期の遺構底面としていたこともあり、殆どを II 期の遺構内遺物として採り上げており、図 16・109～111 に図示している。109 は糸切り底のかわらけ。器表淡橙色で、胎土・焼成は良好。110 は常滑窯の鉢。胎土やや粗く、口唇部には降灰。111 は常滑窯片口鉢 I 類。



図 18 III 期全測図・出土遺物

図19はⅢ期遺構外出土遺物。

168～171は概ね図7～6(図2～IV)層中、174～176は図7～7・8(図2～V-1・2)層中の出土。

168は龍泉窯系青磁劃花文碗。胎土は暗灰白色でやや粗く、釉は灰緑青色。169は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。胎土は暗灰色で緻密、釉はやや濁った淡水青色で高台内面にも施釉。170は漆器の皿。黒漆は殆ど剥落し、残っている部分では無文。

171～173はU字型骨材採取残片。171はウシの中足骨。両端には截断時の鋸・折採り痕が観られ、両側から採取。172・173はウシの脛骨。図の上方が遠位端。地点38では、下層でウシ・ウマを利用した同様の骨材採取残片が多量に出土し、上層になるとイルカの遺存体が多くなること。一方で採取したU字型の製品或は加工途上品が出土しないことから、骨や肉に関わる集団の分業体制を指摘している。本調査でも層位は殆どⅢ期から、解体痕の残る鰐魚骨が数点出土しているが、製品や加工途上品は出土していない。174・175はかわらけ。174は糸切り底。175は手捏ね成形。何れも器表は橙色で胎土・焼成は良好。176は瀬戸窯捏鉢。胎土・器表は暗灰色。

Ⅲ期は遺構も希薄で出土遺物も少ない上に不手際も重なり、年代については苦し紛れにならざるを得ない。瀬戸窯製品が殆ど無い上に常滑窯甕口部は5型式の破片が1点出土している。7～8層で手捏ねかわらけが糸切り底を凌ぐことと、土壌15と7～8層出土のかわらけから消極的に13世紀中頃以降と考えたい。(沙見)

4. IV期その他の出土遺物(図20・21)

図20には、これまでに述べた以外の層位からの遺構外出土遺物をここに含めた。

177・178は中世遺物包含層であり調査第一面のI期検出の際に、概ね図7の1層から出土した遺物。

177は瀬戸窯灰釉折縁深皿。灰緑色の安定した釉が漬け掛けされる。中Ⅲ期の製品。178は常滑窯口鉢II類。内面全体に花文の押印が捺される。胎土は夾雜物を含む暗茶褐色土。器表は茶褐色を呈し、内

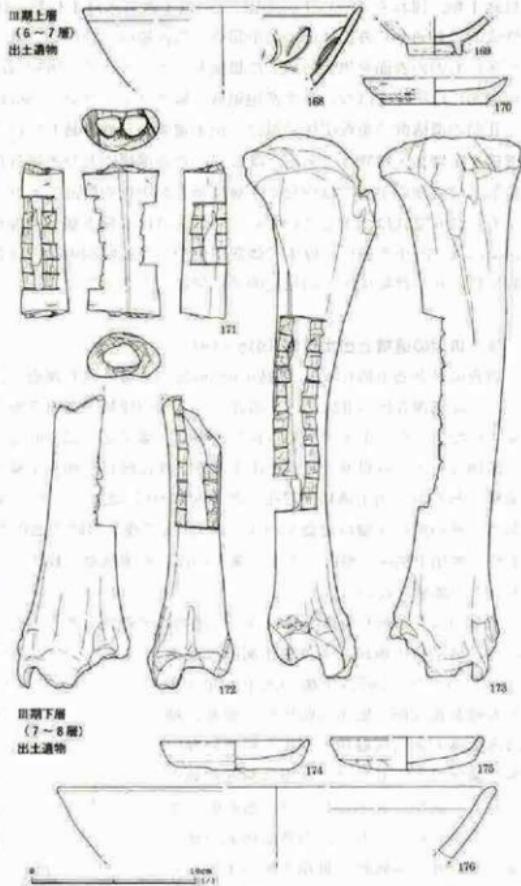


図19 Ⅲ期遺構外出土遺物

外面共に口縁下は無いナデ調整。拓影は図21-2にも縮尺1/2で再提示している。

179～181は採集遺物。表土掘削や残土の移動に伴って出土した遺物。

179は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。内面口縁下に一本の条線が入る。透明な水色の釉が掛り、胎土は灰色。180は常滑窯の甕。N字状の口縁を持ち、胎土は灰雜物を含む暗茶褐色土。181は北宋銭の天禧通寶、初鑄年は1017年で楷書。

(渡邊)

182～185は本調査に先立ち行われた確認調査墳からの出土遺物。それぞれ出土した層位の海拔高から、182は概ね図3のIV層下位からV-1層出土、183は概ね図3のIII層からIV層出土、184・185は概ね図3のII層より上位の出土。

182は手捏ねかわらけ。胎土は砂っぽく、焼成はあまり良くない。体部内外面ナデが強く、底部は平底状。183は糸切り底のかわらけ。器表は褐色で、器高低くやや厚手。184は糸切り底のかわらけ。器表淡橙色で、器高やや高く厚手。185は天草産の中砥。底面は表裏と同上左側面。右側面は生産地盤状工具痕か。表面の鋭利な溝みは、左側面にも観られるが研ぎ使用痕かは不明。

(沙見)

186～190は、遺構は発見されなかったがIV期とした中世以前の出土遺物。個々の遺物に関しては、鎌倉考古学研究所川又隆央氏・押木弘巳氏に、本調査地点から出土した所産が中世期より古い遺物を実見して頂いた際のご意見を参考している。本調査では中近世以外の遺構は発見していないが、図化したものと含めて古墳後期の壺形部片他絶破片数37点が出土している。

186は土師器坏。胎土は白色粒子・赤色粒子を含み肌色、口縁部はナデ調整。187は東海系須恵器坏。胎土は多量の黒色粒子と白色粒子を含み肌色、口縁部はナデ調整。188～190は須恵器洞部片内外面の拓影。何れも8世紀前半の製品と思われる。

(渡邊)

常滑窯捏鉢・押印文拓影(図21)

図21には常滑窯製品押印文拓影を、縮尺1/2で図示した。本調査で出土した押印文の観られる破片は34点あり、内、甕が32点、片口鉢II類が2点である。甕32点から捺された部位と文様種の個数が反映されるべく図示している。図21の1は図20-178、2は図17-157、5は図6-22に実測図と共に拓影を図示しているが再提示し、各拓影と類似する文様を中野1992から複写し参考とした。1・2の様に片口鉢の内面に捺されるものは、鎌倉市内で現在までに管見の及ぶ限り全てII類で10例程あり、殆どが体部上位に単独で捺されている。文様の種類はほぼ甕の押印文と共通し、斜格子、縱線と斜格子、花文、11の様な竹筒状の押印等数種類観られる。それぞれ供伴している遺物は、常滑窯甕の口縁形態で観ると5～7型式、かわらけは13世紀後葉～14世紀代である。

(沙見・田畠)

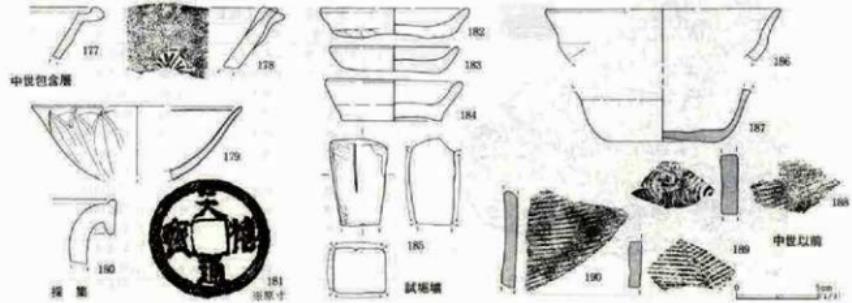


図20 その他の出土遺物

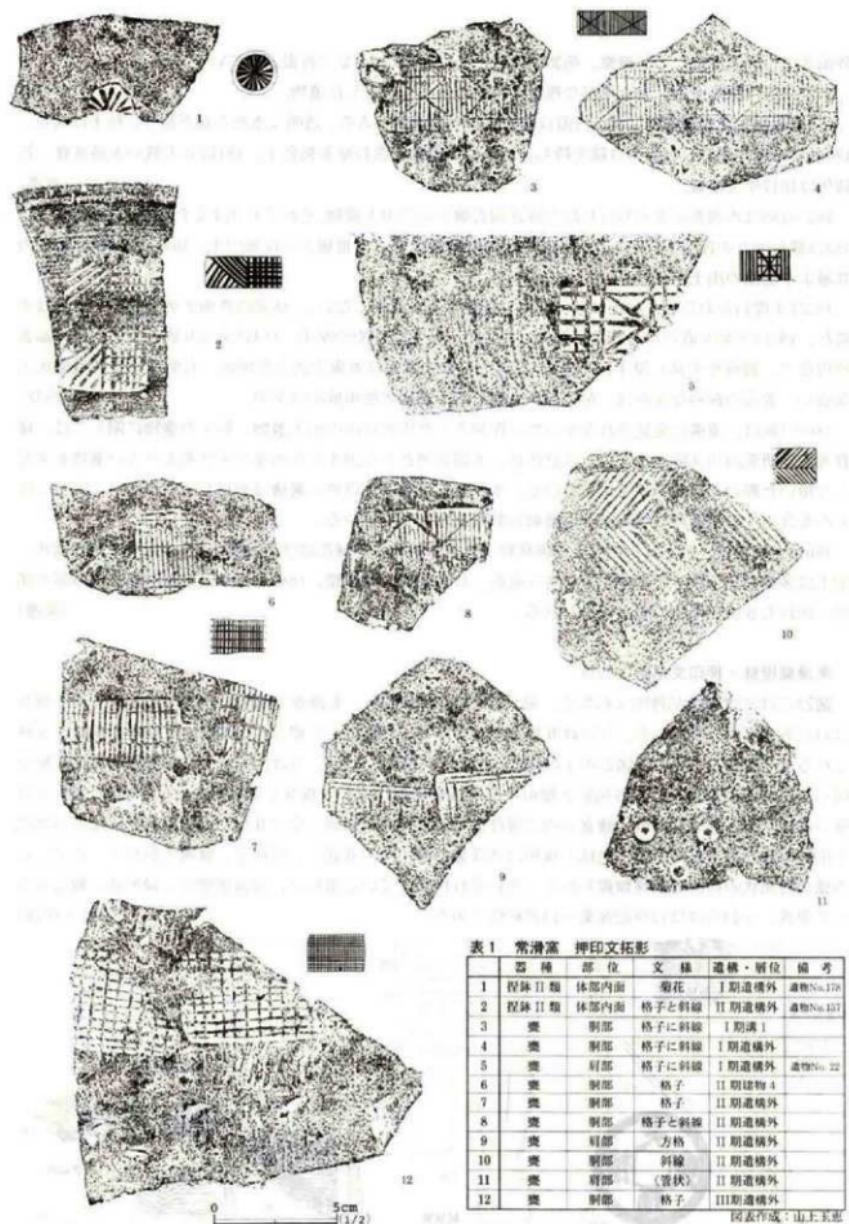


表1 常滑窑 窯印文拓影

器種	部位	文様	造構・断位	備考
1	捏跡Ⅰ類	体部内面 菊花	Ⅰ期造構外	遺物Na.178
2	捏跡Ⅱ類	体部内面 格子と斜線	Ⅰ期造構外	遺物Na.153
3	壺	肩部 格子に斜線	Ⅰ期溝1	
4	壺	肩部 格子に斜線	Ⅰ期造構外	
5	壺	肩部 格子に斜線	Ⅰ期造構外	遺物No.22
6	壺	肩部 格子	Ⅱ期溝4	
7	壺	肩部 格子	Ⅱ期造構外	
8	壺	肩部 格子と斜線	Ⅱ期造構外	
9	壺	肩部 方格	Ⅱ期造構外	
10	壺	肩部 斜線	Ⅱ期造構外	
11	壺	肩部 《管状》	Ⅱ期造構外	
12	壺	肩部 格子	Ⅲ期造構外	

图21 常滑窑窯印文拓影

第4章 調査成果

1. 調査地の性格と年代観

本報文では堆積土と遺構の様相から遺構面を大きくI～IV期に捉え、各期の発見遺構と出土遺物について述べてきた。各期の年代観は既に報文中で触れているが、発見遺構から考え得る性格や周辺の調査事例と併せて簡単にまとめる。

IV期では遺構は発見されなかつたものの、古墳時代後期の遺物が出土している。図3に模式的に類し、第1章の3. 堆積土層の項で触れた様に、地点6と本調査地点が同様の層序とすれば地点6の自然科学分析の年代測定成果を絞り込む一助にならうかと考えられる。IV期の堆積土は南西に向って傾斜するのは、本地点前現車道北側に東西に横たわる砂丘の裾野付近であり、南側の砂丘との間に砂丘間低地（上本2000）と考えられるが、地点37で厚く堆積し顯著な「水辺の陸生生物の棲息痕が観られる暗褐色弱粘質砂層」とは異なるように観察された。III期からII期にかけてこの湿地状の土地を克服したのか、地点38・39にも観られる骨材加工に携る生活の痕跡が13世紀代には観られる。その後あまり間をおかず、地点6で発見されたのと同様に、木材基礎構造を持つ建物が14世紀代にかけて繰返し興廢している。この建物の構造や機能・用途については本調査の事例からは言及する要素に乏しいが、地点6の報文末で触れた様に基本的には立地条件と当時の地下水位の差こそあれ地点13・21・22・35で発見されている方形壁穴建物とそう変らず、方形壁穴に依存した庶民の生活の場と考えられよう。その後1期14世紀代になると、調査区がまたま空閑地であったのが遺構とは希薄で活発な土地利用は見受けられない。また、近世期も地点22で発見された墓地的な空間は本地点までは括がらないようである。

2. 周辺の調査成果から

第1章で述べた様に、本地点付近には今小路や車大路他中世鎌倉の幹線道路が通ると推定されている。然しあ、本地点や地点6・8・13・22では調査区の位置にも依るが発見されていないし、範囲を括げて図2の各地点でも発見されていない。地点13・22で報告されている土丹敷きの道路は土地利用の中での通路であって、文献や他遺跡の発掘調査に観る大路とは考え難い。本地点及び周辺の調査成果からは、それぞれの幹線道路が、例えば若宮大路が八幡宮寄りの各調査地点で確認されている様に、両側に箱型の木組溝を伴い都市基軸の若宮大路を中心に基盤の升目の如く通されているという仮定には否定的にならざるを得ない。既に述べられてはいることだが、都市基軸である若宮大路に交わる付近では観た目直交ではあるが、そこから外へ（東或は西）に離れると若宮大路にではなく丘陵や河川といった自然地形に沿って道路が通され、就中建物の軸方向が決ってくるのであろう。現車道に惑わされず中世期の道路に目を向ける必要がある。現況の鎌倉では、本誌第2分冊所収材木座町屋遺跡の稿末でも触れている様に現況の等高線から旧地形を推定する事も可能ではあるし、現に旧道筋を踏襲している道路や路地も少なからずある。しかし一方で近世以降の改修に因り地下に埋れ、発掘調査や確認調査に拘らなければ確認し得ない未だ不明な自然地形にも目を向けるべきであろう。如何ともし難いことではあるが、現状では確認調査の際に建物址や中世遺物を含む掘り込みが確認されずば平面的な調査には移行し難く、又、確認調査の成果が活かされる状況が整っているとは言い難い。本稿及び先に触れた材木座町屋遺跡報文では、知り得る限りの確認調査地点を地図上に顕した。今後もこうした一つ一つの点的な成果を繋ぎ合せて少しでも中世鎌倉の地形を復元することを試みる必要があろう。

表2 出土遺物計測表(1)

遺物 No.	遺物名	計測値	単位 cm	(1) = 横元底 底径 - 残存底	備考			
1	土器	口径 (8.4)	底径 (5.4)	器高 1.6				
2	片口鋸刃加				6型式			
3	かわらけ 瓶	口径 7.0	底径 5.0	器高 2.2				
4	かわらけ 瓶	口径 7.6	底径 4.2	器高 2.1	合せ口			
5	灰陶 前輪車軸	口径 (8.0)			中川期			
6	片口鋸刃加				6型式			
7	かわらけ 瓶	口径 (7.8)	底径 (5.4)	器高 2.0				
8	上唇鋸刃瓶	口径 (7.2)	底径 (4.0)	器高 2.0				
9	かわらけ 瓶	口径 6.9	底径 4.3	器高 2.0				
10	土器	口径 (6.2)	底径 4.4	器高 2.5				
11	土器	口径 12.4	底径 8.0	器高 3.2				
12	灰陶 戸				中川期?			
13	灰陶 戸				中川期IV期			
14	灰陶 戸				中川~IV期			
15	灰陶 戸				中川期~中期II			
16	灰陶 戸				中川期~中期II			
17	灰陶 戸				中I或初期			
18	灰陶 戸	口径 (13.0)			中后期半			
19	灰陶 戸				初期			
20	灰陶 戸				底径 (6.2)			
21	常滑窯				6型式			
22	常滑窯				6型式?			
23	常滑窯				7型式?			
24	片口鋸刃加				5~6型式			
25	常滑窯				6型式			
26	常滑窯				6~7型式			
27	片口鋸刃加				6~7型式			
28	魚住窯							
29	魚住窯							
30	(產地不明) 瓦							
31	土器	底径 (28.0)						
32	火鉢							
33	石製品	長さ 5.8	幅 9.0	厚さ 1.8				
34	石製品	長さ 8.1	幅 2.6	厚さ 1.3				
35	火鉢	長さ 6.4	幅 5.3	厚さ 2.5				
36	かわらけ 瓶	口径 (7.4)	底径 (5.6)	器高 1.6				
37	灰陶 戸	底径 5.2			中I期5			
38	常滑窯							
39	常滑窯				6型式?			
40	土器	口径 (7.3)	底径 (4.7)	器高 2.0				
41	かわらけ 瓶	口径 (7.5)	底径 (4.5)	器高 2.3				
42	土器	口径 (7.5)	底径 (4.8)	器高 2.1				
43	土器	底径 (7.4)						
44	灰陶 戸	口径 (12.6)			中II或III期			
45	灰陶 戸	底径 (5.0)			後期			
46	常滑窯							
47	石製品	長さ 6.5	幅 3.0	厚さ 0.5				
48	金属製品				聖宋元寶	初跡年 1101年	算書	
49	金属製品					太平通寶	初跡年 976年	算書
50	金属製品					天聖元宝	初跡年 1023年	算書
51	土器	口径 (7.0)	底径 (4.0)	器高 2.4				
52	土器	口径 (10.4)	底径 (5.4)	器高 3.0				
53	常滑窯							
54	土器	口径 (7.8)	底径 (5.7)	器高 1.5				
55	土器	口径 7.9	底径 4.9	器高 1.8				
56	土器	口径 7.6	底径 4.3	器高 1.9				
57	土器	口径 (8.0)	底径 (5.3)	器高 1.8				
58	土器	口径 7.9	底径 4.8	器高 1.9				
59	土器	口径 (7.8)	底径 (5.2)	器高 2.1				
60	土器	口径 6.9	底径 4.1	器高 2.0				
61	土器	口径 (6.8)	底径 (4.6)	器高 2.1				
62	土器	口径 7.3	底径 4.6	器高 2.1				
63	土器	口径 7.6	底径 5.4	器高 1.6				
64	土器	口径 (12.8)	底径 (7.4)	器高 3.6				
65	土器	口径 (13.2)	底径 (7.6)	器高 3.5				
66	灰陶 戸							中II或III期
67	灰陶 戸							
68	灰陶 戸							
69	常滑窯							6型式?
70	瓦	瓦	器高 (41.5)	底径 (36.8)	器高 11.9			
71	土器	口径 (6.4)	底径 (4.4)	器高 1.0				
72	土器	口径 7.9	底径 5.8	器高 1.5				
73	土器	口径 (7.8)	底径 (5.7)	器高 1.5				
74	土器	口径 8.0	底径 6.3	器高 1.7				
75	土器	口径 12.8	底径 8.2	器高 3.2				
76	土器	口径 13.7	底径 8.0	器高 3.6				
77	土器	口径 (7.5)	底径 (5.0)	器高 1.5				
78	土器	口径 (6.9)	底径 (4.9)	器高 2.0				
79	常滑窯							
80	常滑窯							
81	常滑窯	口径 (32.6)						
82	木製品	長さ 25.0						
83	木製品	口径 (7.9)	底径 (5.6)	器高 1.7				
84	木製品	口径 (7.8)	底径 (5.0)	器高 1.7				
85	木製品	口径 8.6	底径 6.0	器高 1.3				平高台
86	木製品	口径 (16.0)						高台
87	木製品	長さ 41.3	幅 12.3	厚さ 1.0				
88	土器	口径 14.0	底径 7.7	器高 3.8				
89	土器	口径 13.3	底径 8.0	器高 3.6				
90	土器	口径 13.1	底径 6.0	器高 3.8				
91	土器	口径 7.6	底径 5.3	器高 2.4				
92	土器	口径 7.3	底径 5.0	器高 2.4				
93	土器	口径 (7.2)	底径 (4.8)	器高 2.6				
94	灰陶 戸							中I期
95	灰陶 戸	口径 7.8	底径 5.6	器高 2.0				

表3 出土遺物計測表(2)

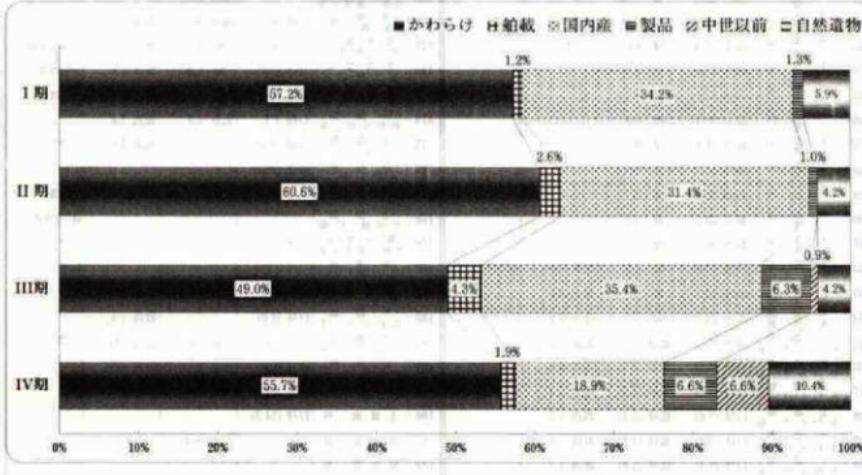
No.	遺物名	計測値	単位	(1) - 薬元使 経体 - 現存値	編 号
96	土器類 かわらけ 手	口径 (3.4)		器高 1.9	
97	土器類 品	径 41.6		厚さ 1.1	
98	土器類 かわらけ 手	口径 (12.2)	底径 (7.5)	器高 4.1	
99	常滑窯 常滑窯	口径 (13.2)			
100	常滑窯				
101	青磁 天 青磁 天	長さ 16.2	幅 12.4	厚さ 1.8	
102	陶瓦	長さ (25.6)			
103	石質石器	長さ 8.0	幅 2.0	厚さ 1.3	
104	石質石器 木上級	口径 (11.1)			
105	中口瓶	口径 (21.6)			
106	中口瓶 中口瓶	口径 (13.8)	底径 (5.9)	器高 3.6	
107	中口瓶	底径 (17.6)			
108	木製下駄	合長 22.3	幅 9.5	厚さ 1.2	板目材
109	土器類 かわらけ 手	口径 (10.2)			
110	常滑窯				
111	青磁 天 片口瓶			底径 (14.7)	
112	土器類 かわらけ 手	口径 8.2	直径 5.9	器高 1.4	
113	土器類 かわらけ 手	口径 (13.8)		器高 3.2	
114	土器類 かわらけ 手	口径 (13.2)	底径 (7.5)	器高 3.8	
115	金銀製品 金銀製品	南宋通寶	初跡年 1038年	柄書	
116	金銀製品 金銀製品	長さ 8.2	徑 0.5		
117	金銀製品 金銀製品	長さ 12.0	徑 0.7	金具 長さ 5.5 徑 0.4	
118	木製文具 木製文具	口径 (17.4)			
119	木製文具 木製文具	底径 6.6		幅高有	
120	木製文具 木製文具	径 (10.2)		厚さ 0.7	
121	木製文具	長さ 22.0	幅 14.6	厚さ 2.6	
122	木製文具	長さ 12.7	幅 2.4	厚さ 3.3	
123	木製文具	長さ 17.3	徑 0.6		
124	木製文具	長さ 21.2	徑 0.8		
125	木製文具	長さ 21.4	徑 0.7		
126	木製文具	長さ 21.7	徑 0.8		
127	木製文具	長さ 21.8	徑 0.8		
128	木製文具	長さ 22.3	徑 0.6		
129	木製文具	長さ 22.8	徑 0.7		
130	木製文具	長さ 23.5	徑 0.7		
131	木製文具	長さ 30.2	徑 0.9		
132	木製下駄	合長 23.6	幅 10.2	厚さ 1.4	板目材
133	木製下駄	長さ 23.7	幅 11.6	厚さ 0.3	
134	木製文具	長さ 24.8	幅 5.3	厚さ 0.2	
135	土器類 かわらけ 手	口径 (3.7)	底径 (2.7)	器高 1.0	
136	土器類 かわらけ 手	口径 (4.7)	底径 (3.7)	器高 0.9	
137	土器類 かわらけ 手	口径 (7.3)	底径 (4.0)	器高 1.9	
138	土器類 かわらけ 手	口径 (7.6)	底径 (5.1)	器高 1.7	
139	土器類 かわらけ 手	口径 (7.9)	底径 (4.2)	器高 1.8	
140	土器類 かわらけ 手	口径 (8.1)	底径 (5.4)	器高 1.7	
141	土器類 かわらけ 手	口径 (7.2)	底径 (5.0)	器高 1.7	
142	土器類 かわらけ 手	口径 (7.5)	底径 (4.2)	器高 2.0	
143	土器類 かわらけ 手			口径 (7.3)	底径 (4.3) 器高 1.9
144	土器類 かわらけ 手			口径 (7.3)	底径 (5.2) 器高 2.3
145	土器類 かわらけ 手			口径 (8.0)	底径 (5.1) 器高 2.4
146	土器類 かわらけ 手			口径 (8.0)	底径 (4.5) 器高 2.5
147	土器類 かわらけ 手			口径 (13.4)	底径 (7.0) 器高 3.3
148	土器類 かわらけ 手			口径 (13.1)	底径 (7.0) 器高 3.0
149	土器類 かわらけ 手			口径 (12.1)	底径 (6.0) 器高 3.1
150	土器類 青磁			口径 (12.6)	
151	灰陶			口径 (33.0)	中期前半
152	灰陶				中期
153	灰陶			口径 (15.0)	中期後?
154	灰陶				中I或II期
155	灰陶			底径 (6.0)	中期
156	灰陶				
157	灰陶	片口瓶		口径 (34.6)	底径 (15.4) 器高 11.9
158	灰陶	片口瓶		口径 (29.1)	
159	灰陶	片口瓶			
160	灰陶	片口瓶			
161	灰陶	片口瓶			
162	灰陶	片口瓶			
163	灰陶	片口瓶		底径 (11.2)	
164	灰陶	大口瓶		口径 (36.4)	底径 (28.6) 器高 10.5
165	石質品 地陪葬品			長さ 7.6	幅 3.9 厚さ 0.8
166	骨質品 骨質品			長さ 10.9	幅 3.4 厚さ 0.3
167	青銅文具 青銅文具				底径 (6.0)
168	青銅文具 青銅文具			口径 (17.0)	
169	青銅文具 青銅文具				底径 (3.2)
170	木製品			口径 (6.8)	底径 (6.3) 器高 1.6
171	骨質品 骨質品			長さ 9.5	幅 4.7 厚さ 2.5 ウシ足骨
172	骨質品 骨質品			長さ 17.6	幅 5.3 厚さ 6.6 ウシ腰骨
173	青銅製品 青銅製品			長さ 33.5	幅 8.1 厚さ 8.9 ハシ骨
174	土器類 かわらけ 手			口径 9.1	底径 6.8 器高 1.8
175	土器類 かわらけ 手			口径 (9.0)	器高 2.1
176	土器類 天井灰			口径 (26.8)	
177	灰陶				中IV期
178	灰陶	片口瓶			6a~7型式
179	灰陶	片口瓶		口径 (12.9)	
180	灰陶	灰陶			6a型式
181	金銀製品 南宋通寶			天祐通寶	初跡年 1017年 柄書
182	土器類 かわらけ 手			口径 (9.0)	器高 1.8
183	土器類 かわらけ 手			口径 7.8	底径 5.6 器高 1.6
184	土器類 かわらけ 手			口径 8.2	底径 6.1 器高 2.5
185	石質品 天祐通寶			長さ 5.6	幅 3.2 厚さ 2.8
186	土器類 手			口径 (14.3)	
187	漆器	漆器			底径 (6.6)
188	漆器	漆器			
189	漆器	漆器			
190	漆器	漆器			

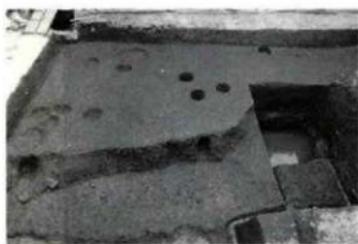
表4 出土遺物破片数表

（単位：枚）

層位	遺物種 類	かわらけ 糸切り	手程ね	舶載陶磁器類				国内産諸窯・製品				
				青磁	白磁	青白磁	その他	瀬戸窯	常滑窯	瀬美窯	その他	火鉢
I期	遺構内	279	0	1	0	0	0	11	69	0	0	6
	遺構外	600	0	13	2	2	0	39	374	3	7	11
II期	遺構内	1,261	4	48	2	0	15	28	561	2	1	13
	遺構外	570	16	9	3	0	3	23	283	2	0	13
III期	遺構内	156	65	9	1	0	11	1	160	0	1	0
	遺構外	38	23	3	0	1	0	1	33	0	0	0
IV期	遺構外	19	40	2	0	0	0	0	19	1	0	0
	その他	176	15	4	1	0	1	8	178	0	0	7
計		3,099	163	89	9	3	30	111	1,677	8	9	50
		54.1%	2.8%	1.6%	0.2%	0.1%	0.5%	1.9%	29.3%	0.1%	0.2%	0.9%
												0.3%

層位	遺物種 類	土器類	土製品	石製品				木製品	骨製品	中世以前	自然遺物	その他	小計	各期合計	%
				石製品	鐵製品	木製品	骨製品								
I期	遺構内	1	2	1	1	1	0	1	1	17	0	390	1,536	27%	
	遺構外	5	1	12	1	1	0	1	1	74	0	1,146			
II期	遺構内	8	0	8	6	8	4	0	0	82	0	2,063	3,053	53%	
	遺構外	13	0	2	0	2	2	2	2	46	0	990			
III期	遺構内	2	1	3	5	18	2	3	3	15	0	457	576	10%	
	遺構外	2	0	0	1	1	5	2	2	9	0	119			
IV期	遺構外	0	1	0	1	5	0	7	11	6	106	106		2%	
	その他	11	2	2	1	9	0	16	24	1	459	459		8%	
計		42	7	28	16	45	13	32	278	1	5,730			100.00%	
		0.7%	0.1%	0.5%	0.3%	0.8%	0.2%	0.6%	4.9%	0.0%					





▲ I期全景 (I区・南から)



▲ I期溝1土層断面 (東から)



▲ II期上層全景 (II区・南から)



▲ II期上層建物3 (II区・東から)



▲ II期下層建物2 (I区・東から)



▲ II期下層全景 (II区・南から)



▲ II期下層建物9 (II区・南から)



▲ II期下層土坑8 (I区・北から)

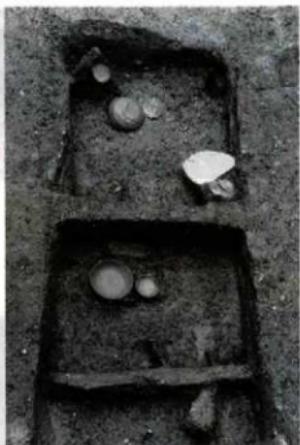


▲ 建物9柱 (西から)



▲ II期下層建物6壁板 (II区・北から)

図版2



▲ II期上層土坑2 (I区・南から)



▲ 土坑2 完掘 (南から)



▲ III期全景 (I区・南から)



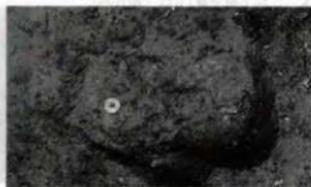
▲ 土坑9 上層出土漆器 (南から)



▲ 土坑9 内出土鏡 (南から)



▲ 土坑9~11 (I区・南から)



▲ 鏊の下部出土銅銖 (南から)



▲ I期建物1出土獸骨（犬・南から）



▲ 降雨後水没した調査区（I区・南西から）

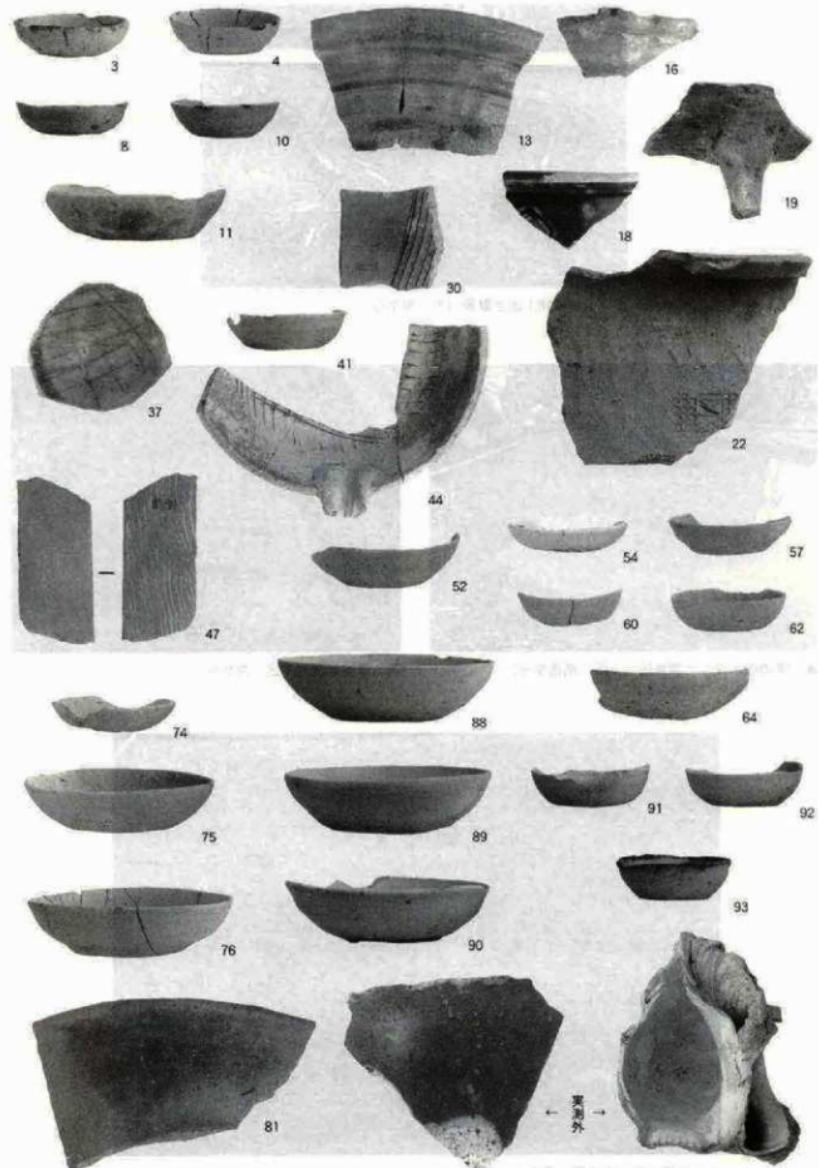


▲ 最終状況（I区・南から）

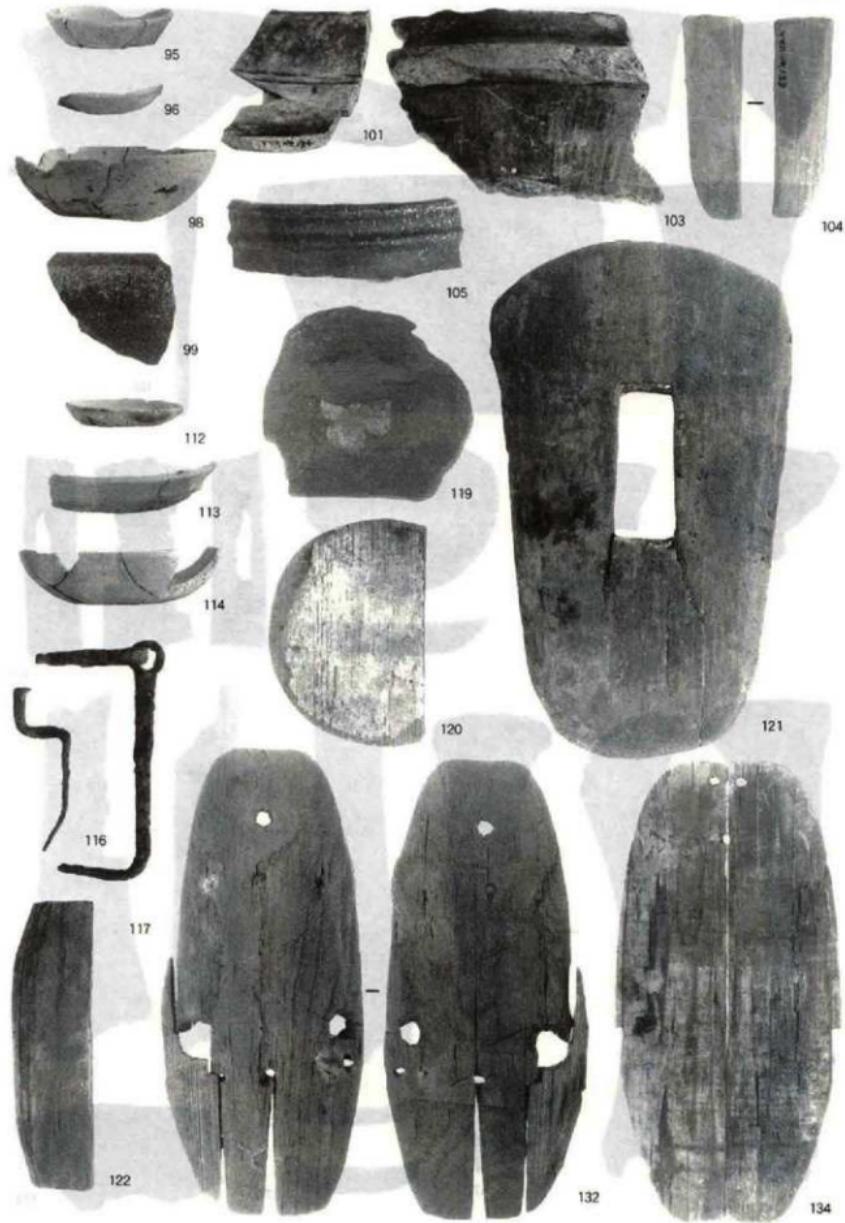


▲ 堆積土層（中央壁・南から・部分）

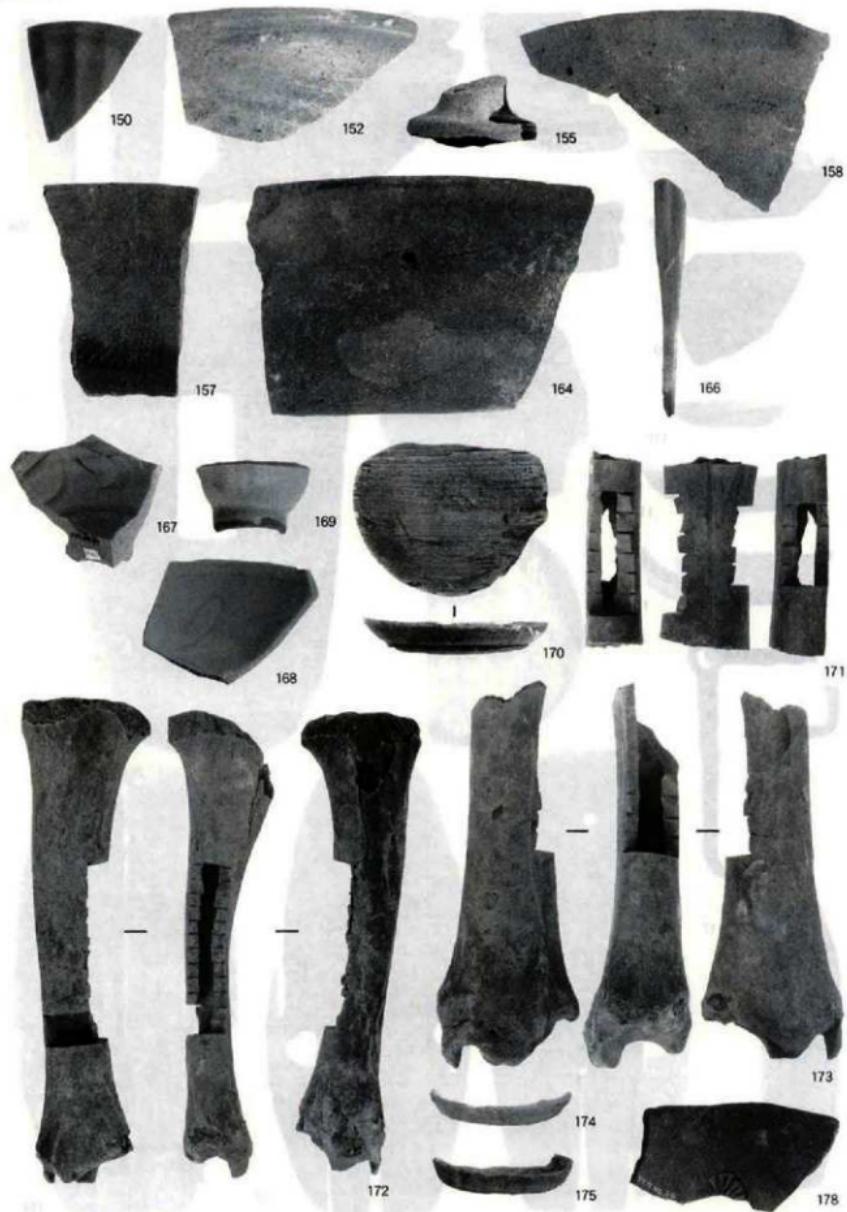
図版4



图版5



図版6



今小路西遺跡 (No. 201) は、神奈川県横須賀市今小路町に位置する、古墳時代後半の遺跡である。この遺跡は、1960年（昭和35年）に発見されたもので、その構造から、古墳時代後半の古墳であると推定される。遺跡の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。

今小路西遺跡 (No. 201)

由比ガ浜一丁目148番1地点

この遺跡は、古墳時代後半の古墳である。古墳の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。古墳の構造は、前方後円墳である。古墳の前面には、石垣が築かれており、その高さは約1mである。古墳の表面には、土被りがある。古墳の内部では、土坑式墓室が発見された。墓室の大きさは、東西約5m、南北約3mである。墓室内では、人骨や土器などの遺物が出土した。また、古墳の周囲には、石碑や石柱などの遺物が出土した。これらの遺物は、古墳時代のものである。

第三回 文本

第三回 文本は、古墳時代の古墳である。古墳の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。古墳の構造は、前方後円墳である。古墳の前面には、石垣が築かれており、その高さは約1mである。古墳の表面には、土被りがある。古墳の内部では、土坑式墓室が発見された。墓室の大きさは、東西約5m、南北約3mである。墓室内では、人骨や土器などの遺物が出土した。また、古墳の周囲には、石碑や石柱などの遺物が出土した。これらの遺物は、古墳時代のものである。

第四回 図面

第四回 図面は、古墳時代の古墳である。古墳の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。古墳の構造は、前方後円墳である。古墳の前面には、石垣が築かれており、その高さは約1mである。古墳の表面には、土被りがある。古墳の内部では、土坑式墓室が発見された。墓室の大きさは、東西約5m、南北約3mである。墓室内では、人骨や土器などの遺物が出土した。また、古墳の周囲には、石碑や石柱などの遺物が出土した。これらの遺物は、古墳時代のものである。

第五回 文本

第五回 文本は、古墳時代の古墳である。古墳の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。古墳の構造は、前方後円墳である。古墳の前面には、石垣が築かれており、その高さは約1mである。古墳の表面には、土被りがある。古墳の内部では、土坑式墓室が発見された。墓室の大きさは、東西約5m、南北約3mである。墓室内では、人骨や土器などの遺物が出土した。また、古墳の周囲には、石碑や石柱などの遺物が出土した。これらの遺物は、古墳時代のものである。

第六回 図面

第六回 図面は、古墳時代の古墳である。古墳の規模は、東西約100m、南北約50mの大きさである。古墳の構造は、前方後円墳である。古墳の前面には、石垣が築かれており、その高さは約1mである。古墳の表面には、土被りがある。古墳の内部では、土坑式墓室が発見された。墓室の大きさは、東西約5m、南北約3mである。墓室内では、人骨や土器などの遺物が出土した。また、古墳の周囲には、石碑や石柱などの遺物が出土した。これらの遺物は、古墳時代のものである。

例 言

1. 本報は鎌倉市由比ガ浜一丁目148番1地点における個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査は平成12年7月3日から同月27日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

担当者 小林康幸	調査員 野本賢二、山上玉恵
調査補助員 横田真吾	作業員 有田正夫、安斎三男、大戸迫猛、杉浦永章、中州洋二、沼上三代治、町田義一、渡辺輝彦（（社）鎌倉市シルバー人材センター）
調査協力 渋見一夫、渡邊美佐子、田畠衣理	
4. 資料整理は野本、山上が行い、本報の執筆、編集は野本が行った。
5. 写真は野本が撮影した。
6. 本報に掲載した地形図は鎌倉市都市基本図1:2500、1:500を縮小して使用した。
7. 本報中の遺構図縮尺は1:60である。
8. 図中のPは柱穴を表す
9. 遺物実測図の縮尺は基本的に1:3である。それ以外は各々に縮尺を付した。
10. 遺物の情報は遺物観察表に記した。実測図番号、観察表番号はそれぞれ一致する。
11. 図面、写真、遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している。
12. 本報にかかる出土品には略号である「INBS」を註記した。
13. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸機関に御教示、御協力を賜った（順不同・敬称略）。
鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所、（社）鎌倉市社会福祉センター、（社）鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉日本土木、住友林業、岩井解体作業

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第2章 調査の経過	189
第3章 発見された遺構と遺物	190
第4章 まとめ	194

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡	186
図2 グリッド設定図	189
図3 遺構全図および土層堆積図	190
図4 建物・柱穴列・P69	191
図5 出土遺物	193

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表	187
表2 遺物観察表	195
表3 中世遺物總破片点数表	195

写 真 図 版 目 次

図版1 I区全景/II区全景/P69	197
図版2 P57/P45	198

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 調査地点の位置と地理的環境

本調査地点はJR鎌倉駅の西約500m、鎌倉市由比ガ浜一丁目148番1地点に位置する。神奈川県遺跡台帳では「今小路西遺跡」(NO.201)の範囲内にあり、中世の高級武家屋敷跡や古代の鎌倉都衙に関わる建物跡が発見された御成小学校地点が本地点の北にある。

縄文時代前期の海進時、本地点周辺の旧鎌倉の低地は海中にあったと考えられている。縄文時代中期の海退後、本地点周辺は砂質低湿地・砂丘間低地となり、縄文時代晩期以降は砂泥質平地となる⁽¹⁾。

中世基盤層上面は本地点で海拔8.1mを測る。

第2節 調査地点周辺の歴史的環境

【縄文時代】

当該期の遺構の発見例は無いものの本地点周辺では縄文土器が数点出土している⁽²⁾。

【弥生時代】

本地点から北東の大倉で中期(宮ノ台期)を主体とする集落が発見されているが⁽³⁾、本地点周辺で当該期の遺物は少量出土するものの遺構の発見例は無い。

【古墳時代】

本地点南の海浜地域で前期の住居址が発見され、また、後期の古墳群の存在が推定されているが、本地点周辺での当該期の遺構発見例はほとんど無い。「今小路西遺跡」内御成小学校地点では円筒埴輪片2点、ガラス製小玉、同社会福祉センター地点では円筒埴輪片1点、瑪瑙製勾玉が出土している。

【奈良・平安時代】

8世紀前半には相模国鎌倉郡が成立していたと考えられている⁽⁴⁾。その範囲は現在の鎌倉市のほか、逗子市、横浜市、藤沢市の一帯と推定されている。本地点を含む鎌倉地域一帯は鎌倉郷・荏原郷に推定されている。本地点北の「今小路西遺跡」内御成小学校地点と同社会福祉センター地点では鎌倉都衙及び関連遺構が発見された⁽⁵⁾。本調査地点周辺における当該期の遺構は鎌倉都衙を中心に展開していると言える⁽⁶⁾。

平安後期、鎌倉には源義朝の館や鶴岡八幡宮(由比若宮)、生源寺、荏柄天神社、甘綱神明社、御靈神社などの寺社がすでに存在していた。

【鎌倉時代】

鎌倉時代初期、本地点北東の大倉に御所(幕府)が置かれる。これは縄文時代晩期以降、谷底平野・山麓平野が広がりはじめ、土地の乾燥化が進んでいたため、都市鎌倉がこの大倉の地から始まったという上本氏の指摘があり興味深い⁽⁷⁾。鎌倉時代中期以降、御所は若宮大路東に置かれ、その周辺には幕府関連の建物や北条氏邸宅、御家人邸宅等が集中する政治中枢域であったことは史実に明らかである⁽⁸⁾。

鎌倉時代中期から後期にかけて、本地点の北方周辺に北条金沢氏(甘綱氏)や安達氏、千葉氏等の邸宅が存在したという記述が諸文献に見える⁽⁹⁾。高橋慎一郎氏は『吾妻鏡』建長三(1251)年二月十日条の記述から、安達邸を無量寺谷の入口付近に比定している⁽¹⁰⁾。

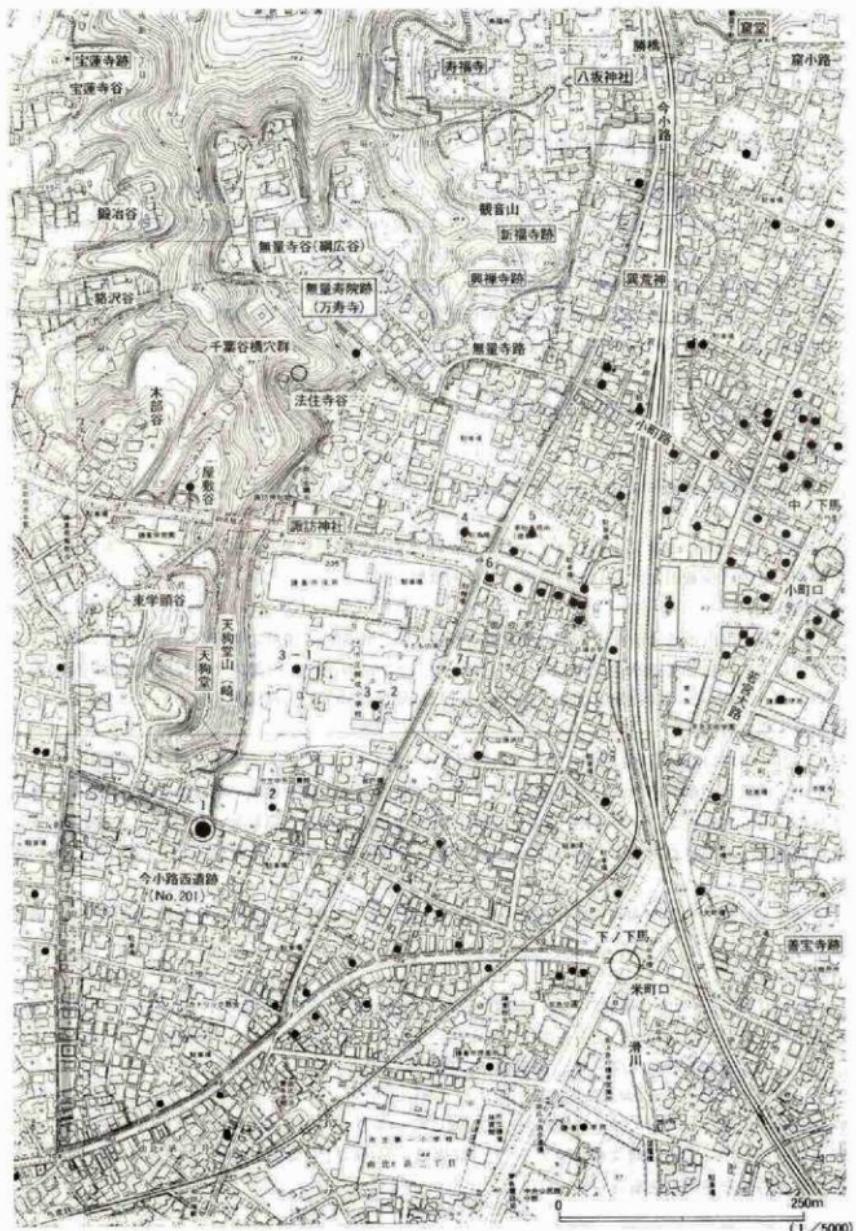


図1 調査地点と周辺の遺跡

番号	神奈川県 遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種別	主な時代	調査年度	文献
1	291	今小路西遺跡（本遺産地点）	横浜市西区1-45-1	都市	中世	2000年	
2		今小路西遺跡（松島保健センター）	横浜市西区25-2		古代・中世・戦国・近世	1993年	a
3-1		今小路西遺跡（御成町2・3地）	横浜市西区25-3		古代・中世・近世・近代	1994-1995年	b
3-2		今小路西遺跡（御成町25-3）	横浜市西区25-3		古代・中世・近世・近代	1991-1992年	c
4		今小路西遺跡（千葉地遺跡）	横浜市西区3-6		古代・中世	1980年	d
5		若宮大路西遺跡（千葉地東遺跡）	横浜市西区12-18		古代・中世・近世末・近代	1984年	e
6		若宮大路西遺跡群	横浜市西区288-3-25		中世	1995年	f
7		若宮大路西遺跡群	横浜市西区372-14		中世	1999年	g

表1 周辺の遺跡一覧表

【南北朝・室町時代】

鎌倉幕府が滅亡してからも鎌倉府（淨明寺宇公方屋敷辺りか？）が置かれ、鎌倉は関東の中心として繁栄していく。その後、永享の乱（永享十（1438）年）頃から鎌倉が衰えはじめ、康正元（1455）年、鎌倉公方足利成氏が將軍足利義政の命を受けた駿河の守護今川範忠によって鎌倉を追われ、下総古河に移った。さらに、文明九（1477）年には関東管領上杉氏も上野に移ったので関東における政治的中心としての機能が失われた。

【江戸時代】

都市の面影が薄れ、鶴岡八幡宮、長谷寺、大仏等が物見遊山の対象とされ、多くの人々で賑わった。16世紀末、旧鎌倉地域は幕府領と寺社領（鶴岡八幡宮、建長寺、円覚寺ほか）となった。本地点周辺は大町村⁽ⁱⁱⁱ⁾に組み込まれた。19世紀以降、幕府領は大名領となり、明治時代の廃藩置県まで続く。

江戸時代後期の絵図を見ると、本地点周辺は畠と書かれている^(iv)。

【明治時代以降】

明治二十二（1889）年、町村制施行にともない大町村は東鎌倉村（小町、雪ノ下、西御門、峠、淨明寺、二階堂、十二所、扇ヶ谷）に組み込まれ、明治二十七（1894）年には東鎌倉村と西鎌倉村（長谷、坂ノ下、極楽寺、乱橋材木座）が合併し、鎌倉町が誕生した。

調査地点周辺の地勢は、明治時代の前半までは江戸時代とあまり状況が変わっていなかったと考えられる。明治二十年代後半の横須賀線の開通や別荘の建設などにより、人口が増加し始めた。

○「今小路」、「長谷小路」について

遺跡名にもなっている「今小路」の初見は『快元僧都記』の天文八（1539）年十月条に見える^(v)。『新編鎌倉志』（貞享二年（1685）作成）によれば、「今小路」の範囲は寿福寺前の勝橋から翼荒神にかけてとの記述がある。また、翼荒神より南、長谷村までの路を「長谷小路」としている。『寿福寺領地図』（貞享年（1684～87）作成）を見ると翼荒神の南にある交差点から北を「今小路」、南を「長谷小路」と記している。近世に編まれた『鹿山略志』によれば弘安九（1286）年創建の万寿寺^(vi)が長谷郷にあつたとの記述がある。前述の建長三（1251）年二月十日条の甘繩辺の火事の範囲と重ね合わせて考えると、「長谷」という地名が、中世における「甘繩」と重なる部分が多く興味深い^(vii)。

註

- 上本進二氏によれば本調査点周辺は砂質平野・氾濫平野に相当する。
松島義章氏によれば、藪屋敷跡周辺の離水時期を約3,000年前としている。
- 上本進二「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子根戸遺跡（逗子市No. 100）』（板称）医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所 2000年
- 松島義章「鎌倉駅地下の地質について」『藤原駅遺跡』 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984年

2. 「今小路西遺跡」内御成小学校地点では中期（勝坂式、加曾利E式）3点、同社会福祉センター地点では後期（堀之内式？）1点、若宮大路周辺遺跡群内御成町788番3地点では土器片疊（中期末～後期初頭・加曾利E式～称名寺式）10点、千葉一地東遺跡では前期（諸磯b式）、中期（勝坂式、加曾利E式）、後期（加曾利b式）等の土器（片疊を含む）16点、石器類（黒曜石片、石皿、磨石）16点が出土している。これらのほとんどは、周辺の微高地から流下、混入したと考えられる。
- a. 赤星直志「1. 總文土器時代の鎌倉」『鎌倉市史』考古編 吉川弘文館 1959年
- b. 河野眞知郎ほか『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 1990年
- c. 宮田真ほか『今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地 御成町625番2地点）』鎌倉市教育委員会 1993年
- d. 菊川英政「若宮大路周辺遺跡群（御成町788番3地点）」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 1998年
3. a. 河野眞知郎『鎌倉市雪ノ下南御門遺跡』『第5回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』第5回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備会 1981年
- b. 馬瀬和雄『大倉幕府周辺遺跡群』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第2分冊）鎌倉市教育委員会 1998年
- c. 馬瀬和雄『大倉幕府周辺遺跡群』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団 1999年
4. 東大寺正倉院文書のうち、天平七（735）年作成の相模国丹戸粗交易帳に鎌倉郡鎌倉郷、尺度郷、荏原郷が記載されている。また、天平勝寶元（749）年銘の正倉院御物の古製には、鎌倉郡沼浜郷、方瀬郷と見える。
- 高柳光寿「第1章 鎌倉郡・鎌倉郷」『鎌倉市史』 総説編 吉川弘文館 1959年
5. 道構は8世紀前半から10世紀にかけてのものである（註b、c文献）。
6. 菊川英政「古代鎌倉の様相-奈良平安期における鎌倉郷中心域の変化-」『考古論叢神奈川』第6集 1997年
7. 註1文献a。
8. 鎌倉時代における北条氏邸宅の変遷については、貫達人氏、秋山哲雄氏の論文に詳しい。
- a. 贫達人氏「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号 神奈川県立金沢文庫 1971年
- b. 秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史學雑誌』第106編第9号 東京大学史學會 1997年
9. 「吾妻鏡」仁治三（1241）年3月17日条
「丑刻巽風烈。自前派人居失火起。限甘繩山麓。数百字炎。千葉介（時胤）旧宅。秋田城介（安達義景）。伯耆前司家等在其中云々。」
『吾妻鏡』における安達邸、千葉邸に関する記述は他にもあるが上記のみ抽出した。)
- 『見聞私記』承仁五（1297）年閏10月7日条
「自佐々目谷口火出来。甘繩等焼死。千葉（胤宗カ）屋形已下兵部大輔（甘繩頸実）、駿河守（北条政長）、近江守等屋形焼死。」
- 秋山哲雄氏は、甘繩を本拠とする北条（金沢）氏、安達氏、千葉氏がそれぞれ姻戚関係を結んで甘繩という完結した空間を形成していたと指摘している。
- 秋山哲雄「第1章 第1節 地理的・歴史的環境（若宮大路周辺遺跡群）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15（第1分冊）鎌倉市教育委員会 1999年
10. 「甘繩邊焼死、（中略）東若宮大路、南由比浜、北中下馬橋、西佐々目谷。相模右近村監時定、相模八郎時隆等第以下、數箇所災云々」の記事。
- 高橋慎一郎『中世の都市と武士』 吉川弘文館 1996年
11. 大町村は現在の大町一丁目へ七丁目、材木座一丁目の一部。由比ガ浜一丁目、由比ガ浜二丁目の一部、並木町、佐助一丁目、御成町の一部に相当する。
12. 天保三（1832）年作成の「扇ヶ谷村絵図」（『鎌倉の古絵図』II 鎌倉国宝館 1993年）。「今小路遺跡」内社会福祉センター地点では水田の跡が発見され、「佐助ヶ谷遺跡」内佐助一丁目450番地地点では花粉分析の結果から、稲作が行われていたことが指摘されている。
- 鈴木茂「佐助ヶ谷遺跡の花粉分析」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第2分冊）鎌倉市教育委員会 1998年
13. 「十月大 従去月廿八日扇谷今小路之番匠主計助、荒神之宮修補之。（後略）
これは道の名ではなく、字名としてのものである。
14. 『鎌倉鶯峰法流伝来記』に「甘繩無量寺從今ノ万寿寺はナリ」とある。執權北条貞時の創建と伝える。創建の前年は安達泰盛一族が平傾倒によって滅ぼされた常に騒動にあたる。安達氏の管轄であった無量寺院から、北条氏得宋家の寺である万寿寺に変わったとすれば興味深い。
15. 『新編鎌倉史』では甘繩神明社より西を長谷村、東から無量寺谷までを甘繩としている。

参考文献

- 『吾妻鏡』新訂増補国史大系 吉川弘文館 1993年
市島紀郎「今小路の地誌」『国寶史蹟』第46号 国寶史蹟研究会 1972年
『神奈川県皇國地誌・相模國鎌倉郡村誌』 神奈川県図書館協会 1991年

表1 出典

- a. 訂 2 c 文獻。
b. 訂 2 b 文獻。
c. 河野真知郎ほか『今小路西遺跡(御成小学校内) 第5次発掘調査概報』 今小路西遺跡発掘調査団編 1993年
d. 手塚直樹ほか『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団 1982年
e. 服部実喜・宍戸信悟ほか『千葉地東遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター 1986年
f. 訂 2 d 文獻。
g. 斎木秀雄・降矢順子「若宮大路周辺遺跡群」『第10回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉考古学研究所 2000年

※図1の地名等は「若福寺領地図」、「崩ヶ谷村絵図」(『鎌倉の古絵図』II 鎌倉国宝館 1993年)を参照した。

第2章 調査の経過



図2 グリッド設定図

平成12年5月に鎌倉市教育委員会による確認調査が行われ、その後、同年7月3日から発掘調査が行われた。調査区は掘削発生土の場内処理の関係上、一部狭めた。なお、本調査は確認調査の結果を受けて地表下約110~140cmまでを重機で除去したあと、掘削はベルトコンベアを使用せず、すべて人力によった。調査面積は約28m²。以下、調査の過程を記述する。

7月3日	表土掘削、機材搬入
7月4日	I 区調査開始
7月6日	I 区遺構面精査
7月7日	I 区全景写真撮影
7月10日	I 区グリッド設定、I 区平面実測
7月13日	I 区埋め戻し、II 区表土掘削(重機)
7月17日	II 区グリッド設定
7月18日	II 区遺構面精査
7月19日	II 区全景写真撮影、II 区平面実測
7月27日	撤収

第3章 発見された遺構と遺物

1. 中世

前述のとおり、地表面から約110~140cm下まで近現代の地表層で覆われていた。このため中世包含層は中世基盤層上から約10~20cmしか残っておらず、生活面は削平されていた。

遺構は建物2棟、柱穴列1列のほか、柱穴59口が確認された。

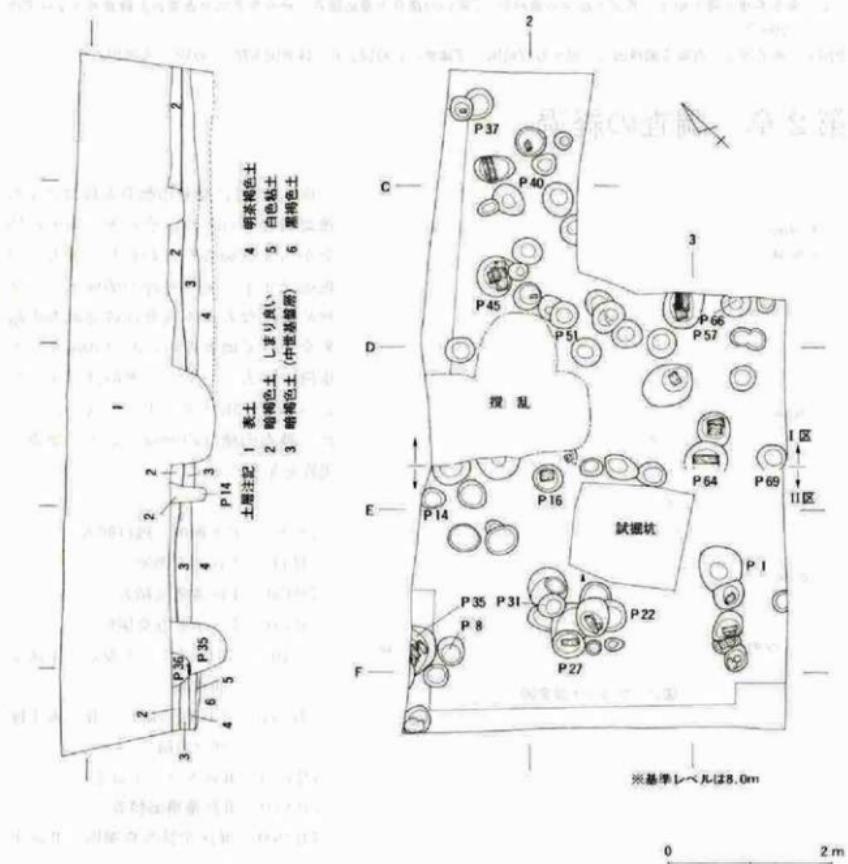


図3 遺構全図および土層堆積図

建物 1 (図 4)

1・2-B～Eグリッドに位置する。柱間は南北3間、東西1間で、芯心は東西約200cm、南北約190cmを測る。すべての柱穴から礎板は発見されなかった。遺構主軸方位はN-5° E。P8からかわらけ（ロクロ成形）1点、P14からかわらけ（ロクロ成形）1点、P17からかわらけ（ロクロ成形）5点、P51からかわらけ（ロクロ成形）3点が出土している。なお、P22・P40から遺物は出土していない。

建物 2 (図 4)

1～3-D～Eグリッドに位置する。柱間は南北1間、東西1間で、芯心は東西約200cm、南北約210cmを測る。柱穴すべてに礎板が据えられていた。遺構主軸方位はN-36° -E。P1からかわらけ（ロクロ成形）5点、常滑窯I類鉢1点、P16からはかわらけ（ロクロ成形）1点、P64からかわらけ（ロクロ成形）1点、常滑窯甕1点が出土している。なお、P27からは遺物は出土していない。図5-6・7はP1出土のもので、6はロクロ成形かわらけの口縁部片、7は常滑窯I類鉢の口縁部片。

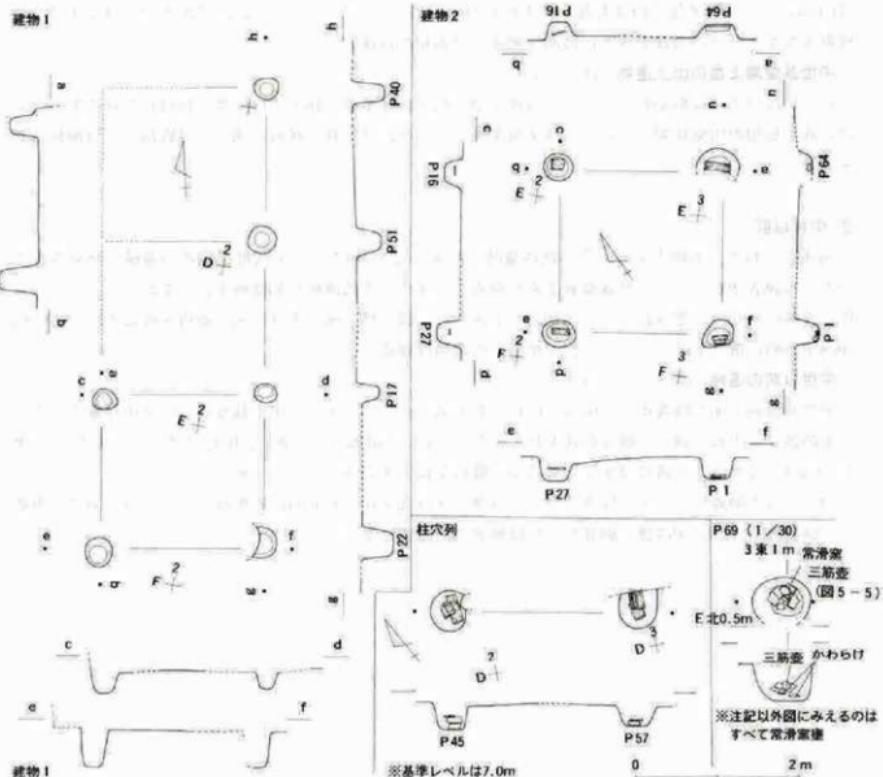


図 4 建物・柱穴列・P69

柱穴列（図4）

礎板の出土状況が相似する柱穴2口を「柱穴列」として報告する。調査区中央の1~3-Cグリッドに位置する。柱間は1間で、芯心は約220cmを測る。P45には4枚、P67には3枚の礎板が据えられていた。P45からはかわらけ（すべてロクロ成形）18点、銅錢1点、古代土師器1点が出土しており、P67から遺物は出土しなかった。図5-8は銅錢の元符通寶。

P69（図4）

3-Dグリッドに位置する。上場径36cm、確認面からの深さ16cmを測る。底にはロクロ成形のかわらけ破片3点、常滑窯の胴部片5点、常滑窯三筋壺の肩部片1点が据えられていた。かわらけ、常滑窯とも同一個体ではなかった。かわらけ以外の遺物はすべて内面が上に向いていた。これの遺物を礎板の代用として利用したのか、埋納したのかは不明である。図5-4はロクロ成形の小型かわらけ。5は常滑窯三筋壺の肩部片で筋は複線である。

上記以外遺構の出土遺物（図5-1~3、9~12）

1はP51出土のロクロ成形の小型かわらけ。2・3はP66・P31出土のロクロ成形の大型かわらけ。9・10はP35出土で、9は平瓦、10は丸瓦。いずれも凸面縄目叩きである。11・12はP37出土で、11は手づくね成形大型かわらけの口縁部片。12は南伊勢系土師器鍋の口縁部片。

中世基盤層上面の出土遺物（図5-13~23）

13~17はロクロ成形かわらけで、13は極小型、14・15は小型、16・17は大型。18はロクロ成形かわらけの底部転用の円盤状製品。19~22は常滑窯で、19~21は口縁（縁帶）部、22は底部。23は銅錢で皇宋通寶。

2. 中世以前

前述のとおり、本地点北の「今小路西遺跡」内図1-2・3地点では古代郡衙関連の遺構が発見されている。本調査地点でも、中世基盤層上面を調査中に多くの古代遺物が基盤層中に含まれていたため、古代の遺構の存在が予想された。このため、I区中世面調査終了後、中世以前の遺構を確認するため、約20cm全体的に掘り下げた。しかし、中世以前の遺構は確認できなかった。

中世以前の遺物（図5-24~30）

中世基盤層上面を精査中、土師器の破片が若干量出土した。また、中世基盤層（暗褐色粘質土）中に土師器・須恵器の細かい破片が含まれていた。内訳は土師器57点（甕47、壺3、不明7）、須恵器5点（甕4、壺蓋1）である。小破片ばかりであるが、概ね奈良・平安時代のものであろう。

24~27は土師器で、24・25は壺、25・27は甕。26は底部片で外底面に木葉痕がある。28~30は須恵器で、28は壺蓋、29・30は甕の胴部片。30は軟質で淡橙色を呈する。

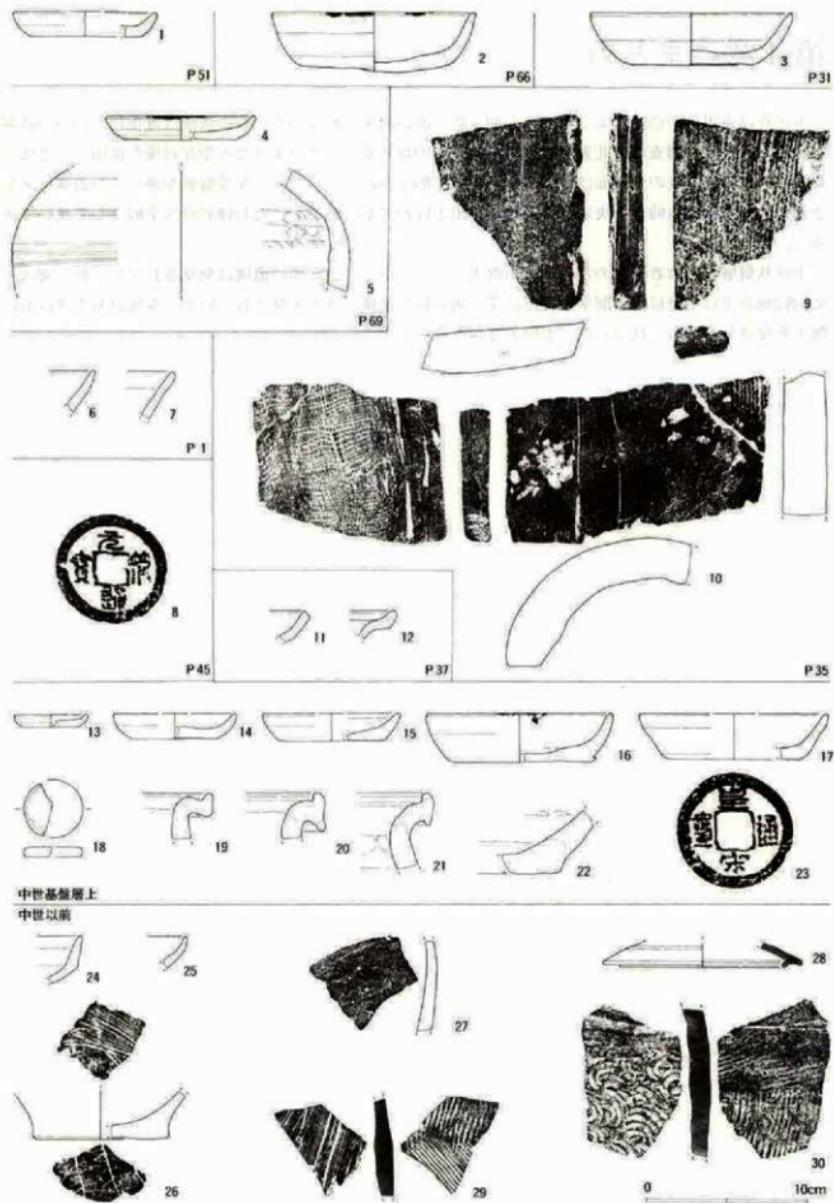


图 5 出土遗物

第4章 まとめ

本地点は近現代の造成によって中世前期以降の面が削平されていた。この造成は近現代のいつの時期か分からぬが、調査地点北東（JR鎌倉駅周辺）の数地点でもこのような大型泥岩塊を使用した造成が見受けられる。中世の生活面はこの造成によって削平されていたが、中世基盤層を掘りこむ遺構が発見された。遺構内から時期を決定づける遺物の出土はわずかであるが、概ね鎌倉時代全般として良いであろう。

中世基盤層には若干量の古代遺物が混入していたが、中世以前の遺構は発見されなかった。御成町625番2地点では中世以前に削平を受け、深く掘られた遺構のみが発見されている。本地点も中世以前に削平を受けたのかもしれないが、不明と言わざるをえない。



図版五は 378

図版番号	遺物番号	種別	計測値(単位/cm・括弧は復元値)	観察事項
図5	1	かわらけ	口径(8.7) 底径(7.0) 器高1.5	成形:ロクロ 外底:回転糸切り。スノコ底 色調:灰褐色
	2	かわらけ	口径12.5 底径9.1 器高3.7	成形:ロクロ 外底:回転糸切り。スノコ底 色調:褐色
	3	かわらけ	口径12.3 底径5.7 器高3.2	成形:ロクロ 外底:回転糸切り 色調:褐色
	4	かわらけ	口径9.1 底径7.0 器高1.5	成形:ロクロ 外底:回転糸切り 色調:淡褐色
	5	常滑窯 三筋壺	胴部最大径(21.0)	蓋:複縁 磁土色調:淡灰色 器表色調:暗茶褐色
	6	かわらけ	—	色調:灰褐色
	7	山茶碗	—	色調:淡灰色
	8	鍋鉢(元符通販)	—	初期年:北宋1098年 書体:篆書
	9	平瓦	厚さ2.7	凸面:繩目叩き。ハナレ砂付着 側面:ヘタ切り 色調:灰白色
	10	丸瓦	厚さ2.8	凸面:繩目叩き 回面:布目底 磁土色調:灰色 表面色調:深灰色
	11	かわらけ	—	成形:手づくね 色調:灰褐色
	12	南伊勢系土師器鍋	—	色調:暗灰褐色
	13	かわらけ	口径(4.4) 底径3.5 器高1.8	成形:ロクロ 外底:回転糸切り。スノコ底 色調:褐色
	14	かわらけ	口径(7.5) 底径(5.2) 器高1.6	成形:ロクロ 外底:回転糸切り。スノコ底 色調:淡褐色
	15	かわらけ	口径(8.4) 底径(6.6) 器高1.8	成形:ロクロ 外底:回転糸切り。スノコ底 色調:灰褐色
	16	かわらけ	口径(11.5) 底径(9.1) 器高3.1	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ底 色調:褐色 口縁部にタール付着
	17	かわらけ	口径(11.5) 底径(8.2) 器高2.9	成形:ロクロ 外底:回転糸切り、スノコ底 色調:淡褐色
	18	円板状製品(軸用品)	径(3.7) 厚さ6.6	色調:灰褐色 備考:ロクロ成形かわらけの底部を転用
	19	常滑窯 銀	—	磁土色調:淡褐色 器表色調:茶褐色
	20	常滑窯 銀	—	磁土色調:灰褐色 器表色調:茶褐色
	21	常滑窯 銀	—	磁土色調:灰褐色 器表色調:茶褐色
	22	常滑窯 銀	—	磁土色調:灰褐色 器表色調:暗褐色
	23	銅鏡(元符通販)	—	初期年:北宋1098年 書体:篆書
	24	土師器 坏	—	色調:赤褐色 備考:器表剥落している
	25	土師器 坏	—	色調:赤褐色 体部外表面下:ヘラケズリ
	26	土師器 銀	底径(8.5)	色調:淡茶褐色 外底面:木裏痕、煤付着 内底面:ハケ目状調査
	27	土師器 銀	—	色調:淡褐色 内面:ハケ目状調査
	28	須恵器 坏蓋	径(12.5)	色調:灰色
	29	須恵器 銀	—	色調:灰色 外面:平行叩き
	30	須恵器 銀	—	色調:淡茶褐色 外面:平行叩き 内面:青面波文 備考:磁土灰質

表2 遺物観察表

(0-2.5)	粘土陶器	磁土陶器	土器・土製品	瓦類	鍋鉢	金剛製品	スラグ	石製品	骨製品	木製品	漆器類	自然遺物(植物)	粘土片数
298	2	35	2	3	2	0	0	0	0	0	0	1	345
86.38	0.869	10.344	0.869	0.869	0.18	0	0	0	0	0	0	0.29	100%

表3 中世遺物総破片点数

I 区全景 (西から) ▶



◀ II 区全景 (西から)



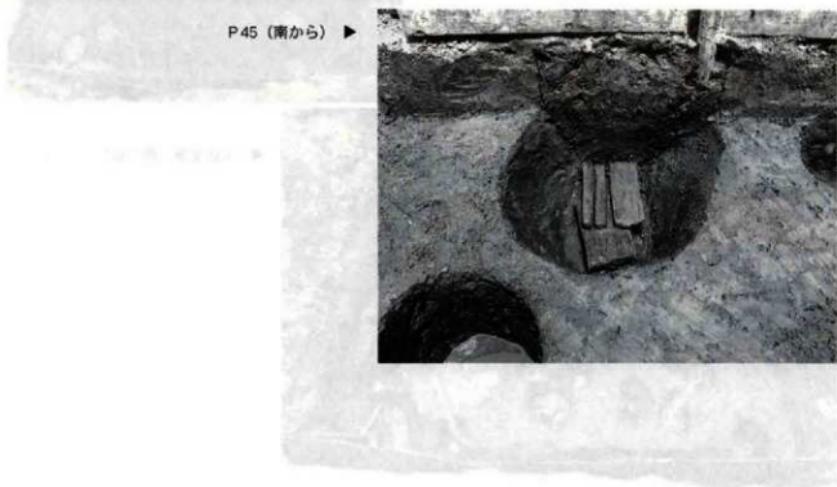
P 69 (北から) ▶



図版2



◀ P57 (東から)



P45 (南から) ▶



佐助ヶ谷の歴史は古く、その名は、土器の出土する、瀬戸内海側の海岸にあつて、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。この地は、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。

さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡 (No. 245)

佐助一丁目476番1

佐助ヶ谷の歴史は古く、その名は、土器の出土する、瀬戸内海側の海岸にあつて、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。この地は、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。

佐助ヶ谷の歴史は古く、その名は、土器の出土する、瀬戸内海側の海岸にあつて、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。

佐助ヶ谷の歴史は古く、その名は、土器の出土する、瀬戸内海側の海岸にあつて、古事記記載の「佐助山」の地名からとる。佐助山は、瀬戸内海の島の名前で、現在は、佐助町の名前である。

例　　言

1. 本書は神奈川県鎌倉市佐助一丁目476番1における、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査報告書である。なお、調査地点は鎌倉市佐助ヶ谷遺跡（No.245）に含まれる。
2. 調査は国庫補助事業調査として行われた。
3. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成12年7月19日より平成12年7月31日にかけて実施した。発掘調査面積は約40m²である。
4. 現地調査・資料整理は以下のメンバーで行った。
調査担当者 鎌倉市教育委員会
主任調査員 斎木秀雄
調　　員 降矢順子、三ツ橋勝、川又隆央・松田理枝、深川恵子、森かおり、根本睦子、矢能明子、押木弘己
調査協力者 鎌倉市シルバー人材センター
5. 本報告の執筆は第1章～第3章までを降矢順子が、第4章は降矢と斎木秀雄が担当し、編集は降矢が行った。
6. 図版作成、遺物実測、トレースは降矢順子、三ツ橋勝、押木弘己、根本睦子が行った。
7. 本報に使用した遺構写真は斎木秀雄、三ツ橋勝、松田理枝が、遺物写真は川又隆央が撮影したものである。
7. 図版縮尺 遺構全体図1/60・個別遺構1/30・出土遺物1/3
遺構図版 水系高は海拔を示す。
遺構図版 鎌倉石■、土丹■、焼土■。法量表の()は復元数値である。
8. 本報に関わる出土品・記録図面などは一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	202
第2章 調査の経過と堆積土層	204
第1節 調査の経過	204
第2節 堆積土層	205
第3章 検出された遺構と遺物	206
第1節 第1面の遺構と遺物	206
第2節 第2面の遺構と遺物	208
第4章 まとめ	214

挿図目次

図1. 鎌倉市全国と調査地点位置図	203
図2. グリット割付図	204
図3. 堆積土層図	205
図4. 1面全体図	207
図5. 1面出土据壺	208
図6. 1面出土遺物	209
図7. 2面全体図	210
図8. 2面出土遺物	212

図版目次

P L 1. 1 1面全景（南から）	217
2 2面全景（北から）	217
P L 2. 1 調査区近景（北東から）	218
2 調査区（東から）	218
3 西壁面上土層堆積状況	218
4 土壤検出状況	218
5 土壌完掘状況	218
6 据壺・石積・土壤検出状況 （北から）	218
P L 3. 1 据壺検出状況（南から）	219
2 鎌倉石検出状況	219
3 据壺検出状況	219
4 同掘り方	219
5 土壌・石積・据壺（南から）	219
6 東西トレントチ土丹版築状況	219
P L 4. 出土遺物	220

表目次

表1 出土遺物法量表	213
------------	-----

第1章 調査地点の位置と歴史的環境

調査地点はJR鎌倉駅西方にある「佐助ヶ谷」内の開口部付近鎌倉佐助一丁目476番1に位置する。谷内には現在、佐助稻荷神社、葛原岡神社、銭洗宇賀福神社（通称銭洗弁天）等がある。已の日に賑わう銭洗宇賀福神社は、本来鎌倉市扇ヶ谷の八坂神社の末社であったが、独立して（昭和45年）現在に至る。谷奥の葛原岡神社は現在「源氏山公園」の一画にあり、明治22年に日野俊基を祭神として創建された神社である。又、佐助稻荷神社は社伝によれば「神龜が翁の姿で現われて佐殿源頼朝に平氏討伐の旗上げをすすめ頼朝を助けたので、佐助」というと伝えている。中世の佐助ヶ谷については「佐介」と言ったようだ。これは『吾妻鏡』の北条時房（1175～1240）に関する記事に初見する。時房は北条政子の子で「佐介氏」を名乗り、大仏殿と呼ばれている。又、その子北条時盛（1197～1277）は佐介に屋敷を持ち、北条朝直（1206～1264）は佐介に悟真寺を創建している。朝直は後の「大仏氏」の祖である。ここに出てくる「佐介」が現在の「佐助」であると考えられる。「佐介」の起こりは、前出の佐助稻荷の社伝によるものと、上総・千葉・常陸の三介の屋敷が谷内にあったという説もある。いずれにしても「佐助」は、鎌倉七口の一つである化粧坂の南に位置する谷であり、有力北条氏が居を構えていた場所と考えられる。

鎌倉幕府が滅んだ後は、上杉憲基（山内・上杉氏）の邸が谷内に在ったようだ。しかし、応永23年（1416）の上杉禅秀（氏憲）の乱により焼き払われている。この後は、鎌倉自体が都市としての機能を失っていくため、佐介も衰退していったと考えられる。谷内の寺院は『鎌倉廃寺事典』（1980）では国清寺（禅宗・上杉憲顧建立）、悟真寺（淨土宗・北条朝直建立）、蓮花寺（宗旨未詳・光明寺の元）の他に薬師堂、宝蓮寺、松谷寺、佐介谷禪房、七観音、天狗堂、北斗堂、法界界、法性寺の名前があげられている。しかし、ほとんどの寺社は所在地が特定できない。わずかに現在に残る字名をたよるだけである。

調査地周辺の発掘調査はあまり実施されていない。谷内では本地点以外に8ヶ所調査が実施されている。いずれも小規模な調査であるが、谷内の様相を知ることができる。次に調査地点について簡単に述べる。地点2は佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務所用地）多数の板壁掘立柱建物址、道路とそれに面して家が並ぶ様相、「倉」、木組みの池、基壇、戸門址などが検出され。成立当初から寺院と大きな関わりがあった遺跡であろうと推定されている。遺跡の年代観は13世紀後半～15世紀後半頃とされている。第4地点は「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」で急傾斜崩壊対策工事に伴うやぐらの発掘調査が行われている。3度調査され、2号やぐらは道糞升状遺構からは7点の藏骨器が出土している。白磁水注1、瀬戸四耳壺2、常滑壺3、常滑小甕1など他に例がない。第5地点は小支谷内の奥まった地点で溝、柱穴、建物等が検出され、特に谷内平坦面と約16mの比高差のある最奥部平坦面（海拔24m）から検出された土壙群は「粘土探査壙」と考えられており、遺跡の年代観は鎌倉時代後半～室町時代初期頃とされている。第6地点は佐助ヶ谷遺跡24地点で5時期に渡る生活面が確認され、建物群などの検出される遺構の年代観は14世紀中～15世紀前半頃とされている。第7地点は、佐助ヶ谷遺跡25・27地点で、24地点の周辺の施設であろうという異なる様相を見せながらも1つの遺跡としてとらえることができるところである。遺跡の年代観は、13世紀中頃～14世紀中頃とされている。谷外では尾根を越えた地点9・10で鎌倉郡衙および関連遺構が検出され、中世以前の様相が明らかにされつつある。又、9地点では中世の屋敷、もしくは寺院の可能性があるといわれている。

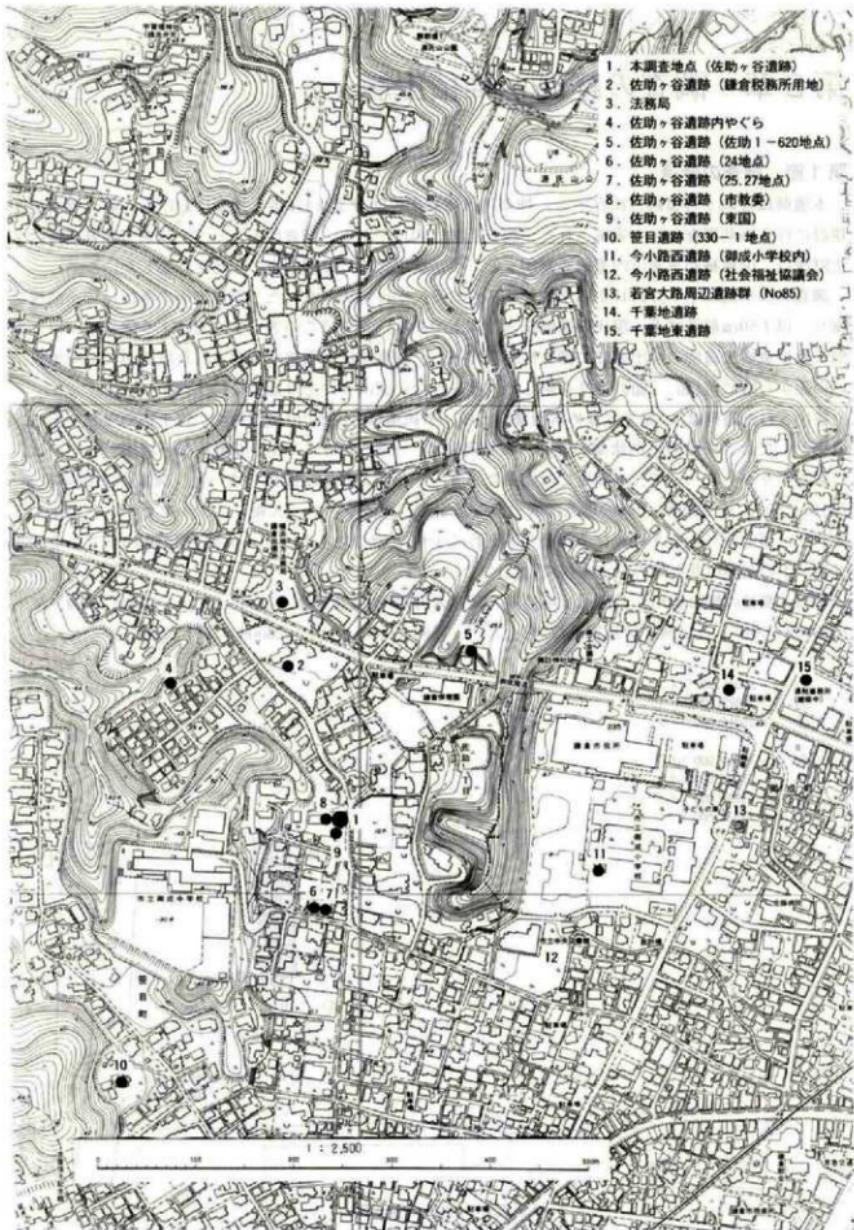


図1 鎌倉市全図と調査地点位置図

第2章 調査の経過と堆積土層

第1節 調査の経過

本遺跡は佐助ヶ谷遺跡に所在する、神奈川県鎌倉市佐助一丁目476番1地点における、個人専用住宅建設に伴う事前調査として実施された。調査面積は40m²である。調査にあたって、鎌倉市教育委員会文化財課は、国庫補助事業市内遺跡発掘調査として、齋木秀雄に発掘調査の担当を依頼した。

調査は、平成12年7月19日から平成12年7月31日にかけて実施された。現地表面の海拔は10m前後を測り、以下50cm前後は近・現代の遺物を含む客土である。調査はこの客土を人力により除去し、以下掘削・及び遺構・遺物の検出並びに調査作業を行った。調査では、明確に確認された版築面に、現地表に近い面から順に第1面、2面の番号を附した。確認のない面については番号を付けなかった。

検出された遺構は、1面では埋め常滑甕、土壙、石組遺構、2面では礎石建物、焼土範囲などである。遺物としては、中世の国内諸窯の製品、貿易陶磁器、土器（かわらけ）、石製品などが出土している。

調査グリッドについて、本調査で設定したグリッドラインは国土座標を用いた。調査区北西隅のx-75916.000、y-26026.000の地点にA-1杭を設定し、東西ライン（X軸）にアルファベットを北からA～E・南北ライン（Y軸）に算用数字を西から1～3と附した。各グリッド間の距離は4mである。各グリッドの名称は北西隅の交点を採用した。

なお、測量の際に使用した原点は座標系AREA A9鎌倉市4級基準点D246（X：-75934.769、Y：-26009.750）、及び同4級基準点D247（X：-75961.893、Y：-26009.257）である。

- ① y-26026.000ライン
- ② y-26022.000ライン
- ③ y-26018.000ライン

- ④ x-75920.000ライン
- ⑤ x-75924.000ライン
- ⑥ x-75928.000ライン
- ⑦ x-75932.000ライン



図2 グリッド割付図

第2節 堆積土層

調査地点の現地表面海拔は m前後であり、西から東へ緩やかに下がる傾斜をしている。調査地の東には市道があり、その東には佐助川が南に向かって流れている。調査地点の調査区東壁から佐助川までは約 mを測る。そのため、堆積土の傾斜は緩やかに東に向かって下っている。

本調査地では、8層の堆積が確認された。そのうち3層は土丹を叩き固めた版築面と考えたが、第2層は撹乱されている部分が多く、中世の版築であるという積極的な証拠を得ることができなかった。そのため、調査では少なくとも2期にわたる生活面（版築面）を確認できた。

第1層 表土（灰黄褐色土） 粒径 5~20cm 大の土丹塊を含む灰黄褐色土。層厚 20~40cm を測る。北側では、本土層が調査区東側に大きく落ち込み、底面の確認できない落ち込みを形成している。

第2層 暗褐色粘質土 土丹塊粒径 2~5cm、土丹粒を多く含む繊維のある層。版築事業層とも考えられるが明確ではない。

第3層 暗褐色粘質土 2層より土丹塊は小さく、土丹粒も若干少なくなる。繊維・粘性は強く、かわらけの細片・炭化物を多く含む。

第4層 黄灰褐色土（1面事業層） 土丹塊粒径 10~20cm を數きつめたしまりのある版築層。

第5層 暗褐色粘質土 土丹塊・かわらけ・砂を多く含み、繊維強度。

第6層 黑色粘質土 かわらけの細片を数きつめ、炭化物を多量に含み粘性強い。

第7層 赤褐色土 烧土層

第8層 黄灰褐色土（2面事業層） 粒径 10~30cm 大の土丹塊を敷き詰め水平版築がなされている。

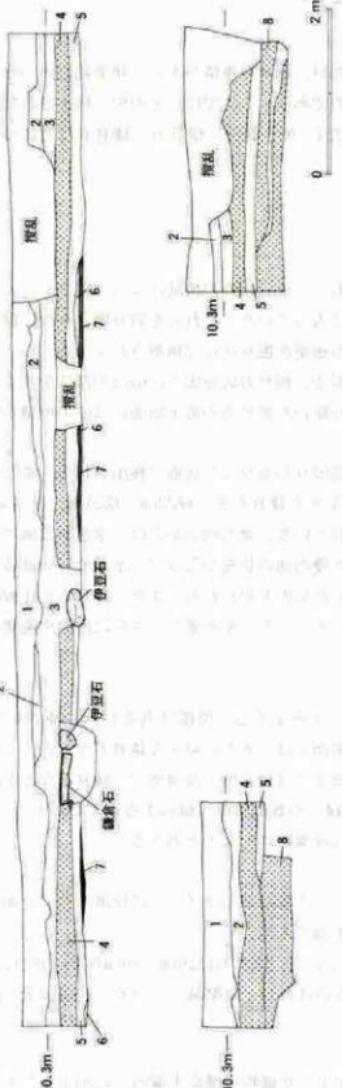


図3 堆積土層図

第3章 検出された遺構と遺物

本地点の調査は、個人住宅の建築に伴うものであったが、色々な事情があり、建築範囲内の極部分的な調査であった。そのため、検出された遺構も極部分的である。ここでは、その中で検出された据堀、土壌、石組み遺構、かわらけ集中部分（細かくぐだいた）、焼土範囲、伊豆石、鎌倉石などについて記す。

第1節 1面の遺構と遺物

据堀

調査区の北側中央に位置し、東西方向に掘り込みをもつ。近世以降の擾乱によって壊されているため覆土上部には瓦、近世陶器、ガラス製品などが混在して入っていた。それらを取り除いた後に据堀の上部が確認された。検出面の標高は10.15mで、泥岩による版築を掘り込んで構築されていた。

据堀の掘り方の規模は東西90cm、南北80cmの不整円形で、掘り方底面までは60cmの深さを測る。覆土は酸化により赤色味を帯びている。据堀、鎌倉石を取り除いた掘り方の最下層面には砂の堆積が僅かに確認された。

堀は常滑の大堀で正位置に据えられ、内部からは胴部破片が重なった状態で検出された。またその上部中央部分には縦53cm、横23cm、厚さ16cmの長方形を呈する鎌倉石と、縦22cm、横21cm、厚さ9cmの方形を呈する鎌倉石の2石が、ほぼ水平に並んで検出されている。堀の内部からは、常滑胴部破片は出土しているが、口縁部辺は全く出土していない。残された堀内面の状況からみて、水溜め等の液体容器として機能していたものを、その後使用しなくなり廃棄したものと思われる。また、鎌倉石が比較的水平状況であること、堀内部の覆土に炭化物が検出されていることなどを考慮し、さらに用途や廃棄後の状況について検討が必要かと考える。

土壌

調査区の南側西壁際に位置している。平面形態は半円形を呈する。規模は南北1.2m、東西0.9m、深さ0.5mを測る。検出面の標高は10.20m前後で、版築事業面とほぼ水平に扁平な鎌倉石を置き、これが部分的だが土壌に蓋をしているように見える。その下の覆土には泥岩塊、常滑堀片、鎌倉石などが混在する。これらは上部に鎌倉石が集中し、その下に常滑堀口縁片が数個東側へ傾斜するように出土していた。接合できるものが比較的少ないことから考えてこれらは廃棄されたものと考える。

石積み遺構

調査区中央部や西側寄りに、据堀と鎌倉石を混在した土壌を結ぶライン上に位置する。一面上の包含層を取り除いた段階で検出された。検出面の標高は9.8mである。

石積みは鎌倉石で、東に面を捕えて石垣状に積まれていた。鎌倉石は20cm×30cm程度で、長さは0.75mであり、確認出来た高さは3段である。検出した鎌倉石のはほとんどは摩滅している。性格は全く掴めなかった。

第1面出土の遺物

表土掘削面から1面遺構確認面へ包含層までの間に出土した遺物、擾乱土壌内から出土したものも含めて出土総点数は91点である。なかでも近世瓦は多量に出土している。出土遺物はかわらけ大5点、小3点、山茶碗口縁部1点、常滑胴部11点が表土～1面検出面までに出土。かわらけ大20点、小1点、常滑胴

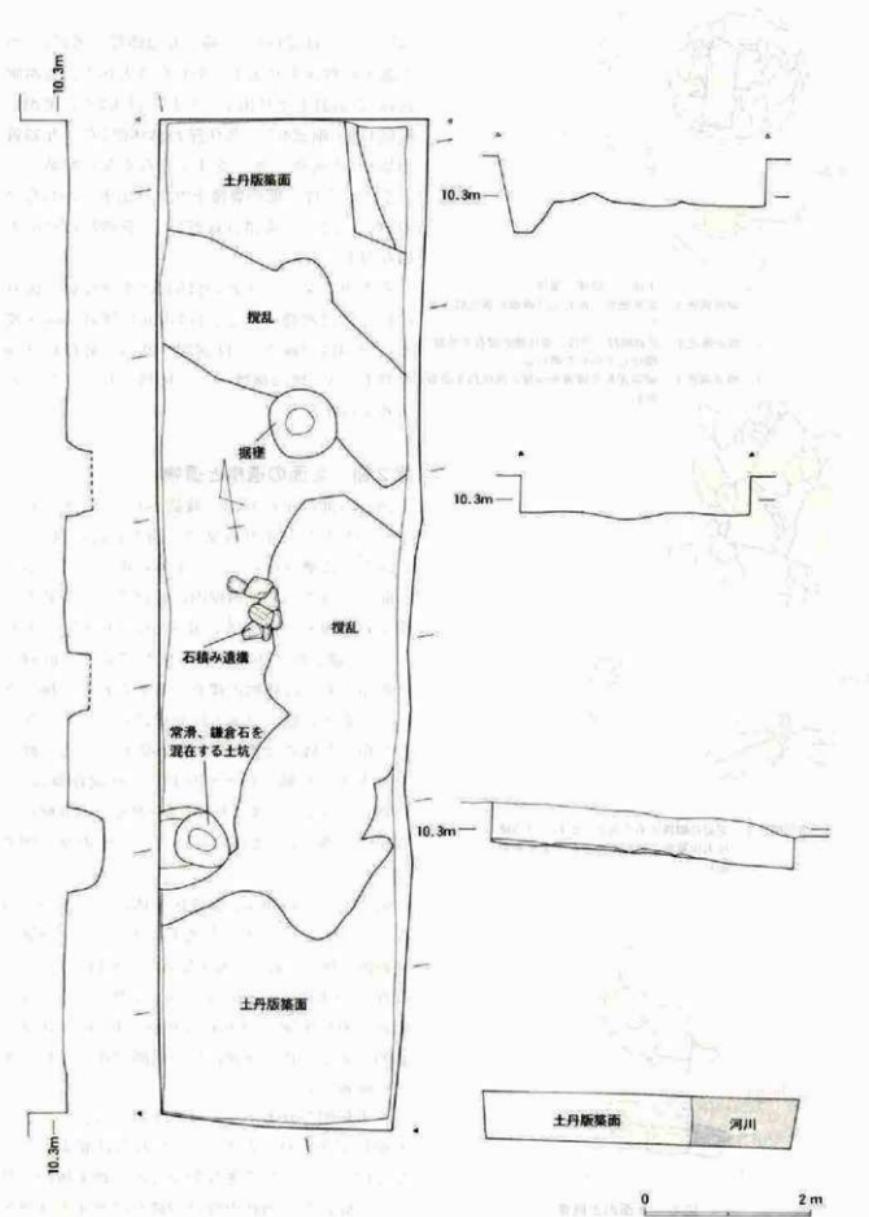


図4 1面全体図

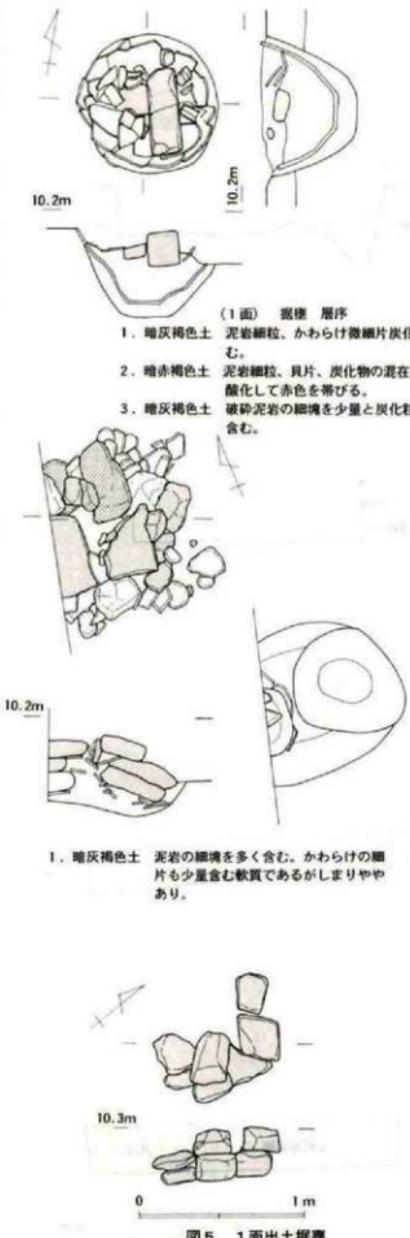


図5 1面出土据壺

部11点、口縁部1点、白磁口元皿体部～底部1点が1面土丹敷面より出土。かわらけ大10点、常滑胴部1点が面直上より出土。かわらけ大3点、常滑口縁部4点、胴部4点、魚住捏ね鉢体部1点、瓦器質手焙り1点火熱を強く受けてもろくなり摩滅しているこれらは、埋め甕覆土内より出土。かわらけ大2点、小1点、常滑口縁部1点、胴部3点が1面石積み内より出土。

その中で図示できたのは5点にすぎない。図6の1～5は常滑窯である。1は復元口径30.8cmを測る。2～4は口縁部、5は胴部～底部で底径42.0cmを測る。5の壺は据壺として使用されていたものと考えられる。

第2節 2面の遺構と遺物

2面は1面の下約30cmで確認された。1面と同じしっかりととした土丹版築で、面の状況は良い。2面は火災に遭ったらしい、全体に赤化している。

面上ではこの他に西壁内に延びていく鎌倉石と安山岩川原石、直線的に並ぶ2石の安山岩川原石と1つの礎石据え方等が検出されている。直線的に並ぶ川原石は建物の礎石と考えられる。検出された一番北の礎石は調査区北壁に近く、次の据え方を超えた礎石は西壁に一部が隠れている。礎石の大きさは長軸で40cm程を測り、柱間距離は2石の礎石から据え方まで約285cmを測る。南北軸は、真北から西に25度振れている。全体規模は掴めなかつた。

面上の焼土範囲は、調査区全体に広がるが、調査中に失われてしまった為もあるが、大小6個所の範囲で検出された。大きな広がりを持つものは、調査区の北側西壁の90cm×70cm、90cm×220cmの範囲、東壁南側の280cm×180cm、40cm×110cmの範囲である。特に南側は広い範囲で検出され、赤化も顕著である。

焼土範囲の直上あるいは焦土内には、かわらけの繊片が多く見られたが、「かわらけ溜まり」として捉えることができなかつたので地業層の一部として捉えた。前述の建物の礎石は表面が高熱を

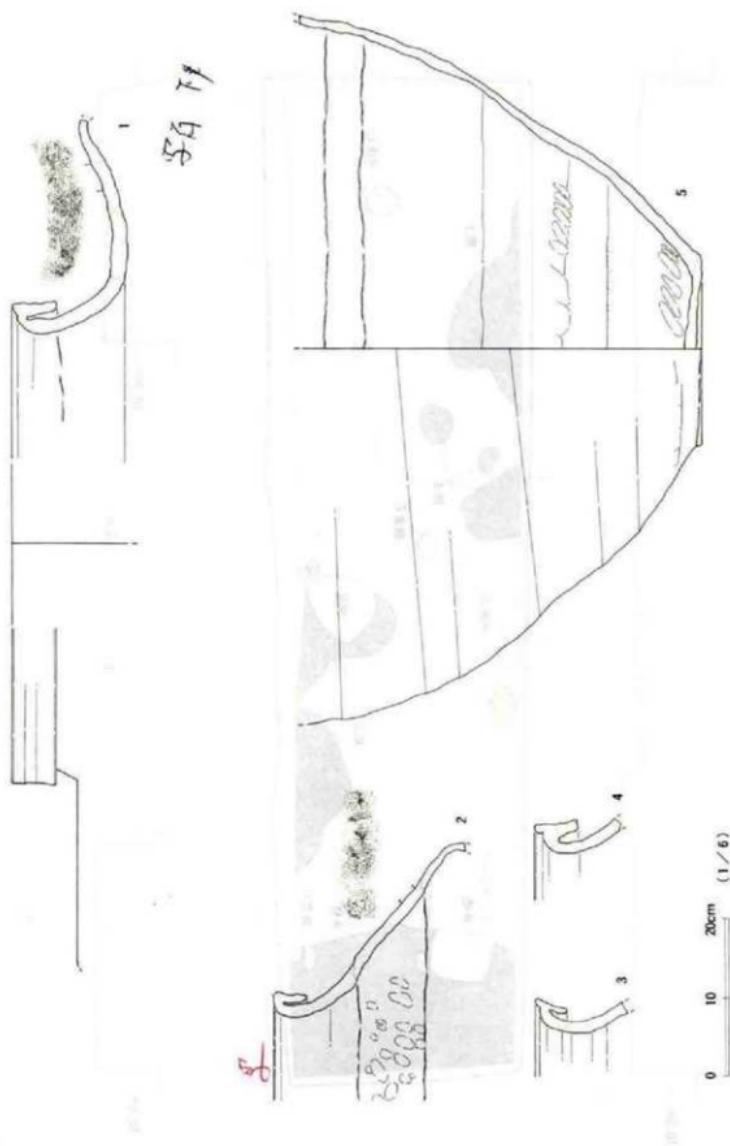


图 6 1面出土遗物

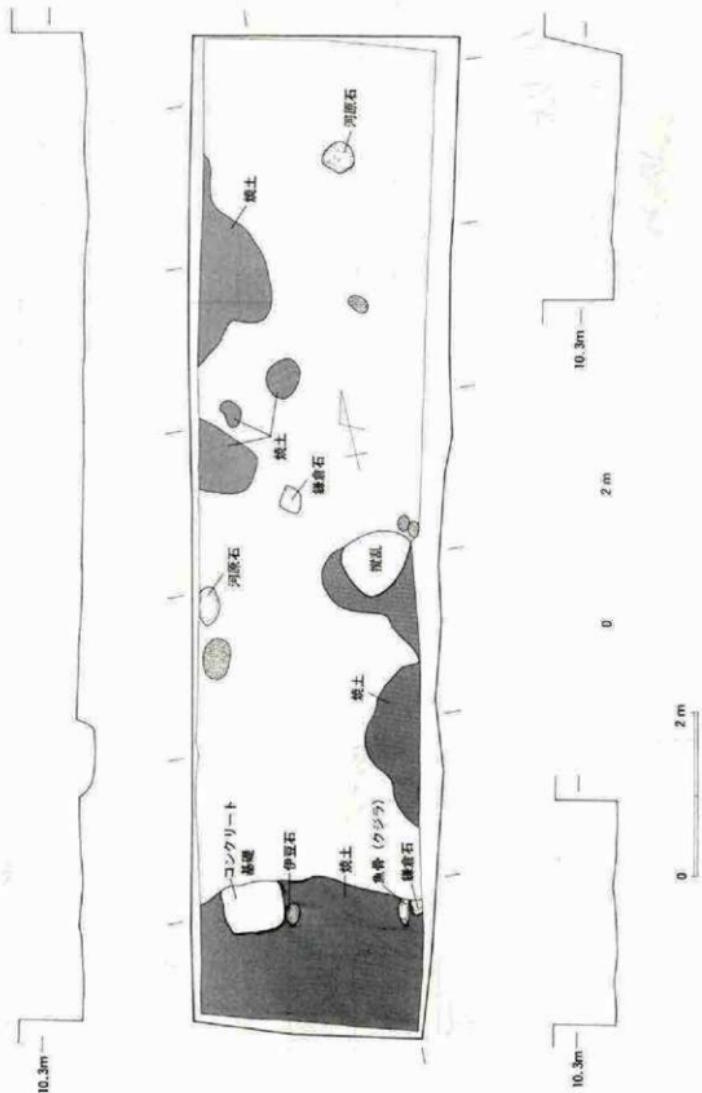


図7 2面全体図

受けて、剥離している。おそらく、火災にあった面と同時期の建物であろう。また面上の東壁際でくじらの骨が出土している。骨は両面を切断加工し、平滑にしている。焼土範囲面の標高は9.8mである。

調査終了後、調査区東側へ60cm×3.8mのサブトレンチを入れて版築面の延長部を確認した。その結果、河川と思われる落ち込みは、調査区西壁より6.4mで確認出来た。

第2面出土の遺物

第2面遺構確認面～包含層までの間に出土した遺物をとらえた。貿易陶磁器、瀬戸、常滑などの国内産諸窯製品、かわらけ、瓦質土器、石製品などが出土している。かわらけについては全てロクロ成形である。出土總点数は 点である。出土遺物は、かわらけ大40点その内薄手丸深タイプ8点、小3点、常滑甕2点、瓦器質手焼り3点が2面直上北側より出土。かわらけ大228点、その内薄手丸深タイプ15点、中2点、小63点、青磁香炉1点、青磁鉢1点火熱を受けて色調白っぽい、常滑甕天箱10、常滑捏ね鉢口縁部1点、白磁印花紋皿1点、瀬戸瓶子口縁部1点、鉢皿1点、入子1点、山茶碗窯捏ね鉢2点、瓦器質手焼り8点火熱を受けてもろい、黒縁瓦器質碗体部～底部1点、滑石鍋1点、砥石1点が2面直上南側部分より出土。常滑甕が多量に出土している。常滑片口鉢底部1点、山茶碗窯捏ね鉢1点が2面下より出土している。

その中で図示できたのは33点である。図8の6は青磁香炉口縁部、7は瀬戸鉢皿底部使用痕なし、8は山茶碗窯捏ね鉢体部～底部にかけて、9～23はかわらけである。そのうち9～12は大、13・14は中、15～23は小である。13・14は口縁部から体部の内外面の一部にススが付着し、灯明皿として使用痕あり、15・23は口縁部の一部が打ちかれてある。24は瓦器質土器手焼り口縁から胴部、25は砥石で仕上砥、産地は鳴滝窯^{なりたきや}、26は白磁印花紋皿口縁部、27常滑甕肩部、28から35はかわらけである。29・30は大、31から35は小である。これらは2面直上南側部分より出土している。37は山茶碗窯系捏ね鉢口縁部、38は常滑捏ね鉢底部2面下より出土。

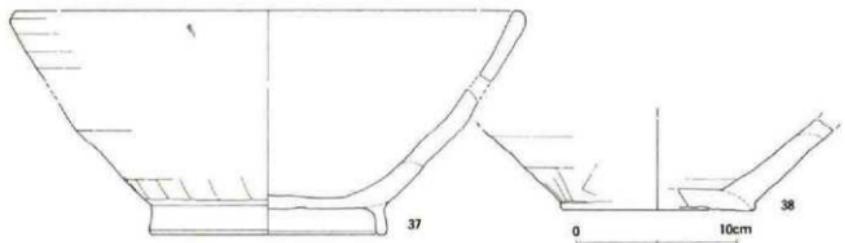
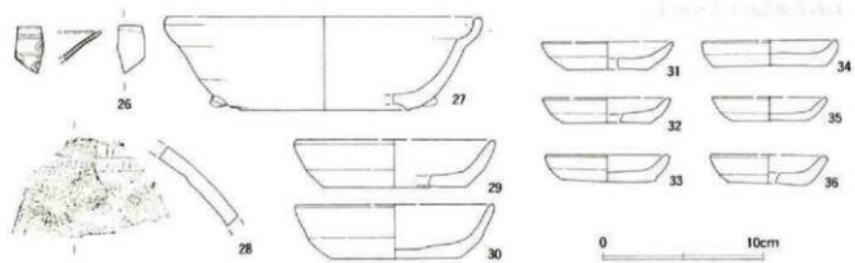
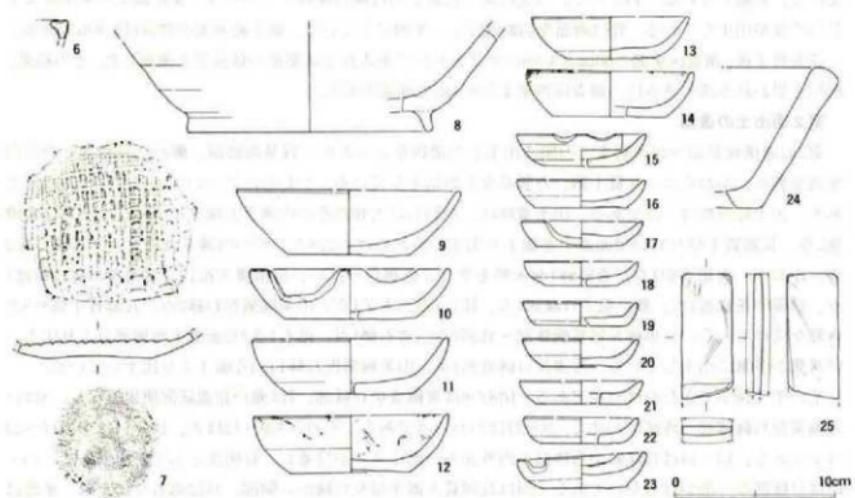


图 8·2 出土遗物

表1 出土遺物法量表

* () 内は復元実測

No.	種別	法量 (cm)		No.	種別	法量 (cm)		
1面出土遺物								
1	常滑甕	(59.3)		2	常滑甕			
3	常滑甕			4	常滑甕			
5	常滑甕		(23.0)					
2面出土遺物								
6	青磁香炉			7	瀬戸御皿		6.5	
8	山茶碗		(14.9)	9	かわらけ	(13.6)	4.0 (7.4)	
10	かわらけ	(12.2)	3.1	(8.2)	11	かわらけ	(12.0)	3.5 (7.7)
12	かわらけ	(11.9)	3.5	(7.3)	13	かわらけ	(9.6)	2.6 (5.3)
14	かわらけ	(10.2)	(2.8)	(7.0)	15	かわらけ	(7.9)	2.0 (4.7)
16	かわらけ	(7.8)	1.7	(5.7)	17	かわらけ	(7.4)	1.6 5.3
18	かわらけ	(7.0)	1.5	(4.4)	19	かわらけ	(7.0)	1.5 (5.6)
20	かわらけ	(7.0)	1.5	(4.8)	21	かわらけ	(7.5)	(1.4) (5.6)
22	かわらけ	(6.9)	(1.6)	(4.6)	23	かわらけ	7.8	2.3 5.2
24	手焼り		8.7		25	砥石		
26	白磁皿			27	瀬戸 折縁皿	(19.2)	5.8 (10.4)	
28	常滑甕			29	かわらけ	(12.1)	(3.0) (8.7)	
30	かわらけ	(12.1)	3.3	7.8	31	かわらけ	(8.0)	(1.7) (4.8)
32	かわらけ	(7.8)	(1.6)	(5.2)	33	かわらけ	7.6	1.7 5.8
34	かわらけ	(8.0)	1.6	(6.8)	35	かわらけ	(7.0)	1.5 (4.3)
36	かわらけ	(7.0)	1.9	(4.8)	37	山茶碗	(31.2)	(14.0) 14.6
38	常滑 捏ね鉢			(14.9)				

第4章 まとめ

本地点の調査は、良好な土丹版築面が数枚検出されたものの、極限られた面積でありさらに調査深度の制限もあった。そのため、埋設常滑覆のような遺構も検出できたが、遺構の性格や遺跡（調査地点）の様相をまとめるほどの成果は得られなかった。敢えてここで無理に考察を加えても、今後の周辺の調査に的確な資料を呈示することは困難であろう。そのため、本報告では検出された版築面の年代や調査で得られた幾つかの事実をまとめる事で調査者の責をはたしたい。

I 検出面の年代について

調査された第1面では、わずかではあるが、材木座町屋遺跡（註1、以下材木座町屋遺跡）の第2面上に包含層出土のかわらけに類似するものが見られた。このかわらけは粉質胎土では無いが、側壁が直線的に外反し、口縁部が外方に引かれている。材木座町屋遺跡ではこれらのかわらけは古瀬戸後期様式（I～III）のみを伴出している。これから考えると本地点の第1面は14世紀末頃から15世紀前半までと言うことが可能である。

第2面は、かわらけ以外は混在し、良好な年代決定遺物はない。かわらけの年代では14世紀前半頃を考えるのが妥当といえよう。

第2面以下は調査することが叶わなかったので、遺跡の成立期の年代については述べる資料はない。しかし、鎌倉税務署用地（註2、以下税務署用地）と本調査地点の南数十mに位置する佐助1-450-24地点（註3）、佐助1-450-25、27地点（註4）の調査で京都系の手捏ねかわらけがほとんど出土しない事を考慮すると、佐助ヶ谷の開発が13世紀第2四半期頃になって行われたと理解する事も可能である。従って、本地点成立は13世紀中頃であろう。

II 調査区東側の落ち込みについて

調査区北東隅で検出された落ち込みは、拡張レンチ東端でも確認された。これは結論を言えば、現在調査地点の東を流れる佐助川の西岸落ち込みであろう。

佐助川と思われる流路は、下流にあたる鎌倉市立中央図書館東の鎌倉市社会福祉センター用地（以下、社会福祉用地）で検出されているが（註5）、上流の税務署用地の調査では検出されていない。社会福祉用地では敷地北側・御成小学校寄りに最大11mの流域が確認されている。この流路の年代は中世前期まで遡る。税務署用地の調査報告書では、調査地点西側の地形に触れながら「現在の佐助川はコンクリート護岸が施され、調査地の西に沿って南下しているが、この河の流路はおそらく近世になってから開削されたものであり、本来の佐助川は谷の中央部（調査地の東）を流れていると考えられる。」と書いている。

本地点の調査結果を加えると、中世以前は明らかではないが、上流に発した佐助川は鎌倉税務署の東から本調査地点の東へ流れ、そのまま丘陵沿いに東に向を変え、社会福祉用地辺から裁許橋に向かったと考えられる。本地点から真っ直ぐに南下しないのは、中世においては、大きな海岸砂丘が立ちはだかっていたためと推測できる。

註および参考文献

- 註1 大河内勉他「材木座町屋遺跡（No.261）-材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』 鎌倉市教育委員会 平成13年
- 註2 斎木秀雄他『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993年
- 註3 高野昌巳「佐助ヶ谷遺跡（No.203）-佐助一丁目450番24地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』第2分冊 鎌倉市教育委員会 平成10年
- 註4 関澤晶子「佐助ヶ谷遺跡（No.203）-佐助一丁目450番25・27地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』第2分冊 鎌倉市教育委員会 平成10年
- 註5 宮田真他『今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）』鎌倉市教育委員会 平成5年



▲ 1面 全景（南から）



△ 1面 全景（南から）



△ 2面 全景（北から）



▲ 2面 全景（北から）

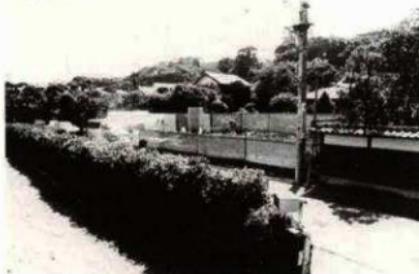


△ 2面 全景（北から）



△ 2面 全景（北から）

図版2



▲ 1. 調査区近景（北東から）



▲ 2. 調査区（東から）



▲ 3. 西壁面土層堆積状況



▲ 6. 挖堀・石積み・土壤（北から）



▲ 4. 土壌検出状況



▲ 5. 土壤実掘



▲ 7. 石積遺構（南東から）



▲ 1. 据座検出状況（南から）



▲ 2. 磚倉石検出状況



▲ 3. 据座検出状況



▲ 4. 同掘り方

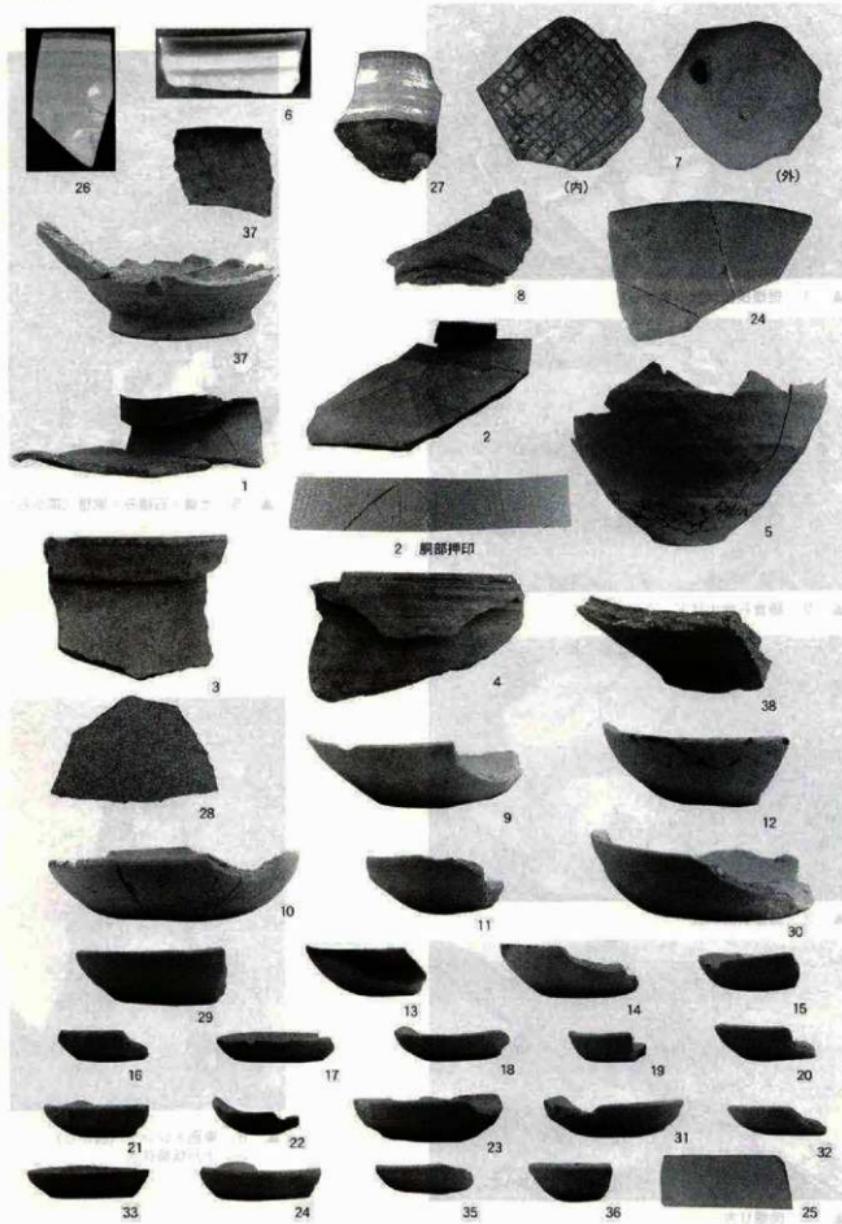


▲ 5. 土壠・石積み・据座（南から）



▲ 6. 東西トレンチ（西から）
土丹版築状況

図版4



時 言

通路脇の御庭園へ初夏の頃、1924年頃から現在まで「山中湖畔」(現小田急湖畔)が基本。(1)
さくらの花見月

1924年頃から現在まで「山中湖畔」(現小田急湖畔)が基本。(1)

さくらの花見月

とうしうじあと 東勝寺跡(No. 246)

(1) 小町三丁目468番10
1924年頃から現在まで「山中湖畔」(現小田急湖畔)が基本。(1)

さくらの花見月

例　　言

1. 本書は、鎌倉市小町三丁目468番10における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成12年7月27日～同年8月19日である。調査対象面積は27.00m²である。出土遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査の体制は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 宮田眞（鎌倉考古学研究所・日本考古学协会会员）
調査員 諸星真澄
調査補助員 安達澄代・千本眞生（東海大学）・吉田智哉（大正大学）
調査協力者 有田正夫・杉浦永章・関卯之松・高井富三（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/80・1/40（遺構図の水系高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1/3・1/6
5. 本書の執筆は宮田眞が行なった。
6. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
遺構図版 諸星真澄
遺物図版 河内令子
遺構写真 諸星真澄
遺物写真 滝澤晶子
7. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関に御教示・御協力を賜った。
鎌倉考古学研究所
8. また、発掘調査に際して多大な御協力を頂いた施主、及び調査の付帯工事を担当して頂いた有限会社シンヤ建設工業に深く感謝の意を表する。

次章の目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	224
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	227
第3章 検出遺構と出土遺物	229
第4章 まとめ	242

図版目次

図1 遺跡周辺図	225	図9 3面	233
図2 東勝寺各谷戸の位置図	226	図10 3面出土遺物	234
図3 基本土層図	227	図11 4面	235
図4 グリッド配置図	228	図12 4面出土遺物	236
図5 1面	229	図13 5面	237
図6 表土層・1面出土遺物	229	図14 5面出土遺物	238
図7 2面	230	図15 6面	239
図8 2面出土遺物	231	図16 6面出土遺物	241

写真目次

PL. 1 A. 調査開始以前の調査地近景(南東から)	243
B. 表土掘削風景(北東から)	243
PL. 2 A. 表土掘削完了	244
B. 1面(西から)	244
PL. 3 A. 2面(西から)	245
B. 3面(西から)	245
PL. 4 A. 4面(西から)	246
B. 5面(西から)	246
PL. 5 A. 5面礎石建物1(西から)	247
B. 5面石列1(北から)	247
PL. 6 A. 6面(西から)	248
B. 土層堆積状態(調査区西壁)	248
PL. 7 出土遺物(1)	249
PL. 8 出土遺物(2)	250
PL. 9 出土遺物(3)	251

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地（東勝寺跡 No. 246）は、神奈川県鎌倉市小町三丁目468番10に所在する。東勝寺跡は、鶴岡八幡宮の南東約300mに位置する葛西ヶ谷にある。葛西ヶ谷は西向きに開口する南北に幅をもつ谷戸で、北東・中央・南西の三つの支谷から成っている。中央支谷の最深部には、北条高時の墓と伝える「腹切りやぐら」が一基ひっそりとある。また谷戸の西側には鎌倉第一の河川「滑川」が南流しており、さらにつくその西方120mには「小町大路」が並行する。小町大路の西側一帯若宮大路との間は、義時以来北条氏嫡流（得宗）が代々屋敷を構えた由緒ある土地（北条小町邸跡）と言われている。

東勝寺は青龍山東勝寺と号し、室町期には関東十刹の一つに列せられていた。開基は北条泰時、開山は退耕行勇である。東勝寺の確実な創建年代は不明であるが、『本朝高僧伝』には行勇が「仁治2年（1241）7月5日、東勝の正寝に寂す。」とあるので、それ以前にあったことは間違いない。

また、『円覚寺文書』所収の北条貞時13年忌供養記（元亨3年（1323）10月）によると、この法要に北条氏縁の禅宗寺院から多くの僧衆が参加しており、建長寺の388人、円覚寺の350人を始め総計38ヶ寺2030人が数え上げられる。この中に東勝寺からは僧衆53人が参列しており十番目の人数規模を誇っていることから、東勝寺が大寺院であったことが窺える。

また東勝寺は元弘3年（1333）の鎌倉幕府滅亡の際に、北条高時以下北条氏一門が自害して果てた寺として有名だが、『太平記』巻十鎌倉兵火事の条には、「去程二煙四方ヨリ吹懸テ、相模入道殿ノ屋形近ク火懸リケレバ、相模入道殿千余騎ニテ、葛西ヶ谷ニ引籠リ給ケレバ、諸大将ノ兵共ハ、東勝寺ニ充満タリ、是ハ父祖代々ノ墳墓ノ地ナレバ、爰ニテ共ニ防矢射サセテ、心闇ニ自害セン為也」とその時の様子が物語られている。

また『梅松論』にも、「樂つきて悲来る習ひ遁がたくして、相模守高時禪門、元弘3年5月22日。葛西ヶ谷において自害しける事悲しむべくも余あり。一類も同数百人自害するこそ至暗れなれ。」と同様の内容が記されている。東勝寺は、この時北条方自らが放った火によって悉く伽藍を消失したと言うが、間もなく復興されたようで、その後南北朝期を通じて寺勢は盛んであったと伝うる。

東勝寺の廃絶時期は詳しくは解っていないが、『仏日庵文書』元亀4年（1573）10月19日付、北条家政印判状（鎌倉市史史料編3-164号文書）には、「前々建長寺菊長老（九成僧菊）へ進ぜられ候下地、東勝寺分。只今明地の由に候間、預け置き候、仍て状件の如し。」円覚寺仏日庵の鶴鹿周音に東勝寺（旧）領が預けられたとあるので、少なくともこの年以前には廃絶していたようだ。

東勝寺の寺域は滑川を西限として葛西ヶ谷全域に及んでいたと考えられる。今回の調査地点は南西支谷開口部に位置しており、すぐ北側を中央支谷へ上がる急坂が通る。南西支谷は南方を頂点として4段の平場から成っており、調査地点は北端部の最下段の平場に当たる。本平場においては平成11年8月～10月にかけて、宅地開発に伴う道路部分の発掘調査^{注1}が実施されており、今回はその道路に隣接した地点に当たる。

東勝寺跡では、これまでに5次に亘る発掘調査あるいは確認調査が実施されており、多くの調査成果を上げている。最初の調査は昭和50年2月～3月にかけて、鎌倉市の福祉施設建設に伴う事前調査として、中央支谷の南半部において実施された。その結果、建築遺構をはじめ、鎌倉石切石による基礎状造構、2メートル幅の切石敷スロープ（通路）遺構、石垣、石敷等、寺院に関連した多種多様な遺構群が検出された。また同時に出土遺物の中には、北条氏の家紋「三鱗文」の叩き目のある平瓦なども見つかり、本谷戸と東勝寺とを結び付ける物証が得られた様に見える。



図1 遺跡周辺図

そうした1次調査の成果に対して、鎌倉仏教会を始めとして各方面から多くの保存要望が出されたため、文化庁・県教委・市教委は国指定史跡に指定することを前提として、昭和51年12月国庫補助を得て第2次調査を同支谷内で実施した。第2次調査からは、礎石建物、柱穴多数（礎板の残るものも含む）、溝10条（幾つかは二条一組のセット関係にありその間が通路状遺構となる）、石敷参道、石組遺構2カ所（小規模な基壇と考えられる）、など前回の調査成果にさらに肉付けをする多大な成果を上げることができた。しかしこの時点では土地所有者から、史跡指定の同意に関する理解を得ることができず、その後長年に亘って史跡指定の作業は中断してしまった。

近年土地所有者が変わったなどの状況変化から、市では第3次総合計画の後期実施計画に、東勝寺の国指定史跡申請を掲げ、史跡指定作業を再開することにし、市教委は文化庁・県文化財保護課との協議のもと、平成8年度から国庫補助を受けて遺跡の確認調査を開始することとした。調査は中央支谷と北支谷の2地点での実施を計画したが、北支谷内に位置する（宗）カトリックレデンブリスチノ修道院から建て替え計画がもちあがり、文化庁・県文化財保護課（当時）の指導を得て、当初の予定地に併せて改築部分についても遺構の確認調査を行い、工事による遺構への影響が出ないよう努めた。調査の

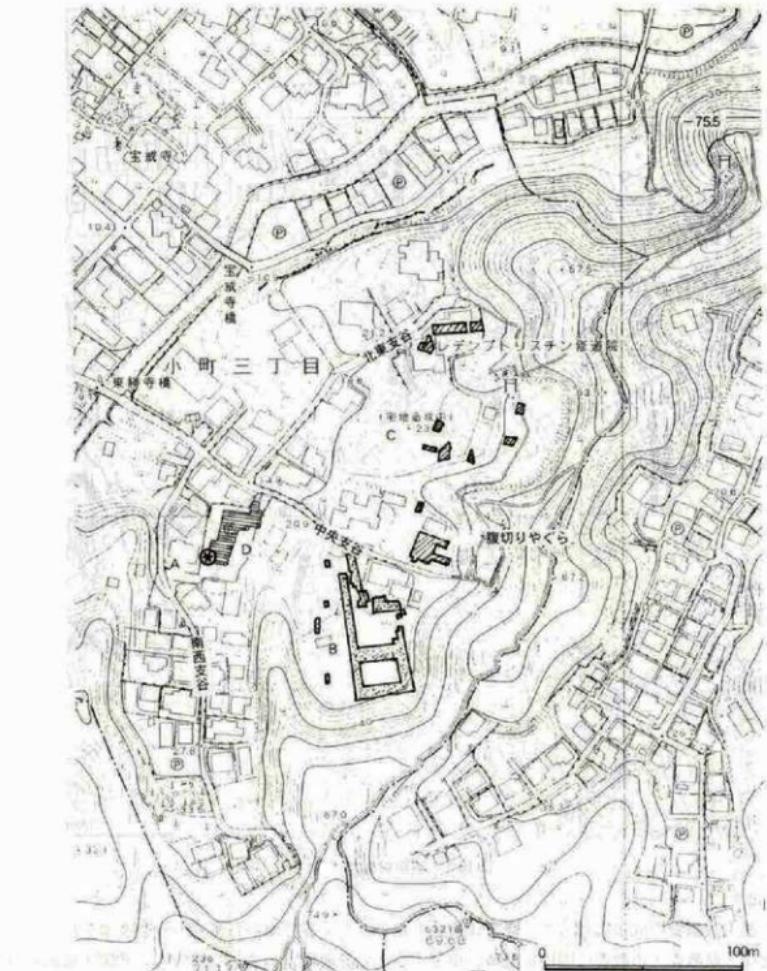


図2 東勝寺各谷戸の位置図

結果、北支谷内の調査地点からは、鎌倉時代～室町時代の礎石建物跡・溝・柱穴等や、元弘3年の新田の鎌倉攻めの際に考えられる火災面を検出した。また中央支谷内の調査区（中央支谷北半部）からは、元弘3年に焼失したと考えられる大規模な掘立柱建物を検出して、鎌倉市教育委員会は当地が東勝寺跡である事を確認した。

東勝寺跡は中央支谷に限定されるが、平成10年7月31日国指定史跡となった。

《参考文献》

東勝寺遺跡発掘調査報告書 平成7年3月 東勝寺遺跡発掘調査団(赤星直忠他) 鎌倉市教育委員会

東勝寺跡－第3・4次構造確認調査報告書 平成10年3月 菊川英政他 鎌倉市教育委員会

鎌倉廃寺事典 昭和55年 貢達人・川副武胤著 有隣堂

注1 東勝寺跡発掘調査報告書(小町3丁目468番2外) 2000年10月 東勝寺発掘調査団・宮田事務所

第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層

1. 調査経過

調査は個人住宅新築に伴う事前調査として、平成12年7月27日～同年8月19日にかけて実施された。本調査地は第1章すでに述べたように、平成11年の調査地に隣接しており、確認調査を実施するまでもなく遺跡の遺存が確実視されていた。

- 7月27日(木) 重機による表土掘削。ベンチマークの移動。
7月28日(金) 発掘器材の搬入。
7月31日(月) 本格調査開始。1面精査。
8月02日(水) 1面記録作業(測量実測・写真撮影)。
8月03日(木) 2面粗掘り。
8月05日(土) 2面記録作業(測量実測・写真撮影)。
8月07日(月) 3面粗掘り。
8月09日(水) 3面記録作業(測量実測・写真撮影)。
8月11日(金) 4面粗掘り。
8月15日(火) 4面記録作業(測量実測・写真撮影)。
8月16日(水) 5面調査。
8月17日(木) 5面記録作業(測量実測・写真撮影)。
8月18日(金) 6面調査。6面記録作業(測量実測・調査壁土層実測)。
8月19日(土) 6面記録作業(写真撮影)。調査区北東角にサブトレンチを入れ下層に文化層の無を確認。

2. 其本土層(図3)

調査地の現在地表レベル(以後G.L.)は海拔19.3m前後を測る。G.L以下100cm前後の厚さで表土層の堆積があり、その直下20～30cmの厚さで中世遺物包含層となる。包含層直下海拔18mに1面が遺存する。

1面下は6期6面にわたる生活面が検出され、文化層の堆積層厚は約1mを測る。各面は基本的に土丹塊による地業によっており、十分に整地され良好な地面を形成している。特に3面上は、二枚貝を中心とした貝殻片が多く混入する海砂が敷き詰められ、強固で美観のある地面が作られている。こういった検出例は、極楽寺境内遺跡などに見られる。6面より下層はサブトレンチによる調査の結果、大型の土丹塊による大規模な埋め立て造成を確認した。おそらく当該地における最初の開発であろう。

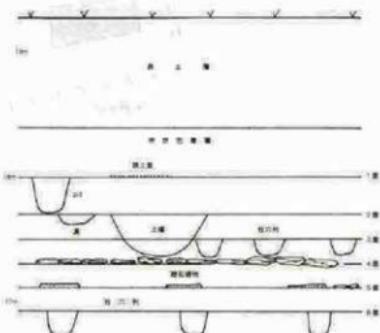


図3 基本土層図

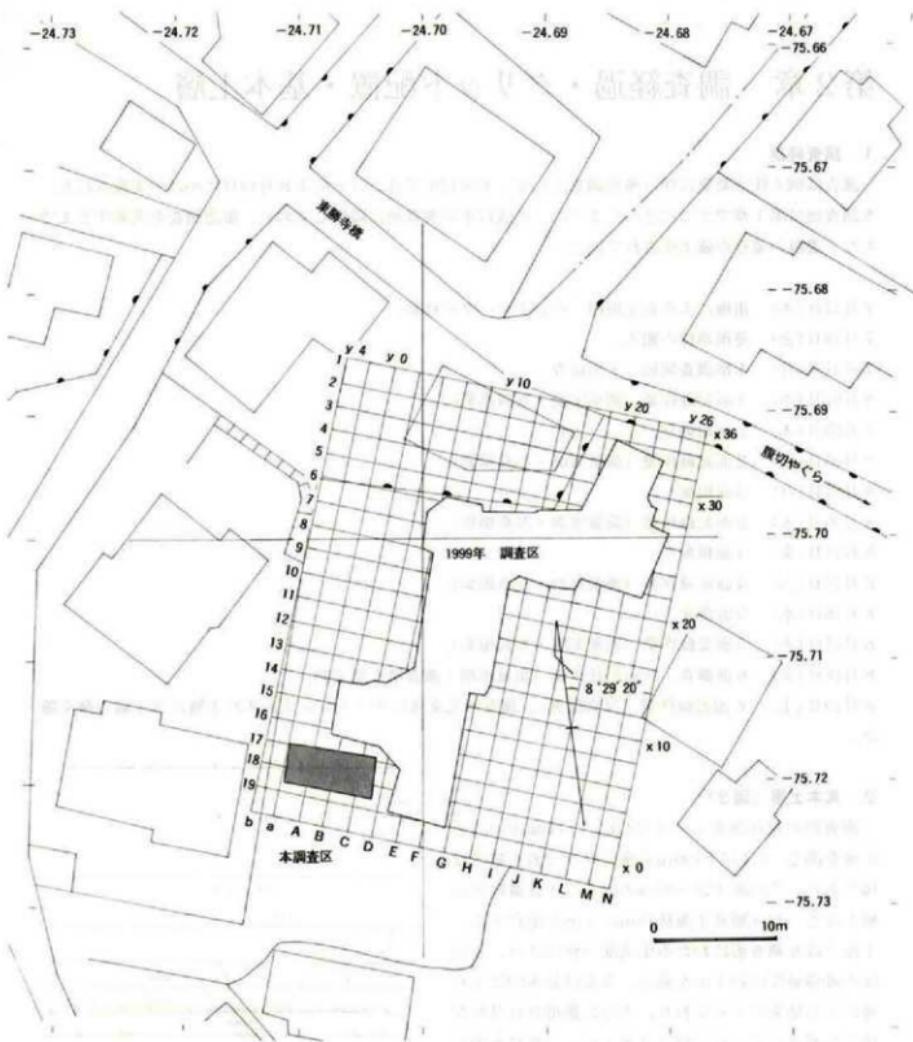


図4 グリッド配置図

3. グリッド配置(図4)

今次調査のグリッド配置は、1999年次の調査と共に軸線及び名称を用いた。グリッドは東西方向にA・B・C・・とアルファベットを、南北方向には1・2・3・・と数字を2m間隔で付し、各グリッドの名称は北西角の交点を読む。尚1999年次調査設定のアルファベットAより西方延長範囲は、今回新たに小文字のアルファベット(a・b・・)を付しグリッド名称とする。グリッドの南北軸線方位は磁北に対して $18^{\circ} 29' 20''$ 東に傾く。

第3章 検出遺構と出土遺物

発掘調査の結果調査区からは6期（I～6面）の生活面が検出された。以下各面の成果を報告する。

1. 1面（図5）

1面は暗茶褐色粘質土と土丹塊による地業面で、調査区全域で海拔18m前後のほぼ均一なレベルを測る。1面は調査区北西角付近が約4mに亘って弱い焦土面となっている。1面からの遺構の検出は北壁際のピット2口（図中Pで表示）のみである。P1は径45cmの円形をしており、深さは12cmを測る。P2は径40～50cmの不整円形をしており、深さは10cmを測る。P1・2は並びで見ると芯々距離で170cmを測り、芯々をつなぐ軸線方向はN-74°-Wを示す。

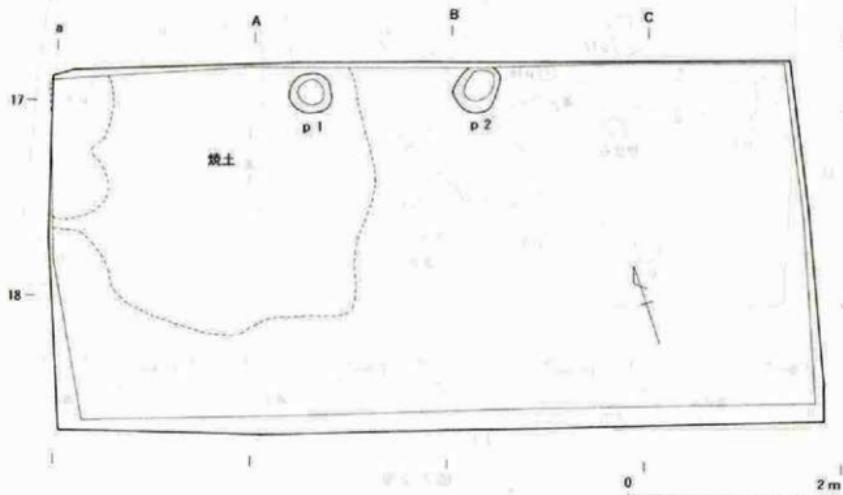


図5 1面

表土層出土遺物（図6-1～4）

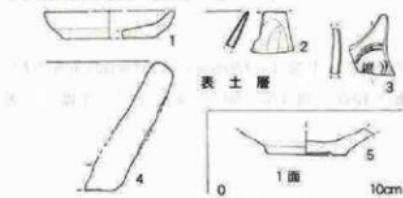


図6 表土層・1面 出土遺物

表土層からは、4点の図示しうる中世遺物が出土した。1は糸切り底のかわらけ小皿片。2は青磁蓮弁文碗の口縁部小片で法量は不明。素地は灰白色。

釉は青緑色をして艶・透明感に富み、貫入が入る。3は青白磁の梅瓶か水柱の胴部小片で法量は不明。素地は灰白色。釉は灰青色をして若干透明感を欠く。4は鉢形手あぶりの破片で口径は不明、器高は8cmを測る。胎土は暗灰色・灰黒色をして、砂や2～3mm大の小砂利を多く含む。器表は灰黒色で剥離磨耗が激しい。

1面出土遺物(図6-5)

図6-5は瀬戸灰釉碗の底部片で高台径は48mmを測る。高台は削り出し。素地は黄色味のある茶灰色で細かい砂を含み焼成良好。釉は若干白濁した灰黄色でやや失透。外面の遺存部分は露胎。

図6 表土層出土遺物 かわらけ法量表(一)内数

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(8.0)	(5.5)	1.6

2面(図7)

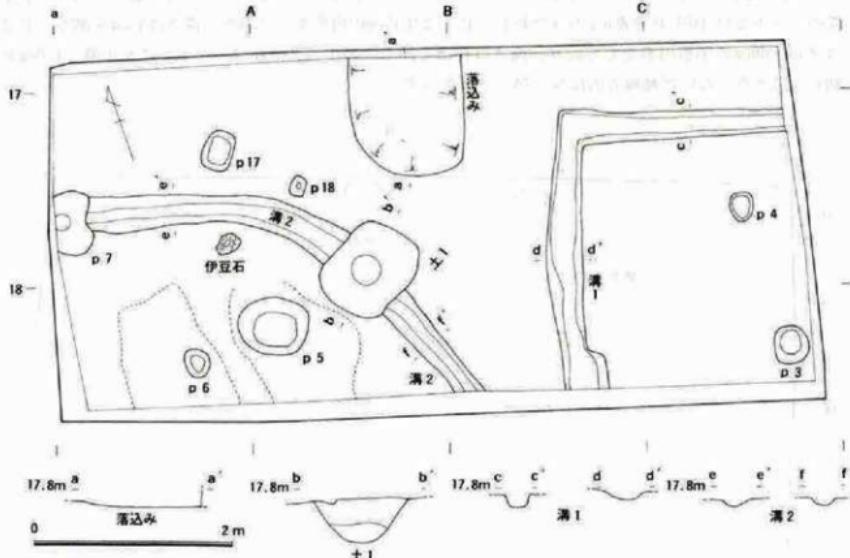


図7 2面

2面はおよそ海拔17.7m前後を測る。2面からはピット7口、土壙1基、溝2条、深い落ち込み1箇所を検出した。ピットは並びとして捉えることはできなかった。

土壙1(図7)

土壙1はA-17・18グリッドにまたがって検出された土壙で、上端は長径98cm・短径75cmの角丸方形、下端は径30cmの円形をしており深さは45cmを測る。長軸の軸線方向はN-58°-Eを示す。土壙1は溝2と重複しており、溝2を切る。

土壙1出土遺物(図8-1~3)

1・2は糸切り底のかわらけ大皿で1は8割、2はおよそ6割の遺存率をもつ。共に粉質で細砂を含み焼成良好。1は薄茶色。2は橙色を呈する。3は常滑窯の口縁部付近の破片で、復元した口径は30.6cmを測る。胎土は暗灰色をして砂・長石粒を多く含み、良く焼き縮まる。緑色味のある自然釉がかかる。

溝1(図7)

溝1はB-17グリッドを北西の角として直角に曲がるL字型の溝で、検出延長は東西2.25m、南北2.8mを測り、東及び南側は更に調査区外へ延びる。溝は上端幅で24~45cm、下端幅が13~30cm、深さは10~15cmを測る。南北方向の溝の軸線方向はN-16.5°-Eを示す。

溝1出土遺物(図8-4)

図8-4は白磁口禿印花文碗の口縁部小片で法量は不明。素地は精緻で乳白色をして、釉は若干青色味のある灰白色をして艶に富む。

溝2(図7)

溝2は調査区南西部で検出された円弧状に屈曲する溝で、検出延長は4.5mを測る。溝の上端幅は25~43cm、深さは6~8cmと浅い。溝2は土壌1とP7に一部を切られており、また西・南側は調査区外へ更に延びる。

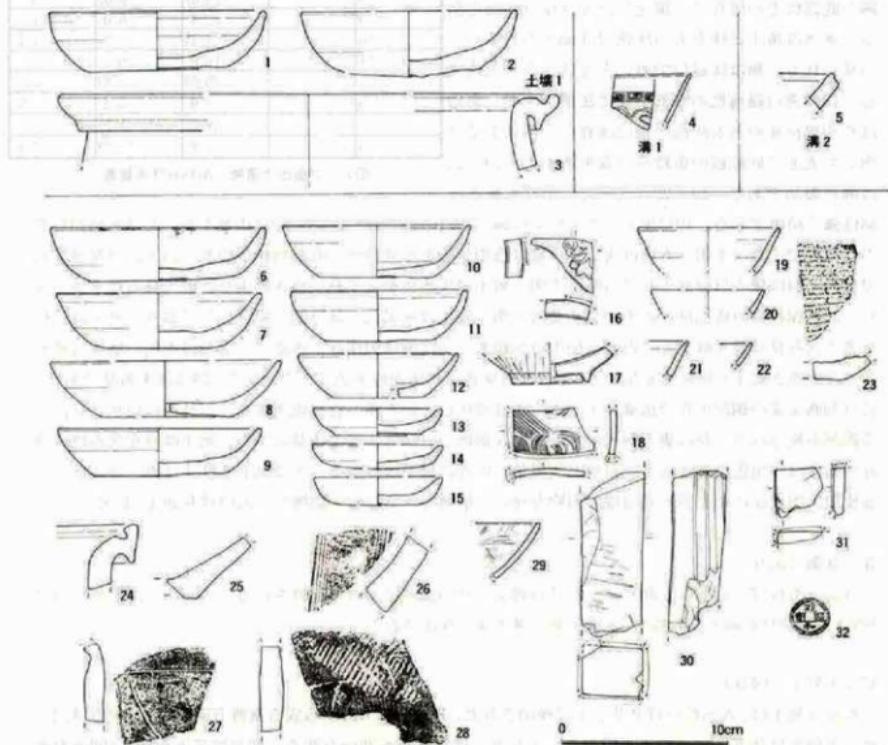


図8-2面出土遺物

溝2出土遺物(図8-5)

図8-5は山茶碗窓系捏ね鉢の口縁部小片で法量は不明。胎土は砂・長石を多く含み暗灰色をしている。焼成は良好で良く焼き締まる。口縁端部内側が上方に引かれる。

落込み遺構(図7)

調査区北壁際のB-17グリッド杭下から検出された遺構で、検出規模は東西115cm、南北120cmを測り北側は調査区外へ更に広がりを見せる。深さは5~6cmとごく浅い。

2面出土遺物(図8-6~32)

図8-6~15は糸切り底のかわらけで6~10は大皿、11~12は中皿、13~15は小皿である。8~10~12は薄手製品。16~18は中国陶磁器類である。16は

番号	遺構	口径	底径	器高
1	土壌1	13.2	8.4	3.7
2	土壌1	(13.2)	(8.2)	4.0
6	-	13.2	9.0	3.2
7	-	(12.5)	7.8	3.4
8	-	(14.0)	(8.0)	3.4
9	-	12.4	8.0	1.7
10	-	(11.5)	7.0	1.7
11	-	10.8	6.5	1.7
12	-	(9.8)	(5.5)	1.7
13	-	7.9	5.2	1.7
14	-	(8.0)	(6.0)	1.7
15	-	(7.8)	(5.0)	1.7

図8 2面出土遺物 かわらけ法量表

青磁壺の胸部小片で外面には花弁の一部と思われる浮文が施される。素地は灰白色をして精緻。釉は灰緑色をして艶有り、粘性強く厚くかかる。17は青磁碗の底部付近の破片で、復元した高台径は46mmを測る。素地は黄土色味をもつ灰色で3mm大的石粒が一つ見られる。釉は灰緑色で再火を受け泡立ち失透する。18は青白磁梅瓶の胸部小片で法量は不明。素地はやや褐色味のある灰色。釉は淡青色、再火を受け泡立ち表面に砂粒様の黒粒が付着失透する。19~23は瀬戸製品である。19~22は入子で、何れも胎土は粘性強く精緻である。19は復元した口径が87mm、20は69mmを測る。21~22は法量不明。23は灰釉卸し皿の底部片で法量は不明。素地は灰白色。釉は透明感のある淡緑色。底部回転糸切り。24~25は常滑製品である。24は甕の口縁部小片で口径は不明。胎土は灰黒色をして良く焼き締まり、砂・長石粒を多く含む。25は捏ね鉢の底部付近の小片で法量は不明。胎土は灰黒色と部分的に橙色をしており、砂・長石粒を多く含み良く焼き締まる。内面は使用痕が顕著。26は備前製播鉢の体部片で法量は不明。胎土は砂を多く含み焼き締まり暗灰色を呈する。器表面も灰色系で所謂備前色ではない。27~28は渥美製品である。27は刻画文壺の胸部小片で法量は不明。胎土は暗灰色、砂を多く含み焼き締まる。外面に範状工具による線刻が施される。28は甕の胸部小片。29は瓦器碗の口縁部小片で法量は不明。胎土は砂を含み焼成良好。胎芯は灰黒色、器表面は灰白色と灰黒色。内面に調整痕が残る。30は砥石で仕上げ砥。長辺部の4面使用。内一面に彫刻刀の丸刀様の刃物を研いた痕跡有。31は硯の剥離片。32は政和通宝(北宋)。

3. 3面(図9)

3面は海拔17.5m前後を測り、上面は貝殻交じりの海砂によって化粧される。3面からはピット19口(内3口に並びが認められる)、土壙1基、溝1条が検出された。

ピット列1(図9)

ピット列1は、A~C-17グリッドで検出された、P 9・11・21から成る東西方向のピット列である。ピット個々は径25~30cmの不正円形をしており、深さは15~25cmを測る。間尺は芯々距離で190cmを測り、柱並びの軸線方向はN-72.5°-Wを示す。またこの柱並びは調査区北・東外に広がる可能性がある。

り、建物になることも考えられる。

土壌2(図9)　この土壌はA-17グリッドで検出した土壌で、径は東西63cm・南北72cmで不正円形をしており、深さは35cmを測る。

土壌2出土遺物(図10-1～3)　図10-1は回転糸切り底のかわらけ小皿である。2は青磁蓮弁文碗の底部付近の破片で、高台径は44mmを測る。素地は灰白色で粘性強く焼成良好。釉は灰緑色で粘性強く若干銀化している。高台裏面は露胎。3は山茶碗窯系捏ね鉢の破片で、復元した法量は口径が28.3cm、高台径が11.9cm、器高が11.5cmを

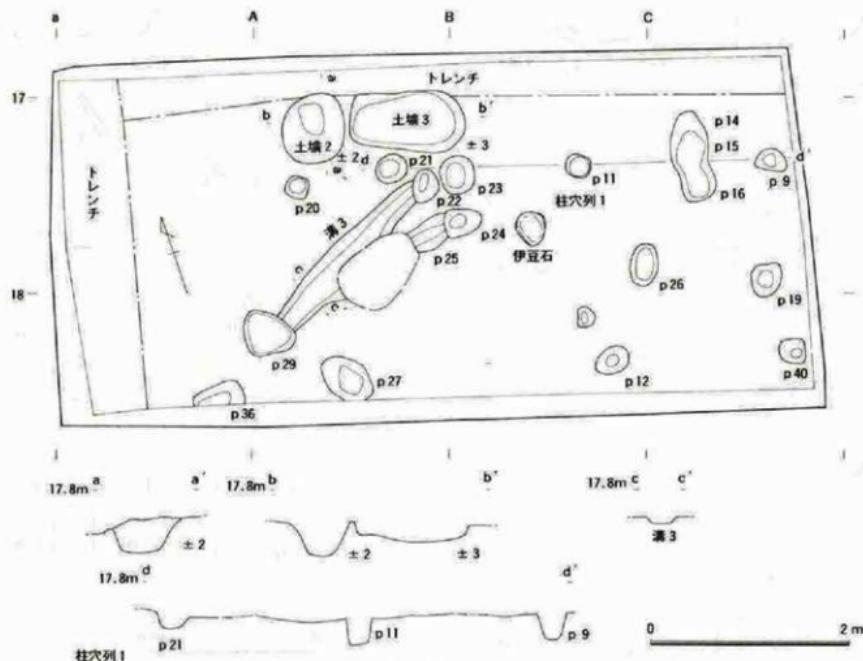


図9 3面図

3面出土遺物(図10-4～19)

図10-4・5は回転糸切り底のかわらけで、4は大皿、5は小皿である。6～8は中国陶器類である。6・7は青磁蓮弁文碗の口縁部片で、6は口径復元して17.5cmを測る。素地はやや青色味をもつ灰色で粘性強く焼成良好。釉は暗い色調の灰緑色をしており若干の銀化が見られる。7は法量不明。釉の

表面はややあれて失透する。8は白磁口禿碗の口縁部小片で法量は不明。素地は乳白色をして精緻。釉は若干緑色味のある灰白色であるが、再火を受け細かく泡立つ。9は山茶碗の口縁部で復元した口径は13.2cmを測る。胎土は淡い灰褐色をして焼成良好。口縁部付近内面に灰緑色の自然釉がかかる。10～14は瀬戸製入子の破片である。10は口径復元して8.4cmを測る。胎土はやや青色味をもつ灰色をして、粘性強く精緻であるが2～3mm大の小砂利が含まれる。11は口径復元して8.7cmを測る。素地は灰色をして、精緻で焼成良好。部分的に灰緑色の自然釉がかかる。12は輪花型の製品で法量は不明。胎土は精緻で焼成良好、淡い灰褐色をしている。13は底部片で回転糸切り底、底径4.2cmを測る。胎土は焼成良好、灰褐色をしている。内底部に灰緑色の自然釉が若干かぶる。15は常滑器の口縁部で口径は復元して44.4cmを測る。胎土は常滑としてはきめ細かく非常に良く焼き縮まり、桃褐色をしている。16は

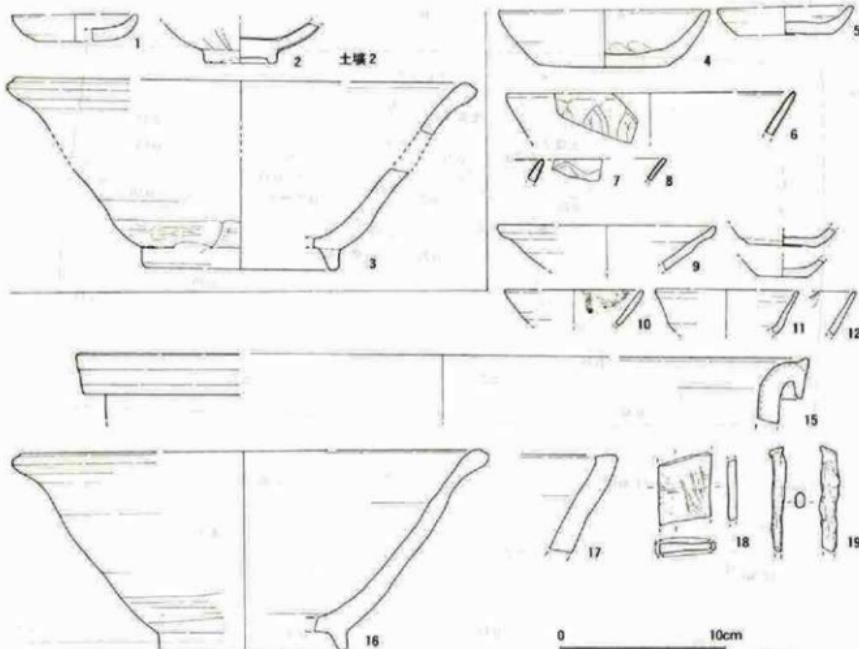


図10 3面出土遺物

山茶碗窯系捏ね鉢の破片で、復元した法量は口径30cm、高台径12.4cm、器高12.1cmを測る。胎土は砂・長石粒を多く含み焼成は良好、灰色をしている。付け高台。内面使用痕顯著。17は鉢型手あぶりの破片で法量は不明。胎土は瓦質で粗く砂を多く含み暗灰色をしており、外表面は黒色をする。内外面共に横位の調整痕が見られる。18は砥石の薄片で仕上紙。刃傷が顕著に見られる。19は鉄釘の断片で、断面形は方形をしている。

番号	遺構	口径	底径	器高
1	土壤2	(7.6)	(5.0)	1.6
4	-	(12.8)	(7.8)	3.5
5	-	(8.3)	(5.7)	1.7

図10 3面出土遺物 カワラケ法量表

4. 4面(図11)

4面は海拔17.35m前後に位置する。4面からはピット6口、土丹列による土留め遺構(基壇様になるか)が検出された。

土丹列による土留め遺構(図11)

土丹列はa～C-17グリッドで東西6.8mが検出され東側は更に調査区外へ延びる。土丹は形大きさが不揃いで、1～3段に積まれておき最大高は23cmを測る。土丹列の軸線方向はN-76°～Wを示す。土丹列北側の高まり(海拔17.5m前後)からは、並行期のピット3口が検出されたが直接的な関係は認めなかった。

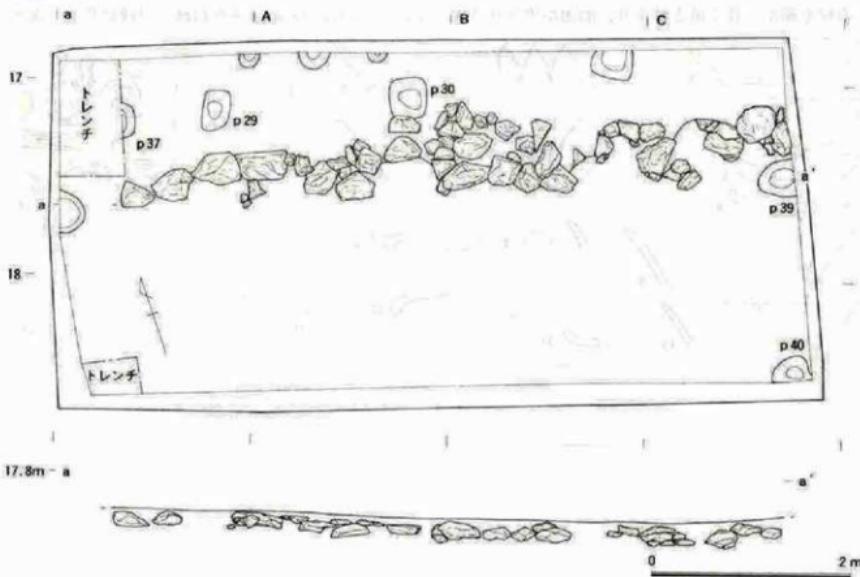


図11 4面

4面出土遺物(図12)

図12-1～4は回転糸切り底のかわらけである。1・2は薄手製品で1は中皿、2は大皿、3・4は小皿である。5～14は中国陶磁器類である。5～7は青磁蓮弁文碗の口縁部付近の破片で、5は口径復元して18cmを測る。素地は灰白色、粘性強く精緻。釉は灰緑色をして艶に富む。6は口径復元して17.5cmを測る。素地は灰色、粘性強く精緻。釉は若干青色味のある灰緑色をして艶に富む。7は法量不明。素地は非常に精緻で粘性が強い。釉は暗い色調の灰緑色。分厚くかかり、艶・透明感に優れている。8は青磁腰折れ小鉢の底部付近の破片で、復元した高台径は4.6cmを測る。素地は灰色をして精緻。釉は灰緑色で艶に富む。高台端部は露胎。9～11は白磁口禿製品である。9は碗の口縁部付近の破片で、復元した口径は14cmを測る。素地は乳白色、釉は若干青色味のある灰白色をして艶に富むが、粘性が強いせいか凹凸が多く貫入が入る。10は口径復元して12cmを測る。素地は乳白色。釉は若干緑色味のある

灰白色をして艶に富む。口禿部分黒色に変化。11は底部片で底径は復元して3.8cmを測る。素地は乳白色。釉は若干緑色味のある灰白色。12は青白磁の不明品で復元した最大径は8.9cmを測る。素地は暗灰色。釉は淡青色だが再火を受け泡立ち失透する。12は蓋様に作図したが内外面共均一に釉がかかって蓋ではないであろう。また凸面側の中央に付跡物が欠けたような痕跡が認められる。13・14は青白磁梅瓶の胴部片で法量は不明。共に焼成良好。釉は淡青色をして艶もあるが若干銀化している。15は瓦器碗の口縁部小片で法量は不明。16～18は常滑製品である。16は壺の口縁部片で、復元した口径は14.7cmを測る。胎土は砂・長石粒を含み、良く焼き縮まる。17・18は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。17は最大級の製品で縁帶の幅は4cm、復元した口径は55cmを測る。胎土は灰黒色をして焼成良好、砂を多く含み5mm大の長石粒も見られる。18は口径復元して34.4cmを測る。胎土は常滑としては緻密で、砂・長石粒も細かく良く焼き縮まり、断面が黒光りさえしている。19は山茶碗窯系捏ね鉢の口縁部片で、復元

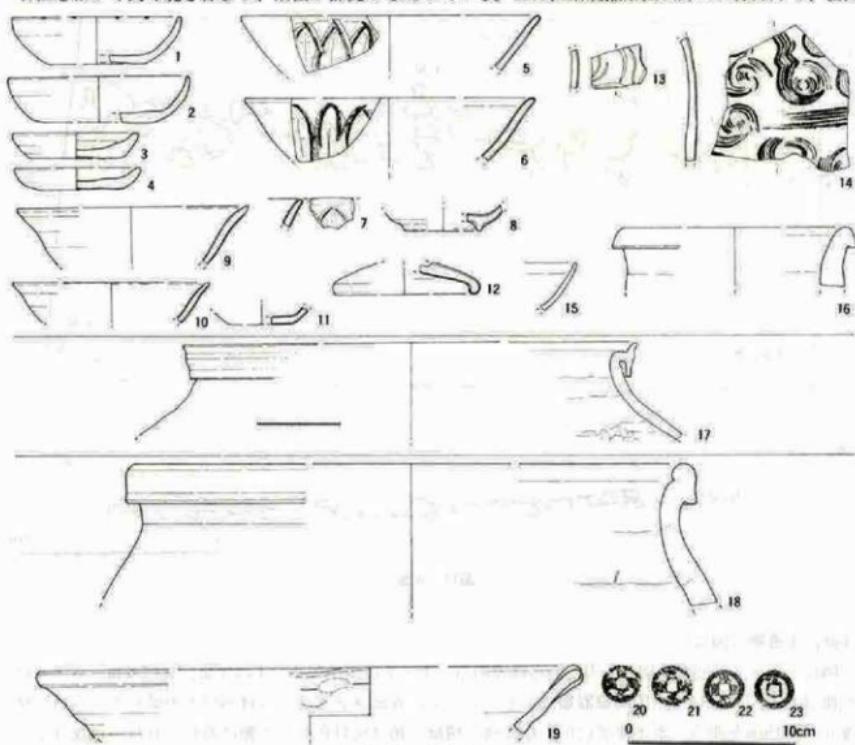


図12 4出土遺物

した口径は32cmを測る。胎土は細かい砂・長石粒を含み焼成良好、暗灰色をしている。体部上位片のため使用様痕は希薄。20は紹聖元年(北宋)。21は政和通宝(北宋)。22は淳寧元年(南宋)。23は不明。

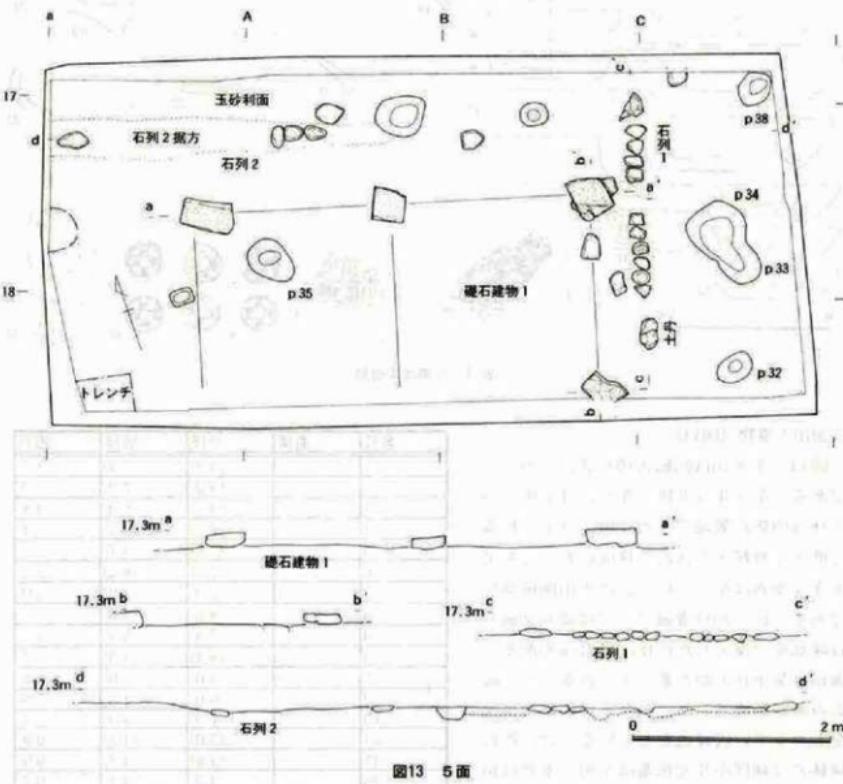
番号	遺構	口径	底径	髙
1	-	(10.3)	(5.7)	2.9
2	-	(11.0)	(7.0)	2.8
3	-	7.8	5.7	1.5
4	-	(7.8)	5.0	1.3

図12 4出土遺物 かわらけ法量表

5面 (図13) は斜面で面積17.2m²、北側を砂利面で南側を土壌面で、南北に約10mの高さがある。5面は海拔17.2~17.25mに位置する。5面からはピット3口、礎石建物1棟、安産岩の石列2条が検出された。

礎石建物1 (図13)

礎石建物1はa~B-17・18グリッド検出された。礎石は鎌倉石切石が用いられているが、二次的な利用と考えられ、検出した何れもがいい加減な加工で形も不揃いである。礎石の個々の規格は一辺が30~50cm、厚さは10~15cmを測る。柱間は東西・南北方向共に芯々距離で200cm (6尺6寸) を測り、柱並びは調査区の南と西外へ更に広がりを見せると考えられる。南北の柱並びの軸線方向はN-16°~Eを示す。



石列1 (図13)

石列1は南北方向の石列で、軸線上に安産岩10石が土丹2個が並び、やや外れた位置に安産岩2石が

遺存する。安山岩は径が15~20cm大、厚さは8cm前後を測る。石列1は礎石建物1の東側40cmの距離を並行しており、建物1と軸線方位が共通しており、建物1と密接な関係があると考えられる。また石列1は建物1と同様に調査区の南外へ延びるものと断定される。

石列2(図13)

石列2は礎石建物1の北側75cmに位置する東西方向の石列で、軸線上に安山岩4石が軸線をはずして2石が遺存する。石列の軸線方向はN-74°-Wを示す。石列1と同様に建物1と密接な関係をもつことは確実で、建物1と同様に調査区の西外に更に延びると考えられる。

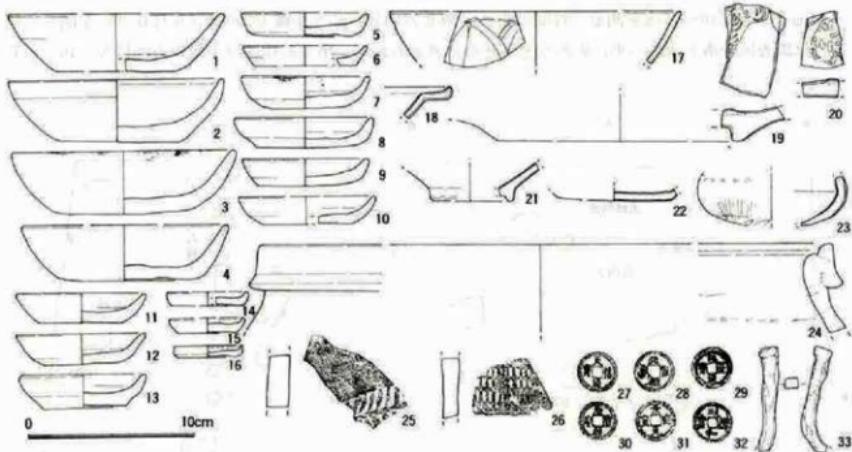


図14 5面出土遺物

5面出土遺物(図14)

図14-1~16は回転糸切り底のかわらけである。1~4は大皿、5~13は小皿、14~16は内折れ製品である。胎土は全て粉質で砂・土丹粒子を含む。焼成においても突大きな差はない。17~23は中国陶磁器類である。17~20は青磁で、17は蓮弁文碗の口縁部片で復元した口径は17.7cmを測る。素地は黄土色の粒が散る灰白色をして、幅広の蓮弁が施される。釉は不透明で褐色味をもつうい灰緑色をしている。18は折れ縁鉢の口縁部小片で法量は不明。素地は粘性強く灰白色。釉は艶のある灰緑色で貫入が入る。19は大皿の底部片で復元した高台径は14.8cmを測る。素地は粘性強く灰白色・灰褐色をしている。釉は粘性強く貫入があり(裏面は細か

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(13.3)	(7.4)	3.5
2	-	13.2	7.3	3.9
3	-	13.7	8.0	3.8
4	-	(12.7)	8.5	3.4
5	-	(7.8)	5.7	1.5
6	-	(7.7)	(6.2)	1.2
7	-	7.9	5.0	2.0
8	-	8.6	6.0	1.9
9	-	7.8	5.8	1.7
10	-	(8.4)	(5.5)	1.7
11	-	8.0	5.0	1.8
12	-	8.0	4.6	1.9
13	-	7.8	5.0	2.1
14	-	(5.0)	(4.2)	0.9
15	-	(4.6)	3.3	0.9
16	-	4.2	3.3	0.7

図14 5面出土遺物 かわらけ法量表()内数字

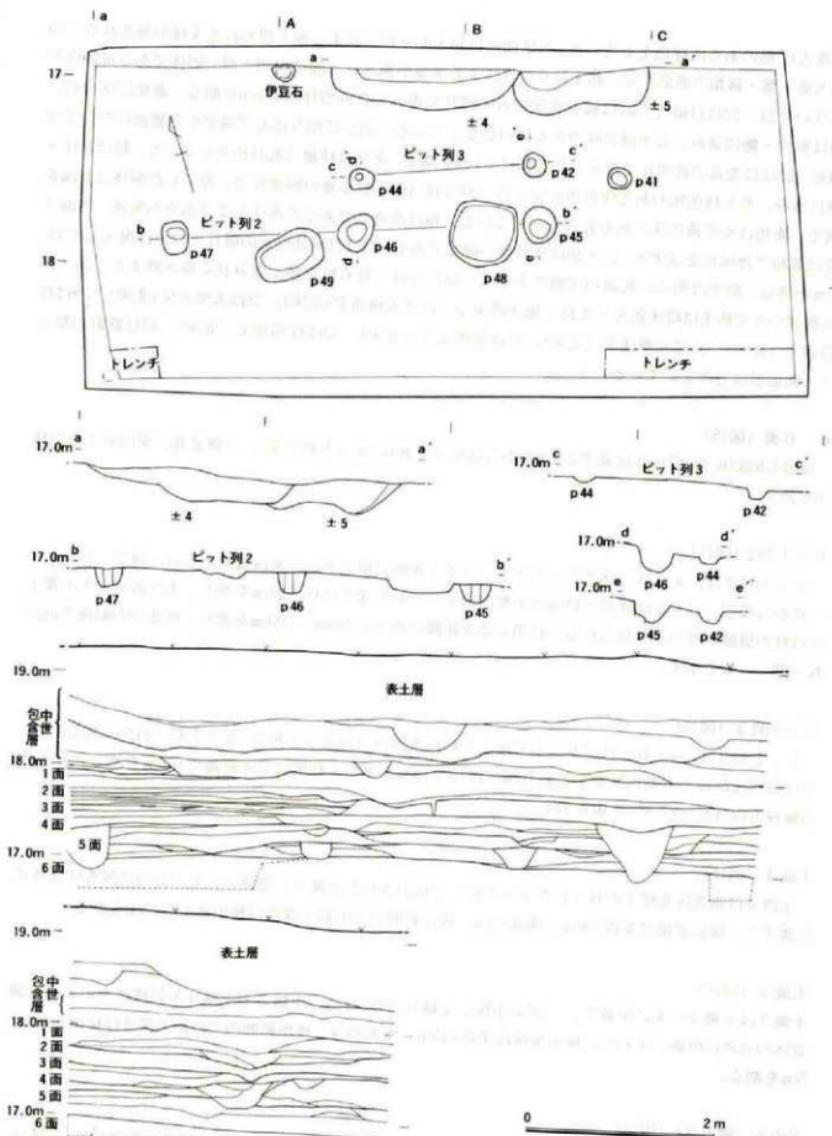


図15 6面

な貫入)、艶のある灰緑色をしている。内底面には粘土貼り付けによる龍と思われる文様が施される。20は大皿・盤・鉢類の底部片で、粘土貼り付けによる文様が施され、前述の19と同一固体である可能性が大きい。21・22は白磁で、21は碗の底部付近の破片で復元した高台径は5.1cmを測る。素地は灰白色。釉は粘性・艶に富み、若干緑色味のある灰白色をしている。高台は削り出して端部から裏面にかけては露胎。22は口禿皿の底部片で復元した底径は6.7cmを測る。素地は精緻で乳白色をしている。釉は粘性・艶に富み、若干緑色味のある灰白色を呈する。23は青白磁瓜型小壺の胴部片で、復元した胴径は9cmを測る。素地はやや黄色味のある乳白色をしている。釉は淡青色であるが再火を受け泡立ち失透。外面下位は露胎で青灰色を呈する。24~26は常滑窯の破片である。24は口縁部付近の破片で口径は復元して35.4cmを測る。胎土は明るい色調の灰褐色をして、細かな砂・長石粒を多く含み良く焼き締まる。25・26は胴部小片で胎土は暗灰色をして良く焼き締まる。27は天禧通宝(北宋)。28は天聖元宝(北宋)。29は祥符通宝(北宋)。30は元豐通宝(北宋)。31は景德元宝(北宋)。32は政和通宝(北宋)。33は鉄釘の断片で、断面形は方形をしている。

6. 6面(図15)

6面は海拔16.9~17mに位置する。6面からはビット8口(ビット列2条)、土壌2基、安山岩1石が検出された。

ビット列2(図15)

ビット列2は、a~B-18グリッドラインのすぐ北側で検出された東西方向のビット列で、ビット45~47から成る。ビットは径35~43cmの不整円形をしており深さは18~20cmを測る。また各ビットの覆土には柱の痕跡がはっきり見られる。柱間の芯々距離は西から195cm、200cmを測り、柱並びの軸線方向はN-75°~Wを示す。

ビット列3(図15)

ビット列3は、A・B-17グリッドで検出された東西方向のビット列で、ビット42・44から成る。ビットは径25cm前後の不整円形をしており深さは10~14cmを測る。柱間は芯々距離で185cmを測り、柱並びの軸線方向はN-77.5°~Wを示す。

土壌4(図15)

土壌4は調査区北壁下のB-17グリッド杭下で検出された土壌で、遺構の大半の部分は調査区北外に位置する。検出規模は東西200cm、南北43cm、検出範囲内での最大深度は検出面から30cmを測る。

土壌5(図15)

土壌5は土壌4の東に位置し、一部が重複し土壌4に切られる。土壌5も土壌4と同様にその大半は調査区の北外に位置しており、検出規模は東西145cm、南北45cm、検出範囲内での最大深度は検出面から35cmを測る。

安山岩(礫石?)(図15)

安山岩は6面に据えられる形で、A-17グリッド杭下から検出された。石の規模は短径19cm、長径25cmの不整形をしており、上面は平坦となる。この石に対しての並びは検出されていないが、あると仮定

するならば調査区の西・北外に位置しよう。

6面出土遺物(図16)

図16-1・2は回転糸切り底のかわらけ小皿で、何れも粉質で砂・土丹粒子を含み、焼成状態に際立った差異はない。3は、回転糸切り底のかわらけ（おそらく大皿）の底部を加工した土製円板で、径は24~27mm、厚さは4~8mmを測る。

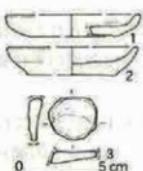


图16-6面出土遗物

番号	遺構	口径	底径	器高
1	-	(8.3)	(5.4)	1.4
2	-	(8.0)	(5.4)	1.7

図16 6号出土遺物 かわらは法量表(八重散文)

第4章 まとめ

第3章で報告した調査成果について、ここで若干のまとめを加えたい。

今回はごく限られた面積の中での調査であったため、調査成果から得る情報にはおのずと限界を生ずる。ここでは各面の年代観（時期）及び特記事項を列挙するに止めた。

1面・・・1面においては表土層も含めて遺物の出土は微少で、面の時期を決定するには心もとない。

図6-5の瀬戸平碗の底部片は瀬戸後期II期の特徴を示しており、面の下限年代を設定するなら1400年前後以降が置けよう。

遺構密度は疎で、出土遺物も少量。一部に弱い焼土面。

2面・・・2面からは薄手タイプのかわらけ大・中皿、瀬戸入子が複数で出土しており、下限年代は14世紀中葉～後半に時期設定するのが妥当であろう。

2面覆土中に炭化物多く混入。区画を示す溝。

3面・・・3面の下限年代は、瀬戸入子がまとまって出土しており14世紀中葉頃に置けようが、常滑製品等3面の設定期間より古い形式を示す製品が目立つ。

貝殻混じりの海砂による地表化粧。区画を示すピット列（溝）。1999年^{注1}調査の2面と同一面と考えられる。

4面・・・4面の下限年代は出土かわらけの形式から14世紀中葉以降に下げることも可能で、3面とあまり時期差を持たない。常滑窯は14世紀前半代の生産品（第7形式）と考えられる。

面上に炭化物の堆積顯著。

5面・・・5面の下限年代はかわらけ内折れ皿が、何れも口径5cm以下であることから14世紀前半に置けよう。しかし常滑窯（6b形式と考えられる）やかわらけ（大・小皿）は13世紀末葉～14世紀初頭ごろの製品が多く見られ、整地年代はその付近と考えられる。

覆土に炭化物多く混入。礎石建物。

6面・・・6面からの遺物の出土は、6面の年代を決定するまでの資料を得ていないが、図16に記したかわらけ小皿2点は5面出土のものと同形式である。

遺構密度疎。出土遺物微量。

今回、遺構面あるいは遺構の検出状況から鑑みて、遺跡の盛期は3面～5面期（4面？）が充てられよう。また1999年の調査成果を借りて述べるなら、1999年^{注1}調査のIII区2面に相当すると考えられる今次調査3面が、東勝寺内における本平場の最盛期と言えるのではなかろうか。

本稿で使用した瀬戸の編年は藤澤良祐氏（財・瀬戸市埋蔵文化財センター）、常滑の編年は中野晴久氏（常滑市民俗資料館）の編年を参考にした。

<注-1> 東勝寺跡発掘調査報告書（鎌倉市小町3丁目468番2号） 2000年10月 東勝寺跡発掘調査団・宮田事務所



▲A. 調査開始以前の調査地近景（南東から）

（地図第2頁）



▲B. 表土掘削風景（北東から）

（地図第2頁）



▲ A. 表土掘削完了

（小野寺）東古田遺跡（後）解説（前）



▲ B. 1面（西から）

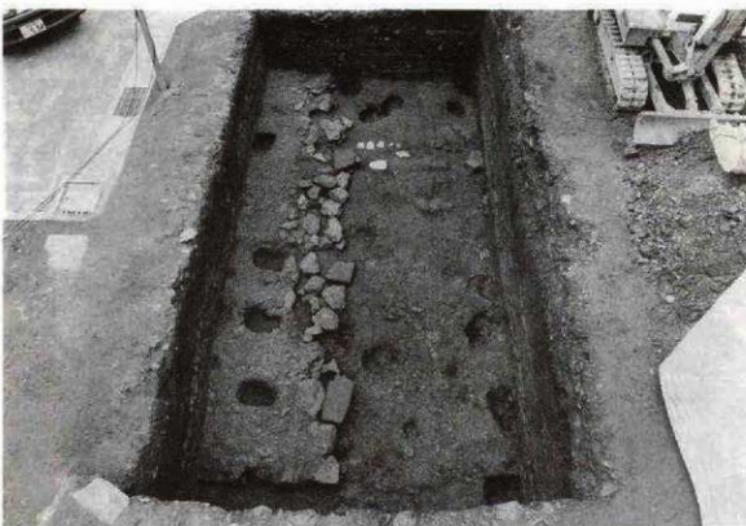
（小野寺）東古田遺跡（後）解説（前）



▲ A. 2面（西から）



▲ B. 3面（西から）

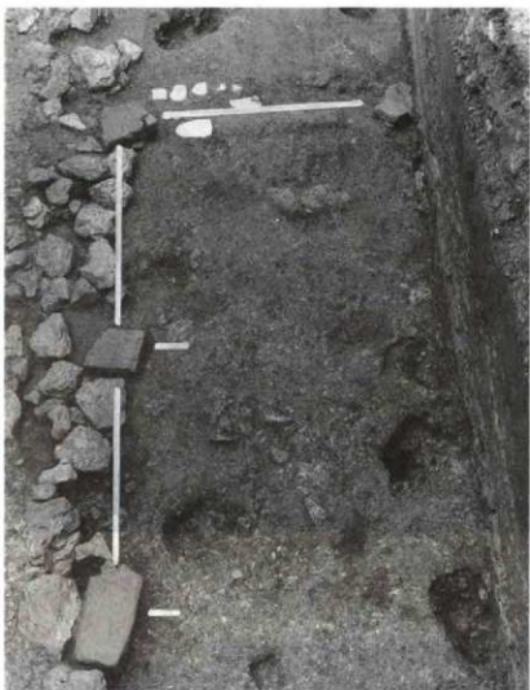


▲A. 4面（西から）



▲B. 5面（西から）

A
5面壁石建物1 (西から)



B
5面石列1 (北から)

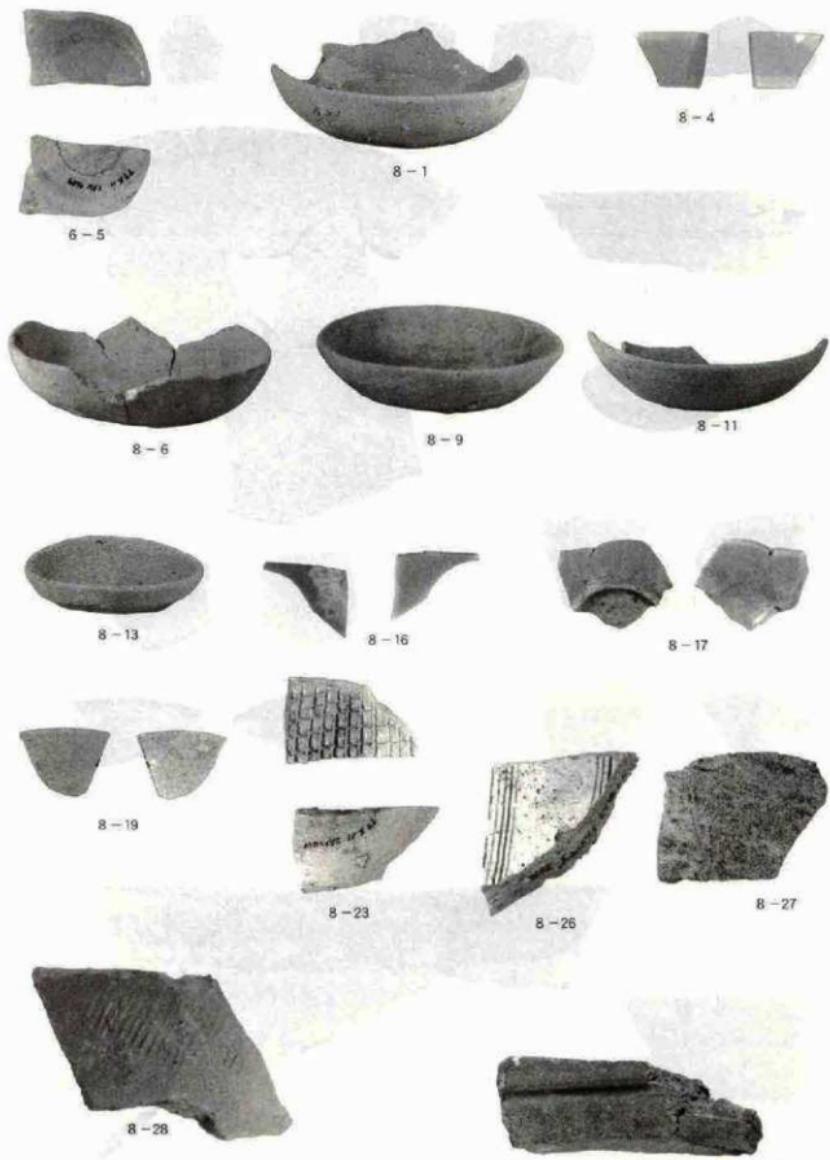




▲ A. 6面（西から）



▲ B. 土層堆積状態（調査区西壁）



出土遺物 (1)



10-6



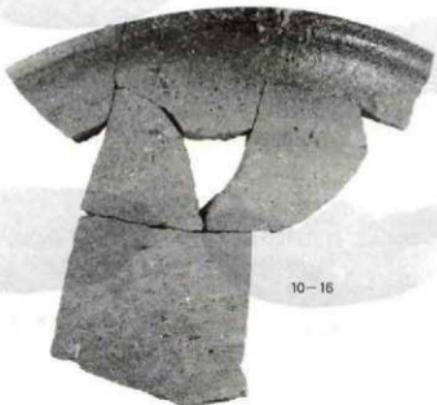
10-10



10-12



10-5



10-16



12-3



12-5



12-9



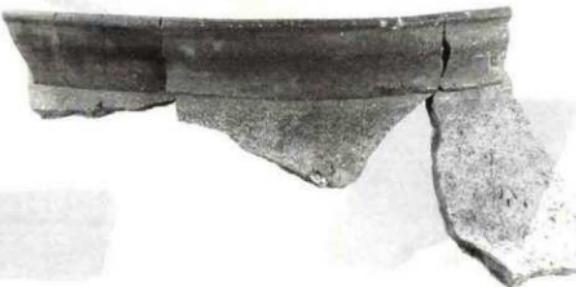
12-6



12-10



12-19



12-17

出土遺物 (2)



14-2



14-3



14-4



14-8



14-11



14-12



14-13



14-15



14-16



14-17



14-19



14-20



14-24

出土遺物（3）

むさしおおじしゅうへんいせき
武藏大路周辺遺跡 (No. 194)

扇ガ谷二丁目298番イ 1945年頃 木造平屋 1K 戸建

例 言

1. 本報は神奈川県鎌倉市崩ガ谷二丁目298番イに所在する武藏大路周辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は個人専用住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査として実施した。
3. 調査期間は平成12年8月3日～11月30日である。
4. 現地調査体制は以下の通りである。

調査主体 鎌倉市教育委員会

調査担当 大河内勉、瀬田哲夫

調査員 伊丹まどか、熊谷満

調査補助員 石元道子、深川恵子、佐伯玲魚、沖元道、田所千英、杉田美江、綾部貴之

作業員 篠田孝善、石渡辰男、寺島恵夫、北島清一、早坂昭（鎌倉市シルバー人材センター）

5. 資料整理は瀬田哲夫、伊丹まどか、川又隆央、熊谷満、押木弘己、根本睦子、矢能明子、石元道子、辻きよ子、深川恵子が行い、本報の執筆・編集は瀬田が担当した。尚、遺物計測表の編集には沙見一夫氏の協力を得た。

6. 本報に使用した写真は遺構を大河内、瀬田、伊丹、熊谷が、遺物を瀬田が撮影した。

7. 発掘調査、及び出土品整理にあつたっては、次の諸氏に御教示を賜った。

貿易陶磁分類 手塚直樹（青山学院大学）

石材（砥石・硯）分類 沙見一夫（鎌倉考古学研究所）、田中學（富山大学大学院）

花粉分析 鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）

8. 本報の凡例は以下の通りである。

・図版縮尺 遺構 1/60、1/80

遺物 1/3、1/6

・遺構図版 水系高は海拔標高値を示す。

・遺物図版 一・一は使用痕の範囲、一・一は釉薬の範囲を示す。

油煙・焼け焦げの範囲は黒塗り表示である。

塗塗り木製品椀・皿・鉢以外の黒色、赤色塗範囲はスクリーントーン表示である。

・計測表 () は復元数値、〔 〕は残存数値である。

9. 本文中で「鎌倉石」、「土丹」と呼称しているものは、ともに鎌倉周辺で産する岩石で、前者は粗粒凝灰岩、後者は凝灰質シルト岩のことである。

10. 本報告に関わる出土品等の記録は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

本文 目 次

第1章 遺跡概観	258
第1節 遺跡の立地	258
第2節 調査の経過	261
第3節 堆積土層	261
第2章 検出した遺構と遺物	263
第1節 1期	263
第2節 1B期	281
第3節 2期	287
第4節 トレンチ調査（3～5期）	320
第3章 まとめ	349

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	258
図2 グリット割付図	259
図3 調査区壁セクション図	260
図4 1期全体図	264
図5 1期セクション・ エレベーション図（1）	265
図6 1期セクション・ エレベーション図（2）	266
図7 1期包含層出土遺物（1）	267
図8 1期包含層出土遺物（2）	268
図9 基壇1出土遺物	269
図10 基壇2出土遺物	270
図11 建物1、2出土遺物	271
図12 建物7出土遺物	272
図13 建物10、堀1、石囲い遺構1、 土坑3出土遺物	273
図14 土坑4、道路状遺構出土遺物	274
図15 1期出土遺物（1）	276
図16 1期出土遺物（2）	277
図17 1期出土遺物（3）	278
図18 1期出土遺物（4）	279
図19 1期出土遺物（5）	280
図20 1B期 建物3、4、5、8	282
図21 建物3出土遺物	283
図22 建物4出土遺物（1）	284
図23 建物4出土遺物（2）	285
図24 建物5出土遺物	286
図25 建物8出土遺物（1）	287
図26 建物8出土遺物（2）	288
図27 1B期出土遺物	288
図28 2期全体図	289
図29 2期セクション・ エレベーション図	291
図30 建物6出土遺物（1）	292
図31 建物6出土遺物（2）	293
図32 建物6出土遺物（3）	294
図33 建物6出土遺物（4）	295
図34 建物11出土遺物（1）	296
図35 建物11出土遺物（2）	297
図36 建物12出土遺物	298
図37 建物13出土遺物	299
図38 建物14出土遺物	300
図39 建物15出土遺物	301
図40 堀2出土遺物	302
図41 堀3出土遺物	303
図42 木器溜り出土遺物（1）	304
図43 木器溜り出土遺物（2）	305
図44 木器溜り出土遺物（3）	306

図45	溝3、木組み遺構、石囲い遺構2、 土間状遺構、土坑5、ピット5 出土遺物	307	図60	3期、及びトレンチ全体図	323
図46	2期出土遺物(1)	308	図61	塙4、及びトレンチ セクション図	324
図47	2期出土遺物(2)	309	図62	3期出土遺物(1)	325
図48	2期出土遺物(3)	310	図63	3期出土遺物(2)	326
図49	2期出土遺物(4)	311	図64	3期出土遺物(3)	327
図50	2期出土遺物(5)	312	図65	3期出土遺物(4)	328
図51	2期出土遺物(6)	313	図66	3期出土遺物(5)	329
図52	2期出土遺物(7)	314	図67	3期出土遺物(6)	330
図53	2期出土遺物(8)	315	図68	東区トレンチ出土遺物-4期-	331
図54	2期出土遺物(9)	316	図69	東区トレンチ出土遺物-5期-	332
図55	2期出土遺物(10)	317	図70	西区北トレンチ出土遺物-3期-	333
図56	2期出土遺物(11)	318	図71	西区北トレンチ出土遺物 -3期・4期・5期-	334
図57	2期出土遺物(12)	319	図72	西区南トレンチ出土遺物 -4期・5期-	335
図58	2期出土遺物(13)	320			
図59	2期出土遺物(14)	321	図73	試掘、及び表探遺物	336

写真図版目次

PL. 1	1. 調査前(南から) 2. 東区1面(南から) 3. 東区1面建物2(北から) 4. 東区1面切石列1, 2(東から) 5. 東区1面基壇1(北西から) 6. 東区1面基壇1地鎮 (西から) 7. 東区1面下建物3(西から) 8. 東区1面下建物4(北から)	361	PL. 3	1. 西区1b面(南から) 2. 西区1b面塙1(北から) 3. 西区1b面塙1(南から) 4. 西区1b面塙1(南から) 5. 西区1b面(南から) 6. 西区1b面塙1(南から) 7. 西区1b面塙1(北から) 8. 西区1b面塙1(北から)	363
PL. 2	1. 東区1面下建物5(南から) 2. 東区2面(北から) 3. 東区2面木組み遺構、 溝3(南から) 4. 東区2面建物6(西から) 5. 東区2面豎穴状遺構 (東から) 6. 東区トレンチ(北から) 7. 東区トレンチ(南から) 8. 東区3面(北西から)	362	PL. 4	1. 西区1面基壇2(北から) 2. 西区南壁基壇2 セクション(北から) 3. 西区1b面建物8(北から) 4. 西区1b面建物7(南から) 5. 西区1c面(北から) 6. 西区1c面(南から) 7. 西区1c面石囲い遺構1 (東から) 8. 西区1c面建物10(東から)	364
			PL. 5	1. 西区1d面(南から) 2. 西区1d面(北から)	365

3. 西区1d面塀2(西から)	365	PL. 7	1. 西区2面建物15(北から)	367
4. 西区1d面塀2(南から)	365		2. 西区2面建物15(東から)	367
5. 西区1d面塀2(北から)	365		3. 西区2面塀3、4 (北東から)	367
6. 西区1d面石囲い遺構2 (西から)	365		4. 西区2面塀3、4(北から)	367
7. 西区1d面建物11内 (北から)	365		5. 西区終了状況(南から)	367
8. 西区1d面建物11 (西から)	365		6. 西区南トレンチ、 及び西壁(東から)	367
PL. 6 1. 西区1d面建物13 (東から)	366	PL. 8	7. 西区北トレンチ(東から)	367
2. 西区1d面建物13北部 (東から)	366	PL. 9	8. 西区南トレンチ(東から)	367
3. 西区1d面建物13出土 (南東から)	366	PL. 10	出土遺物(1)	368
4. 西区2面建物13下出土 (西から)	366	PL. 11	出土遺物(2)	369
5. 西区2面建物14(東から)	366	PL. 12	出土遺物(3)	370
6. 西区2面建物14出土 (南から)	366	PL. 13	出土遺物(4)	371
7. 西区2面(南から)	366	PL. 14	出土遺物(5)	372
8. 西区2面(北から)	366	PL. 15	出土遺物(6)	373
		PL. 16	出土遺物(7)	374
		PL. 17	出土遺物(8)	375
		PL. 18	出土遺物(9)	376
			出土遺物(10)	377
			出土遺物(11)	378

表 目 次

表1 出土遺物計測表(1)	337	表9 出土遺物計測表(9)	345
表2 出土遺物計測表(2)	338	表10 出土遺物計測表(10)	346
表3 出土遺物計測表(3)	339	表11 出土遺物計測表(11)	347
表4 出土遺物計測表(4)	340	表12 出土遺物計測表(12)	348
表5 出土遺物計測表(5)	341	表13 出土遺物計測表(13)	349
表6 出土遺物計測表(6)	342	表14 砥石一覧表	350
表7 出土遺物計測表(7)	343	表15 遺物計数表	352
表8 出土遺物計測表(8)	344		

第1章 遺跡概観

第1節 遺跡の立地（図1）

本調査地（図1-1）はJR鎌倉駅から北へ約900m、扇ヶ谷の中央付近に位置している。扇ヶ谷は鎌倉の北西に位置する大規模な谷戸で、英勝寺の門前あたりを中心に扇を広げたような形に、大小の谷戸が開析している地域である。扇ヶ谷には寿福寺、英勝寺、海藏寺、浄光明寺等の寺院が存在するが、多宝寺、智岸寺、新清涼寺、法泉寺、勝因寺等の廃寺も多く存在した地域でもある。海藏寺のある会下ヶ谷から流出する扇ヶ谷川は亀ヶ谷辻から寿福寺前まではほぼ武藏大路に沿って流れている。

本調査地は扇ヶ谷川の東側、南西方向に開口する泉ヶ谷と勝縁寺ヶ谷に挟まれた小谷戸（藤ヶ谷）の開口部南側に位置しており、川の対岸は智岸寺跡である。調査地の西側約40mに扇ヶ谷川、及び武藏大路が南北に走り、そこから北へ約100mで亀ヶ谷辻となる。地番は扇ガ谷二丁目298番1イである。

武藏大路の道筋については諸説あって定まらない。『鎌倉市史』総説編では鶴ヶ岡八幡宮社頭から西へ進み、寿福寺前を経て亀ヶ谷切通し、及び化粧坂に至る道、『「鎌倉」の古道』では亀ヶ谷坂から寿福寺前、六地蔵を経て長谷入口の塔ノ辻に至る道としている。町屋免許の地として『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条に記された「亀谷辻」、文永二年（1265）三月五日条の「武藏大路下」は本調査地付近と考えられ、繁華な商業地域であった。

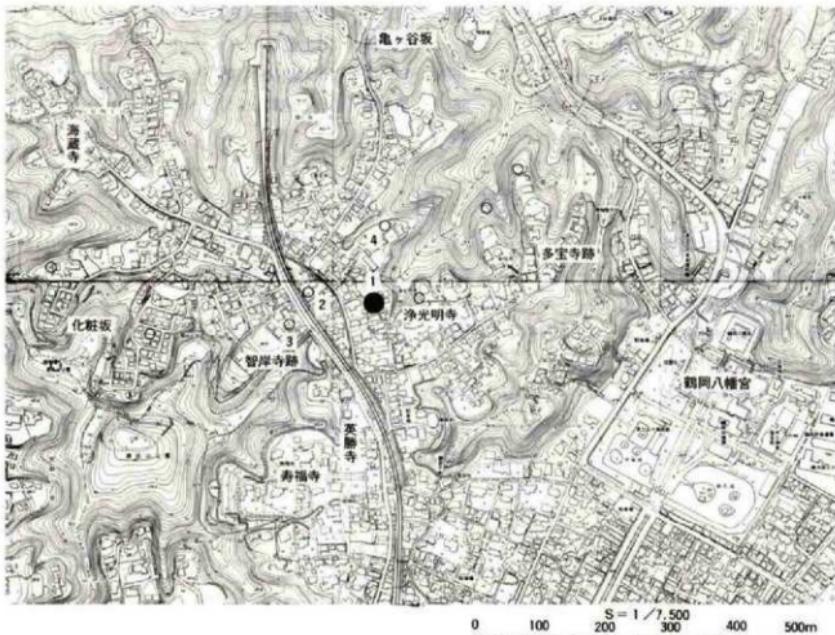


図1 調査地点位置図

扇ヶ谷での発掘事例は多いとはいえないが、以下、周辺で実施された発掘調査について記していく。本調査地点から西に約90mの扇ヶ谷二丁目382番1地点（図1-2）では平成元年（1989）に調査が実施され2枚の遺構面を検出している。1面では石積み遺構、溝、池状遺構、懸樋、土坑、ピット等が、2面では建物址、切石敷、礎石建物、柱穴列、溝、井戸、土坑、ピット等が検出され、智岸寺の境内地、及びその前面に展開する町屋の可能性を指摘している。出土遺物には鉄窯製品や仏像、太鼓樽の栓がみられ、瀬戸窓入子や白かわらけが多く、漆塗りの木地板・皿には人物や建物など珍しい絵柄のものが含まれていた。年代的には1面が14世紀後半頃、2面が14世紀前半頃に比定されている。尚、智岸寺谷（図1-3）では昭和63年（1988）に調査が行われ、14世紀代の遺構としては礎石建物、掘立柱建物、石材を用いた暗渠を有する溝、かわらけ溜り、土坑等を検出している。調査区の前面部では岩盤をL字状に掘削して、一段低い特殊な空間が形成されていたようである。岩盤壁面には土坑状、或いは棚状の掘り込みを設け、壁下に周溝がめぐり、その内側には掘立柱建物を配する構造で、宗教的な空間の可能性が指摘されている。

本遺跡の立地する谷戸奥の扇ヶ谷三丁目397番地点（図1-4）では平成12年に調査が実施され、13世紀後半以降のひな壇状の造成、及び不明瞭ではあるが基壇建物を検出し、寺院の推定は控えているが、寺域の可能性を指摘している。

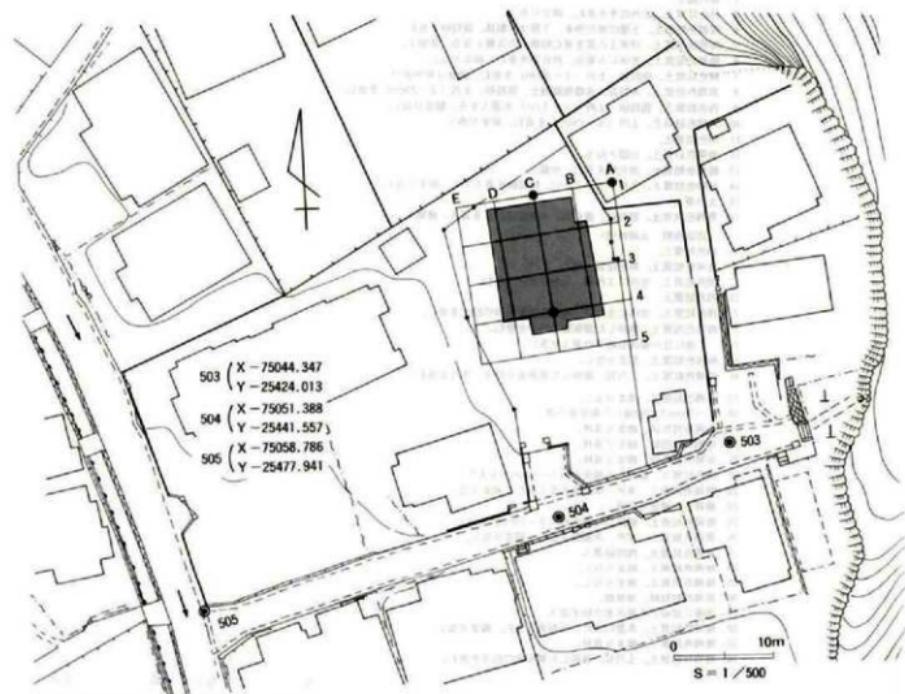
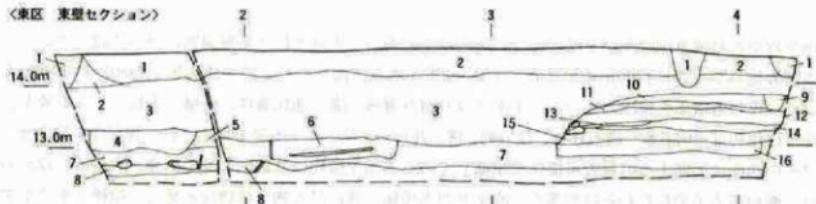
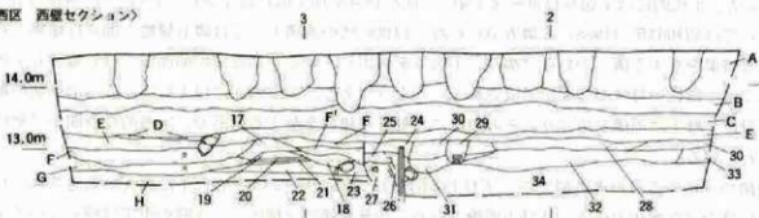


図2 グリッド割付図

〈東区 東壁セクション〉



〈西区 西壁セクション〉



〈東区 東壁 土層説明〉

1. 現代地盤。
2. 現代土壌。
3. 棕褐色粘質土。土丹粒子を含む。緻密あり。
4. 棕褐色粘質土。上層は炭化物を、下層は木製品、粗粒砂を含む。
5. 棕褐色粘質土。砂質土と炭を含む粘質土の互層となる。建物2。
6. 棕褐色粘質土。全体に木製品、炭化物を含む。緻密なし。
7. 棕褐色粘質土。粗粒砂、土丹（3～20cm）を含む。緻密りやあり。
8. 黒褐色粘質土。木製品、有機物腐植土、粗粒砂、土丹（3～20cm）を含む。
9. 棕褐色粘質土。粗粒砂、土丹（1～3cm）を混入する。緻密なし。
10. 黄褐色粘質土。土丹（3～15cm）を含む。緻密り。
11. 棕褐色粘質土。
12. 黄褐色粘質土。10層と似る。
13. 棕褐色粘質土。炭化物を混入する。緻密。
14. 棕褐色粘質土。土丹（1～3cm）、粗粒砂を混入する。緻密なし。
15. 土丹層。
16. 黑褐色粘質土。粗粒砂、炭化物、有機物腐植土を混入。建物4。

〈西区 西壁 土層説明〉

- A. 棕褐色粘質土。
- B. 棕褐色粘質土。黒色粘質土混入。
- C. 棕褐色粘質土。全層に土丹粒、かわらけ片を含む。
- D. 棕褐色粘質土。
- E. 棕褐色粘質土。全体に土丹粒、破砕した凝灰岩の粒子を含む。
- F. 棕褐色粘質土。破砕した凝灰岩の粒子を含む。
- F'：F層に比べ凝灰岩粒子の混入が多い。
- G. 棕褐色粘質土。緻密なし。
- H. 棕褐色粘質土。土丹粒、破碎した凝灰岩の粒子、木片を含む。
17. 黑褐色粘質土。緻密なし。
18. 5～20cmにわたる破砕した凝灰岩の層。
19. 黑褐色粗粒砂。緻密り良好。
20. 棕褐色粗粒砂。緻密り良好。
21. 棕褐色粗粒砂。緻密り良好。
22. 棕褐色粘質土。破碎した凝灰岩（5～10cm）を含む。
23. 棕褐色粘質土。木片、木製品を多く含む。緻密なし。
24. 破砕した凝灰岩の層。
25. 棕褐色粘質土。破砕した凝灰岩（5～10cm）を含む。
26. 黑褐色粘質土。木片、木製品を含む。緻密なし。
27. 黑褐色粘質土。粗粒砂混入。
28. 棕褐色粘質土。緻密なし。
29. 棕褐色粘質土。緻密なし。
30. 黑褐色粗粒砂。地盤層。
31. 30層に破碎した凝灰岩の粒子混入。
32. 棕褐色粘質土。多量の木片、木製品を含む。緻密なし。
33. 棕褐色粘質土。緻密良好。
34. 棕褐色粘質土。土丹粒、破碎した凝灰岩の粒子を含む。

0 S = 1 / 80 4 m

図3 調査区壁セクション図

第2節 調査の経過（図2）

本調査は鎌倉市扇ガ谷二丁目298番イ地点における個人専用住宅建設に伴う事前調査として平成12年8月3日から11月30日にかけて実施された。調査面積は122.2m²である。排土処理等の都合から調査区を東・西に分割し、東区、西区と呼称し、東区の調査終了後に西区の調査を実施した。現地表は海拔14.5m前後を測り、以下40~70cmは現代の盛土が堆積している。調査はこの現代盛土を重機により除去し、以下は人力により掘削を行った。現地調査の段階では東区では1面、1面下、2面を、西区では1面、1b面、1c面、1d面、2面を平面的に調査し、深度的に危険なため3面、4面、及び5面に関してはトレント調査による部分的な確認である。検出されたのは13世紀後半~15世紀前半わたる遺構群であり、整理作業の段階で東西両区を合成し、1~5期の遺構として集約している。

本遺跡で検出された遺構は基壇と考えられる版築、板組みの壁構造を有する建物、竪穴状遺構、木組み遺構、土間状遺構、塀、切石列、道路状遺構、石畳い遺構、かわらけ溜り、木器溜り、土坑、ピット等である。出土遺物はテンバコ150箱と非常に多く、特にかわらけや多種多量の木製品が目立つ。

現地調査にあたり、調査敷地内に4.0mの方眼を設定した。東西軸、及び南北軸には北から南へアラビア数字（1~5）を、東から西へアルファベットを付し、それぞれの方眼区画（グリッド）の呼称には北東角の軸線交点を充てた。この方眼基準点と国土座標系との関係を、鎌倉市四級基準点（S 1 2006-503、S 1 2006-504、S 1 2006-505）を基に測量・算出したところ、A-1はX-75018.050、Y-25433.869、C-1はX-75018.846、Y-25441.829、C-4はX-75030.787、Y-25440.636の国土座標値を得ている。尚、グリッド南北軸は真北に対して5°13'44"西に傾いている。また、標高の記載については、鎌倉市三級基準点であるNo.43424よりレベル移動を行い、海拔標高値を使用している。

第3節 堆積土層（図3、61）

今回の調査では1~5期の遺構を確認することができた。ここでは調査区の東壁、西壁で観察された堆積土層について説明し、後述するトレントで確認された土層についても簡単に触れておきたい。

本遺跡における最古の遺構確認面である5期（5面）は、中世地山である黒褐色粘質土上面で確認された。検出レベルは海拔11.5m前後で、西区南トレントでは遺構の可能性を有する落ち込みラインを確認している。4期（4面）の遺構は海拔12.0~12.1m、3期（3面）は海拔12.2~12.4mで確認されている。基盤となるのは締まり良好な黒褐色~暗褐色粘質土を主体とする土層で、土丹粒子や破碎した粗粒凝灰岩の粒子を含んでいる。3~5期はトレント調査による部分的な確認であり、遺構面は更に増える可能性もある。

2期（1面・2面）の遺構は海拔12.6~13.0m、1期（1面・1b面・1c面）の遺構は海拔13.0~13.2mで確認されている。いずれも基盤となるのは暗褐色~暗褐色粘質土で、土丹粒子や破碎した粗粒凝灰岩粒子を混入している。尚、1期から2期への掘り下げ途中でも遺構が検出されており、1B期（1面下）の遺構として扱っている。1B期の遺構確認レベルは海拔13.0m前後である。

遺跡地の現地表は海拔14.5m前後であり、以下40~70cmは褐色~暗褐色粘質土の現代盛土である。1期（1面）までの掘り下げ途中、海拔13.2~13.5mには褐色粘質土が堆積し、ここからは粉質胎土で体部が直線的、或いは外反気味に立ち上がるタイプのかわらけの完形品等がある程度集中して出土している。これらの遺物は1期包含層出土遺物として扱った。

【参考文献】

阿部正道 1958 『「鎌倉」の古道—鎌倉国宝館論集第二—』 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

- 高柳光寿 1959 「鎌倉市史 総説編」 吉川弘文館
- 貫 達人・川副武胤 1980 「鎌倉廃寺事典」 有隣堂
- 大河内勉 2000 「武藏大路周辺遺跡発掘調査報告書・扇ヶ谷二丁目382番1地点」 同発掘調査団
- 大河内勉 1994 「寺院・信仰・葬制」 『特集・中世都市・鎌倉の考古学—考古学ジャーナルNo. 381』 ニュー・サイエンス社
- 宗基秀明・宗基富貴子 2001 「武藏大路周辺遺跡(No. 194) 扇ヶ谷三丁目397番地点」 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』 鎌倉市教育委員会

第2章 検出した遺構と遺物

今回の調査では排土処理等の関係から調査区を分割し、東区の調査終了後、西区の調査を実施した。現地調査の段階で東区は1面、1面下、2面を、西区は1面、1b面、1c面、1d面、2面を平面的に調査し、深度的に危険を伴うため3面、4面、及び5面に関してはトレンチ調査とした。検出されたのは13世紀後半から15世紀前半にわたる遺構・遺物であり、整理作業の段階で1～5期の遺構群として東西両区を合成している。また、1期から2期への掘り下げ途中に検出された遺構が検出された遺構は1B期として扱っている。本章では1期、1B期、2期、トレンチ調査（3～5期）の順に、検出した遺構と遺物について記載していく。尚、期と面との対応は1期=1面・1b面・1c面、1B期=1面下、2期=1d面・2面、3期=3面、4期=4面、5期=5面である。

第1節 1期（図4～図19）

1期（1面・1b面・1c面）の遺構は海拔13.0～13.2mで確認されている。基盤となるのは暗褐色～暗褐色粘質土で、土丹粒子や破碎した粗粒凝灰岩粒子を混入している。検出された遺構の軸方向には統一性が看取され、それぞれがほぼ直交、平行の関係にあるようだ。検出された遺構は基壇、建物址、切石列、塀、道路状遺構、溝、石囲い遺構、土坑、ピットである。尚、1期包含層出土遺物もここに含めている。

a. 1期包含層出土遺物（図7、図8）

1期（1面）までの掘り下げ途中、海拔13.2～13.5mで検出された褐色粘質土層から出土した遺物をここに集めた。1～3は貿易陶磁である。1・2は龍泉窯系の青磁で、1は劃花文碗、2は鎖連弁文碗、3は青白磁梅瓶である。4～8は瀬戸窯の製品で、4・5は灰釉壺、6は灰釉柄付片口、7は鉄釉線種小皿、8は灰釉卸皿である。9は体部内面に御目を有する灰釉皿で、瀬戸窯の製品であろう。10は山茶碗窯系の御目付碗である。11・12は常滑窯の甕で、11の縁帯幅は4.5cmを測り、12の外面上には格子目の押印を有する。13は備前窯の擂鉢。14・15は瓦質火鉢で、14は宝珠、沈線、及び菊花の、15は沈線と唐草の施文を有する。16は瓦質の鉢で口縁部外面に菊花のスタンプを有する。17はかわらけ質の鉢である。18～41はロクロ成形のかわらけで、31～41はまとまって出土している。18～26、38～41は小皿、27～29、32～37は中皿、30・31は大皿である。36・37・41には煤が付着し、36は片口状に口縁の一部を打ち欠いている。42は丸瓦であり、凸面は繩目叩き後ナデ、凹面は網目を有し、側面、端面はヘラ切りである。43～46は研磨痕を有する常滑片である。47は篆書の北宋銭「聖宋元寶」である。初鑄1101年。48は滑石製のスタンプで、菊花を彫っている。49～52は砥石で、49・50は伊予産の中砥、51・52は鳴滝産の仕上げ砥である。

b. 基壇1・基壇2（図4・5・9・10）

基壇1・2はA～C-3～4グリットから検出されている。東区の調査時には、東区範囲内で完結すると考えられていたが、西区調査の段階で、更に西へ広がることが確認された。基壇1とは東区、基壇2とは西区調査時の呼称であり、同一の遺構である。確認範囲は東西約8.0m、南北約3.5mで更に調査区外へと広がるものである。南北の軸方向はN-19°～W前後と考えている。調査区壁セクションの検討から、基壇上面のレベルは東端で13.8m、西端で13.6m、基底部は東端で13.1m、西端で12.9mを測る。版築は締まり良好な褐色～灰褐色の粗粒砂、細粒砂の互層で、周縁には拳大～人頭大の破碎した凝灰岩が検出されている。海拔13.2～13.3mで検出された褐色～暗褐色土からは多量のかわらけが出土し

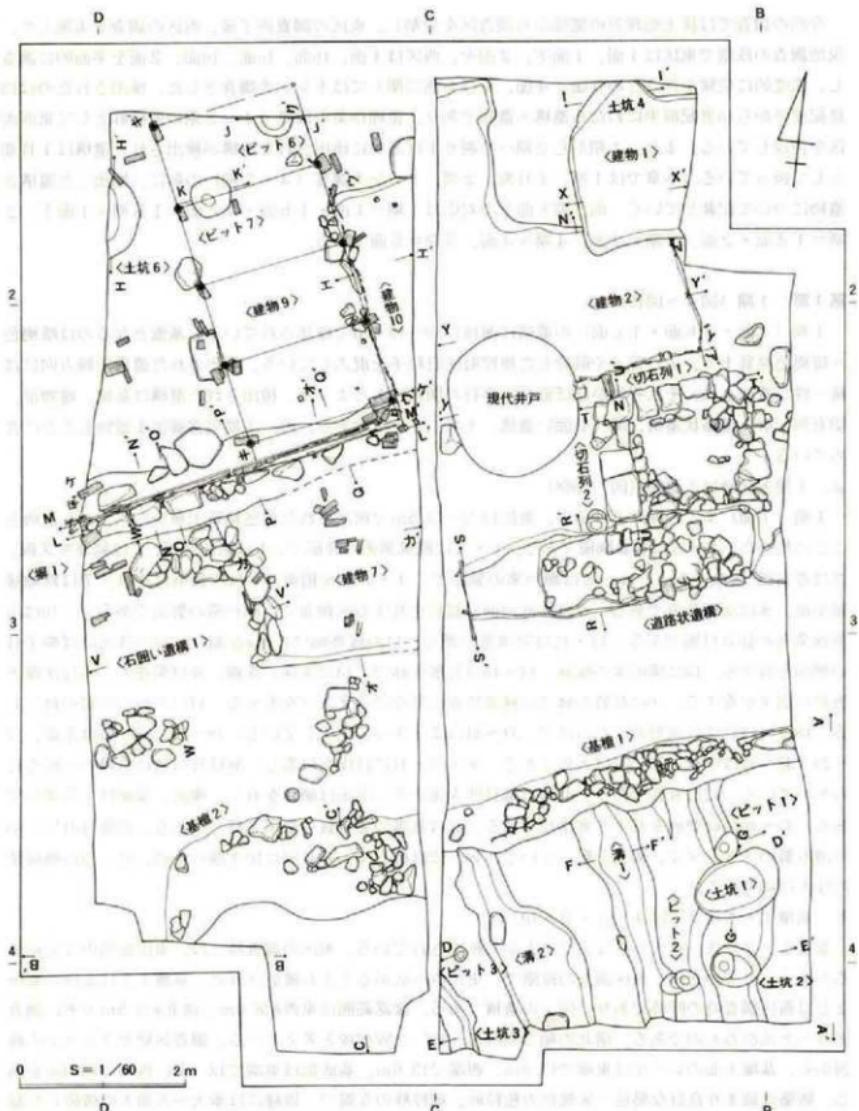


図4 1期全体図

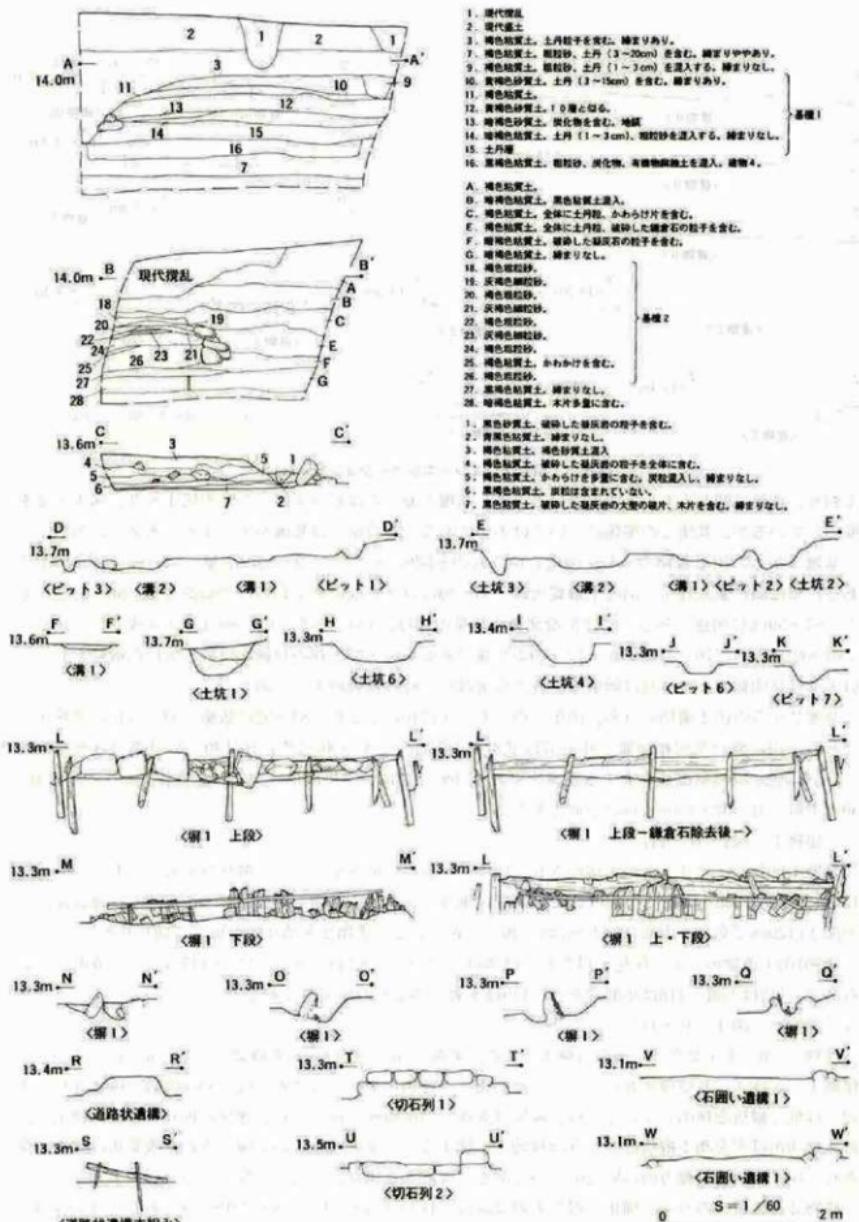


図5 1期セクション・エレベーション図（1）

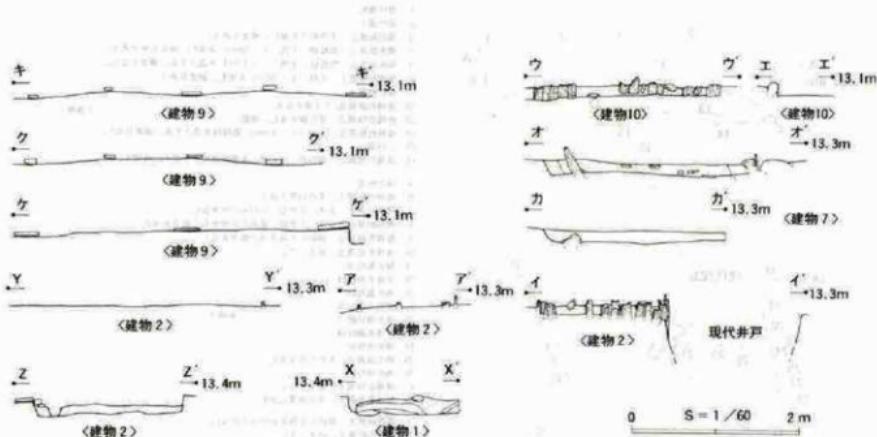


図6 1期セクション・エレベーション図(2)

ており、地鎮に関わるものと考えている。尚、基壇上面からはピット1~3、土坑1~3、溝1~2を検出しているが、基壇との関係については不明である。現段階では基壇が先行すると考えている。

基壇1からの出土遺物のうち、図化し得たものを図9に示した。53~59は版築、60~83は地鎮出土である。53は瀬戸窯入れ子。54は土器質火鉢。55~59はロクロ成形のかわらけで55が大皿、56~59が小皿で、57~59は灯明皿である。60は常滑窯で縁帯の幅は2.5cmである。61~80はロクロ成形のかわらけで61~69が大皿、70~71が中皿、72~80が小皿である。61・75・78の口縁には打ち欠いた痕跡を有し、61・75は灯明皿である。81は研磨痕を有する常滑片。82は鉄製の刀子である。

基壇2からの出土遺物のうち、図化し得たものを図10に示した。84~92は版築、93~111は地鎮出土である。84は瀬戸窯灰釉鉢。85~87は常滑窯の製品で、85・86は片口鉢II類、87は甕で縁帯の幅は2.4cmを測る。88は研磨痕を有する常滑片である。89~111はロクロ成形のかわらけで89・93~99は大皿、90は中皿、91・92・100~111は小皿である。

c. 建物1(図4・6・11)

建物1はB-1グリットから検出されている。平面は方形を呈し、浅い掘り方を有するもので、東西1.6m、南北1.7mを確認しており、更に調査区東外へ広がる。底面の海拔は13.0mを測り、確認面からの深さは20cmである。南北の軸方向はN-20°-Wである。建物2を切り、土坑4に切られる。

建物1出土遺物のうち、図化し得たものは図11-112・115・119である。112・115はロクロ成形のかわらけで、112は大皿、115は小皿である。119は木製の漆塗りの施文蓋である。

d. 建物2(図4・6・11)

建物2はB-1・2グリットから検出された。東西3.5m、南北4.0mを確認し、更に北、西へ広がる。建物1、土坑4、及び現代井戸により一部を失う。建物の東辺では3本の杭が50cm間隔で確認され、南辺では杭と縦板を検出している。杭、縦板は海拔13.2m前後で検出され、建物の掘り方底面は硬化し、海拔13.0mほどを測る縦板は3~5cm程地中に埋まる。北東部は一段高く検出され、版築状に硬く地業されている。南北の軸方向はN-20°-Wである。後述する建物10と同一となろうか。

建物2出土遺物のうち、図化し得たものは図11-113・114・116~118・120~128である。113・114はロクロ成形のかわらけ大皿、116~118は小皿である。120~128は木製品で、120は円板、121~123は箸、124は板杓子、125は草履芯、126は箆であり、127は串状、128は棒状を呈するものである。

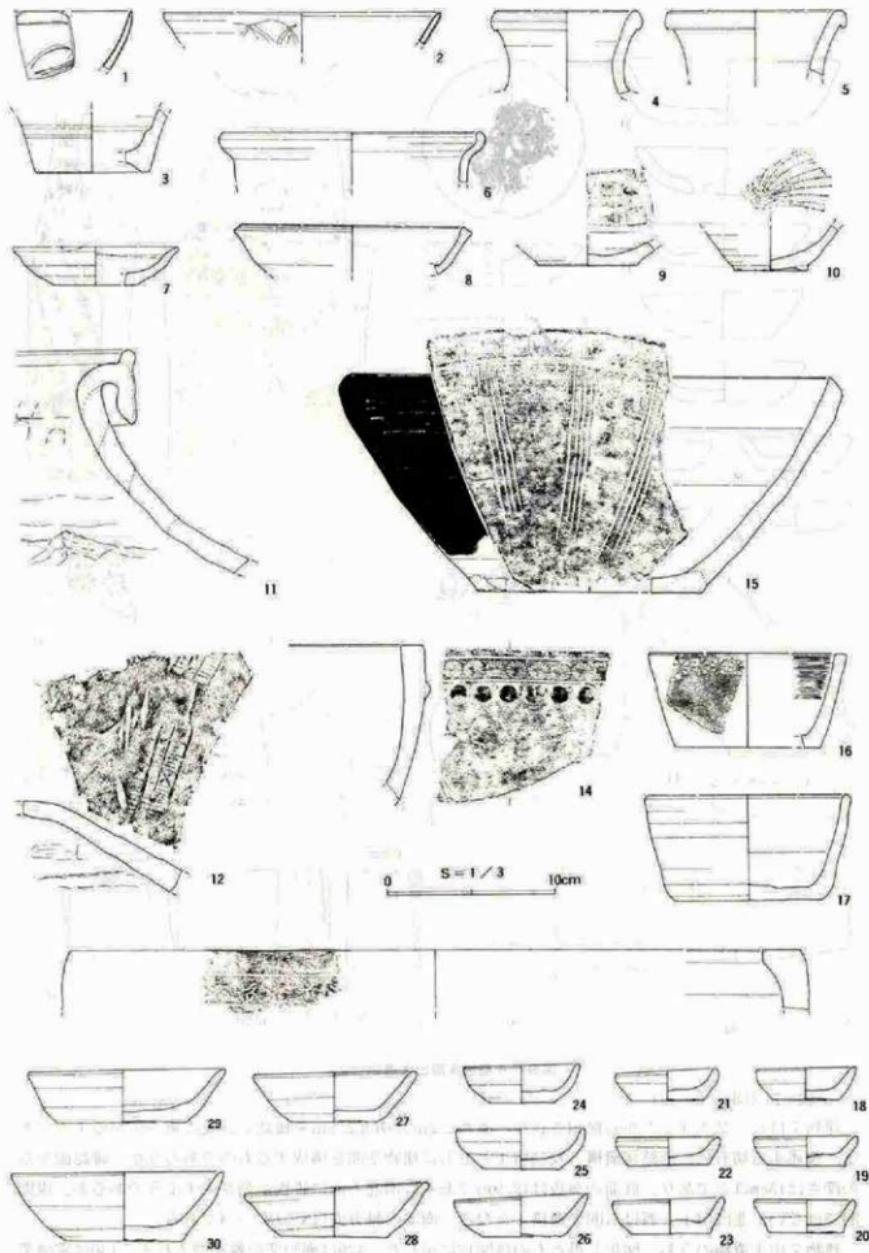


图7 1期包含层出土遗物(1)

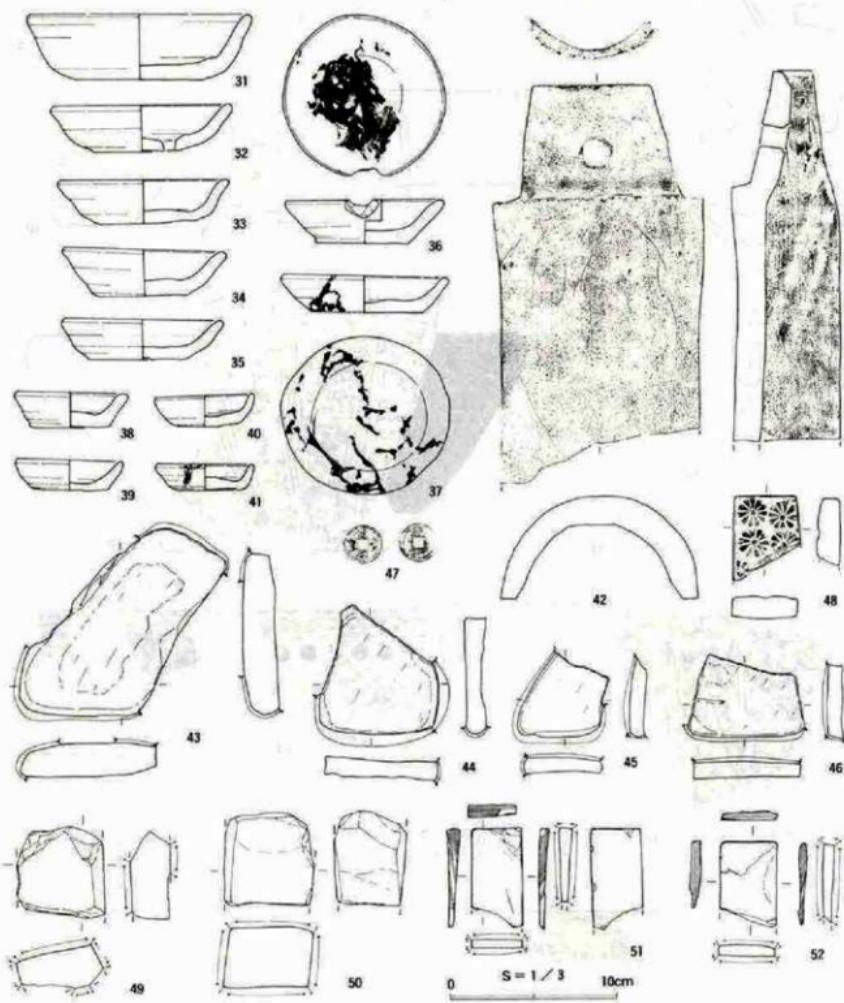


図8 1期包含層出土遺物 (2)

e. 建物7 (図4・6・12)

建物7はC-2グリットから検出された。東西2.2m、南北2.5mを確認し、更に東へ広がるようである。後述する切石列、道路状遺構、及び塀1とともに建物空間を構成するものであろうか。確認面からの深さは15cmほどであり、底面の海拔は12.9mである。南北方向に礎板が列を成すようであるが、規則的ではない。北は塀1、西は石囲い遺構1となる。南北の軸方向はN-18°-Wである。

建物7出土遺物のうち、図化し得たものは図12に示した。129は瀬戸窯の輪花型入れ子。130は常滑窯片口鉢II類。131は常滑窯壺で縁帯幅は2.2cmを測る。132~157はロクロ成形のかわらけで、132~141が

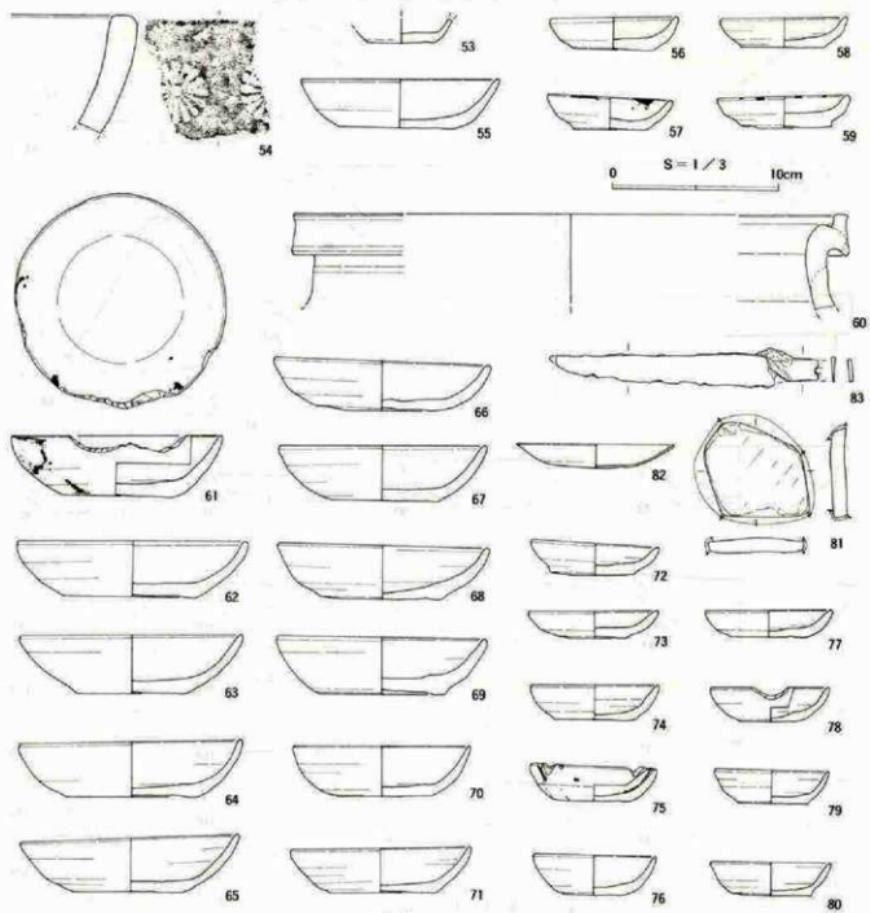


図9 基壇1出土遺物

大皿、142・143が中皿、144～157が小皿であり、141・146は灯明皿である。158は篆書の北宋銭「聖宋元寶」である。初鑄1101年。159～169は木製品であり、159は漆塗り施文皿、160は漆塗り施文椀、161は陽物形？、162は刀子の鞘状を呈するもの、163は2孔を有する板材、164～166は箸、167は棒状、168・169は串状を呈するものである。

f. 建物9（図4・6）

建物9は整理作業段階で復元した礎板列で、C-1・2グリットに位置する。東西は芯～芯1.8mで1間、南北は芯～芯1.0mで4間を確認しており、更に北へ広がる可能性もある。礎板は縮まり良好な暗褐色粘質土上面の海拔12.9～13.0mで検出され、ピット等の掘り方は確認されていない。東は建物10、南は廻1となる。南北の軸方向はN-20°～Wである。遺物は出土していない。

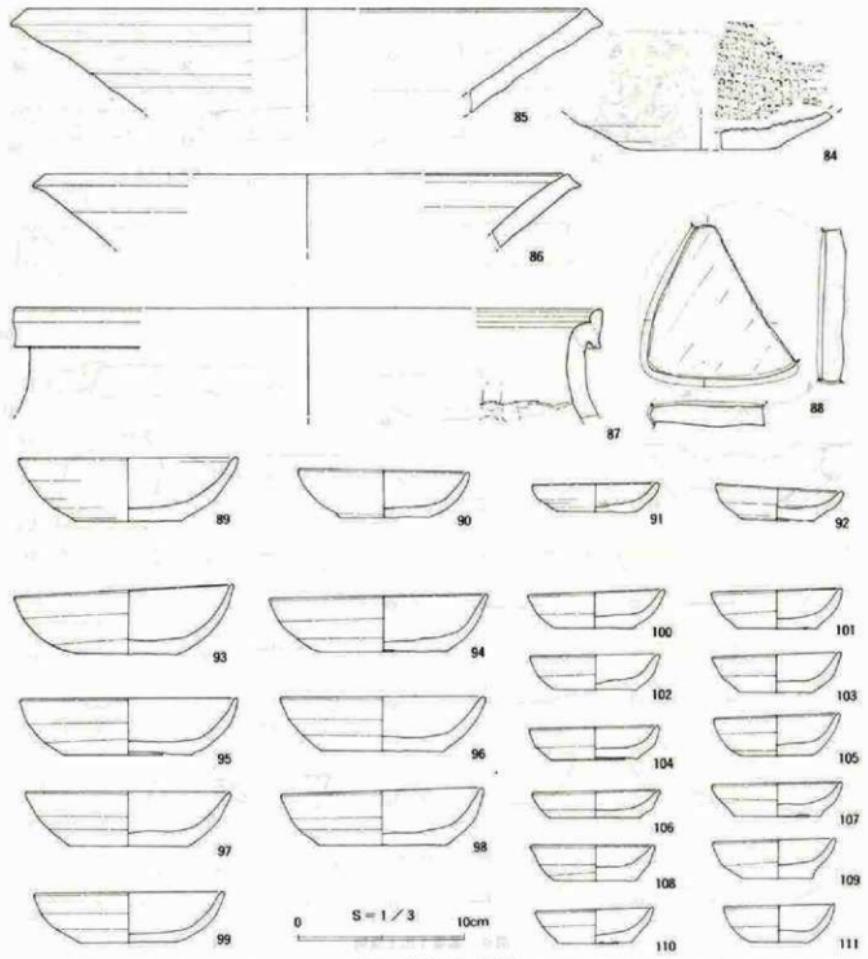


図10 基壇2出土遺物

g. 建物10（図4・6・13）

建物10はC-1・2グリットから検出されている。東西1.1m、南北2.4mを確認し、西辺には縦板が配される。縦板の検出レベルは海拔13.0m程、底面の深さは15cm程で、南北の軸方向はN-20°-Wである。前述した建物2と同一となろうか。南は塀1、西は建物9となる。

建物10出土遺物のうち、図化し得たものは図13-170～173に示した。170・171はロクロ成形のかわらけ小皿である。172は吉備系土師質土器。173は漆塗り施文皿で、内面は赤色漆塗りである。

h. 切石列1・切石列2（図4・5）

切石列1は東西方向、切石列2は南北方向に並ぶ鎌倉石であり、B-2グリットで検出された。切石列1は北側に面を合わせて並べられており、上面の海拔は13.2m前後でほぼ平らである。切石列2は西

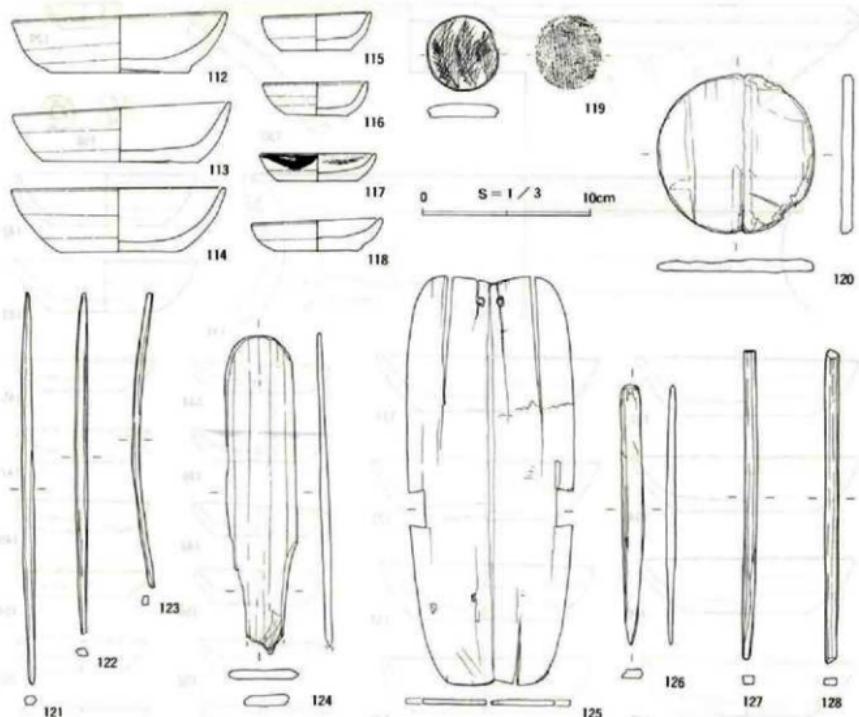


図11 建物1、2出土遺物

側に面を合わせているよう、上面の海拔は13.3mを測り、ほぼ平らといえる。両石列は直交関係があり、南北の軸方向はN-17°-Wである。石列の内部は20~40cm大の土丹が投げ込まれた、炭化物を含む暗褐色粘質土となる。遺物は出土していない。

i. 塚1 (図4・5・13)

塚1はC-2グリットから検出されている。東西4.2mを確認し、西は調査区外、東への延長部分は建物2の南辺となる。幅10cm前後の縦板を、長さ1.6~2.0mの横板で挟み、約1.0mおきに配した角柱で支える構造であり、上下2段が確認されている。上段の横板の海拔は13.2m前後、下段の横板は13.0m前後を測り、上段の南側には鎌倉石を据えている。縦板下端の海拔は、一番深いもので12.7mを測る。東西の軸方向はN-70°-Eである。以下、2期、3期においてもほぼ同じような位置で塚と考えられる木組みが検出されている。

塚1出土遺物のうち、図化し得たものは図13-174~208である。174~197はロクロ成形のかわらけで、174~180は大皿、181・182は中皿、183~197は小皿であり、182は灯明皿である。198~207は木製品で198~201は漆塗り施文皿、202・203は漆塗り無文皿で、203の内面は赤色漆塗りである。204~206は箸、207は漆塗りの雲形肘木。208は行書の北宋錢「元豐通寶」である。初説1078年。

j. 道路状構造 (図4・5・14)

道路状構造はA-B-2グリットから検出され、東西4.0m、南北幅0.7~1.1m程を確認している。西端には横板と杭による土留めがあり、西側の限界とし、東へは更につづくようである。全体的に土丹が

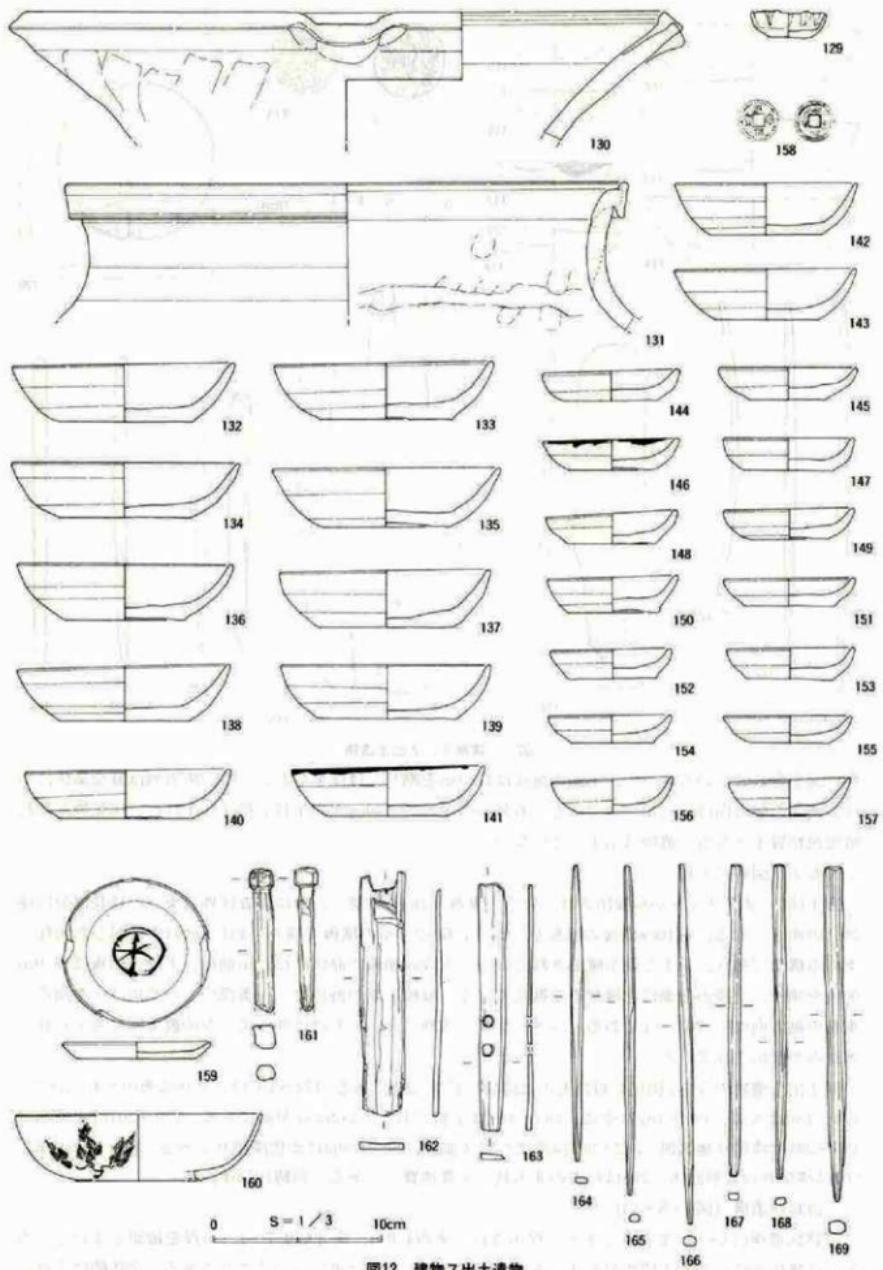
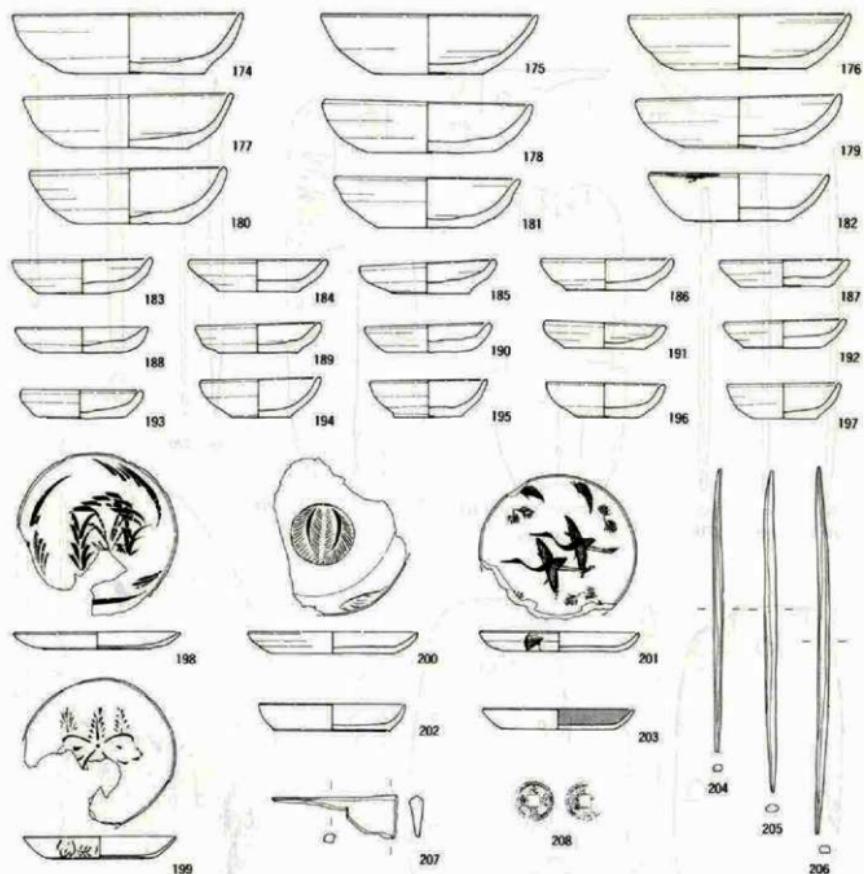
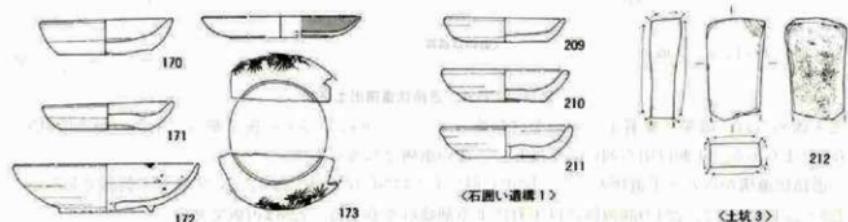


図12 建物7出土遺物



〈図13〉



〈石圓い造模1〉

0 S = 1 / 3 10cm

図13 建物10、塚1、石圓い造模1、土坑3出土遺物

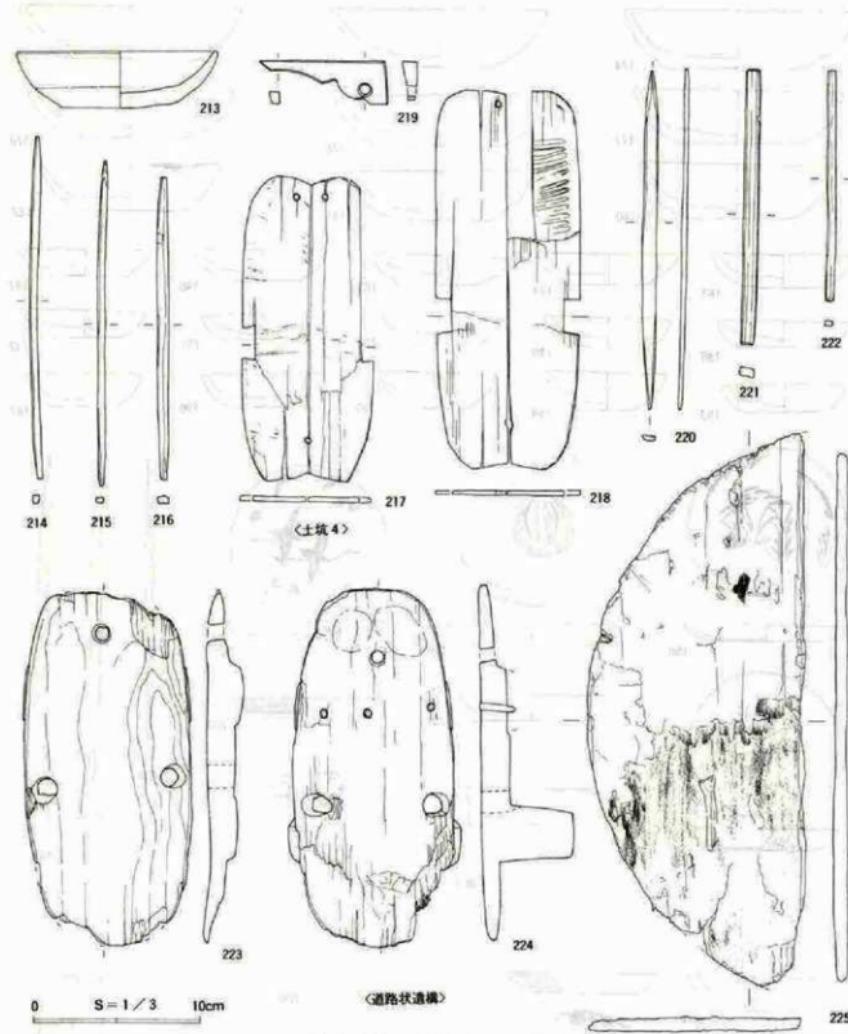


図14 土坑4、道路状遺構出土遺物

突き固められ、暗褐色粘質土、炭粒を含む盛り土で、上面は13.3m前後を測る。東西の軸方向はN-75°-Eである。北側は切石列1・2と接し、一連の遺構となる可能性もある。

道路状遺構からの出土遺物のうち、図化し得たものは図14の223~225で、いずれも木製品である。223・224は下駄で、224の前歯部には木釘による補修痕を有する。225は円板である。

k. 溝1 (図4・5)

溝1はA-B-3・4グリットから検出され、南北2.8mを確認している。幅40~70cm、確認面からの深さ10cm程で、底面の海拔は13.4m前後、南北の軸方向はN-20°+W前後を測る。覆土は暗褐色砂質

土が主体で、暗褐色粘質土、炭化物を混入する。図示できる遺物はない。

1. 溝2 (図4・5)

溝2はB-3・4グリットから検出され、南北2.5mを確認している。幅45~100cm、確認面からの深さ20cm程度で、底面の海拔は13.3m前後、南北の軸方向はN-30°~W前後を測る。覆土は暗褐色砂質土が主体で、暗褐色粘質土を混入する。図示できる遺物はない。

m. 石囲い遺構1 (図4・5・13)

石囲い遺構1はC-2グリットから検出されている。塀1の南、建物7の西側に位置し、東西2.5m、南北2.5mの範囲を確認し、西側には更に広がるようである。外周に拳へ人頭大の破碎した凝灰岩を配し、内側は土丹粒、凝灰岩粒子を含む褐色粘質土の版築となっている。南北の軸方向はN-20°~W程であろう。本址に先行する2期の段階にも、同じような位置に石囲い遺構2を検出しているが、性格については不明である。

石囲い遺構1出土遺物のうち、図化し得たものは図13-209~211に示した。209~211はロクロ成形かわらけの小皿である。

n. 土坑1 (図4・5)

土坑1はB-3グリットから検出されている。平面は梢円を呈し、東西110cm、南北70cmを確認している。確認面からの深さ40cm前後を測り、底面の海拔は13.2mである。覆土は暗褐色粘質土で、下層には土丹を多く含む。図示できる遺物はない。

o. 土坑2 (図4・5)

土坑2はB-3・4グリットから検出されている。平面は梢円を呈し、東西60cm、南北50cm、確認面からの深さ40cm前後を測り、底面は西側が深く海拔13.3mである。覆土は土丹粒、炭化物を多量に含む暗褐色粘質土である。図示できる遺物はない。

p. 土坑3 (図4・5・13)

土坑3はB-4グリットから検出されている。部分的な検出であり、平面形は不詳である。東西40cm、南北110cmを検出し、確認面からの深さ30cm前後を測り、底面の海拔は13.2mである。覆土は若干の炭化物を含む暗褐色粘質土である。

土坑3出土遺物のうち、図化し得たものは図13-212に示した上野産の中磁である。

q. 土坑4 (図4・5・14)

土坑4はB-1グリットから検出されている。部分的な確認であるが平面は梢円を呈し、東西90cm、南北60cmを検出した。確認面からの深さ25cm前後を測り、底面の海拔は13.0mである。覆土は明褐色有機物腐触土である。

土坑4出土遺物のうち、図化し得たものは図14-213~222に示した。213はロクロ成形かわらけの大皿である。214~222は木製品で、214~216は箸、217・218は草履芯、219は漆塗りの雲形肘木、220は鉢状、221・222は棒状を呈する。

r. 土坑6 (図4・5)

土坑6はC-1グリットから検出されている。部分的な検出で、平面形は不詳である。東西40cm以上、南北110cm以上の規模を有し、確認面からの深さ20cm前後を測り、底面の海拔は13.0m前後である。覆土は明褐色有機物腐触土である。図示できる遺物はない。

s. ピット1 (図4・5)

ピット1はB-3グリットから出土している。平面は梢円を呈し、長軸40cm、短軸20cm確認面からの深さは20cm、底面の海拔は13.4mを測る。覆土は炭化物をわずかに含む暗褐色粘質土である。遺物は出土

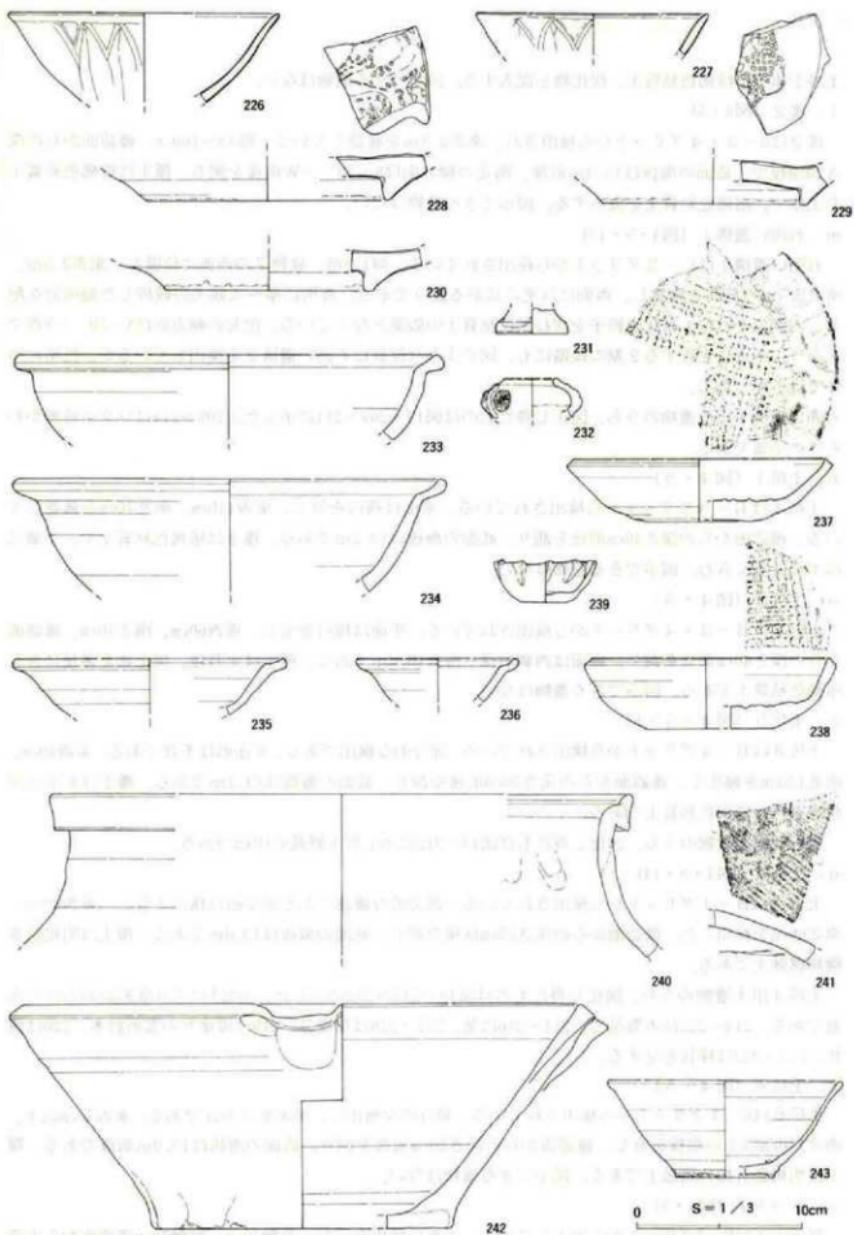


图15 1期出土遗物 (1)

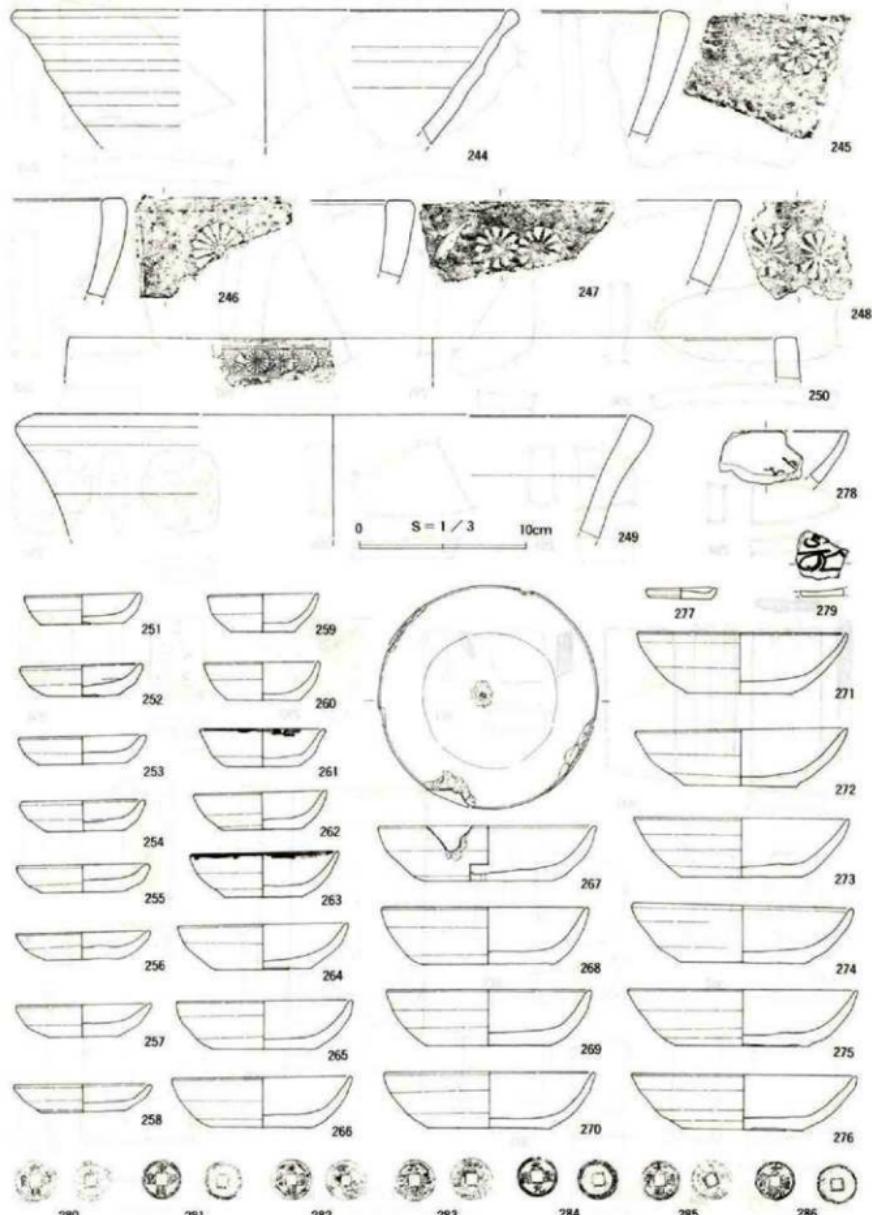


图16 1期出土遗物(2)

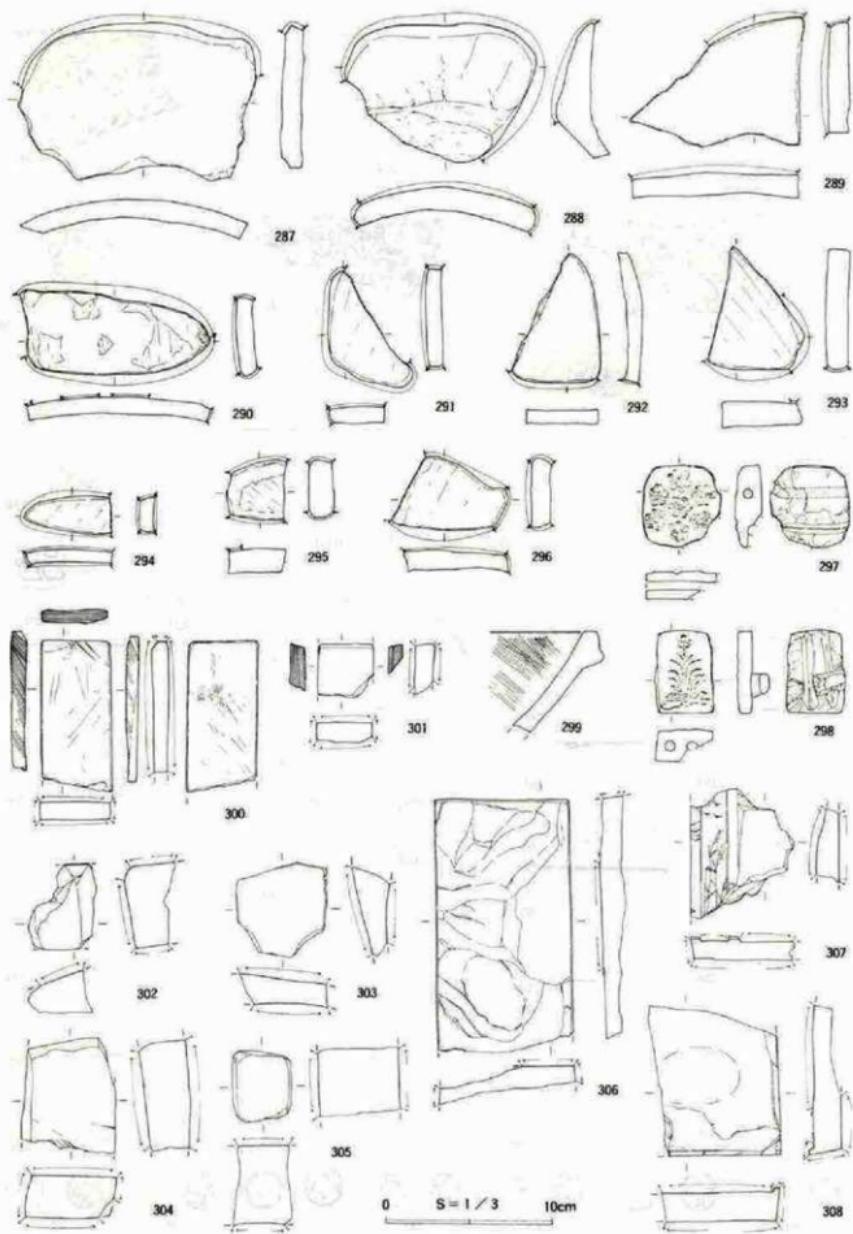


图17 1期出土遗物（3）

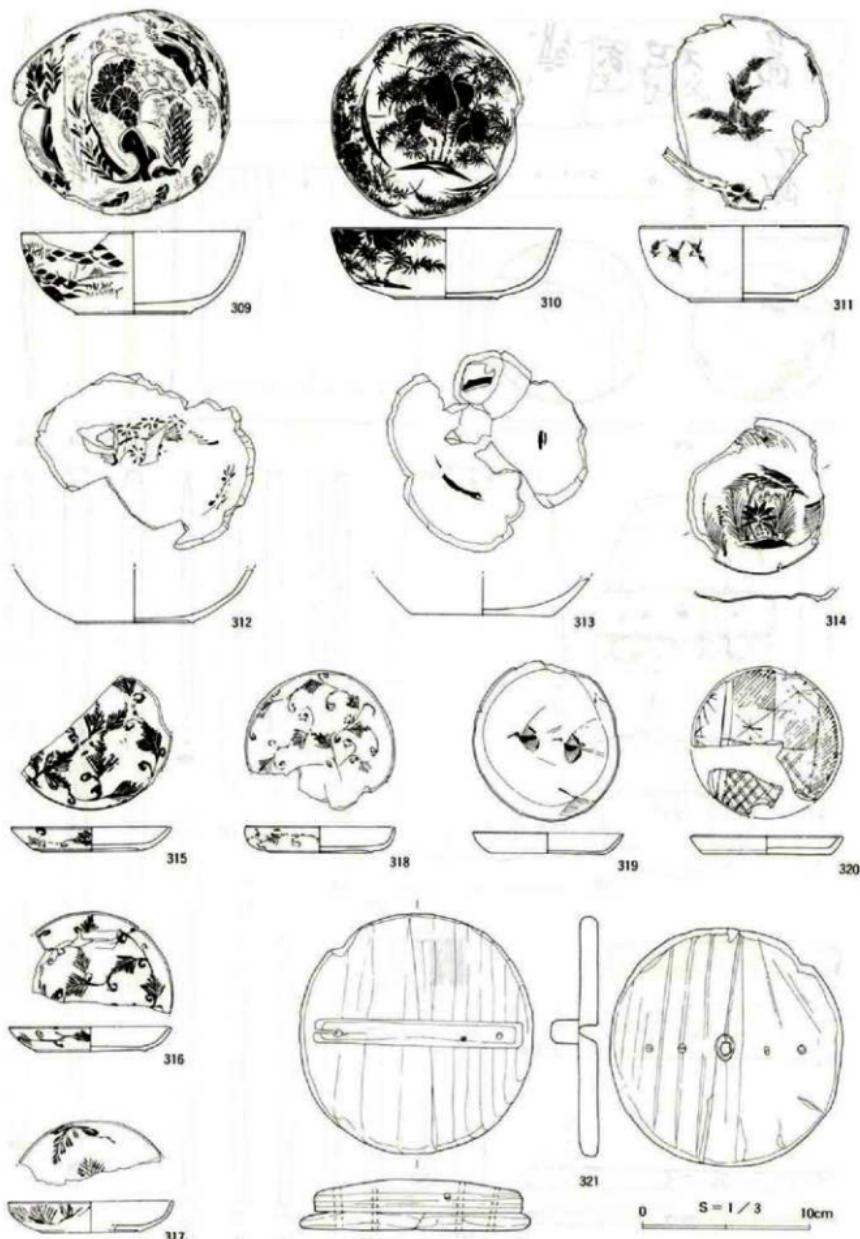


图18 1期出土遗物（4）

面 紙 銅 鑄 金

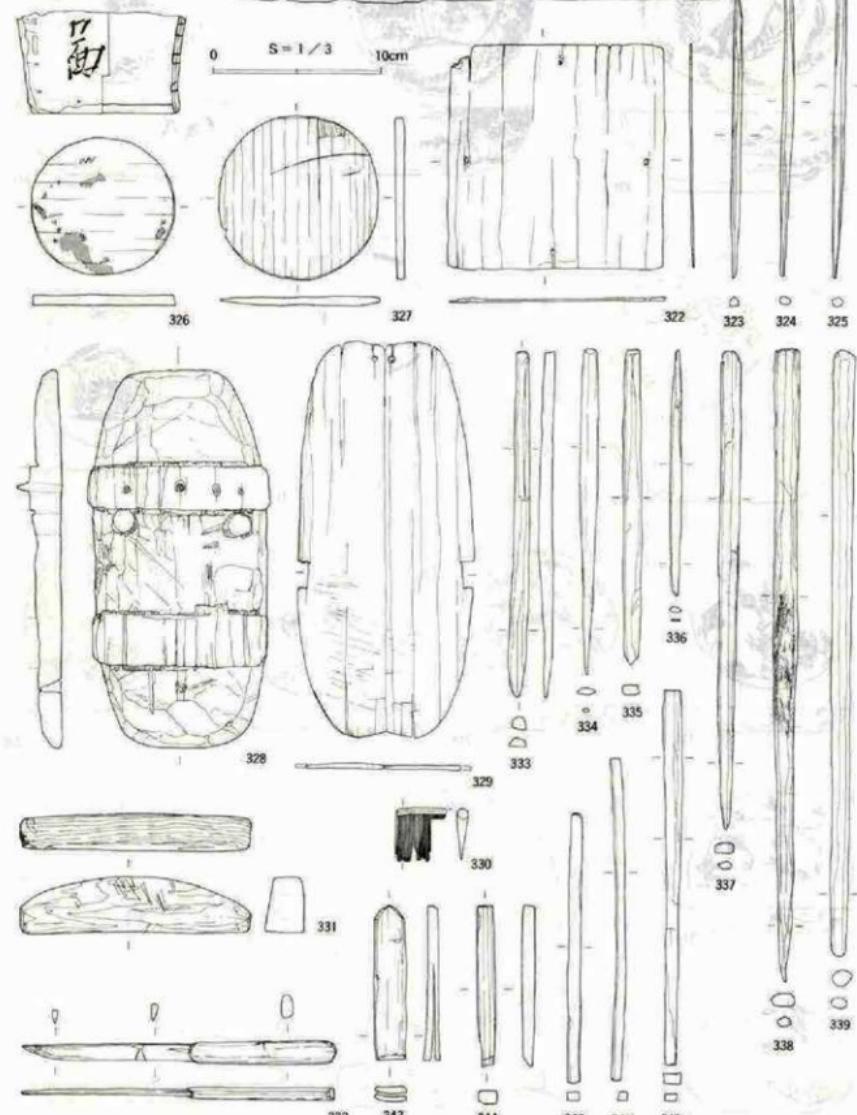


圖19 1期出土遺物(5)

していない。

t. ピット2 (図4・5)

ピット2はB-4グリットから出土している。平面は梢円を呈し、長軸50cm、短軸30cm、確認面からの深さは20cm、底面の海拔は13.3mを測る。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

u. ピット3 (図4・5)

ピット3はB-3グリットから出土している。平面は梢円を呈し、長軸20cm、短軸15cm、確認面からの深さは20cm、底面の海拔は13.3mを測る。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

v. ピット6 (図4・5)

ピット6はC-1グリットから検出している。部分的な確認であるが平面は梢円を呈するものであろう。東西50cm、南北20cm以上、確認面からの深さは15cm、底面の海拔は13.0mを測る。覆土は縮まりのない暗褐色粘質土で、木片を多量に含む。図示できる遺物はない。

w. ピット7 (図4・5)

ピット7はC-1グリットから出土している。平面は隅丸方形状を呈し、長軸50cm、短軸45cm、確認面からの深さは20cm、底面の海拔は12.9mを測る。覆土は青灰色粗粒砂である。遺物は出土していない。

x. 1期出土遺物 (図15~19)

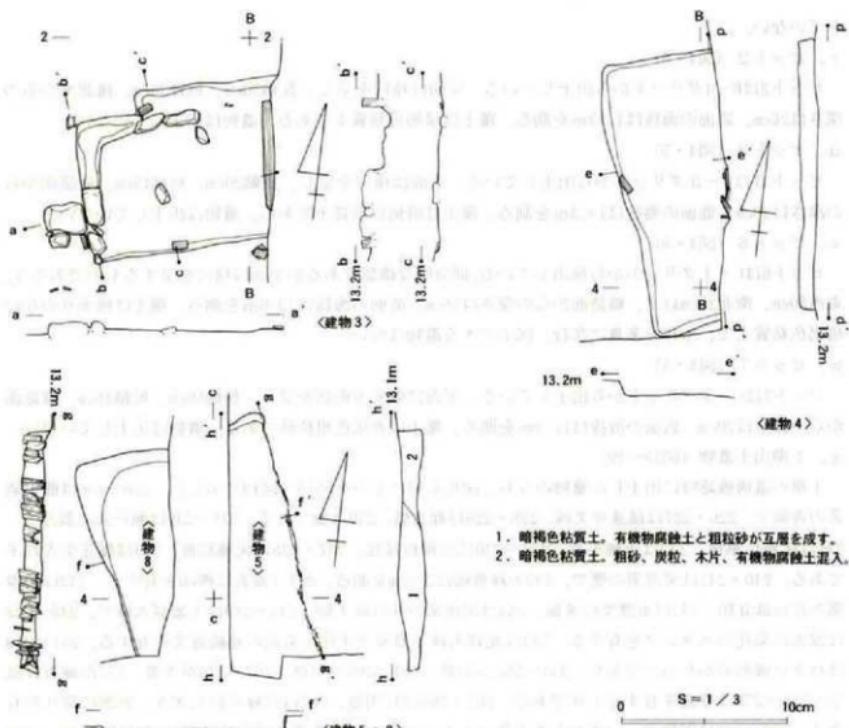
1期の遺構確認時に出土した遺物のうち、図化し得たものを図15~図19に示した。226~230は龍泉窯系の青磁で、226・227は縹蓮弁文碗、228・229は龍文盤、230は盤である。231~239は瀬戸窯の製品で、231は灰釉仏華瓶、232は灰釉小壺、233~236は灰釉折縁皿、237・238は灰釉鉢、239は輪花型入れ子である。240・241は常滑窯の甕で、240の縁帯幅は2.3cmを測る。241は器表に押印を有する。242は常滑窯の片口鉢II類。243は東濃型山茶碗。244は常滑窯の片口鉢I類。245~249は土器質火鉢で、245~248は器表に菊花のスタンプを有する。250は瓦質火鉢で器表に沈線と菊花の連続施文を有する。251~279はロクロ成形のかわらけであり、251~263が小皿、264~266が中皿、267~276が大皿、277が縁折れ皿で、278・279は墨書を有する小片である。261・263は灯明皿、267は口縁を打ち欠き、底部に穿孔を有する。280~286は銅錢で、いずれも北宋錢である。280・281は篆書の「元祐通寶」で初鑄1086年。282は篆書の「元豐通寶」で初鑄1078年。283は楷書の「嘉祐通寶」で初鑄1056年。284は楷書の「天聖元寶」で初鑄1023年。285・286は楷書の「大觀通宝」で初鑄1107年である。287~296は研磨痕を有する常滑片。297~299は滑石製品であり、297・298はスタンプ、299は鍋である。297は桜花、298は草花を彫っている。300~305は紙石で、300・301は鳴滝産の仕上げ紙、302・304は天草産の中紙、303・305は伊予産の中紙である。306~308は硯で、306・307は产地不詳、308は赤間硯である。307の筆置きには秋草?と鳥が彫られている。309~344は木製品である。309~313は漆塗りの施文碗、314~320は漆塗りの施文皿、321は把手付の蓋、322は折敷、323~325は箸、326は外面に墨書を有する曲げ物で、底板内面には赤色漆が付着する。327は円板、328は下駄、329は草履芯、330は漆塗りの櫛、331は手押木、332は刀子形、333は箋、334~338は串状、339~342は棒状、343は形代か? 344は箋状を呈する。

第2節 1日期

1B期(1面下)は1期から2期への掘り下げ途中で検出された遺構であり、建物址4棟を確認した。遺構確認レベルは海拔13.0m前後であり、いずれの遺構もほぼ同一の軸方向を有している。以下、建物3、建物4、建物5、建物8、1B期出土遺物の順に説明を加えていく。

a. 建物3 (図20・21)

建物3はA・B-2グリットから検出されている。平面は方形を呈し、西側、或いは北側に張り出し



部分を有するものであろうか。東西2.5m、南北2.0mを確認し、更に東へと広がるようである。確認面からの深さは10~20cm程度で、底面の海拔は13.0mを測る。北西隅の壁際は溝状に窪んでおり、底面の海拔は12.8mである。覆土は暗褐色粘質土で若干の炭粒を含んでいる。また、西辺では芯~芯距離1.7mの間隔で角柱が検出されている。柱の頂部の海拔は13.1m程度である。南北の軸方向はN-18°-Wを測る。本址は1期の切石列1、切石列2と重複する位置から検出されており、これらの掘り方と考えることも可能かもしれない。何れにせよ詳細は不明である。

建物3出土遺物のうち、図化し得たものは図21に示した。345は銅錢で北宋錢の篆書「皇宋通寶」である。初鑄1038年。346~353は木製品である。346は漆塗り施文皿、347は漆塗り膳脚、348~350は箸、351は円盤である。352・353は円板状を呈するものであり、周縁のケズリは非常に粗く、角張っている。用途不明である。

b. 建物4(図20・22・23)

建物4はA-B-3・4グリットから検出されている。平面は方形を呈するもので、東西1.5m、南北3.4mを確認し、更に東へと広がるものである。確認面からの深さは20cm程度で、底面の海拔は12.9m前後である。南北の軸方向はN-20°-W。覆土は粗粒砂、炭化物、明褐色有機物腐蝕土を混入する黒褐色粘質土で、多量の木製品が出土している。

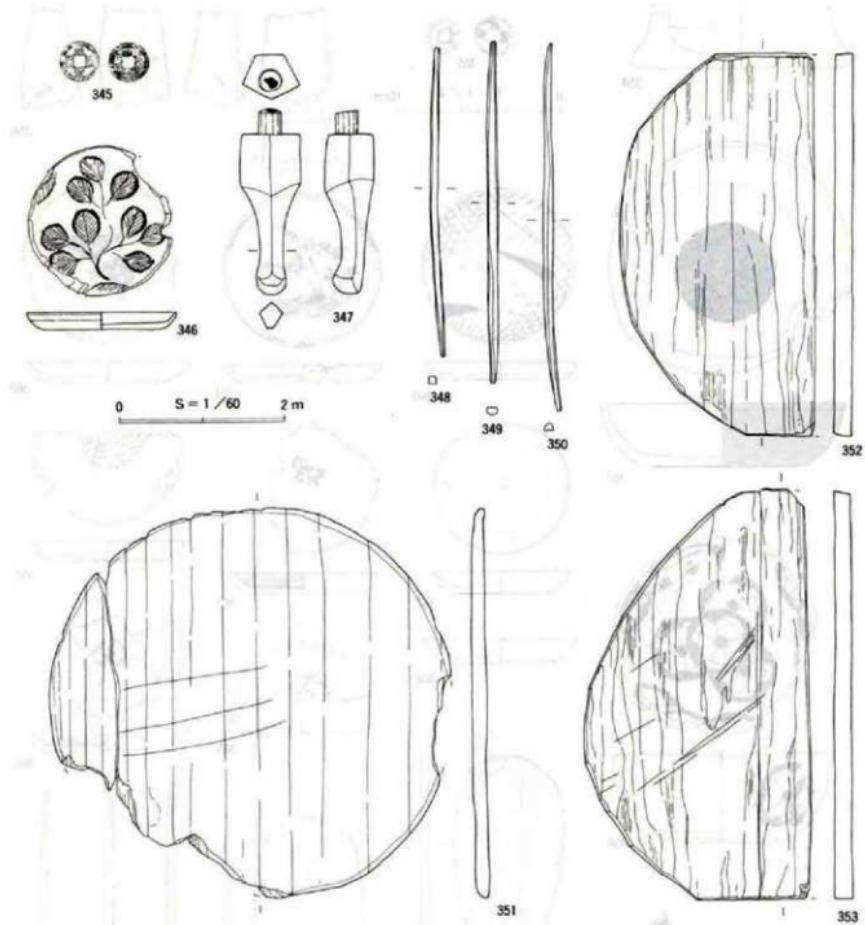


図21 建物3出土遺物

建物4出土遺物のうち、図化し得たものは図22に示した。354は瀬戸窯の灰釉瓶子、355は北宋銭の篆書「皇宋通寶」で、初鑄は1038年である。356は伊予産の中砥である。357～389は木製品である。357は漆塗り施文鉢で外面は暗い色調の赤色漆塗りである。内底面には大きく菊花文を配している。358・359は漆塗り施文椀で、359の施文には印判を併用している。360～367は漆塗り施文皿、368は漆塗り無文皿で、363・366は内面に赤色漆が施される。367の施文は非常に不鮮明である。369～371は箸、372・373は板杓子である。374は有孔円板で、孔には木釘が残る。375・376は漆塗り膳脚、377は漆塗り雲形肘木、378は漆塗り櫛、379・380は下駄である。381は弓状であろうか。長さは110.9cmを測る棒状のもので、両端には彌状に紐等を掛けられるような抉りを有している。382は手押木で、両側面は握りやすいよう握めている。383は箆、384～387は串状、388・389は棒状を呈する。389の片端部は焦げている。

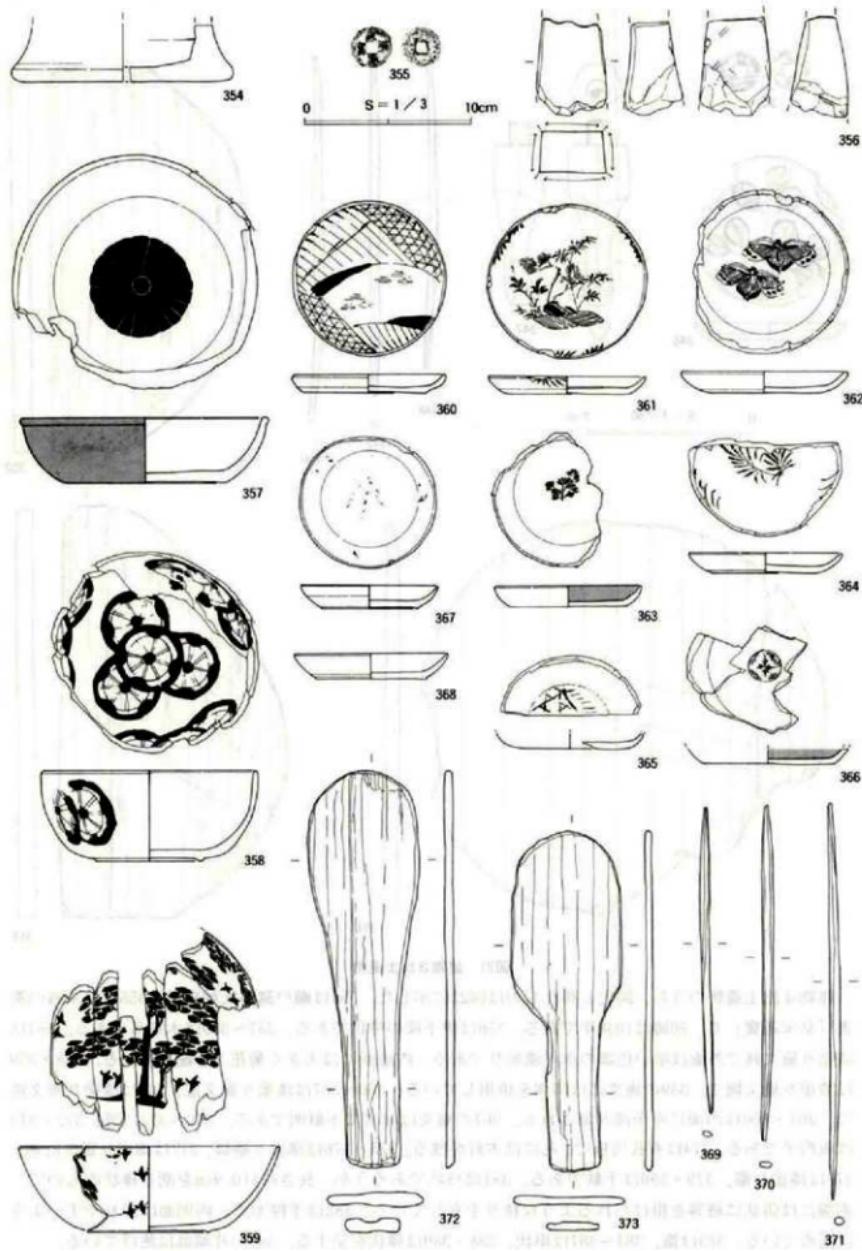


図22 建物4出土遺物(1)

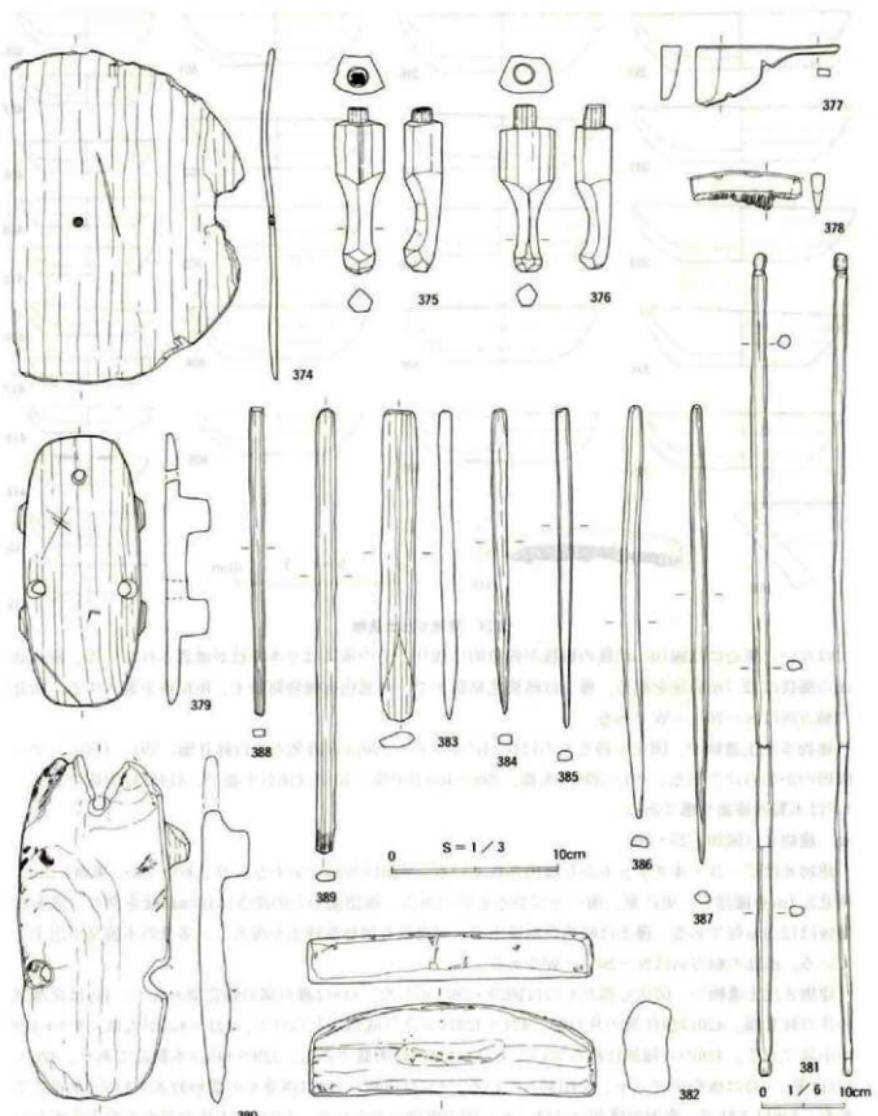


図23 建物4出土遺物(2)

c. 建物5(図20・24)

建物5はB-4・5グリットから検出されている。平面は方形を呈するものであろうか、東西1.1m、南北3.1mを確認し、更に西、南へと広がるものである。後述する建物8と同一の可能性を有するが、ここでは別の遺構として扱う。確認面からの深さは20~30cmを測り、底面の海拔は12.8~12.9mと平坦

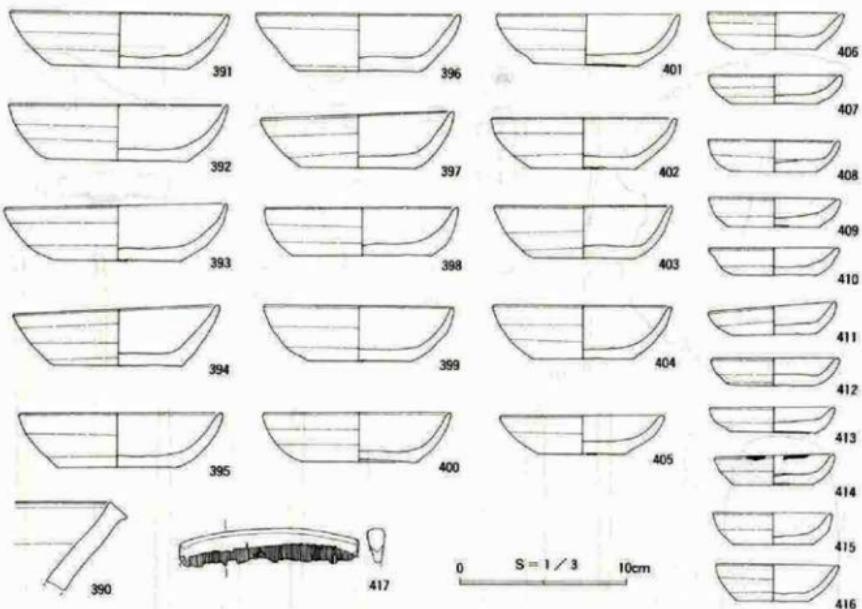


図24 建物5出土遺物

ではない。東辺には幅10cm前後の縦板が部分的に残り、その南には2本の杭が確認されている。縦板底面の海拔は12.7m前後を測る。覆土は暗褐色粘質土で、明褐色有機物腐蝕土、粗粒砂を混入する。南北の軸方向はN-20°-Wである。

建物5出土遺物で、図化し得たものは図24に示した。390は常滑窯の片口鉢II類。391~416はロクロ成形のかわらけである。391~398は大皿、399~405が中皿、406~416が小皿で、414は灯明皿である。417は木製の塗塗り櫛である。

d. 建物8(図20・25・26)

建物8はC-3・4グリットから検出されている。平面は方形を呈するものであろうか、東西1.2m、南北2.4mを確認し、更に東、南へと広がるものである。確認面からの深さは10cm前後を測り、底面の海拔は12.9m程度である。覆土は暗褐色粘質土で、明褐色有機物腐蝕土を混入し、多量の木製品が出土している。南北の軸方向はN-20°-Wである。

建物8出土遺物で、図化し得たものは図25・26に示した。418は瀬戸窯の輪花型入れ子。419は常滑窯の片口鉢II類。420は魚住窯の片口鉢。421~428はロクロ成形かわらけで、421~423が大皿、424~428が小皿で有る。426の口縁部は打ち欠いてあり、423は灯明皿である。429~445は木製品であり、429~431は箸、432は板杓子で「十」を印刻している。433は円板、434は塗塗りの雲形肘木、435は草履芯である。436は下駄で、表面の踵部分には「×」印の線刻がみられる。437は鋸刃状の刻みを有する灰ならし状のもの、438~441は箆、442は串状、443は棒状のもので、444は組物部材、445は栓状を呈するものである。

e. 1B期出土遺物(図27)

1B期の遺構確認時に出土した遺物のうち、図示し得たものを図27に示した。446・447は瀬戸窯製品で、446が灰釉小壺、447が灰釉折縁皿である。448は常滑窯片口鉢II類。449は瓦質火鉢で宝珠、沈線、

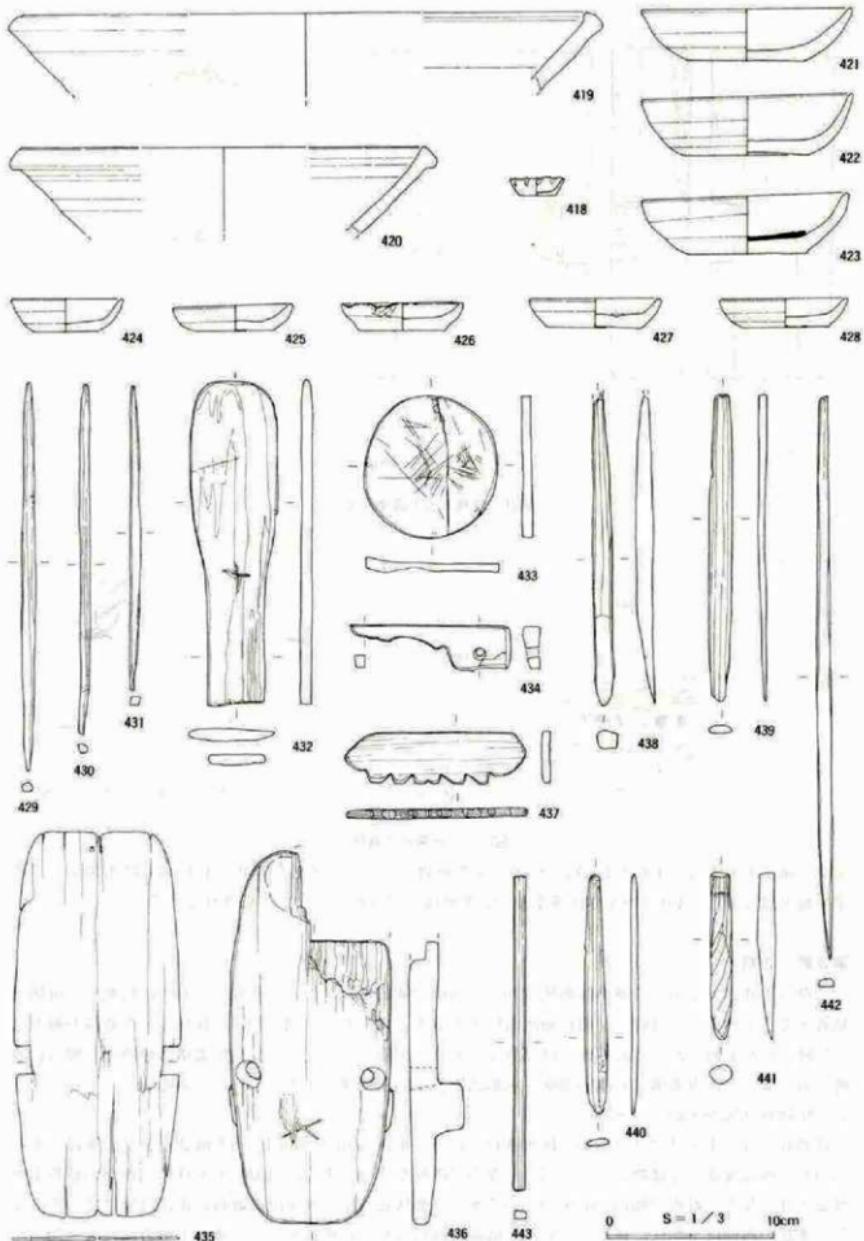


图25 建物8出土遗物(1)

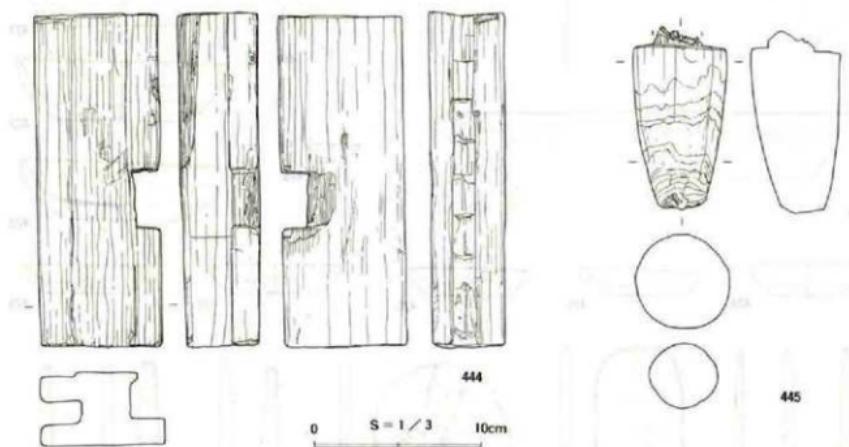


図26 建物8出土遺物(2)



図27 1B期出土遺物

花菱の施文を有する。450は北宋銭で行書「元豐通寶」である。初鑄1078年。451・452は木製品で、漆塗り施文皿である。451は内面赤色漆塗りで、外底面には赤漆で「一」と記されている。

第3節 2期

2期(1d面・2面)の遺構は海拔12.6~13.0mで確認されている。基盤となるのは暗褐色~暗褐色粘質土で、土丹粒子や破碎した粗粒凝灰岩粒子を混入している。1期と同様に検出された遺構の軸方向には統一性が看取され、それぞれがほぼ直交、平行の関係にあるようだ。検出遺構は建物址、堅穴状遺構、堀、溝、木組み遺構、石固い遺構、木器溜り、土間状遺構、土坑、ピットである。

a. 建物6(図28・29・30~33)

建物6はB-1・2グリットから検出されている。東西3.5m、南北3.3mを確認し、北、東には更に広がり、西は後述する建物12・15と同一となる可能性がある。南辺には縦板列を伴い、西への延長上は堀2・3となる。縦板は幅10cm前後のものであり、海拔12.7m前後を測る縦板の頂部は焼けている。また、本址の西側は土間状に硬化していた。底面の海拔は12.7m前後を測る。東西の軸方向はN-70°~Eである。

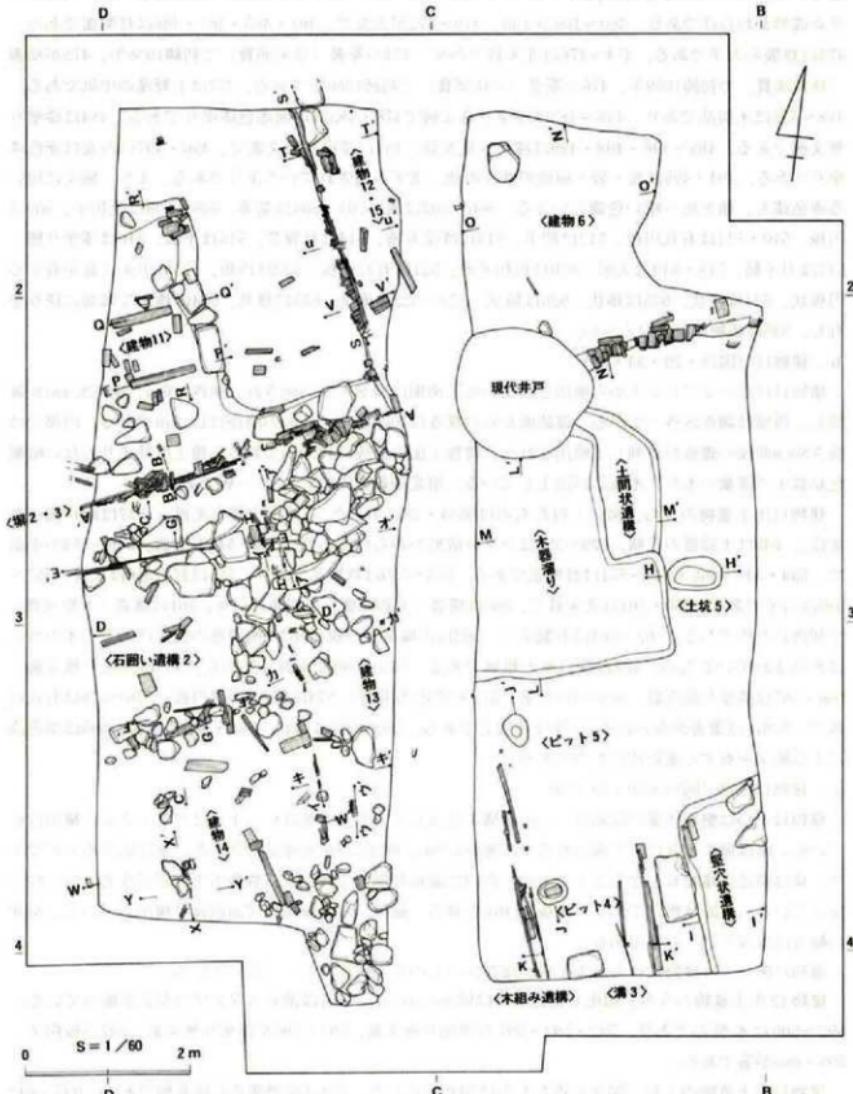


図28 2期全体図

建物6出土遺物のうち、図化し得たものは図30～33に示した。453～457は貿易陶磁である。453～456は龍泉窯系青磁で、453・454が鎬蓮弁文碗、455が双魚文鉢、456が鎬蓮弁文鉢である。457は白磁口元皿である。458・459は常滑窯製品で458が片口鉢I類、459が甕で縁帶幅は2.2cmを測る。460～472はロクロ成形かわらけであり、460～469が小皿、470～472が大皿で、461・465・467・468は灯明皿である。473は鉄製の刀子である。474～476は北宋銭であり、474が篆書「皇宋通寶」で初鑄1038年、475が楷書「祥符通寶」で初鑄1009年、476が篆書「元祐通寶」で初鑄1086年である。477は上野産の中砥である。478～535は木製品であり、478～483は漆塗り施文椀で478・483は内面赤色漆塗りである。484は漆塗り無文椀である。485～496・498・499は漆塗り施文皿、497は漆塗り無文皿で、496・497の内面は赤色漆塗りである。494・495は波・岩・植物の意匠の他、文字が施されているようである。また、施文に用いる赤色漆も、他と比べ暗い色調といえる。500～502は箸、503・504は菜箸、505～508は板杓子、509は円板、510・511は有孔円板、512は把手、513は漆塗り蓋、514は草履芯、515は下駄、516は漆塗り櫛、517は刀子鞘、518・519は人形、520は板杓子形、521は有孔円板、522は円板、523は中央に孔を有する円板状、524は杼状、525は棒状、526は箆状、527～532は串状、533は建具、534は棒状で端部に抉りを有し、535は組物部材となろうか。

b. 建物11 (図28・29・34・35)

建物11はC-2グリットから検出されている。南側は塀2・3に画され、東西2.0m、南北3.4mを確認し、西側は調査区外へ広がる。確認面からの深さは10cm程で、底面の海拔は12.9mである。内部では長さ80cm前後の礎板が並列して検出された。礎板上面の海拔は13.0mである。覆土は縮まりのない暗褐色粘質土で多量の木片、木製品が出土している。南北の軸方向はN-18°-Wである。

建物11出土遺物のうち、図化し得たものは図34・35に示した。536は白磁口元皿。537は瀬戸窯灰釉水注。538は土器質の花瓶。539～554はロクロ成形かわらけであり、539～544が大皿、545～554が小皿で、539・545・546・549～551は灯明皿である。555～559は鉄製品であり、555は釘、556は火箸、557～559は刀子である。560・561は北宋銭で、560は楷書「至和元寶」で初鑄1054年、561は楷書「天聖元寶」で初鑄1023年である。562～564は石製品で、562は山城系産の硯、563は鳴滝産の仕上げ砥で、木の台にはめ込まれているもの、564は笛口産の粗砥である。565～590は木製品であり、565は漆塗り無文碗、566・567は漆塗り施文皿、568～571は箸、572・573は板杓子、574は匙、575は円板、576～578は有孔円板で、578には墨書きがみられる。579は草履芯である。580～587は串状、588・589は箆状、590は黒色漆による施文を有する筆管状のものである。

c. 建物12・15 (図28・29・36・39)

建物12・15は整理作業の段階で一つの遺構に合成している。本址はC-1・2グリットから検出されている。南は塀2・3により画されるが、東西1.0m、南北3.9mを確認した。北、東に広がるものであり、東は前述の建物6となるようである。西辺は継板を横板で押さえ、数箇所を鉄釘で止め、杭、柱で支えている。柱頭は焦げており、海拔13.0mを測る。継板、杭は海拔12.7m前後で検出している。南北の軸方向はN-25°-Wである。

遺物に関しては建物12のものを上層、建物15のものを下層出土として扱っている。

建物12出土遺物のうち、図化し得たものは図36に示した。591は滑石スタンプで草花を彫っている。592～600は木製品であり、592・594・595が漆塗り施文皿、593・596が漆塗り無文皿、597が板杓子、598～600が箸である。

建物15出土遺物のうち、図化し得たものは図39に示した。634は常滑窯片口鉢II類である。635～642はロクロ成形かわらけであり、635～637が大皿、638～642が小皿で、641は灯明皿である。643～657は

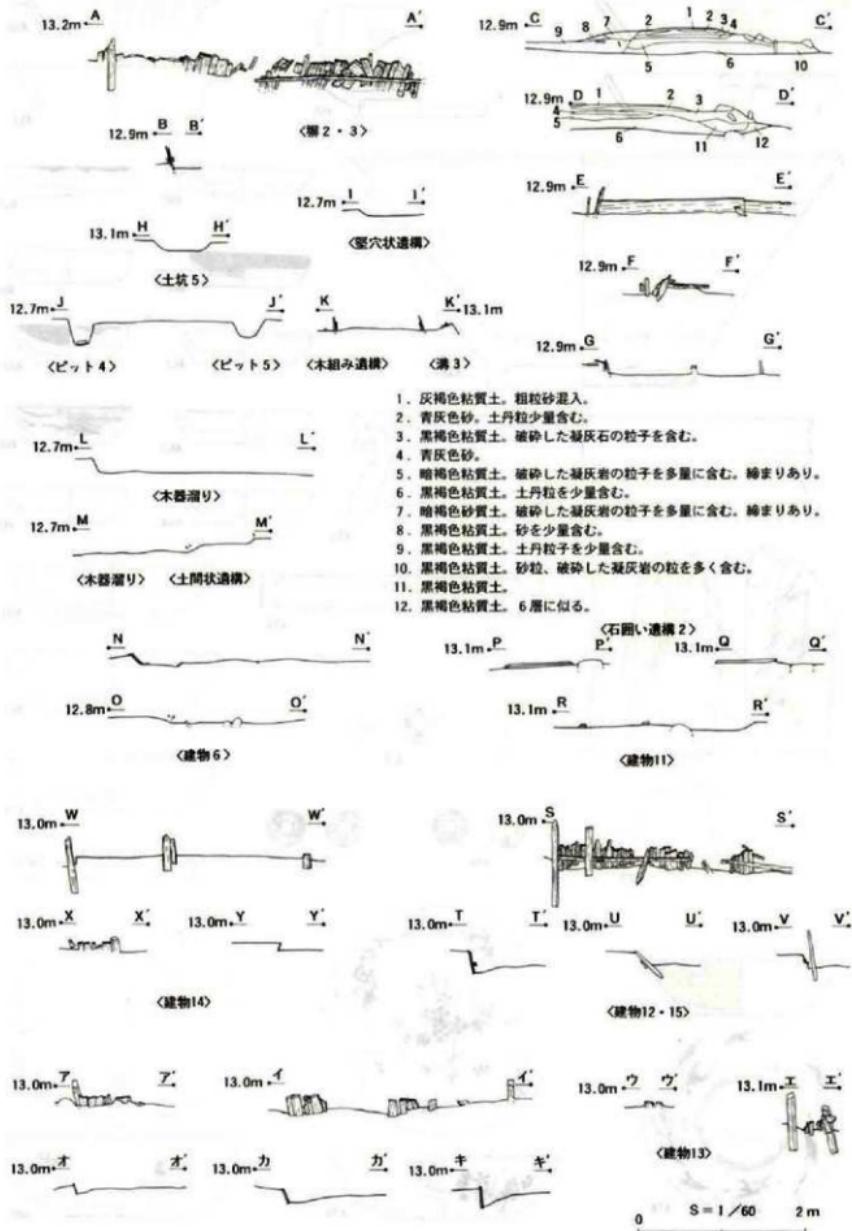


図29 2期セクション・エレベーション図

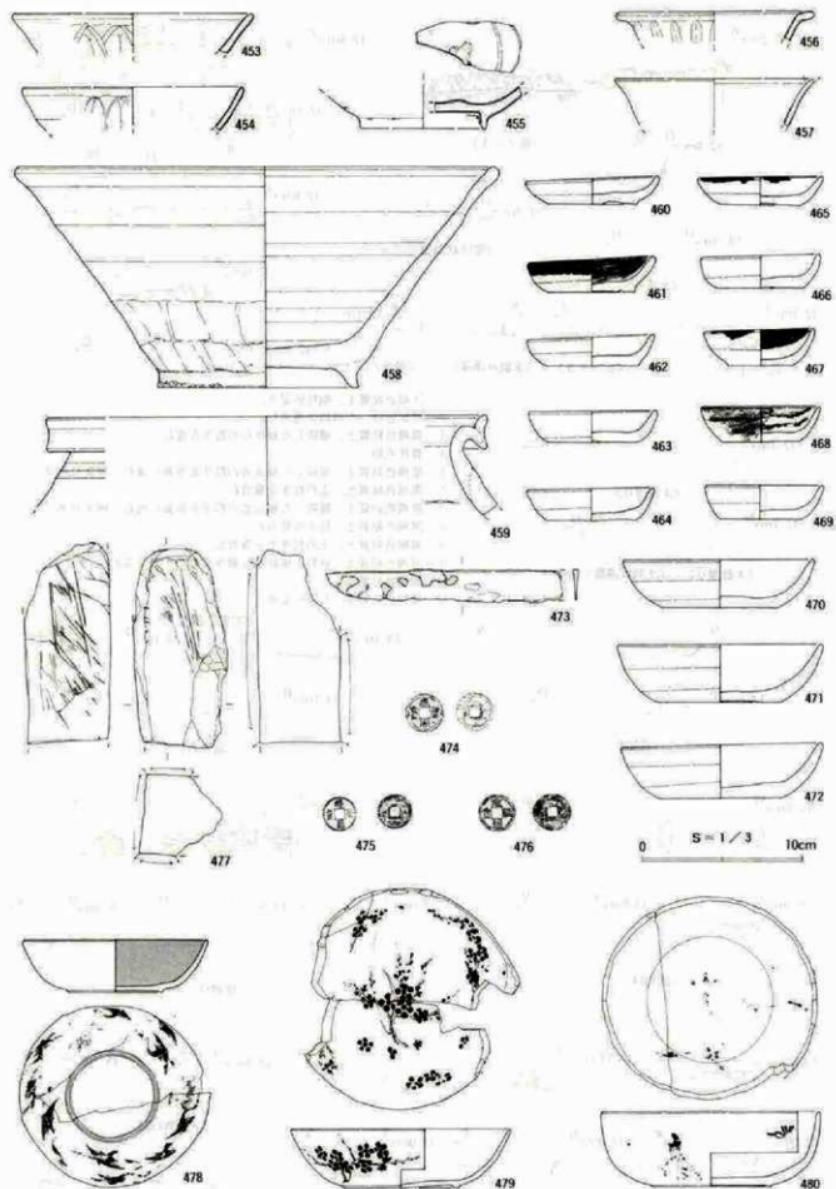


圖30 建物6出土遺物(1)

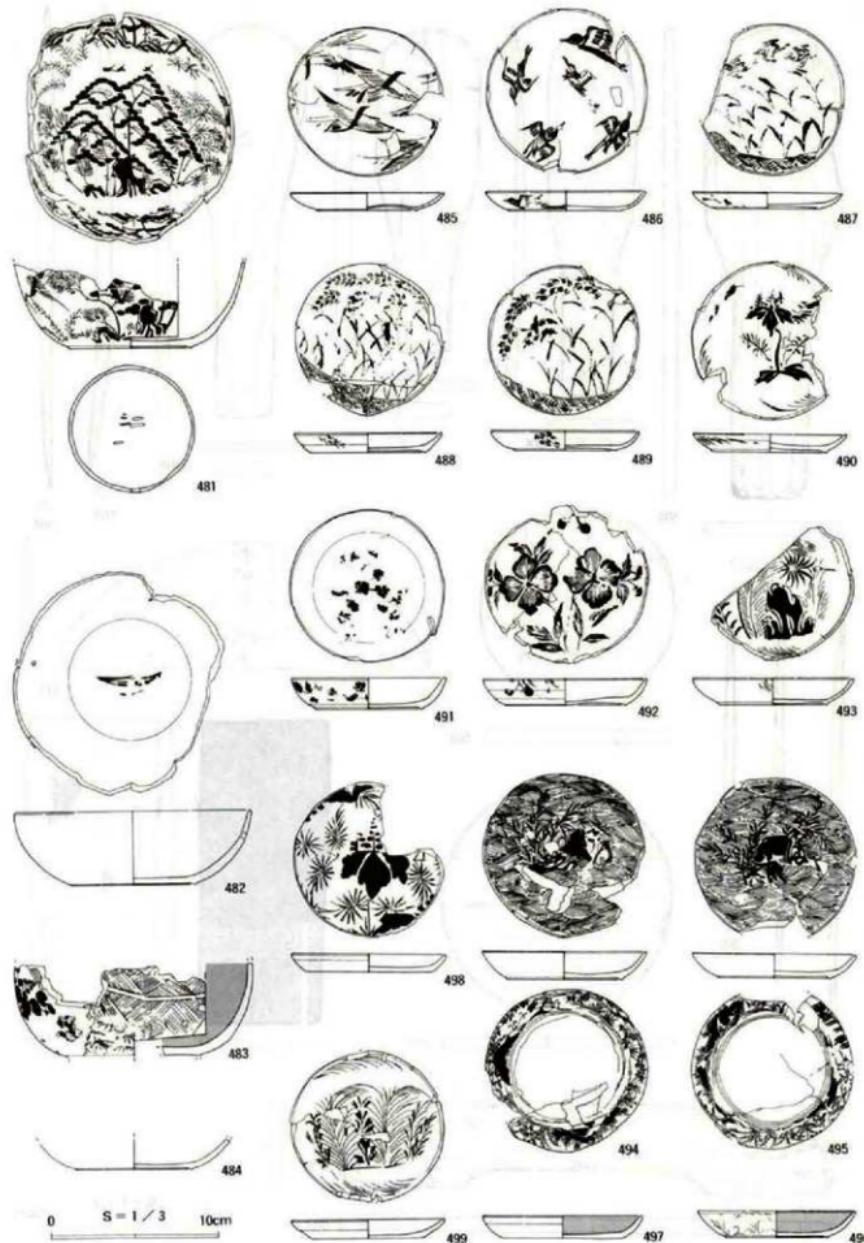


图31 建物6出土遗物(2)

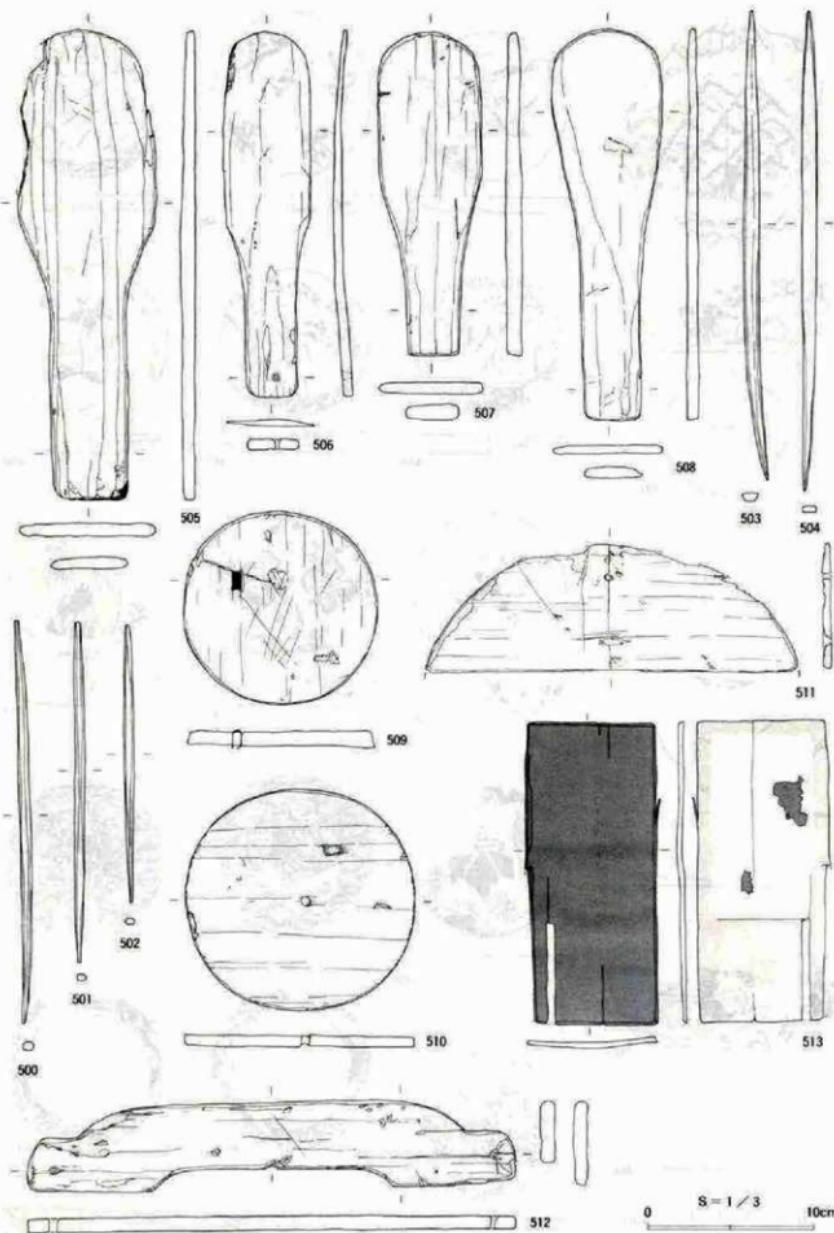


図32 建物6出土遺物（3）

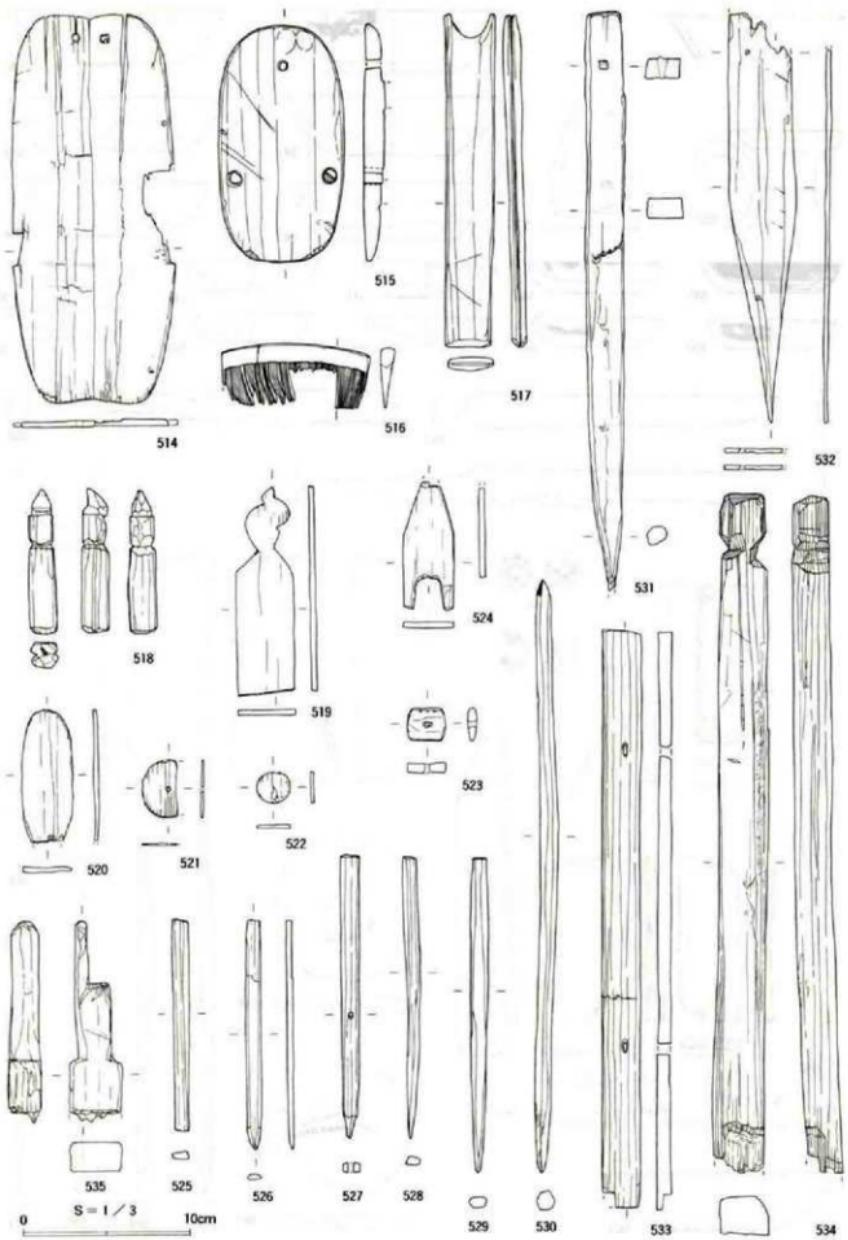


图33 建物6出土遗物(4)

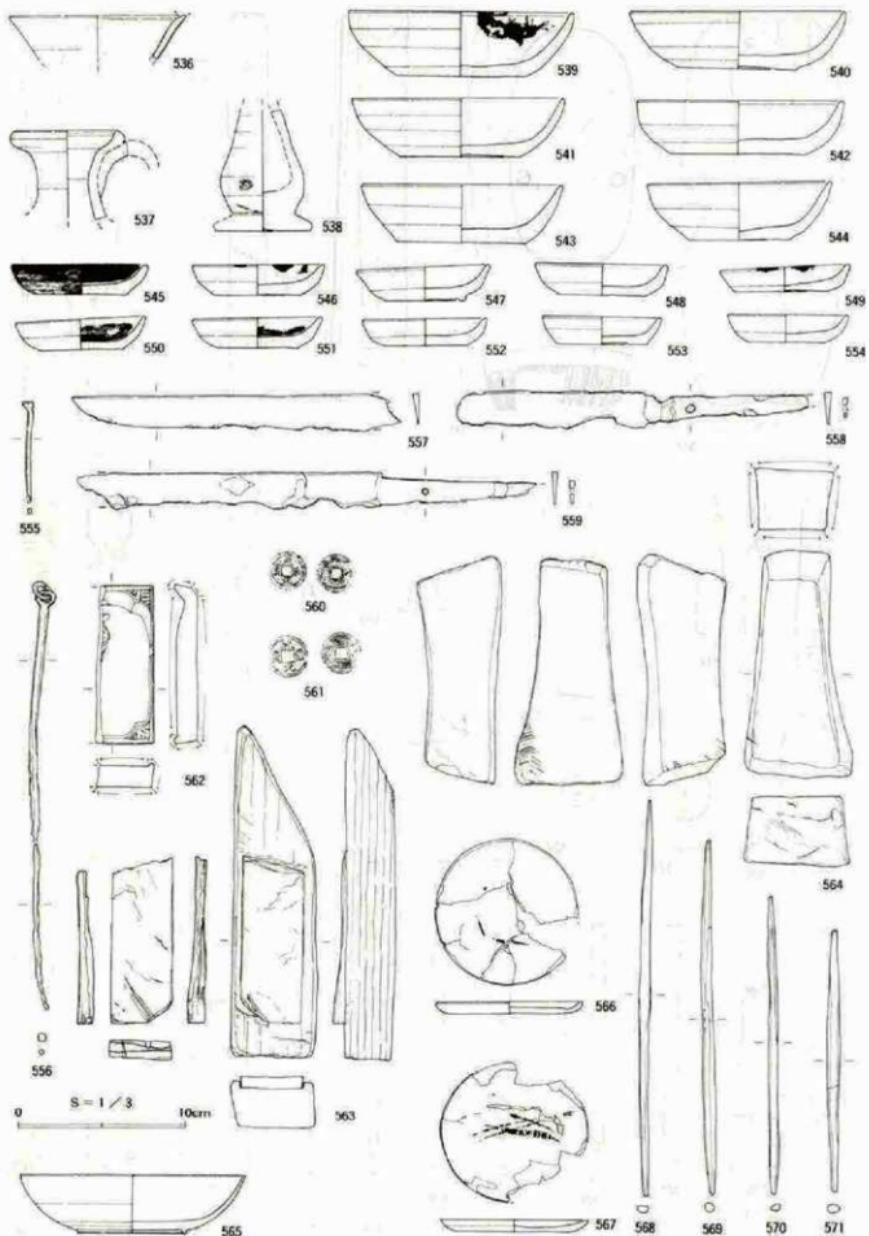


图34 建物11出土遺物（1）

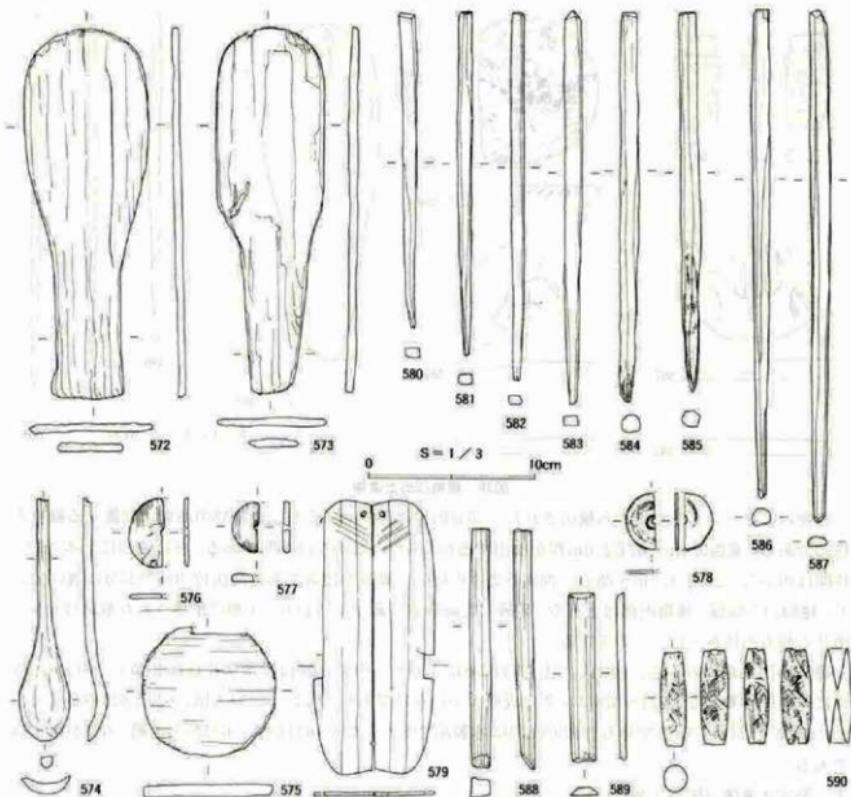


図35 建物11出土遺物（2）

木製品である。643～646は漆塗り施文皿である。646の内面は赤色、暗赤色、黒色を用いる特殊なモチーフの施文といえる。647は漆塗り無文皿で内面は赤色塗りである。648～650は箸、651は板杓子、652は有孔円板である。653・654は串状、655・657は栓状、656は棒状を呈している。

d. 建物13（図28・29・37）

建物13はC-2・3グリットから検出されている。北は廻2・3により区画されるが、東西1.8m、南北4.8mを確認している。東、及び南への広がりについては不明であるが、建物12・15の木組みと、後述する木組み造構を結んだ南北ラインより東には広がらないものと考えられる。本址の西辺には部分的に縦板・杭が検出されて、頂部である海拔12.9～13.0mの部分が焼けている。建物内部は土丹や、破碎した凝灰岩が露呈しており、丁寧に整地された痕跡はない。南北の軸方向はN-18°-Wである。

建物13出土遺物のうち、図化し得たものは図37に示した。601・602は瀬戸窯灰釉卸皿。603は常滑窯で縁帯幅2.7cm。604～611はロクロ成形のかわらけであり、604～606が大皿、607～611が小皿で、610・611は灯明皿である。612は北宋銭で楷書「皇宋通寶」である。初鑄1038年。613～618は木製品で、613は漆塗り無文椀、614は漆塗り施文皿で、施文はスタンプによる。615～617は箸、618は円板である。

e. 建物14（図28・29・38）

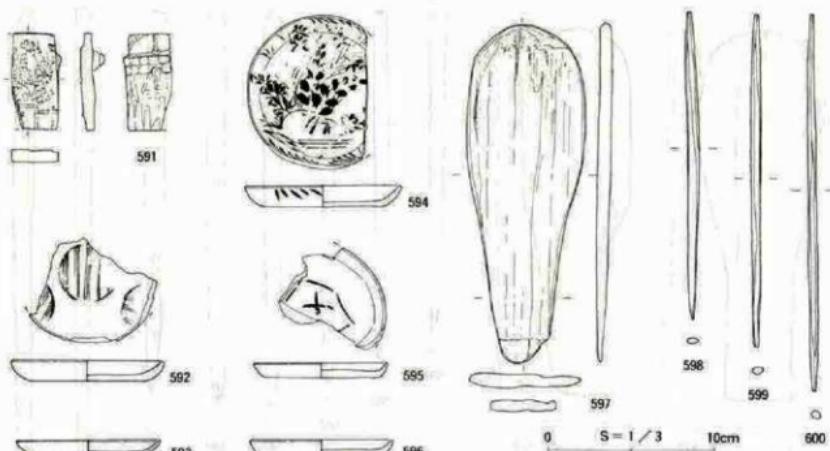


図36 建物12出土遺物

建物14はC-3グリットから検出された。部分的な確認ではあるが、建物13の西側に位置する縦板と柱列である。東西3.4m、南北2.0m程を検出するが、南への広がりは不明である。柱は東西に3本並び、柱間は西から1.2m、1.7mを測る。西側の2本の柱と、縦板の頂部である海拔12.8mの部分は焼けている。建物13と同様、建物内部は土丹や、破碎した凝灰岩が露呈しており、丁寧に整地された痕跡はない。南北の軸方向はN-17°-Wである。

建物14出土遺物のうち、図化したものは図38に示した。619・620は常滑窯片口鉢II類で、619の内外面には煤が付着する。621~628はロクロ成形のかわらけであり、621~624が大皿、625~628が小皿で、621・623・624が灯明皿である。629~633は木製品であり、629~631が箸、632が刀子鞘、633が格子材である。

f. 穴状遺構 (図28・29)

穴状遺構はB-3・4グリットからの検出である。1B期の建物4とほぼ同じ位置からの検出で、調査時には遺構名が無く、整理段階で名づけている。平面は方形を呈すると考えられ、東西1.1m、南北2.1mを確認し、東、南に更に広がるものである。確認面からの深さは10cm前後で、底面の海拔は12.5mである。覆土は有機物腐蝕土である。南北の軸方向はN-18°-Wである。

g. 塀2・塀3 (図28・29・40・41)

塀2・3はC-2グリットから検出している。塀1とほぼ同じ位置から検出されて、西側では縦板が部分的に2段確認されたため、上段を塀2、下段を塀3とした。塀1と同様、縦板を横板で挟み、杭・柱で支える構造である。縦板、杭、及び柱の頂部である海拔12.8~13.0mは焼けている。本址の東の延長には建物6の縦板列があり、焼けている頂部の海拔も12.7m前後と非常に近い数値が得られている。東西の軸方向はN-70°-Eである。

塀2出土遺物のうち、図化し得たものは図40に示した。658~660はロクロ成形かわらけの小皿である。661・662は砥石で661は天草産の中砥、662は上野産の中砥である。663~666は木製品で、663は漆塗り施文椀、664~666は箸である。

塀3出土遺物のうち、図化し得たものは図41に示した。667は貿易陶磁で青白磁の合子蓋。668はロクロ成形の白かわらけで、口縁部には油煙が付着する。669~677はロクロ成形のかわらけであり、669・

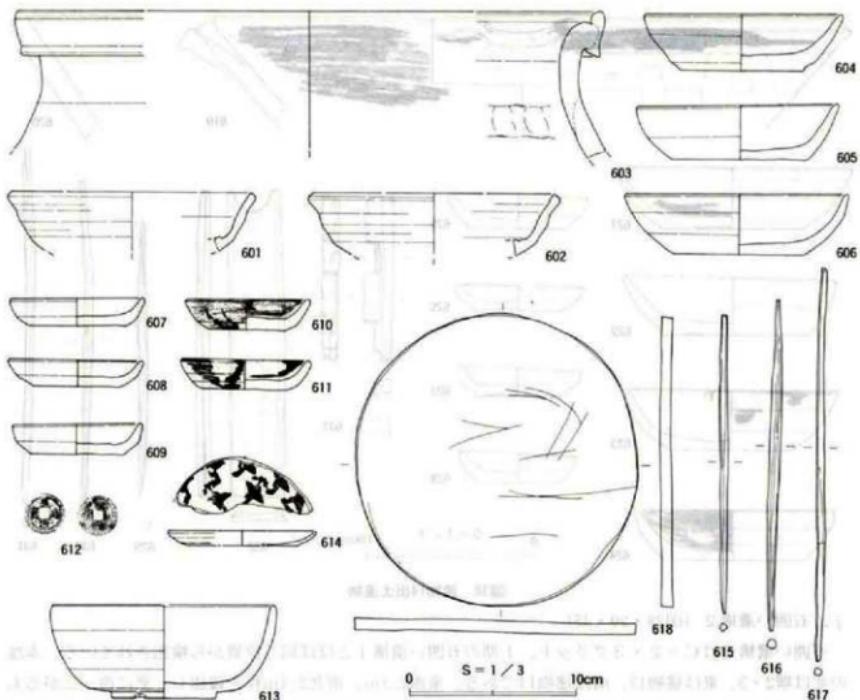


図37 建物13出土遺物

670は大皿、671は中皿、672～676は小皿、667は縁折れタイプで、671・672・675・676は灯明皿である。678～680は北宋銭で、678・679は楷書の「皇宋通寶」で初鑄1038年、680は楷書の「天聖元寶」で初鑄1023年である。681～694は木製品である。681・682は漆塗り施文椀で682の内面は赤色漆が施される。683～685・687・688は漆塗り施文皿、686は漆塗り無文皿である。689～691は箸、692は灯明台、693は羽子板状のもの、694は蓋把手である。

h. 溝3 (図28・29・45)

溝3はB-3・4グリットから検出されている。横板と杭による木組みで、南北1.6mを検出した。確認レベルは海拔13.0m前後、底面の海拔は12.8mである。南北の軸方向はN-15°-Wである。

溝3出土遺物のうち、図示し得たものは図45-769・770に示した。いずれも棒状の木製品である。

1. 木組み遺構 (図28・29・45)

木組み遺構はB-3・4グリットから検出している。横板と杭による木組みで、南北3.0mを検出している。確認レベルは13.0m前後で、横板の下端レベルは12.9m前後である。本址の北の延長には建物12・15の木組みが位置している。南北の軸方向はN-20°-Wである。

木組み遺構出土遺物のうち、図示し得たものは図45-771～782に示した。771～776はロクロ成形かわらけであり、771・772は大皿、773～776は小皿である。777～782は木製品で、777は漆塗り施文皿、778～780は箸、781は円板、782は扇骨である。

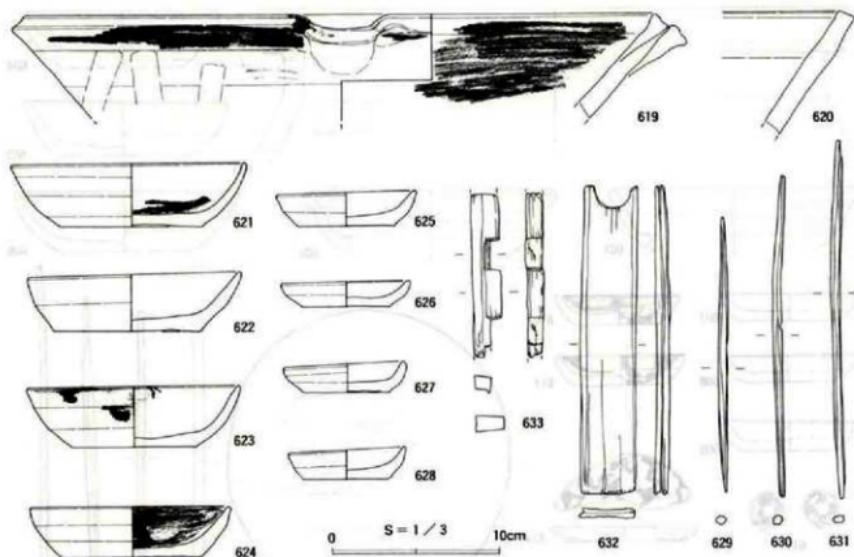


図38 建物14出土遺物

j. 石囲い遺構2 (図28・29・45)

石囲い遺構2はC-2・3グリット、1期の石囲い遺構1とほぼ同じ位置から検出されている。本址の北は塙2・3、東は建物13、南は建物14である。東西2.3m、南北2.4m程を確認し、更に西へ広がるものである。横板と大形の鎌倉石や破碎した凝灰岩を周囲に配し、その内側を版築するもので、上面の海拔は12.9m、基底部の海拔は12.6mである。東西の軸方向はN-73°-Eである。

石囲い遺構2出土遺物のうち、図示し得たものは図45-783～789に示した。783は常滑窯甕で縁帯幅は2.4cmである。784～788はロクロ成形かわらけであり、784～787は小皿、788が大皿である。788の底部は穿孔されている。789は骨角製の笄である。

k. 木器溜り (図28・29・42～44)

木器溜りはB-2・3グリットから検出している。平面は方形を呈するものであろうか。東西2.3m、南北3.0mを確認し、南東部分に張り出し部分を有する。確認面からの深さは20cmで、底面の海拔は12.4mを測る。覆土からは多量の木製品が出土している。南北の軸方向はN-18°-Wである。

木器溜り出土遺物のうち、図化し得たものは図42～44に示した。695・696は常滑窯甕であり、縁帯幅は695が2.8cm、696が3.2cmである。697は亀山窯の甕で内外面に煤が付着する。698はヘソ皿で口縁部に煤が付着する。699～712はロクロ成形かわらけであり、699～703が大皿、704が中皿、705～712が小皿で703・707～712は灯明皿である。713～719は鉄製品で、713が刀子、714が劫鍊車、715～718が釘、719が火箸である。720～723は北宋錢で、720が楷書「皇宋通寶」で初鑄1038年、721が楷書「熙寧元寶」で初鑄1068年、722が楷書「天禧通寶」で初鑄1017年、723は楷書「天聖元寶」で初鑄1017年である。724は骨角製の笄である。725・726は砥石で、725は鳴滝産の仕上げ砥、726は天草産の中砥である。727～768は木製品である。727～730は漆塗り施文皿で、730の施文は印判を用いている。731・732は漆塗り無文皿。733は漆塗り旗文桶で、印判施文である。734は木地椀。735は漆塗り膳脚、736～739は箸、740・

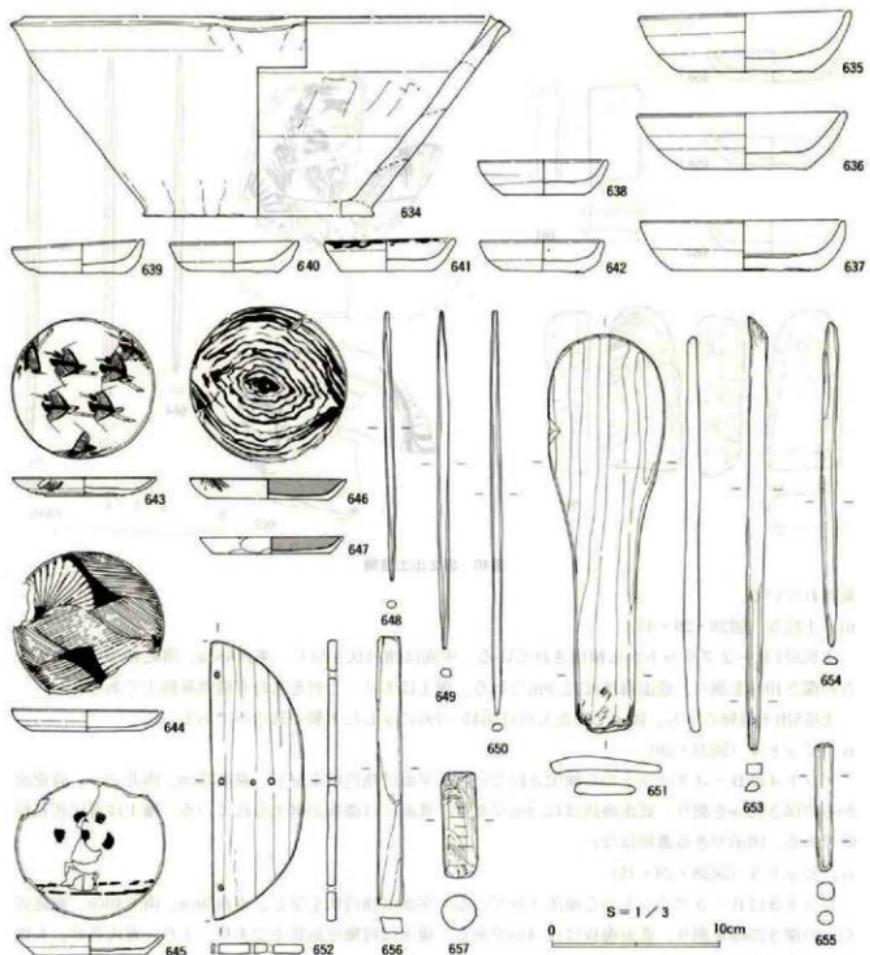


図39 建物15出土遺物

741は板杓子、742は杓子形、743は円板、744は栓状、745～747は刀子柄で、747には部分的に漆が付着する。748は草履芯、749は組物部材である。750・751・761～763は箆状、752～754・757～759は申状、755・756・760・764～766は棒状、767は木札状、768は筆管状を呈している。755・756の両端部、757・761の片端部は焦げている。

1. 土間状遺構 (図28・29・45)

土間状遺構はB-2グリットから検出されている。前述した木器溜りの北東に位置し、東西1.0m、南北1.9mを確認した。確認面からの深さは10cm程度で、底面の海拔は12.5mを測る。土間状に硬化した範囲であり、木器溜りと建物址を構成するものであろうか。南北の軸方向はN-18°-Wである。

土間状遺構出土遺物のうち、図化し得たものは図45-790に示した。790は木製の漆塗り硯箱で蒔絵が

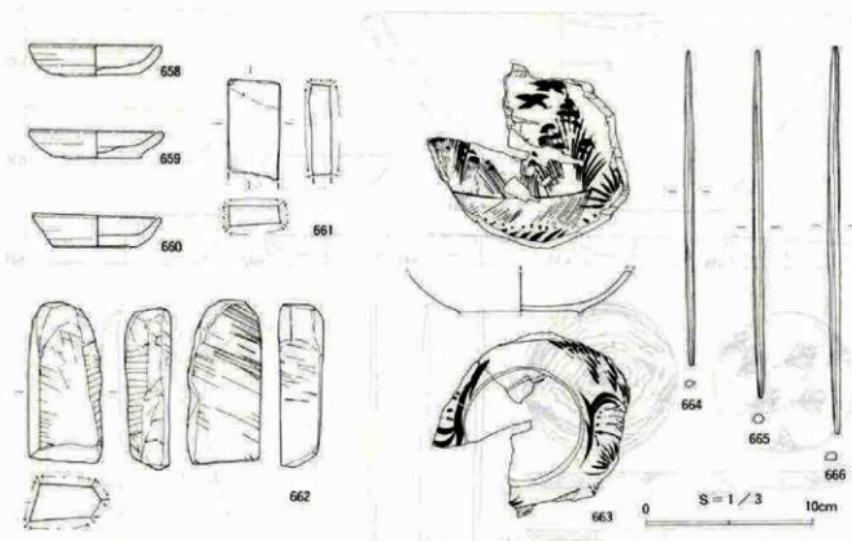


図40 塚2出土遺物

施されている。

m. 土坑5 (図28・29・45)

土坑5はB-2グリットから検出されている。平面は楕円状を呈し、東西65cm、南北40cm、確認面からの深さ10cmを測り、底面海拔は12.9mである。覆土は木片、土丹を含む有機物腐蝕土である。

土坑5出土遺物のうち、図示し得たものは図45-791に示した木製の箸のみである。

n. ピット4 (図28・29)

ピット4はB-3グリットから検出されている。平面は楕円状を呈し、東西35cm、南北30cm、確認面からの深さ30cmを測り、底面海拔は12.3mである。底面には礎板が据えられている。覆土は青灰色粗粒砂である。図示できる遺物はない。

o. ピット5 (図28・29・45)

ピット5はB-3グリットから検出されている。平面は楕円状を呈し、東西30cm、南北40cm、確認面からの深さ25cmを測り、底面海拔は12.4mである。覆土は暗褐色粘質土で木片、土丹、青灰色砂、有機物腐蝕土を混入している。

ピット5出土遺物のうち、図示し得たものは図45-792に示した瀬戸窯の入れ子のみである。外底面に墨痕を有する。

p. 2期出土遺物 (図46~59)

2期の遺構確認時に出土した遺物のうち、図化し得たものは図46~59に示した。793~803は貿易陶磁である。793~797は青磁で、793~795は鎌葉弁文碗、796は無文碗、797は盤である。798~801は白磁で、798は皿、799~801は口元皿である。802は青白磁皿、803は褐釉壺である。804~809は瀬戸窯の製品で804が灰釉水注、805が灰釉平碗、806が灰釉折縁皿、807・808が灰釉鉢皿、809が入れ子である。810は東濃型の山皿で口縁部に煤が付着している。811~817は常滑窯の製品で、811~815が甕で、縁帯幅は811が2.1cm、812が1.8cm、813が2.8cmを測る。814・815は器表に押印を有する。816は片口鉢II類、817は片口鉢I類である。818は東濃型の山茶碗。819は備前窯插鉢。820は土器質の火鉢。821は瓦質の

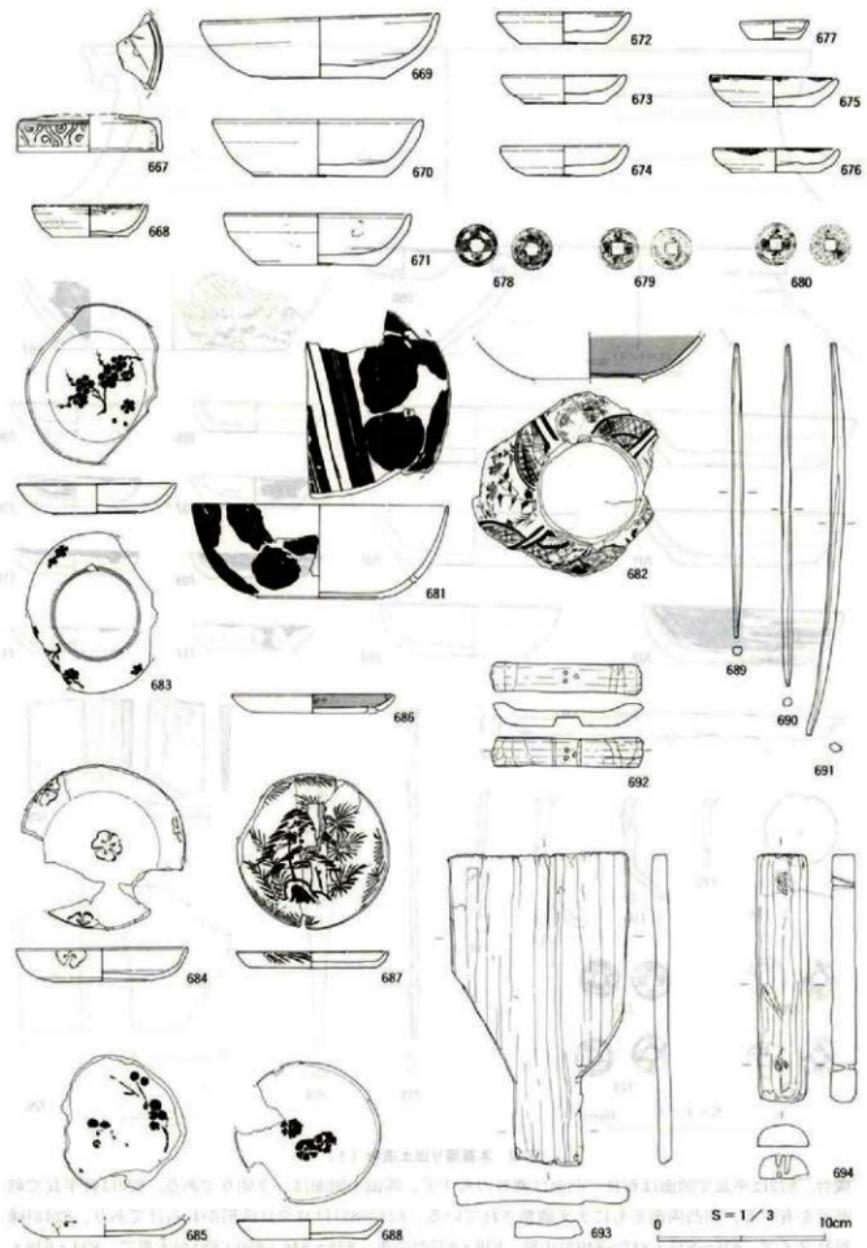


圖41 墓3出土遺物 (續表) (669—694) (《漢陽陵秦代陪葬墓出土器物》)

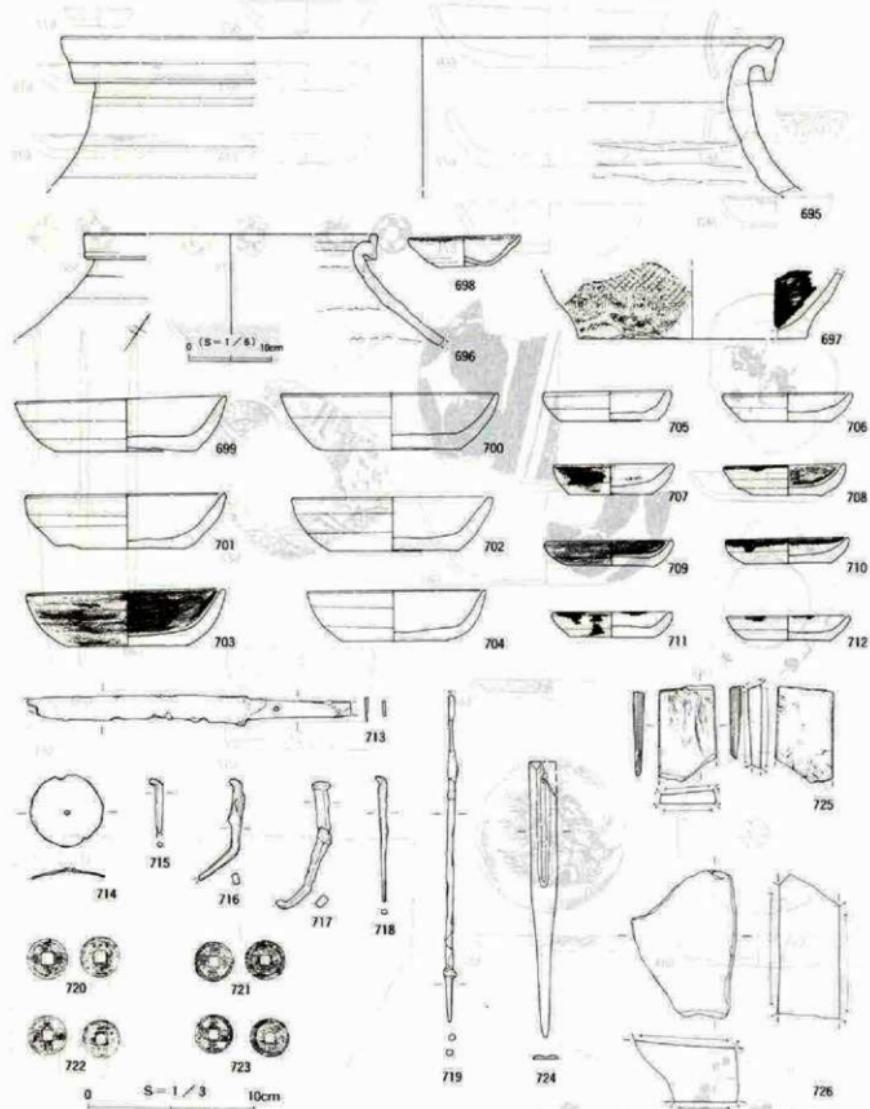


図42 木器塗り出土遺物（1）

燭台、822は平瓦で凹面は布目、凸面は網目のちナデ、端面・側面はヘラ切りである。823は軒平瓦で劍頭文を有する。凹凸両面ともにナデ調整されている。824～851はロクロ成形かわらけであり、824が縁折れタイプ、825～835・847～849が小皿、836・837が中皿、838～846・850・851が大皿で、834・838・839・846が灯明皿である。831～833は底部に穿孔を有する。尚、847～851は一括して出土している（PL）。

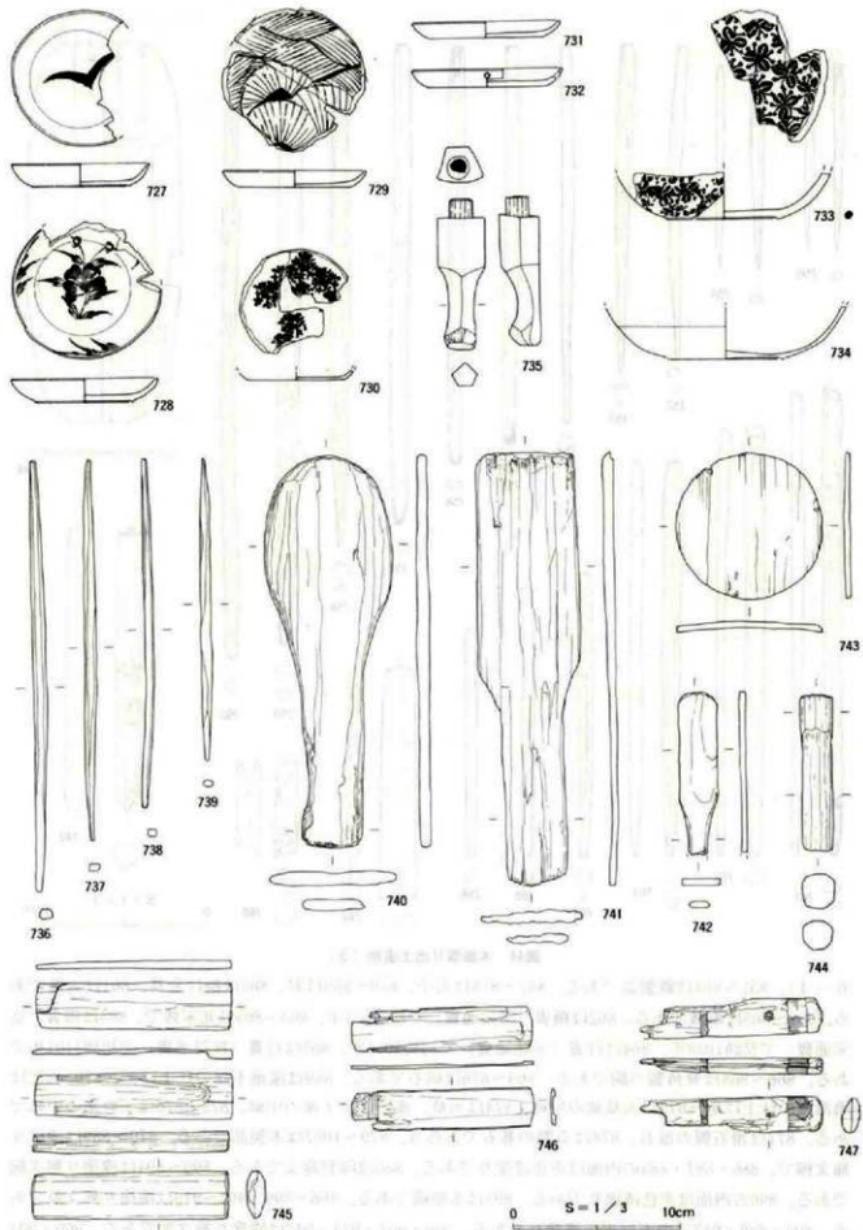


図43 木器埋り出土遺物 (2)



図44 木器漆り出土遺物（3）

6-4)。852~861は鉄製品である。852~855は刀子、856~859は釘、860は掛け金具、861は火箸である。862~865は銅錢である。862は楷書「開元通寶」で初鑄621年、863~865は北宋錢で、863は楷書「皇宋通寶」で初鑄1038年、864は行書「元祐通寶」で初鑄1086年、865は行書「祥符通寶」で初鑄1101年である。866~868は骨角製の駒である。869~876は砥石である。869は产地不詳の仕上げ砥、870~872は鳴滝産の仕上げ砥、873は天草産の中砥、874は天草、或いは伊予産の中砥、875・876は上野産の中砥である。877は滑石製の温石。878は石製の基石であろう。879~1067は木製品である。879~889は塗り施文椀で、886・887・888の内面は赤色漆塗りである。880は印判施文である。890~894は塗り無文椀である。890の内面は赤色漆塗りである。895は木地碗である。896~899・902~913は塗り無文皿である。896~899・913の内面は赤色漆塗りである。900・901・914~943は塗り施文皿である。900・901の内面は赤色漆塗りで、915・916・917は印判施文である。943は小椀としたほうが妥当かもしれない。

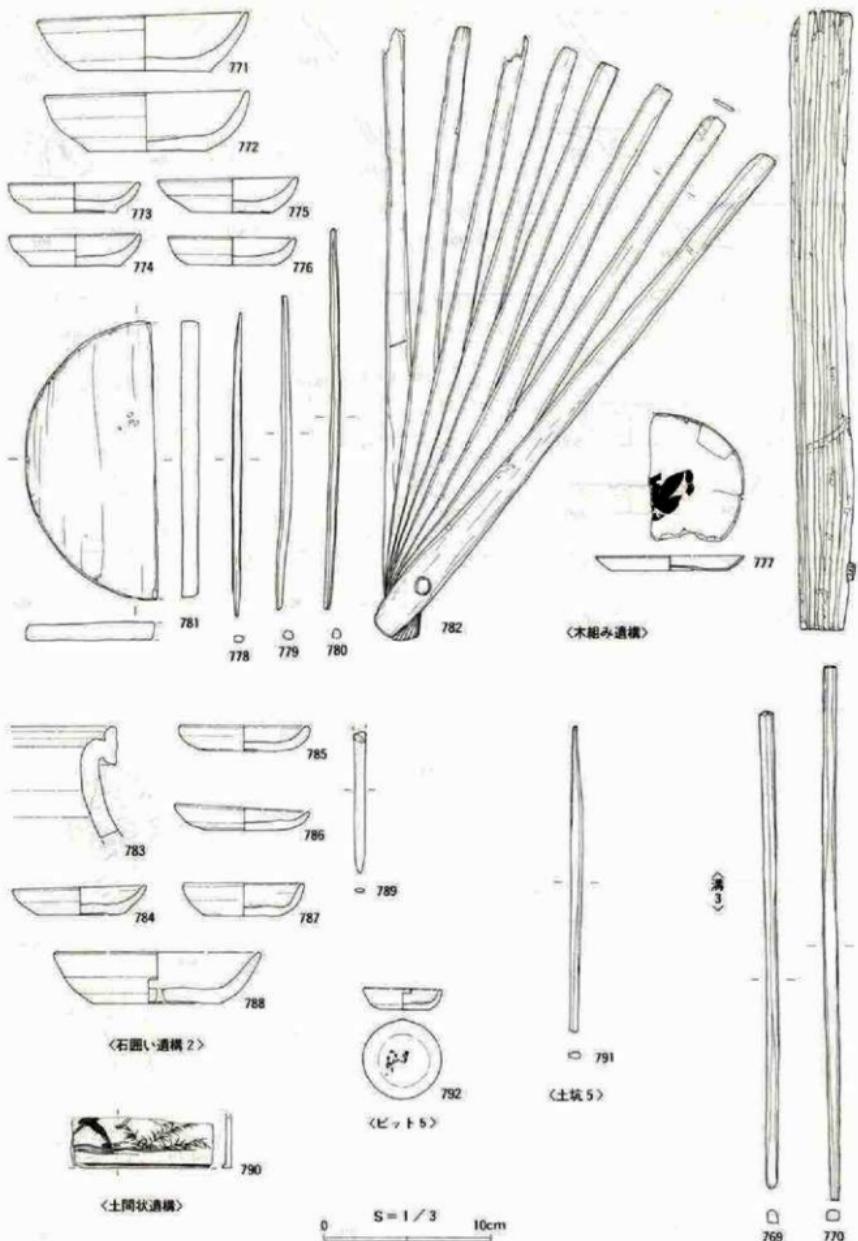


図45 溝3、木組み遺構、石囲い遺構2、土間状遺構、土抗5、ピット5出土遺物

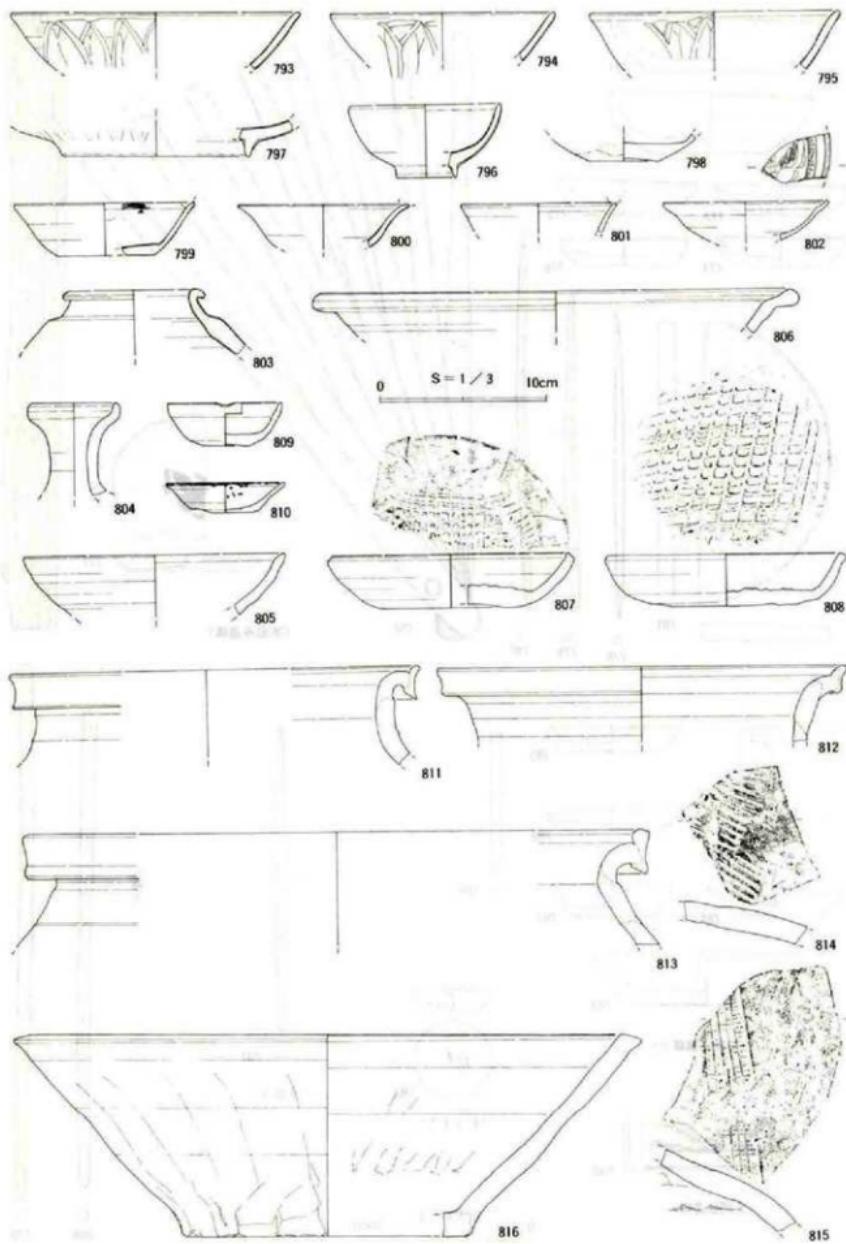


圖46 2期出土遺物(1) (新石器時代中期・西周)

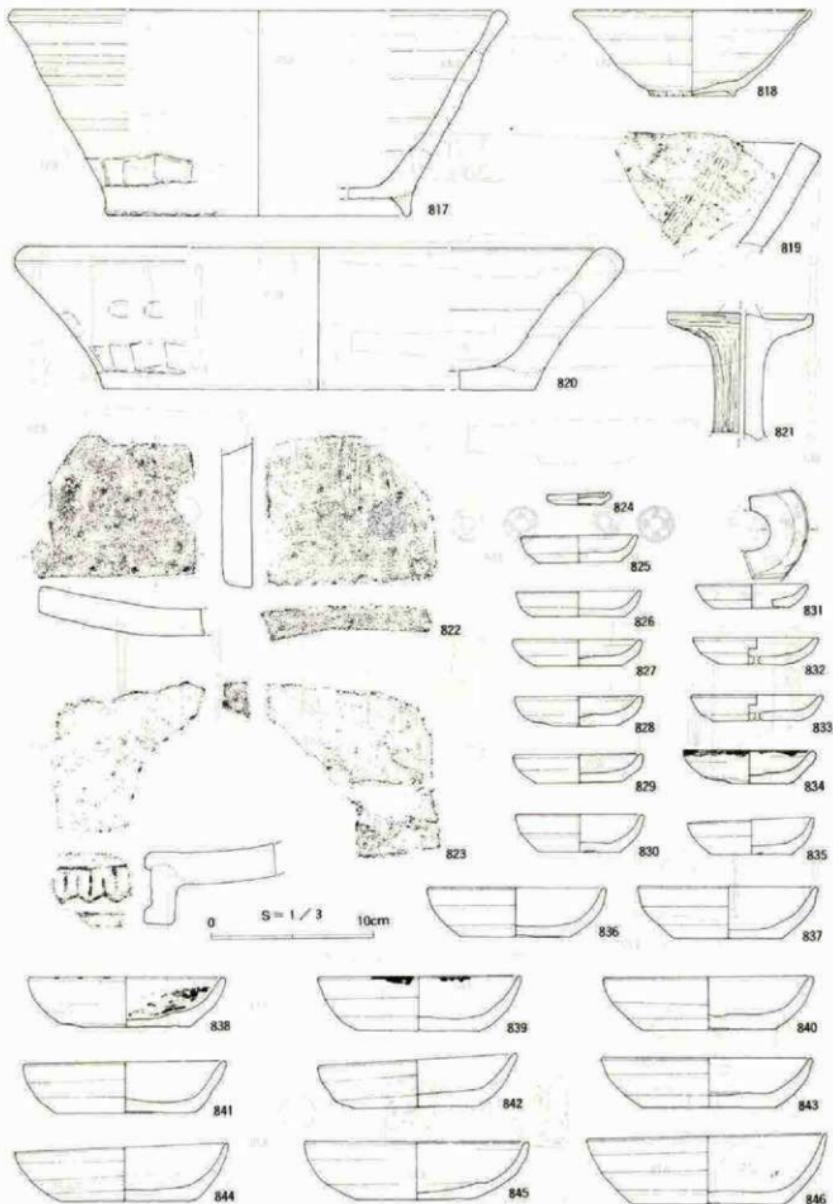


図47 2期出土遺物(2)

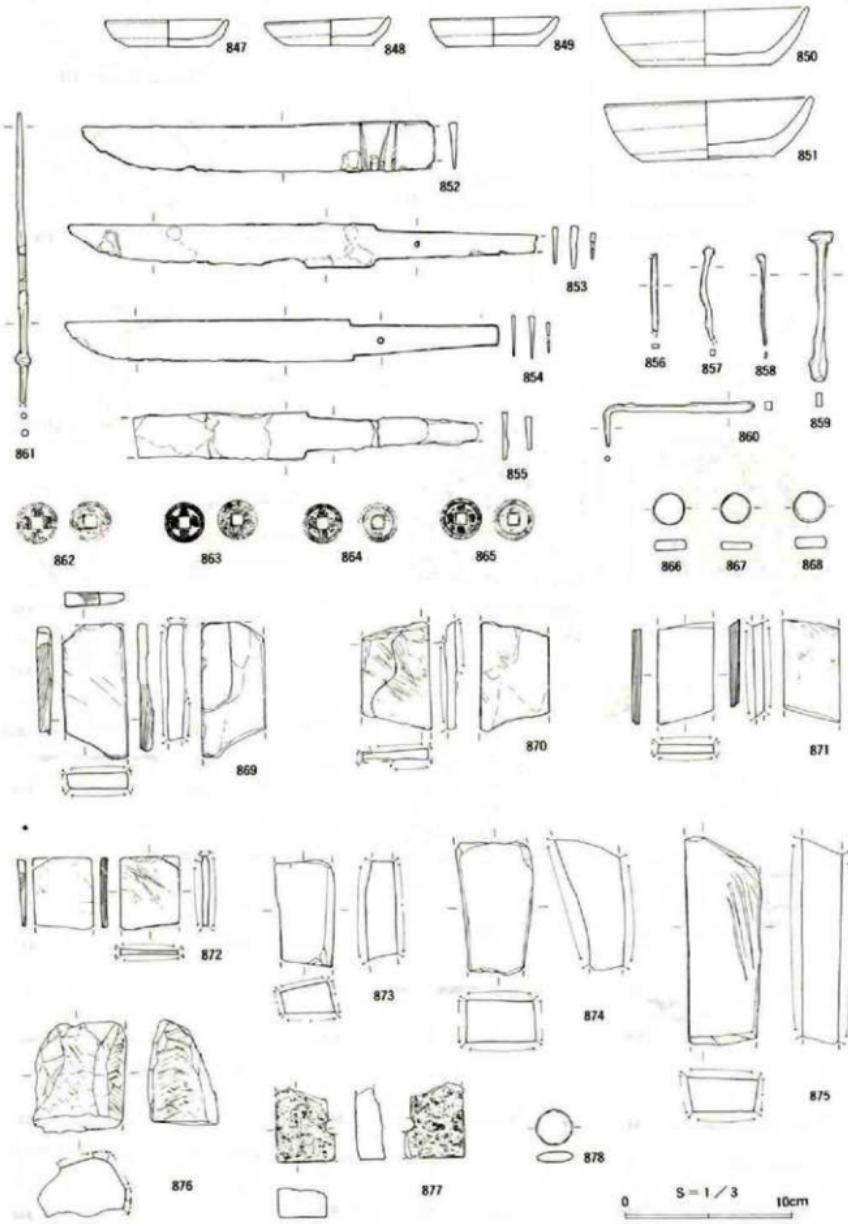


図48 2期出土遺物（3）

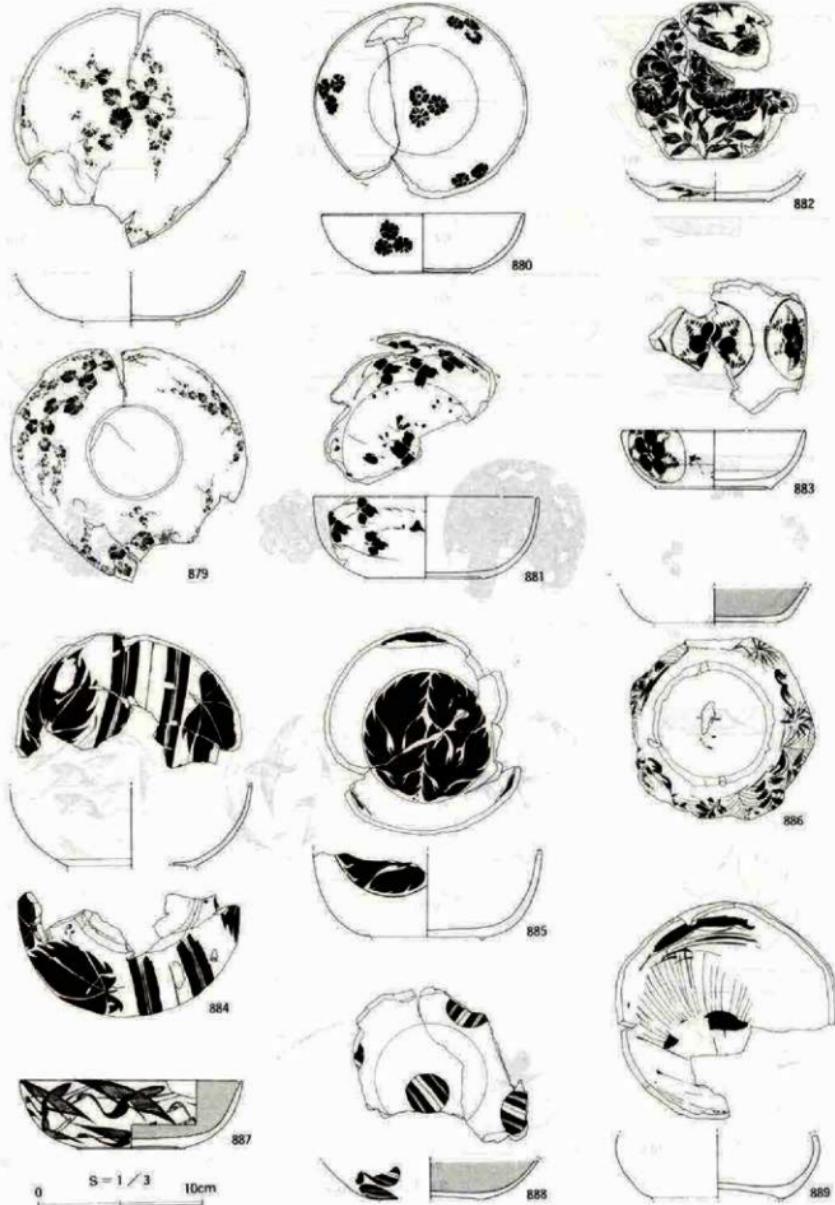


図49 2期出土遺物(4)

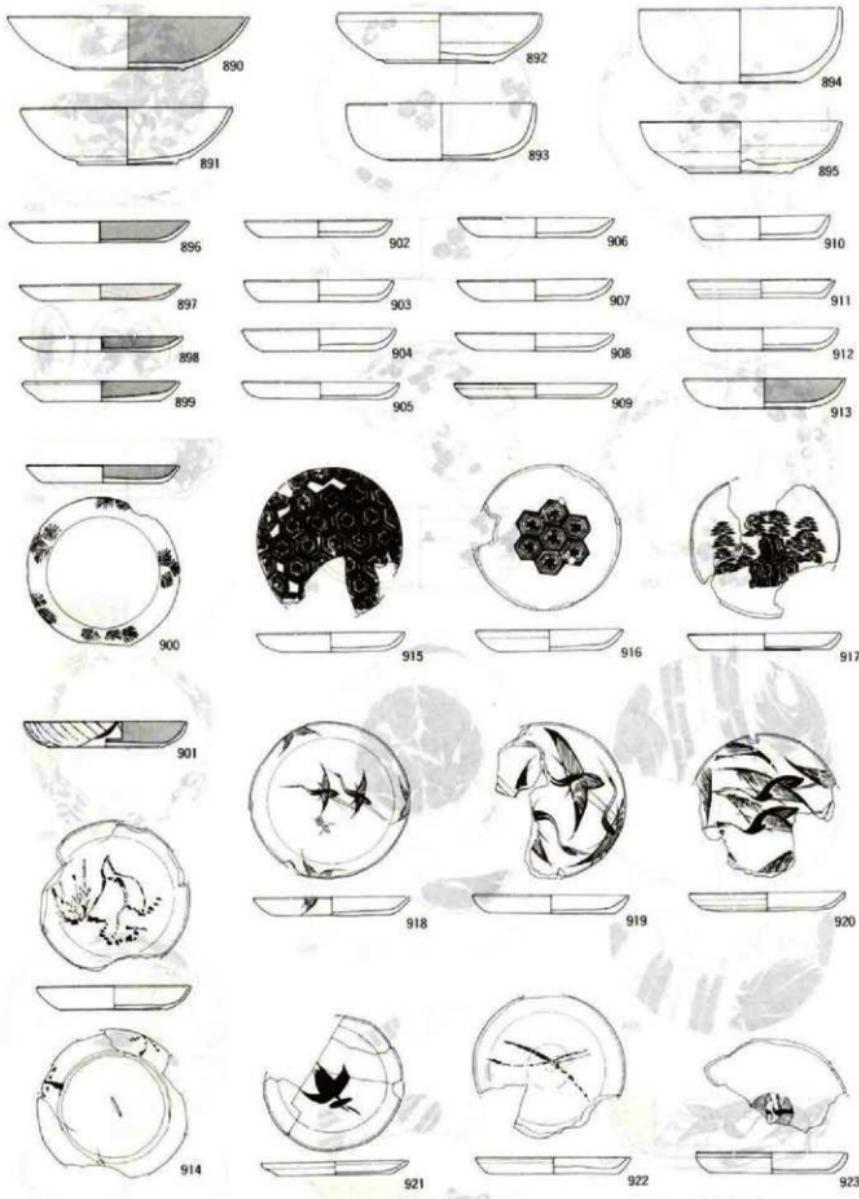


図50 2期出土遺物(5)

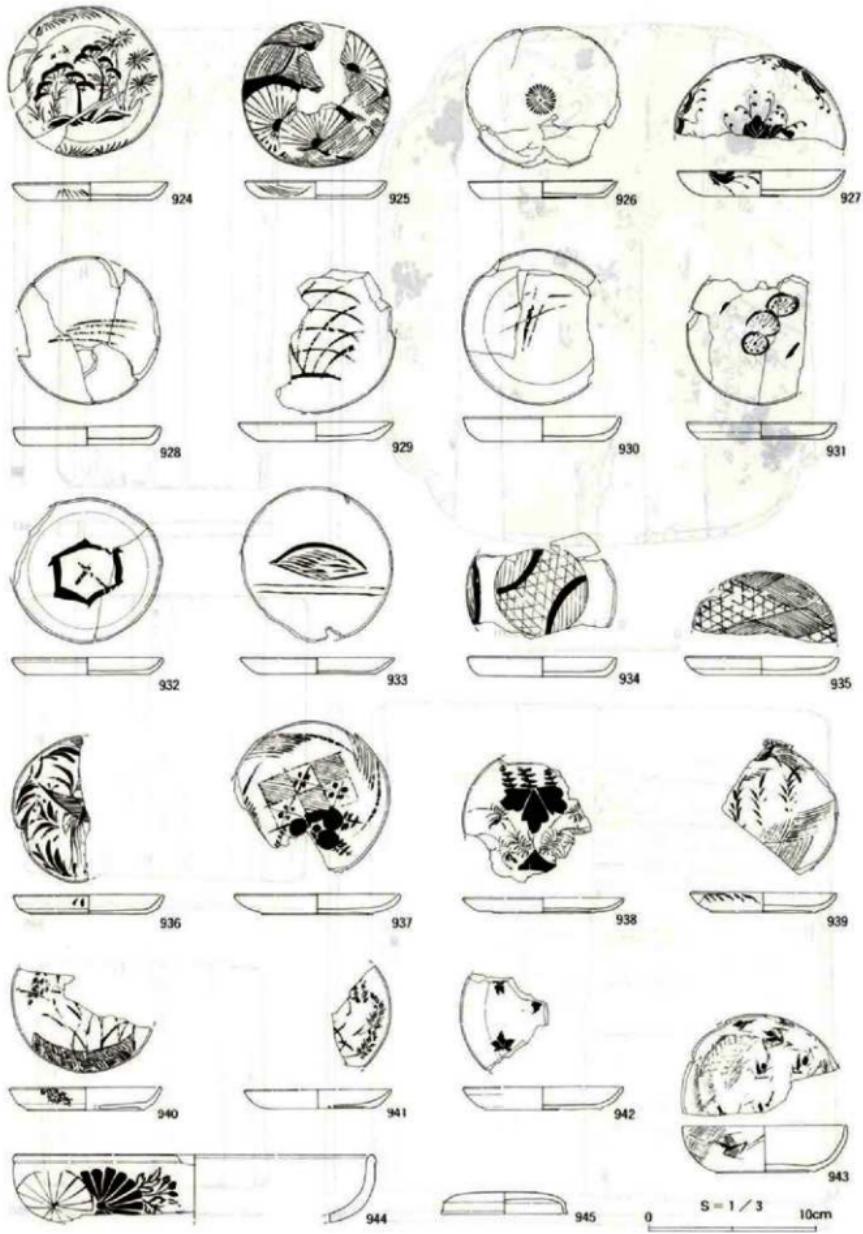


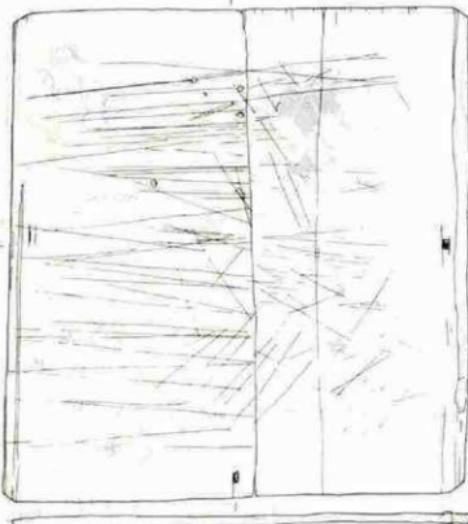
图51 2期出土遗物（6）



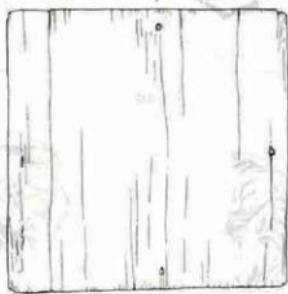
946



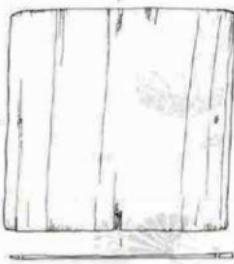
947



948



949



950

図52 2期出土遺物 (7)

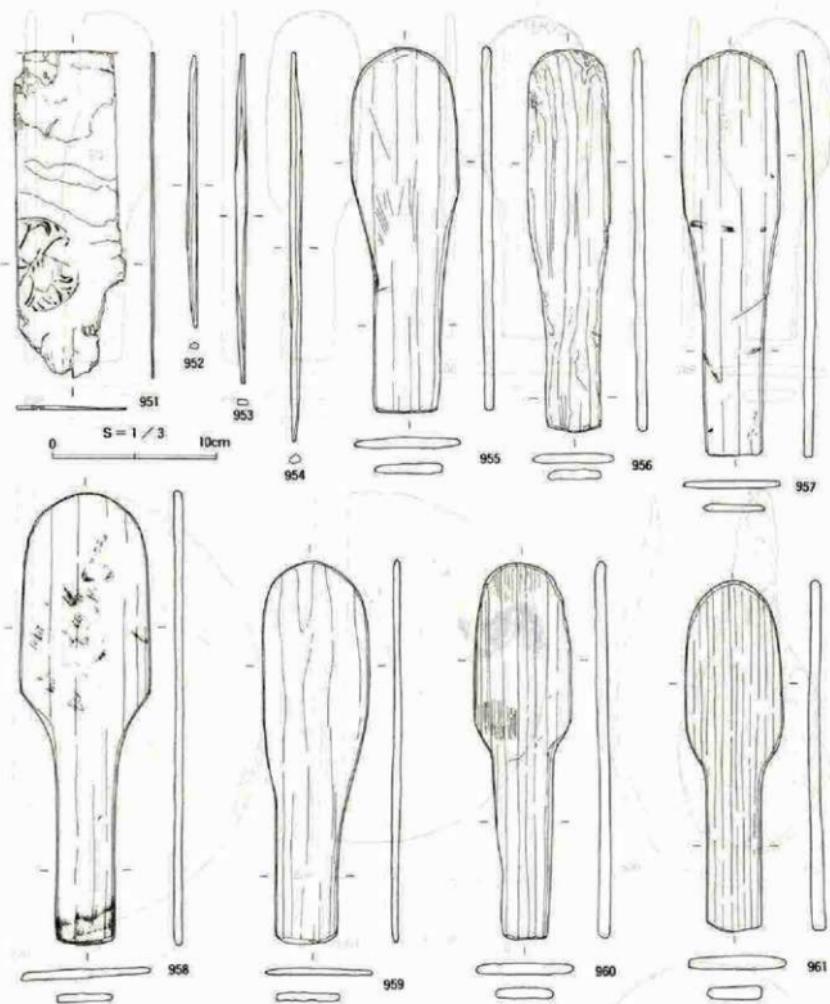


図53 2期出土遺物(8)

944は漆塗り施文鉢、945は漆塗りの蓋である。946は漆塗りの盆で、桜花をスタンプ施文している。947～951は折敷で、951には墨書を有する。952～954は筆。955～965は板杓子であり、965の中央には穿孔を有する。966は蓋杓子。967～970は円板、971・972は有孔円板で、972は木釘で貼り合わせている。973は把手。974は漆塗りの刀子鞘。975は漆塗りの箱蓋の部材。976は漆塗りの櫛。977～984は草履芯。985～993は下駄。994～999は建具部材で、995は漆塗りである。1000～1003は漆塗りの雲形肘木。1004～1007は漆塗りの膳脚。1008は灯明台。1009は漆塗り燭台。1010～1012は手押木。1013は墨書き荷札。1014は将棋の駒。1015は瀬戸窯灰釉製品の口縁部片に、箸状の軸棒を刺したもので「独楽」と考えている。1016

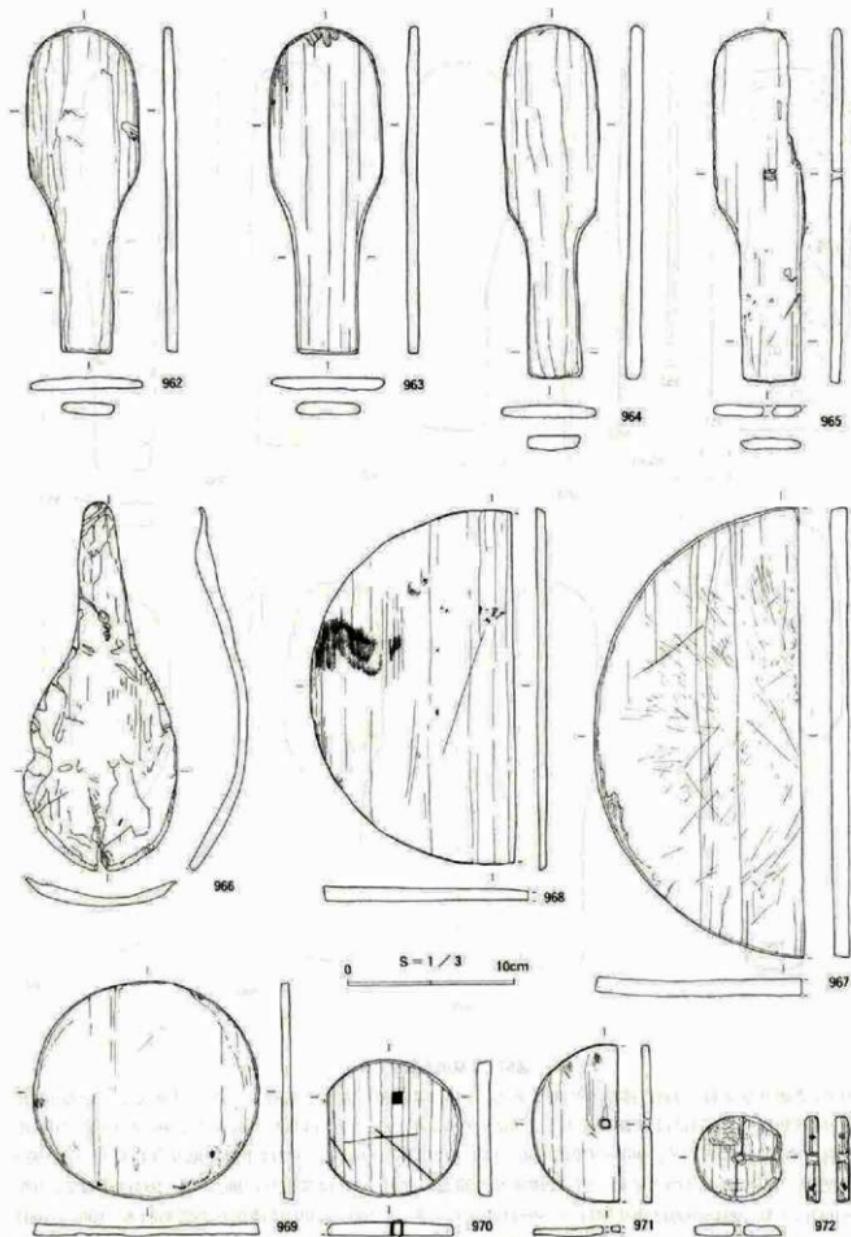


圖54 2期出土遺物(9)

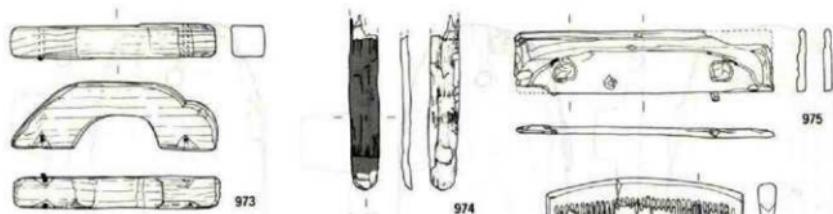


圖55 2期出土遺物 (10)

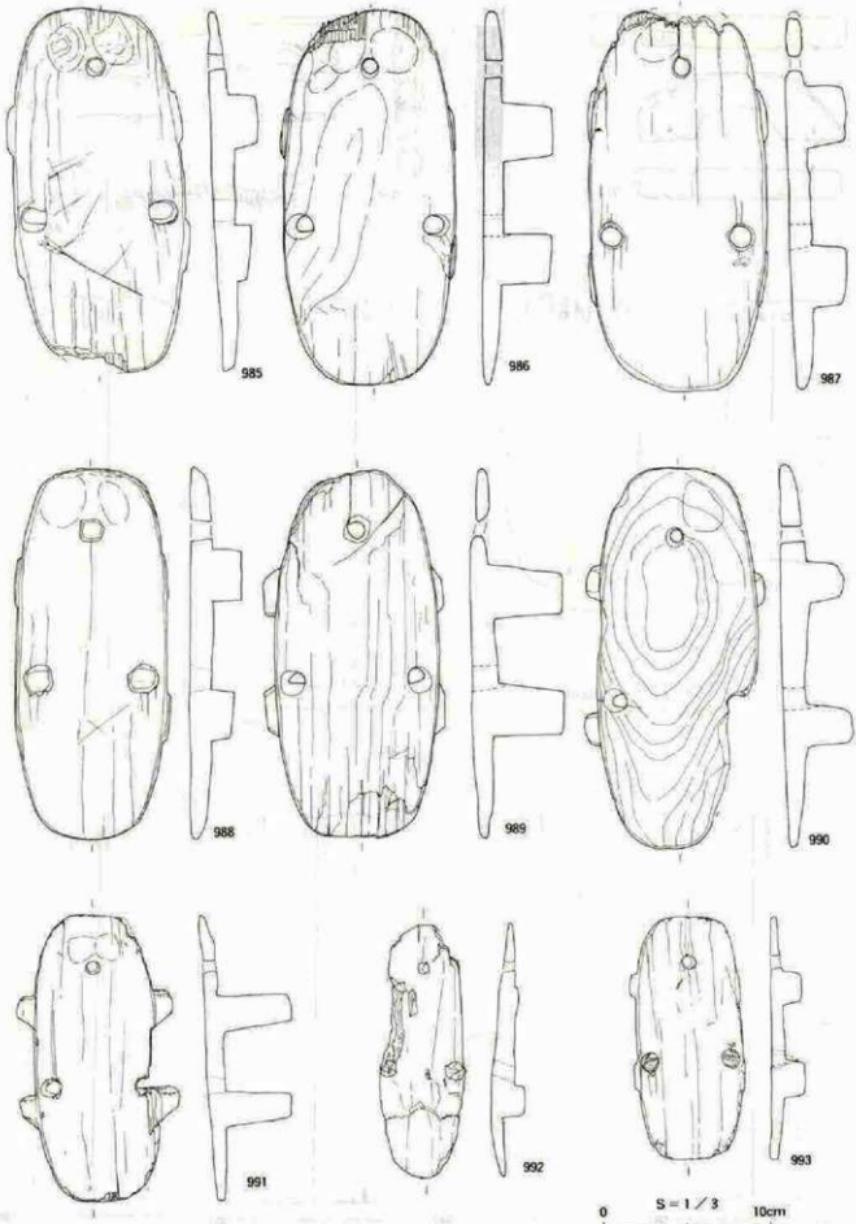


图56 2期出土遗物 (11)

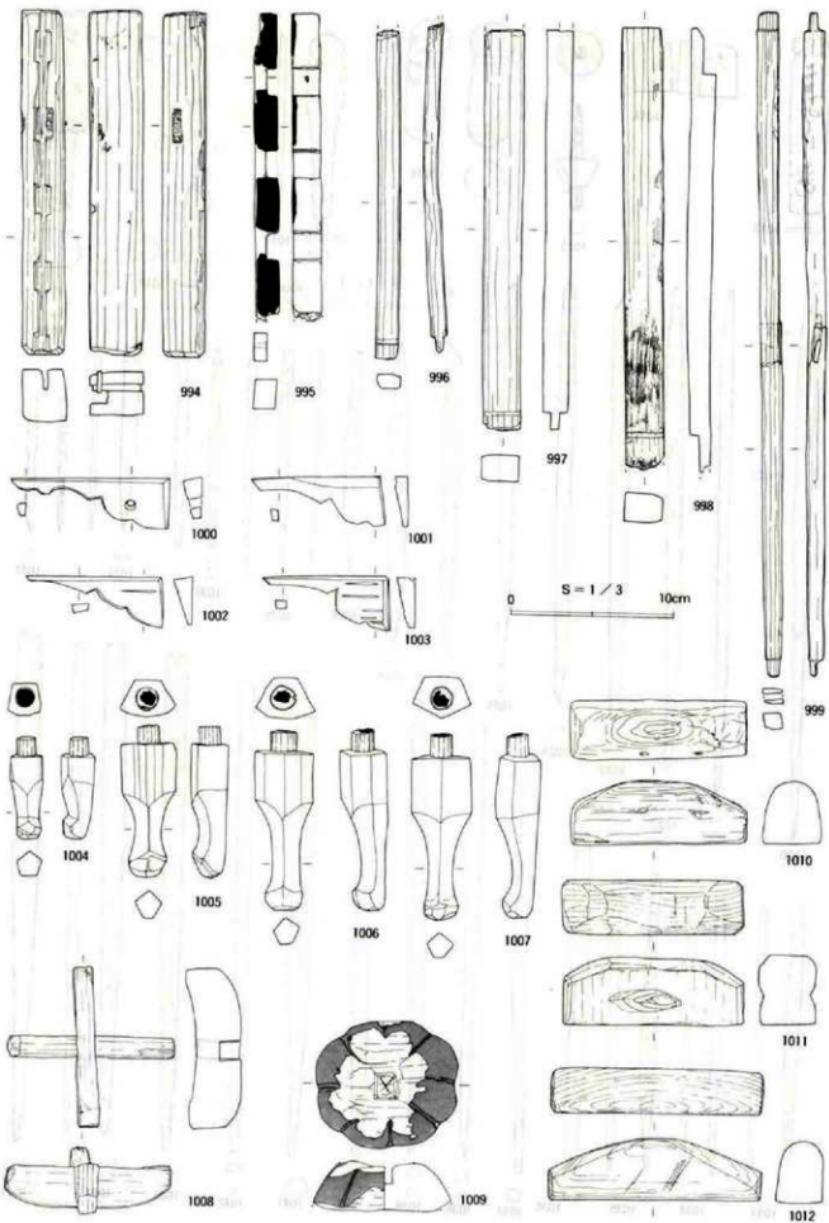


图57 2期出土遗物 (12)

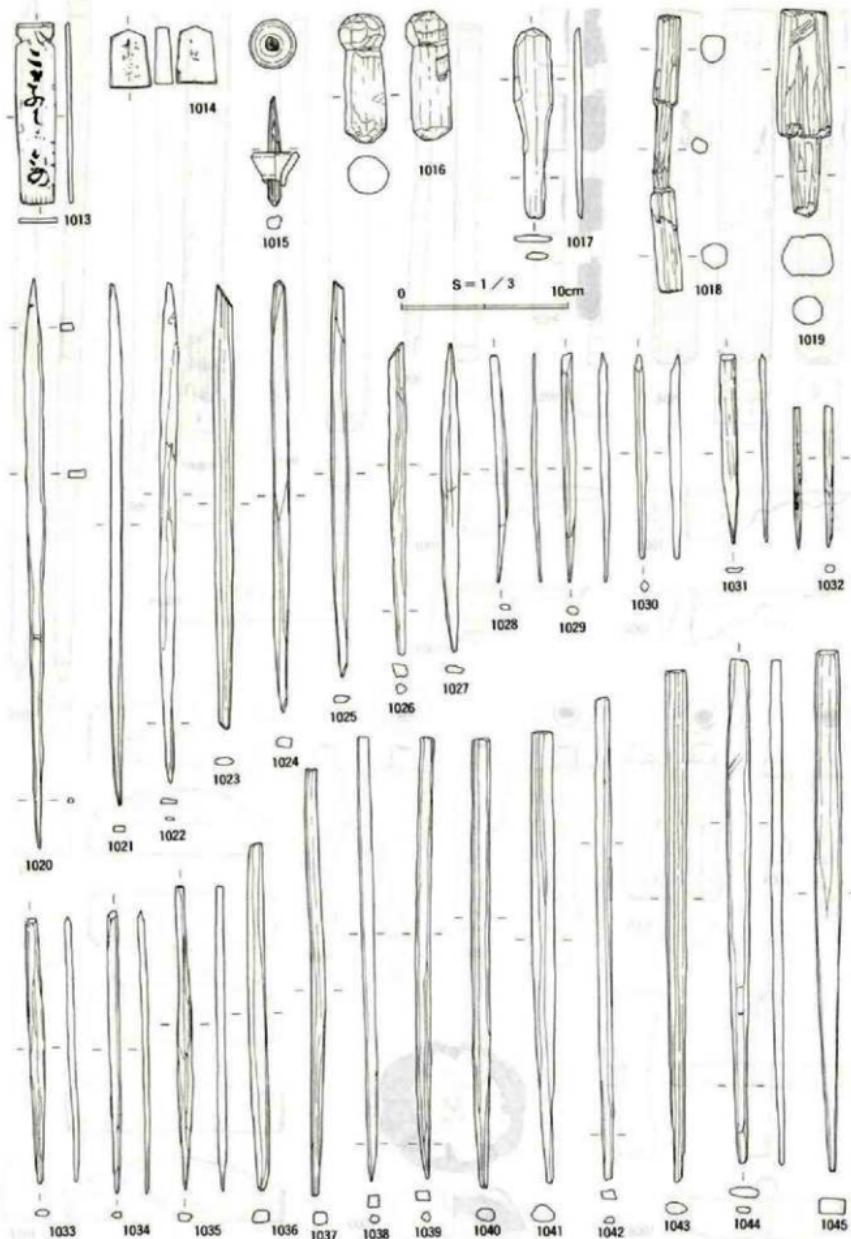


図58 2期出土遺物 (13)

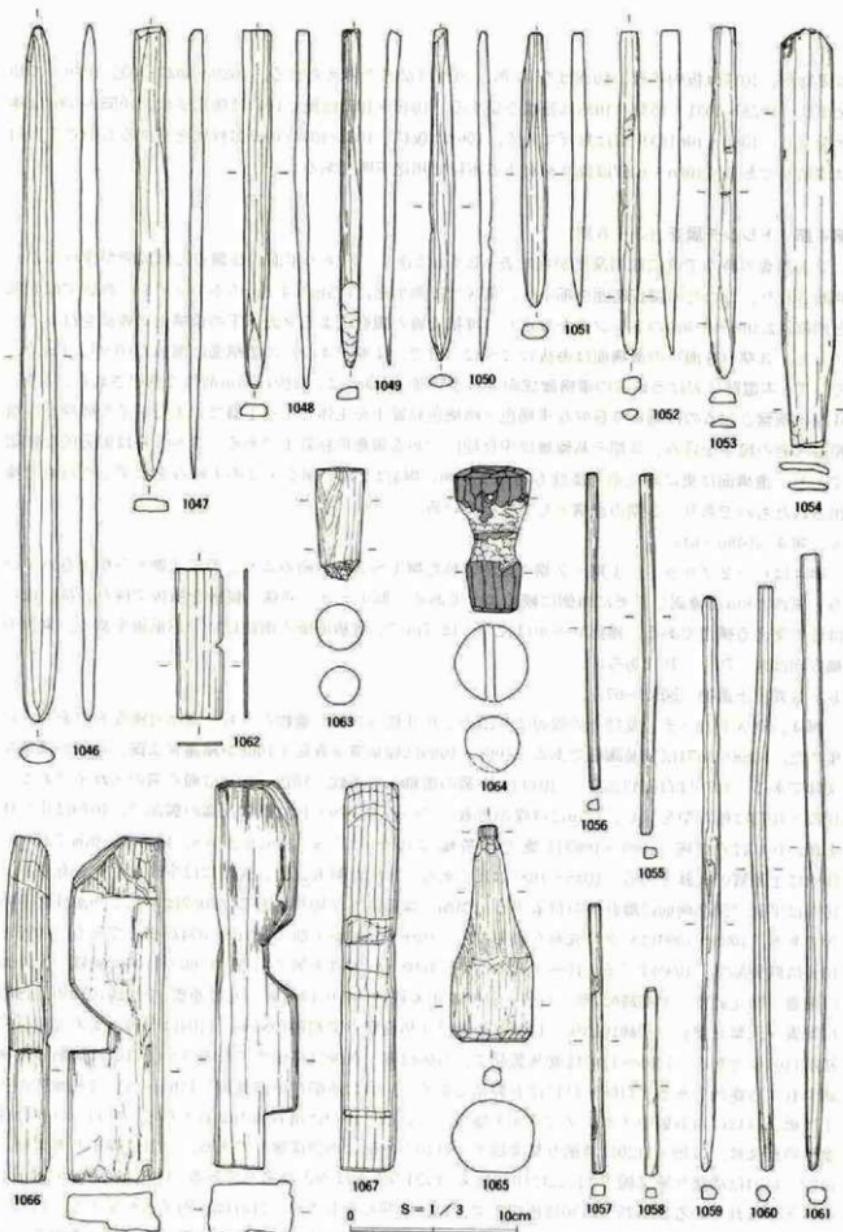


图59 2期出土遗物(14)

は陽物形、1017は板杓子形、1018は堅杵形、1019は砧形と考えられる。1020～1027・1032・1036～1045は串状、1028～1031・1033～1035は箇状を呈する。1046～1053は箇。1054は板杓子状、1055～1061は棒状を呈し、1060・1061の片端は焦げている。1062は板材、1063・1064・1065は栓状を呈するもので、1064は漆塗りである。1066・1067は抉りを有する木材で用途不明である。

第4節 トレンチ調査（3～5期）

2面調査の時点で既に掘削深度が現地表下2.0mに達し、以下の平面的な調査には危険が伴うものと判断された。このため調査範囲を縮小し、東区では南半部に1.5m×4.5mのトレンチを、西区では北部と南部に2.0m×2.0mのトレンチを設定し、堆積土層の観察による2面以下の遺構面の確認を行うこととした。3期（3面）の遺構面は海拔12.2～12.4mで、4期（4面）の遺構面は海拔12.0～12.1mで、そして、本遺跡における最古の遺構確認面である5期（5面）は、海拔11.5m前後で検出された。3期、4期の基盤となるのは締まり良好な黒褐色～暗褐色粘質土を主体とする土層で、土丹粒子や破碎した粗粒凝灰岩の粒子を含み、5期の基盤層は中世地山である黒褐色粘質土である。3～5期は部分的な確認であり、遺構面は更に増える可能性もある。尚、堀4は2期の堀2・3の木組みをはずした時点で検出されたものであり、3期の遺構として扱っている。

a. 堀4（図60・61）

堀4はC-2グリット、1期・2期で確認された堀1～3の木組みより、若干北側から検出されている。東西1.8mを確認し、更に西側に続くようである。堀1～3と同様、縦板を横板で挟み、杭、或いは柱で支える構造である。確認レベルは12.6～12.7mで、縦板底面の海拔は12.3m前後を測る。東西の軸方向はN-70°-Eである。

b. 3期出土遺物（図62～67）

堀4、東区トレンチ、及びその周辺より出土した3期（3面）遺物のうち、図示可能なものをここに集めた。1068～1071は貿易陶磁である。1068・1069は龍泉窯系青磁で1068が鎌蓮弁文碗、1069が鎌蓮弁文鉢である。1070は白磁口元皿。1071は建窯の黒釉天目茶碗。1072～1078は瀬戸窯の入れ子である。1072・1073は輪花型を呈し、1076には煤が付着している。1079～1083は常滑窯の製品で、1079は片口鉢I類、1080は片口碗、1081～1083は甕で縁帯幅は1081が2.1cm、1082が2.7cm、1083が2.0cmである。1084は土器質の火鉢である。1085～1087は瓦である。1085は軒丸瓦で、瓦頭には宝珠と巴文を有する。1086は平瓦で凹凸両面に離れ砂が付着する。側面、端面はヘラ切りである。1087は平瓦で凸面は格子叩きである。1088～1094はロクロ成形かわらけで、1088～1090が大皿、1091～1094が小皿である。1095～1099は鉄製品で、1095は刀子、1096・1097は釘、1098・1099は火箸である。1100～1104は銅鏡で、1100は楷書「開元通寶」で初鑄621年、1101～1104は北宋鏡で、1101は行書「元豊通寶」で初鑄1078年、1102は篆書「天聖元寶」で初鑄1023年、1103は篆書「元祐通寶」で初鑄1086年、1104は行書「聖宋元寶」で初鑄1101年である。1105～1107は骨角製品で、1105は笄、1106は帶留めであろうか、1107は切断した痕跡を有する鹿角である。1108～1113は石製品である。1108は赤間産の四葉硯、1109～1111は鳴滝産の仕上げ硯、1112は滑石製のスタンプで草文を陰刻している。1113は滑石製の温石である。1114～1118は漆塗りの施文皿、1119・1120は漆塗り無文皿で、1120の内面は赤色漆塗りである。1121は漆塗り無文椀、1122～1124は漆塗り施文椀で、1122は印判施文、1124の内面は赤色漆塗りである。1123の外底面には「十五」と刻まれている。1125～1130は板杓子で、1125は穿孔を有する。1131は板杓子状を呈する。1132～1135は箸。1136・1137は円板。1138～1143は有孔円板。1144は漆塗りの箱蓋の部材。1145は蓋把手。1146は蓋。1147は漆塗りの箱蓋である。1148～1151は草履芯。1152は漆塗り串。1153は灯明台。1154は

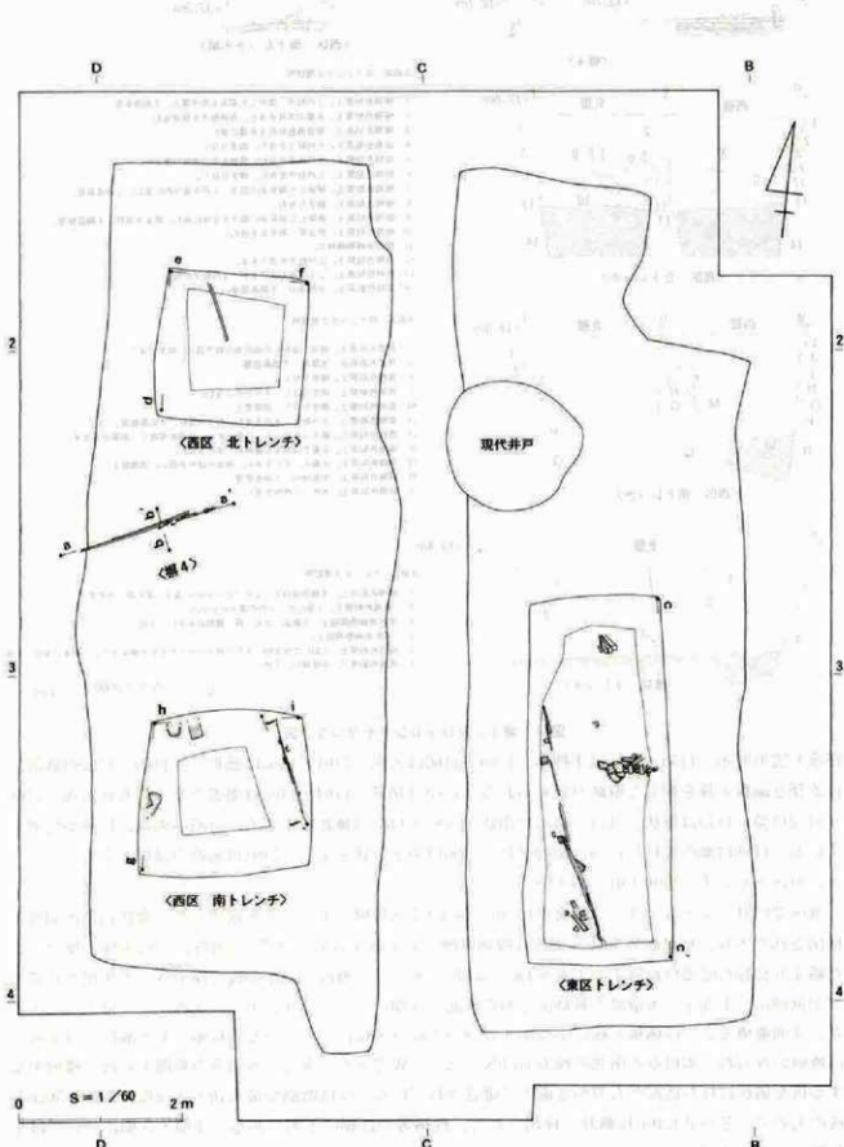


図60 3期、及びトレンチ全体図

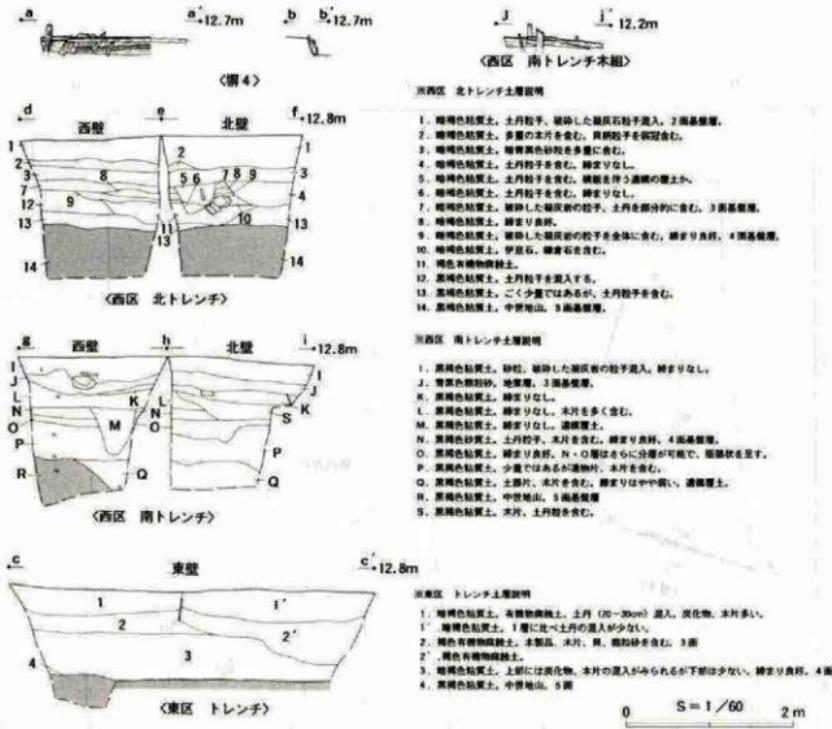


図61 墓4、及びトレンチセクション図

漆塗り雲形肘木。1155～1157は手押木。1158～1160は人形、1161・1162は鳥形で、1160と1162の底部には直径2mm程の棒を刺した痕跡が認められる。1163は砧形。1164・1165は墨書を有する有孔円板。1166～1172は範。1173は笠状、1174～1181は串状、1182～1187は棒状を呈する。1185の両端には漆が付着している。1188は鍔の部材。1189は組物部材。1190は羽子板状を呈し、1191は組物の部材である。

c. 東区トレンチ (図60・61・68・69)

東区ではB-2・3グリットに東西1.5m×南北4.5m規模のトレンチを設定した。海拔12.2m前後で検出された木片、粗粒砂等を含む褐色有機物腐蝕土の上面を3面(3期)、海拔12.0m前後で検出された締まり良好な暗褐色粘質土の上面を4面(4期)、そして、海拔11.5m前後で検出される黒褐色粘質土(中世地山)上面を、本遺跡の最終面である5面(5期)とした。狭いトレンチ内からの検出ではあるが、3期遣構としては横板と杭による南北方向の木組みが検出されている。杭頭である海拔12.1前後には焼痕がみられ、木組みの南北の軸方向はN-22°-Wである。また、木組みの東側からは、楔形を呈する杭を扇状に打ち込んだものが2箇所で確認されている。杭は断面が最大10×3cm程、長さが50cm前後のもので、芯～芯1.0m程離れて検出された。性格等の詳細は不明である。4期・5期については土層断面のみの確認である。

東区トレンチから出土した4期・5期の遺物のうち、図示し得たものは図68・69に示した。図68の

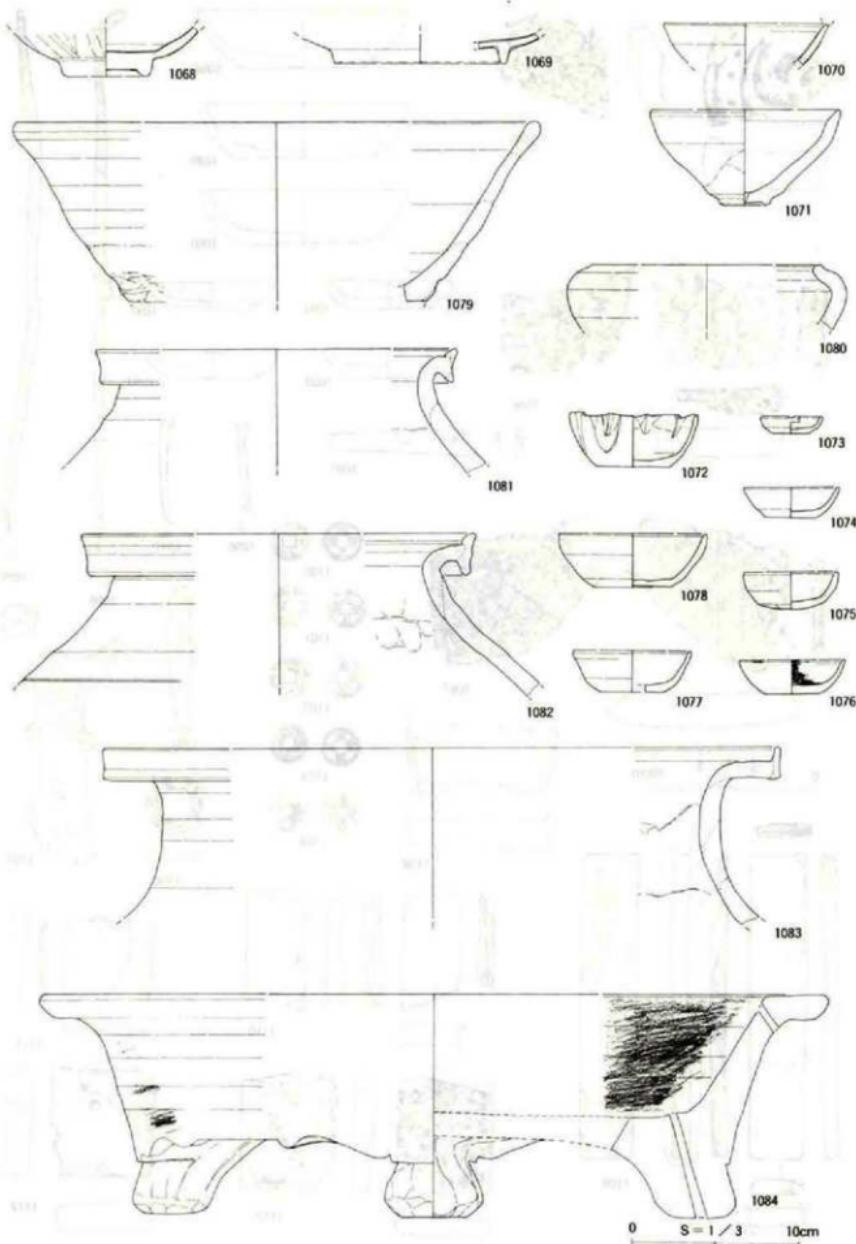


圖62 3期出土遺物（1）

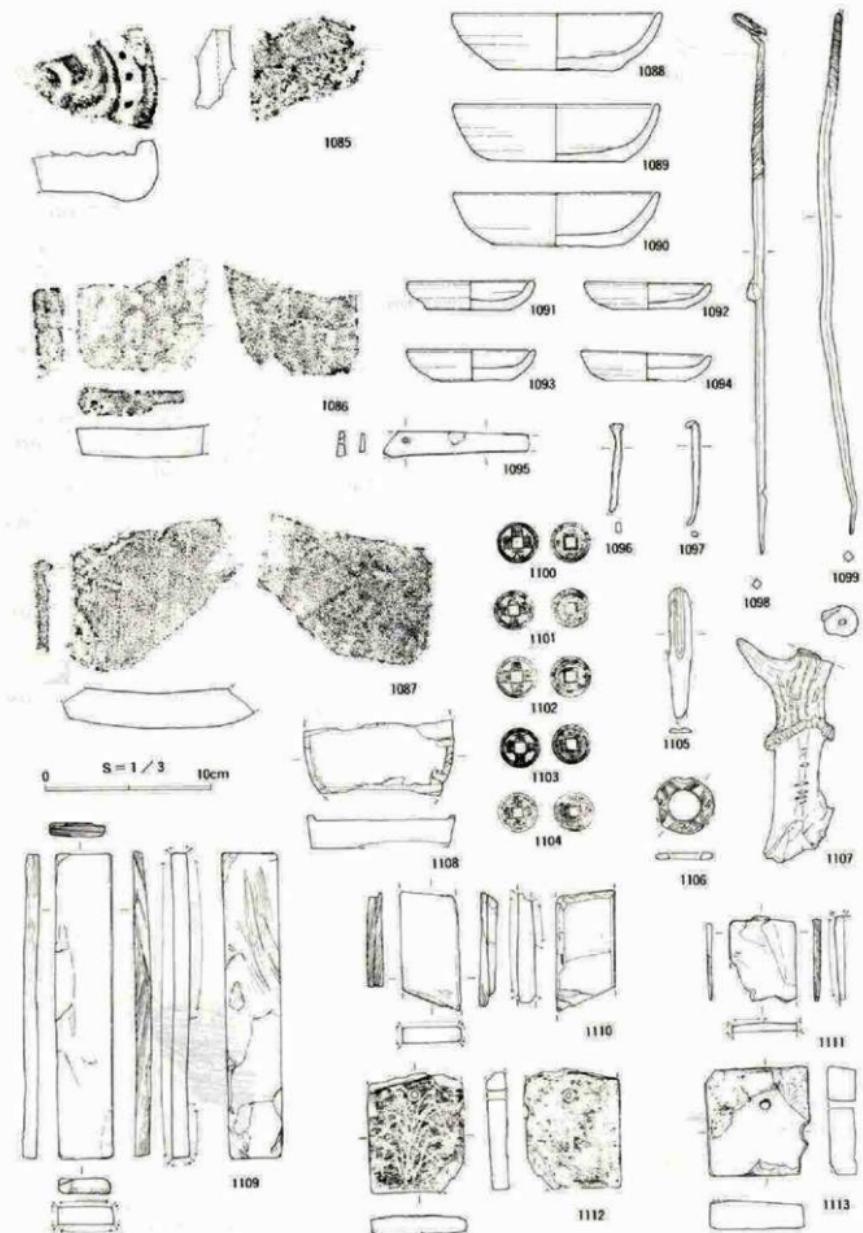


図63 3期出土遺物 (2)

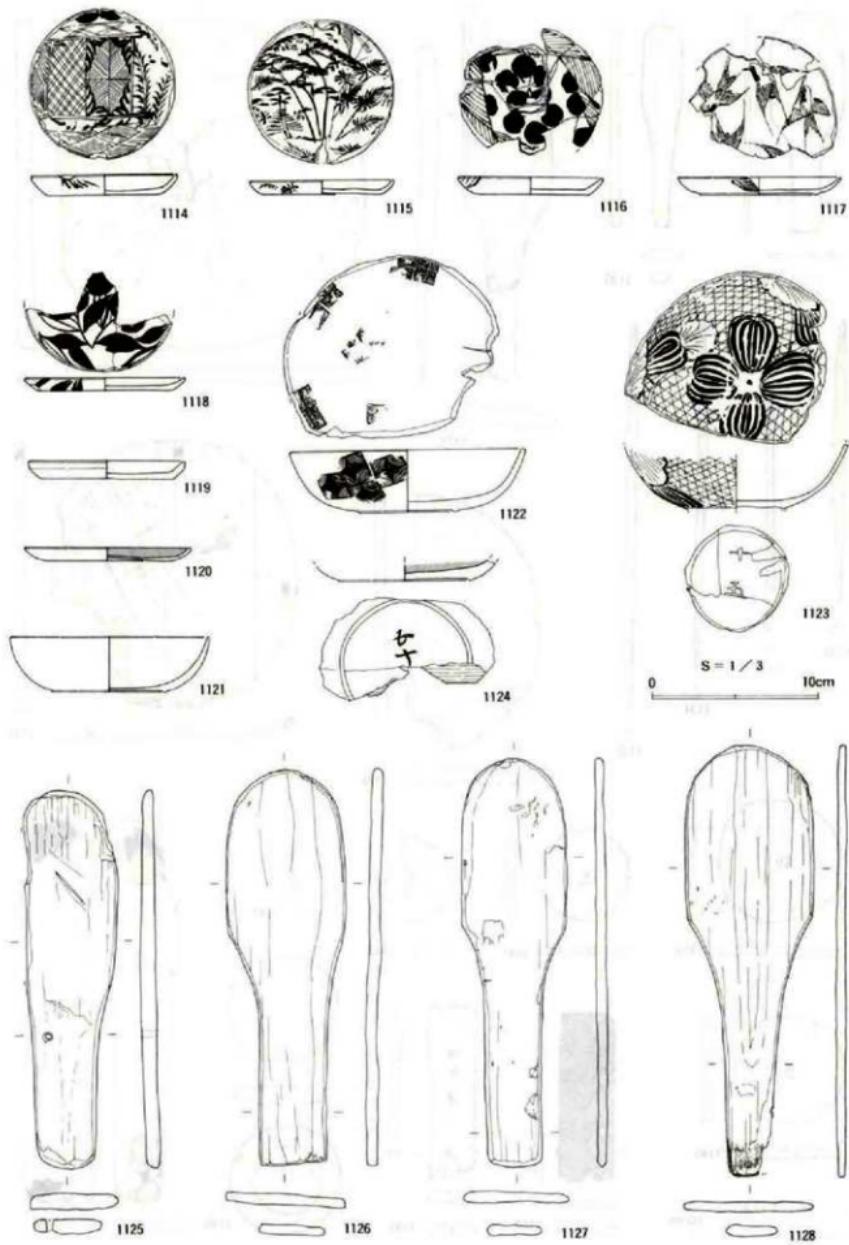


圖64 3期出土遺物（3）

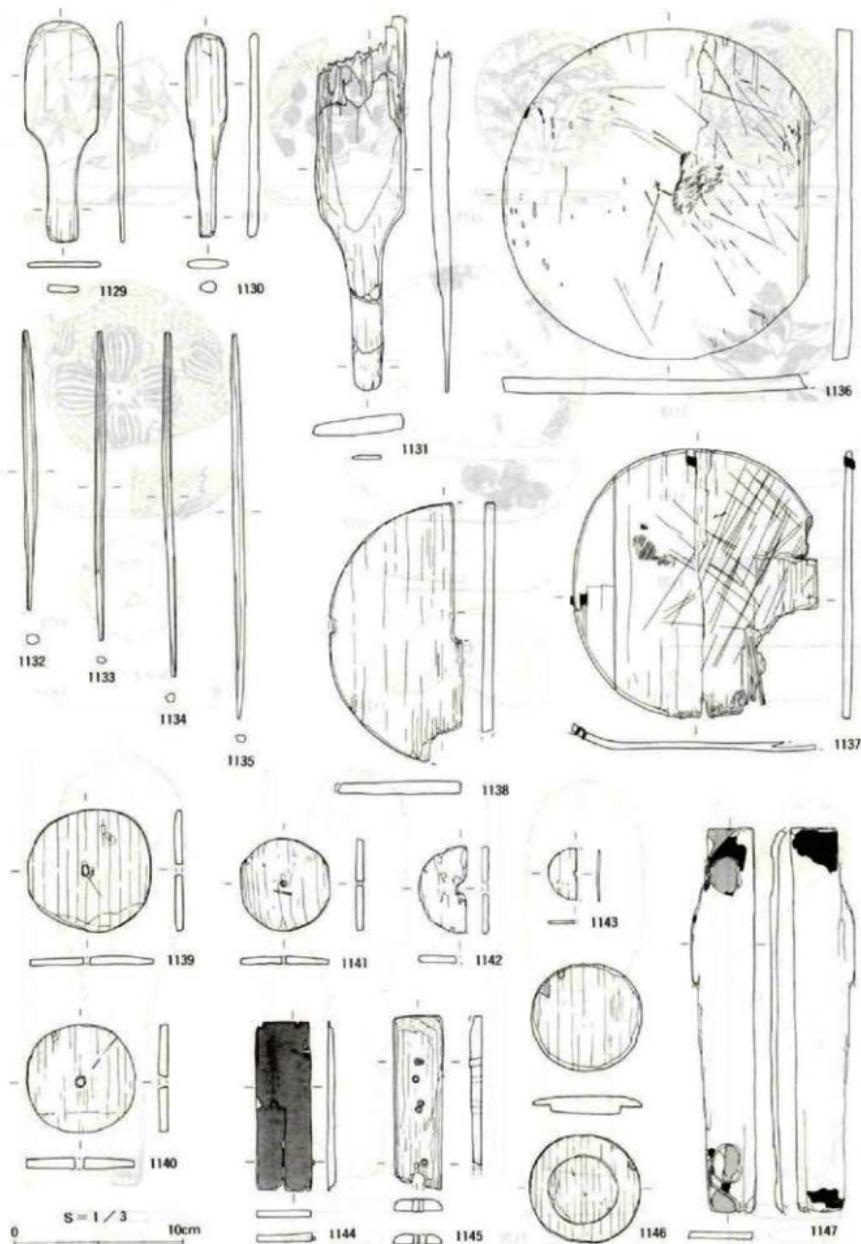


圖65・3期出土遺物（4）

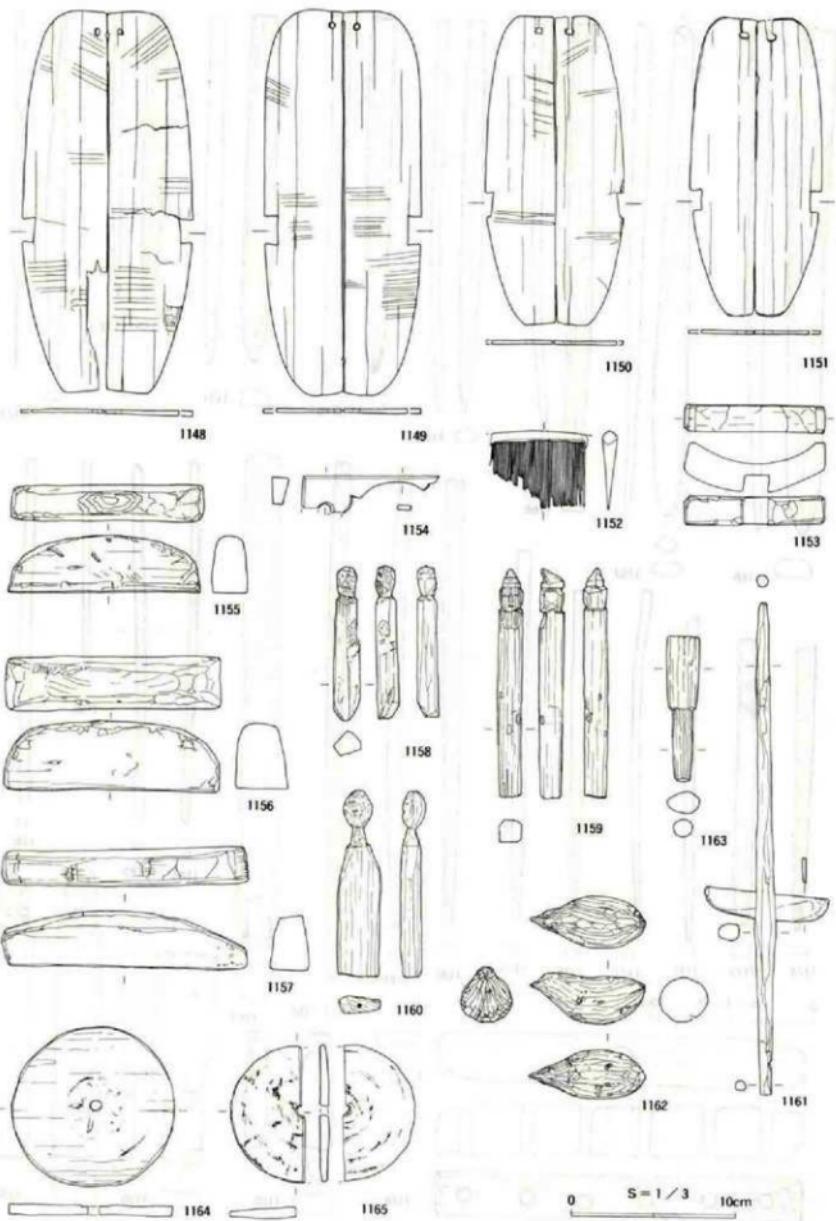


图66 3期出土遗物（5）



図67 3期出土遺物(6)

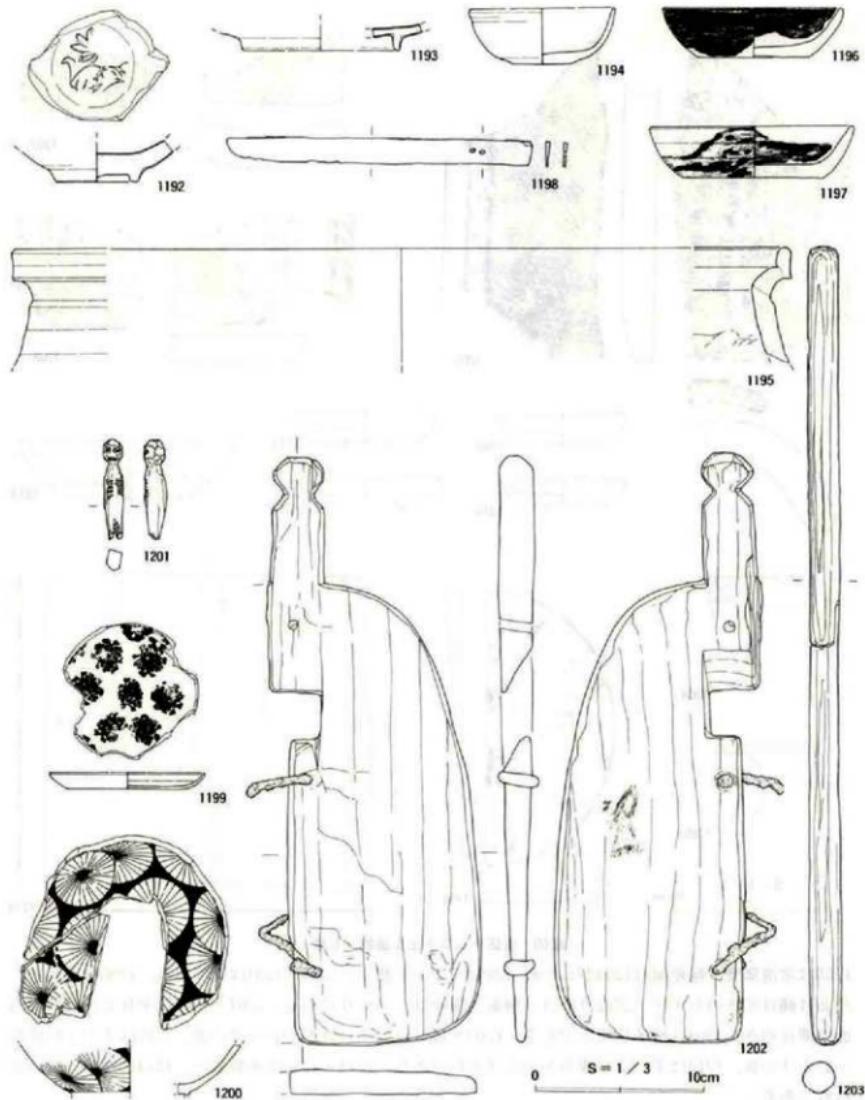


図68 東区トレンチ出土遺物－4期－

1192～1203は4期（4面）、図69の1204～1215は5期（5面）出土である。1192・1193は龍泉窯系青磁で、1192は印花文碗、1193は錦蓮弁文鉢である。1194は瀬戸窯入れ子。1195は常滑窯斐で縁帯幅1.9cm。1196・1197はロクロ成形かわらけの大皿で、ともに灯明皿である。1198は鉄製の刀子。1199～1203は木製品で、1199は漆塗り施文皿、1200は漆塗り施文椀、1201は人形、1202は錦、1203は棒である。1204・

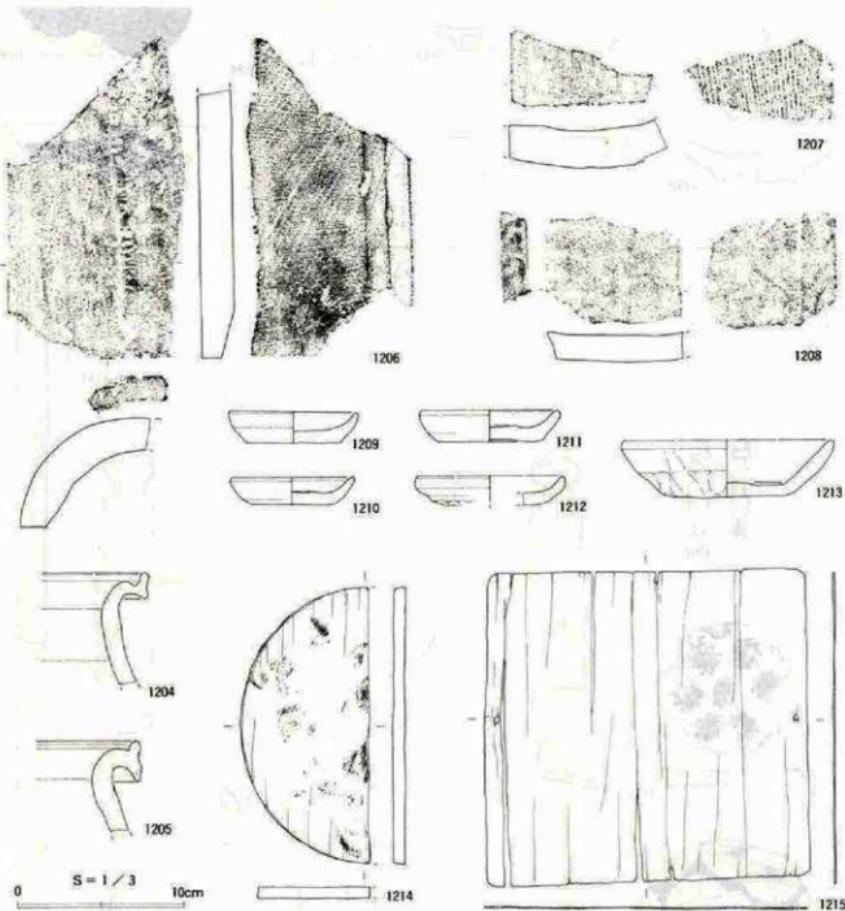


図69 東区トレンチ出土遺物－5期－

1205は常滑窯焼で縁帯幅は1204が1.7cm、1205が2.5cmを測る。1206～1208は瓦である。1206は丸瓦で、凸面は網目叩きのちナデ、凹面は布目、側面・端面はヘラ切りである。1207・1208は平瓦で、1207の凸面は網目叩き、1208は格子目叩きである。1209～1211はロクロ成形かわらけ小皿、1212は手づくね成形かわらけ小皿、1213は手づくね成形かわらけ大皿である。1214・1215は木製品で、1214は円板、1215は折敷である。

d. 西区北トレンチ（図60・61・70・71）
西区ではC-1・2グリットとC-3グリットに2.0m×2.0mのトレンチを設定した。前者を北トレンチ、後者を南トレンチと呼称している。北トレンチでは、海拔12.2m前後で検出される暗青黒色砂粒を多量に含む暗褐色粘質土の上面を3面（3期）、海拔12.0m前後で検出される破碎した凝灰岩粒子を含む暗褐色粘質土の上面を4面（4期）、そして、海拔11.5m前後で検出される黒褐色粘質土（中世地山）

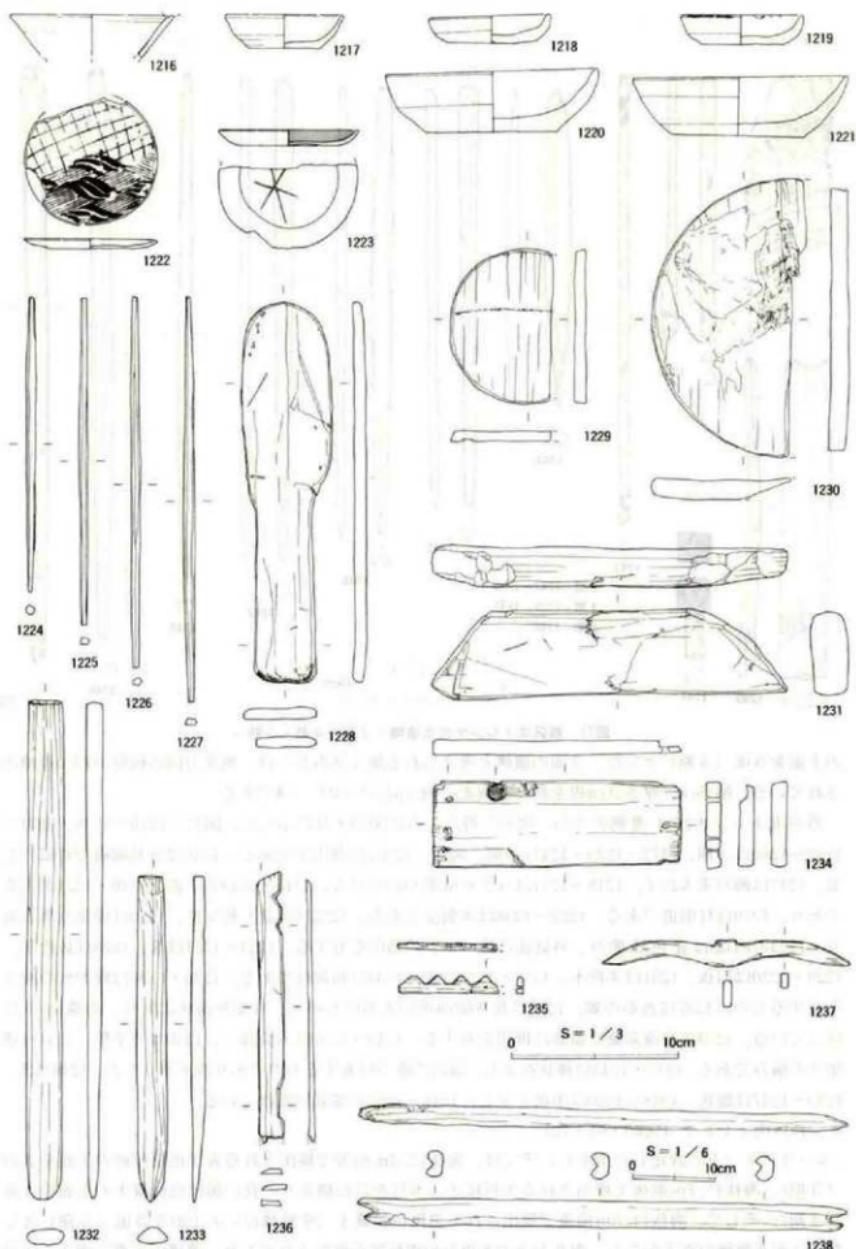


図70 西区北トレンチ出土遺物－3期－

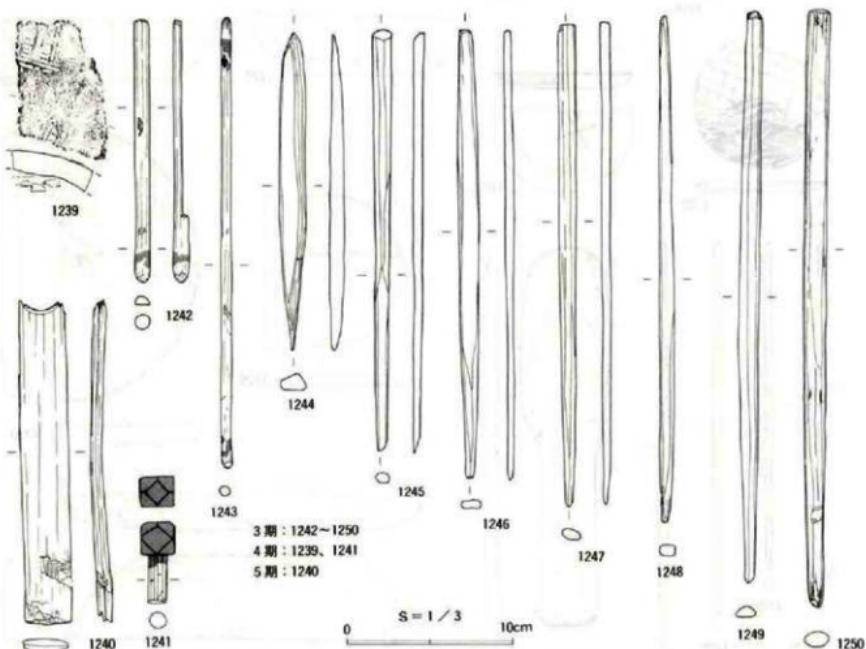


図71 西区北トレンチ出土遺物—3期・4期・5期—

の上面を5面(5期)とした。3面の遺構と考えられる掘り込みからは、南北方向の板材が75cm程検出されている。幅15cm、厚さ3cm程を測り、南北の軸方向はN-23°-Wである。

西区北トレンチ出土遺物のうち、図示し得たものは図70・71に示した。図71-1216～1238・図71-1242～1250は3期、図72-1239・1241は4期、図72-1240は5期出土である。1216は貿易陶磁で白磁口兀皿。1217は瀬戸窯入れ子。1218～1221はロクロ成形かわらけで、1218・1219が小皿、1220・1221が大皿であり、1219は灯明皿である。1222～1238は木製品である。1222は漆塗り施文皿、1223は漆塗り無文皿で、1223の内面は赤色漆塗り、外底面には「*」の刻印を有する。1224～1227は箸、1228は板杓子、1229・1230は円板、1231は手押木、1232・1233は箆、1234は箱部材である。1235・1236は鋸刃状の抉りを有するもの、1237は鳥形の翼、1238は長さ60cm近い大形のもので、片面を溝状に削り、両端をV字に抉っている。1239は常滑窯で器表に押印を有する。1240～1250は木製品で、1240は刀子柄、1241は漆塗りの摘みである。1242・1243は棒状を呈し、端部に漆が付着するものであり漆工具とした。1244は箆、1245～1247は箆状、1248～1250は串状を呈し、1248・1250の端部は焦げている。

e. 西区南トレンチ (図60・61・72)

C-3グリットに設定した南トレンチでは、海拔12.3m前後で検出される青黒色粗粒砂の上面を3面(3期)、海拔12.1m前後で検出される土丹粒子、木片を含む締まりの良い黒褐色砂質土の上面を4面(4期)、そして、海拔11.5m前後で検出される黒褐色粘質土(中世地山)の上面を5面(5期)とした。3面基盤層の直下からも、南北方向の木組みや礎板等が検出されており、遺構面が更に増える可能性もある。木組みは横板を縦板や杭で支えるもので、南北の軸方向はN-23°-Wである。4面、5面

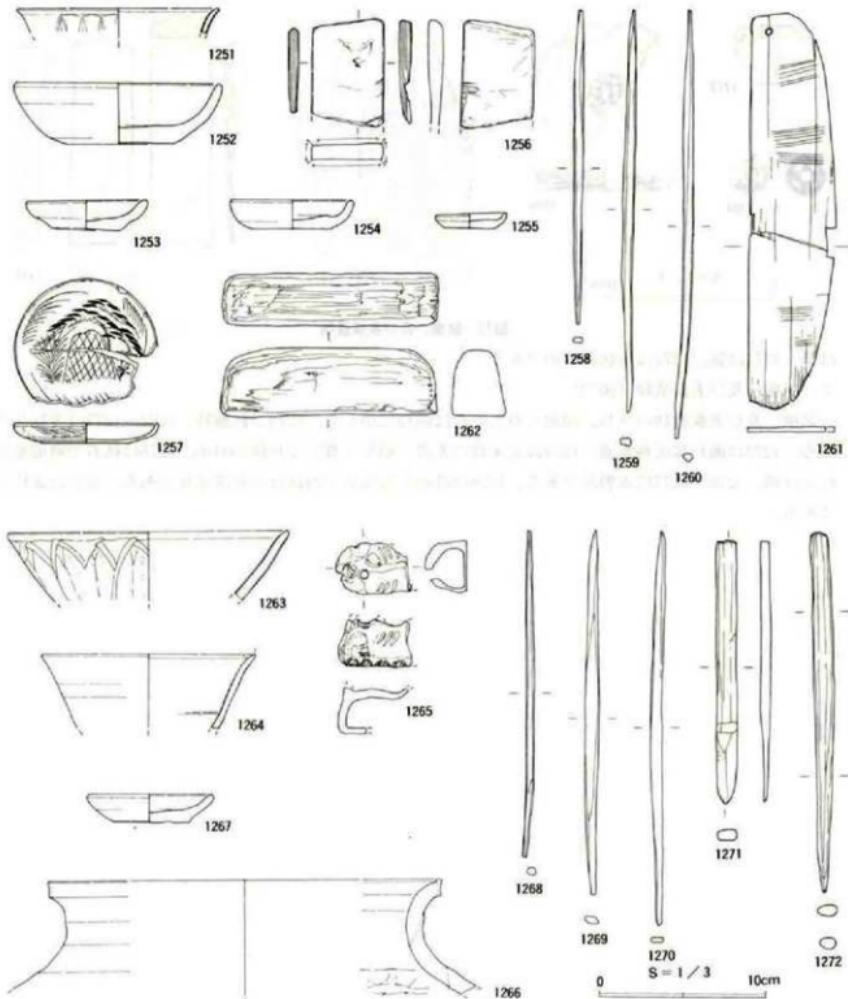


図72 西区南トレンチ出土遺物－4期・5期－

では遺構と考えられる掘り込みが確認されている。

西区南トレンチ出土遺物のうち、図化し得たものは図72に示した。1251～1262は4期、1263～1272は5期出土である。1251は貿易陶磁で龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。1252～1255はロクロ成形かわらけで、1252が大皿、1253・1254が小皿、1255が縁折れタイプである。1256は砥石で、鳴滝産の仕上げ砥である。1257～1262は木製品で、1257は塗り施文皿、1258～1260は箸、1261は草履芯、1262は手押木である。1263～1265は貿易陶磁で、1263は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、1264は白磁口兀皿、1265は青白磁水滴である。1266は常滑窯甕で縁幅1.0cm。1267はロクロ成形かわらけの小皿。1268～1272は木製品で、1268～1270

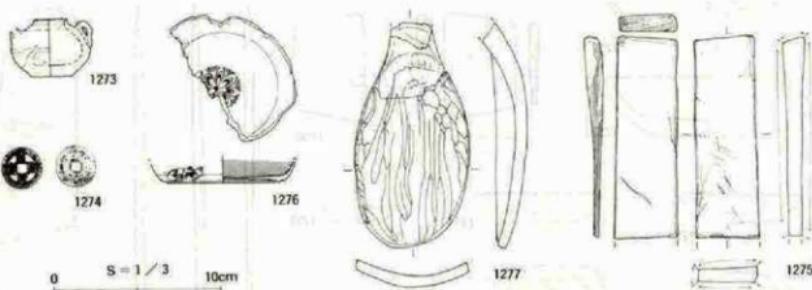


図73 試掘、及び表探遺物

は箸、1271は箇、1272は串状のものである。

f. 試掘、及び表探遺物（図73）

試掘、及び表探遺物のうち、図化し得たものは図73に示した。1273が試掘時、1274～1277は表探品である。1273は瀬戸窯灰釉水滴。1274は北宋銭の篆書「紹聖元寶」で初鑄1094年。1275は砥石で鳴滝産の仕上げ紙。1276・1277は木製品である。1276は漆塗り施文皿で内面は赤色漆塗りである。1277は壺杓子である。



図74 試掘、及び表探遺物（續）

試掘、及び表探遺物（續）（図74）。試掘、及び表探で得た遺物は、1278～1299の如く、陶器片、骨片、瓦片等である。1278は、10mm×10mmの小片で、1279は、10mm×10mmの小片で、1280は、10mm×10mmの小片で、1281は、10mm×10mmの小片で、1282は、10mm×10mmの小片で、1283は、10mm×10mmの小片で、1284は、10mm×10mmの小片で、1285は、10mm×10mmの小片で、1286は、10mm×10mmの小片で、1287は、10mm×10mmの小片で、1288は、10mm×10mmの小片で、1289は、10mm×10mmの小片で、1290は、10mm×10mmの小片で、1291は、10mm×10mmの小片で、1292は、10mm×10mmの小片で、1293は、10mm×10mmの小片で、1294は、10mm×10mmの小片で、1295は、10mm×10mmの小片で、1296は、10mm×10mmの小片で、1297は、10mm×10mmの小片で、1298は、10mm×10mmの小片で、1299は、10mm×10mmの小片である。

表1 出土遺物計測表(1)

No.	遺物	計測値 単位(cm) () 暫用数据 [] 現存数据	No.	遺物	計測値 単位(cm) () 暫用数据 [] 現存数据
1	青花文瓶		52	石造像上口瓶	長さ 5.1 帯幅 3.4 厚さ 0.7
2	高麗青白磁	口径 (16.8)	53	人形	頭径 (4.0)
3	青白磁	腹径 (6.8)	54	土器	
4	灰陶輪戸	口径 (8.5)	55	土器	口径 (1.9) 腹径 2.7 器高 2.9
5	灰陶輪戸	口径 (10.2)	56	土器	口径 7.5 底径 4.9 器高 2.6
6	灰陶輪戸片口	口径 (15.6)	57	土器	口径 7.4 腹径 4.3 器高 1.9
7	灰陶輪戸小瓶	口径 (9.8) 底径 (5.0) 器高 (2.3)	58	土器	口径 7.5 底径 3.0 器高 1.8
8	灰陶輪戸瓶	口径 (13.4)	59	土器	口徑 7.9 底徑 5.0 器高 1.9
9	灰陶輪戸	腹径 (6.0)	60	常盤	口径 (32.0)
10	山茶葉模様	腹径 (4.4)	61	土器	口径 12.5 腹径 6.7 器高 3.7
11	常盤		62	土器	口径 13.8 腹径 7.5 器高 3.4
12	常盤		63	土器	口径 13.3 腹径 6.5 器高 3.6
13	常盤	口径 (28.9) 腹径 (13.0) 器高 (3.2)	64	土器	口径 13.4 腹径 7.5 器高 2.4
14	常盤		65	土器	口径 13.1 常盤 7.3 器高 3.3
15	常盤		66	土器	口径 13.0 腹径 6.9 器高 3.1
16	常盤	口径 (10.5) 腹径 (9.0) 器高 (5.8)	67	土器	口径 12.4 腹径 6.5 器高 3.3
17	かねこ	口徑 (12.0) 底徑 9.0 器高 4.4	68	土器	口径 12.6 腹徑 7.3 器高 3.3
18	土器	口径 5.8 成形 4.6 器高 1.9	69	土器	口径 12.5 腹径 7.5 器高 3.4
19	土器	口径 4.1 成形 4.5 器高 1.8	70	土器	口径 10.6 成形 6.0 器高 3.0
20	土器	口径 5.8 成形 4.4 器高 1.9	71	土器	口径 10.3 成形 6.2 器高 2.7
21	土器	口径 5.9 成形 4.3 器高 1.9	72	土器	口径 7.5 成形 6.2 器高 1.5
22	土器	口径 6.0 成形 4.8 器高 1.7	73	土器	口径 7.8 成形 4.3 器高 1.7
23	土器	口径 6.5 成形 4.6 器高 2.0	74	土器	口径 7.7 成形 4.9 器高 2.1
24	土器	口径 6.8 成形 3.8 器高 2.3	75	土器	口径 7.6 成形 4.6 器高 2.1
25	土器	口径 7.6 成形 4.6 器高 2.4	76	土器	口径 7.4 成形 4.1 器高 2.1
26	土器	口径 7.9 成形 4.6 器高 2.3	77	土器	口径 7.7 成形 4.6 器高 1.7
27	土器	口径 9.5 成形 5.2 器高 3.1	78	土器	口径 7.2 成形 4.1 器高 2.0
28	土器	口径 10.7 成形 6.4 器高 2.9	79	土器	口径 9.9 成形 4.2 器高 2.1
29	土器	口径 11.8 成形 7.6 器高 3.2	80	土器	口径 7.3 成形 4.5 器高 2.1
30	土器	口径 12.6 成形 7.0 器高 4.1	81	常盤	長さ 8.1 幅 5.7 厚さ 0.9
31	土器	口径 13.0 成形 7.8 器高 3.9	82	刀身	口径 8.5 成形 2.2 器高 1.1
32	土器	口径 10.5 成形 5.7 器高 2.8	83	刀身	長さ 5.3 幅 2.9 厚さ 0.2
33	土器	口径 10.0 成形 6.4 器高 2.6	84	刀身	頭径 (9.6)
34	土器	口径 9.6 成形 5.8 器高 1.8	85	片口	口径 (34.0)
35	土器	口径 9.3 成形 6.2 器高 2.4	86	片口	口径 (31.0)
36	土器	口径 9.4 成形 5.8 器高 2.6	87	常盤	口径 (35.6)
37	土器	口径 9.8 成形 6.8 器高 1.2	88	常盤	長さ 8.4 幅 6.0 厚さ 1.2
38	土器	口径 6.5 成形 4.8 器高 2.2	89	土器	口径 13.1 成形 6.4 器高 3.8
39	土器	口径 6.3 成形 4.8 器高 1.8	90	土器	口径 10.3 成形 5.5 器高 2.9
40	土器	口径 5.9 成形 4.1 器高 1.9	91	土器	口径 7.6 成形 4.8 器高 1.7
41	土器	口径 5.3 成形 4.1 器高 1.6	92	土器	口径 7.7 成形 4.5 器高 2.0
42	瓦	長さ 24.3 幅 12.8 高さ 6.4	93	土器	口径 13.2 成形 6.0 器高 3.9
43	高麗青白磁	長さ 14.0 幅 6.6 厚さ 2.8	94	土器	口径 13.2 成形 7.6 器高 3.3
44	高麗青白磁	長さ 9.78 幅 7.3 厚さ 1.2	95	土器	口径 13.1 成形 7.8 器高 3.4
45	高麗青白磁	長さ 8.1 幅 6.9 厚さ 1.0	96	土器	口径 12.9 成形 7.4 器高 3.2
46	高麗青白磁	長さ 8.0 幅 7.1 厚さ 1.0	97	土器	口径 12.8 成形 7.2 器高 3.2
47	高麗青白磁	口径 2.7	98	土器	口径 12.1 成形 7.6 器高 3.3
48	高麗青白磁	長さ 8.55 幅 6.0 厚さ 1.4	99	土器	口径 11.5 成形 5.8 器高 3.3
49	伊予青白磁	長さ 9.55 幅 6.8 厚さ 2.3	100	土器	口径 12.2 成形 7.8 器高 2.2
50	伊予青白磁	長さ 8.15 幅 5.1 厚さ 3.6	101	土器	口径 12.8 成形 6.8 器高 2.3
51	高麗青白磁	長さ 14.05 幅 6.1 厚さ 3.9	102	土器	口径 12.2 成形 5.0 器高 2.1

表2 出土遺物測定表(2)

No.	遺物	計測値 単位cm () 残存数値	No.	遺物	計測値 単位cm () 残存数値
103	土器	口径2.7 厚径4.4 器高2.3	154	土器	口径2.3 厚径5.0 器高1.6
104	土器	口径2.7 厚径5.4 器高1.9	155	土器	口径2.7 厚径4.6 器高1.6
105	土器	口径2.5 厚径4.2 器高2.4	156	土器	口径2.2 厚径4.2 器高2.0
106	土器	口径2.8 厚径4.4 器高1.6	157	土器	口径2.3 厚径3.8 器高2.1
107	土器	口径2.9 厚径5.2 器高2.0	158	「宋 元 買」	直径2.4
108	土器	口径2.5 厚径4.8 器高2.1	159	木製品	口径8.9 厚径7.0 器高1.0
109	土器	口径2.2 厚径4.2 器高2.3	160	木製品	口径(14.9) 厚径(7.6) 器高4.2
110	土器	口径2.1 厚径4.4 器高2.1	161	木製品	長さ(8.6) 幅1.4 厚さ1.4
111	土器	口径2.6 厚径3.4 器高2.2	162	木製品	長さ14.8 幅2.6 厚さ0.4
112	土器	口径2.8 厚径3.4 器高2.3	163	木製品	長さ10.1 幅1.7 厚さ0.4
113	土器	口径3.0 厚径3.4 器高3.2	164	木製品	長さ(8.1) 幅0.7 厚さ0.3
114	土器	口径2.8 厚径3.6 器高3.8	165	木製品	長さ20.2 幅0.6 厚さ0.4
115	土器	口径2.4 厚径3.2 器高2.1	166	木製品	長さ22.0 幅0.8 厚さ0.6
116	土器	口径5.2 厚径3.6 器高1.9	167	木製品	長さ19.1 幅0.7 厚さ0.4
117	土器	口径6.9 厚径4.8 器高1.7	168	木製品	長さ19.0 幅0.6 厚さ0.4
118	土器	口径7.8 厚径5.0 器高1.7	169	木製品	長さ20.5 幅1.1 厚さ0.7
119	漆器	直径4.4 高3.0	170	土器	口径7.7 厚径5.6 器高2.0
120	木製品	直徑8.6 厚さ0.7	171	土器	口径2.7 厚径5.0 器高1.6
121	木製品	長さ23.8 幅0.6 厚さ0.5	172	古墳土器	口径(11.2) 厚径(5.6) 器高3.0
122	木製品	長さ20.7 幅0.7 厚さ0.4	173	木製品	口径(9.6) 直径(6.0) 器高1.3
123	木製品	長さ18.0 幅0.4 厚さ0.5	174	土器	口径13.9 厚径8.6 器高3.6
124	木製品	長さ(19.3) 幅4.2 厚さ0.6	175	土器	口径13.1 厚径5.8 器高3.3
125	木製品	長さ24.6 幅0.1 厚さ0.3	176	土器	口径13.4 厚径5.7 器高3.3
126	木製品	長さ15.7 幅1.2 厚さ0.5	177	土器	口径12.6 厚径2.0 器高3.3
127	木製品	長さ18.8 幅0.7 厚さ0.5	178	土器	口径12.6 厚径7.7 器高3.1
128	木製品	長さ19.2 幅0.6 厚さ0.6	179	土器	口径12.2 厚径7.4 器高3.2
129	人形	口径4.6 厚径2.5 器高1.4	180	土器	口径11.9 厚径7.3 器高3.3
130	片口	口径3.4	181	土器	口径11.2 厚径6.0 器高3.0
131	常盤	口径3.6	182	土器	口径10.8 厚径4.5 器高2.9
132	土器	口径13.3 厚径8.2 器高3.6	183	土器	口径8.4 厚径5.4 器高2.1
133	土器	口径13.1 厚径8.0 器高3.5	184	土器	口径8.3 厚径4.8 器高1.9
134	土器	口径12.6 厚径7.8 器高3.3	185	土器	口径8.1 厚径4.9 器高1.9
135	土器	口径12.6 厚径7.6 器高3.5	186	土器	口径7.9 厚径4.9 器高1.9
136	土器	口径12.9 厚径7.2 器高3.4	187	土器	口径7.7 厚径5.5 器高1.6
137	土器	口径12.7 厚径8.2 器高3.4	188	土器	口径7.7 厚径5.5 器高1.6
138	土器	口径12.7 厚径7.8 器高3.5	189	土器	口径7.6 厚径4.9 器高1.5
139	土器	口径12.6 厚径8.4 器高3.2	190	土器	口径7.5 厚径5.1 器高1.7
140	土器	口径12.0 厚径8.0 器高3.2	191	土器	口径7.2 厚径4.5 器高1.6
141	土器	口径12.5 厚径7.8 器高3.0	192	土器	口径7.3 厚径4.6 器高1.7
142	土器	口径10.8 厚径5.4 器高3.1	193	土器	口径7.2 厚径5.4 器高1.7
143	土器	口径10.8 厚径6.2 器高3.0	194	土器	口径7.3 厚径3.6 器高1.3
144	土器	口径9.8 厚径5.0 器高1.8	195	土器	口径7.0 厚径4.2 器高2.2
145	土器	口径8.2 厚径4.6 器高1.9	196	土器	口径7.1 厚径4.1 器高2.1
146	土器	口径8.1 厚径5.2 器高1.8	197	土器	口径6.3 厚径3.8 器高2.1
147	土器	口径7.8 厚径5.4 器高1.9	198	木製品	口径10.0 厚径7.6 器高1.0
148	土器	口径7.8 厚径5.2 器高1.8	199	木製品	口径9.2 厚径5.8 器高1.3
149	土器	口径9.8 厚径4.6 器高1.8	200	木製品	口径(10.2) 直径(7.4) 器高1.3
150	土器	口径7.8 厚径5.4 器高2.1	201	木製品	口径9.4 厚径7.0 器高1.2
151	土器	口径7.8 厚径5.4 器高1.6	202	木製品	口径(8.8) 厚径(7.2) 器高1.7
152	土器	口径7.2 厚径5.2 器高1.7	203	木製品	口径9.2 厚径7.0 器高1.3
153	土器	口径7.6 厚径5.2 器高1.8	204	木製品	長さ17.5 幅0.5 厚さ0.4

表3 出土遺物計測表(3)

No.	遺物	計測値 単位cm () 標元数値 [] 棚庫数値	No.	遺物	計測値 単位cm () 標元数値 [] 棚庫数値
205	木 製 品	長さ19.9 幅9.7 厚さ0.5	256	木 製 品	口径8.0 高径4.4 器高1.6
206	木 製 品	長さ22.7 幅9.7 厚さ0.4	257	木 製 品	口径8.0 高径4.2 器高1.5
207	木 製 品	長さ17.6 幅9.2 厚さ0.7	258	木 製 品	口径8.2 高径5.1 器高1.7
208	「元和通」	直径6.4	259	木 製 品	口径6.6 高径3.8 器高2.3
209	木 製 品	口径9.3 高径5.0 器高1.4	260	木 製 品	口径9.9 高径4.4 器高2.2
210	木 製 品	口径7.5 高径4.9 器高1.9	261	木 製 品	口径7.6 高径4.2 器高2.3
211	木 製 品	口径7.3 高径5.3 器高2.1	262	木 製 品	口径8.0 高径4.8 器高2.3
212	石 制 品	長さ16.5 幅6.6 厚さ1.9	263	木 製 品	口径8.0 高径4.6 器高2.6
213	木 製 品	口径12.2 高径7.2 器高3.4	264	木 製 品	口径10.2 高径5.8 器高2.7
214	木 製 品	長さ21.0 幅9.5 厚さ0.5	265	木 製 品	口径10.5 高径6.2 器高3.9
215	木 製 品	長さ19.9 幅9.4 厚さ0.5	266	木 製 品	口径10.8 高径6.2 器高3.1
216	木 製 品	長さ18.6 幅9.7 厚さ0.4	267	木 製 品	口径13.1 高径7.4 器高3.3
217	木 製 品	長さ18.7 幅9.2 厚さ0.3	268	木 製 品	口径12.4 高径6.0 器高2.4
218	木 製 品	長さ23.1 幅6.8 厚さ0.3	269	木 製 品	口径12.7 高径7.4 器高3.4
219	木 製 品	長さ7.8 幅6.2 厚さ0.9	270	木 製 品	口径12.7 高径7.4 器高3.4
220	木 製 品	長さ20.6 幅8.8 厚さ0.3	271	木 製 品	口径12.6 高径6.4 器高3.4
221	木 製 品	長さ16.7 幅9.8 厚さ0.5	272	木 製 品	口径12.2 高径6.5 器高3.4
222	木 製 品	長さ14.0 幅9.5 厚さ0.4	273	木 製 品	口径12.9 高径7.1 器高3.5
223	木 製 品	長さ21.5 幅10.1 高さ11.1	274	木 製 品	口径13.2 高径7.6 器高3.9
224	木 製 品	長さ22.0 幅10.6 高さ9.5	275	木 製 品	口径13.5 高径8.0 器高4.4
225	木 内 製 反物	直径(35.8) 厚さ0.7	276	木 製 品	口径13.5 高径7.2 器高3.4
226	鐵 制 文 物	口径(16.4)	277	木 製 品	口径14.8 高径3.8 器高0.6
227	鐵 制 文 物	口径(14.2)	278	木 製 品	
228	鐵 制 文 物	直径(11.8)	279	木 製 品	
229	鐵 制 文 物	直径(13.6)	280	「元和通」	直径2.4
230	鐵 制 文 物	直径(12.8)	281	「元和通」	直径2.4
231	灰陶 伝 瓢	口径(4.3)	282	「元和通」	直径2.4
232	灰陶 小 瓢	口径(4.2)	283	「元和通」	直径2.5
233	灰陶 近 瓢	口径(25.8)	284	「天保元寶」	直径2.4
234	灰陶 近 瓢	口径(25.0)	285	「大正通」	直径2.4
235	灰陶 近 瓢	口径(16.4)	286	「大正通」	直径2.4
236	灰陶 近 瓢	口径(9.6)	287	磨 刀 金 刃	長さ9.0 幅13.8 厚さ1.1
237	灰陶 近 瓢	口径(15.6) 直径(8.0) 器高4.0	288	磨 刀 金 刃	長さ8.1 幅11.6 厚さ2.1
238	灰陶 近 瓢	口径(15.0) 直径(7.8) 器高4.1	289	磨 刀 金 刃	長さ7.8 幅10.4 厚さ1.4
239	人 類 骸 骸	口径6.3 底径2.8 器高2.5	290	磨 刀 金 刃	長さ5.9 幅11.2 厚さ1.1
240	人 類 骸 骸	口径(35.4)	291	磨 刀 金 刃	長さ5.8 幅13.3 厚さ1.0
241	雷 銘		292	磨 刀 金 刃	長さ8.0 幅13.3 厚さ0.8
242	片 口 鋼 刀	口径(34.0)	293	磨 刀 金 刃	長さ7.5 幅13.5 厚さ0.4
243	片 口 鋼 刀	口径(42.0) 直径(6.0) 器高(6.1)	294	磨 刀 金 刃	長さ8.2 幅13.8 厚さ0.6
244	片 口 鋼 刀	口径(30.0)	295	磨 刀 金 刀	長さ8.8 幅13.5 厚さ1.5
245	土 制 品		296	磨 刀 金 刀	長さ6.4 幅11.4 厚さ1.2
246	土 制 品		297	石 制 品	長さ5.9 幅15 厚さ1.7
247	土 制 品		298	石 制 品	長さ5.9 幅15 厚さ2.0
248	土 制 品		299	石 制 品	
249	土 制 品	口径(58.0)	300	石 制 品	長さ(10.0) 幅4.2 厚さ1.0
250	土 制 品	口径(31.6)	301	石 制 品	長さ(3.2) 幅3.4 厚さ1.2
251	木 製 品	口径6.6 高径5.0 器高1.8	302	天 皇 通 中 瓦	長さ(5.0) 幅3.5 厚さ(2.2)
252	木 製 品	口径7.8 高径4.3 器高1.8	303	伊 予 通 中 瓦	長さ(5.5) 幅(3.2) 厚さ2.1
253	木 製 品	口径7.6 高径5.4 器高1.6	304	石 制 品	長さ(6.1) 幅(3.2) 厚さ2.6
254	木 製 品	口径7.3 高径4.7 器高1.9	305	伊 予 通 中 瓦	長さ(4.3) 幅(3.0) 厚さ3.4
255	木 製 品	口径7.8 高径5.0 器高1.6	306	石 制 不 同 品	長さ(15.5) 幅8.5 器高(1.3)

表4 出土遺物計測表(4)

No.	遺物	計測値 単位cm () 深元数値 [] 残存数値	No.	遺物	計測値 単位cm () 深元数値 [] 残存数値
307	石 灰 器 品 目 鏡	長さ [6.6] 幅 [6.7] 厚さ1.4	358	木 製 器 品 目 鏡	口径 [12.9] 底径6.4 高さ5.5
308	石 灰 器 品 目 鏡	長さ [8.3] 幅 [7.0] 厚さ1.7	359	木 製 器 品 目 鏡	口径 [15.8] 底径6.4 高さ5.2
309	木 製 器 品 目 鏡	口径 [13.4] 底径7.0 高さ4.9	360	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.1] 底径7.5 高さ1.1
310	木 製 器 品 目 鏡	口径 [8.8] 底径6.6 高さ1.2	361	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.5] 底径6.7 高さ1.0
311	木 製 器 品 目 鏡	口径 [12.5] 底径6.6 高さ [5.5]	362	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.9] 底径5.5 高さ1.3
312	木 製 器 品 目 鏡	口径 [7.0]	363	木 製 器 品 目 鏡	口径 [8.0] 底径7.0 高さ1.3
313	木 製 器 品 目 鏡	底径6.6	364	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.2] 底径6.0 高さ1.2
314	木 製 器 品 目 鏡	底径6.1	365	木 製 器 品 目 鏡	口径 [8.0]
315	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.6] 底径6.1 高さ1.5	366	木 製 器 品 目 鏡	底径8.0
316	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.8] 底径6.6 高さ1.5	367	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.3] 底径5.9 高さ1.4
317	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.8] 底径6.6 高さ1.9	368	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.3] 底径6.8 高さ1.6
318	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.0] 底径6.2 高さ1.6	369	木 製 器 品 目 鏡	長さ18.3 幅6.0 厚さ0.3
319	木 製 器 品 目 鏡	口径 [9.0] 底径7.0 高さ1.3	370	木 製 器 品 目 鏡	長さ20.7 幅6.7 厚さ0.3
320	木 製 器 品 目 鏡	口径8.9 底径8.8 高さ1.1	371	木 製 器 品 目 鏡	長さ24.4 幅6.5 厚さ0.5
321	木 製 器 品 目 鏡	口径14.7 幅11.1 高さ3.1	372	木 製 器 品 目 鏡	長さ24.3 幅6.7 厚さ1.0
322	木 製 器 品 目 鏡	口径15.6 幅13.0 厚さ0.3	373	木 製 器 品 目 鏡	長さ20.9 幅6.7 厚さ0.6
323	木 製 器 品 目 鏡	口径17.2 幅6.6 厚さ0.6	374	木 製 器 品 目 鏡	口径20.0 厚さ0.4
324	木 製 器 品 目 鏡	口径20.7 幅6.6 厚さ0.3	375	木 製 器 品 目 鏡	長さ10.2 幅5.0 厚さ2.6
325	木 製 器 品 目 鏡	口径23.2 幅6.7 厚さ0.6	376	木 製 器 品 目 鏡	長さ10.2 幅5.3 厚さ2.5
326	木 製 器 品 目 鏡	口径29.5 高さ3.6	377	木 製 器 品 目 鏡	長さ8.8 幅5.5 厚さ1.1
327	木 製 器 品 目 鏡	口径30.0 厚さ0.5	378	木 製 器 品 目 鏡	口径8 [6.8] 幅 [2.2] 厚さ0.7
328	木 製 器 品 目 鏡	口径32.1 幅16.0 高さ [3.1]	379	木 製 器 品 目 鏡	長さ16.4 幅7.7 高さ2.7
329	木 製 器 品 目 鏡	口径24.1 幅16.0 厚さ0.3	380	木 製 器 品 目 鏡	長さ8 [21.0] 幅2.2 高さ3.0
330	木 製 器 品 目 鏡	口径3.07 幅5.2 厚さ0.7	381	木 製 器 品 目 鏡	長さ11.0 幅2.0 厚さ1.5
331	木 製 器 品 目 鏡	口径15.8 幅12.3 厚さ2.3	382	木 製 器 品 目 鏡	長さ17.4 幅2.9 厚さ3.3
332	木 製 器 品 目 鏡	口径18.9 幅14.4 厚さ0.7	383	木 製 器 品 目 鏡	長さ19.1 幅2.1 厚さ0.8
333	木 製 器 品 目 鏡	口径0.91 幅1.008	384	木 製 器 品 目 鏡	長さ18.8 幅0.8 厚さ0.6
334	木 製 器 品 目 鏡	口径20.8 幅1.0 厚さ0.4	385	木 製 器 品 目 鏡	長さ19.4 幅0.8 厚さ0.6
335	木 製 器 品 目 鏡	口径19.1 幅1.1 厚さ0.6	386	木 製 器 品 目 鏡	長さ20.0 幅1.0 厚さ0.6
336	木 製 器 品 目 鏡	口径15.0 幅1.7 厚さ0.4	387	木 製 器 品 目 鏡	長さ22.3 幅0.9 厚さ0.7
337	木 製 器 品 目 鏡	口径25.1 幅1.2 厚さ0.6	388	木 製 器 品 目 鏡	長さ19.0 幅0.8 厚さ0.4
338	木 製 器 品 目 鏡	口径38.4 幅1.9 厚さ0.9	389	木 製 器 品 目 鏡	長さ22.4 幅1.2 厚さ0.7
339	木 製 器 品 目 鏡	口径26.7 幅1.3 厚さ0.9	390	片口 鋸 刀	
340	木 製 器 品 目 鏡	口径16.4 幅1.7 厚さ0.5	391	かわら 鋸	口径13.1 底径8.4 高さ3.8
341	木 製 器 品 目 鏡	口径19.5 幅0.5 厚さ0.5	392	かわら 鋸	口径13.2 底径8.2 高さ3.3
342	木 製 器 品 目 鏡	口径22.8 幅1.1 厚さ0.7	393	かわら 鋸	口径13.4 底径8.5 高さ3.3
343	木 製 器 品 目 鏡	口径8.95 幅1.8 厚さ0.6	394	かわら 鋸	口径12.3 底径7.8 高さ3.3
344	木 製 器 品 目 鏡	口径8.99 幅1.1 厚さ0.8	395	かわら 鋸	口径12.2 底径7.2 高さ3.3
345	「見事 其美」 銘文	口径24	396	かわら 鋸	口径12.2 底径7.4 高さ3.5
346	木 製 器 品 目 鏡	口径16.0 底径7.2 高さ1.0	397	かわら 鋸	口径11.7 底径6.9 高さ2.2
347	木 製 器 品 目 鏡	口径31.1 幅3.7 厚さ3.0	398	かわら 鋸	口径11.7 底径8.4 高さ3.9
348	木 製 器 品 目 鏡	口径18.5 幅0.4 厚さ0.4	399	かわら 鋸	口径11.4 底径6.2 高さ3.2
349	木 製 器 品 目 鏡	口径20.5 幅0.6 厚さ0.4	400	かわら 鋸	口径11.3 底径5.9 高さ3.0
350	木 製 器 品 目 鏡	口径22.5 幅0.6 厚さ0.4	401	かわら 鋸	口径11.0 底径6.2 高さ3.0
351	木 製 器 品 目 鏡	口径25.0 厚さ0.1.0	402	かわら 鋸	口径11.1 底径6.4 高さ3.0
352	木 製 器 品 目 鏡	口径23.5 幅 [11.9] 厚さ1.1	403	かわら 鋸	口径10.7 底径6.9 高さ3.1
353	木 製 器 品 目 鏡	口径25.2 幅 [13.8] 厚さ1.1	404	かわら 鋸	口径10.7 底径6.9 高さ3.2
354	木 製 器 品 目 鏡	口径13.0	405	かわら 鋸	口径9.5 底径5.2 高さ2.4
355	木 製 器 品 目 鏡	口径2.1	406	かわら 鋸	口径9.1 底径5.0 高さ2.3
356	木 製 器 品 目 鏡	長さ [4.7] 幅 [3.8] 厚さ0.25	407	かわら 鋸	口径8.0 底径5.2 高さ1.7
357	木 製 器 品 目 鏡	口径15.0 幅10.0 高さ4.0	408	かわら 鋸	口径7.8 底径5.0 高さ1.9

表5 出土遺物計測表 (5)

No.	遺 物	計測値 単位(cm) () 深さ数値 [] 稲存状態	No.	遺 物	計測値 単位(cm) () 深さ数値 [] 稲存状態
409	土 器 合 計	口径7.8 高さ5.6 器高1.7	460	土 器 合 計	口径8.3 高さ5.6 器高1.6
410	土 器 合 計	口径7.8 高さ5.0 器高1.6	461	土 器 合 計	口径7.8 高さ5.4 器高2.0
411	土 器 合 計	口径7.6 高さ5.0 器高1.7	462	土 器 合 計	口径7.9 高さ5.8 器高1.8
412	土 器 合 計	口径7.6 高さ5.0 器高1.6	463	土 器 合 計	口径7.9 高さ5.5 器高2.0
413	土 器 合 計	口径7.4 高さ4.2 器高1.5	464	土 器 合 計	口径7.9 高さ5.6 器高1.9
414	土 器 合 計	口径7.0 高さ4.6 器高1.7	465	土 器 合 計	口径7.9 高さ5.0 器高1.7
415	土 器 合 計	口径7.0 高さ4.8 器高1.9	466	土 器 合 計	口径7.2 高さ5.4 器高2.0
416	土 器 合 計	口径7.3 高さ4.4 器高1.3	467	土 器 合 計	口径6.8 高さ4.5 器高2.1
417	木 製 品	長さ10.9 幅(2.0) 厚さ1.1	468	土 器 合 計	口径7.4 高さ4.5 器高2.3
418	輪 形 人 偶 子	口径3.2 高さ2.2 器高1.1	469	土 器 合 計	口径7.3 高さ5.0 器高2.1
419	片口 鋸 頭	口径(3.4)	470	土 器 合 計	口径11.9 高さ2.2 器高3.1
420	魚 住 頭	口径(2.4)	471	土 器 合 計	口径12.8 高さ7.6 器高3.6
421	土 器 合 計	口径12.6 底径7.0 器高3.0	472	土 器 合 計	口径12.6 底径7.6 器高3.4
422	土 器 合 計	口径12.6 高さ7.4 器高3.5	473	鉢 製 品	長さ(4.9) 幅(2.0) 厚さ0.3
423	土 器 合 計	口径12.3 高さ7.2 器高3.4	474	扇 形 鏡	直径2.4
424	土 器 合 計	口径6.6 底径5.8 器高2.0	475	扇 形 鏡	直径2.1
425	土 器 合 計	口径7.2 高さ4.6 器高1.5	476	扇 形 鏡	直径2.3
426	土 器 合 計	口径7.2 高さ5.2 器高1.7	477	石 製 品	長さ(12.4) 幅(5.4) 厚さ0.5
427	土 器 合 計	口径7.5 高さ5.0 器高1.7	478	木 製 品	口径11.5 高さ6.0 器高3.4
428	土 器 合 計	口径7.6 高さ5.2 器高1.7	479	木 製 品	口径13.9 高さ7.2 器高3.8
429	木 製 品	長さ23.7 幅(0.8) 厚さ0.5	480	木 製 品	口径(14.0) 高さ7.6 器高4.8
430	木 製 品	長さ21.4 幅(0.6) 厚さ0.6	481	木 製 品	直径7.1
431	木 製 品	長さ18.6 幅(0.6) 厚さ0.5	482	木 製 品	口径(14.8) 高さ7.6 器高4.5
432	木 板 附 子	長さ19.7 幅(0.5) 厚さ0.7	483	木 製 品	直径(8.0)
433	木 円 盤	長さ8.1 幅(0.7) 厚さ0.6	484	木 製 品	直径7.0
434	木 板 附 木	長さ9.7 幅(2.7) 厚さ1.0	485	木 製 品	口径(9.2) 幅(6.0) 器高1.0
435	木 板 附 木	長さ23.6 幅(0.9) 厚さ0.2	486	木 製 品	口径9.6 高さ6.8 器高1.3
436	木 下 板	長さ(22.6) 幅(8.8) 高さ3.2	487	木 製 品	口径9.1 高さ6.2 器高0.9
437	木 輪 形 狀 品	口径11.0 幅(0.3) 厚さ0.5	488	木 製 品	口径8.9 高さ7.0 器高1.2
438	木 輪 形 狀 品	長さ(18.8) 幅(1.1) 厚さ1.1	489	木 製 品	口径8.9 高さ6.1 器高1.2
439	木 製 品	長さ18.8 幅(1.4) 厚さ0.5	490	木 製 品	口径9.2 高さ7.0 器高1.1
440	木 製 品	長さ14.7 幅(1.3) 厚さ0.4	491	木 製 品	口径9.3 高さ6.5 器高1.9
441	木 製 品	長さ10.2 幅(1.3) 厚さ0.1	492	木 製 品	口径10.0 高さ7.4 器高1.6
442	木 伏 葉 品	口径34.6 幅(0.9) 厚さ0.5	493	木 製 品	口径(9.6) 高さ6.5 器高1.6
443	木 伏 葉 品	長さ19.4 幅(0.7) 厚さ0.5	494	木 製 品	口径10.0 底径7.0 器高1.7
444	木 製 品	長さ20.1 幅(1.4) 厚さ0.4	495	木 製 品	口径9.8 高さ6.8 器高1.4
445	木 伏 葉 品	長さ(10.8) 幅(0.6) 厚さ0.7	496	木 製 品	口径(9.5) 高さ6.0 器高1.6
446	木 伏 葉 小 盆	口径(8.2) 幅(5.0) 器高(2.3)	497	木 製 品	口径9.6 高さ7.2 器高1.4
447	木 伏 葉 折 葉	長さ(10.8) 幅(1.1) 厚さ1.1	498	木 製 品	口径9.2 高さ7.8 器高1.1
448	片口 鋸 頭	口径(18.8) 幅(0.6) 厚さ0.5	499	木 製 品	口径9.2 高さ6.8 器高1.1
449	丸 大 鉗	長さ(24.7) 幅(0.6) 厚さ0.5	500	木 製 品	長さ34.7 幅(0.6) 厚さ0.5
450	「木 製 品」	直径2.4	501	木 製 品	長さ20.8 幅(0.6) 厚さ0.4
451	木 伏 葉 文 鏡	口径(9.8) 高さ7.0 器高1.1	502	木 製 品	長さ17.1 幅(0.6) 厚さ0.4
452	木 伏 葉 文 鏡	口径(9.6) 幅(7.4) 器高1.3	503	木 製 品	長さ22.8 幅(0.9) 厚さ0.5
453	木 青 竹 文 鏡	口径(15.0)	504	木 製 品	長さ29.3 幅(0.9) 厚さ0.4
454	木 青 竹 文 鏡	口径(13.8)	505	木 製 品	長さ28.8 幅(0.5) 厚さ0.9
455	木 青 竹 文 鏡	口径(7.9)	506	木 製 品	長さ22.3 幅(0.5) 厚さ0.6
456	木 青 竹 文 鏡	口径(12.0)	507	木 製 品	長さ20.7 幅(0.5) 厚さ0.9
457	木 元 文 鏡	口径(12.5)	508	木 製 品	長さ24.0 幅(0.7) 厚さ0.7
458	片口 鋸 頭	口径29.0 高さ1.8 器高1.0	509	木 圓 盤	直径11.9 厚さ1.0
459	木 圓 盤	口径(27.0)	510	木 圓 盤	直径14.0 厚さ0.6

表6 出土遺物計測表(6)

No.	遺物	計測値 単位(cm) ()復元値 ()残存部数	No.	遺物	計測値 単位(cm) ()復元値 ()残存部数
511	木製円盤 有孔	直径(24.9) 厚さ0.6	562	石製品 山城系 磨	直径9.7 幅(3.5) 厚さ1.4
512	木製手鏡	長さ29.7 幅5.3 厚さ0.9	563	石製品	長さ20.3 幅5.1 厚さ3.0
513	木製品	長さ18.7 幅8.0 厚さ0.3	564	石製品	長さ14.1 幅6.6 厚さ5.0
514	木製品	長さ33.6 幅9.5 厚さ0.4	565	木製品	口径13.6 底径6.5 高さ3.6
515	木製品	長さ14.2 幅7.5 高さ1.0	566	木製品	口径8.7 底径7.4 高さ0.7
516	木製品	長さ9.1 幅3.6 厚さ0.6	567	木製品	口径8.0 底径7.0 高さ0.7
517	木製品	長さ20.1 幅19 厚さ0.8	568	木製品	長さ24.5 幅9.6 厚さ0.3
518	刀	長さ55.9 幅17 厚さ1.6	569	木製品	長さ21.9 幅9.7 厚さ0.5
519	木人形	長さ12.8 幅5.5 厚さ0.3	570	木製品	長さ18.5 幅9.5 厚さ0.4
520	木製品	長さ7.1 幅3.9 厚さ0.3	571	木製品	長さ16.2 幅9.7 厚さ0.5
521	木製円板	直径3.5 厚さ0.1	572	木板円子	長さ22.6 幅7.5 厚さ0.6
522	木製品	直径8.2 厚さ0.2	573	木板円子	長さ22.4 幅6.6 厚さ0.5
523	木製品	長さ17.1 幅2.3 厚さ0.6	574	木製品	長さ14.8 幅6.0 厚さ3.0
524	木製品 不明	長さ(7.8) 幅3.1 厚さ0.4	575	木円板	直径8.0 厚さ0.7
525	木製品	長さ13.1 幅9 厚さ0.5	576	木製品	直径(4.2) 厚さ0.2
526	木製品	長さ14.1 幅9 厚さ0.3	577	木製円板	直径(3.0) 厚さ0.4
527	木製品	長さ17.3 幅11 厚さ0.6	578	木製円板	直径(3.4) 厚さ0.2
528	木製品	長さ17.4 幅8.8 厚さ0.5	579	木製品	長さ15.7 幅7.3 厚さ0.2
529	木製品	長さ19.3 幅1.1 厚さ0.7	580	木製品	長さ19.2 幅8.8 厚さ0.7
530	木製品	長さ36.2 幅1.1 厚さ1.1	581	木製品	長さ21.0 幅8.5 厚さ0.6
531	木製品	長さ35.3 幅2.2 厚さ1.2	582	木製品	長さ22.3 幅9.7 厚さ0.6
532	木製品	長さ(24.8) 幅6.0 厚さ0.2	583	木製品	長さ23.8 幅1.0 厚さ0.6
533	木製品	長さ35.5 幅2.3 厚さ0.8	584	木製品	長さ23.6 幅1.2 厚さ1.0
534	木製品 不明	長さ(41.7) 幅0.3 厚さ2.2	585	木製品	長さ25.1 幅1.1 厚さ0.9
535	木製品 不明	長さ(12.3) 幅0.3 厚さ1.7	586	木製品	長さ30.1 幅1.1 厚さ0.9
536	日光鏡	口径(10.6)	587	木製品	長さ31.5 幅1.1 厚さ0.6
537	灰陶戸皿	直径8.0	588	木製品	長さ14.6 幅1.2 厚さ1.1
538	土器	底径8.8	589	木製品	長さ30.3 幅1.6 厚さ0.5
539	土器	口径13.6 底径7.8 高さ3.8	590	木質灰陶品	長さ55.8 幅1.6 厚さ1.4
540	土器	口径13.0 底径7.0 高さ3.4	591	石製品	長さ85.7 幅(2.8) 厚さ0.7
541	土器	口径12.7 底径7.2 高さ3.5	592	木製品	口径(9.0) 直径7.0 高さ1.3
542	土器	口径12.4 底径8.2 高さ3.2	593	木製品	口径8.6 直径6.0 高さ1.0
543	土器	口径12.1 底径7.6 高さ3.4	594	木製品	口径9.3 底径7.5 高さ1.3
544	土器	口径11.5 底径6.0 高さ3.4	595	木製品	口径(7.9) 直径7.0 高さ0.9
545	土器	口径8.5 底径5.4 高さ1.8	596	木製品	口径8.6 直径6.0 高さ1.0
546	土器	口径8.7 底径5.2 高さ1.8	597	木製品	長さ30.5 幅7.3 厚さ0.7
547	土器	口径8.0 底径5.8 高さ2.0	598	木製品	長さ38.8 幅6.7 厚さ0.3
548	土器	口径7.9 底径5.2 高さ1.8	599	木製品	長さ29.3 幅6.6 厚さ0.5
549	土器	口径7.8 底径6.0 高さ1.5	600	木製品	長さ23.0 幅6.6 厚さ0.5
550	土器	口径7.8 底径5.0 高さ1.9	601	灰陶戸皿	口径(14.5)
551	土器	口径7.6 底径5.4 高さ1.8	602	灰陶戸皿	口径(14.7)
552	土器	口径7.5 底径5.0 高さ1.6	603	當酒器	口径(35.6)
553	土器	口径7.1 底径5.4 高さ1.9	604	土器	口径12.0 直径7.6 高さ5.5
554	土器	口径7.2 底径5.6 高さ1.9	605	土器	口径12.1 直径7.6 高さ3.3
555	灰陶品	長さ(6.0) 幅0.2 厚さ0.3	606	土器	口径13.5 直径7.8 高さ3.6
556	灰陶品	長さ25.7 幅0.5 厚さ0.5	607	土器	口径8.0 直径5.8 高さ1.5
557	灰陶品	長さ(20.2) 幅1.9 厚さ0.4	608	土器	口径8.1 直径5.2 高さ1.6
558	灰陶品	長さ(21.5) 幅(2.15) 厚さ0.4	609	土器	口径7.7 直径5.6 高さ1.5
559	灰陶品	長さ(28.1) 幅(2.2) 厚さ0.3	610	土器	口径7.5 直径5.5 高さ1.8
560	「生相元貢」	直徑2.4	611	土器	口径7.3 直径5.2 高さ1.8
561	「生相元貢」	直徑2.4	612	「生相元貢」	直徑2.4

表7 出土遺物計測表(7)

No.	遺物	計測値 単位(cm) () 標元数値 [] 構成数値	No.	遺物	計測値 単位(cm) () 標元数値 [] 構成数値
613	木製品 漆塗り漆文箱	口径(13.5) 底径(6.5) 高さ(5.7)	664	木製品	長さ(19.2) 幅(0.5) 厚さ(0.4)
614	木製品 漆塗り漆文箱	口径(8.9) 底径(5.8) 高さ(6.9)	665	木製品	長さ(21.3) 幅(0.6) 厚さ(0.5)
615	木製品	長さ(18.3) 幅(0.4) 厚さ(0.5)	666	木製品	長さ(20.7) 幅(0.7) 厚さ(0.5)
616	木製品	長さ(20.4) 幅(0.6) 厚さ(0.5)	667	青白磁 食合子	口径(8.6)
617	木製品	長さ(24.2) 幅(0.4) 厚さ(0.4)	668	土器 わらけ	口径(7.0) 底径(4.9) 高さ(2.9)
618	木製品 漆塗り漆文箱	直径(17.9) 厚さ(0.7)	669	かわらけ	口径(14.4) 底径(8.1) 高さ(3.6)
619	片口漆口箱	口径(38.0)	670	かわらけ	口径(12.6) 底径(8.0) 高さ(3.5)
620	片口漆口箱		671	かわらけ	口径(11.3) 底径(7.2) 高さ(3.1)
621	かわらけ	口径(14.1) 底径(8.4) 高さ(3.8)	672	かわらけ	口径(8.1) 底径(5.2) 高さ(1.7)
622	かわらけ	口径(12.8) 底径(8.4) 高さ(3.5)	673	かわらけ	口径(7.4) 底径(4.7) 高さ(1.7)
623	かわらけ	口径(12.8) 底径(6.4) 高さ(3.6)	674	かわらけ	口径(7.5) 底径(4.6) 高さ(1.8)
624	かわらけ	口径(12.0) 底径(8.4) 高さ(3.1)	675	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.0) 高さ(1.8)
625	かわらけ	口径(9.3) 底径(5.5) 高さ(1.9)	676	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.3) 高さ(1.5)
626	かわらけ	口径(7.7) 底径(5.1) 高さ(1.5)	677	かわらけ	口径(4.1) 底径(3.1) 高さ(1.1)
627	かわらけ	口径(2.2) 底径(5.2) 高さ(1.7)	678	「朱木漆實」	直径(2.4)
628	かわらけ	口径(5.9) 底径(5.0) 高さ(1.8)	679	「朱木漆實」	直徑(2.4)
629	木製品	長さ(16.5) 幅(0.6) 厚さ(0.5)	680	「朱木漆實」	直徑(2.4)
630	木製品	長さ(19.6) 幅(0.5) 厚さ(0.5)	681	漆塗り漆文瓶	口径(15.4) 底径(7.6) 高さ(3.8)
631	木製品	口径(21.8) 幅(0.7) 厚さ(0.4)	682	漆塗り漆文瓶	直徑(6.8)
632	木刀 漆塗り漆文箱	長さ(18.9) 幅(0.3) 厚さ(0.9)	683	漆塗り漆文瓶	口径(9.8) 底径(5.4) 高さ(1.8)
633	木刀 漆塗り漆文箱	長さ(8) [10.1] 幅(1.1) 厚さ(1.7)	684	漆塗り漆文瓶	口径(19.3) 底径(6.0) 高さ(2.0)
634	片口漆口箱	口径(30.4) 底径(14.0) 高さ(12.0)	685	漆塗り漆文瓶	直徑(7.0)
635	かわらけ	口径(12.5) 底径(8.2) 高さ(3.4)	686	漆塗り漆文瓶	口径(9.8) 底径(5.6) 高さ(1.1)
636	かわらけ	口径(12.5) 底径(7.4) 高さ(3.3)	687	漆塗り漆文瓶	口径(9.3) 底径(5.8) 高さ(1.0)
637	かわらけ	口径(12.5) 底径(6.6) 高さ(2.9)	688	漆塗り漆文瓶	口径(8.8) 底径(6.9) 高さ(1.1)
638	かわらけ	口径(7.7) 底径(4.5) 高さ(2.1)	689	木製品	長さ(17.9) 幅(0.5) 厚さ(0.5)
639	かわらけ	口径(7.9) 底径(5.2) 高さ(1.7)	690	木製品	長さ(20.8) 幅(0.5) 厚さ(0.4)
640	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.4) 高さ(1.7)	691	木製品	長さ(24.0) 幅(0.7) 厚さ(0.5)
641	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.6) 高さ(1.8)	692	木製品 漆塗り漆文台	長さ(9.2) 幅(2.2) 高さ(1.4)
642	かわらけ	口径(7.4) 底径(5.0) 高さ(1.8)	693	羽子板 漆塗り漆文台	長さ(19.1) 幅(10.6) 厚さ(1.3)
643	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(8.6) 底径(4.8) 高さ(1.1)	694	木製品 漆塗り漆文瓶	長さ(15.5) 幅(3.0) 厚さ(1.5)
644	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(7.2) 底径(4.6) 高さ(1.3)	695	漆 漆用	口径(43.6)
645	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(8.8) 底径(6.8) 高さ(1.2)	696	漆 漆用	口径(35.2)
646	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(5.5) 底径(3.7) 高さ(1.2)	697	兔山	底径(14.0)
647	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(8.8) 底径(5.2) 高さ(1.0)	698	八ツ脚	口径(6.8) 底径(3.0) 高さ(1.8)
648	木製品	長さ(16.5) 幅(0.6) 厚さ(0.4)	699	かわらけ	口径(12.9) 底径(8.6) 高さ(3.2)
649	木製品	長さ(20.7) 幅(0.6) 厚さ(0.5)	700	かわらけ	口径(11.1) 底径(8.4) 高さ(3.4)
650	木製品	長さ(24.7) 幅(0.6) 厚さ(0.4)	701	かわらけ	口径(12.0) 底径(6.4) 高さ(3.3)
651	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(24.2) 幅(0.7) 厚さ(0.8)	702	かわらけ	口径(12.1) 底径(7.8) 高さ(3.3)
652	木製品 漆塗り漆文箱	直径(19.0) 厚さ(0.6)	703	かわらけ	口径(12.0) 底径(7.2) 高さ(3.3)
653	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(26.3) 幅(1.1) 厚さ(0.6)	704	かわらけ	口径(10.9) 底径(6.4) 高さ(3.0)
654	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(19.9) 幅(0.6) 厚さ(0.5)	705	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.0) 高さ(1.8)
655	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(7.8) 幅(1.0) 厚さ(1.0)	706	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.4) 高さ(1.7)
656	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(16.5) 幅(1.4) 厚さ(1.0)	707	かわらけ	口径(7.3) 底径(5.0) 高さ(1.5)
657	木製品 漆塗り漆文箱	長さ(8.6) 幅(2.1) 厚さ(2.1)	708	かわらけ	口径(8.7) 底径(4.2) 高さ(1.9)
658	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.4) 高さ(1.9)	709	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.4) 高さ(1.5)
659	かわらけ	口径(8.0) 底径(5.4) 高さ(1.1)	710	かわらけ	口径(7.3) 底径(5.2) 高さ(1.1)
660	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.0) 高さ(1.9)	711	かわらけ	口径(7.2) 底径(5.2) 高さ(1.5)
661	天石 漆塗り漆文瓶	長さ(5.5) 幅(1.1) 厚さ(1.3)	712	かわらけ	口径(7.4) 底径(5.2) 高さ(1.1)
662	天石 漆塗り漆文瓶	長さ(9.7) 幅(4.9) 厚さ(2.0)	713	漆 漆用	長さ(19.2) 幅(7.1) 厚さ(0.2)
663	木製品 漆塗り漆文瓶	口径(7.5)	714	漆 漆用	直徑(6.4) 厚さ(0.1)

表8 出土遺物測量表(8)

No.	遺物	計測値 単位cm () 備考数値 [] 現存状態	No.	遺物	計測値 単位cm () 備考数値 [] 現存状態
715	灰 瓦 蓋 打 品	長さ[3.4] 幅0.3 厚さ0.3	766	木 板 蓋 打 品	長さ14.0 幅0.7 厚さ0.5
716	灰 瓦 蓋 打 品	長さ[7.2] 幅0.4 厚さ0.6	767	木 板 蓋 打 品	長さ14.3 幅0.2 厚さ0.6
717	灰 瓦 蓋 打 品	長さ8.7 幅0.7 厚さ0.1	768	草 葉 蓋 打 品	長さ8.21 幅1.4 厚さ1.1
718	灰 瓦 蓋 打 品	長さ9.7 幅0.3 厚さ0.2	769	木 板 蓋 打 品	長さ29.4 幅0.9 厚さ0.5
719	灰 瓦 蓋 打 品	長さ8.18.11 幅0.4 厚さ0.4	770	木 板 蓋 打 品	長さ32.6 幅0.9 厚さ0.6
720	灰 瓦 蓋 打 品	直径2.6	771	か わ ら び 付	口径12.6 直径8.0 器高3.2
721	灰 瓦 蓋 打 品	直徑2.4	772	か わ ら び 付	口径12.2 直径8.5 器高3.5
722	灰 瓦 蓋 打 品	直徑2.4	773	か わ ら び 付	口径7.8 直径5.0 器高1.7
723	陶 瓦 蓋 打 品	直徑2.3	774	か わ ら び 付	口径7.8 直径5.4 器高1.5
724	晋 瓦 蓋 打 品	長さ17.0 幅1.6 厚さ0.2	775	か わ ら び 付	口径8.2 直径5.0 器高2.0
725	石 瓦 蓋 打 品	長さ[5.7] 幅0.4 厚さ0.7	776	か わ ら び 付	口径7.6 直径5.4 器高1.6
726	石 瓦 蓋 打 品	長さ[10.0] 幅[6.1] 厚さ3.5	777	木 板 蓋 打 品	口径(9.0) 直径(7.0) 器高(0.9)
727	木 板 蓋 打 品	口径8.2 直径6.0 器高1.4	778	木 板 蓋 打 品	長さ19.3 幅0.7 厚さ0.5
728	木 板 蓋 打 品	口径8.8 直径6.0 器高1.5	779	木 板 蓋 打 品	長さ23.3 幅0.6 厚さ0.6
729	木 板 蓋 打 品	口径8.6 直径7.0 器高1.0	780	木 門 蓋 板 品	直徑(17.2) 厚さ1.1
730	木 板 蓋 打 品	直徑6.0	781	木 門 蓋 板 品	長さ37.7 幅2.5 厚さ0.5
731	木 板 蓋 打 品	口径8.8 直径7.0 器高1.0	782	木 門 蓋 板 品	長さ37.7 幅2.5 厚さ0.5
732	木 板 蓋 打 品	口径9.0 直径7.2 器高1.1	783	木 門 蓋 板 品	長さ37.7 幅2.5 厚さ0.5
733	木 板 蓋 打 品	直徑(7.0)	784	土 器 蓋 付	口径8.0 直径5.0 器高1.7
734	木 板 蓋 打 品	直徑(7.0)	785	土 器 蓋 付	口径7.8 直径5.7 器高1.6
735	木 板 蓋 打 品	長さ9.1 幅2.9 厚さ2.4	786	土 器 蓋 付	口径8.1 直径5.4 器高1.3
736	木 板 蓋 打 品	長さ26.5 幅0.5 厚さ0.6	787	土 器 蓋 付	口径7.2 直径4.7 器高2.0
737	木 板 蓋 打 品	長さ25.3 幅25.3 厚さ0.5	788	か わ ら び 付	口径12.2 直径7.6 器高3.1
738	木 板 蓋 打 品	長さ21.4 幅0.5 厚さ0.5	789	骨 角 製 品	長さ[8.8] 幅0.5 厚さ0.2
739	木 板 蓋 打 品	長さ18.6 幅0.5 厚さ0.5	790	木 板 蓋 板 品	長さ18.5 幅0.5 厚さ0.6
740	木 板 蓋 打 品	長さ24.1 幅1.7 厚さ0.8	791	木 板 蓋 板 品	長さ18.7 幅0.8 厚さ0.5
741	木 板 蓋 打 品	長さ26.6 幅2.2 厚さ0.7	792	人 骨 尸 子	口径4.4 直径9.1 器高2.3
742	木 板 蓋 打 品	長さ[10.0] 幅2.3 厚さ0.5	793	骨 角 製 品	直徑(17.4)
743	木 板 蓋 打 品	直徑9.0 厚さ0.4	794	骨 角 製 品	口径(13.4)
744	木 板 蓋 打 品	長さ9.6 幅1.9 厚さ2.2	795	骨 角 製 品	口径(15.0)
745	木 板 蓋 打 品	長さ31.9 幅2.8 厚さ1.1	796	骨 角 製 品	口径(9.0) 直径(3.6) 器高(4.4)
746	木 板 蓋 打 品	長さ11.6 幅3.1 厚さ0.2	797	骨 角 製 品	直徑(11.4)
747	木 板 蓋 打 品	長さ[11.1] 幅2.2 厚さ1.1	798	白 陶 器	直徑4.2
748	木 板 蓋 打 品	長さ22.1 幅0.8 厚さ0.3	799	白 陶 器	口径(10.8) 直径(5.8) 器高(3.2)
749	木 板 蓋 打 品	長さ31.7 幅1.5 厚さ1.1	800	白 陶 器	口径(10.2)
750	木 板 蓋 打 品	長さ31.2 幅0.5 厚さ0.5	801	白 陶 器	口径(9.3)
751	木 板 蓋 打 品	長さ22.5 幅0.8 厚さ0.5	802	白 陶 器	口径(9.8)
752	木 板 蓋 打 品	長さ18.8 幅0.8 厚さ0.4	803	船 底 板 品	口径(7.8)
753	木 板 蓋 打 品	長さ20.1 幅0.9 厚さ0.3	804	灰 陶 水 注	口径(5.0)
754	木 板 蓋 打 品	長さ25.1 幅0.8 厚さ0.4	805	灰 陶 平 底	口径(15.6)
755	木 板 蓋 打 品	長さ23.3 幅0.9 厚さ0.7	806	灰 陶 圓 底	口径(28.6)
756	木 板 蓋 打 品	長さ25.4 幅1.0 厚さ0.5	807	灰 陶 平 底	口径(14.4) 直径(7.8) 器高(3.0)
757	木 板 蓋 打 品	長さ29.4 幅1.1 厚さ0.6	808	灰 陶 加 熱	口径14.1 直径9.0 器高3.2
758	木 板 蓋 打 品	長さ30.6 幅1.6 厚さ0.8	809	人 骨 尸 子	口径(6.9) 直径8.0 器高2.3
759	木 板 蓋 打 品	長さ26.7 幅1.4 厚さ0.5	810	人 骨 尸 子	口径7.2 直径4.1 器高1.8
760	木 板 蓋 打 品	長さ37.5 幅1.0 厚さ0.5	811	骨 角 製 品	口径(25.4)
761	木 板 蓋 打 品	長さ29.2 幅1.1 厚さ0.7	812	骨 角 製 品	口径24.6
762	木 板 蓋 打 品	長さ26.3 幅1.2 厚さ0.6	813	骨 角 製 品	口径(26.8)
763	木 板 蓋 打 品	長さ23.3 幅1.2 厚さ0.7	814	骨 角 製 品	
764	木 板 蓋 打 品	長さ17.4 幅0.5 厚さ0.8	815	骨 角 製 品	
765	木 板 蓋 打 品	長さ16.6 幅0.7 厚さ0.5	816	骨 角 製 品	口径35.6 直径17.0 器高12.5

表9 出土遺物計測表(9)

No.	遺 物	計測値 単位cm () 没元数値 [] 現存数値	No.	遺 物	計測値 単位cm () 没元数値 [] 現存数値
817	片口鋸刃器頭	直径:φ30.0 厚さ:18.5 高さ:12.7	868	骨角製品	直徑:19 厚さ:9.7
818	東山系 葵葉型	直径:(14.6) 厚さ:(5.2) 高さ:(5.3)	869	石質品	長さ:[8.3] 幅3.8 厚さ:1.0
819	土器	直径:(36.2) 厚さ:(26.8) 高さ:8.9	870	陶器底盤	長さ:[6.6] 幅6.0 厚さ:0.6
820	土器	直径:(36.2) 厚さ:(26.8) 高さ:8.9	871	馬鹿頭(土器上) 瓦	長さ:[5.2] 幅3.4 厚さ:0.5
821	土器	直径:(36.2) 厚さ:(3.0)	872	馬鹿頭(土器上) 瓦	長さ:[4.4] 幅3.6 厚さ:0.4
822	土器	直径:(3.0) 幅:(10.1) 厚さ:1.8	873	馬鹿頭(中) 瓦	長さ:[6.4] 幅3.5 厚さ:1.8
823	土器	長さ:(9.2) 幅:(2.2) 厚さ:0.8	874	石質品	長さ:[7.8] 幅4.1 厚さ:0.6
824	土器	直径:3.7 直径:2.6 高さ:0.7	875	石質品	長さ:[12.6] 幅4.4 厚さ:0.2
825	土器	直径:7.1 厚さ:5.0 高さ:1.4	876	石質品	長さ:[6.7] 幅:[5.0] 高さ:[3.5]
826	土器	直径:7.7 厚さ:5.8 高さ:1.4	877	石質品	長さ:[4.7] 幅:[3.6] 高さ:1.6
827	土器	直径:7.8 厚さ:5.4 高さ:1.6	878	石質品	直徑:2.2 厚さ:0.6
828	土器	直径:7.8 厚さ:5.6 高さ:1.9	879	木質品	直徑:6.0
829	土器	直径:7.9 厚さ:5.3 高さ:1.7	880	木質品	直径:12.3 厚さ:6.4 高さ:0.8
830	土器	直径:7.8 厚さ:5.0 高さ:2.3	881	木質品	直径:(15.5) 厚さ:7.4 高さ:0.1
831	土器	直径:8.6 厚さ:4.6 高さ:1.4	882	木質品	直徑:7.0
832	土器	直径:9.7 厚さ:4.4 高さ:1.6	883	木質品	直径:(11.1) 厚さ:7.2 高さ:3.6
833	土器	直径:9.8 厚さ:5.4 高さ:1.8	884	木質品	直徑:8.0
834	土器	直径:9.7 厚さ:5.0 高さ:2.0	885	木質品	直徑:7.0
835	土器	直径:9.7 厚さ:5.0 高さ:2.2	886	木質品	直徑:7.6
836	土器	直径:10.7 厚さ:6.6 高さ:3.0	887	木質品	直径:13.4 厚さ:6.6 高さ:4.3
837	土器	直径:10.7 厚さ:6.6 高さ:3.2	888	木質品	直徑:6.4
838	土器	直径:10.8 厚さ:6.0 高さ:3.1	889	木質品	直徑:8.0
839	土器	直径:12.5 厚さ:7.6 高さ:3.3	890	木質品	直径:11.5 厚さ:6.9 高さ:2.2
840	土器	直径:12.8 厚さ:8.2 高さ:3.3	891	木質品	直径:12.7 厚さ:6.0 高さ:3.4
841	土器	直径:12.8 厚さ:8.6 高さ:3.3	892	木質品	直径:(12.3) 厚さ:6.5 高さ:3.0
842	土器	直径:12.1 厚さ:7.4 高さ:3.1	893	木質品	直径:(11.4) 厚さ:6.2 高さ:3.5
843	土器	直径:12.4 厚さ:8.2 高さ:3.2	894	木質品	直径:12.2 厚さ:7.4 高さ:4.5
844	土器	直径:12.2 成形:8.3 高さ:3.3	895	木質品	直径:(12.3) 厚さ:6.3 高さ:3.1
845	土器	直径:13.8 厚さ:7.7 高さ:3.6	896	木質品	直径:10.8 厚さ:8.0 高さ:1.3
846	土器	直径:14.7 厚さ:9.2 高さ:4.2	897	木質品	直径:9.8 厚さ:7.2 高さ:1.0
847	土器	直径:7.4 厚さ:5.0 高さ:1.5	898	木質品	直径:(9.8) 直径:7.0 高さ:0.9
848	土器	直径:7.5 厚さ:5.2 高さ:1.5	899	木質品	直径:9.4 厚さ:7.0 高さ:1.3
849	土器	直径:7.6 厚さ:5.6 高さ:1.6	900	木質品	直径:9.2 厚さ:7.0 高さ:1.1
850	土器	直径:12.4 厚さ:8.0 高さ:3.3	901	木質品	直径:9.9 厚さ:7.0 高さ:1.6
851	土器	直径:12.4 厚さ:8.0 高さ:3.4	902	木質品	直径:(8.8) 直径:6.9 高さ:1.0
852	鐵製品	長さ:21.4 幅2.8 厚さ:0.5	903	木質品	直径:(9.0) 厚さ:7.2 高さ:1.3
853	鐵製品	長さ:21.5 幅2.8 厚さ:0.5	904	木質品	直径:9.2 厚さ:6.5 高さ:1.4
854	鐵製品	長さ:26.3 幅2.6 厚さ:0.4	905	木質品	直径:9.4 厚さ:7.2 高さ:1.1
855	鐵製品	長さ:21.0 幅2.9 厚さ:0.4	906	木質品	直径:(9.4) 厚さ:7.0 高さ:1.2
856	鐵製品	長さ:14.7 幅2.4 厚さ:0.2	907	木質品	直径:(9.6) 厚さ:6.6 高さ:1.3
857	鐵製品	長さ:15.6 幅2.3 厚さ:0.4	908	木質品	直径:9.7 厚さ:7.2 高さ:1.1
858	鐵製品	長さ:5.6 幅2.0 厚さ:0.3	909	木質品	直径:10.0 厚さ:8.2 高さ:1.9
859	鐵製品	長さ:9.1 幅2.3 厚さ:0.8	910	木質品	直径:(8.4) 厚さ:7.0 高さ:1.4
860	鐵製品	長さ:9.0 幅2.0 厚さ:0.5	911	木質品	直径:9.8 厚さ:7.0 高さ:1.1
861	鐵製品	長さ:9.0 幅2.0 厚さ:0.4	912	木質品	直径:9.2 厚さ:6.4 高さ:1.4
862	鐵製品	直徑:2.4	913	木質品	直径:9.7 厚さ:5.5 高さ:1.8
863	鐵製品	直徑:2.4	914	木質品	直径:9.2 厚さ:6.5 高さ:2.1
864	鐵製品	直徑:2.4	915	木質品	直径:9.8 厚さ:6.0 高さ:1.2
865	鐵製品	直徑:2.4	916	木質品	直径:9.8 厚さ:6.0 高さ:1.5
866	鐵製品	直徑:2.4	917	木質品	直径:9.2 厚さ:8.0 高さ:1.0
867	骨角製品	直徑:1.8 厚さ:0.5	918	木質品	直径:9.6 厚さ:7.2 高さ:1.1

表10 出土遺物計測表 (10)

No.	遺物	計測値 単位(cm) () 復元値 () 残存状態	No.	遺物	計測値 単位(cm) () 復元値 () 残存状態
919	木製品	直径9.3 幅径7.6 高さ11	970	木製品	直径8.6 厚さ8.5
920	木製品	直径(9.2) 幅径6.0 高さ11	971	木製品	直径9.8 厚さ8.5
921	木製品	直径9.0 幅径7.6 高さ10.8	972	木製品	直径9.4 厚さ8.5
922	木製品	直径9.7 幅径7.8 高さ10	973	木製品	長さ12.6 幅6.0 厚さ1.9
923	木製品	直径(9.6) 幅径(7.4) 高さ13	974	木製品	長さ [10.5] 幅1.8 厚さ0.4
924	木製品	直径9.2 幅径7.6 高さ11	975	木製品	長さ15.8 幅 [3.8] 厚さ0.5
925	木製品	直径8.4 幅径7.6 高さ11	976	木製品	長さ12.1 幅5.0 厚さ1.0
926	木製品	直径(8.9) 幅径7.5 高さ10	977	木製品	長さ16.0 幅6.0 厚さ2.2
927	木製品	直径(10.0) 幅径(7.2) 高さ15	978	木製品	長さ17.9 幅6.7 厚さ0.2
928	木製品	直径8.8 幅径8.0 高さ11	979	木製品	長さ23.8 幅10.2 厚さ0.3
929	木製品	直径(9.4) 幅径(7.0) 高さ11	980	木製品	長さ23.6 幅10.2 厚さ0.3
930	木製品	直径9.4 幅径7.4 高さ15	981	木製品	長さ24.2 幅6.7 厚さ0.3
931	木製品	直径(9.0) 幅径7.6 高さ10	982	木製品	長さ24.3 幅6.2 厚さ0.3
932	木製品	直径(9.9) 幅径7.4 高さ10	983	木製品	長さ23.8 幅6.5 厚さ0.2
933	木製品	直径(9.2) 幅径7.5 高さ10	984	木製品	長さ22.5 幅6.1 厚さ0.4
934	木製品	直径(9.0) 幅径7.6 高さ12	985	木下製品	長さ [21.5] 幅10.0 高さ [2.8]
935	木製品	直径(9.2) 幅径(7.0) 高さ11	986	木下製品	長さ22.5 幅6.0 高さ [4.2]
936	木製品	直径(9.8) 幅径(7.0) 高さ11	987	木下製品	長さ23.0 幅10.5 高さ [3.0]
937	木製品	直径9.8 幅径6.8 高さ13	988	木下製品	長さ22.6 幅6.8 高さ [3.1]
938	木製品	直径(9.7) 幅径(6.0) 高さ0.9	989	木下製品	長さ22.5 幅10.0 高さ [5.5]
939	木製品	直径(8.8) 幅径(6.4) 高さ1.2	990	木下製品	長さ23.2 幅6.6 高さ [4.2]
940	木製品	直径(9.0) 幅径(7.0) 高さ1.4	991	木下製品	長さ17.6 幅6.0 高さ [5.2]
941	木製品	直径(9.0) 幅径(6.0) 高さ1.1	992	木下製品	長さ15.6 幅6.0 高さ [2.0]
942	木製品	直径(9.6) 幅径7.0 高さ1.5	993	木下製品	長さ15.3 幅6.7 高さ [3.0]
943	木製品	直径(9.8) 幅径6.0 高さ1.9	994	木下製品	長さ21.3 幅6.3 厚さ0.7
944	木製品	直径(22.0)	995	木下製品	長さ [19.0] 幅1.5 厚さ0.7
945	木製品	直径7.5 高さ1.3	996	木下製品	長さ [20.3] 幅1.3 厚さ0.9
946	木製品	長さ31.6 幅 [28.5] 高さ3.8	997	木下製品	長さ [24.7] 幅24.7 厚さ0.6
947	木下製品	長さ28.0 幅 [12.0] 高さ0.9	998	木下製品	長さ [24.7] 幅24.7 厚さ0.7
948	木下製品	長さ30.4 幅28.3 厚さ0.6	999	木下製品	長さ41.4 幅1.3 厚さ0.2
949	木下製品	長さ17.3 幅17.2 厚さ0.4	1000	木下製品	長さ9.6 幅0.1 厚さ1.0
950	木下製品	長さ15.8 幅15.7 厚さ0.3	1001	木下製品	長さ8.3 幅0.0 厚さ0.7
951	木下製品	長さ [20.1] 幅6.7 厚さ0.2	1002	木下製品	長さ8.4 幅0.2 厚さ0.1
952	木下製品	長さ16.8 幅6.0 厚さ0.4	1003	木下製品	長さ8.8 幅0.4 厚さ0.1
953	木下製品	長さ20.4 幅6.5 厚さ0.4	1004	木下製品	長さ5.4 幅0.0 厚さ0.9
954	木下製品	長さ24.1 幅6.8 厚さ0.6	1005	木下製品	長さ9.4 幅0.4 厚さ0.3
955	木板製品	長さ22.4 幅6.5 高さ0.6	1006	木下製品	長さ11.2 幅0.8 厚さ0.4
956	木板製品	長さ23.6 幅6.0 厚さ0.7	1007	木下製品	長さ11.7 幅0.8 厚さ0.2
957	木板製品	長さ24.9 幅6.0 厚さ0.6	1008	木下製品	長さ10.3 幅10.0 高さ3.2
958	木板製品	長さ27.8 幅6.0 厚さ0.5	1009	木下製品	長さ8.0 幅6.0 高さ [3.0]
959	木板製品	長さ23.7 幅6.6 厚さ0.5	1010	木下製品	長さ11.0 幅6.7 厚さ0.9
960	木板製品	長さ23.2 幅6.0 厚さ0.7	1011	木下製品	長さ11.3 幅6.2 厚さ0.4
961	木板製品	長さ21.6 幅6.0 厚さ0.8	1012	木下製品	長さ13.1 幅3.8 厚さ0.8
962	木板製品	長さ19.7 幅6.5 厚さ0.7	1013	木下製品	長さ10.9 幅2.3 厚さ0.9
963	木板製品	長さ20.0 幅6.8 厚さ0.7	1014	木下製品	長さ9.4 幅2.4 厚さ1.1
964	木板製品	長さ21.6 幅5.8 厚さ0.5	1015	木下製品	長さ6.8 幅0.8 厚さ0.8
965	木板製品	長さ21.6 幅 [5.4] 厚さ0.6	1016	木下製品	長さ7.5 幅2.4 厚さ0.3
966	木板製品	長さ [22.6] 幅 [9.4] 厚さ [1.0]	1017	木下製品	長さ11.5 幅2.3 厚さ0.4
967	木下製品	直径 (28.0) 厚さ1.0	1018	木下製品	長さ16.7 幅1.5 厚さ0.6
968	木下製品	直径 (21.6) 厚さ0.9	1019	木下製品	長さ12.5 幅3.3 厚さ0.4
969	木下製品	直径13.6 厚さ0.7	1020	木下製品	長さ34.9 幅1.1 厚さ0.4

表11 出土遺物計測表 (11)

No.	遺物	計測値 単位cm () 條元数値 [] 備考数値	No.	遺物	計測値 単位cm () 條元数値 [] 備考数値
1021	木 紋 製 品	長832.2 幅0.7 厚8.03	1072	人 鞠 戸 子	口徑7.6 延長4.4 器高3.0
1022	木 紋 製 品	長830.7 幅0.6 厚8.03	1073	人 鞠 戸 子	口徑5.6 延長2.2 器高1.0
1023	木 紋 製 品	長827.2 幅1.2 厚8.04	1074	人 鞠 戸 子	口徑5.6 延長1.1 器高1.9
1024	木 紋 製 品	長826.4 幅0.6 厚8.06	1075	人 鞠 戸 子	口徑(5.6) 延長3.9 器高2.3
1025	木 紋 製 品	長824.4 幅0.5 厚8.04	1076	人 鞠 戸 子	口徑(6.4) 延長(3.2) 器高(2.1)
1026	木 紋 製 品	長819.2 幅1.0 厚8.08	1077	人 鞠 戸 子	口徑(7.0) 延長(3.8) 器高(2.5)
1027	木 紋 製 品	長818.4 幅1.1 厚8.04	1078	人 鞠 戸 子	口徑(8.8) 延長(4.6) 器高(3.3)
1028	木 紋 製 品	長814.0 幅0.6 厚8.03	1079	片 口 瓶	口徑(31.4)
1029	木 紋 製 品	長814.1 幅0.7 厚8.05	1080	片 口 瓶	口徑(31.8)
1030	木 紋 製 品	長812.5 幅0.5 厚8.06	1081	片 口 瓶	口徑(21.8)
1031	木 紋 製 品	長811.5 幅0.6 厚8.02	1082	片 口 瓶	口徑(23.6)
1032	木 紋 製 品	長81.7 幅0.5 厚8.04	1083	窄 颈 瓶	口徑(41.8)
1033	木 紋 製 品	長816.4 幅0.5 厚8.05	1084	王 大 瓶	口徑(47.0)
1034	木 紋 製 品	長817.5 幅0.7 厚8.04	1085	新 王 大 瓶	長さ(6.1) 幅(7.6) 厚8.35
1035	木 紋 製 品	長818.8 幅0.9 厚8.05	1086	平 瓶	長さ(6.9) 幅(7.7) 厚8.18
1036	木 紋 製 品	長821.3 幅1.0 厚8.07	1087	平 瓶	長さ(8.5) 幅(11.7) 厚8.22
1037	木 紋 製 品	長826.5 幅0.8 厚8.07	1088	赤 土 瓶	口徑12.6 延長7.5 器高3.5
1038	木 紋 製 品	長827.4 幅0.7 厚8.03	1089	か わ く び 瓶	口徑12.5 延長1.1 器高3.4
1039	木 紋 製 品	長827.2 幅0.7 厚8.06	1090	赤 土 瓶	口徑12.4 延長8.5 器高3.9
1040	木 紋 製 品	長827.7 幅1.1 厚8.07	1091	か わ く び 瓶	口徑7.6 延長4.1 器高1.7
1041	木 紋 製 品	長827.9 幅1.4 厚8.10	1092	か わ く び 瓶	口徑7.7 延長4.5 器高1.6
1042	木 紹 品	長829.8 幅0.8 厚8.05	1093	か わ く び 瓶	口徑7.7 延長4.8 器高1.9
1043	木 紋 製 品	長831.5 幅1.3 厚8.06	1094	か わ く び 瓶	口徑7.8 延長4.7 器高1.7
1044	木 紋 製 品	長830.9 幅1.3 厚8.06	1095	葉 刀 銀 刀	長さ(8.8) 幅(1.5) 厚8.06
1045	木 紋 製 品	長832.1 幅1.6 厚8.10	1096	葉 刀 銀 刀	長さ(5.4) 幅0.2 厚8.05
1046	木 紋 製 品	長842.4 幅0.2 厚8.12	1097	葉 刀 銀 刀	長さ6.5 幅0.4 厚8.02
1047	木 紋 製 品	長827.7 幅1.9 厚8.08	1098	葉 大 瓶	長さ32.1 幅0.5 厚8.05
1048	木 紋 製 品	長821.7 幅1.7 厚8.07	1099	葉 大 瓶	長さ(31.7) 幅0.5 厚8.05
1049	木 紋 製 品	長820.6 幅1.2 厚8.07	1100	广 口 瓶	直径2.5
1050	木 紹 品	長820.2 幅1.4 厚8.07	1101	广 口 瓶	直径2.4
1051	木 紹 品	長816.6 幅1.4 厚8.09	1102	广 口 瓶	直径2.5
1052	木 紹 品	長819.6 幅1.2 厚8.11	1103	广 口 瓶	直径2.4
1053	木 紹 品	長821.4 幅1.6 厚8.08	1104	广 宋 元 瓶	直径2.4
1054	木 紹 品	長821.5 幅1.3 厚8.04	1105	青 瓷 青 瓷	長さ(8.0) 幅(1.4) 厚8.03
1055	木 紹 品	長821.8 幅0.8 厚8.07	1106	青 瓷 青 瓷	直径3.6 延長1.9 厚8.04
1056	木 紹 品	長821.5 幅0.6 厚8.06	1107	青 瓷 青 瓷	長さ(13.7) 幅(5.8) 厚さ(4.3)
1057	木 紹 品	長818.6 幅0.8 厚8.07	1108	水 瓶	長さ(4.1) 幅(9.0) 器高3.1
1058	木 紹 品	長811.7 幅0.8 厚8.05	1109	水 瓶	長さ(3.8) 幅(8.4) 厚8.10
1059	木 紹 品	長835.3 幅0.9 厚8.08	1110	水 瓶	長さ(6.6) 幅(3.5) 厚8.19
1060	木 紹 品	長836.1 幅0.8 厚8.09	1111	水 瓶	長さ(4.7) 幅(4.0) 厚さ(9.6)
1061	木 紹 品	長837.9 幅1.1 厚8.10	1112	水 瓶	長さ(7.3) 幅(5.7) 厚8.12
1062	木 紹 不 明	長810.0 幅0.5 厚8.01	1113	白 石 瓶	長さ6.6 幅(6.3) 厚8.18
1063	木 紹 不 明	長81.7 幅2.5 厚8.28	1114	木 紋 銀 刀	口徑8.8 延長7.0 器高1.2
1064	木 紹 不 明	長81.8 幅2.5 厚8.47	1115	木 紋 銀 刀	口徑8.6 延長7.2 器高0.8
1065	木 紹 不 明	長813.3 幅0.6 厚8.49	1116	木 紋 銀 刀	口徑(8.6) 延長7.0 器高1.0
1066	木 紹 不 明	長821.3 幅0.5 厚8.23	1117	木 紋 銀 刀	口徑(9.8) 延長7.0 器高0.1
1067	木 紹 不 明	長821.9 幅1.6 厚8.32	1118	木 紋 銀 刀	口徑(9.6) 延長8.0 器高0.8
1068	木 紹 不 明	底径(7.0)	1119	木 紋 銀 刀	口徑9.2 延長8.0 器高1.1
1069	木 紹 不 明	底径(10.4)	1120	木 紋 銀 刀	口徑(9.9) 延長7.2 器高0.8
1070	木 紹 不 明	口径(19.9)	1121	木 紋 銀 刀	口徑12.6 直径7.0 器高3.4
1071	木 紹 不 明	口径(31.4) 延長5.0 器高5.8	1122	木 紋 銀 刀	口徑(14.0) 延長6.0 器高3.8

表12 出土遺物計測表 (12)

No.	遺物	計測値 単位cm (□) 残存部数 []	計測値 単位cm (□) 残存部数 []	
1123	木質 漆 漆文 漆	直径(6.0)	1174 木 漆 漆文 漆	長さ17.5 幅1.2 厚0.5
1124	木質 漆 漆文 漆	直径8.1	1175 木 漆 漆文 漆	長さ17.7 幅1.1 厚0.7
1125	木質 漆 漆文 漆	長さ25.1 幅5.6 厚0.9	1176 木 漆 漆文 漆	長さ20.3 幅0.8 厚0.7
1126	木質 漆 漆文 漆	長さ24.4 幅7.2 厚0.7	1177 木 漆 漆文 漆	長さ21.2 幅0.5 厚0.4
1127	木質 漆 漆文 漆	長さ25.1 幅6.4 厚0.7	1178 木 漆 漆文 漆	長さ21.5 幅0.9 厚0.4
1128	木質 漆 漆文 漆	長さ26.4 幅7.8 厚0.6	1179 木 漆 漆文 漆	長さ27.8 幅0.8 厚0.6
1129	木質 漆 漆文 漆	長さ19.2 幅4.3 厚0.3	1180 木 漆 漆文 漆	長さ28.1 幅0.8 厚0.1
1130	木質 漆 漆文 漆	長さ12.2 幅2.4 厚0.5	1181 木 漆 漆文 漆	長さ28.4 幅0.9 厚0.7
1131	木質 漆 漆文 漆	長さ(22.7) 幅5.4 厚0.1	1182 木 漆 漆文 漆	長さ31.8 幅1.1 厚0.1
1132	木質 漆 漆文 漆	長さ17.0 幅0.5 厚0.8	1183 木 漆 漆文 漆	長さ30.2 幅2.4 厚0.4
1133	木 漆 漆文 漆	長さ18.6 幅0.5 厚0.4	1184 木 漆 漆文 漆	長さ22.6 幅0.5 厚0.5
1134	木 漆 漆文 漆	長さ20.9 幅0.5 厚0.4	1185 木 漆 漆文 漆	長さ22.3 幅0.6 厚0.6
1135	木 漆 漆文 漆	長さ23.4 幅0.5 厚0.5	1186 木 漆 漆文 漆	長さ22.6 幅0.5 厚0.4
1136	木 漆 漆文 漆	直径20.0 厚0.1	1187 木 漆 漆文 漆	長さ21.8 幅0.5 厚0.5
1137	木 漆 漆文 漆	直径(16.1) 厚0.6	1188 木 漆 漆文 漆	長さ22.5 幅2.6 厚0.9
1138	木 漆 漆文 漆	直径15.8 厚0.7	1189 木 漆 漆文 漆	長さ23.5 幅0.5 厚0.1
1139	木 漆 漆文 漆	直径7.4 厚0.5	1190 木 漆 漆文 漆	長さ(13.4) 幅0.8 厚0.1
1140	木 漆 漆文 漆	直径6.7 幅0.5	1191 木 漆 漆文 漆	長さ17.8 幅2.7 厚0.2
1141	木 漆 漆文 漆	直径5.6 厚0.4	1192 青 花 文 瓶	直径5.0
1142	木 漆 漆文 漆	直径(5.0) 厚0.4	1193 青 花 文 瓶	直径(5.4)
1143	木 漆 漆文 漆	直径(3.4) 厚0.1	1194 人 丸 子	口径(8.0) 高さ(3.6) 器高2.3
1144	漆 漆 漆 漆	長さ10.4 幅0.3 厚0.5	1195 常 識	口径(6.0)
1145	木 漆 漆文 漆	長さ(10.6) 幅1.9 厚0.7	1196 土 器	口径10.5 高さ6.6 器高2.7
1146	木 漆 漆文 漆	直径6.6 高さ1.0	1197 土 器	口径12.6 高さ8.4 器高3.1
1147	木 漆 漆文 漆	長さ(23.4) 幅(3.8) 厚0.5	1198 刀 劍 刀	長さ18.4 幅1.1 厚0.1
1148	木 漆 漆文 漆	長さ25.2 幅10.5 厚0.3	1199 木 漆 漆文 漆	長さ(9.3) 直径7.0 器高1.0
1149	木 漆 漆文 漆	長さ23.6 幅9.6 厚0.3	1200 木 漆 漆文 漆	直徑(7.0)
1150	木 漆 漆文 漆	長さ33.9 幅8.4 厚0.2	1201 人 丸 子	直徑6.0 幅1.1 厚0.1
1151	木 漆 漆文 漆	長さ18.2 幅0.1 厚0.2	1202 木 漆 漆文 漆	長さ35.6 幅(1.1) 高さ2.2
1152	木 漆 漆文 漆	長さ(8.0) 幅1.8 厚0.9	1203 木 漆 漆文 漆	長さ48.5 幅1.9 厚0.1
1153	木 漆 漆文 漆	長さ3.2 幅1.7 高さ3.3	1204 常 識	直徑(1.5)
1154	漆 漆 漆 漆	長さ8.3 幅(3.0) 厚0.9	1205 京 燒	直徑(1.5)
1155	木 漆 漆文 漆	長さ11.9 幅0.3 厚0.1	1206 丸 瓦	直さ(19.6) 幅(7.4) 厚0.2
1156	木 漆 漆文 漆	長さ13.3 幅0.1 厚0.4	1207 平 瓦	直さ(4.5) 幅(5.0) 厚0.2
1157	木 漆 漆文 漆	長さ15.1 幅0.2 厚0.4	1208 平 瓦	直さ(6.3) 幅(8.0) 厚0.1
1158	木 漆 漆文 漆	長さ9.6 幅1.6 厚0.1	1209 か わ ら せ け	口径7.6 高さ5.6 器高1.9
1159	木 漆 漆文 漆	長さ14.1 幅1.4 厚0.1	1210 か わ ら せ け	口径7.3 高さ5.1 器高1.7
1160	木 漆 漆文 漆	長さ11.5 幅2.6 厚0.4	1211 か わ ら せ け	口径8.5 高さ6.2 器高1.9
1161	木 漆 漆文 漆	長さ30.6 幅7.6 厚0.1	1212 か わ ら せ け	口径(8.0)
1162	木 漆 漆文 漆	長さ7.1 幅0.1 厚0.3	1213 か わ ら せ け	口径(12.0) 器高(3.0)
1163	木 漆 漆文 漆	長さ9.0 幅2.0 厚0.1	1214 木 漆 漆文 漆	直徑(16.0) 厚0.1
1164	木 漆 漆文 漆	直徑0.9 厚0.6	1215 木 漆 漆文 漆	長さ19.0 幅19 厚0.1
1165	木 漆 漆文 漆	直徑6.8 厚0.5	1216 口 瓦 瓶	口径(9.8)
1166	木 漆 漆文 漆	長さ31.1 幅2.3 厚0.1	1217 人 丸 子	口径(7.0) 高さ(4.4) 器高(2.0)
1167	木 漆 漆文 漆	長さ20.0 幅2.1 厚0.8	1218 か わ ら せ け	口径7.1 高さ5.4 器高1.6
1168	木 漆 漆文 漆	長さ32.9 幅1.5 厚0.5	1219 か わ ら せ け	口径7.3 高さ4.8 器高1.9
1169	木 漆 漆文 漆	長さ23.9 幅1.2 厚0.6	1220 か わ ら せ け	口径12.8 高さ7.8 器高3.6
1170	木 漆 漆文 漆	長さ21.8 幅1.4 厚0.1	1221 か わ ら せ け	口径12.7 高さ8.0 器高3.5
1171	木 漆 漆文 漆	長さ21.3 幅1.8 厚0.1	1222 木 漆 漆文 漆	口径(8.1) 高さ(5.0) 器高(0.6)
1172	木 漆 漆文 漆	長さ17.2 幅1.4 厚0.6	1223 木 漆 漆文 漆	口径8.4 高さ6.0 器高0.9
1173	木 漆 漆文 漆	長さ21.8 幅1.2 厚0.4	1224 木 漆 漆文 漆	長さ18.0 幅0.6 厚0.6

表13 出土遺物計測表(13)

No.	遺物	計測値 単位(cm) ()復元断面 ()現存断面	No.	遺物	計測値 単位(cm) ()復元断面 ()現存断面
1225	木 製品	長さ20.5 幅0.6 厚さ0.5	1225	土 器	口径13.5 底径6.4 高さ3.5
1226	木 製品	長さ22.7 幅0.6 厚さ0.5	1225	土 器	口径21.1 底径6.1 器高1.8
1227	木 製品	長さ21.8 幅0.6 厚さ0.4	1224	土 器	口径7.5 底径4.1 器高1.8
1228	木 製品	長さ23.0 幅0.6 厚さ0.7	1225	土 器	口径4.1 底径3.0 器高0.8
1229	木 製品	直径6.6 厚さ0.7	1226	石 器	長さ16.5 幅5.5 厚さ0.8
1230	木 製品	直径17.0 厚さ1.1	1227	木 製品	口径8.5 底径5.2 器高1.8
1231	木 製品	長さ21.6 幅0.2 厚さ2.0	1228	木 製品	長さ19.0 幅0.8 厚さ0.3
1232	木 製品	長さ30.0 幅0.2 厚さ1.0	1229	木 製品	長さ24.5 幅0.6 厚さ0.8
1233	木 製品	長さ20.0 幅1.6 厚さ0.9	1230	木 製品	長さ25.9 幅0.6 厚さ0.5
1234	木 製品	長さ15.0 幅0.2 厚さ0.9	1231	木 製品	長さ23.9 幅0.5 厚さ0.3
1235	木 製品	長さ16.0 幅1.1 厚さ0.6	1232	木 製品	長さ15.1 幅3.1 厚さ3.9
1236	木 製品	長さ16.0 幅1.5 厚さ0.5	1233	青 白 陶文 器	口径(16.8)
1237	木 製品	長さ15.1 幅0.5 厚さ0.5	1234	青 白 陶文 器	口径(12.9)
1238	木 製品	長さ59.5 幅3.2 厚さ2.1	1235	青 白 陶文 器	長さ(3.9) 幅0.1 高さ(2.9)
1239	鐵 器		1236	鐵 器	口径(3.4)
1240	木 製品	長さ19.6 幅0.2 厚さ0.8	1237	土 器	口径7.4 底径4.6 器高1.7
1241	木 製品	長さ19.0 幅0.5 厚さ1.9	1238	木 製品	長さ19.5 幅0.5 厚さ0.4
1242	木 製品	長さ15.9 幅0.9 厚さ0.7	1239	木 製品	長さ22.3 幅0.9 厚さ0.4
1243	木 製品	長さ27.5 幅0.6 厚さ0.7	1240	木 製品	長さ24.2 幅0.7 厚さ0.3
1244	木 製品	長さ19.3 幅0.6 厚さ0.9	1241	木 製品	長さ15.9 幅1.2 厚さ0.6
1245	木 製品	長さ25.5 幅1.2 厚さ0.6	1242	木 製品	長さ21.8 幅1.2 厚さ0.7
1246	木 製品	長さ27.3 幅1.2 厚さ0.6	1243	灰 陶 大 鍋	口径1.9 底径2.5 器高3.5
1247	木 製品	長さ29.3 幅1.3 厚さ0.6	1244	丁 字 型 火 薬 瓶	直径2.4
1248	木 製品	長さ30.9 幅0.9 厚さ0.7	1245	石 器	口径(12.2) 幅3.6 厚さ0.8
1249	木 製品	長さ34.4 幅1.2 厚さ0.6	1246	鐵 器	直徑6.8
1250	木 製品	長さ36.4 幅1.3 厚さ0.6	1247	木 製品	長さ(13.5) 幅7.0 厚さ1.4
1251	青 白 陶文 器	口径(12.2)			

表14 磁石一覽表

遺物No.	所	遺構	产地(推定底山)	種別	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	鉄面			小口切削痕 鋼面工具板		
											(1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7) (1.7)			(単)		
49	1	包含層	伊予	中 磁	(5.3)	(5.2)	(3.5)	(3.9)	(1.8)	(1.7)	(1.3)	4面	—	—	—	—
50	1	包含層	伊予	中 磁	(5.5)	(5.2)	(3.5)	(3.9)	(1.8)	(1.7)	(1.3)	4面	(—)	(—)	—	—
51	1	包含層	鳴竜(向田)	土上磁	(6.0)	3.1	0.7	(2.0)	1.0	0.2	表裏	A	鉄面	小口切削痕より、消費地で再成形か?	平鑿	
52	1	包含層	鳴竜(山田)	土上磁	(5.1)	3.4	0.6	(1.7)	1.1	0.2	表裏	A	鉄面	1側面切削痕より鉄面→手引縫	手引縫	
212	1	土坑3	上野	中 磁	(6.2)	(3.5)	(1.8)	(2.0)	(1.2)	(0.6)	4面	—	—	—	—	
300	1	包含層	鳴竜(向田)	土上磁	(9.3)	4.1	1.0	(3.1)	1.4	0.3	表	A	鉄面	側面切削跡に手引縫?	(摩耗)	
301	1	包含層	鳴竜(向田)	土上磁	(3.1)	3.3	1.2	(1.1)	1.1	0.4	表裏	—	鉄面	—	鉄面	
302	1	天草 or 伊予	中 磁	(5.1)	(3.6)	(3.1)	(1.7)	(1.2)	(1.0)	1面	—	—	—	—	—	
303	1	伊予	中 磁	(5.8)	(5.4)	(2.8)	(1.9)	(1.8)	(0.9)	2面	(手引縫?)	—	—	—	—	
304	1	天草	中 磁	(7.2)	(6.0)	(2.5)	(2.4)	(2.0)	(0.8)	2 or 3面	—	—	—	—	—	
305	1	伊予	中 磁	(4.3)	(3.8)	(4.9)	(1.4)	(1.3)	(1.6)	2面	—	—	—	—	—	
356	1B	建物4	伊予	中 磁	(6.0)	(4.3)	(3.3)	(2.0)	(1.4)	(1.1)	4面	—	—	—	—	
477	2	建物6	上野(浜伏)	中 磁	(12.7)	(5.5)	(4.3)	(4.2)	(1.8)	(1.4)	2面	—	—	—	—	
563	2	建物11	鳴竜(奥院)	土上磁	(10.1)	3.6	1.0	(3.3)	1.2	0.3	表裏	B	鉄面	張石付き	鉄面	
564	2	建物11	窓口	荒	(14.0)	(6.5)	(5.1)	(4.6)	(2.1)	(1.7)	—	—	—	—	—	
661	2	解2	天草	中 磁	(6.0)	(3.2)	(1.4)	(2.0)	(1.1)	(0.5)	1面	?	—	—	—	
662	2	解2	上野(沼田?)	中 磁	(9.7)	(4.3)	(2.8)	(3.2)	(1.4)	(0.9)	3面	—	—	—	—	
725	2	木器溝り	鳴竜(奥院)	土上磁	(5.9)	3.4	0.8	(1.9)	1.1	0.3	表裏	—	—	—	—	
726	2	木器溝り	天草	中 磁	(9.0)	(6.8)	(6.0)	(3.0)	(2.2)	(2.0)	2 or 3面	—	—	—	—	
869	2	(不明) 備水か	土上磁	(8.1)	3.7	1.1	(2.7)	1.2	0.4	表裏	A	鉄面	乳白色で表面色の紋不規則 やや細かい研磨	(摩耗)	—	
870	2	鳴竜(奥院)	土上磁	(6.6)	4.1	0.5	(2.2)	1.4	0.2	表裏	—	—	—	—	—	
871	2	鳴竜(向田)	土上磁	(6.2)	3.4	0.6	(2.0)	1.1	0.2	表裏	—	—	—	—	—	
872	2	鳴竜(向田)	土上磁	(4.4)	3.7	0.5	(1.5)	1.2	0.2	表裏	A	鉄面	—	鉄面	—	
873	2	天草	中 磁	(6.3)	(3.2)	(2.2)	(2.1)	(1.1)	(0.7)	4面?	—	—	—	—	—	
874	2	天草 or 伊予	中 磁	(8.1)	(4.9)	(3.9)	(2.7)	(1.6)	(1.3)	3面	—	—	—	—	—	
875	2	上野	中 磁	(12.7)	(4.4)	(2.4)	(4.2)	(1.5)	(0.8)	3面	—	—	—	—	—	
876	2	上野(浜伏)	中 磁	(6.4)	(5.4)	(3.5)	(2.1)	(1.8)	(1.7)	?	—	—	—	—	—	
1109	3	鳴竜(奥院)	土上磁	18.7	3.4	1.0	6.2	1.1	0.3	表	A / B	鉄面	—	—	—	
1110	3	鳴竜(奥院)	土上磁	(7.4)	3.5	1.0	(2.4)	1.2	0.3	表裏	—	鉄面	鋸刃探査 小口切削痕から手引縫中央で折れ	手引縫	—	
1111	3	鳴竜(向田)	土上磁	(5.3)	4.0	0.6	(1.7)	1.3	0.2	表	消費地	—	—	—	—	
1256	4	鳴竜(向田)	土上磁	(6.6)	4.3	0.9	(2.2)	1.4	0.3	表裏	(A)	鉄面	小口切削痕より鉄面	手引縫	—	
1275	4	表技	鳴竜(奥院)	土上磁	(12.1)	(3.7)	1.2	(4.0)	(1.2)	0.4	表裏	A	鉄面	1側面切削痕から縦方向溝縫を引く	鉄面	—

参考: 滅滅仕上層の小口切削痕 A は底面から B は側面から鏡面をもつて裏面へ。吉野大学人文学部卒業研究得点。

第3章 まとめ

本遺跡は扇ヶ谷の中央付近、藤ヶ谷の開口部南側に位置し、西側には扇ヶ谷川、及び武藏大路が南北に走り、亀ヶ谷辻にも近い。扇ヶ谷は現存する寺院の他、廃寺も多く存在した地域であり、また、町屋免許の地として『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条に記された「亀谷辻」、文永二年（1265）三月五日条の「武藏大路下」は本調査地付近と考えられ、繁華な商業地域であったことは想像に難くない。

今回は狭い調査範囲ではあるが、1期（1面）までの海拔13.2～13.5mで出土した遺物を1期包含層出土遺物とし、1～5期の遺構群を確認することができた。平面的に調査し得たのは1、1B、2期であり、1期では基壇、建物址、切石列、堀、道路状遺構、溝、石圓い遺構、土坑、ピットを、1B期では建物址を、そして2期では建物址、堅穴状遺構、堀、溝、木組み遺構、石圓い遺構、木器溜り、土間状遺構、土坑、ピットを検出した。いずれも遺構の軸方向には統一性が看取され、それぞれがほぼ直交、平行の関係にあるといえる。3～5期はトレーナによる部分的な確認であり、中世地山までには更に多くの遺構面が存在する可能性もある。3期では横板と杭による南北方向の木組みや、楔形を呈する杭を扇状に打ち込んだものが検出され、4期では綺麗な暗褐色粘質土、或いは破碎した凝灰岩粒子を含む暗褐色粘質土による地業を、5期では黒褐色粘質土（中世地山）の上面から掘り込む遺構を堆積土層の観察により確認することができた。以上、検出されたのは13世紀後半から15世紀前半にわたる遺構群であり、各期の年代については5期、4期が13世紀後半、3期、2期が14世紀前葉、1期が14世紀中葉、1期包含層が14世紀後葉から15世紀前半に比定されるものと考えている。本遺跡の性格としては、扇ヶ谷二丁目382番1地点や扇ヶ谷三丁目397番地点のように、特定はできないが寺院の境内、或いはその周縁に展開する町屋的な生活域とみることが妥当と考える。

本遺跡からはテンバコ150箱の遺物が出土した。ここでは表15を参照し、出土遺物の構成について記しておきたい。尚、出土点数については便宜上、接合後の破片数を使用し、かわらけに関しては重量も記載した。表15では遺物を貿易陶磁、国産陶磁、瓦、火鉢、瓦質製品、土製品、かわらけ、金属製品、銭、石製品、骨角製品、木製品、自然遺物に区分している。今回の調査では総数46642点（100%）の遺物が出土し、そのうち2062点（4.41%）が、動物骨、貝類等の自然遺物で、残り44580点（95.59%）が土器、陶磁器等の製品である。最も多く出土したのはかわらけで23370点（50.11%）、ついで木製品の箸が15826（33.93%）、常滑窯が1411点（3.03%）である。以下、各遺物について言及する。

貿易陶磁は総数180点（0.39%）出土している。その内訳は青磁116点、白磁31点、青白磁12点、施釉陶器21点である。青磁碗ではほとんどが龍泉窯系鍋運弁文碗であり、劃花文碗は2点のみである。青磁盤では内底面に龍文を施す大型品が含まれ、施釉陶器には建窯の鐵釉天目が出土している。

国産陶器には瀬戸、常滑、山茶碗窯系、備前、魚住、亀山、吉備系の製品を含め、総数1994点（4.27%）が出土している。内訳は瀬戸209点（0.45%）常滑1578点（3.38%）、山茶碗窯系173点（0.37%）、備前23点（0.05%）、魚住1点（0.01%）、亀山9点（0.02%）、吉備系1点（0.01%）であり、渥美は出土していない。瀬戸では碗・皿類112点、壺・瓶類52点、入れ子30点、鉢11点、盤3点、香炉1点がみられた。碗・皿類のうち55点は鉢である。常滑では甕1411点、壺6点、片口鉢144点が出土し、破片周縁に研磨痕を有する転用品は17点みられた。山茶碗窯系の製品では山茶碗8点、山皿1点、そして、常滑窯1類と考えられる片口鉢が164点出土している。

瓦は9点（0.02%）で、平瓦5点、丸瓦4点である。火鉢は163点（0.35%）で、瓦質22点、土器質141点である。瓦質製品は4点（0.01%）出土し、香炉1点、鉢2点、燭台1点を含む。

表15 遺物計数表

全体構成

	資源別	属性別	瓦	火葬	瓦製品	土器品	かわらけ	金屬製品	鏡	石器品	骨角製品	木製品	自然遺物	合計
点数(点)	180	1994	9	163	4	13	23370	53	37	56	9	18692	2062	46642
構成比(%)	0.39	4.27	0.02	0.35	0.01	0.03	50.11	0.11	0.08	0.12	0.02	40.08	4.41	100

期別構成(点数)

	資源別	属性別	瓦	火葬	瓦製品	土器品	かわらけ	金屬製品	鏡	石器品	骨角製品	木製品	自然遺物	合計	
合計			17	341	1	50	3	2	2610	4	1	4	0	5	3052
1期	25	558	0	65	0	1	11269	15	9	15	0	1781	48	13787	
1B期	5	71	0	10	0	2	1480	0	3	1	0	1017	106	2675	
2期	92	711	2	18	1	8	5454	28	17	23	6	12645	1572	20587	
3期	20	221	0	19	0	0	2337	5	6	8	3	3108	273	6000	
4期	4	48	0	0	0	0	122	1	0	1	0	41	30	248	
5期	17	37	3	0	0	0	86	0	0	0	0	83	28	253	
後期	0	8	3	1	0	0	14	0	1	1	0	12	0	40	
合計	180	1994	9	163	4	13	23370	53	37	56	9	18692	2062	46642	

かわらけ構成(点数)

	範囲タイプ			海手丸澤タイプ			ロクロタイプ			手づくねタイプ			コースター	合計
	大	中	小	大	中	小	大	中	小	大	中	小		
合計	485	37	71	421	8	81	1263	3	200	6	1	1	2619	
1期	50	4	18	2629	69	458	6622	30	1368	0	0	1	11269	
1B期	2	4	7	162	-	15	1043	0	195	0	0	0	1460	
2期	0	0	1	487	27	66	3710	25	1145	0	0	3	5464	
3期	0	0	0	187	2	10	1719	5	412	1	0	1	2337	
4期	0	0	0	16	0	1	85	0	19	0	1	0	122	
5期	0	0	0	25	3	0	30	0	17	0	1	0	85	
後期	0	0	0	0	1	0	11	0	2	0	0	0	14	
合計	545	45	97	3637	125	646	14513	63	3278	10	3	6	23370	

かわらけ構成(重量)

	範囲タイプ			海手丸澤タイプ			ロクロタイプ			手づくねタイプ			コースター	合計
	大	中	小	大	中	小	大	中	小	大	中	小		
合計	9077	2380	2055	4905	285	1400	17545	190	3055	0	10	5	40907	
1期	990	175	440	38865	3005	6770	12433	4890	29875	0	0	10	97053	
1B期	95	240	160	3335	735	545	23900	0	4450	0	0	0	33360	
2期	0	0	35	7860	1310	1225	86555	1870	26075	0	0	30	124860	
3期	0	0	0	2245	225	120	30685	235	7345	25	0	15	40575	
4期	0	0	0	145	0	10	1515	0	350	0	30	0	2000	
5期	0	0	0	230	80	0	675	0	370	220	15	0	1980	
後期	0	0	0	0	20	0	210	0	10	0	0	0	240	
合計	10162	2795	2890	57985	5680	10070	173098	6985	71320	245	50	93	340725	(単位 g)

木製品面別構成(点数)

	柄・皿類	食器類	容器	酒呑類	禮物	施設部材	庭園材	職労具	死術・道具	武器	その他	合計
合計	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	5
1期	64	1806	18	1	38	1	0	3	1	0	51	1781
1B期	32	906	7	2	17	1	5	5	0	1	41	1017
2期	240	11912	64	8	318	87	18	22	15	1	340	13845
3期	75	2738	26	1	129	4	3	19	8	0	106	3198
4期	3	25	2	0	4	0	0	2	1	0	4	41
5期	3	66	1	1	8	0	0	1	1	0	2	60
後期	7	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
合計	424	16880	139	14	512	93	26	52	25	2	545	18692

土製品は13点（0.03%）出土しており、内訳は白かわらけ9点、かわらけ質鉢1点、へそ皿1点、花瓶1点、その他1点である。かわらけは便宜上、戦国、薄手丸深、ロクロ、手づくね、コースターの5タイプに分類した註1。総数23370点出土し、そのうち灯明皿が341点、穿孔を有するものが12点、墨書き有するものが4点である。手づくねタイプは13点と非常に少ない。

金属製品は総数53点（0.11%）で、釘30点、掛け金1点、火箸5点、鉄皿1点、刀子14点、紡輪1点、スラグ1点が出土している。37点（0.08%）出土した銭はすべて中国製の銅錢である。

石製品は56点（0.12%）で、砥石30点、硯6点、滑石鍋12点、滑石製温石2点、滑石製スタンプ5点、墓石1点である。砥石は仕上げ砥14点、中砥15点、荒砥1点が出土している。

骨角製品は9点（0.02%）で、駒4点、笄3点、鹿角の未製品1点、その他1点である。

木製品は18692点（40.08%）出土している。ここでは便宜上、椀・皿類、食膳具、容器、飾身具、履物、建築部材、調度材、職労具、呪術・遊具、武具、その他に分類している。椀・皿類では椀155点、皿266点、鉢3点が出土し、木地椀2点以外はすべて漆塗りである。漆塗り椀153点のうち無文が40点（内朱9点）、手描き施文102（内朱14点）、印判施文11点（内朱1点）である。漆塗り皿では無文が64点（内朱24点）、手描き施文185点（内朱12点）、印判施文17点（内朱1点）が出土している。食膳具には箸15826点（完形8288点）、折敷990点、杓文字39点、壺杓子3点、匙1点、盆1点を含めている。容器では曲物4点、柄杓2点、円板107点、蓋5点、把手・摘み17点、箱4点、飾身具では扇骨3点、刀子鞘・柄5点、櫛6点、履物では下駄32点、草履480点が出土している。櫛は全て漆塗りの横櫛、下駄は一本造りである。格子等の建築部材は93点、調度品部材では漆塗り雲形肘木10点、漆塗り膳脚10点、灯明台・燭台6点が出土している。職労具では紡績関係の手押木10点、農具の鐸・鋤3点、工具37点、文房具2点、呪術・遊具では形代14点、墨書き円板2点、遊具9点、武具は2点出土している。形代には人形6点、鳥形4点、陽物形1点、堅杵形1点、砧形1点、刀子形1点がみられた。ヘラ状、棒状、串状等を呈するものを含め、用途不明の製品は545点を数える。

自然遺物は2062点（4.41%）出土し、そのうち1979点が貝類、64点が鳥獸骨、19点が種子である。

本調査では狭い面積にもかかわらず、多くの成果を得ることができた。しかし、3期以下に関しては、部分的な確認にとどまり、今後の周辺における調査に期待したい。

今回の調査が大河内勉氏との最後の仕事となりました。本来ならば氏と共に本報をまとめる予定でしたが、協議する時間も持たぬまま、黄泉の国へと旅立ってしまわれました。目を瞑り、腕を組む姿。どうぞ、安らかにお眠りください。合掌。

【註】

- 1) 本遺跡から出土した各タイプの完形かわらけ1個体の平均重量は戦国大皿157.12g、戦国中皿85.94g、戦国小皿33.70g、薄手丸深大皿170.05g、薄手丸深中皿116.77g、薄手丸深小皿41.69g、ロクロ大皿187.17g、ロクロ中皿138.27g、ロクロ小皿52.74gである。

【参考文献】

- ・大河内勉 2000 『武藏大路周辺遺跡発掘調査報告書・扇ヶ谷二丁目382番1地点』 同発掘調査団
- ・宗基秀明・宗基富貴子 2001 「武藏大路周辺遺跡(No. 194)扇ヶ谷三丁目397番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』 鎌倉市教育委員会

武藏大路周辺遺跡の花粉化石

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

扇ガ谷二丁目298番イ(武藏大路周辺遺跡)において行われた発掘調査で、13世紀中頃～14世紀中頃にかけての遺構面が検出されている。この遺構面を埋積している土壌は比較的有機質であることから良好な状態で花粉化石が保存されていることが期待され、よって花粉分析から遺跡周辺における当時の植生について検討できると考えられた。こうしたことから調査区壁面およびトレンチ壁面より採取した土壌試料について花粉分析を行い、その結果・考察を以下に示す。なお、筆者はこれまでいくつかの市内遺跡において花粉分析を行ってきたが、本遺跡周辺は空白地帯であり、どのような結果が示されるか興味がもたれる。

1. 試料

試料は、調査区西壁断面と南トレンチ西壁断面より採取された8試料である(図1)。以下に各試料について簡単に記すが、各層の詳しい記載については別章を参照されたい。試料1(F層)は黒灰色の粘土質砂レキ～砂質粘土で、土丹や材片が散在している。直上のE層(1面被覆土)は青味を帯びた黒灰色粘土質砂レキで、かわらけ片が点在している。D層はレンズ状に認められる黒灰色粘土、さらに上位のA～C層は黒褐色の土壌層である。試料2(G層：2面被覆土)はやや砂質のやわらかい黒褐色粘土である。2面構成層であるJ層は土丹が大量に混入しており、基質は黒褐色粘土である。試料3は下部に認められたこの黒褐色粘土である。3面構成層であるJ層は青味を帯びた黒灰色粘土混じりの砂レキで、最下部には置石や板材が認められる。試料4(L層：4面被覆土)は黒褐色の砂質粘土で、材片が散在しており、最下部は多量に認められ、漆器も検出されている。N層は粘土質の黒灰色砂レキ、O層も黒灰色の砂レキ層で、非常に硬くしまっており材片も認められる。試料5, 6(P層：5面被覆土)は团粒状を示す黒色の砂質粘土で、かわらけ片が認められる。試料7(Q層)は粘性の高い黒色粘土で、上部ほどやや砂質である。なお本層は地山(R層)を削り込んだ跡を埋積した土壌である。試料8(R層：地山)は土丹の小粒子混じりの黒色粘土である。

これらのうち上記した5つの面の時代については、出土遺物などからおよそ1面が14世紀半ば、2面が14世紀前半、3面が13世紀末、5面が13世紀中葉と考えられており、4面は13世紀中葉から未頃と推察されている。また5面下のQ層(試料7)も5面と同じ、すなわち13世紀中葉と同じような時期と考えられている。

2. 分析方法

上記した8試料について以下の手順にしたがって花粉分析を行った。

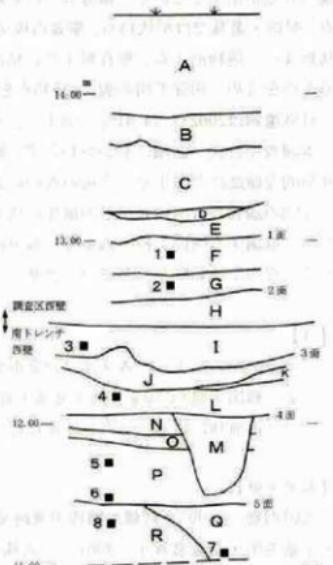


図1 試料採取地点付近の模式土層と断面図と試料採取層準

試料（湿重約3～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、統けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレバラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉32、草本花粉32、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計68である。またこれらに加えて4分類群の寄生虫卵が観察された。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表1に、それらの分布を図2に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してあり、左側の地質柱状図は模式的に示したものである。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検査の結果、樹木花粉の占める割合は上部ほど低く、最上部の試料1、2では10%に達していない。この少ない樹木花粉のなかにおいても傾向が認められる。すなわち下部ではスギとコナラ属アカガシ亞属が目立って検出され、上部に向かい減少している。この上部（試料1～5）においてはさらに検出数が少ないなかマツ属複複管束亞属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）がやや目立って検出されている。

草本類ではイネ科が試料3において出現率が60%を越えるなど最も多く、傾向としては増加・減少を繰り返している。次いでアザ科ヒユ科が多く、試料1では約56%を示している。産出傾向はイネ科と同様に増加・減少を繰り返しているが、イネ科が多い試料では少なく、イネ科が少ない試料で多産するなどイネ科とは正反対の産出傾向を示している。次にヨモギ属が多く、上部に向かい増加する傾向がみられ、試料2では約29%を示すが試料1では急減している。アブラナ科も全試料1%を越え、最上部では約13%とやや多く検出されている。タンボボ科多くの試料で1%を越えており、最下部において約11%とやや高い出現率を示している。その他ではクワ科が上部試料で1%を越え、スペリヒュ属は試料5で、ナデシコ科は最下部で、シソ科は試料4においてそれぞれ1%を越えて得られている。

これら花粉化石に加え寄生虫卵も4分類群が観察され、最も多く検出されているのは鞭虫卵である。その産出傾向としては上部に向かい出現率を上げ、試料3では約14%を示すがその上位ではやや減少している。次に多い回虫卵も上部で多くなる傾向がみられ、その他肝吸虫卵や横川吸虫卵がわずかに観察されている。

4. 遺跡周辺の古植生

上記したように、樹木花粉の産出数が少ないなか試料5を境にスギおよびアカガシ亞属からニヨウマツ類の交代がみられた。この試料5は13世紀中葉と考えられている5面を覆う粘土層である。ここ鎌倉におけるスギ林およびアカガシ亞属を主体とした照葉樹林からニヨウマツ類への交代時期は13世紀中頃と考えられており（鈴木 1999）、今回の分析においてもほぼ同様の結果が示されたと思われる。すなわち武藏大路周辺遺跡においてはそれまでのスギ林・照葉樹林からニヨウマツ類への交代が他遺跡と同様に13世紀中頃からそれを少し過ぎた頃になされたのである。しかしながら樹木花粉の占める割合はかなり低いことから遺跡周辺の樹木類は13世紀中頃からそれよりも少し前の時期にはすでに少ない状況であったことが推測される。同様の傾向は円覚寺旧境内遺跡にもみられ、しっかりとした森林は少なかつ

表1 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
樹木									
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	1	2	2	
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1	1	2	1		
ツガ属	<i>Tsuga</i>	2	1	1	-	1	3	3	
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	1	-	-	-	-	-	
マツ属(日本)	<i>Pinus subgen. Biploxyion</i>	14	15	24	11	21	4	9	-
マツ属(不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	3	4	7	-	7	1	4	2
コウヤマキ属	<i>Sequoia</i>	-	-	-	-	1	2	4	
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	4	1	6	5	19	13	18	28
イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科	<i>T. C.</i>	2	-	-	-	1	3	7	
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	-	-	1	-	1	
タマシデ属アサイダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	1	2	1	2	-	1	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	1	1	1	-	1	1	
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	1	1	1	-	1	1	
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	-	-	-	-	-	
イヌヅナ	<i>Fagus Japonica</i> Maxim.	1	-	-	-	-	-	-	
コナラ属コナラ属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	1	5	1	1	1	3	3	8
コナラ属カガシ属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	1	2	9	28	2	4	11	20
クリ属	<i>Castanea</i>	-	1	-	1	-	-	-	
シイノキ属マテバシイ属	<i>Castanopsis - Passia</i>	1	-	1	-	3	1	1	6
ニレ属ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	2	5	-	1	-	-	1
エノキ属ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	1	-	-	-	-	
サンショウウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	1	-	-	-	-	-	
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	1	-	
アカネガシワ属	<i>Millettia</i>	-	1	2	-	1	-	-	
シキミ属	<i>Myrsinaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	
モチノキ属	<i>Llex</i>	-	-	-	2	-	-	1	
カニデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	1	
ノブドウ属	<i>Angewisia</i>	-	-	-	1	-	-	-	
ジンチョウゲ科	<i>Thymelaeaceae</i>	1	-	-	1	-	-	-	
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	-	2	-	-	1	-	
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	1	-	-	-	-	
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	1	-	1	-	-	-	
草本									
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-	1	-	-	1	
イネ科	<i>Gramineae</i>	83	322	320	235	339	169	240	113
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	3	5	22	23	4	8	15	14
ユウケサ属	<i>Comelinia</i>	-	1	1	-	-	-	-	
ユリ科	<i>Liliaceae</i>	-	-	-	1	-	-	-	
クワ科	<i>Moraceae</i>	10	30	3	-	-	32	32	
ギンギン属	<i>Rumex</i>	1	1	-	-	1	-	-	
サナエタデ属ウナギツカ属	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	14	31	4	1	1	-	-	4
イタドリ属	<i>Polygonum sect. Reynoutria</i>	-	-	1	-	-	1	-	
ソバ属	<i>Equisetum</i>	-	-	1	-	1	-	-	
アカザ科ヒニ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	352	205	34	15	84	207	55	62
スペリヒコ属	<i>Portulaca</i>	-	-	-	9	-	1	-	
ナシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	4	4	1	3	3	4	2	5
カラマツ属	<i>Thalictrum</i>	-	1	-	-	-	2	1	1
ビャクシンボウガ科	<i>other Rosaceae</i>	2	3	1	-	-	-	-	
タケニグサ属	<i>Macrorhynchium</i>	-	-	1	-	-	-	-	
アラチナ科	<i>Crotonaceae</i>	84	14	29	4	25	12	11	17
ユキノシタ科近似種	<i>et. Saxifragaceae</i>	-	1	2	-	-	-	-	
他のバラ科	<i>Sansevieria</i>	-	1	3	2	-	-	-	
ノアズキ属	<i>Dubaria</i>	-	-	1	-	-	-	-	
他のアズキ科	<i>other Rosaceae</i>	-	-	1	-	-	-	-	
フタロソウ属	<i>Geranium</i>	-	-	-	22	-	-	-	
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	3	22	1	3	30	-	
シソ科	<i>Labiatae</i>	-	1	-	4	1	-	-	
ナス属	<i>Solanaceae</i>	-	9	1	-	-	-	-	
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	1	-	1	-	-	
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	1	-	-	2	1	-	-	1
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	-	1	-	-	-	-	
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	19	388	53	73	47	31	18	25
他のキク亜科	<i>other Tubiflorae</i>	2	62	1	4	1	3	-	2
タンボク亜科	<i>Liguliflorae</i>	12	2	2	9	6	10	8	46
シダ植物									
ヒカゲノマクラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	1	3	6	1	8	
ミズワラビ属	<i>Ceratopteris</i>	-	-	-	-	-	1	-	
单孔型孢子	<i>Monolete spores</i>	4	6	4	5	17	9	13	28
三尖型孢子	<i>Trilete spores</i>	2	1	1	4	2	1	1	8
固虫	<i>Anomia</i>	8	0	19	5	1	1	2	
壁虫	<i>Trichuris</i>	47	49	76	39	33	20	12	1
肝吸虫	<i>Clonorchis</i>	1	3	5	-	-	-	-	
椎吸虫	<i>Metagonimus</i>	-	*	1	-	-	-	-	
樹木花粉	<i>ArboREAL pollen</i>	33	38	62	27	60	42	65	82
草木花粉	<i>NonarboREAL pollen</i>	591	1028	476	360	452	459	352	303
シダ植物孢子	<i>Spores</i>	6	7	5	10	22	16	16	44
花粉、孢子總数	Total Pollen & Spores	630	1073	543	397	514	517	433	429
不明花粉	Unknown pollen	8	16	8	7	9	11	7	31

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

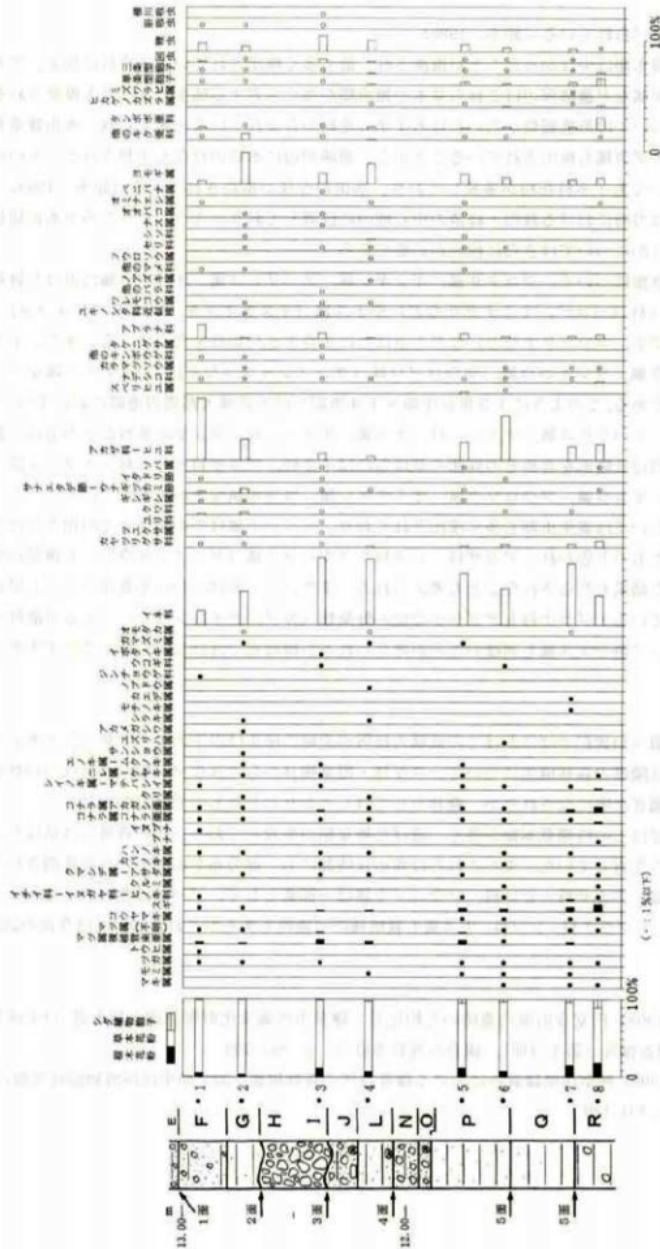


図2 武藏大路周辺過疎群の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・孢子总数を基数として百分率で算出した)

た可能性が述べられている（鈴木 1998）。

このように樹木類は少なかったことが推測され、最も多く検出されているイネ科に加え、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属など遺跡周辺はこれら草本の雑草類が多く生育する植生であったと推察される。そのうちイネ科については形態観察からいわゆるイネの花粉が含まれていると考えられ、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属も検出されていることから、遺跡周辺に水田の存在も予想される。先の円覚寺旧境内遺跡においてもイネ科花粉が多産しており、水田の存在が推測されている（鈴木 1998）。しかしながら本遺跡は当時における政治・経済の中心地内に位置しており、こうしたところで水田稲作が営まれていたかどうかについてはさらに検討が必要であろう。

その他の雑草類について、ツユクサ属、ギシギシ属、スペリヒュ属、オオバコ属は道ばた雑草と考えられ、ナデシコ科（ハコベ、ミミナグサなど）やナス属（イヌホオズキ、ヒヨドリジョウゴ）、タンポポ亜科（タンポポ、コウゾリナなど）なども道ばたに生育する分類群を含んでいる。また、イタドリ節、カラマツソウ属、ワレモコウ属、フウロソウ属（ゲンノショウコなど）、オミナエシ属などは原野に普通な分類群である。このように13世紀中頃～14世紀半ばの武藏大路周辺遺跡においてはツユクサ属、ギシギシ属、スペリヒュ属、ナデシコ科、ナス属、オオバコ属、タンポポ亜科などの道ばた雑草類がみられ、一部周辺丘陵部を含めその周囲の草はらにはイネ科、アカザ科—ヒユ科、イタドリ節、カラマツソウ属、ワレモコウ属、フウロソウ属、オミナエシ属、ヨモギ属などが生育していた。

本試料においては寄生虫卵も多く検出されており、ベニバナ属はその薬として利用されたものが土壤内に混入したものと思われ、アカザ科—ヒュ科やフウロソウ属（ゲンノショウコ）も雑草以外に薬として用いられた結果もたらされたことも考えられる。また、ゾバ属はいわゆる食用のゾバと思われ、最上部で多産しているアブラナ科もアブラナや他の野菜類（カブ、ダイコンなど）である可能性が考えられる。その他シソ科やナス属も同様のことが考えられるが現時点では詳しい分類ができず不明である。

5.まとめ

13世紀中頃～14世紀半ばにかけての武藏大路周辺遺跡の植生は以下のようであったと考えられる。

遺跡周辺丘陵部の森林植生について、スギ林・照葉樹林からニヨウマツ類への交代が13世紀中頃からそれを少し過ぎた頃になされたが、森林としてはしっかりとしたものではなかった。

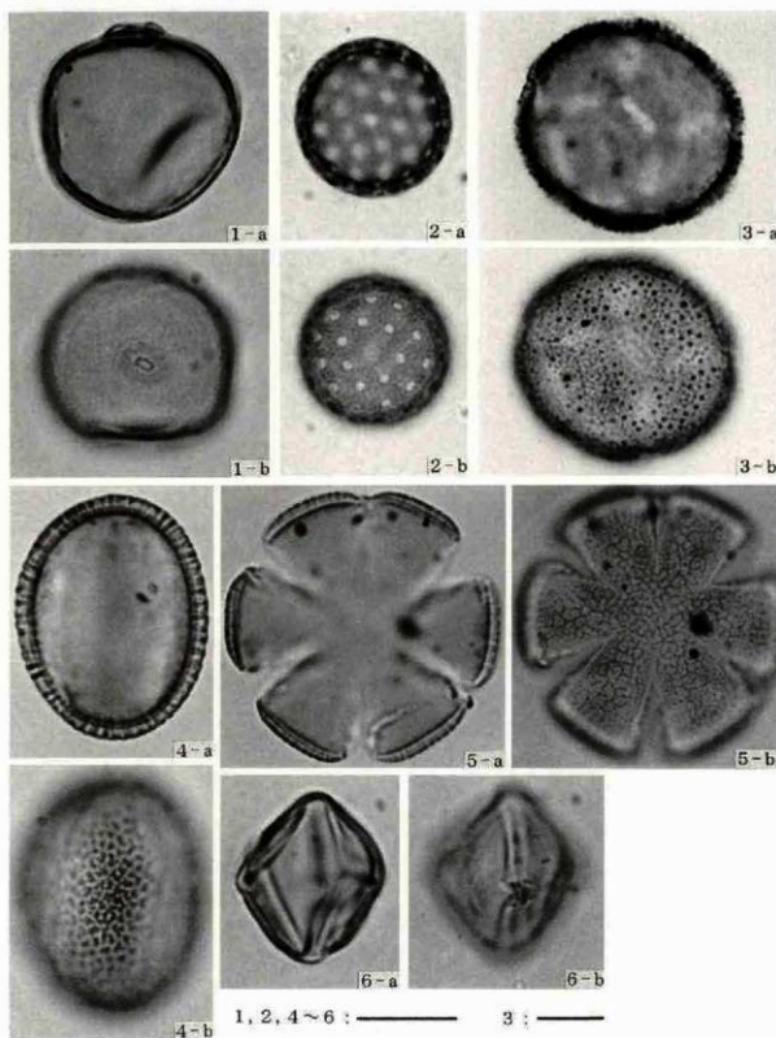
遺跡周辺ではこの時期草本類が多く、道ばた雑草類が生育しており、その背後には草はらにみられる分類群が多く生育していた。またこれらは周辺丘陵部にも一部分布を広げていたと推測される。

ベニバナ属、アカザ科—ヒュ科、フウロソウ属は一部薬として、ゾバ属は食料として利用されたことが考えられ、アブラナ科、シソ科、ナス属も栽培種の可能性もあるがこれについては今後の課題である。

引用文献

- 鈴木 茂（1998）円覚寺旧境内遺跡の花粉化石、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14平成9年度発掘調査報告（第1分冊）、鎌倉市教育委員会、p.399-409。
鈴木 茂（1999）神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊、国立歴史民俗博物館研究報告 第81集、p.131-139。

図版 武藏大路周辺遺跡の花粉化石



図版 武藏大路周辺遺跡の花粉化石 (scale bar : 20 μ m)

- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1 : イネ科 PLC.SS 3091 試料 2 | 4 : アブラナ科 PLC.SS 3087 試料 1 |
| 2 : アカザ科型 PLC.SS 3089 試料 2 | 5 : シソ科 PLC.SS 3092 試料 3 |
| 3 : スベリヒニ属 PLC.SS 3094 試料 5 | 6 : ナス属 PLC.SS 3090 試料 2 |

▲ 1. 調査前（南から） [調査地] 面 150m² 1.5m

▲ 5. 東区 1面基壇 1（北西から）

▲ 2. 東区 1面（南から） [調査地] 面 150m² 1.5m

▲ 6. 東区 1面基壇 1地領（西から）



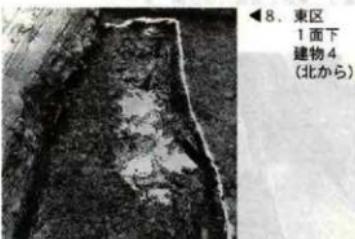
▲ 3. 東区 1面建物 2（北から）



▲ 7. 東区 1面下建物 3（西から）



▲ 4. 東区 1面切石列 1、2（東から）

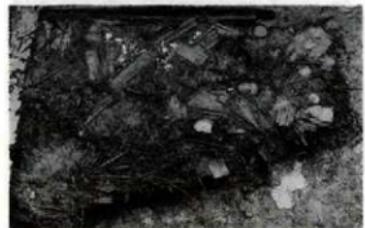
◀ 8. 東区
1面下
建物 4
(北から)



◀1. 東区
1面下
建物 5
(南から)



▲4. 東区 2面 建物 6 (西から)



▲5. 東区 2面 穴状遺構 (東から)



▲6. 東区 トレンチ (北から)



▲2. 東区 2面 (北から) (古河市) (高麗町) (高麗町)



▲3. 東区 2面 木組み遺構、溝 3 (南から)



◀7. 東区
トレンチ
(南から)



▲8. 東区 3面 (北西から)



▲1. 西区1b面 (南から) 〔要観察面〕 〔基盤〕 〔基盤〕



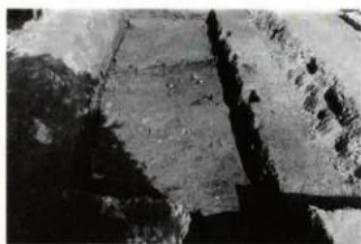
▲2. 西区1b面塙1 (北から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



▲3. 西区1b面塙1 (南から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



▲4. 西区1b面塙1 (南から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



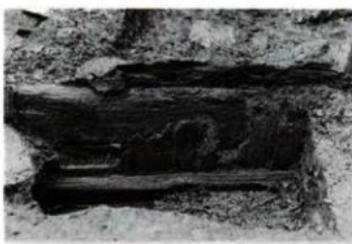
▲5. 西区1b面 (南から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



▲6. 西区1b面塙1 (南から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



▲7. 西区1b面塙1 (北から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



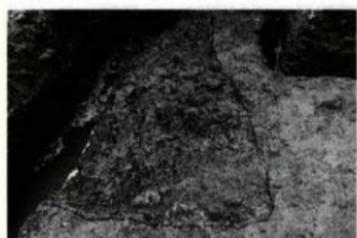
▲8. 西区1b面塙1 (北から) 〔要観察面〕 〔可視〕 〔基盤〕



▲1. 西区1面基槽2（北から）



▲2. 西区南壁基槽2セクション（北から）



▲3. 西区1b面建物8（北から）



▲4. 西区1b面建物7（南から）



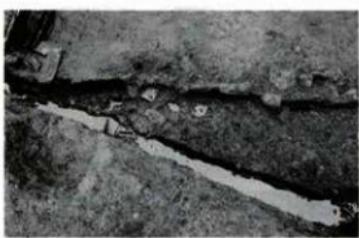
▲5. 西区1c面（北から）



▲6. 西区1c面（南から）



▲7. 西区1c面石圓い造構1（東から）



▲8. 西区1c面建物10（東から）



▲1. 西区1d面（南から）



▲2. 西区1d面（北から）



▲3. 西区1d面壙2（西から）



▲4. 西区1d面壙2（南から）



▲5. 西区1d面壙2（北から）



▲6. 西区1d面石囲い遺構2（西から）



▲7. 西区1d面建物11内（北から）



▲8. 西区1d面建物11（西から）



▲1. 西区 1 d面建物13 (東から)



▲2. 西区 1 d面建物13北部 (東から)



▲3. 西区 1 d面建物13出土 (南東から)



▲4. 西区 2面建物13下出土 (西から)



▲5. 西区 2面建物14 (東から)



▲6. 西区 2面建物14出土 (南から)



▲7. 西区 2面 (南から)



▲8. 西区 2面 (北から)



▲1. 西区2面建物15（北から）



▲2. 西区2面建物15（東から）



▲3. 西区2面堀3、4（北東から）



▲4. 西区2面堀3、4（北から）



▲5. 西区終了状況（南から）



▲6. 西区南トレンチ及び西壁（東から）

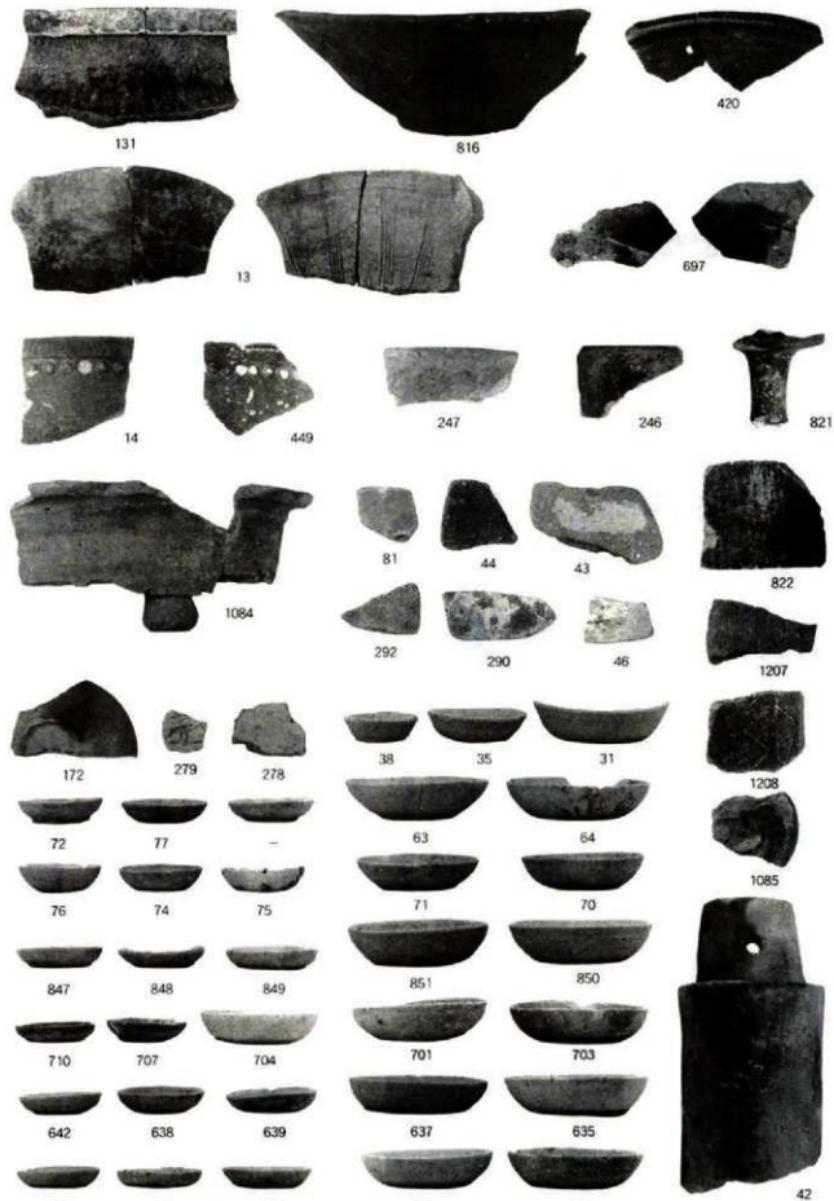


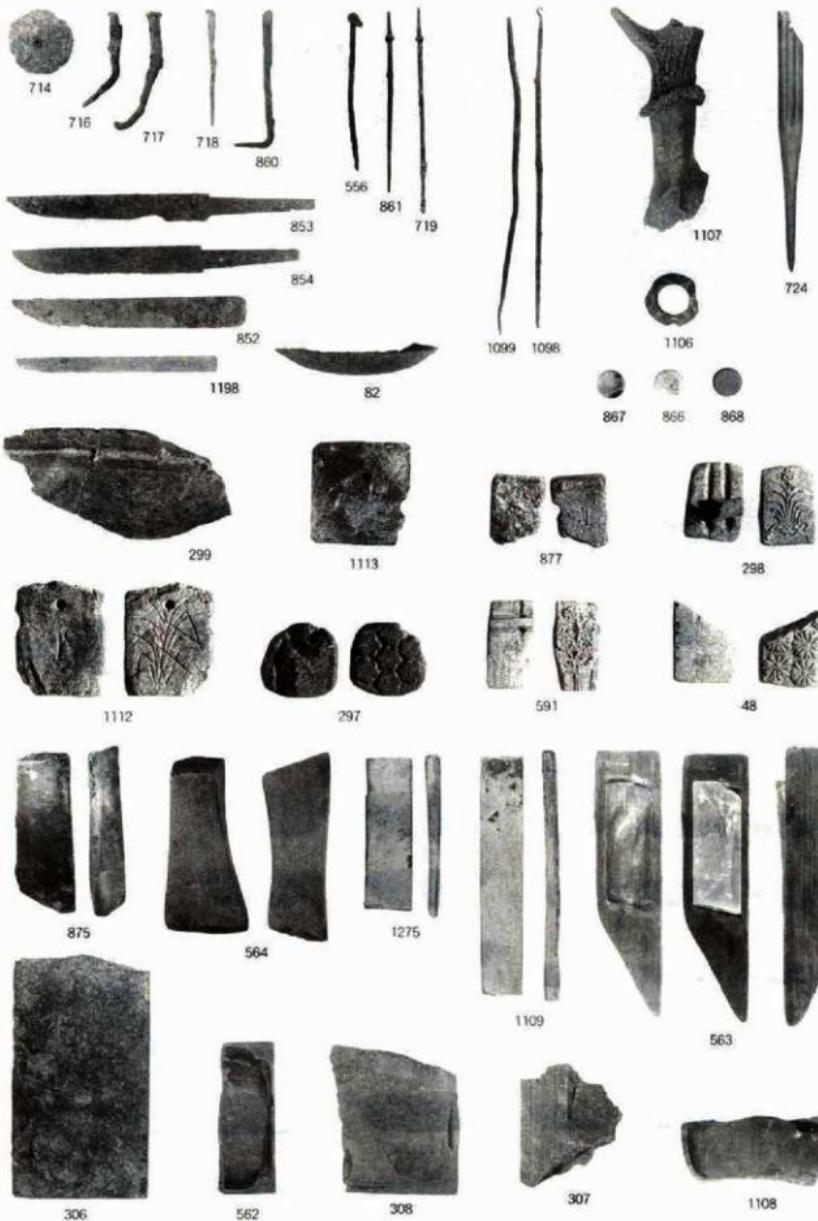
▲7. 西区北トレンチ（東から）

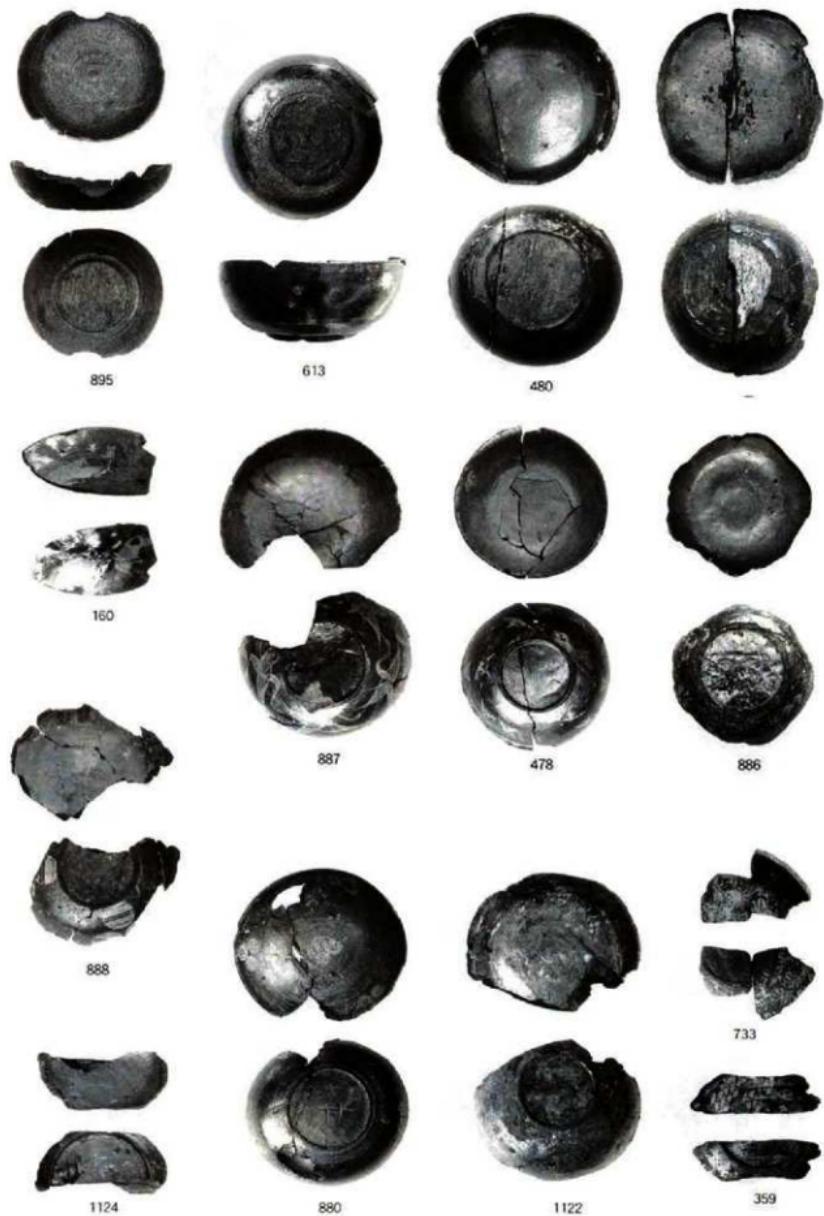


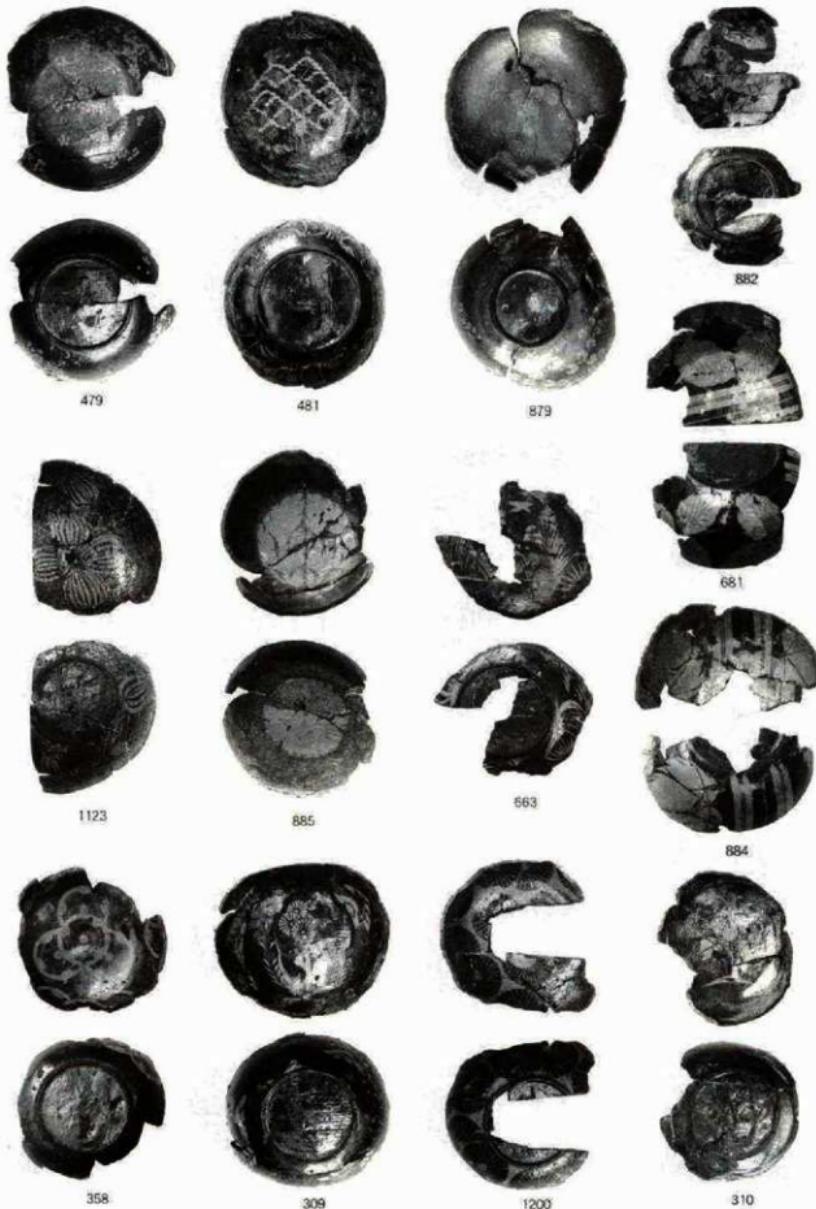
▲8. 西区南トレンチ（東から）







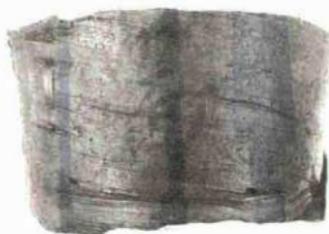












962

964

961

572

573

508

959

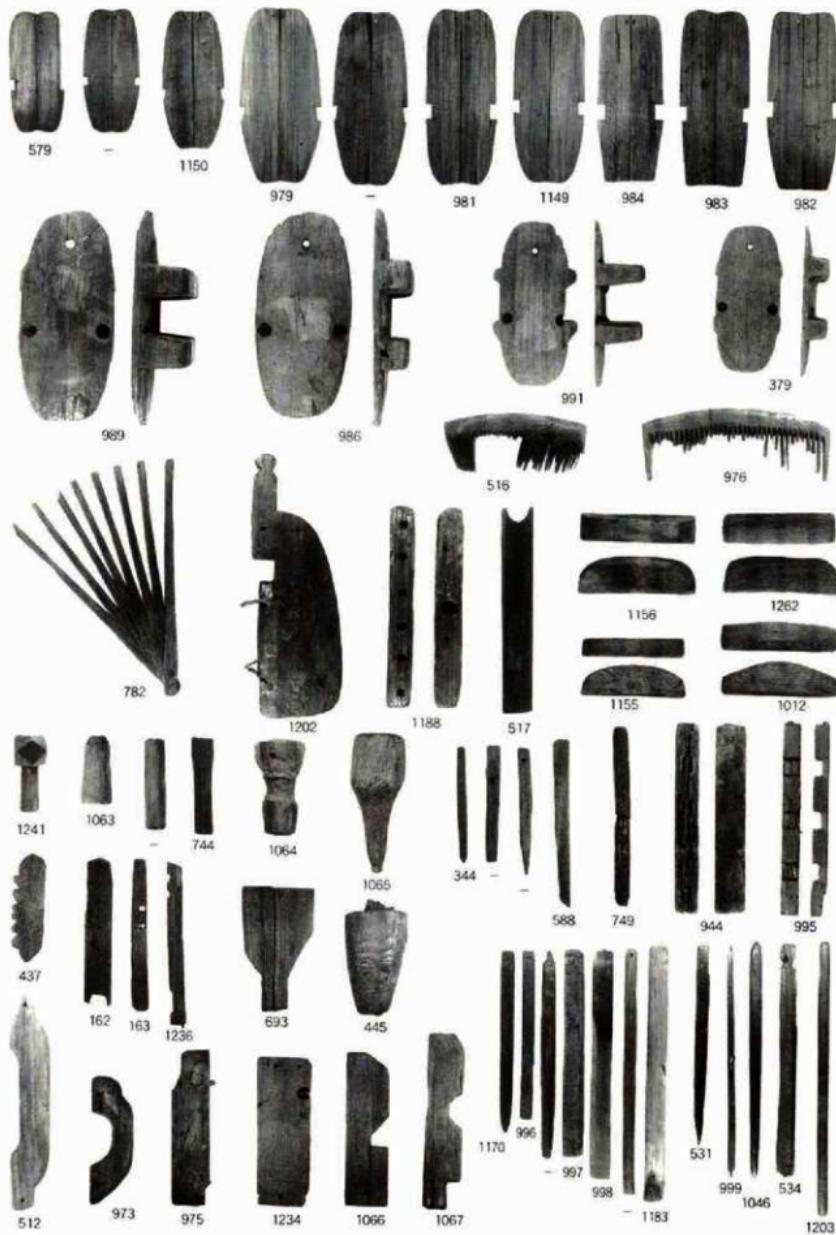
1126

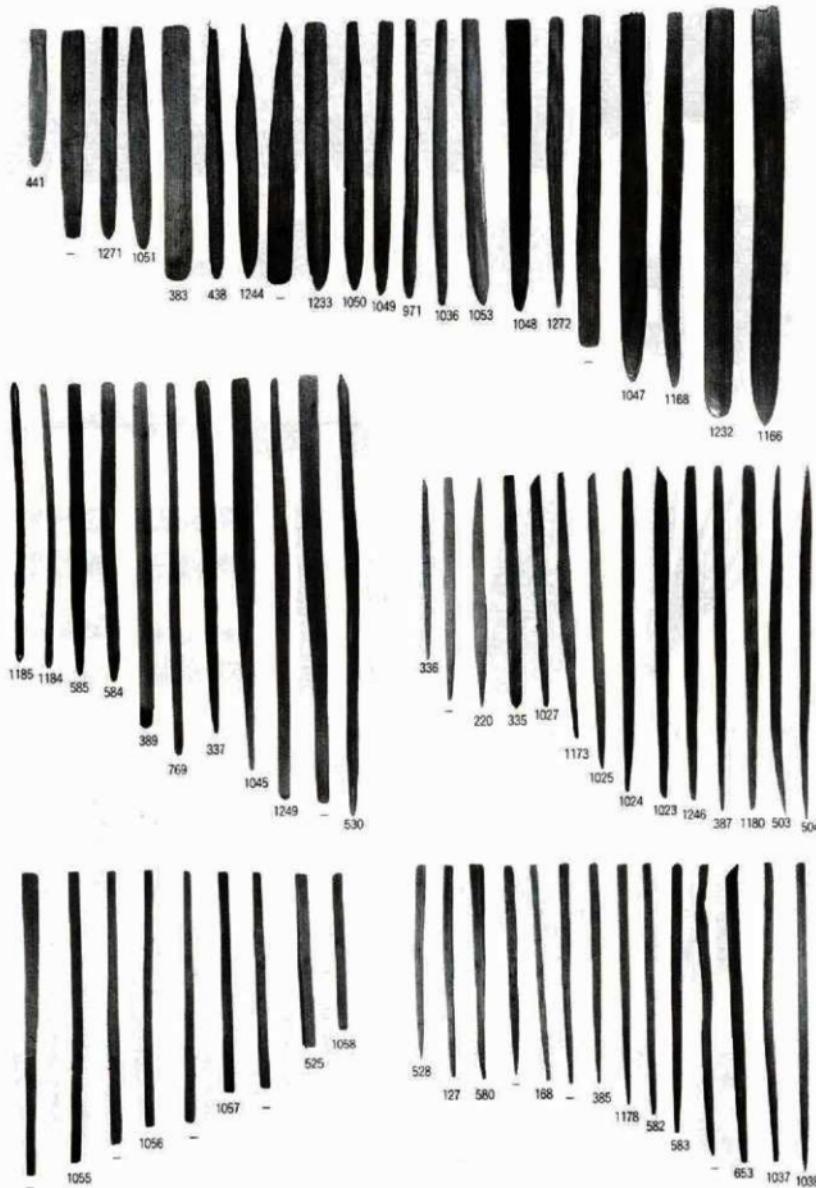
651

960

957

958





報告書抄録

ふりがな 書名	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成13年度発掘調査報告							
卷次	18							
シリーズ名	第1分冊							
シリーズ番号								
編集者名	原廣志・須佐直子／汐見一夫・山上玉恵／野本賢二／汐見一夫・田畠衣理・渡辺美佐子／野本賢二／齊木秀雄・降矢順子／宮田眞／瀬田哲夫							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
おおくらばくふ しゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 二階堂字住柄 58番4外	14204	49	35° 21' 19"	139° 33' 59"	20010401 ~ 20010902	281.13	個人専用 住宅
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 618番4	14204	253	35° 19' 13"	139° 33' 46"	20010419 ~ 20010523	24.00	自己用 店舗併用 住宅
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 106番6外	14204	200	35° 18' 42"	139° 32' 58"	20010614 ~ 20010817	58.75	個人専用 住宅
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 148番1	14204	201			20010627 ~ 20010727	51.16	個人専用 住宅
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 476番1	14204	245			20010719 ~ 20010731	26.00	個人専用 住宅
とうしょうじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 468番10	14204	246			20010727 ~ 20010819	27.00	個人専用 住宅
むさしおおじ しゅうへんいせき 武藏大路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 298番イ	14204	194			20010803 ~ 20011130	122.20	個人専用 住宅

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅううちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成13年度発掘調査報告							
巻次	18							
シリーズ名	第1分冊							
シリーズ番号								
編集者名	原廣志・須佐直子／沙見一夫・山上玉恵／野本賀二／沙見一夫・田畠衣理・渡辺美佐子／野本賀二／青木秀雄・降矢順子／宮田真・瀬田哲夫							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
おおくらばくふ しゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 58番4外	14204	49	35° 21' 19"	139° 33' 59"	20010401 ? 20010902	281.13	個人専用 住宅
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 618番4	14204	253	35° 19' 13"	139° 33' 46"	20010420 20010419 * ? 20010523 20010519	* * 24.00- 30.00	自己用 店舗併用 住宅
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 * 106番6外 106番6・7	14204	200	35° 18' 42"	139° 32' 58"	20010612 20010614 * ? 20010817 20010815	58.75	個人専用 住宅
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 148番1	14204	201		*	20010703 20010627 ? 20010727	51.16	個人専用 住宅
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 476番1	14204	245			20010719 ? 20010731	* -26.00- 40.00	個人専用 住宅
とうしょうじあと 東勝寺跡	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 468番10	14204	246			20010727 ? 20010819	27.00	個人専用 住宅
むさしおおじ しゅうへんいせき 武藏大路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷二丁目 298番イ	14204	194			20010803 ? 20011130	122.20	個人専用 住宅

*令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府周辺遺跡群	都市	鎌倉室町	礎石建物、掘立柱建物跡、土壙、井戸、溝、閉炉裏、かわらけ溜り	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品、動物骨等	I～III期遺構群（第3～6面）は武家屋敷跡、IV期遺構群（第1～2面）は寺院跡の一画にあたると考えられる。
大倉幕府跡	官衙	中世	道路状遺構、柱穴、溝	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、弥生土器（甕）	
下馬周辺遺跡	都市	中世	建物跡、土壙、溝	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、貝等	
今小路西遺跡	都市	鎌倉平安	掘立柱建物、柱穴、土壙	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、瓦、須恵器、土師器等	
佐助ヶ谷遺跡	都市	鎌倉室町	埋甕遺構	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器等	
東勝寺跡	社寺	鎌倉室町	礎石建物、石列、土壙	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品等	
武藏大路周辺遺跡	都市	鎌倉室町	板壁建物、石張り遺構、基壇	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18

平成13年度発掘調査報告（第1分冊）

発行日 平成14年3月

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印 刷 (有)湘南グッド